
魔法少女リリカルなのは 蒼焰の結ぶ絆

BALDR SKY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 蒼焔の結ぶ絆

【Nコード】

N1246P

【作者名】

BALDR SKY

【あらすじ】

一人の魔導師が誕生した。

その魔導師は、守ること絶対とした。喻え己が身を犠牲にしても。

魔法少女リリカルなのはの二次小説です。

原作をアレンジして違うのが書ければいいかなと思っています。

1/8無印完結しました。

4/23A's編完結しました。

9 / 15 タイトル変更しました。
5 / 1 新章突入！！

prologue (前書き)

処女作です

長い目で見ていただければ嬉しいです・・・

prologue

?side

第97管理外世界地球 海鳴市藤見町

ここは海鳴市藤見町。
森林に囲まれた町だが中心部は都心ほどに賑わいビルが多く立ち並んでいる。
私立聖祥大学付属小学校から海鳴大学病院、市民プールまでそろっている過ごしやすい町だ。

4

海鳴臨海公園――

季節は春。コートを羽織る人は減少してポカポカ陽気に見舞われる季節。

だが油断していると風邪をひいてしまつくらいの寒さがまだ残っていた。

海からの独特のにおいのある潮風がここ臨海公園を過ぎていく。周りはほんのり紅く母親が夕食をせつせと作り始めるこの時間。

俺、黒堂燈夜はその日母さんからの頼まれごとで一人近くのスーパーへ買い物をしていた。

妹がついて来たが、たが一昨日まで風邪をひき、今日やっと体調がよくなった人を誰がこさせる事ができようか。

その事を言ったら我が妹は、拗ねてしまつて部屋に閉じこもつてしまった。

その事に頭を抱えたがとりあえずは買い物を先にしようとして一人出てきたのだ。

燈「はぁ・・・舞の奴・・・あまり拗ねてなきやいいけど・・・。」

溜息をつきながら公園を突っ切る。ここを通るとすぐに家だ。

燈「は～～～寒いっ！早く帰ないと凍えるぞ・・・ん？」

手を白い息で少し温めながら走ろうとしたがそれが視線を向けた先を注目して足が止まる。

一人女の子が俯きながらブランコに座っていた・・・。周りには誰もいなく、一人のようだ。

しかしこんなくそ寒い時間に何してんだ？

気になって少しずつ近づいていく。そいつは下を向いて俺が近づいていることに気づいていないようだ。
更に近づくと……
すると声が聞こえてくる。小さく……声を殺して……

？「ひっぐ……」

うわぁ……泣いてるし。どうしよ……「いつゆつ時どいつすればいいか俺わかんねー。しかも
相手女の子……。
茶髪のツインテール。

燈「おい……どうしたんだ……？」

とりあえず聞く。
女の子は顔を上げ、初めて俺と視線を交わした。かわいい子だった。目がくりくりしてて。
いわゆる美少女にカテゴリされる逸材だろう。

？「ふえ？……君は？」

ウサギみたいに紅い目をしながら聞いてくる女の子。

燈「俺か？俺は黒堂燈夜。お前は？」

？「わ、私はなのはなの……」

燈「なのはか・・・なんでお前は泣いてるんだ？こんな寒い中・・・風邪ひいちまうぞ？」

なるべく優しく言っただけなのだがなのは少し怯えながら答えた。

な「えっと・・・なのはのお父さんがけがして病院なの。おかあさんとお姉ちゃんはお店が忙しいの。お兄ちゃんは怖い顔してるの。だからさびしいの」

・・・訳わかんねえ・・・誰か通訳してくれ・・・厄介な事に関わつちまった。

はあ・・・えっと〜。

燈「とりあえず寂しかったってことか？だったら俺と遊ぶか？」

な「いいの？」

燈「ああ、いつまでもこんなところで泣いていたって風邪ひくだけだ。少しは体動かした方があったまるからな」

な「ありがとうなの。燈夜君」

それから俺となのはは完全に日が暮れるまで公園で遊び続けた。

〈燈夜side end〉

〈なのはside〉

今日いいことがあったの。とてもきれいな黒い長い髪もって、やさしそうな黒い眼をした男の子、燈夜君とおともだちになったの。今は遊び終わって、帰っているとこるなの。

な「ねえ、燈夜君」

燈「んっ？なんだ？」

な「どうしてなのはとあそんでくれたの？」

燈「ん〜。なのはが泣いていたしな。泣いてる奴はほっとけないんだ・・・」

な「そうなんだ。ありがとう燈夜君・・・」

燈「ふんっ。まあ俺が声をかけたんだしな・・・」

な「ありがとう・・・燈夜君・・・」

また遊べるかな？」

燈「ああ。なのはと俺はもう友達だ。だからいつでも遊べるぞ」

な「うん！」

こうしてわたしは燈夜君という男の子とともにだちになりました。

〜なのはside end〜

N
e
x
t

t
o

T
A
L
E
2
!
!
!
!
!

prologue (後書き)

早く更新していきます

T A L E 2 現在との決別（前書き）

一話目です。

とらひらひらひらひら

T A L E 2 現在との決別

燈夜 s i d e

寒空の下出会ったあとなのはとはよく遊ぶようになった。俺がなのはと遊んでいて分かった事・・・、

それはなのはが俺の妹と性格が似ているんだ。

ポケポケなところとか。妙に懐いてくるところとか。全く・・・妹が二人できたみたいだった。

まあ楽しかったから良しとする。

そして今・・・俺、なのはは確かめたい事があったから港にある倉庫に二人で遊びに行こうとはなしになった。

この倉庫には出るらしい。幽霊が・・・。

とりあえず生きてるうちに一回は拜んどころつと思っただから来てやった。

燈「うわあ〜暗いな」

な「ちよつとまつてよ〜。燈夜君」

中は少々薄暗く、視界が悪かった。こつゆつところなら出てもおかしくはないな。

なのはが俺の腕に抱きついている。

視界が悪いのが祟りなのはが転んで

木材を支えていた支柱をたおしてしまった。相変わらずのドジッ子

だ……。俺は呆れながら

見ていた。だがそれがいけなかった。

なのは頭上に降りかかる木材それに気づくのが遅れた。

俺はとっさになのはだけは助けようとして力いっばいなのはを押しだした。

ガツシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン

大きな音がして目を瞑った。体が動かない……。何か大きな重いも

のが

俺の足のうえにあるらしい。

目を思いっきり瞑っていたなのはが目を開け、心配してかけよってくる。

なの「燈夜君！」

燈「なのは……大丈夫……か……？」

なの「うん……大丈夫。燈夜……君……?!？」

そこでなのはは見てしまった。俺の状態を。なのはをかばったまでは良かったんだが上手く

自分が避ける事が出来なかったからこの有様。

俺は木材の下敷きになり足がめっちゃくちゃ痛い。

感覚は……ないな……。やばいな……。冷静に考えてはいるがこの状態はまずいな。

力を入れるがうまく木材を動かせず、足は全く動かせなかった。どうやら折れてもいるらしいな。

なの「燈夜君！・・・燈夜君！」

慌てたなのはが俺を呼んでいる。なのはに俺は言った。

燈「なの・・・は・・・大人を・・・呼んで・・・こい」

これが一番最善の手。

なの「なんで！」

燈「おまえ・・・じゃこれを・・・うごかせない・・・からだ」

なの「でもそれじゃ燈夜君が！」

燈「いいから！はや・・・くっ」

なの「分かったの。すぐに呼んでくる！」

それにな・・おそらく今の衝撃で倉庫自体不安定になった。
危険だな。だからなのはがここを出て大人を呼んでくるのが一番い
い。
さてなのはが大人を呼んでくるのが早いか・・倉庫がつぶれて俺が
ぺちゃんこになるか
どっちかな？

俺は不適にそう思いながらなのはが走っていくのをみて意識を失っ
た。

〈燈夜 side end〉

〈なのは side〉

燈夜君がたいへんなの・・いっぱい血が出たの。早く大人の
人に言わないと！そのときちょうどお兄ちゃんがいたの。

な「お兄ちゃん！」

恭「なのは？どうしたんだ？」

な「燈夜君がたいへんなの！」

恭「なんだって!？」

なの「とにかく来て！」

わたしはお兄ちゃんの手を引っ張り倉庫に連れて行く。
だが木材の下敷きになっていた燈夜君の姿はなく、木材だけが散乱していた。

なの「燈夜・・君？」

それからわたしは燈夜君を探したが燈夜君はどこにもいなかった。

くなのはside endく

く燈夜sideく

燈「(ここ・・・どこ・・・だ)」

俺は液体ポッドのようなものだった。体はケーブルののようなものがつながれていた。薄れ行く意識の中でポッドの外にいる一組の男女をみて俺はまた意識を失った。

く燈夜side endく

Next to TALE3!!!

T A L E 2 現在との決別（後書き）

どうでしたか。見返すと穴だらけ。文才ほしいなあ

T A L E 3 出 会 い (前 書 き)

再び投稿です。なんとか話をまとめようとかんばっています。
今回は少々、短めかも。
あと意見、感想もよろ。
それでは本文どうぞ

TALE 3 出会い

（燈夜 side）

燈「うつ・・・」

電気の明かりが目には焼きつき目を覚める。自分の状況を確認。
どうやらベットに寝かされている俺。

燈「ここは？」

首を左右に動かしてみた。
部屋には何もなかった。あるのは自分の下にあるベットとソファのみ
上体を起こし部屋の中を観察していると、正面にあるドアが
開く。

？「あっ！気がついたのね」

入ってきたのは女性だった。俺は警戒しながら女性を見た。

身長は低く160cmくらいだろうか。痩せ型で綺麗というよりか
わい

いといったほうがしっくりくる女性だった。

燈「あなたは？」

？「わたしは白銀美緒。デバイスマスターよ」

燈「デバイスマスター？」

聞きなれないというより全く意味が理解できない単語が言われて思わず

頭を抱える。

美「ええ。デバイスマスターっていうのは、まあ簡単に言っちゃえばデバイスを作る人のことよ」

また単語が……。デ……。デバ……。キス？

燈「デバキスっていうのは？」

美「デバイスね。デバキスって何よ？……。デバイスとは魔導士が魔法を使う際の杖のようなものよ」

杖。ね……。それより今の言葉の中にまだ理解する事ができる言葉があった。

燈「…………もう一回今の言ってくれませんか？」

美「デバイスが……（その後……）杖……（もう少し前……）魔法……」

俺は頭を打つたらしい。それも強く。そうじゃなければ大の大人が魔法なんてメルヘンなものを口にするはずが無い！

奇異の目で見ていると美緒さんはちょっと怒ったように言ってくる。

美「君信じてないでしょ。魔法はあるんだよ」

燈「またまた魔法なんてものがあるわけ無いじゃないですか」

美「あるんだよ本当に。杖も然り……」

燈「杖・・・。（ちなみにきみはもう持っているよ）えっ!？」

美「手を見てみて」

そこで俺は手を見た。手の甲には、右手には赤い宝石のよう
なものが。左手には青い宝石のようなものがそれぞれ甲のぶ
ぶんにあった。ていつかあるっつーよりめり込んでんだけど！

? 「おはようございます。マイマスター」

? 「おはようなのじゃ我が主」

燈「あっおはよう……………」

……………つてえええええ

ええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええ

え!？」

なんでっ?なんで俺の手に宝石が埋め込んであんの?あとな
んで宝石からこえがするの?

俺が啞然して美緒さんを見ると美緒さんはお腹をかかえてわらっている。

美「あゝははははは」

そんなに笑わなくても・・・こっちは真剣に驚いてたのに・・・俺が拗ねていると美緒さんが話しかけてきた。

美「あゝごめんごめん。君の驚き方があまりにもおもしろすぎて笑いすぎちゃった・・・ぶっあははははははははは」

燈「・・・・・・・・」

俺が拗ねて美緒さんがいる方向とは違うところを見ているとまたはなしかけてきた。

美「え〜と。その子たちは君のデバイスよ」

燈「どうゆうことでしょうか？」

少々拗ねて言う。

美「うゝん。君意識失う前のことおぼえてる？」

燈「えっと。工場にいて、なのはをかばって、木材の下敷きになって・・・ってなんで生きてんの俺？」

美「その子たちのおかげよ。その子たちがあなたに魔力を送ったからよ。結構危なかったんだよ！」

燈「じゃこいつらは俺の命の恩人というわけか（マスター！）

（主）んっ？

？「名前をつけてください」

？「名をつけてくれ」

燈「なんで？」

美「その子たちのマスターはもう君なんだよ。初期のデバイスには名前がないの。だから名前をつけてあげて」

燈「わかった。うゝん・・・赤いほうが焰美^{えみ}で青いほうが
静^{しずか}だ。どう？」

名前をつけるセンスが無いからな、俺は。だが必死に考えた。

焰「焰美か……。よい気に入った。ありがとうございます」

澪「澪ですか。ありがとうございます。気に入りました」

気に入られたようだ。

燈「そうか。よかった、あっ、あと助けてくれてありがとうな！」

焰「いいのじゃ。主のためだからのう」

澪「いいえ。マスターのためですから」

燈「ところでここは結局どこなんだ？」

焰「ここは白銀夫妻の研究所じゃ」

澪「ええ。怪我を負っていたマスターを美緒さんがここへ運び

込んで、わたしたちが治療したというわけです」

燈「そうだったんだ。美緒さん助けてくださいってありがとうございます
いました」

美「君が血を流して倒れていたから助けただけ」

燈「それでもありがとうございます」

美「いいのよ／＼・・ところで名前を聞いてもいいかしら？」

燈「はい。僕は黒堂燈夜つていいいます」

美「燈夜君か。いい名前ね」

燈「ありがとうございます」

その時男の人部屋に入ってきた。

？「おっ！気がついたな」

燈「あなたは？」

？「俺は白銀京二きんぎょうじ。美緒の夫で同じくデバイスマイス

ターだ」

燈「そうですか。助けありがとうございます」

京「いいってことよ。一ヶ月もねむったままだったんだぜ」

燈「一ヶ月っ!？」

それを聞いた俺はベッドから降りようとしたがあまりの足の痛

みで動くことができなかった。

京「無理するな。見た目は治っているがリハビリが必要だ」

俺はベッドに寝直された。

京「とりあえず足が治るまでここにいろ。」

燈「いいんですか？迷惑では？」

京「いいんだよ。いいよな、美緒？」

美「ええ」

燈「ありがとうございます」

美「あともう少し寝ていたほうがいいわよ。焰美と瀨の治療が早くなるから。帰りたいでしょう？」

燈「はい。分かりました」

そして俺はまた眠りについた。

焰「おやすみのう主」

瀨「おやすみなさいマスター」

）燈夜side end）

T A L E 4 に 続 く ・ ・ ・

TABLE 3 出会い（後書き）

どうでしたか。

この調子で行きたいです。

意見、感想まっています。

T A L E 4 動き出す時間(とき) (前書き)

四話目です。

今お気に入りの歌は、BALDR SKY DIVE2の
jihadです。

何度聞いても神曲ですね。

歌詞がいいよ。

では本文にいつてみよ＝＝

T A L E 4 動き出す時間(とき)

〈燈夜side〉

俺がここ白銀夫妻の研究所で世話になってから二ヶ月が経過

する。今では足も大分よくなりかけていて、歩い

ても問題なかった。

京二さん、美緒さんはどちらとも俺を一生懸命看病してくれてとても優し

かった。だがどうしても気になることがあった。

それは家族のことだ。

俺の家は両親と俺、妹という家族構成で両親はどちらとも働い

ていてそうすると自然に、妹の世話は俺がみることになった。

そのせいなのか妹の舞は「おにいちゃん」といって、俺の後ろをついてまわるようになっていく。ちなみに舞は実の妹ではない。

俺の母の姉の子供であり、どうして俺の家にいるのかというと舞の両親が交通事故で亡くなったためだ。舞は少々どころではないほどのおっちょこちょいで俺がいないと危なっかしくて仕方がない。

俺がはらはらと心配している様子は美緒さんから声をかけられる十分な理由だった。

美「どうしたの？燈夜君」

燈「あつ・・・いつ・・・いえ。なんでもないです」

美「そんな顔してなんでもないことはないでしょう。何か心配事？」

これだ。美緒さんはとても鋭くて俺の考えていることがすぐに分かっってしまう。全然そんな様子は無いのだがこの時人って見かけによらないよなとほんとに思った。

俺は観念して美緒さんに舞のこと言った。

美「そう・・・妹さんが・・・名前はなんていうの？」

燈「舞です。舞踊っていう字の」

美「そう・・・それにしても燈夜君が舞ちゃんをそれほど心配してるなんて」

燈「いえ。ただ危なっかしいんですよ。俺の後ろをついて回ってぶりかえってみると転んでいるようなやつなんで」

美「それはたしかに危なっかしいわね・・・そこで燈夜君にビツクニユース！」

美緒さんはいきなりテンションをあげて話し始めた

燈「・・・？なんですか？」

美「なんとやつと燈夜君に帰宅の許しが京二からでした！」

燈「っ！本当ですか!？」

京「ああ。もうそろそろ足のほうも大丈夫だろ。まっ一時はつづれかけたがな。まあ治ったというわけではないから検査にきてもらうがな」

京二さんが部屋に入ってきて言った。

燈「わかりました。ありがとうございました」

美「よかったわね、燈夜君」

そして俺は鳴海市に戻ってきた。

このあと俺にとって最も悲しいことが起こるとはつゆにもおもわずに・・・

俺は自分の家まで歩いていくこととした。

焰「（ここが主の育った町かのう）」

瀨「（きれいで美しいところですね）」

焰「(うむ。空気が澄んでいて龍穴のとおりもいいのう)」

二人とは念話で話している。念話とは、口を通して話すのではなく、頭のなかで相手と会話するものだ。そのため他人に話を聞かれることなく、会話できるんだ。便利だよな。最初念話で頭の中で焰や漣の声を聞いたときは仰天したものだ。

燈「(んっ？龍穴？龍穴ってなに？)」

焰「(うむ。龍穴というのはのう。簡単にいうと魔力や気力が集束するところのことだ。生物には必ず魔力と気力というものがあってのう、主に生物・ここでは植物などかのう。これが死に堪えるとき大気中に魔力や気力が放出されるのじゃ)」

漣「(その魔力や気力が集束して地殻へいき再び新しい植物に取り込まれるというわけです)」

燈「(へ〜)。なるほど。おっとそうしているうちに家に到着つと」

漣「(ここがマスターの家ですか)」

燈「(ああ。とりあえず念話切るぞ)」

焰・漣「(うむ。)(はい。)」

俺は銀色のグローブの下の二機にいった。グローブしている理由は人目を避けるためだ。両の手に宝石が埋め込まれているのを見られると騒ぎになりかねないからな。さてと俺は久しぶりの我が家の敷居

をまたごうとしたら玄関の扉が開いた。

舞「お母さ〜ん。わたし公園に行ってくるね〜。」

そして舞は玄関の前に立つ俺に気がついた。

舞「燈・・夜・・お兄・・ちゃ・・ん・・？」

燈「久しぶり舞。」

俺は笑顔で舞に言った。そこで舞は泣きながら俺に飛び込んできた。

舞「おにいちゃん。お兄ちゃんっ！お兄ちゃんっ！お兄ちゃんっ
！」

燈「ただいま舞」

舞「おかえりお兄ちゃん！それよりお母さんとお父さんにも言わな
きゃ！お父さーん、お母さーん！」

燈夜の母「なによ舞そんな大きな声・・・を出し・・・て・・・燈・
・・夜？」

燈夜の父「どうしたんだ舞・・・燈・・・夜か？」

燈「そうだよ。父さん、母さん」

父・母「「燈夜っ！」」

こうして俺は約三ヶ月ぶりに自分の家に帰ってきたのだった。

T A L E 5 に 続 く

TABLE 4 動き出す時間(とき) (後書き)

短い……。

前書きのお気に入りの歌紹介はちよくちよくしてきます。

次回は燈夜に何かが起こる!?

T A L E 5 終わり(はじまり) (前書き)

連日投稿だ。

感そ〜くだサーイ……

失礼……取り乱しました……

本文どうぞ……

結「元気出して！」

B A L「うん。がんばる……」

TALES 終わり(はじまり)

〈燈夜side〉

家に到着してから両親と妹の舞といままでの経緯やどうしていたのかなどを話した。

京二さんと美緒さんのことはいつていない。ただ親切な人にたすけてもらって手厚く看病してもらっただけいつておいた。両親は感謝しに行きたいといっていたが俺が言っておくということであるくおさまった。

俺がなぜこのようなことをしたのかというと・・・白銀夫妻に自分たちのことは話さないでほしいと頼まれたからだ。理由を聞く

京「魔導師に怪我を治してもらったといっても信じないだろうし、燈夜がおかしくなったと思われかねないからな」

とのことだった。
それから自分の家に帰った来てから一週間が経過した。

〈燈夜 side end〉

〈舞 side〉

今日は休日。燈夜お兄ちゃんが帰ってきてから一週間が経過した。
あの日お兄ちゃんが帰ってきた日わたしはうれしくてずっと泣いていた。

行方不明だったお兄ちゃんが三ヶ月ぶりに帰ってきたんだよ。
わたしはおにいちゃんが大好きだった。いつもわたしのそばにいてくれて、心配してくれて、助けてくれるおにいちゃんが。
今の両親つまりお兄ちゃんのお父さんとお母さんでお兄ちゃんとはどちらが好きときかれたら、「お兄ちゃん」と答えてしまうくらいだ。

別に両親が嫌いというわけではない。ただわたしの本当の両親が死んでから一番心が温かくなる場所、落ち着く場所というのはお兄ちゃんのそばだったただけだ。だからこそお兄ちゃんがかえってきてうれしすぎて泣いてしまったのだ。

今日は家族全員でおでかけすることになりました。わたしはずっとお兄ちゃんの隣にいて帰り道お兄ちゃんとお話をしていました。

舞「お兄ちゃん」

燈「何だ？舞」

舞「お兄ちゃんを看病した人ってどんな人なの？」

お兄ちゃんは少し考えると「優しい人たちだったよ」とわたしの好きな笑顔でいいました。そしてわたしは「ふうくん」といいながら青となつた横断歩道を渡りました。

）舞side end）

）燈夜side）

俺は舞と話しをしていた。京二さんと美緒さんのことだ。両親には

話さなかったが舞ならと思ひ、「優しい人たちだ」というと舞は納得したよつで「ふう〜ん」とだけいつていた。

その最中こちらに向かつてくる一台のトラックがあつた。運転は不安定でスピードは速い。しかしそのことにきづかないのか舞横断歩道を渡つていて俺は「舞っ！」といいながら自分の足にあらん限りの力を使って舞のところへ走つた。

その瞬間時間が止まつた……

俺は舞を抱きかかえながら反対の歩道へと転びながら辿り着いた。
そして舞が一秒前にいた場所をトラックが通過していった。

舞「お兄ちゃん・・・ありがとう」

舞が俺の腕の中で礼を言っていた。

燈「ああ（どうして俺は舞を助けられたんだ？）（主！）（マスター！）（んっ？）」

澁「（マスター！今魔力を使いましたよ）」

燈「（あっ！もしかして魔力を使ったから舞を助けられたのか？）」

焰「（うむ。）」

そして両親から驚愕の音が聞こえる。

父「燈夜どうしておまえがそこにいる？いままで俺たちのとなりにいたのに。それにおまえその手……」

燈「えっ？」

両親の視線の先には銀色のグローブが破れ、むき出しとなった瀧や焰があつた。

舞をかばったときに破れてしまったらしい父や母が俺を化け物を見るような目でみてる。

燈「あの父さん、母さんその「近寄らないで！」「近寄るな！」えっ？」

父「この化け物め！」

母「舞にさわらないで……」

両親の目が先ほど優しくかった目から一変して恐怖、忌避する目と変わる。
俺はその場にいることが堪えられず、なにより両親から完全な拒絶をされて悲しかった……

〈燈夜 side end〉

〈舞 side〉

父「この化け物め！」

お父さんの言葉に呆然とした。なんで？お兄ちゃんはわたしをたすけてくれたんだよ。なんでそんなことというのお父さん・・・

母「舞にさわらないで！」

お母さんはそういいながらわたしをお兄ちゃんから奪い取るようにした。

お母さんもどうしてお兄ちゃんにそんなこというの？お兄ちゃんを見てみると、今にも泣きそうで今まで見たこともないような苦痛の表情をしていた・・・

お兄ちゃんはそのから逃げるように走って行ってしまった。わたしは追いかけてよとす。しかしお母さんに腕をつかまれた。

母「舞っ！」

わたしは力づくで母の手から離れた。

もういちど母が「舞っ！」と呼んでいたためふりかえり両親に「人でなし！・・・」と行ってわたしはお兄ちゃんを追いかけた・・・

お兄ちゃんは鳴海公園にいた・・・

舞「お兄ちゃん」

燈「ま・・・い・・・？」

お兄ちゃんは泣いていた。わたしを守ってくれた背中がびくびくと震えていて目は黒い眼が赤い眼になるほどなっていた。

わたしはお兄ちゃんが泣き止むまでずっとそばにいた。そしてお兄ちゃんから聞いた。命が危険だったこと。両手にある二つの宝石のこと。お兄ちゃんを助けてくれた白銀夫妻のこと……そしてお兄ちゃんは言った。

燈「俺……京二さんと美緒さんのところに行くよ」

舞「そう。」

当然だと思った。お兄ちゃんを化け物扱いをして……いままでのお兄ちゃんが変わるわけでもないのに……

燈「俺がこのまま戻れば父さん、母さんいやあの人たちを恐怖させるだけだ。だけどお前は違うだろ舞……だから戻れ舞」

舞「いやだっ！」

燈「舞……」

舞「わたしお兄ちゃんといっしょがいい。離れ離れはいやっ！それにお兄ちゃんのことを嫌ったお父さんたちは嫌いっ！」

燈「舞……分かった……行こう」

わたしは絶対ついていくことにしていた。だってそれほどお兄ちゃんが好きだったから……

）舞side end）

）燈夜side）

俺と舞は焰美の転送で白銀夫妻の研究所に行った。待っていると美緒さんが歩いてきた。

美「燈夜君どうしたの？あらそのこは・・・」

燈「はい舞です。ほら舞挨拶！」

舞「はじめ・・・まして・・・舞・・・です」

舞は俺の背中に隠れて服を掴みながら言った。

美「こちらこそはじめまして。白銀美緒よろしくね！それで燈夜君どうしたの？目が真っ赤だけど・・・」

燈「それはちょっと・・・・・・お願いがあるんです」

美「ん？お願い？」

燈「はい。僕たちをここに住まわせてくれませんか？お願いします！」

美「わけありのようだね。どうかしたの？話してみて」

それから俺は両親たちのことをいった・・・

美「なるほど。だから目が赤かったのね。でも条件があるよ」

燈「条件？」

美「うん。それはあなたたちがわたしたちの子供になるつまり家族になるということよ」

燈「えっ？いいんですか？」

美「もちろん。あなたたちにはまだ大人が必要よ。いいでしょ、京二」

そこで部屋に入ってきた京二さんに美緒さんが聞いた。

京「ああ。逆に家族が増えてうれしくらいだぜ」

燈・舞「ありがとうございます」

美「というわけでわたしたちは燈夜君と舞ちゃんのお母さんとお父さんになるわけだよね」

京「そうだな」

美「ということとわたしと京二のこと、お母さん、お父さんって呼

美「かわいいよ。かわいいよ。おっ持ち帰り～～～～！」

俺たちは美緒さんに抱きつかれながらお願いをした。

燈「新しい名前をつけて父さん、母さん」

京「いいのか・・・」

燈・舞「うんっ!!」「」

京「そうか・・・んじゃあ美緒！」

美「ええ！考えるわ！愛する愛息子と愛娘のために」

数十分後・・・

京・美「考えたぞ！」「考えたわ！」

京「燈夜が”結斗”」

美「舞が”麗華”」

燈・舞「結斗・・・」「麗華・・・」

美「どう？気に入った？」

結・麗「うん！」

美「そう。よかったわ。これからよろしくね結斗、麗華」

それから部屋に入った。麗華とは違う部屋だぞ。さすがに同い年の子と一緒に部屋では寝られない。

俺はまた前の両親のことを考えていた。すると消した思いがまたよみがえってきた。でもぼくは泣かないようにするんだ。麗華のためにも。自分のためにも。

焰・澪「主……」「マスター……」

焰「悲しくないのかう。親に自分の存在をすべて否定されたのじゃぞ」

澪「悲しいに決まっています。マスターは一人で考えこんでしまう人なんです」

？「（そうね。溜め込みすぎはよくないわね）」

美緒さんが部屋に入ってきた

美「それじゃ結斗が参っちゃうよ」

結「母さん……でもっ!……それでもっ……!?!?」

すると母さんは俺を抱きしめた

美「いいのよ。あなたとわたしはもう家族なんだから」

結「っ……あり……がとっ……うわあああああああああ
あああああああああああああああん」

そしておれは母さんの胸に中で泣き続けた。今までの自分を払拭するかのよう……

）結斗side end）

T A L E 5 , 5 ^ 続 く . . .

T A L E 5 終わり(はじまり) (後書き)

BAL「後書き！っというわけできました。後書き！ゲストで白銀結斗君に来てもらいました！」

結「みんなこんにちわ。結斗です」

BAL「どうだった今回？結構シリアスに書いたんだけど」

結「うん。ネーミングがね・・・」

BAL「それは言わないで！自分でも分かってるから・・・」

結「そ、そう。ごめんね。」

BAL「いいんだ。自分の文才が無いのが悪いんだから・・・」

結「(いじけモードに・・・)はい、というわけで今回はこのままで！次回は麗が来るよ」

BAL「どうせ僕なんて・・・」

結「あはは・・・」

TALE 5・5 紹介（前書き）

BAL「今回は結斗や麗華の紹介です」

BAL「後ろにちょっと話もついてるからそのまま次話に行かないでね」

BAL「それではどげんぞー！」

T A L E 5 ・ 5 紹介

登場人物紹介

白銀 結斗（黒堂 燈夜）
6 歳

魔導師ランク：A Aランク

魔導ランク：魔力保有量A A A、攻撃系統A A +、防御系統A A、
補助系統A -

焰、瀨の魔力供給時魔力保有量S S S？

身体的特徴

髪：腰まである長い漆黒

瞳：漆黒

体形：痩せ型・・・髪を伸ばしているため女の子と間違えられる

性格

困っている人はほうって置けない優しい性格。また自分にとって大切なものは自分が犠牲になっても守ろうとする。例・・・麗華を守ること

顔は小さく、女の子といってもいいくらいのきれいな顔立ちをした少年・・・本人は気づいてないが彼が笑うと見とれてしまうほどである。そのため麗華や美緒にはいつも抱きつかれている状態だ。なのはが会った燈夜の時よりも口調やらが優しくなっている。理由は前の親のせい。

好きなもの

家族、剣術

嫌いなもの

裏切る人、口ばかりの人

デバイス

焰美：インテリジェントデバイス 性別女

白銀夫妻作の高性能なデバイス・・・マスターに一時的に魔力を供給できる。

セットアップ時は、紅蓮色の剣（焰龍）となる（刀や銃にもなれる）
紅蓮色の炎をだすことが出来、結斗のことを絶対的に信じてよく
く瀨と結斗めぐって言い争う・・・

容姿・fortissimo/exa Akkord:Bsus
vierの里村紅葉

瀨：インテリジェントデバイス 性別女

焰美と同様白銀夫妻作の高性能なデバイス・・・機能は焰美とほとんど同じ。しかし一対のものなので片方がないと機能不全に陥る。セトアップ時は蒼色の剣（蒼龍、銃）となる。強力な水系統の技を出すことが出来る。結斗のいうことには必ず従う。いつも結斗の身を心配している・・・

容姿・fortissimo/exa Akkord:Bsus
vierの黒羽紗雪

白銀麗華（黒堂 舞）

6歳

結斗の従妹にあたる女の子。従兄である結斗が大好きでいつもそばにいる・・・

容姿は結斗には劣るが顔立ちは整っていて、小柄で背が低くいつてみれば美少女である。

ちなみに髪は黒髪の腰までのロング。伸ばしている理由は結斗の長い黒髪に憧れたから。結斗を否定したり嫌う人は大嫌い・・・結斗

の元の両親を恨んですらいる・・・しかし結斗にやさしい人にはやさしくなる。現在将来の夢は結斗と結婚することらしい・・・。

好きなもの

ゆう（ものじゃない・・・）

ゆうの作った料理

嫌いなもの

ゆうを嫌う人

鏡月：後の麗華のインテリジェントデバイス

焰美、瀨同様の白銀夫妻作のデバイス。普段は白いネックレス状態でセトアップ時は銃となる。剣や刀にもなれる。

外伝・・・5・5話

結「魔法を勉強したい！」

僕は父さんと母さんに言った

結「父さん母さんになにか恩返ししたいんだ。だから「いいよ！」
へっ?」

美「だからといって言ったのよ結斗が自分で決めたことならわたし
たちは反対しないし、むしろ結斗が自分から魔法を勉強したいとい
つてくれてうれしいわ」

麗「じゃあわたしも勉強する。お兄ちゃんと。」

京「いいぜ。だがなんでだ？」

麗「お兄ちゃんを助けたいから〜〜〜！」

京「……はっはっは〜〜〜。ならいいか。よかつたな結斗」

結「いいの？麗華？」

麗「うん！だつてお兄ちゃんいつも助けてくれたもん今度はわたしが助ける番だよ」

結「ありがとう。それとお兄ちゃんって呼ぶな……」

麗「なんで？」

結「……ごめん思い出すんだよ。あの人たちの目を……」

麗「分かった……じゃあ結^{ゆづ}って呼ぶよその方が親しい感じがするし」

結「んじやあ俺は麗華のことを麗れいって呼ぶよ」

微笑みながらいう

麗「……／＼」

美「ゆうとれいかわいいよ〜」

母さんがそういいながら俺と麗華を抱きしめる。ちよっ!?!?くるしい母さんくるしい……

麗「……／＼」

麗はまだ顔赤くしてうつむいているし、風邪かな？

京「やれやれ……」

父さんがあきたようにみていた……

TALE 6に続く……

TALE 5・5 紹介（後書き）

麗「短いね・・・」

BAL「うん。とりあえず一番最初の紹介だからさ、こうなるわけですよ」

麗「ふう〜ん。」

BAL「反応うすいっすね。麗華さん・・・」

麗「そう?」

BAL「っといっわけで今回のゲストさんは白銀麗華さんです!」

麗「よろしくね。」

BAL「ではとりあえず質問を、麗華さんにとって結斗君とは?」

麗「大好きな人 未来の旦那様」

BAL「・・・甘いですね。一応なのはたちもヒロインに入ってますがどんな心境で?」

麗「叩き潰します」

BAL「潰さんとしてください!ヒロインですから!そんなことばかりいってると結斗君に言いつけますよ」

麗「それだけは！やめて！あつでもお兄ちゃんに怒られるの……
いいかも」

BAL「……麗華さんがトリップしてしまったので今回は……ま
で……」

ちなみなら〜」

麗「あ、お兄ちゃんそこは……でもお兄ちゃんがどうしてもって
言うなら……つぶつぶ……」

BAL「……ちなみに次回は焰美さんです……」

T A L E 6 再会（ふたたび）（前書き）

はい。連続です！がんばりました。

もうそろそろ無印突入かな？

では本文です・・・どうぞ。

TABLE 6 再会（ふたたび）

結斗と麗華が家族になって一年が経過した。その間二人は目覚ましい成長を遂げた。

魔法の一から勉強をして、あらゆる戦い方、戦法も覚えた。

今彼らは、実践をしていた。焰美や瀨、鏡月らを刀や銃へとセットアップし、剣術や銃の撃ち方などを勉強、体に操作を慣れさせる。やはり二人もまだ子供。勉強よりは実践のほうが捗っているのが分かる。……

練習のかいあってか、結斗は近接、クロスレンジの攻撃が得意に。

麗華は、後方ワイドレンジから攻撃が主体となってきた。

麗「ゆうほんと上手だよね・・・ほとんどの武器が使えるし・・・」

結「ん？なんかいった？」

麗「べつに〜・・・」

麗華の独り言がちらりと結斗の耳に入ったがちゃんとは聞いていなかったように尋ねた。しかし

麗華はちよつとだけ面白くなさそうに答えただけだった。

その理由は、結斗の強さが根底にあった。

結斗は、先の記述の通りクロスレンジを主体に戦いを仕掛け、即効で相手を倒す戦法を取っているがそれだけというわけではないのだ。

実は結斗は、銃の腕前も中々である、つまり全ての距離が対応可能なのだ。それが麗華は気に入らない。自分はワイドからの攻撃のみなわけだ。だから麗華は少しだけ結斗にコンプレックスを感じていたりする。

麗「はあ・・・普通七歳で河を両断する？・・・ねえ焰美？瀨？」

焰・瀨「うむ・・・はい・・・」

呆れるしかない麗華が今度は、パートナー二人へと標準を合わせた。

結「そうはいつでも僕よりレベルの上の人がいるよ。それにあれは焰美と瀨のお陰だしね。しかも河なんてだれでも両断できるよ」

麗・焰・澗「いや、できないって!」はあ〜」

結「えっなんでみんなため息?」

焰「ゆうはもうちっと自分に自信をもったほうがいいぞ。いくらなんでも謙虚すぎる」

澗「ええ。ゆう様は自分の評価が過小評価過ぎます・・・」

麗「そつだよ・・・」

結「そつかなあ〜?」

またも呆れる麗華たちに首を傾げる結斗だった。
彼には、自分を分析する能力と自己陶醉が少し欠如しているようだ。

麗「にしてもよかったよね！」

結「なにが？」

麗華がはしゃぐ。一瞬の変わりように驚いた結斗だがそれは顔には
出さないようにした。

兄ではなくなつたとはいえ、未だに兄気分は抜けきつてない様子。

麗「技・術・書！あれがうちにあつたからこそ、わたしたち剣術や
気術ら、銃の扱い方が分かつたんだから」

結「まあね。あっ！もうこんな時間！さっさと家に帰ろう母さんが
寂しがってる……」

麗「そっだね・・・」

・ 結斗と麗華は急ぎで修行から帰り練習場へ背を向けたのであった・・・

白銀邸玄関・・・

結・麗「ただいま」

美「おかえり〜！」

僕と麗華が家に入ると母さんが途端に僕たちに抱きついてきた。途

端に僕たちでモフモフし始める。

美「会いたかったよ〜ゆ〜！れい〜！」

結「苦しいよ母さん・・・」

麗「お母さん・・・」

母さんは僕らがここ最近一層過度に甘えてくる。その理由は、京二さんが亡くなったからだと思う。実験中の事故だった。

僕らは泣いた・・・あれほどやさしいひとがどうして死ななければならぬのかと何度も何度もいった。事故からすぐに病院に搬送され、僕らも病院にいった。

一ヶ月前――

医「最後の別れをしてあげてください」

そんな父さんが？どうして？あんなに優しい人が・・・
僕は目の前が真っ暗になった。僕はおぼつかない足で父さん横に立
った。すると病院のベッドの上の父さんが弱弱しくも必死に伝えよ
うとしていた。

僕は父さんの隣に立って・・・呼びかける。

結「父さん・・・」

京「結斗か・・・俺の願い聞いてくれるか？」

結「う・・・ぐず。うん・・・何？父さん？」

僕は必死に泣くのを堪えながら父さんの言葉に耳を傾ける

京「守つて・・・あげて・・・くれないか?・・・美緒・・・も麗華も・・・俺・・・はもう・・・だめっ・・・ばいからな・・・」

結「そんな父さんっ!」

言つて欲しくなかつた。生きて欲しかつた。まだ僕は何も返せていないから。愛情や家族の温かさを。

結「そんなこといわないですよ。まだ聞きたいこととかたくさんあるんだ。」

京「ありがとうな・・・そう呼んでくれて・・・結斗や・・・麗華を家族になれてうれ・・・しかつたぜ・・・だから最後にお前に言つて欲しいんだ美緒や麗華をこれから守り続けるって・・・大切なやつを守り続けるってな・・・」

結「わかつた・・・でも生きてよ父さん」

京「悪いな・・・いつまでも見守っているから・・・勘弁してくれ・・・
・・・じゃあ・・・な」

結「父さん？父・・・さん？そんな！嫌だよ・・・父さん・・・うわああああああああああん」

そして父さんは息をひきとった。僕は泣き続けた・・・そしてあの時父さんと約束したことを絶対守り続けるために強くなることを決心した・・・

回想終了・・・

美「ん？どつしたのゆづ？」

母さんが聞いてくる。いけない・・・いけない、ぼっとしてたよ。僕

だけじゃないんだ。母さんも麗だって悲しいんだ。でもちゃんと前に向かおうとしてるだから僕がいじけてるわけには行かないんだ！

結「なんでもないよ。母さん。さあ夕食つくっちゃお」

美・麗「はい！」

その日の夜……

それは夕飯を食べている時のこと

美「引越すわよ！」

いきなり母さんが言い出した。今度はなんだろう？

麗「どうしたの？母さん。いきなりそんなことって？」

麗がいぶかしんで母さんに聞く。

美「いきなりじゃないわ。既にゆうとれいは小学生でしょ！」

結「そうだね。でもそれが引越すと何の関係が？」

美「あなたたちは元々地球人でしょ。なら生まれたところで学校に
いかなきゃ！それに・・・わたしデバイスマイスターをやめるから
よ」

急に周りがシンとなる。

麗「どづじつて？」

麗が沈黙を破つてきく。

美「……わたしは京二と一緒にだったからデバイスをつくるのがたのしかったからよ……あっ！でも焰美や澁、鏡月の検査や拡張はわたしがやるわ。焰美たちはわたしたちオリジナルのデバイスだし誰か知らない人に触られるのもいやだしね」

結「母さん……分かった……いいよね麗」

麗「うん。お母さんが決めたんだったら」

美「でもそれだけじゃないのよ！」

母さんがイスから立ち上がり、興奮気味に言った。

結・麗「「えっ？」」

僕らは呆気にとられる。

美「地球の服がかわいいのよ〜！ゆづと麗が学校の制服とかを着るのが見たいからよ」

結・麗「はあ〜」

・ 僕たちはそれが本命じゃないのか？と思わずにはいらなかった・

（鳴海市）

今僕たちは鳴海市に帰ってきて、引越しの真っ最中。

ちなみに豪邸だ。部屋が余るほどの。なんでも母さんたちの別荘らしい。ここなら設備もあるから焰美達の調節もできるってさ。

結「久しぶりに帰ってきたな・・・」

麗「ゆう・・・」

結「心配しないで。もう吹っ切れたよ」

そう言っつて僕は麗の頭を撫でた。

麗「うん・・・でもつらいときはわたしに言っつてね」

結「ありがとね。麗華」

麗「・・・／＼（ずるいよゆう！いきなり名前よんで！普段がれい

って呼んでるのに。でもうれしいな麗華っていわれると・・・」

美「ゆう〜！れい〜！荷物運び込むの手伝ってよ〜。」

結「分かったよ。母さん」

麗「・・・／＼うん。お母さん」

麗華顔を真っ赤にして新しい我が家に入っていった。どうしたんだろ？まだ春先だから寒いのかな？

焰・漣「（結斗のせいじゃろつて）（結斗様のせいですよ）」

ん〜？焰美と漣がなんかいつてるみたいだけどいいや。
こうして僕ら白銀家は鳴海市に帰ってきた・・・

その日の夜リビングにて

美「ゆうに麗？」

結・麗「なに？」

美「勉強はどう？私立聖祥大附属小学校って編入試験があったんでしょ？」

結「思っていたより難しくなかったよ。なあ麗？」

麗「うん。私立聖祥大附属小学校の編入試験って難しい聞いてたけどそんなことなくて拍子抜けてかんじだよ」

ふたりは気づいていません。六歳で京二と美緒の技術書やその他の技術書読めて理解できることが大の大人ができないということをして

美「そう。よかったわ。明日の朝いっぱい写真撮るからね。楽しみにしててー」

結・麗「あはは・・・はあ・・・」

そして次の日・・・

美「きゃーーーーー！かわいいーーーーー！」

僕と麗が聖祥の制服を着てリビングにおりてみるとそこにはカメラを持ちながら僕らを激写してくる母さんがいた。

美「かわいすぎるわー！」

麗「お母さん・・・近所迷惑だから・・・」

美「そうだけど・・・あなたたちがかわいすぎるのよ!」

僕は互いみてみた。僕は長い黒髪を束ね、聖祥の制服を着ている。
一方麗華は、僕と同じ黒髪を同じく束ねている。

はたから見るともまごごうことなく、美少年?と美少女である。

結「少年だよ!」

麗「どしたの?ゆう・・・」

結「いや、なんか言っておかなきゃいけないと思って・・・」

麗「?????」

話を戻すよ。僕がどうしてまだ長髪なのかというと聖祥の編入試験

を受ける前、髪を切りたいと母さんに言ったら「だめ！ゆうは長髪が似合うから！似合いますぎるからだめ！」といい麗華は「いいじゃない。わたしとおそろいよ！」とふたりとも必死に言ってきたその迫力に負けて髪を伸ばし続けているのだ。

まあ母さんやれいの長い髪は好きだからいいけど「男が髪を伸ばしたら気持ち悪いだろ」といったらふたりは「そんなことない！そんなこという人がいたらわたしがO S I O K IもといO H A N A S Iをするから！」と物騒なことをいっていた……二人の目が怖かった……

美「はい。それでは朝ごはんしよっ」

結・麗「はい！」

玄関にて……

美「ハンカチ持った？ティッシュ持った？焰美、澁持った？鏡月持った？」

結「もったよ母さん・・・てか焰美と澁はいつもついてるし・・・」

麗「わたしも・・・」

美「だって心配なんだもん！愛息子と愛娘がっ！」

結「はいはい・・・うわぁもうこんな時間！はやくいくぞ麗！」

麗「うん！結！」

「なのはside」

やっと出番なの！とと、いけないいけない。

今私高町なのはは私立聖祥大付属小学校にいます。
もちろん勉強だよ。

な「おはよう」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんにあいさつした。

ア「おはよう、なのは」

す「おはよう、なのはちゃん」

ア「ねえなのは。転校生が今日来るの知ってる？」

そこでもう一人の私の親友のアリサちゃんが話しかけてきた

な「おはよう、アリサちゃん。えと転校生？」

ア「うん、おはよう。二人いてひとりは男の子、もうひとりは女の子らしいわ。しかもふたりとも頭がよくて編入試験どちらとも全部満点らしいわよ」

な「ふえ〜〜すごいねここの編入試験難しいのにな」

す「どんな子達かな？」

ア「ふんっ。きつと頭の良さを鼻にかけている子達よ！」

な「にゃははは」

担「はい。授業始めますよ座って〜！」

みんなが着席する。

担「はい。授業を始める前にこのクラスに新しい友達になる子たちがいます」

ざわざわ・・・ざわざわ・・・

男1「野郎ですか？それとも女の子ですか？」

担「両方よ！それもどちらも美少年と美少女よ！」

クラス男子「うおおおおおおおおおおおおおおおお
おお。よっしゃあああああああああ！」

クラス女子「きゃあああああああああああああああ
あああ」

クラスが一致団結したの。すごい・・・

担「では二人とも入ってきて！」

？「はいっ」

転校生の男の子に続いて女の子もいるの。

二人とも長髪で一つにまとめていて、女の子のほうはもちろんなん
だけど、男の子のほうは大人っぽさっていうのかな？そんなものを
感じたの。でも・・・

・・・男の子がわたしの記憶の大切な男の子と重なったの。

男の子「はじめまして。白銀結斗っていいです。よろしくお願いします」

女の子「白銀麗華よ。よろしくね！」

男の子の名前は違っていたけど温かい雰囲気、優しい漆黒の瞳で思わず立つちゃったの・・・

な「燈・・・夜君・・・？」

男の子が急に立った私を見つめて

結「うん？なの・・・は・・・か？」

私の名前を言ってくれた！

な「うん！うん！なのはだよ！」

わたしはうれしくて
涙を流しながら燈夜君にだきついたので．．

な「ふえ〜ん！燈夜く〜ん！」

結「うわっ！とと．．久しぶりだななのは．．」

燈夜君はわたしをだきしめて頭を撫でてくれる．．あたたかいの
うれしいの．．．

くなのはside endく

T A L E 7 へ 続 く ・ ・ ・

TALE 6 再会（ふたたび）（後書き）

焰「今回はわりとながかったかの」

BAL「うん。がんばったもん。」

焰「そうか。」

BAL「というわけで今回は結斗君のデバイスの焰美さんに来てもらいました」

焰「よろしく頼むの。」

BAL「さてさて今回も質問していきます。ずばり焰美さんにとって結斗君は？」

焰「うむ。誇り高き素晴らしい主かの。主ほど周りの人にやさしい人はいないと思うの。守るために強くなる、そのために努力する。まさに素晴らしいの。私もゆうが主うれしく思っているよ」

BAL「なるほど。分かりました。ちなみに・・・」

焰「うむ？なんじゃ？」

BAL「いえなんでもと、もうそろそろお開きです。何か言いたいことありますか？」

焰「ゆうは今とてもがんばっておる。皆のものの応援よろしく頼むぞ。」

「

BA「はい。今回はここまで！次回は澁さんがきてくれます
ではでは〜」

T A L E 7 邂逅 (前書き)

テストしゅりょ＝う。やった。

久々の投稿です。

ていつても三日ぐらいなんですけどね・・・

それでは本文どうぞ・・・

テスト終わったからテンション上がるよ~~~~~

T A L E 7 邂逅

〈結斗side〉

驚いたよ・・・

今日私立聖祥大附属小学校に編入してきてクラスで自己紹介をしているといきなり席から立つ子がいた。

栗色の髪をしたその女の子は昔の僕の名前を知っていた。記憶を頼りの調べるとなのはだと言うことに気がついた。

あの頃から少し背が伸びて、かわいくなっていた。

なのはは会えたことがうれしいのか僕に勢いよく抱きついてきた。

な「よかったよ〜〜」

結「よしよし・・・」

僕がなのはの頭を撫でていると、隣から冷えた声が聞こえてきた。

麗「ゆう〜？そのこゝ、誰っ・・・？」

結「ひっ！」

おもわず悲鳴を上げそうになった。・・・何だ今の空間を氷結させるような声は？おもわず焰美をセットアップしかけたぞ！
クラスのみんなもちよっと青ざめてるし・・・

結「え〜と・・・麗？（なに？）なんか怒っている？」

麗「怒ってない！（結が頭を撫でるのはわたしだけなのに！このこゝなんなの？）」

明らかに怒っているのがばればれな麗だった。

結「怒ってんじゃない！・・・う〜んと・・・友達だよ」

麗「友達？」

結「そそ。前ここに住んでいた時のね。よく遊んでいたんだよ」

麗「知らなかった・・・あなた名前は？」

な「にやつ!？」

なのはははまだに俺に抱きついてた・・・猫みたいになるのはいがいい加減離れてくれ・・・周りの視線が痛い。特に麗のものが・・・視線だけで人を氷付けにできるんじゃないか？

な「なのは・・・高町なのは・・・」

なのはが弱々しく麗に自己紹介をする。

麗「なのは・・・」

麗は脳に焼き付けるようになのはの名前を呟いていた。どうでもいいがなのはが怖がつてるぞ麗……

担「え〜と……もういいかしら？」

クラスの雰囲気には堪えられなかったのか、担任の先生が話しかけてきた。

結「あっ！はいっ！いいです。すみません時間をとらせて……」

担「いいのよ。え〜と席はちょうどなのはさんの後ろが開いているわね。三人ともせきについて。」

三人「はい。」

よりもよって三人が固まるなんて、
僕らは席について授業を受けた……授業を受ける前、麗がなんかなのはに言っていたけどなんだろう？まあ……いつか……

ちなみに麗華がなのはに言っていた内容は以下のとおり・・・

麗「ゆうは渡さないから・・・!」

な「うにゃっ!」

休み時間・・・

授業が終わりいきなりクラスメートに囲まれてしまった。一度の質問が多すぎるため僕らがあたふたしていると声がかかった。

?「みんなそんな一度に質問しても転校生が答えられないわよ!ほら順番に!」

女の子の委員長みたいな発言で周りの子たちが、順番に話しかけてきた。すごいなあの子……

ク1「どこから来たんだ？」

結「ん」と……東京の方からだよ」

ク2「なんでふたりとも苗字が一緒なの？」

麗「それはわたしとゆうが兄妹だからよ。血はつながってないけどね……」

他に二三質問に答えると、

キンコーン……カーンコーン

チャームが鳴りクラスメイトが戻っていく・・・ふつとりあえずちっ
きの女の子に礼を言っておかないとな・・・

結「さつきはありがとう。え〜と・・・」

？「アリサ・バニクスよ。なのはの親友よ」
金髪でいかにもお嬢様な感じのアリサが言う。

結「そうなんだ。」

な「うん！んでこっちの子が・・・」

？「月村すずかです・・・よろしくね白銀君！」

今度は紫色の髪の子が自己紹介してくれた。

結「うん。よろしく・・・でも苗字で呼ぶと麗とかぶるから僕のこと
は結斗でいいよ」

す「分かったよ、結斗君！じゃあわたしもすずかでいいよ」

ア「わたしもアリサでいいわよ・・・」

結「分かった・・・よろしくアリサ、すずか！」 笑顔

ア・す「・・・／／／」

適当に相槌を打ったら二人が顔を真っ赤にしまった。

結「どうかした？ふたりとも？」

ア・す「なんでもないわよっ！／＼」「なんでもないよ／＼」

二人とも俯いて言った。

嫌われちゃったのかな？

ゆうは見当違いな考えをしていた・・・

結「そう・・・ならいいんだけど・・・」

ア「（あの笑顔はなにっ？反則よっ！）」

す「（あれはだめだよ！一瞬見惚れちゃったよ・・・／＼）」

そしてはたからみていたなのは「ううううう」と唸っていた・・・
どうしたんだろ？どこか痛いのかなあ」（ちよっとゆう！）「する
と麗が念話で話しかけてきた・・・

結（なに？麗？）

麗（なんであんなことしたのよ！）

結（あんなこと？）

麗（アリサとすずかに笑顔したことよ！）

結（？・・・なんか悪いの？）

麗（悪いわよ！ただでさえ容姿が整っていて女顔ぽくって違った・
・大人びてかっこいいのに、笑顔されたら並の女じゃ一目惚れし
ちやうわよ！ゆうは無自覚でするからなお悪いわ！>とにかくわた
しいがいの女の子に笑顔するの禁止！）

結（なんで！？）

麗（いいから！そうしないとゆづの恥ずかしい過去なのはたちには
らすわよ！）

結（やめて！それだけは！分かったから！）

麗（んっ／＼よろしい・・・）

そして念話が切れた・・・なんなんだ？

放課後・・・

な「なのはの家によっていかない？」

結「いいけどどうして？」

な「お父さんたちに紹介したいんだよ！」

結「ん〜分かった．．いいよな？麗？」

麗「いいよ．．．」

麗がしぶしぶOKする。

結「なのはの家喫茶店でデザートはおいしいぞ。僕でも勝てない程だ」

麗「さっさと行きましょー！」

変わり身早っ！

結「よしっ。とゆつことなのはの家にしゅっぱーっ！」

な・麗・ア・す「お〜〜」

なのはの家 喫茶翠家・・・

カリーン・・・コローン

な「ただいまー」

結・麗・ア・す「こんにちわー！」

？「おかえりなのは、おやアリサちゃんにすずかちゃんいらっしや
い」

話しかけてきたのは男の人だった。
お兄さんかな？

な「お父さん。ただいま。お母さんは？」

えっ？お父さん！？・・・若すぎでしょ・・・

士「厨房にいるよ。なんか用か？」

な「うん。新しいお友達が出来たから紹介したいの！」

士「新しい友達？その男の子達かい？」

な「うん！そうなの！燈夜君・・・」

士「燈・・・夜・・・君か？」

僕はその名を聞いたときまた思い出してしまった・・・でもなんとか顔には出さなかった・・・

麗「はじめまして今日転校してきた白銀麗華です。」

麗が僕の反応に気づいたのか僕よりも早く挨拶をする。

僕は気を取り直して・・・

結「はじめまして土郎さん。僕は白銀結斗っていいいます」

士「はじめまして。僕は高町士郎なのはの父だ・・・・・・・・ん？しかなのはが今燈夜君と・・・」

結「ええ。いろいろありまして今の名前は結斗です・・・」

士「そうか。ならば結斗くんと呼んだほうがいいな」

結「お願いします・・・それにしても僕のこと知っているんですか？」

士「ああ。知っているともなのはを命がけで守ってくれたんだな！
ありがとう・・・君がなのはを助けてくれなければなのはは・・・」

士郎さんが頭を下げてくる。

結「いいですよ／＼僕がそうしたかったんですから！」

士「そうか。にしても今までどうしてたんだ？なのはそれはもうずつと泣いていたんだぞ」

な「お父さん！」

？「あまりからかつちゃだめよ、あなた……」

な「お母さん」

厨房から女の人が出てきた。

なのはのお母さん……若い……。はあ、高町家ではもう驚きません……

？「お帰りなのは。はじめまして、結斗君、麗華ちゃんなのはの母桃子です。なのはを助けてくれてありがとう」

今度は桃子さんからだった。僕は丁寧に返事をする。

結「いいんですよ。桃子さん、なのはとは友達だったんですから助けるのは当たり前です。……えっと今までいなかったのは知り合

いのところでした。いろいろありまして・・・」

士「そうか・・・。まああまり聞かないよ君にとって大切なことらしいからな」

結「ありがとうございます。」

カライン

僕らが話をしていると、男の人と女の人が入ってきた。

な「あ！お兄ちゃん、お姉ちゃんお帰り」

？「ん？ただいま、なのは」

？「どしたの？玄関で固まって」

な「結斗君たちをお父さんに紹介してたの、紹介するね結斗君、麗華ちゃん。私のお兄ちゃんとお姉ちゃんなの」

？「なのはの兄の恭也だ」

？「姉の美由紀だよ」

結・麗「はじめまして・・・」

恭「それでなんでこんなところで立ち往生なんかしているんだ？」

桃「結斗君にお礼をね。結斗君がなのはを助けてくれた燈夜君よ、あとなのはの意中になっている男の子よ」

な「お母さん！」

桃「あら違うの？」

な「そんなこと・・・あるけど。／／／」

なのはが顔を真っ赤にしている。

恭「・・・結斗、勝負だ！」

恭也さんがいきなり言うてくる。

結「どしたんですか？急に」

恭「俺に勝たんとなのははやらんぞ！」

恭也さんがどこぞの父みたいなことを言ってくる。

結「とりあえず、落ち着きましょう。僕らはデザートを食べに着たんですから」

桃「そうよ。恭也」

恭「むづ。ならば帰る前に声かけに来い。その時勝負だ」

士「恭也小学生相手に何を（いいですよ）っていいのかい？」

結「ええ。僕も剣術をやっているので相手になってほしいですから」

麗「ちよっとゆづー！」

結「大丈夫だって、模擬戦だよ。」

麗「違う。早くデザート！」

あつ・・・そっちな。アハハ・・・ハア。

結「・・・あゝはいはい。分かったよ。」

僕らはテーブルに着き、注文をした。

十分後・・・

今僕らの前にはデザートがある。僕、麗はチョコレートケーキ、アリサはモンブラン、なのは、ずずかはチーズケーキだ。

結「どれも。すごいな。僕もここまでではできないな。」

一人でケーキの批評をしているとアリサが話しかけてくる

ア「結斗って料理作れるの?」

麗「ゆづのもすっごくおいしいよ」

ア「へえそうなんだ。ねえ結斗大丈夫なの?」

結「ん? なひが? (なにが?)」

ケーキを口に入れながら答える。

ア「・・・ケーキ食べてから言え!・・・恭也さんってすっごく強いのだよ」

す「うん。ほんとに」

アリスとすずかが心配してくる。

結「ん。・・・死ぬわけじゃないんだから、大丈夫だよ」

僕はそれに笑顔で答えた。

な「ねえ、麗華ちゃん」

麗「ん？なに？」

な「結斗君大丈夫なの？お兄ちゃんとっても強いの。お父さんとよく修行してるから。」

麗「・・・いくらやってもゆうは負けないわ。というよりわたし想像できない・・・ゆうが剣で負けるなんて」

な「結斗君もすごいんだ・・・」

麗「まっ、見てからのお楽しみよ さあまだケーキ食べるよ」

な「あはは……」

隣では麗がケーキと戯れていた……

結斗 side end

TALE 8 に続く……

TABLE 7 邂逅（後書き）

漣「久しぶりの投稿なのにこれだけですか？あまり進んでないのですね」

BAL「すみません。なんとか詳しく書こうとしたんですけどこれが精一杯なんです」

漣「そうですね」

BAL「今回は焰美さんと同じく、結斗君のデバイス漣さんに来てもらいました〜わ〜パチパチ・・・」

漣「よろしくお願いします」

BAL「ということで質問です。漣さんにとって結斗君とは？」

漣「すばらしい人ですね。小学三年生なのにあれほどまでに他人を思う人を見たことがありません。でもゆう様はご自分のことになる途端に自分一人で解決なさろうとするので、ほっておけませんね」

BAL「なるほど。お姉ちゃんみたいですね・・・っとどうやらこの辺でお開きみたいです。なにか言いたいことがあれば一言どうぞ」

漣「次はゆう様と恭也様の対決なのでぜひ見てください」

BAL「ネタバレでしないで！・・・次のゲストはなのはさんで

す！魔王ですよ！僕的には魔女だと思っんですけどね」

な「スターライトブレイカー！」

BAL「なに？よっ。一体どこから砲撃が！」

澁「ではまた次回あいましょ」

T A L E 8 初試合（前書き）

更新遅れました。どうもすみません。

今回は結斗の力の程が見れるかと。

でも少し短いかな？

それでも言い方は次へをクリックしてね。

TALE 8 初試合

なのはside

今私たちは道場にいます。私のほかにはアリサちゃん、すずかちゃん、麗華ちゃん、お父さん、お母さん、お姉ちゃんみんないます。

結「恭也さん来ましたよ。」

恭「来たか。では始めよう。武器は何がいい？」

結「双剣がいいです。」

恭「ほう。御神に二刀流で挑むか面白い」

結「同じ土俵じゃないとフェアじゃないでしょう」

二人はお互いに笑いあっていました。

なのは s i d e e n d

士郎 s i d e

今僕は二人の戦いを見ている。

恭也は小太刀を正面に結斗君も正面に持つ。

二人を取り巻く空気が静かになり、周りが静寂に満たされる。その刹那、始めに仕掛けたのは恭也、一瞬で結斗君の背後に回り、木刀を向ける。しかし

恭「な！」

恭也と僕は驚いた。結斗君は見ずに剣を後ろに構えて防いだからだ。

結「速いですね。目で追いきれなかったです。」

結斗君は平然と答える。

恭「ならばなぜ？」

恭也の疑問は最もだ。目で追えない、ならば一体どうやって？

結「気配ですよ。」

恭「気配で分かったのか。すごいな、ならばもう少し速く行くぞ」

今度は恭也が神速を使って、攻める。

神速は、一時的にスピードを高めるものだ。これならと僕は思った。しかし……

結「また速くなりましたねっ！」

いとも簡単に正面からの攻撃を止めていた。

結「やっぱりだめか。すみませんちょっとタイムで。土郎さん長刀

「二つありますか?」

いきなり試合を止めて、聞いてくる。

士「ああ、あるけど。使うのかい?」

結「はい。お願いします」

僕は120センチくらいの長刀二つを渡す。

結斗君は受け取って、再び恭也と向かい合う。

恭「いきなり止めると思ったら、そんなので戦えるのか?」

長刀二つは結斗君の身長より少し短いくらいで、あれでは使いにくい。しかし・・・

結「ええ。これでいいんです」

そういつて結斗君は刀を十紋字に構えた。

恭也から見ると刀を十字にしているように見える。

麗「ゆう本気になったのね。」

士「どうゆうことだい？」

思わず麗華ちゃんに聞く。

麗「わたしやゆうは白銀流という流派をつかいます。」

聞いたことないな・・・

士「白銀流・・・代々のものかい？」

麗「いいえ、違います。ゆうが作ったんです。」

士「は？・・・と言つことは・・・」

麗「はい。ゆうは白銀流の師範です・・・」

士「そんなことが・・・。白銀流というのはどんな流派なんだい？」

あの年で師範・・・

麗「特筆しているのは剣術ですね。あと槍術、薙刀術、抜刀術ですね。私はまだ剣術、抜刀術のみです。といってもゆうにはぜんぜん勝てないんですけど。」

士「君たちは一体……」

麗「ええと。それはまた後で。ゆうが行きますよ。」

僕は再び試合に目を向けた。

恭也 s i d e

一体何なんだ？あいつは……俺の神速を見切った。小学三年生か？ほんとに……

迫撃を仕掛けようとしたら待ったをかけられた。

そして手にしたのは両の手に長刀。

恭「そんなので戦えるのか？」

思わず聞く。

長刀は扱いが難しい。しかもそれが一本だと？
どうゆうつもりだ？

結「ええ。これでいいんです」

結斗は平然と答え、右手の刀を横に、左手の刀を縦に正面に構えて
十文字の形になった。
すると気配がが変わった。

結「恭也さん確かに神速は早いです。だけど僕の白銀流にも高速の
移動ほうがあります。見切れますか・・・夜駆け」

シュンッ

結斗が言つとその場からいなくなった。

恭「！どっに！？」

結「ここですよ。」

声が背後から聞こえた。

恭「なんて速さだ。」

結「次いきます。」

また消えた！気配を感じとっさに前に小太刀を前に構える。

カーン

木刀と木刀のぶつかる音がした。

なんて重さだ！

結斗は左右の長刀を交互に動かす。しかし無駄がない。そして刀を切るのではなく、まるで擦るような感じで向かってくる。どれも一撃が重く、

俺は受け止めるので精一杯だった。

何回か受けていると

バキッ

俺の持っていた木刀が折れた。

結斗 side

バキッ

恭也さんの使っていた。木刀が折れた。

恭「……俺の負けだ」

結「ありがとうございます！」

僕は礼をいつていたら、土郎さんが話しかけてきた。

士「結斗君最後の君の移動方法はなんだい？一瞬私でも消えたように見えたよ」

結「あれは夜駆けです。足に力をこめただけのものです」

な「でもでも消えたように見えたよ!」

麗「あれは無駄な力が入ってないから。だからあれ程のスピードが出るのよ」

な「ふえ〜すごい。」

「こうして恭也さんの試合は終わった・・・」

家の帰宅途中・・・僕はどうにも話したい気分ではなかった。恭也さんに勝ったんだから、嬉しいんだけど頭から離れないことがあった。

焰「(ゆう・・・)」

澁「(ゆう様・・・)」

麗「・・・てばっ！ゆうてばっ！」

結「麗か？どうしたの？」

麗「大丈夫？顔真つ青よ・・・」

顔に出ているらしい・・・

結「大丈夫だよ・・・」

空元気に近い返事をする。

麗「さっき言われた前の名前のこと？」

僕は思わずビクッとなっていました。

結「ちがうよ・・・ちょっと考え事さく嘘よ！>麗・・・」

麗「バレバレよ！・・・ゆう前の名前呼ばれてからずっと元気なかつたし・・・もつと頼ってよ！・・・わたしはずっとゆうの傍にいるから・・・ゆうが悲しいとわたしも悲しい！お願いだからひとりで抱え込まないで！」

麗が泣くくらいに叫んで言う。

結「・・・ありがとう麗・・・ちょっと元気でたよ・・・ひとつお願いしてもいいかな？」

麗「・・・なに？」

結「家まででいいから手をつないで欲しいんだ・・・あの人たちの

言葉や目を思い出すとどうしようもなく震えるんだ・・・あの拒絶された言葉や目を・・・」

麗「ゆう・・・。分かった・・・はい！」

麗が手を差し出してくる。

結「ありがとう。麗」

僕は麗と手をつないで家に帰った。さっきまで凍えていた体が麗とつなぐ手から暖かくなっているのを感じた・・・

く結斗side endく

（麗華 side）

今わたしはゆうと一緒に家に帰っている・・・でも会話がない。わたしがゆうにはなしかけても、どこか上の空のような感じをしている。理由は・・・分かっている。

士郎さんやなのはが呼んだ昔のゆうの名前のせいだ・・・いや違う・・・ゆうにこれほどの大きく重たい傷を負わせたあいつらのせいだ・・・ゆうを何も理解しようともせず拒絶したあの男と女のせいだ・・・

・
こんなゆうはわたしはみていられないだからゆうにはなしかけた・・・

麗「ゆうってば!」

結「麗か?どうしたの?」

麗「大丈夫？顔真つ青よ・・・」

結「大丈夫だよ・・・」

わたしは前の名前のことを言った。するとゆうの体一瞬震えたようだった。でもゆうは気丈になんでもないという・・・

わたしは限界だった・・・なにが大丈夫よ！必死に弱みを見せないようにするゆうが痛々しかった・・・だからゆうに思いをぶつけた・・・ゆうは頼ってくれたわたしを。それがとてもうれしかった。

ゆうは手をつなぎたいといってきた・・・わたしは躊躇うことなくゆうの手を握った・・・とても冷たかった・・・わたしはゆうを大きな氷のような呪いを早く溶かしてあげたくて強くゆうの手を握り続けた・・・

（麗華 side end）

外伝・・・

あれからゆうつと麗は手を握り続けて家に帰宅した。

結・麗「ただいま〜！」

美「おかえり〜。遅かったのね・・・あらっ！ふたりとも仲良しさ
んね・・・」

美緒は結と麗が繋いでいた手を見ていた。

結・麗「・・・／／／」

ふたりは顔を真っ赤にした。

美「っ！……ふたりともかわいすぎるっ！」

・ 美緒がふたりに抱きつきさっきの空気をどこかにやってしまった・

その日の夜……

？「誰か助けて！」

一匹のフェレットもどきが鳴海市に救命を求めてとある一人の少女がその声を聞いたそう……

ちなみにこの声はゆつと麗には聞こえなかった。なぜならば、母親である美緒にもみくちやにされていたためである……

T A L E 9 に 続 く . . .

TALE 8 初試合（後書き）

な「……………」

BAL「何か言ってください！なのはちゃん！沈黙が耐えられませんか！」

な「出番が少ないの……」

BAL「……そんなこと。」

な「そんなことって……？」

BAL「ちょっとストップ！無言でレイさんを向けないで！ていうかどこから持ってきたの？まだ本編で持っていないでしょ！」

な「……理由は簡単……後書きだから」

BAL「あくなるほど……って違う。だからレイさんを向けないでって！あまりすると出番減らすよ！」

な「わ〜ごめんなさい。」

BAL「ん〜分かればよろしい」

な「ちつ……………」

BAL「いまちつとか言ったよね！……まあいいや今回は高町な

のはさんをゲストにお送りしていきます」

な「よろしくなの。」

BAL「さて質問です。結斗君への評価を」

な「ううん。優しくなくて強くて、かっこいいー王子様！」

BAL「かわいらしい評価ありがとうございます。さて次からは本編ですけどいかがほどに？」

な「結斗君のハートを射止めてめて見せます！」

BAL「（ここは突っ込むところなのか？でも本人はその気だし）」

な「どうしたの？BALさん」

BAL「いえ、なんでも。という事で今回はなのはさんでした次回から結斗君がきてくれます」

な「まったね」

BAL「（なのはさん、ほんとに本編頑張ってくださいよ）」

T A L E 9 白い魔導師 (前書き)

やっと本編です！長かった気がします・・・
でもこれからなので頑張りたいです。

応援ヨロ！

感想とかも待ってます。

本文どうぞ・・・

TALE 9 白い魔導師

〈結斗side〉

今僕と麗は早朝の修行をしている・・・模擬戦だ。ちなみに僕は焰美をセットアップしている・・・

麗「いくわよゆう!」

結「いいよ!」

麗は鏡月を双銃に変えて僕に攻撃してきた

麗「プリズムバレット!」

鏡「prism ballet！」

弾数およそ二十・・・麗のプリズムバレットは様々だ・・・直線に進むもの、足元から来るもの、背後から来るもの、ぶつちやけよけにくい・・・それが二十って・・・つかれるなぐだけどいい修行になるか！

僕は右手に握る紅蓮色の刀、紅龍リリウジュウに紅蓮の炎をともし、瞬間歩法術の夜駆けを使いながら麗に接近していく。

夜駆けは誰にでも使える。足の筋力の無駄を無くせば無くすほど早く移動ができるようになる。でも初めの移動の時はなれてなかったから足が痛いことはよくあった。今でも痛い、だからあまり多用はしない。

もちろん麗も使えるが遠距離から攻撃する麗はあまり使わない。ちなみに麗は五秒が限界らしい。えっ？僕？僕もせいぜい十秒が限界だよ・・・足痛くなるもん・・・

さて模擬戦にもどるが僕は麗のプリズムバレットを体に当たるものははじき、よけれるものはよけてあつという間に麗の背後を取った・
・そして刀を振り下ろす

が斬ったのは幻影だった・・・

んゝ麗。フエイクシルエツトの使い方うまくなったなあゝゝ
まんまとだまされちゃった・・・えつと本物はつと・・・いた！

だけどそのときには麗の砲撃の発射シークエンスにはいつていた・
・ちっ！麗の砲撃強力なんだよな・・・かといってよけれそうに
ないし・・・しょうがない相殺しますか！

163

結「焰！こつちもいくよあれを！」

焰「あれか！・・・了解じゃ」

結「ん！いくよー！」

僕は刀身に魔力を集めた・・・刀身がより紅くなる・・・

結「白銀流奥義・・・」

麗「彼のものに裁きを与えたまえ・・・ジャツジメント・・・」

結・麗「飛天・・・紅龍翔破！」「ブレイカーーーー！」

僕の刀からは紅蓮の龍が向かい、麗からは銀色の砲撃がこちらにと
んできた・・・しかし僕の紅龍が砲撃を相殺した・・・

）結斗side end（

（麗華 side）

麗「やった？勝った？」

鏡「分からないわ・・・」

フェイクシルエツトで何とか騙せたらしくてこっちが砲撃を打つ時は稼げたけどゆうは私と同時に攻撃を仕掛けていた。
わたしはわたしの砲撃魔法とゆう奥義で発生した煙をみる・・・すると・・・

結「はい！ぼくの勝ち！」

と行ってさっき離れていたゆうがいつの間にかわたしの後ろにいて、
紅蓮色一色の銃をかまえていた・・・紅蓮の双翼を背中に生やして・・・

麗「ゆうー！いつのまに？」

結「ん？奥義撃ったあとすぐに。あれは相殺することが目的だったしね。すぐに近距離にもってきた・・・」

全然気づかなかった・・・てゆうか速すぎ！

麗「それにしたって・・・そのスピードはおかしいでしょ・・・」

結「ん？あゝ！それはこれだよ」

ゆうは背中中の双翼を指差す。

何だろう？

結「これはレイディアントウイングといって僕が作ったものだよ・・・つくったっていつでも魔力で形にしたらただけだね・・・まあこれで夜駆けには劣るけど高速の移動が可能なんだよ。あと足の疲労がないよ魔力のみ消費・・・ただこれは維持が難しくくて・・・」

とても綺麗だった。移動手段にしても目を奪われるほどに。

麗「へえ〜きれいな。今度わたしにも教えてよ！」

結「いいよ。とりあえずこの辺で終わりにして学校の準備しよう！」

麗「うん！」

わたしたちは地上におりてデバイスを解除する。
ちなみにここは白銀家の庭だ・・・周りに被害がないのはゆづがあらかじめ結界魔法で内外の時間をずらしていたため結界を解くともどおりになる・・・

結「にしても最後の砲撃すさまじかったよー！」

麗「そっ?？」

結「うん。相殺できるか心配だった・・・」

はあ。ゆうがそれをいうのか・・・

麗「何を言うかと思えば・・・」

結「・・・？」

麗「ゆう最後の奥義本気じゃないでしょ・・・」

結「ばれた？」

麗「当たり前よ・・・こっちは発射まで時間かかるのにゆうってばほとんど発射までのタイムラグなかったじゃない・・・」

結「うん・・・まあたしかに・・・そうだけど・・・でもまんまとシルエットにだまされたからなあ・・・うまくなったよな麗、使い方が・・・」

ゆうが褒めてくれる。嬉しいけど・・・

麗「たしかにそうだけど決定打にならないよ・・・」

結「うん・・・んじゃ僕の技パクッテ見る？」

麗「パクルて・・・！でもゆうの技複雑すぎるよ・・・」

結「そんなことないけどなあ。まあ見本っていう形で。」

麗「それなら・・・いいかな」

結「よしこれからがんばろうな」

そういつてゆうはわたしの頭を撫でる・・・

麗「・・・／／／／」

なんでゆうに頭を撫でてもらうとこんなに着くんだろっ？

結「どうした？顔真っ赤だぞ熱か？」

麗「なっ・・・なんでもないよ！ほらいくよ！」

結「ああ。うん・・・」

ゆうっつてばどっつして「」まで鈍感なのよ！

（麗華side end）

〈結斗side〉

美「忘れ物ない？ハンカチ持った？ティッシュ持った？麗、ゆうの
写真持った？」

麗「！つとあつた。良かった。」

結「つてなんでそんなもの持ってるの？」

麗「えっ？だって大事なものだし、ねお母さん」

美「ええ！もちろん！」

結「……………もう何も言わないよ……………」

焰「頑張れゆう！」

澗「私たちはいつでもあなたの味方ですよ！」

焰美と澗の心遣いが途轍もなく、嬉しかった。

結「ありがとう。焰美、澗僕の味方は君たちだけみたいだ……………」

結・麗「いつてきまーす!」

美「えぐ・・・いつてらっしゅーい・・・」

母さんの泣きながらの見送りで朝が始まる・・・

小学校・・・

結・麗「おはよう!」

な・ア・す「おはよう!」

そして授業がはじまり・・・昼食・・・

な「結斗君！麗華ちゃん一緒にご飯食べよう！」

結・麗「いいよ」「いいわよ」

ジーーーーー。

僕らは屋上へ行った。だってクラスの男子の視線が怖いもの。しかも日に日に強くなってる気がするし。

屋上・・・

五人「いただきまーす！」

す「うわぁ！麗華ちゃんと結斗君の弁当おいしそうだね！」

麗「んっ？これはゆうがつくったのよ」

な・ア・す「えっ！」

結「なにいつてんの。麗も手伝ったでしょ……」

麗「たしかに手伝ったけど……作ったのはゆうよ……」

な「えっ……？えっ？これ結斗君がつくったの？」

なのはが驚いてる。そんなに驚くことかな？前も言ったと思うんだけど……

結「まあね・・・でもそんなにむずかしくないだろ料理なんて・・・」

ア・す「うぐっ！」

二人が声を出す。もしかして・・・

結「二人とも作れない？」

ア「そうよ！悪い！？」

す「うん。作ろうとするとお姉ちゃん達に待ったをかけられるの・・・」

結「そ、そう。」

な「あはは・・・。ねえたべてもいい？」

麗「わたしのはだめよ！ゆうがわたしにつくってくれたんだから！」

麗が頑なににおかずを渡そうとしない。

結「麗・・・。んじゃ僕の食べてもいいよ」

仕方ないので僕のをやる。

な「わ〜い。ありがとうございます。いただきます」

そしてなのはが僕の作った卵焼きを食べた。すると・・・
俯き動かなくなってしまうた・・・

結・ア・す・麗「なのは（ちゃん）？」

な「お」

結・ア・す・麗「お？」

な「おいし〜〜〜い！」

結「うわっ！」

展開道理になのはが叫びだした。驚いた・・・

な「なにこれ？なにこれ？（ただの卵焼きだけど・・・）卵焼きは
こんなにおいしすぎないよ！」

ア・す「そんなに？」

アリスとすずかも食べる・・・すると・・・

ア・す「おいしいー！ー！ー！」

ア「どこの卵？（普通のスーパーの卵だけど・・・）」

す「なにか違う焼き方を？（普通に焼いているけど・・・）」

麗「わかった？わたしがゆうのお弁当を譲りたくなかった理由」

な・ア・す「うん。これは誰も渡したくない！」

結「みんなおおげさだなあ！ただの卵焼きだよ！（絶対違う！）そうかなあ？」

ア「結斗！あんたわたしの家の料理人になりなさい！」

す「アリサちゃんずるいよ〜！そうゆうことなら月村家だって」

な「アリサちゃんもすすずかちゃんも結斗君は翠屋で働くんだよ」

麗「三人とも勝手なこと言わないで。わたしはゆうのお弁当のために学校に来ているんだから！」

結「麗それほどか・・・四人とも（なに？）うつ血走った目で見ないで・・・そんなに気に入ってくれたんなら昼食のおかず分けてあげるからさ・・・（ほんと？）うん。そのかわりみんなのくれよ？さすがに足りないから・・・」

な・ア・す「うん。やった〜！」

喜ぶ三人だが不機嫌な人一人・・・

結「（麗今日帰ったらデザート作ってやるから機嫌直せ・・・）」

麗「（ほんと！？ぜったいだよ！ぜったいだからね！）」

結「（分かったから・・・）」

そしてお昼が過ぎていった・・・

放課後下校途中・・・

・ 下校して今日は別の道で帰宅しているときなのはが急にとまった・・・

結「どうしたなの？」

な「えっ？ううんなんでもっ」

いいかけてなのはは公園の中の林に走っていった・・・

ア「どうしたの？なのはー？」

結「追いかけてようー！」

僕らが追いつくとなのはの前には一匹のフェレットのがいた。どうやら怪我をしているらしい・・・しかし僕は違うことが気になっていた。麗華も気づいたようで・・・

麗「(ゆーー)のフェレット・・・」

結「(ああ。魔力が感じられる)」

麗「(どっしてこんなところ?)」

結「(さあ？まっとりあえず治療だ！)」

そして僕らはそのフェレットを病院に連れて行き、家に帰った

その日の夜・・・

僕は街中でとても大きな魔力を感じて起きた。麗が念話で話しかけてくる・・・

麗(ゆう！この魔力は？)

結(ああ。こっちも感じた！少し自然の魔力にしてはでかすぎる確
かめよう)

麗（ええ！じゃあすぐに！）

そして僕らは魔力を感じたところにいった・・・そこには白い魔導士が額に青い宝石をつけた黒い化け物に襲われていた。

麗「ちょっとあれなのはじゃない！」

結「ああ。魔力は大きいがまだなりたてか。危なっかしい・・・瀧セットアップだ」

瀧「了解しました。結斗さま」

そして俺はセットアップして蒼い刀身をした刀蒼龍をもって黒のロングコートを着た状態になった。

麗「ちよつと！介入する気？」

結「ほつておけないだろ！それに認識阻害魔法かけるからばれないつて！」

そして僕はなのはところへ向かった・・・

〈結斗side end〉

〈なのはside〉

な「ふえ〜〜〜！」

現在わたし高町なのははピンチです。夕方たすけたフェレットさんがまた助けてと行ってきたので、宝石をもらってセットアップ？ていうものをしたんだけど、これからどうしていいかわかんないよ！

？「あぶない！」

な「ふえ！？」

気づいたときには黒い化け物が私に向かっていているところでした。とつさに化け物に杖を向けると

レイ「protection」

声がしてわたしをまもってくれたんだ・・・

？「早く封印を！」

な「封印って？」

？「心に念じて！それのできる！」

な「そんな～！無理だよ～！」

そしてまた怪物が飛び掛ってきました。わたしは目をつぶりました。
結斗君……

しかしいつまでも衝撃がないので目を開けるとそこにはわたしに背を向けた少し年上かな……仮面をした男の子が右手に蒼色の刀を持って左手で怪物をさえぎる盾を作っていました……

？「大丈夫か？」

な「あつ！はい大丈夫です……あなたは？」

？「通りすがりの魔導士さ。それより封印を頼めるかい？」

その人はわたしを落ち着かせるように言った。

な「はい！」

？「いい返事だ！ではいくぞ！」

そういうと男の子のもっている刀がより蒼く輝きはじめた・

な「綺麗・・・」

思わずわたしは言ってしまった・・・海や空よりも蒼くとても幻想的な光を放つ刀だったからなの・・・

？「飛天・・・蒼龍翔破」

男の子がそういう刀を振るうと刀から蒼い龍が飛び出てきて黒い怪物に巻きついて、その途端怪物は氷付けになっちゃったの

？「今だ！」

な「はい。リリカルマジカル忌まわしきジュエルシードシリアル？
??封印！」

怪「がああああああああああ」

怪物は吼えながら消滅した・・・

レイ「sealing complete! No XXI」

な「ありがとうございます。助けてくれて！」

?「いいさ。いったらただ通り過ぎただけだ」

男の人は素っ気無く言った。私を助けてくれたのにそんなことを言うのが可笑しくってついわらちゃった

な「あはは！あの名前は・・・」

?「ああ・・・銀ぎんとでも呼んでくれ・・・」

な「銀さんですかわたしなのはっついていいいます」

銀「ああよろしく。ところでさっさとここから立ち去ろうっ・・・周りを
見てみる」

そこには怪物に破壊された電柱や塀があった・・・

な「ふえっ！ごめんなさーい」

わたしたちは一目散にそこから離れたの・・・

鳴海公園・・・

銀「ここまで来ればいいだろ・・・それよりそろそろ目をさめたらど
うだい？フェレットさん？」

？「きづいていましたか。（当たり前だ。それよりきみか？なのはに魔法を教えたのは？）はい・・・」

銀「おまえ分かってているのか！一般人をしかもこんな子供を巻き込んで。下手すればなのは死んでたんだぞ！」

？「分かっています。なのはさんを巻き込んでしまったのも・・・」

銀「っ！ちっ！」

銀さんは舌打ちをして背を向ける。

よく分かんないけど銀さんは怒っているみたいだった。

私は彼のそんなところを見たくなくて、声をかける・・・

な「あの！」

銀「なんだ？」

な「また会えますか？」

銀「っ！君がそのフェレットと一緒にいればまた会えるよ・・・」

銀さんが驚いているようだった

な「そうですね・・・またです銀さん」

銀「またな・・・なのは」

そういつて銀さんは跳んでいってしまった・・・そのとき銀さんはなにか言ったようだったけど聞こえなかったの・・・

～なのはside end～

～結斗side～

ちくしょうあのフェレットもどきめ。なのはを巻き込みやがって。
なのははああみえて正義感が強いからこのことに首を突っ込むだろ
うしな。はあゝ・・・

漣「お疲れですね・・・結斗さま・・・」

結「漣・・・ああ・・・なのはのことだな」

漣「なのはさまですか。なるほど間違いなく関わってきますね」

焰「どつするのじゃ？結斗？」

結「あいつを守るさ・・・もう誰も失いたくないからな・・・」

焰・漣「結斗み・・・」

結「だから協力してくれよな焰美！瀨！」

焰・瀨「もちろん（じゃ／です）！」

白銀邸リビンゲ・・・

白銀邸についてさっき起こったことを麗にもはなした。協力を申し込むためだ。

麗「んじゃあなのはが魔法を身につけたのはあのフェレットせいってこと？」

結「ああ。うざいことにな・・・」

麗「確かに・・・一般人を巻き込むなんて・・・しかもロストロギア

探索に・・・どうゆう神経してんのかしら!」

結「まあ起きちまったことはしょうがない・・・だからなのはに怪我のしないように協力してくれるか?」

麗「ゆうの頼みは断らないよ絶対・・・(そうか、ありがとう)でも条件があるわ!」

結「条件?」

条件ってなんだろう?

麗「そ。今日デザート作ってくれるって約束したよ!なのにゆうってば寝ちやうんだから・・・」

忘れてた!

結「悪かったよ・・・」

麗「んじゃあデザート代わりに今日わたしと一緒に寝て!」

結「はっ？」

麗「だからいつしよに寝て！」

結「????分かったそれでいいなら……」

麗「んじゃ早速寝よう……」

寢室……

結「明かり消すよ」

麗「うん。ねえゆづっ…抱きついて寝てもいい？」

結「ん？別にいいけど…なんで？」

麗「…いつすると落ち着くの？」

結「そっか…おやすみ…麗」

麗「おやすみ…ゆづ」

翌日これが母さんにみつきり、いつか母さんとも一緒に寝ることになったのは別の話である

〜結斗side end〜

T A L E 9 に 続 く
・
・
・
・
・

TALE 9 白い魔導師 (後書き)

BAL「久しぶりに私一人のみで後書きをお送りしたいと思います！今回は割と短かったと思います。えっ？いつも短いつて？そんなこといわれてもいろいろあるんです。

進路とか、学校とか。

まあこれからもぼちぼち更新していこうと思いますので、どうぞよろしく！

それでは次話で！ではでは」

T A L E 1 0 覚悟(前書き)

投稿します・・・

感想もお願いします！

では本文へ・・・

T A L E 1 0 覚悟

結斗 s i d e

なのはが魔導士になってから一週間が経過した・・・なのは元々魔力が僕くらいあるのでなんとかジュエルシードを封印していつているみたいだ（主に力技で）・・・影から見ていると危なっかしいの何の。しかしあのフェレットもどきなのはばかり働かせてないか？今度喋る時一言、言わないとね・・・

さて今日は日曜日、土郎さんが監督する翠屋JFCのサッカーの観戦にきたよ～～～！

ん？僕？僕も観戦と応援だよ。だってサッカー苦手だもん・・・蹴るのはね・・・手は得意なんだけど・・・

本人は人から見たら恐ろしくうまいことにきづいていない。

な・ア・す・麗「がんばれ～！」

士「さあ・・・なんのことかなあ？」

士郎さんバレバレです。応援ガールで戦力向上・・・ルール違反じゃないのかなこれ？

麗達はたしかに美少女だ・・・顔立ちよく全員将来有望だ・・・

ピピーーーー

ん？どうしたんだろ？なんか集まってる・・・どうやら翠屋のほうのメンバーが怪我をしたらしい。士郎さん・・・はりきりさせすぎでしょ・・・！

士「ん？どうしたもんか・・・補欠はいないし、かといって中止というわけにも・・・」

代理がないみたいで困っている様子。

麗「士郎さん！」

麗が士郎さんに声をかける。

士「ん？なんだい？麗華ちゃん・・・」

麗「この試合必ず勝てる方法がひとつだけあります！」

そんな方法があるんだ！なんたるな？

士「なんだって！それはなんだい？」

麗「ゆうです！（はへ？）」

僕の名前がいきなりできて奇妙な答え方をしてしまった・・・

どこかで一人の女性がいまの結斗をみて「ゆうちゃん・・・かわいすぎいいいいいいいいいいいい」といつて倒れた・・・

ってそんなことじゃなくて！麗がいきなり言い出したことに、意義

を申し立てる。

結「意義あり！なんで僕なんだよ、麗！」

麗「なんでって・・・わたしが見たいから！
・・・サッカーしてるゆうを・・・」

結「そんな理由で出られるわけないだろ！」

何で今日の麗はこんなにご機嫌なんだよ！

士「いや、いけるかも・・・（士郎さん・・・？）よし結斗君でて
くれ」

結「いやいや。だめでしょ！僕初心者ですよ！まけちゃいますって
！」

士「大丈夫だ！（どこからそんな根拠が？）なんとなく・・・？」

結「なんとなくって・・・わかりました！出ますよ！出ればいいんでしょ！どうなっても知りませんよ！」

士「よかった、ありがとう結斗君！」

そして僕ははじめてサッカーの試合にでた・・・

な・ア・す・麗・美「ゆう（ちゃん／くーん）がんばって！」

麗「って・・・お母さん！？なんでいるの？」

突如として母さんが現れる。一体何してんの・・・

美「なんでってあなたたちのいるところに美緒さんはいつでもいるわよ！」 サムズアップ

麗「左様ですか・・・」

士「麗華ちゃん？この方が？」

麗「ゆつとわたしの母です・・・。なんかすみません・・・。」

士「いやいいよ。はじめましてなのは父高町士郎です」

美「ご丁寧にごうも。ゆつと麗の母、白銀美緒です」

士「この度どうしてここに？」

美「なに・・・愛息子になにかをするという直感がしましてついきてしました。あと愛娘の様子を見に・・・」

士「そ・・・そうですか・・・存分に息子さんを見てあげてください」

美「もちろんです！」

ほんとにうれしそうに母さんが言う。

麗「ほんとすみません・・・いつもこうなんです・・・」

士「いや、いいお母さんじゃないか。(そうなんですけど・・・)
ところで結斗君は本当にサッカー未経験者？」

麗「はい、でもみてれば分かりますよ」

士「……?????そうか……」

プューーーー

試合再開の笛が鳴る……

味方キーパー「とりあえずゴールは俺が守るからじゃんじゃんせめてくれ！」

結「分かった！」

すると早速僕にボールが来た！うお！みんなが群がってくる！こえええええ！とりあえず前にボールを持っていこう……

結斗 s i d e e n d

なのは s i d e

ア「なに・・・あれ・・・？」

わたしも一番の感想でその言葉が出てきました・・・
結斗君はどんどん敵の選手をひとりでかわしているの・・・ある時は
体を回転して、またある時は背中からボールをけって相手を越える
の。そしたらもう敵さんが誰もいなくなってゴールキーパーだけな
の・・・最後はキーパーを足裁きで攪乱してなんなくゴールしたの・・・

周り「・・・・・・・・・・」

結「あれっ？ゴールじゃないの？」

審判のひとも驚いて口が開きっぱなしだし・・・ただ麗華ちゃんだけは予想できていたみたいであまり驚いていなかったの・・・

士「どっ・・・どっゆっことだい？麗華ちゃん？結斗君は初心者だろう・・・」

麗「ええ、初心者ですよ。まぎれもなく・・・でも頭違うみたいですよ」

士「頭？」

お父さんとわたしたちに？がでる・・・

麗「ええ。ゆうがいうには・・・前WFCの試合を見たらしいです」

士「もしかして……」

美「ええ。ゆうは一度意識的に見たものを分析・構造を理解できてそれを実行できるみたいです。でも本人はあまり使いたくないらしいですけど……」

そんなすごい記憶力があるのなら、とても便利だと私は思うんだけど……

士「なぜだい？」

麗「なんかその人を真似てるみたいでいや、らしいです」

士「そうかい……」

そうだったんだ……

そして翠屋JFCは結斗君の活躍で勝利した・・・

なのはside end

結斗side

サッカーの試合が終了して現在は翠家にいる。ここで打ち上げというわけだ。僕は今麗たちと御茶をしている・・・

211

ア「にしてもすごかったわよ結斗！」

結「いきなりなに？」

ア「なについて・・・サッカーよ！あんた本当に初心者だったの？」

結「うん、そうだよ。」

ア「まったりあえずあんたのおかげで勝ったのよ。もっと喜びなさいって！……っともうこんな時間すずか！」

す「うん。わたしたちもうそろそろ帰るね」

アリサとすずかはなにやら用事があるようだ……

な「うん。バイバイ。っ！」

結「どうしたの？なのは。」

な「ううん。なんでもない……わたしも家に戻るねじゃあね結斗君、麗華ちゃん！」

結・麗「また（な／ね）！」

そして僕らも家に帰った・・・

白銀家リビング・・・

っ！これはジュエルシード街中で暴走か？

麗「ゆうー！」

結「ああ。僕は行く、麗はここで待機な！」

麗「分かったよ」

結「よしいくよ！瀨！」

瀨「standby ready? setup」

そして僕は蒼龍をもってジュエルシードの発地点に向かった……

鳴海市街中……

僕が街中に来てみたときには、街は気がつるが伸びていて埋め尽くしていた。そのせいでどこもめちゃくちゃだった。

これは・・・ひどい・・・

澁「魔力が一点から放出されています・・・きっと人がこれを・・・」

願いか・・・そして僕は魔力の集まっているところへ行く。そこにはすでに先にたどり着いたなのはがいた。

銀「なのは!」

な「銀さん・・・私が来たときにはもう・・・一体どうして!?!」

銀「人の願いから作り出されたものだ・・・」

僕は簡潔に言う・・・

な「わたしのせいなの・・・」

そこでなのはがポツリと呟く。僕はそれに疑問を持ち、尋ねる。

銀「？・・・どうゆうことだ？これは君のせいではないだろう・・・」

な「違うんです・・・ひつく・・・わたしが見逃したからまさかと思ってしまったから・・・」

なのはついに泣き出してしまった。

そうゆうことか・・・

焰「（結？どうゆうことじゃ？）」

結「（つまりなのははこれを発生させたジュエルシードを既に発見していた・・・だが見間違いだと思い結果このような結果になってしまった。とゆうくらいか・・・）」

静「（なるほど。ですが間違いは誰でもあります。今彼女がこれほど悲しがることはないのですか？）」

結「(そこなんだよ・・・<・・・?>なのは人一倍正義感が強いんだよ・・・不幸なことに・・・しかも困った人がほおっておけない、難儀なやつだ・・・)」

焰「(ではゆうがなんかいってやれ!)」

結「(元からそのつもりだよ。このままだとなのは心が折れちゃう)」

銀「なのは・・・」

あくまで平静に言う。なのはにこのことを真っ直ぐに見て欲しいから。今はこんなところにいる場合じゃないと・・・失敗したのなら次に生かす、という覚悟を決めて欲しい。そう願いをこめて・・・

な「ふえ？銀さん？」

銀「今お前がここですることは泣くことか？（そんな言い方！）動物は黙ってる！答える・・・」

フレットもどきがなのはをかばうために僕に言い放つが、今のそれはなのはの傷を大きくするだけだ。だから僕は黙らせた。

な「今すること・・・！」

なのはの顔が変わる。分かったみたいだな。

銀「分かったか・・・」

な「はい！レイジングハート！」

レイ「OK! my master! wide er ea ser
ch! find it!」

な「うん！」

レイジングハートが長距離砲撃モードになる・・・

ユウ（そんな！？ぼくでもできない長距離砲撃する気？）なのは！
<黙ってみてる！>でも！<あいつが決めたことなんだ邪魔はさせ
ねえ・・・>」

僕は少々殺気を当てた・・・するとユウノは黙った・・・ふんっ口
ばかりが・・・なのはを見習え！

な「いくよ！ダイバイン・・・バスター！」

レイジングハートからの桜色の魔力光が木が集まっているところに
当たり封印が完了する・・・はあく見事なものだな。だがまだ麗の
ほづが上か・・・

レイ「sealing」

ジュエルシールドがレイジングハートにはいる・・・

レイ「シリアル No. XIV complete!」

僕はそれを見届け、立ち去ろうとする・・・

な「あの！ありがとうございます！」

銀「なんのことだ？俺はただ君に今やるべきこと悟らせてただけだ」

僕はぶっきらぼうに言う。

な「それでも。銀さんがいなかったらわたしは自分が許せなかった・・・」

銀「・・・自分を責めるのは簡単だ・・・だがなその現実から目を背けるな。今後悔しようとして過去は変わらん。それなら今後のために自分のすべきことを考える。次に生かそうという覚悟を決める・・・じゃあな・・・」

そして僕は白銀家に帰ってきた・・・

結「ただいま」

麗「お帰り……どうだった？」

結「なんかあったよ（ゆうがフラグたておった！）焰美？」

麗「ほほ……それはどうゆうことかな？ゆうくん」

こわい！麗が！

結「えつとかくかくしかじかで……」

麗「……確実にフラグ立てる一歩前よそれ！」

結「フラグって何？（ゆうは知らなくていいこと！）そう・・・」

なんかわからないけど何とか怒り？は収まったみたい・・・麗どうしたのかな？

な「ぎんさくん・・・また会いたいな・・・」

T A L E 1 1 に 続 く ・ ・ ・ ・ ・

TALE 11 金と白と紅蓮 (前書き)

PV100000突破!

ありがとうございます。

とてもうれしいです。

これからも結斗君や麗華ちゃんの活躍見てください！
それじゃあ今回もいってみよ〜

T A L E 1 1 金と白と紅蓮

結斗 s i d e

勢いよく周りが移り変わっていく。バスの窓からみる外の森林が放つその光は、緑が溢れ僕の

冷静にさせてくれる。緑は人をおとなくさせる色だ。

だが僕は戸惑っていた。今現在僕はバスに乗車をしている。これからすずかの家へと向かっている最中なのさ。

つとどうして僕は穏かじゃなかった？

それはね~~~~

僕の座っている場所！・・・察しのいい方はまああれだろと考えた
だろう。

僕の右手つまり窓側・・・黒のワンピースで胸に白のリボンが添えられたいわゆるゴスロリの服を纏った

麗華が僕の右腕を抱きながら嬉しそうにしている。

左手通路側・・・こちらもワンピース。だが麗華みたいな自身を誇張するような色ではない大人しめな

薄い黄色の服を着たなのは姿がある。もちろんなのは僕の左腕をホールドだ。

二人はかわいらしい服を着て僕に擦り寄っている。これが原因なの

かさつきから後ろから

ものすごいさつきが背中へと突き刺さる。

この殺気は恭也さんかな？いや！というより彼しか考えられないね。だつてシスコンだし。

そんなことを思いながらゆらゆらとバスに揺られていたのであった。

麗「ゆうどうしたの？」

結「ん・・・なんでもない・・・」

そしてバスで揺られること五分・・・四人の内二人上機嫌、一人不機嫌、もうひとり意気消沈とゆう構図が出来上がったのはいうまでもない・・・

月村家・・・

ピンポーン・・・ガチャ

大きな扉が開き、なかからでてきたのはメイドさんだった・・・
メイドってほんとにいるんだ・・・

ノ「お待ちしておりました・・・恭也様、なのは様、」

恭「ああ、お呼ばれたよ・・・」

な「こんにちは。ノエルさん！」

なのはは元気に挨拶する。

結「あの「ちらのひとは？」

な「この人はノエルさん。月村家のメイドさんだよ」

ノ「はじめまして、月村家メイドをさせていただいていますノエルです。以後お見知りおきを……」

ノエルさんはそう言って、メイド服の端を持ち頭を下げる。
僕と麗はそれに習い……

結「はじめまして。白銀結斗です……」

まるでダンスパーティーのダンスに誘うように、返す。

麗「はじめまして。白銀麗華です……」

僕はうやうやしくお辞儀して、麗はスカートのすそを少し持ち上げる

ノ「まあこれはご丁寧にありがとうございます。なにかあれば何なりとお申し付けください……それではすずかお嬢様とアリサ様のところへはファリンが案内します……」

ファ「それではご案内します……」

す「なのはちゃん！結斗君！麗華ちゃん！」

結「こんにちは。すずか、アリサ。」

麗「すごいわね。この猫天国……」

な「相変わらずなの」

すずかのいる部屋はあちらにもこちらにも猫がいた。
なかなか壮観だった……。なのはの肩の上にいる、フェレットもど
きは……。逃げ回っていた……。行け！そこだ！

結「あれ？そういえば恭也さんは？」

な「きつとすずかちゃんのお姉さん、忍さんのところだよ」

す「お姉ちゃん恭也さんと恋人さんだから・・・」

結「なるほど・・・」

恭也さんも隅に置けないな・・・

ア「そういえばゆうは好きな女子いないの？」

唐突にアリサが聞いてきた。周りが静かになる・・・

結「は？なんで？」

意図がつかめず、聞く。

なんかいつのまにかみんな目が真剣に・・・麗なんかわたしよわた
しよわたしよわたしよ・・・とかいつてるしなんだろう？

結「今はそうゆうのはいないよ。ほかにやりたいことがあるから」

な「やりたいこと？」

結「うん・・・守りたいんだ、ある人たちを・・・」

ガタンっ・・・

四人「だれ（なの）？」

・・・はあ・・・わかってないのね・・・

結「なにいつてんだよ？なのは、麗たちのことだよ」

四人「・・・へ？」

結「だからなのはたちのことだって・・・」

四人「・・・／／／／」

それから僕らのティータイムは経過して言った・・・
でも四人は終始顔が赤かった・・・どうしたんだろう？

焰・瀨「（ゆうのせいなのじゃ・・・）（ゆうさまのせいですね・・・）
」

そしてしばらくしてジュエルシードの反応があった・・・

麗（ゆう！）

結（ああ・・・）

するとフェレットが林のほうへ消えていった。なのははそれを追いかけていった・・・

結「なのは！僕たちがなのはを追いかけるよ、いくよ麗！」

麗「うん！」

ア・す「ちよつと！？」

僕たちは林のほうへ急いだ・・・

林の中……

僕らが来たときにはなのはともうひとりの黒い魔法少女が戦っていた。あれは……

麗「ねえゆう？あれは？」

結「さあ？同業者だな……速いな……」

その少女の速さは半端なかった……僕ならついていけないけど麗では少し難しいかも……

麗「何とか追いつけるけど速いね……」

なのははその速さについていけず、少女の使う鎌に吹き飛ばされ、木にたたきつけられそうになっていた。そのため僕は夜駆けでなのはを受け止める……

銀「おっと……」

急に俺が入ってきたことでなのはを倒した金髪の女の子が警戒をする。

？「!?!?あなたは？」

銀「ああ気にしなくていい。べつにその宝石を盗ろうとしていないから……」

なるべく警戒させないように言う。しかし俺は他の事が気になっていた。

？「そうですね。では……」

少女は立ち去ろうとする。

銀「なあひとついいか？」

？「何ですか？」

銀「きみはどうしてそんな寂しそうな目をしているんだ？」

？「っ！？なんのことだがわかりませんが……」

銀「そうか……」

？「あなたの名前は……？わたしはフェイト・テストロッサ」

銀「今は……銀と名乗っている……」

フ「そう。では銀……さようなら……」

そうしてフェイトは飛んでいった・・・
僕は麗にフェイトのことを伝え、なのはの所へ行った。

な「ん・・・」

結「気がついたか？」

な「ふえ？結斗君？」

結「うん。一体何があったの？なのは倒れてたんだよ・・・」

な「・・・なにも。ユーノ君が何か見つけて、追いかけてたらいつの間にかこの状態・・・って結斗君この状態！」

結「ん？お姫様抱っこだよ。我慢してね。すずか達のところまでだから」

な「・・・そんな我慢なんて・・・／／／」

結「なんか言った？」

な「ううん！何も」

結「そう・・・」

再びすずかの部屋・・・

麗・ア・す「・・・・・・・・・・」

結「みんな一体どうして黙ってるの・・・？」

麗「ゆうがなのはをお姫様抱っこなんてするから！」

結「あれはなのはが気絶してたから・・・」

ア「じゃわたしたちにもしなさい！」

麗・す「それだ！」

結「????そんなのでいいの？」

それから僕はアリサたちを抱っこした。

するとアリサたちはさっきとは違って機嫌がとても良くなった・・・
・なんでだろう？

な「うっうっうっ~~~~」

なのははしきりに唸っていた・・・

三日後・・・

その日の夜膨大な魔力を街中で感じた・・・

麗「またきたよ！でも今回はなんか違う・・・？」

結「ああ。なんか今回は二人で行かないとやばい気がする・・・いい
くよ麗！」

麗「うん！」

そのときデバイスが破損したせいなのか二人が封印していたジュエルシールドがそれぞれのデバイスから二つ出てきてしまった。
ドクンッ、ドクンッ
三つのジュエルシールドは不気味に脈動している・・・

銀「まずい！」

僕はセツトアップしていた焰美の紅龍を構え突っ込んだ・・・
後ろで麗が呼んだ気がしたが、気にしてられない・・・

焰「どうするのじゃ！？ゆづ」

銀「あれを止める！一個のジュエルシールドが起こす次元震でも危険なのに、五つも合わさって起こさねどもしたら地球が滅ぶ！」

焰「いけるのか？」

焰美が心配そうに聞いてくる。

銀「なんとかするんだ！」

焰「了解した！」

銀「いくぞ！焰美！」

焰「うむ！ゆう！」

銀「白銀流奥義……」

銀「飛天……紅龍翔破！」

僕の両手にある紅龍から赤い大きな衝撃波がジュエルシードを包み込んだ……しかし

銀「なに！（なんじゃと！）」

いまだジュエルシードは健在で不気味な脈動をそれぞれしていた

しかも脈動が早まってきている・・・共鳴しているのか？
あんな魔力の塊が共鳴なんかしたら、海鳴市どころか地球が吹っ
飛ぶのが本当になるぞ・・・

銀「ちっ今のがだめなら・・・あれしかないな・・・」

焰「まさかあれか！だめじゃあれは！今さっき奥義出したばかりで
はないか！あれは魔力を使いすぎる下手すると死ぬかもしれん！」

瀨「そうですね！あれはまだゆう様がご自分で制御できていないと
いつていたじゃないですか！」

焰美と瀨が咎める。

銀「でもっ！あれは！災厄この地球が巻き込まれて消滅する！もう
誰も失いたくないんだ！」

絶対に守るんだ！みんなを・・・

焰・瀨「ゆう（様）・・・」

焰・瀨「わかったのじゃ／わかりました」

銀「ありがとうふたりとも・・・（だけど絶対死ぬんじゃないぞ）
ああ！まだ麗やなのはたちを守りきれないからね！」

僕はそういつて二機を愛機焰美と瀨をかまえる・・・

銀「ツインセットアップ！」

焰・瀨「Twin set up? start up!」

光が僕を包む・・・

そしてそこには紅と蒼の双翼を背中に持ち、右手には紅龍、左手には蒼龍、黒いバリアジャケットに白色の長い髪に、双眸が紅と蒼才ツドアイの僕が立っていた・・・
ツインセットアップは僕たちが出来る最大技だ。二人を同時に起動すると火力は一つの状態の五倍は超える・・・

銀「いくよ！双刀焰氷秘奥義……」

紅龍には紅色の炎が蒼龍には冷気が作られる

僕は二振りの刀を上段に構え……

結「双龍蒼紅覇！」

振り下ろした……紅い龍と氷の龍が互いを巻き込みながらジュエルシードへ殺到する。

結「まだまだ！」

僕は双翼で空へ上がり、紅龍、蒼龍をツインガンに変化させる。片方は真つ赤な銃身、もう片方は真つ青な銃身をしている。トリガーを五つのジュエルに向けて呪文を唱える。

結・焰・瀨「集え。天空の力よ。灼熱の炎は煉獄の炎と為し、零度の氷は、解けぬ呪縛となせ」

僕の前に赤い魔方陣と蒼い魔方陣が浮かび上がる。どちらも大きく一つ10メートルは越えている。

結・焰・瀨「ブライトネス……ブレイカー……！」

僕は銃に集束していた紅と蒼色の魔力を放ち、ジュエルシールドへ直撃させた。

……僕が現在知っているなかでも最大の魔力のものだ……

シューウウウ

ジュエルシールドはだんだん脈動が収まっていった……よかった守れた。麗、なのは、フェイト……みんな。

パンツ

バリアジャケットが碎ける。

すると急に眠気が来て僕は空中から真つ逆さまに落ちていった……僕を抱きとめたのは黒い長い髪をした麗だった……そして僕は意識を失った……

結斗 side end

麗 side

麗「ゆう!」

ゆうが五つのジュエルシールドへ近づいて焰美で白銀流奥義をはなつた・・・

白銀流奥義とは、そのなのおりゆうが考え編み出した奥儀だ
ただどれも魔力消費が激しくわたしはまだ使うことが出来ない・・・

紅い魔力が晴れる・・・

麗「そんな!？」

いまだジュエルシードは健在だった。ゆうの奥義でもだめなんて・
・私はゆうが次何するのか気になって、ゆうのほうへ向く

ゆうが焰美と澗を同時にセットアップして二振りの紅龍と蒼龍をか
まえ背中には神々しいまでの紅と蒼の翼が生えていた・・いけな
い!

麗「だめっ!ゆう、それは!」

いやな予感がして駆け寄ろうとするが魔力に吹き飛ばされる
そしてゆうは秘奥義と双銃による集束砲を放った・・

ドガアアアアアアアアアアアアアアアあああああああつああん
んんんんん。

・・・煙の後には空中を飛んでいるゆうのすがたがあった。よか

った……しかし背中綺麗な双翼が徐々に消えていき……

パリン……

バリアジャケットが碎けて落ちてゆくゆう……

麗「ゆう!」

わたしはゆうを抱きしめて気づいた、冷たい!いけないこのままじゃ!

な「あの。ひっ!」

なのは何か話しかけてきた……なのは達からは見えないようにゆうを抱き寄せる。初めに殺気だす。なのはとフェイトはおびえたようだった。当然だ。だってゆうをこんなじょうたいにしたんだから。

麗「なに？」

な「あなたは？」

麗「わたしは白^{はく}

。ゆ・・・銀と一緒にいるものよ」

な「あの！ありがとうございます」

ユ「ジュエルシードを渡してください！」

フレットの物言いにわたしは切れてしまった

白「あなた何様のつもり？こんな街中ドンパチして。しかもジュエルシードのすぐ傍で。挙句に暴走・・・そして銀をこんな目に合わせといて、宝石はわたせですって？そんなこといってるとつづすわよ・・・わたし今銀をこんなにされて頭にきているから・・・」

魔力を放出・・・自分の内にある魔力を当てて立ち去ろうとする

白「ジュエルシードはもらっていくわ。それとなのはにフエイト・」

な・フ「はい？」

白「事情は知らないけど二人とも無茶しないで。あなたたちが無茶をすると助ける銀も無茶をする・・・わたしもつ銀が傷つくところはみたくないの・・・」

・ 返答を聞かずわたしは五つのジュエルシードをもって家に帰った・

麗「おかあさん！っひぐ・・・」

美「麗どうしたの〜？っ！？」

ゆうの青白い肌を見てお母さんは絶句したようだった。

美「ゆうっ！どうしたの。。。いけない！麗華、ゆうをわたしの部屋まで運んでいって！早くしないと大変なことになる」

麗「うん！」

絶対に死なせないんだから！

麗 s i d e e n d

結斗 s i d e

結「うつ。ここは？」

僕はゆっくり目を開ける。この匂い母さんの部屋か・・・
がちゅっ（ゆう！）麗が僕のところへ来て抱きついてくる

麗「痛いところない？」

麗が涙目で聞いてくる。とても心配かけたようだ。

結「大丈夫だよ・・・もう」

なんとか異常がないことを・・・しかし

麗「そんなわけない！ゆう死にかけたんだよ！
すこしは自分のことも考えてよ！」

結「ごめんな麗・・・でもやりたかったんだ。
助けたかった・・・なのはとフェイトを」

澁「麗華様。無駄ですよ・・・結斗様のこれは仕方がないです」

麗「……………」

ぎゅっ……………(れい?)

麗は無言のまま僕を抱きしめた

麗「もう少しこのままでいて……………ゆづが死んじゃうみたいで怖かった……………目の前が真っ暗になってどうすればいいかわからなくなってたの……………だから……………」

僕は麗を抱きしめる。

結「麗……………うんもう少しこのままね(ゆづちゃ……………ん……………!!)……………!!(ぐえっ!)(ゆづ!?!/結様!?!)(……………」

結「母さん……………?)(お母さん!)(……………」

僕はお母さんの好き好きタックルをくらった。

美「ゆづなんでもない?痛いところない?)(……………」

美「……人の……人のリンカーコアを使って最強のデバ
イスをつくることよ。焰美たちのプロトタイプってところかしら。
ちなみに焰美のはファイアドラゴンの漣のはアイスドラゴン、鏡月
はホワイトドラゴンのリンカーコアを使ってるわ。人のリンカーコ
アを使うなんて無理だった。私達には……」

結・麗「そんなんっ！？リンカーコアを使うって……」

美「そうすることによって魔力の低い魔導士を強い魔導士にしよう
としたの……でも当然リンカーコアを無理やり抜かれた人は死ぬ
」

結・麗「……」

美「そんな命令がわたしたちは信じられなかった……命をないが
しろにする管理局の意向が……だからわたしたちはグループを
抜けたの。そこでゆうと出会ったわ。今思えば京二もおかしい死に
方だった……仮にもあの人は元管理局の人、そんな人が交通事故
なんか遭うわけがないの……」

だからわたしは調べたそして分かった……京二はわたしに黙って

管理局の裏を調べていた。真つ黒なところを・・・管理局上層部を・
・そしてあの人は口封じで殺されたの・・・事故に見せかけて」

結「そんなことって・・・母さんそのことを・・・」

美「言っても無駄よ。そんなことをしても上層部にもみ消されるわ。
そして今度はわたしはもちろんゆう、麗も殺されてしまうわ・・・」

美「話がそれたわね・・・そのグループで作ったのがジュエルシー
ドよ。ただ私達は処分してしっかりとどこかの惑星の地中深くに埋
めたはずなんだけど・・・」

結「でも現に発見されているし・・・こんな事態になってるし。ま
あそれはなんとかなるよ。それよりもごめんなさい母さん・・・」

美「なぜ謝るの?」

結「つらいことを・・・(いいのよ・・・) 母さん」

そういつて母さんは僕と麗を抱きしめた・
母さんから伝わってくる温もり。

美「いまはあなたたちがいるもの・・・ゆつと麗がいればわたしは
ほかに何も望まないわ」

背中に手を回された。しかしその手はまるで怯える子供の手のよう
に震えている。

僕と麗はどちらかともなく母さんの頭を撫でる。一瞬びくつとした
が気にしない。

麗「お母さん・・・」

結「母さん・・・僕たちはいつまでも一緒だよ・・・」

美「っ・・・！ありがとう・・・ゆつ、麗」

僕と麗の言葉は母さんの強がりを粉碎した。どんどん瞳から溢れて
くるもの。

それは夫をなくされた恨みの涙なのか。それとも何も知らず、気づ
かなかった自分への怒りの涙なのか
母さん以外にはわからない涙を流していった。

ただ僕と麗は・・・母さんにはいつものように笑っていてほしいな
心の中で願ったのだった。

それから僕と麗を抱きしめていた母さんを慰めていた・・・

結斗 s i d e e n d

T A L E 1 2 に 続 く . . .

TALE 11 金と白と紅蓮 (後書き)

BAL「PV10000突破だ〜！」

結「おめでとう。苦労した甲斐があったね・・・」

BAL「うん。とってもうれしいよ毎日ネタとかを考えたかいがあった」

結「これからの内容はできているの？」

BAL「まあ、うっすらとは。でも今ね〜迷ってるんだ〜」

結「へ〜何に？」

BAL「A・sをね〜結斗君。君をどちら側につかせるかだよ。なのはたちの側かはやてたちの側か。う〜ん迷う・・・」

結「・・・まあほどほどにね・・・」

BAL「ちなみにどちらも甘々な予定・・・あれとか、あれとか・・・クフフ」

結「BALさんが違う世界に入ってしまったので今日はここまで！バイバイ」

BAL「クフフ・・・」

T A L E 1 2 乱入者（前書き）

すみません。投稿が遅れました。

今回は割と長めです。

感想とか、意見とかお待ちしています

書いていただくとうれしいです。

とりあえず本文どうぞ・・・

TALE 12 乱入者

結斗 side

母さんの告白から数分後・・・
今は僕達はリビングにいて机越しに対面している。

美「それでゆうはこれからどうするの？」

母さんが聞いてくる。

麗「・・・・・・・・」

麗が僕を睨みつける。こ・・・怖い・・・
僕を心配してくれてこんなことになっているんだと思うけど、僕は・・・

結「なのはとフェイトを助けるよ」

麗「ゆう！」

ガタンッ

麗が椅子から飛び上がり、イスが倒れる・・・

結「止めないで・・・麗・・・僕はあんな思いはしたくないんだ
僕にあの子達を助ける力があるなら・・・助けていんだ
それにそれが友達ならなおさらだよ」

麗が安心できるような声で僕は言う。

麗「……ゆう……でもわたしは！……もう……ゆうが傷つくところ見たくないよ！ほんとに心配だったの……どうしていいかわからなくて……グスツ」

麗がまた泣き出してしまった……

結「麗……」

美「は……無駄よ、麗。ゆうは決めたことは必ずやるから、守ることはゆうにとっては大事なことなのよ、そうでしょ、ゆう？」

結「うん……だから……」

麗「……分かったでもゆう、無茶はしないで……いつでもいいからわたしを連れて行って……わたしがゆうを守る」

麗が涙を拭きながら、決意してくれる。

でも……麗も僕の守る対象なんだから、絶対に守るよ……

結「……ありがとう、麗華……」

僕の決意が麗華に悟られないように僕は答えた。

麗「……………／＼／＼／＼よ」

美「あらあら〜……………」

母さんがニヤニヤしてる……………

麗「なに？お母さん？」

美「ん〜？別に〜仲いいなと思っただけよ……………」

(ニヤニヤ)……………

麗「／＼／＼」

結「……………？」

焰・静「(はあ〜〜〜)」「(」

どこからか二機のデバイスらがため息をついたそうな・・・

結「ところで僕はいつからダウンしてた？」
ふと疑問に思ったことを聞く。

美「んっ？一週間前からよ・・・」

結「い・・・一週間？学校は？」

麗「もちろんお休みしたよ・・・なのはたちがお見舞いにくるって
言ってる聞かなかったけどなんとかしたよ」

結「そっか。（んでゆう？）なに？麗？」

麗「あのフェレットなんなのっ？」

美「どうかしたの？」

麗「うんお母さん！実はかくかくしかじかで・・・」

数分後・・・

美「なっ・・・ななななななななんっなんですって！わたしたちのゆうよりもジュエルをですって・・・h u h u h u・・・」

麗「ねっ！許さないでしょ！なのはを勝手に巻き込んだことにも許せないのに、あまつさえジュエルの暴走を止めたゆうよりもジュエル捕獲よ！・・・おもわず殺気当てちゃったよ」

麗・・・笑顔でそんなこと言わないで。怖すぎる・・・

美「麗ナイスよ！わたしたちのゆうを傷つけるだけでも万死に値するわ！フッフ・・・今度あった時にはその子とオハナシしないと」

結「ひい。(じわずぎるのじわじわです)」

なのはの家……………

ユー「ブルツ」

な「どうしたの？ユーノ君？」

ユー「いや…………今すごい寒気がして…………」

な「大丈夫？風邪かな？」

キイイイイイツイイイイイイイイイイイイン…………

結「麗！」

麗「来たようね…………これは海のほうね」

結「よしいくよー!」

美「あ!待って、二人とも!」

麗「なに?」

美「確保したジュエルシードは私が預かるわ、その方があんしんでしょー」

結「ありがと、母さん!んじゃ行って来ます!」

麗「ま〜〜す」

美「はい、怪我せずに帰ってきてねー!」

僕らは反応のあった場所に急ぐ。

||||||||||||||||||||||||||||||||

鳴海公園・・・

なのはside

今日は海鳴公園です。あの街中の騒動以来銀さんと白さんは出てこ

なくて心配です・・・

後銀さんには助けてくれたお礼が言いたいな・・・//

ユ「なのは！」

な「うにやつ!?!」

危なかった今戦いの最中って言うことを忘れていたの・・・

な「あつ！」

また黒色のバリアジャケットの女の子フェイトちゃんが来たの！

フ「また・・・」

フェイトちゃんは私のほうを向いて、静かに言います。

アル「か〜！生意気に結界張ってんのかいこのでかい木は！」

生意気ってアルフさん・・・

な「ユーノ君、この場合どうすればいいの?」

私はユーノ君に効率よく封印する方法を聞きます。

ユー「バリアを抜くには防御を上回るくらいの攻撃を与えればいいんだ!」

ええと・・・よくわかんないよ～～!

な「えつと～～つまり・・・?」

ユー「つまりなのは砲撃を与えればいいんだよ!」

な「なるほど!レイジングハート!」

レイ「all right! my master! divine
buster set!」

フ「こつちも。バルディッシュ!」

そして煙がはれたそこにはひとつのジュエルシードがあった。わたしたちはお互いに地上へ降りあった・・・

スタツ

お互いに黙って地上に降りる。理由は話をするため・・・

な「わたしたちが見境なく戦うところの前みたいになっちゃっから」

フ「うん・・・でも譲れない」

な「わたしはお話が見たいだけなんだけど・・・」

そしてわたしたちはまた空中へ上がった・・・

フ「じゃあいくよ!」

な「うん!」

そしてわたしたちがデバイスを構えたとき・・・

？「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

空気読めない子がわたしとフェイトちゃんの攻撃を止めていたの・・・
いくらなんでも空気読めなさすぎなの・・・

なのはside end

結斗side

え〜と現在僕たちはなのはとフェイトの戦闘を見ている結斗です。
おっ・・・地上で話し合っているな。今度は・・・また空中へ
どうやら決闘をするらしい・・・

白「決闘するみたいね・・・」

銀「らしいな・・・」

そして決闘が開始された直後・・・

?「ストップだ!ここでの戦闘は危険すぎる!」

銀・白・焰・漣「うわあ〜・・・」「」「」

僕らは今シンクロした・・・

あれは……。ないね。KYにもほどがあるよ！

麗「ちょっと！フェイトが動き出したよ！」

どうやら先のジュエルシードを手に入れるためらしい……。あの黒いのが現れてからフェイトは焦りはじめたようだ。そしてフェイトはジュエルシードに手を伸ばす……

？「……………」

しかしそこであのKYが無防備なフェイトを無表情でスフィアを撃とうとしている！

銀「たくっ！」

僕は夜駆けでフェイトの下に行き、フェイトを抱える……

今回は魔力を足にかけているため、通常の夜駆けよりも速い。
僕は何とかフェイトにスフィアが当たる前に、行くことができた。

アル「フェイトっ？」

銀「大丈夫か？」

フ「あっ／＼はい！」

僕はスフィアを右手の蒼龍で切り、フェイトを左手で支えた

アル「フェイト！よかった！あんたはっ！」

アルフが警戒をしてくる・・・

銀「そんなことしてる場合じゃないだろ・・・捕まるわけにはいかないんだろ・・・」

フ「はい・・・」

銀「じゃあさっさといけ！ここは俺が何とかする！」

フ「でも！」

銀「いいから！」

フ「っうん！ありがとう、銀！」

アル「あんた……ありがとうよ……」

そしてフェイトたちは転送して逃げていった……
よしこれでフェイトが捕まることはなくなった。
さてと……

？「おい！いったい何をしたのかわかっているのか？」

さっきの黒いのが僕に命令するかのよう聞いてくる。

銀「あん？なんですか？」

思わず僕はとげのある言い方で聞き返す。だって命令ですよ！しかも問答無用の攻撃・・・怒りたくもなるでしょう！

？「だから・・・どうして次元犯罪者を逃がした！これは時空管理局の公務執行妨害だぞ！」

再び聞いてくる黒いの。

銀「はくく？何言ってるんですか？あなたは？」

今は・・・聞き逃せないな

銀「俺はただ女の子を助けただけだ。第一管理局なんて知らないな・・・」

？「なつ・・・なにをいつている？管理世界、管理外世界で管理局を知らないなんてはずがないだろう！」

こいつ馬鹿だ・・・
そこで待機していた麗が来た・・・

麗「ねえ銀？馬鹿、がいるわ・・・」

銀「ああ。管理局って言うのはこいつみたいにみんな馬鹿、なのかな？」

？「公務執行妨害の次は名誉毀損かい度胸だな・・・」

白「はあく・・・あなたね今墓穴掘ったわよ・・・（何？）

あなたの言った通りここは管理外世界。ならばどうしてその管理外世界であなたたち管理局とやらの命令を聞かなければならぬのかしら？

それに銀はいきなり魔法を打ったあなたの攻撃からあの子を守っただけよ・・・

あなたこそ傷害でこちらが訴えられるわよ」

そのとおり・・・

な「なるほど！」

なのは気がつかなかったのか・・・

？「うつうるさい！とりあえず公務執行妨害だ！」

うわっガキだ・・・

銀「何だそれ？」

白「信じられない」

な「ありえないの・・・」

？「喰らえ！」

そして管理局のやつはスフィアを打ってきた。

ブチッ・・・

銀「いいだろう。そっちがその気ならこっちも正当防衛だ。
白はなれてる・・・」

僕達にスフィアが向かってくる。

白「うん。手加減してあげやーよ！」

銀「んゝ・・・無理かもちよつとあいつの言動がうざすぎて」

？「なにをいつている！ステインガーブレイド！」

剣の形をしたスフィアが飛んでくる（お前は・・・）

キンツ・・・

俺はそれを見ずに刀で砕いた・・・

銀「さっき言っちゃいけないことを言った。」

？「なにをだ・・・」

銀「何も知らないやつが、まして今来た新参者があいつの・・・フ
エイトの何を知っているって言うんだ！それなのに・・・犯罪者だ

と？はつきり言ってる俺は今とても頭にきている……」

？「何を言っている！これでも食らえ！」

また十個のスフィアを打ってくる黒いのしかし……

ダダダダダダダダダ

辺りに銃声がしてスフィアが消えた。いや消滅した……

？「なにっ!？」

銀「この程度か……」

な「ほえ〜。一体どうなっているの!？」

ユ「分からない……魔法を使った痕跡はなかった……」

な「えっ!？魔法使っていないの？」

白「ええ、使っていないわ。純粹に打っただけよハンドガンでね」

ユ「打ったって？まさか!でも見えなかった……」

白「銀のクイックドロウやっぱりすごいわね」

な「クイックドロウって？」

白「そのまんま。あの黒いののスフィアを銃で打ち落とすだけ。ただわたしたちには速すぎて見えないけど」

僕は先の黒いのが作った同じ数10個くらいスフィアをつくる

結「いけ・・・」

発射する・・・

?「ちっ・・・」

KYな奴はシールド防ぐが・・・

ガキンッ・・・

? 「なに！」

僕のスフィアはシールドを簡単に貫通する・・・

銀「無駄だ。お前程度では防げない・・・」

? 「くそ！」

ほゝスフィアで相殺したか・・・まあいいだろ

銀「じゃあ次だ・・・」

僕は刀を鞘に納める・・・

銀「白銀流抜刀術・・・飛燕・・・」

僕は人の動体視力では見えないほどの速さで抜刀して蒼色の衝撃波を出した・・・

？「速い！」

それもKYは避けた・・・

銀「これもか。しかし何で攻撃してこない？・・・あつ！悪い攻撃できないのか」

？「うるさい！ステインガープレイドエクスキュージョンシフト！」

広範囲砲撃か・・・いいのか仮にも組織の一員じゃないのかよ

まああの程度ラグなしで押し返せるが・・・

銀「瀨！」

瀨「了解しました！銀様！フリジット・コフィン……」

？「喰らえ！」

100程の剣の形をしたスフィアが来る

銀「甘い！シュート……」

するとKYのスフィアが凍らされて碎け散る……
そのままKYへと直撃をして……

？「なんだと！？ぐあ……」

ピキーン

KYは氷付けになった……

フリジット・コフィン

大気の水分凍らせながら目標へと進む

当然空中のものは凍りつき、砲撃、スフィア何でも凍らせる
ちなみにこの魔法は白銀家の魔法書の中にあつたもの。

銀「はい！KYの氷付け完成！」

な「すごいの！」

ユ「（なんて氷結魔法だ、あれ程の量のスフィアを一瞬で凍らせるなんて・・・！）」

白「お疲れ」

銀「ん〜。てかこいつ弱すぎ・・・」

白「それは銀が強すぎるからだと思っけど・・・」

銀「そんなことないさ・・・」

な「銀さん！あの魔法は何ですか！」

銀「ああ、あれはフリジット・コフィン・・・氷結の魔法さ、という
よる僕の手じゃなくて瀨の手なんだがな・・・」

な「そうなんですか。あのひとはずっとそのまま？」

KYを指差す

銀「そんなことないさ。1〜2時間そのままだけだ」

？「ちょっといいかしら？」

いきなり空中に画面が現れ、女性が写る。何だこの人？

銀「あんたは？」

？「わたしは時空管理局リンディ・ハラウンでその氷付けにさ
れているクロノの母親です」

銀「ほ？それは。で、なんのようですか？僕は正当防衛したまでで
す。」

り」そのようですね。みてましたからモニターを・・・
こちらから攻撃したのは謝ります。ですが話を聞かせてください」

どづゆづつもりだ？

白「(どづするの？ゆづ？)」

銀「(んゝ誘いに乗ってみよう。なにか情報が得られるかも)」

白「(OK！)」

銀「いいだろう。話をしてやる。なのは、お前はどづする？」

な「いきます！」

そして僕らはアースラへと転送した・・・

結斗 side end

なのは s i d e

今わたしたちは時空管理局という組織の船の中にいます。ユーノ君が言うにはこの船は多次元の世界を渡る船？らしいです。

？「ようこそ時空管理局時元潜行艦アースラへ・・・」

白「あなたは？」

？「わたしはアースラのオペレーターエイミー・リミエッタです。あなたたちを艦長の元へと案内します。その前にバリアジャケットの解除をしてください。」

な「はい。レイジングハート！」

レイ「OK！ jacket off。」

そしてわたしはバリアジャケットを解除した

エ「あなたも変身魔法といってもいいんじゃないかな？」

ユー「そういえばそうですね・・・」

白「変態・・・淫獣・・・」

銀「最低だな・・・」

ユ「ぐはっ！」

ユ「君が奇声を上げて倒れたの。自業自得なの

エ「ところであなたたちもバリアジャケットを解除してください」

銀・白「断る／いやです」

白「わたしたちは一度あなたたちから攻撃を受けているのにそう簡単にあなたたちを信用することは出来ないわ。第一わたしたちはあなたたちの艦長に呼ばれただけ。別に命令される義理はないわ（わたしに命令できるのはゆうだけ！）」

エ「・・・分りました。ご案内します。クロノ君はいつ戻りますか？」

銀「艦長に遭ったら、魔法を解いてやる。安心しろ中は冷たくない、一時的に氷の中のもの時間を止めるだけだ」

エ「そうですね、こちらです」

そしてエイミィさんは歩いていった・・・
わたしは銀さんにはなしかける

な「銀さんすごいですね。氷の中のものの時間を止めるって」

銀「そんなことないさ。おれなんてまだまださ」

白「またそうゆうこと・・・」

銀「なんだ？白？」

白「家の魔導書理解して自分なりに解釈・・・そして元来の魔法とは比べ物にならないほどに短時間で発動、応用・・・自分で魔法も構築してるくせに」

な「ふえ〜前からすごいとおもってましたけどそこまでなんて。どのくらい自分で理解したんですか？」

白「全てよ、す・べ・て！」

な「ふえ？全部ですか。どのくらいの魔導書なんですか？」

銀「ん〜そんなに多くない。魔導書は100冊、魔法は〜2000くらいかな？一応全部使えるけどそのうちの禁術が1000くらいあるんだ」

な「あの。禁術っていうのは？」

白「人体に多大な影響与えたりする魔法のことよ。中には命を懸けるものもあるわ。銀、絶対に使っちゃだめよ！」

銀「わかってる。」

そしてわたしたちは艦長さんの部屋にいきました・・・

えっ？ユーノ君？知らないよ！ずっとあのままでもいいの！

その頃ユーノはずっといじけていた・・・

なのは side end

TABLE 13 に続く . . .

T A L E 1 2 乱入者（後書き）

B A L 「T A L E 1 2 ですよ！」

結「ご苦労様・・・」

B A L 「うん。ん〜P V 1 5 0 0 0 突破だよ、嬉しいな」

麗「よかったね〜。そんなことより今後はどうなるの?」

B A L 「そんなことって・・・えっと、とりあえず構想はあるよ。前回もいったけど。ただねオリジナルも混ぜていきたいんだ。そうしないとすぐに終わっちゃうから」

結「番外とかは?」

B A L 「もちろん作るよ!でもちよつと遅いかも」

麗「とりあえず無印をさっさと書いちゃえば?」

B A L 「その気はあるんだよ。でもね少しでも面白いものにしたいたからね〜なかなかまとまらないんだ」

結「なるほど」

B A L 「そゆこと・・・がんばるわ。というわけで今回はこのままで
!」

結・麗「バイバイ」

TABLE 13 話し合い (前書き)

書くスピードが遅くなってすみません。

あとすこしで無印が終わります。

がんばって書くので応援ヨロ。

それでは本文へGO!

TABLE 13 話し合い

結斗 side

僕らはエイミィに連れられて、艦長室まで来た。

エイ「失礼します、艦長」

リ「どうぞ・・・」

カッコーン・・・・・・・・・・は？

・・・・・・・・・・部屋の中は悲惨だった。日本の文化のもの

畳とか和のものごちゃ混ぜになっていた。これは日本文化を冒瀆しすぎだろ・・・

僕が部屋を見てみるとリンディが言ってくる。

リ「あなたですか、クロノをぼこぼこにしたのは」

仕方ないだろ。あいつが弱いのが悪い。

銀「ああ。それでなんだ、そのお母様のお説教か？」

リ「いいえ。あれはわたしたちの不手際。こちらが謝罪するべきなのです。ごめんなさい」

へえ、物分りがいいな。黒いのは大違いだ。

白「へ」。黒いのは違って話が出来そうだね、銀？

白も僕の思っていたことを口にする。

銀「そうだな。」

リ「ありがとう。ところでそろそろクロノを開放して欲しいんだけど……」

銀「いいだろ。焰美……」

焰「うむ。fire bread」

・ 僕の右手の甲の焰美頼んでクロノの氷結魔法を溶かしてもらった・

エ「！……デバイスがマスター魔方陣なしで魔法を！」

リ「……あなたたちのデバイスはいったいどうなっているの？

それにあなたのその手から……」

やばっ……

銀「いまはそんなはなしをするためにここにいるんじゃない」
なんとか意識させないようにする。
そこで黒いのが意識を取り戻した……

ク「うづう？ここは？」

銀「気づいたか？黒いの」

ク「おまえは！」

クロノがまたデバイスを……

リ「やめなさい。クロノ」

ク「ですがっ……母……艦長！」

ほぐやっぱり母親だと止まるか。黒いの。

リ「あれはこちらの不手際よ。」

ク「……わかりました」

銀「さてKYをほっておいて早く話を……」

リ「ええ。あなたたちの……ジュエルシードを集めている理由を聞きたいの……」

リンディが聞いてくる。

白「わたしたちは回収してるだけ以上！」

はは。白が元気よく答えた……

リ「……では事件の終わった後、こちらへの提出をしてくれますか？（断る……）は？」

銀「もともと俺はあんたたちを信用していない。大体あんたたちより信用できる人がいるからな」

リ「その人の名は？」

銀「……」

僕はそれに無言で答えた。

リ」「そうですね。その話はまた後で、それであなたたちは？」

ユー「えっと……………」

あっ淫獣復活したんだ。

淫獣話中……………

ユー「淫獣じゃない！」

いやいや完璧そうたる……………

リ「立派だわ・・・」

ク「だが無謀でもある・・・」

なんだこの偉そうなKYは、マジむかつく・・・
そして唐突にリンディが、

リ「これよりジュエルシードの一件はこちらが全権を持ちます」
と言い出した。

な・ユー「えっ!?!」

な「どっどうしてですか?」

ク「君たちは一般人だ。口出すものじゃない」

リ「でも考えることもあるでしょう。明日また返事を聞きます」

それを聞くと僕は立ち上がり

銀「そうか、じゃあ帰るぞ！白、なのは。」

白「ええ……」

麗も向こうの魂胆が分かったようですばやく帰ろうとする

リ「待つて……。あなたたちには聞きたいことがあるの。あなたたちのデバイスは一体……。それと先ほどの信用できる人というのは……」

ブチツ……

白「嫌よ。教えないわ」

ク「なっ！？管理局に協力するのは民間人の義務だぞ」

クロノの身勝手な言い分に

麗もいい加減切れたらしい……

白「あなたまだ懲りてないの？わたしたちはあなたたちに協力する義務なんてないわ。それに民間人を巻き込もうとしている人は信用できない、しかもなのはの良心を利用してなんて」

ク「・・・どうゆうことだ」

はあく〜ここまでこいつは馬鹿なのか

リンディさんが一瞬震えたようだ。

麗はもう話したくないのかそっぽを向いている。うわあ僕が話すのかよ

銀「KYどうして(クロノだ!)明日また返事を聞く必要がある?」

ク「・・・?どうゆうことだ。そのままじゃないか」

銀「はあ・・・矛盾してるじゃないか。どうして民間人の俺たちの返事を聞く必要がある?そんな必要ないじゃないか。なのは?」

な「ふえ?」

銀「君はさっき話を聞いたときどうしようとした?」

な「それは・・・手伝おうとしてっ！？もっもしかして！」

なのはも気づいたようだ。

銀「ああ。なのはが魔力量が高い希少な魔導師ということとはあらかじめ知ってたんだろう。で、リンディはあくまでなのはからの協力という名目で組織に加えようとした。それだったらそちろが指揮権をもてますからね、違いますか？リンディさん？」

リンディは本当のことを言われたのか黙っている。
ふんっ・・・なのはの良心を利用しようとするからそうなるんだ

ク「艦長それは本当ですか？」

おいおいKYこの期に及んでもまだ信じないのか

リ「・・・ごめんなさい。そのとおりです。ですがこちらはお願いしか出来ません。どうか協力してくれませんか？」

頭を下げてくる・・・

やれやれ絡み手の次は正攻法かここまでくると尊敬するな

銀「はぁ・・・どうするなの？」

な「わたしは・・・手伝いたいです。」

フェイトか・・・

銀「・・・わかった。ならば俺も手伝おう（ちょっと！銀！）
なん
だ、白」

白「なんだじゃないわよ。どうしてよ？」

銀「なのはを守るためだ」

な「・・・／／／」

なんかなのはが真っ赤だ、大丈夫か？

白「………はあ。言い出したら聞かないもんね銀は……でもあなたたちに要求があるわ！」

白「一つ、わたしたちはあくまで民間協力者だからあなたたち管理局の命令に従わないわ、二つ目、わたしや銀のデバイスや魔法に関して一切詮索しない後映像保存も禁止。」

あっこの際あれもいっところ！

銀「あとひとつ追加、このジュエルシードを確保している人の罪をなるべく軽くして欲しい、以上！」

ク「なんだ！？それは！」

うざっKY。またフルポッコにしたろうかな？

銀「ちなみにKYの僕たちを攻撃してきた映像確保してるから拒否権はない……」

ク「くっ……」

ぞまあ〜

リ「わかりました。こちらはそのように便宜を図ります……」

銀「んっ　では商談成立だな。よし白、なのは帰るぞ……」

白「うん！」

な「はい」

そして僕らはアースラから元の海鳴公園に転移した……

海鳴公園・・・

な「それじゃ、また・・・」

銀「ああ」

白「ええ。また・・・」

なのはは帰っていった・・・

現在、家路の最中・・・

バリアジャケットは解除している。

麗「ねえ。ゆう?」

結「ん?なに?」

麗「なんであんなこといったの?フェイトのこと」

結「ん」はつきりとした根拠はないんだけど・・・なんていうかフェイトは自分の意思でジュエルを回収してるみたいじゃなかったし、あとあの瞳は何かを抱えている目だったから・・・」

麗「そつか・・・ねえ?手・・・つないでいい?」

結「?どうしたの、いきなり・・・」

麗「ん」なんとなくかな、いいでしょ!」

結「まゝ手つなぐくらいなら・・・」

麗「ありがとう！」

僕は手をつないで帰った・・・

家に着いたときそれが母さんに見られて冷やかされて結構恥ずかしかった・・・

ア「いい加減にしなさいよ！」

アリサの声が教室中に響いて室内がシンとなった。
どうしたんだ一体？

バタンツ・・・

アリサはそれで教室を出て行ってしまった。怒鳴られた相手はなのはか・・・最近なのはどこか上の空だったからな。それが原因かな？

アリサにはすずかが追いかけていった・・・さて僕はなのはのほうへ行きますか。

結「どうしたんだ？なのは」

な「あっ・・・結斗君・・・」

優しく問いかける。

な「ん〜ん・・・わたしが悪いの。アリサちゃんをおこらせちゃったから。」

結「アリサがあそこまで怒るのは相当なことだよ・・・」

な「うん・・・」

うわのそらっど・・・ええいめんどい！

結「なのは！ちょっと来て！」

な「えっ？」

そして僕はなのはの手を引いて廊下まで連れ出した……

結「なのは……最近どこか上の空だけどなにかあったの?」

な「!?!? 結斗君も……」

結「気づいていたよ。いつからの知り合いだとおもってるの?」

な「にやはは……そうだよね。でも……」

なのはは途端に口を閉ざす。まあ十中八九フェイトがらみだよな。

結「話せない……ことなんだね……」

な「……うん。ごめんね」

結「謝ることないよ。人には話せないことの一つや二つあるぞ。でもアリサたちにそのこといったほうがいいよ。今すぐ……」

な「でも……」

結「でもまなにもないよ。「じゅづのは後からのほづが謝りにくいんだ……」

な「……」

なのはが依然と渋る。

麗「言葉にしないと伝わらないことってあるよ」

結・な「麗／麗華ちゃん……」

麗華が聞いていたのか助言してくる。

な「うん！いつてくる！」

屋上・・・

す「だめだよ。アリサちゃん。怒鳴っちゃ・・・」

ア「わかってるわよ！でも見え見えじゃない！悩んでるの！わたしたちはなのはの親友なのよ！頼って欲しいわよ！」

す「アリサちゃん・・・」

結「アリサ！すずか！」

ア・す「結斗／結斗君・・・」

アリサとすずかは屋上にいた。どつやらすずかがアリサをなだめているじい。

麗「ほら！なのは！」

なのはをアリサの前へと麗が背中を押す・・・

な「わわ。麗華ちゃんそんなに押さないですよ・・・」

麗「なにいつてんの！あやまるんでしょ！」

なのはがアリサの前に立つ。しかしお互いに話しくがっている。先ほどのことがあって話しかけにくいらしい。

ア「なのは・・・」

な「・・・ごめんね。アリサちゃん」

ア「なのは……」

な「わたし今悩んでることがあるの……でもこの悩みはわたしが・
・私自身が解決しないといけないことなの。だから何も話せない
の。でも！それが・アリサちゃんやすずかちゃんを心配させてい
たんだよね……だからその……ごめんなさい！」

ア「なのは……もういいわよ。話せないことなんですよ。それ
くらいだれにだってあるわ。わたしこそ怒鳴ったりしてごめん……

」

す「わたしもなのはちゃんが悩んでるのは分かってたよ。わたした
ちはいつでもなのはちゃんの味方だからね！」

な「アリサちゃん……すずかちゃん……ありがとう……」

麗「よかったねなのは。ん？どうしたの、ゆう？」

結「んっ……アリスが謝ったことに驚いた。あのアリスが謝るなんて……」

な「あはは……」

ア「なんですって……！」

そしてアリスが追いかけてきて逃げるのに必死だった……

その日の夜……

結「準備はどうだ？」

澁「問題ありません。いつでも転送できます」

今僕が何をしているかというとフェイトのいるところまで転送しようとしているんだ……。座標が分かるわけはこの前KYからフェイトを助けたとき、きづかれないように発信機をつけておいたんだ。

ちなみに母さん手製の……

結「よし、いくよ麗」

麗「うん」

僕は今フェイトのいる時の庭園へ転送した・・・

時の庭園・・・

銀「到着と・・・」

僕らは城のまん前にでた

白「ここが時の庭園……」

ちなみに今僕は焰美で麗は鏡月でセットアップしている

銀「ああ。ここで間違いないな、焰美、漣」

焰「うむ。ここで間違いない。だがなんて静かな場所じゃ……」

焰美がそういうのも無理ない。僕達が転移したところはあまりにも静か過ぎだ。

漣「ええ。不気味なほどに……ですが奥から生体反応が三つします。おそらくフェイト様たちかと……」

銀「そうか。じゃいくぞ！」

僕らが城を歩くこと数分・・・大きな扉の前まできた

アル「あんたたち！どうしてここへ？」

銀「ちよつとな。それよりフェイトはどうした？」

アル「あ、そうだよ！フェイトを助けてくれよ、このままじゃあの子死んじゃうよ！」

銀「死ぬって・・・どうゆつ？」

澗「結斗様、ここから生体反応が・・・ですがひとつは弱弱しいです」

白「どうゆつこと？」

銀「まさか！」

僕は急いで扉を開けた・・・

結斗 side end

フェイス side

今わたしは母さんに鞭で打たれている。ジュエルシードが少なかつたためだ。

プ「いいフェイス。たった四つではわたしの願いは叶えられないの。だからもつと集めてきて頂戴！」

バシンッ！

フ「はい母さん……」

わたしは既に意識が朦朧としてきていて、体が動かなかつた

プ「いい？フェイトわたしを失望させないで！」

母さんがまた鞭をふりあげてわたしをたたこうとした時

バシツ……

銀「それが親のすることかよ……」

わたしを助けてくれた後ろ姿
銀の長い黒髪が目に入った

フ「ぎ……ん……」

わたしは意識を手放した……

銀「フェイト！白、治療を！」

アル「フェイト！」

アルフと麗がフェイトの下へ駆け寄る。

白「ええ！」

治療は麗に任せて僕はっど……

プ「あなたたちは……？」

銀「フェイトの友達だ！あんたがプレシア・テストロッサか？」

プ「ええ。そうよ、にしてもあははははははは……」

いきなりプレシアが笑い出す。

銀「何を笑っている……」

プ「そんな人形に友達がいたなんて、おかしいわ！」

銀「人形？どうゆうことだ？」

プ「フェイトはわたしが作ったのよ！アリシアからね！」

焰「おぬし、まさか！？」

銀「クローンか・・・」

プ「ええそのとおりよ。その人形はクローン」

銀「だがなぜ人形と呼ぶ！」

プ「その人形は、わたしのアリシアの記憶を持たせてあげたのに・・・
全くアリシアとは別のものになっていたのよ！あの子は・・・
アリシアはいつでもわたしを笑顔にしてくれたわ。でもそのこは違
う。だから人形よ！」

銀「当たり前まえだろ！アリシアはアリシア！フェイトはフェイトだ！一緒のやつなんていないんだ！」

プ「ふん。そんなわたしには関係ないわ。わたしはただアリシアがいればそれでいい」

白「銀！治療終わったわ。でもとりあえず安静の出来る場所で安静にしなと……」

銀「わかった。プレシア！」

プ「……なに」

銀「あんた自分の言っていることの意味もう一度考える。だが今度フェイトを否定してみる。俺が許さない……」

プ「ふんっ。」

そして僕は転送……

フェイトのアパート……

とりあえずフェイトをベットに寝かせた。

規則正しく呼吸していたのでとりあえず安心したよ……

麗「にしてもなんなの？あの女！嫁入り前の女の子を虐待して、傷が残りでもしたら大変よ！」

結「ん〜。たしかにでも傷が残らなくてよかったよ……」

フ「んっ……んっ……」

結「気がついたかな？」

フ「あな……たは……？」

フェイトは初対面のように言う。

結「？……ああそうか元の姿で会うのは初めてかな？はじめまして、白銀結斗です。こっちが」

麗を指差す……

麗「白銀麗華よ。よろしくね、フェイト」

フ「はあ……」

あれ反応が……薄いですよ……

結「僕たちも魔導師なんだ……」

フ「!？」

麗「ああと……警戒しなくていいよ……敵じゃないから」

フ「そっか。どうしてわたしを助けてくれたの？」

結「僕がそう決めたからだよ……」

そう言って僕はバリアジャケットを着て銀になる……

フ「銀！あなたが。銀だったんだ……」

結「うん。そうなんだ。ちなみに麗は白になるよ!」

フ「ふうくん……えつと助けてくれてありがとう」

結「いいよ。それよりいつもあんなことをされているの?」

フ「えつと……うん……でも!わたしは元の母さんに戻って欲しいから。だからジュエルシードを集める……」

麗「……………」

結「そっか。でも無理はだめだよ……これからもジュエル集めるの?」

フ「うん……だから結斗や麗華とは敵になるのかな?」

結「僕らは集めているわけじゃないんだ。ただジュエルが悪用されなければいいんだ。」

フ「そうなんだ……よかった」

結「ん？なんか言った？」

フ「ううん。なんでもない……」

結「そう……。さてとフェイトが目を覚ましたし、僕たちは帰るよ。
いこっ麗」

麗「うん、ゆうー！」

玄関に行こうとして僕は少しフェイトに話した

結「フェイト……」

フ「なに？結斗？」

結「あの白い魔導師の子のいうことも少し耳を傾けてあげて。あと
きみはきみだよ。フェイト。それ以上でもそれ以下でもない。君自
身なんだ」

フ「結斗？」

結「えっと。それだけじゃあバイバイ！」

フ「うん、バイバイ……」

そして僕らはフェイトの家を後にした……

麗「ゆう、さっきの言葉って……」

結「……うん。過去の自分と重なってね。どうしても納得できなかった。自分の価値観が見つけれられるのは自分だけ。それがいいかったんだ」

麗「ゆう……」

ただ魔法を行使できるそれだけでもとの両親から拒否された僕にとつては麗や母さんや父さんが僕の存在をゆるしてくれた。

ただど人からどれほど評価されても自分で評価しなければ意味はないと思った。

だからフェイトにもそういった。

そして僕らは帰宅した

結斗
s i d e
e n d

T A L E 1 4 に 続 く ・ ・ ・

TALE 13 話し合い (後書き)

BAL「TALE 13だよ！」

結・麗「わ~~~~パチパチ。」

BAL「え〜と久しぶりの投稿かな？」

結「どうしてここまで遅れたの？」

BAL「いろいろあったんだ。勉強とかパソコンとか勉強とかパソコンとか」

麗「パソコンやる暇あったら投稿しなさいよ。わたしとゆうの恋愛物語を！」

結「麗華さん!?!」

BAL「そりゃもちろん。だけど麗華ちゃんだけヒロインじゃないよ」

麗「ちつ。」

BAL「……まあ無印の最後は……あれだから……」

結「あれ？」

麗「あれ？」

BAL「二人が不思議がっているけど今回はここまで！バイバイ」

結・麗「？」

TALE 14 決意（前書き）

BALDR SKY です。

前回よりなんとか日にちを空けずに投稿ができました。
今回はわりとシリアスかもしれないです。

感想いただけると嬉しいです。

それでは本文どうぞ

TALE 14 決意

麗 Side

白「ん」。なかなか見つからないね。ジュエルシード」

わたしたちは今アースラでの手伝いでジュエルシードを集めている。私的にはあまりアースラに協力はしたくない。

あの親子気に入らないし、それにあの黒いのが特に。

あとお父さんのこともあったから。

でもゆうもそれは同じ。ゆうがするならわたしも

今度はゆうを守らなくちゃ！

銀「ああ。あれほどのものがどうしてセンサーに引っかからないのか俺は不思議だ・・・」

白「そうなんだよね・・・」

いまきがついたんだけど、ゆうは銀になっているとき口調を全く違うものになっている。ん〜かつこいいなあ……………

銀「どうした？」

白「えっ？ううん、なんでもない……………」

オペ「センサーに反応！6つのジュエルシードを確認！」

リ「なんですって？場所は？」

オペ「……………海鳴市の海上からです。ですが付近に魔力反応が

「！」

「エイ、モニターに出します！」

パッ

ブワアアアアアアアアア

モニターのそこにはフェイトがいた。

「な「フェイトちゃん！」

なのははその光景をみて驚いた。フェイトが必死にジュエルシードの魔力を押さえ込もうとしていたためだ・・・

白「無茶よ！あんなに膨大な魔力を抑えようなんて！」

怪我だって治ってないのに！

どうしてあの子はそれほどまで……。

プレシアに以前のように戻って欲しいというのは分かる。でもそれは無理だ。だってあの女フェイトを自分の娘とすら思っていない。あの女が見ているのはアリシアだけ。でもそれをフェイトが知ったら……そんなの悲しすぎるよ。

白「……………」

な「あのっ、わたし現場に行きます！」

ク「その必要はないよ。あれは個人が出せる魔力を超えている……
・いづれ自滅するだろう。そこをたたけばいい……」

な「そんな!」

このKYは・・・本当にいつぺん地獄に落ちたほうがいいんじゃないの・・・

リ「わたしたちは組織の一員として常に最善の選択をしないといけない・・・残酷かも知れないけど・・・」

はあこの親あってこの子ありなのね・・・

な「・・・」

なのはは立ち尽くし何も言えなくなってしまった。

銀「いくぞ、白！なのは！」

さすがゆう！

だから大好きだよ

な「えっ？」

ク「きみは話を聞いていたのか！」

銀「聞いていた……だが俺たちはお前らの組織にいるわけじゃない。だから命令を聞く必要はない……」

そういうとわたしとなのはを手招きし魔方陣を発動……
やっぱりかっこいい、お兄ちゃん　っといけない。そうよんじゃだ
めだった

銀「リンディさんあんたは確かに正しい。だがな人としてそれは間違っている！……焰美……」

焰「うむ、了解した」

リ「ちょ！」

ゆうはリンディの返答を聞かずに、
わたしたちはフェイトのいる海上へと転送された……

麗side end

海上……

結斗side

焰「到着じゃ！」

な「フェイトちゃんはっ？」

銀「あせるな、なのは。あそこだ」

僕が指差したところには既に肩で息しているフェイトの姿があった。

な「フェイトちゃん！」

銀「俺と白がジュエルシールドを抑えている間にフェイトのところへ行け！」

な「はい！」

そしてなのはバリアジャケットを装備してフェイトのところへ飛んでいった。
そりゃものすごいスピードで。

銀「よし、行くぞ白！」

僕らは気をとりなおす。

白「うん！」

麗 Side

白「行くよ！鏡月！」

鏡「いつでもいいわ！マスター！」

わたしは双銃へと鏡月を変えて、砲撃を発射しようとする。

鏡「photon buster」

さすがにジャッジメントブレイカーは威力が高すぎるし消費量が半端ないからやめた。

そしてゆうの方をみた。ゆうは基本的にどの武器も使えるけどどっちかって言うと遠距離のほうが苦手らしい。だからゆうがどんなふうにするのか興味があった。そしてそこにはいつもの黒い長い髪ではなく、燃えるような焰髪のゆうがいた。

結斗side

焰「どうするのじゃゆう？今の状態ではあれ程の魔力は抑えられな
いぞ。」

銀「うん。そうなんだよな。あれを抑えるのに一番いいのはなのは
のような砲撃だけど、俺には向いてないんだよな。双銃はクイック
ドロウくらいしかまだできないし。ううん……。」

焰「うむ。ゆうは接近戦タイプだからの」

銀「仕方がない。エクステンドすつか……」

これすると姿がガラリと変わるんだよね。

焰「やるしかないの……」

銀「ふ〜」。我いま封印をとかん……開放……」

焰「extend!」

一瞬僕の周りを炎が覆う。紅よりももつと神々しい焰の火を……
そして炎が晴れたところには焰髪で灼眼のゆうがいた

銀「ん。よし次は奥義行くよ！」

僕は確認をして攻撃をする。

銀「白銀流奥義……」
焰「……」

僕は刀から大量の魔力を龍にして放出する。

ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ

反対側からは麗のフォトンバスターが炸裂した

なのはside

わたしは銀さんと別れた後、すぐにフェイトちゃんのところへいった。

アル「邪魔するのかい！」

アル「さんがわたしたちとフェイトちゃんの間立って攻撃態勢を取りました。」

ユ「ちがう、僕たちは戦いに来たんじゃない！」

ユ「君きてたんだ気づかなかった……ってそんなことより！」

な「フェイトちゃん！いま銀さんたちがジュエルシードの相手してくれているから回復を！レイジングハート！」

レイジングハートからの魔力がバルディッシュへと入る

バル「charge！」

フ「銀が？」

な「うん。いまあそこに……ふえ？」

わたしはさっきまで銀さんがいたところを指差したけど。そこには焰髪の長い髪をした人がいたの。

な「あれ？銀さんは？」

レイ「マスター。あちらにいらっしやる方が銀さんかと」

な「そうなの！？でもぜんぜん違うよ！」

フェ「魔力が銀のものだからあれは間違いなく銀・・・でも」

な「うん。とても綺麗なの・・・」

長い焰髪、神々しいまでの雰囲気でもって綺麗なの

フ「うん。」

そして銀さんと白さんが大威力の魔法を当ててジュエルシードは収まったの。

な「ふええ。すごいの」

ユ一「なんて威力だ……」

銀「なのは！フェイト！封印を！」

な・フ「はい／うん！」

な・フ「ジュエルシードシリアル、？、？、？、？、？、？、？封印！」

結斗side

封印してなのはとフェイトたちが寄ってきた……

な「銀さん！」

銀「な……なんだ？」

な「綺麗なの！」

ズコツ・・・

銀「なのは・・・俺は男なんだが・・・」

フ「でも綺麗！」

銀「フェイトまで・・・これは焰美の能力を使いやすくするためにこうなるんだ」

男がこんな格好しているのは変じゃないか？毎度おもつが髪切りた
いんだよな・・・

白「だめよ。切っちゃ・・・」

白に思考がバレタ？なんで〜？

白「とにかく似合っているんだからだめよ。それより今度あれ教えてよ。翼……」

あれって？ああ

銀「ああ……レイディアントウイングのことか？」

白「うん。あれは綺麗だから……」

綺麗ってそのためのものじゃないんだけどな……

フ「レイディアントウイングっていつのは？」

銀「ああ。俺が作った高速移動魔法だよ……背中に羽が生えるんだ」

な「わくすごい わたしたちにも出来ますか？」

銀「ああ。扱いが難しいがっ……!？」

そこでなにか大きな魔法が転送されてくるのが分かった

焰「銀！結界を！」

ちっ……間に合わない！

ドシヤアアああああアアン

フ「母さん？」

紫色の雷が俺たちに降り注ぐ……というよりフェイトに集中して

フェ「うわわああああ」

フェイトに雷が直撃した

銀「くそっ！」

アル「フェイト！」

アルフがフェイトを抱きかかえる。こっちの状況は……

銀「なのは！白！大丈夫か？」

な「ふえええ。んと大丈夫です。っアルフさん」

するとアルフが封印された6つのジュエルシールドの方へ行く・・・
はえー！。フェイト抱きかかえてるのに・・・

アルフが目標を確保しようとしたとき邪魔者が・・・

ク「そこまでだ！」

うわっ！でたよ・・・

アル「邪魔するな！」

そう言いたくなるアルフの気持ちがよく分かる。
アルフが拳の魔法をクロノへ当てる

ク「うわあ！」

クロノが海にたたき押される
よわっ！

アル「三つしかない！」

残り三つはクロノが確保。ちやっかりしてるな。

アル「うわあああああああ」

アルフは今度は海に魔法を放って海上を脱出した……

アースラ内……

リ「あなたたちのしたことは本来許されないことです」

な・ユー「ごめんなさい……」

銀・白「……………」

お叱りを受けています。僕？受け流してますよ・・・なのはたちは謝っているけど・・・

リ」・・・こと。不問にします。次はありませんよ」

寛大な心だことで・・・

な・ユー」ありがとうございます」

完璧に手中の中かよ。
子供だからって。

なのはの部屋innアースラ……

麗side

お叱りを受けた後わたしたちはなのはの部屋に来ていた。銀が話があるらしい。
あれかな？

銀「はつきり言う……管理局をあまり信用するな」

開口一番にゆうがいう。

な」どつゆじいどですか？」

銀「あいつらは信用できない」

ユ一「僕にしてみれば正体が分からない君たちのほうが信用できるかどうかって感じなんだけど……」

うわあこいしつじぞっ！

麗「自分の正体隠してた人がよく言うわ。君なのはが許してなかったら犯罪者よ。淫獣ユ一ノ君？」

ユ一「なっ!!」

さりげなくなのははわたしに寄ってきてユ一ノはいじけ始めた。
当然ねゆづの悪口を言ったんだから。

な」でも聞きたいです。どうしてわたしたちを守ってくれるんですか？あのジュエルシードの暴走のときもそうでしたけど……」

それもそうか。なのはにしてみれば助けられてるし……

銀「……………ん。そうだな。お前たちにならないかな？どう思う、白？」

白「ん」。いいんじゃないかな？教えても……………それにわたしたちの話聞いてもらうためにはまずわたしたちを信用してもらわないと……………」

銀「それもそうか……………瀨。封絶を……………」

瀨「了解しました」

キイイイイイイイイン

ゆうは結界を張ってこの部屋の時間を切り離れた・・・

ユー「この結界は？」

銀「これは封絶といってな。内外の時間を切り離す結界だ。だから外の奴は全く気づかないし、監視カメラも作動しない・・・ってことで麗解除を・・・」

な「!?!?麗って。もしかして・・・」

フッフ驚いてる、驚いてる。

白「鏡月バリアジャケット解除」

鏡「了解ですマスター」

わたしはバリアジャケットの解除をして麗華になる。

な「麗華ちゃん！」

麗「うん。なのは」

な「ってことは銀さんって……」

銀「澗バリアジャケット解除」

澗「了解しました」

銀も解除する。結斗にもどる・・・

な「結斗君!？」

なのはが驚く顔はおもしろかったよ・・・

なのはside

な「結斗君!？」

結「うっつんと・・・とりあえずなのはと別れたときから話そうか、つまり僕が黒堂燈夜だったときのことかな・・・」

な「うん・・・」

いま結斗君の顔が寂しそうな顔をしていたの・・・

結斗 side

結「なのはと別れた時、僕は怪我をしたんだ・・・」

な「えっ・・・あ・・・あの時の？あの時はごめんなさい・・・」

結「いいよ。僕が勝手に助けたんだから。そこで僕はなのはが走っていったときに気を失ったんだ。気がついた時二人のデバイスマイスターに助けられたんだ」

な「その二人って・・・」

結「今の父さんと母さんだよ。父さんと母さんは僕に治療のためにこのデバイスを僕に埋め込んだんだ・・・」

手の甲の焰美と瀨を見せる・・・

焰「はじめましてじゃの、なのは。焰美じゃ・・・」

瀨「はじめまして。なのは様、瀨です・・・」

な「こちらこそ・・・って違うの！結斗君！手に・・・！」

結「ああ、うん。デバイスと同化することによって僕のリンカーコアと生命力が活性化してなんとか生き残れた……。話を戻すよ……。二人の所で二ヶ月ほど治療で過ごしたんだ……。んで僕は家に帰ったんだよ」

麗「あの時はわたしうれしかったよ。ゆうつてば行方不明になっているんだもん……。そしてあれがおきた……」

な「あれ？」

麗「うん……。わたしが車に轢かれそうになったときにゆうがたすけてくれたんだよ。」

な「？それはいいことじゃ……。？」

麗「でも助けってくれたとき人間の反応じゃなかった……。それを前の両親に見られてしまったの。ついでに瀕たちも……」

結「……………」

な「そ．．．それで？」

結「拒絶されたんだ。化け物って言われてね．．．」

な「そんなんっ！結斗君は麗華ちゃんを助けただけなのに！」

結「あの人たちには化け物に見えたんだよ．．．」

な「そ、そんなこと．．．」

結「いいよ。気にしてない．．．そのあと麗も前の両親と別れてきちゃってね．．．」

麗「当然よ！ゆうがわたしにとっての家族だったんだから．．．」

結「ありがと。麗．．．んで行く当てのなかった僕たちは今の父さ

ん母さんに拾われたんだ。だから名前も変えたんだ」

な「そうだったの……でもそれと管理局を信用しないこととどうゆう関係が？」

結「ん……父さんが管理局の上層部に殺されたんだ……」

な「っ!？」

結「父さんたちは優秀なデバイスマスターでそれを利用して非人道的なデバイスを作るように命令を上層部はしてきた。でも父さん母さんは従わなかった。」

麗「そしてお父さんは自分一人で上層部の実態を調べたの。わたし達も調べたよ。そしたらわんさか出て来たわ。それをお父さんは公表しようとして殺されたの……」

結「確かに管理局全体がそんなやつらじゃないってことは分かって

る。でも一部のくそが管理局なのは事実なんだ。だから僕たちは管理局が信用できない！いや信用しちゃだめなんだ」

な「そんなことがあるなんて……わかったの」

ユ「なのは？」

な「わたしも管理局はあまり信用しないよ……」

結「なのは……うん。ところでフェイトからの念話だけど明日の早朝ジュエルシードをかけて勝負だつてさ……」

な「わかったの……」

そのときなのははすごく決意した目になっていた・・・

T A L E 1 5 に続く・・・

T A L E 1 4

決意（後書き）

B A L 「T A L E 1 4です」

結・麗「こんにちは」

B A L 「今回はどうだった？」

麗「ん〜わりといいんじゃない？ね？ゆう。」

結「うん。たしかに」

B A L 「二人ともありがと。時間の合間にいろいろ考えたよ〜」

結「すごいね。でもいいの？」

B A L 「何が？」

麗「勉強とか。入試近いのに……」

B A L 「……大丈夫」

結・麗「（今の間は!?!）」

B A L 「とまあ何とか書いていきますのでこれからもよろしくお願
いします。あと次回はわたしの気まぐれで同じ話が二つあります」

麗「どうして二つあるの？」

BAL「一つはオリジナル。もう一つは……フフフ」

麗「一体どうなっているの？」

結「さあ？でも次の話ってなのはとフェイトの対決の話だから……」

麗「もしかして……」

BAL「とまあ察しのいい人は気づいたかもしれませんがですけど次回楽しみにしてください〜では〜。」

結・麗「バイバイ！」

TALE 15 ver 1 決闘 (前書き)

今回はオリジナルです。戦闘を書くのが難しい！
とにかくいろいろと穴があると思われると思いますが
そこはご容赦を・・・

わたしの文才のない文章でもよろしかったら
次に進みください。

BY BALDR

TALE 15 ver 1 決闘

次の日早朝・・・

海鳴公園・・・

なのはside

今日はフェイトちゃんと決闘をします。ジュエルシードをかけて。わたしも会って話しがしたかったからいい機会です・・・

ガンツ・・・

な「フェイトちゃん・・・」

音のした方向を見ると、フェイトちゃんが電灯の上にあります。スカートでそこにいるのはいけないとおもっの……

不意に隣を見てみると、ユーノ君が顔を紅くしてフェイトちゃんをみていたの。

な「ユーノ君……」

銀「ユーノ……やっぱり変態だったんだな……」

ユ「なっ？なにを！僕はフェイトのスカートなんか見てない！つて……あ……」

な「ユーノ君の変態！」

白「最低……」

自爆したユーノ君に追い討ちをかける。自業自得なの……

銀「つと……フェイト……」

結斗君がフェイトちゃんに呼びかける。

スタツ・・・

フ「なに？」

答えようとフェイトちゃんが降りてくる・・・

銀「あのな・・・その・・・短いスカートではあんな高いところにいたらだめだ」

フ「？なんで・・・」

銀「その・・・っっていえるか~~~~~！白・・・頼む」

白「うん？うん。え〜と・・・」

麗華ちゃんがフェイトちゃんに耳あてをした
小声で話す。

白「（パンツが見えちゃってるんだよ・・・）」

白「...」

フ「ぐすっ。ほんと？」

フェイトちゃんが泣きながら聞くの・・・かわいいの

銀「あのくなるべく僕が出来ることにしてね」

フ「うん。えっと頭撫でて欲しいな」

銀「それだけ？・・・まあ別にいいけど」

結斗君がフェイトちゃんの頭を撫でる・・・

フ「うぶ～～～！」

とてもうれしそうなの……。

白「フェイトだけずるいよ！わたしは？」

な「そうだよ！」

わたしも必死に言論する。フェイトちゃんだけいい思いさせないの！

銀「はいはい……」

わたしたちを結斗君が撫でる。
とても落ち着くなあ。

白「ふ……」

な「にゃ……」

ユ「ってなんで銀はよくて僕はだめなのさ！」

白「ゆうだからよ。それにゆうはフェイトのことを思って注意した。ただ見てたあんたとはぜんぜん違う。一緒にしないで。」

ユ「……………はい……………」

うんうんやっぱり結斗君だからいいんだよね……

銀「つとそろそろ時間だ。今回は模擬戦としておく。かけるものはジュエルシード。どちらかが負けを認めたり、俺が戦闘不能と判断した場合、すべて所持しているジュエルシードを勝ったほうへ渡す……………いいいな？」

393

な「うん！」

フ「はい！」

銀「よし。今回はあのKYが介入しないから存分にやれるぞ」

な「うん！クロノ君がいないからよかった」

フ「はい！あの空気読めない子がいないなら……」

銀「おまえらひどいな……まあいいや。んじゃ始め！」

白「ゆづもひどいと思う……」

フ「フォトンランサー……ファイア！」

な「アクセルシューター……シュート！」

わたしとフェイトちゃんですファイアを出して攻撃しあう。わたしはそれを避けながら結斗君の言ったようにする。

バンツ・・・バンツ・・・バンツ

フェイトちゃんが鎌で対抗しながらこちらに向かってくる。どうしよ結斗君の言ったようになっちゃったよ・・・

回想・・・

結「いい、なのは。君は接近戦タイプじゃないだから相手つまりフ
ェイトをなるべく君に近づけたらいけないんだ。」

な「うん。じゃあどうすればいいの？」

結「フェイトよりも早く動けたりすれば距離が離せるんだけど・・・
後は力技かな？なのははスフィアいくつ同時にコントロールできる
？」

な「うん。五つかな？」

結「そっか。じゃあその内の一つをフェイトのすきについてうつん
だ」

な「？」

麗「つまり一つは停滞させておいて、それで背後から狙ったりして
隙を突くの」

な「なるほど」

結「あとは・・・レイディアントウイングを覚えておくよ・・・」

な「レイディアントウイング？」

麗「前ゆうがやっていた、背中に羽が生えるゆうの考えた空中の移動ほつよ・・・これがあればフェイトに遅れはとらないよ。」

な「ああ！前のすごいの！」

結「だけど扱いが難しいんだ・・・いまのなのは集中力大変だから二回が限界。ここぞって時につかってね」

な「わかったの・・・」

結「ついでに麗にも教えておくよ・・・」

麗「うん……」

回想終了……

ガキンッ

わたしはフェイトちゃんの鎌をシールドで防ぐ。そして停滞させていたスフィアをフェイトちゃんの後ろから攻撃させる

フ「ッ！」

フェイトちゃんがそちらに気を取られた隙にわたしは高度を上げて
もう一度スフィア……

ヒュッ、ヒュッ

フェイトちゃんがよける

そこでフェイトちゃんの動きが止まって……

な「なに？……っ！」

わたしの四肢にバインドがかけられてしまいました

フ「アルタス、クルタス、エイギアス、疾風なりし天神、バルケル、アルケル、クライセル」

フェイトちゃんが詠唱をしている・・・

ユ「なのは！今サポートを！」

銀「だめだ！これはあいつらの決闘なんだ介入することは許さない。それになのはまだあきらめてないだろ・・・」

結斗君・・・ありがとうなの

な「レイジングハート！」

レイ「あれですね。わかりました」

フ「フォトンランサーファランクスシフト……打ち砕け！ファ
イア」

フェイトちゃんの傍に漂っていたスフィアがわたしに殺到する

レイ「レイディアントウイング！」

ユ一「なのは！」

アル「フェイト！」

ユ一「君がなのはを！」

ユ一ノが銀の首元をつかむ

銀「おちつけ。あいつはあれでやられたりはしない」

銀の指差す先にはぼろぼろだけど背中に桃色の羽を生やしたのがいた

な「は〜．．．打ち終わるとバインドも解けちゃうんだね」

フ「それは！銀と一緒に．．．」

な「今度はこっちの！」

レイ「デイバイン．．．」

な「番だよ！」

レイ「バスター」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

フェイトちゃんがシールドで受ける

砲撃がやむとそこにはぼろぼろのフェイトちゃんがいた

でもわたしは最後までやる。それが全力で戦う相手に対しての礼儀だから！

な「うけてみてディバインバスターのバリエーション」

レイ「スターライトブレイカー」

ヒュウウウウウウ

わたしは空中に漂う魔力を一点に集める・・・
フェイトちゃんにはバインドをかけておいた

な「これがわたしの全力全開！」

な「スターライト……」

な「ブレイカー！」

スターライトブレイカーはフェイトちゃんに直撃してフェイトちゃん
は海に落ちていく

な「フェイトちゃん！」

そして海に落ちる直前結斗君がフェイトちゃんを救出した……

T A L E 1 6 に 続 く

T A L E 1 5 v e r 1 決闘 (後書き)

B A L 「T A L E 1 5」

結・麗「「です!」」

B A L 「今回はなのはとフェイトの対決ですね」

結・麗「「あまり出番なかった・・・」」

B A L 「元気出してね次は・・・」

麗「次回は・・・?」

B A L 「・・・次回じゃなくなつてその次だけどね活躍するよ!主に麗華ちゃんが!」

麗「やつた~~~~」

結「いいなあ、麗・・・」

B A L 「まあまあ、結斗くんにもあるからさ楽しみにしてて、という事で今回はここまで!バイバイ」

結・麗「「バイバイ!」」

T A L E 1 5 v e r 2 決闘（劇場版） （前書き）

思いつきと自己満足で書きちゃいました。
結構苦労しました。

ただやっぱり映像を文章にするのは難しいですね。
痛感しました。

でもなんとか書ききったので最後まで読んでいただけると嬉しいで
す。
感想と指摘待ってます。
できればこの話での。

それでは劇場版のなのはとフェイトの対決シーンをどうぞ。

T A L E 1 5 v e r 2 決闘（劇場版）

翌日早朝・・・

三人称 s i d e

いまなのはは一見廃棄された都市のようなところにいた。理由はフ
ェイトと決闘をするため。銀、白、ユーノとアルフが見守る中、た
だ待つ。フェイトを・・・

ザーーーーー

なのはは噴水の前にある石垣の上にいるため噴水の音が辺りの空間
に響く。

な「ここならいいよね・・・出てきて、フェイトちゃん」

静かになのはは呟く。

シュンツ

なのはのすぐ後ろにあるオブジェの上に何者かが現れる。なのははその人物を振り向くのではなく、水に反射した姿を見て確認した。

アル「フェイト、もうやめようよ！これ以上あの女の言いなりになつてたら！」

アルフが自分の主人であるフェイトに叫ぶ。

フェ「だけど・・・それでもわたしは・・・。あの人の娘だから！」

答えはバルディツシュであった。

バルディツシュに金色の魔力刃ができて、ハーケンとなる。

な「フェイトちゃんは立ち止まれないし、わたしはフェイトちゃんを止めたい・・・」

静かに言い放ち、レイジングハートをセットアップする。

な「きつかけはジュエルシード。」

レイ「Release jewel seeds」

レイジングハートが封印していたジュエルシード出す。するとジュエルシードはなのはの周りを回ります。

な「賭けよう、お互いの持っている全部のジュエルシードを。それからだよ……全部、それから……。」

フェイトはバルディッシュを構える。

なのはは振り向き、フェイトにレイジングハートを向ける。

な「私たちはまだ始まってもない。だから！本当の自分を始めるために……始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

フェイト「！」

互いに緊張の一瞬であった。

クロノside

僕らは今なのはとフェイトの決闘をモニターを通してみている。

エイ「開始かな……。」

エイミイはあまり複雑な顔で言い放つ。
無理もない。決闘なんて。

ク「ああ。戦闘空間の固定は大丈夫か？」

ピッピッピッピッ

エイミイがモニターを操作しながら話す。

エイ「ん〜。上空まで伸ばした結果に戦闘訓練用のレイヤー建造物。誰にも見つからないし、どんだけ壊しても大丈夫。フフ、しかしちょっと珍しいねクロノ君がこうゆうギャンブル許可するなんて・・・」

ク「なのはが勝つに越したことはないけど、勝敗はどう転んでも関係ないしね」

エイ「なのはちゃんが戦闘で時間稼ぎしてくれているうちにフェイトちゃんの帰還先追跡の準備つと」

ピッ

ク「頼りにしてるんだ、逃がさないでくれよ・・・」

エイ「了解〜。・・・でもなのはちゃんに伝えなくていいの？」

プレシア・テストロッサの家族とあの事故のこと……」

エイミィが悲しそうにいう。

ク「勝ってくれるに越したことはないんだ。今はなのはを迷わせた
くない……」

なのはががんばれよ……。

三人称 side

ズガーーン

な「きゃっ!」

なのはが空中で上からの攻撃に耐え切れずに飛ばされてしまった。
フェイトはそれを見逃さず、更なる迫撃のためになのはに接近する。
あまりの速さにフェイトの金色の髪が空中に線を引いているように
見える。

キーーーーーン、ズガーーーーーン

なんとかなのはは堪えるがフェイトからの迫撃で衝撃を抑えきれず
なのはは建造物の中を貫通した。

ユー「なのはは！」

銀・白「……………」

銀と白が黙って観戦をする中、
ユーノが呼びかける。

なのははその衝撃にも堪え、海上に何回か体を当てながらも体勢を
立て直し、再び空へ。なのはからも足の飛行魔法で桃色の線を空中
に描くようになる。

しかしそこでフェイトがなのはの背後に回りこみ、

バル「Photon Lance」

四つの光子ランサーで撃とつとする。

な「っ！」

フェ「ファイア！」

なのはに容赦ない攻撃が行われる。
なのはは何とか避け続ける。

そして今度はなのはがフェイトの背後に回り、反撃に出る。

レイ「Divine Shooter」

な「シューター！」

なのはのディバインシューターが放たれる。
しかしフェイトは持ち前の回避力で避ける。すべてが無駄がない。

白「（やっぱりフェイトのほうが技術は上だね）」

銀「（ああ。なのははよくやってるほうさ。魔法を知ってまだ間もないなんて思えないな）」

白「（うん……）」

銀と白が念話で会話し再び見る。

バル「Scythe form」

バルディッシュをサイズに変えて、スフィアを斬りなのはへと攻撃する。

な「っ！」

なのはは咄嗟にラウンドシールドでフェイトのハーケンを受け止める。そして一つ空中に待機させていたスフィアをフェイトの死角と なっている背後から狙うが、

バル「Thunder bind」

フェ「ファイア！」

バルディッシュのサンダーバインドでシールドごと吹っ飛ばされ海に叩きつけられてしまった。フェイトは背後のスフィアは首を傾けることで避ける。

掠ったのかフェイトの髪が数本切られる。

ドッガーーン

フェイトは着弾を確認しようとする。サンダーバインドで発生した煙でなかなか確認できない。目を凝らしていると・・・

フェ「！」

咄嗟に上空に避ける。

今までフェイトのいた場所桃色の砲撃が通過していった。

砲撃の発射地点を確認すると肩で息をして、満身創痍といったなのはがフェイトにデバイスを向けていた。

な「はあ・・・はあ・・・」

レイ「やはり実力的には彼女の方が上です。簡単には勝てません」

レイジングハートがなのはに言う。

な「知恵と戦術はフル回転中。切り札だって用意してきた。だから後は負けないっていう気持ちで向かっていくだけ！でしょ？」

なのははそうい、レイジングハートに微笑む。

レイ「・・・All right master」

レイジングハートがマスターの呼びかけに答え再び戦闘が開始される。

ガン・・・ガン・・・ガシャン・・・ガシャン・・・ガン・・・

雲を突き抜け、なのはの桃色の線とフェイトの金色の線の軌跡が交わる。すると互いのデバイスで打ち合う音が空間に響き渡る。

フェ「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

何回か打ち合うことで互いに止まる。

フェイトはそこで思い出していた。過去のことを、母親のことを。再び戦闘を再開する。

フェ「（わがままを言って、母さんを困らせてばかりだった・・・あの日の事故の直前まではっきり覚えているんだ・・・。あの日母さんのいた場所が・・・遠くで光った・・・」

次に目が覚めた時見たのは、泣きながら私を見ている母さん。私はあの事故で怪我をして、ずっと眠っていたんだ。

でも・・・それから母さんはずっと私のことをアリシアと呼ぶようになった。違うよ・・・母さん私はフェイトだよ・・・」

そしてなのはとフェイトは互いに距離を置いた。

フェー「違う！どっちでもいい。勝つんだ、勝って母さんのところに帰るんだ！」

フェイトはかぶりをふる。今はこの戦闘に集中する。

フェイトは巨大な魔方陣を展開する。フェイトの周りの空間で紫の雷が発生し、フェイトを中心とし、横一線に大量のスフィアが形成される。

な「っ!？」

なのはは驚き、迎撃しようとするが
いつのまにかバインドで固定されてしまった。

ユー「設置型のバインド。それにあれは・・・なのは!」

ユーノがなのはのところへ向かおうとする。だが・・・

銀「やめろよ。ユーノ、あいつらは今本気の勝負してるんだ。あいつらの互いの思いをデバイスに込めて。お前はあいつらの思いを踏みにじるのか？」

ユー「でもこのままじゃなのはが！」

銀「いいかげんにしろ！本気でぶつからないといけない時だってあるんだ。もしちゃちゃいれてみる、俺は絶対許さない」

ユー「……………」

ユーノは黙り、決闘の成り行きを見る。

アル「フェイト……………」

銀たちのいる空間でアルフの声が木霊した。

なのははレイジングハートを握り締める。
唐突にフェイトの足元が桃色に光る。

フェ「Phalanx・・・撃ち……………」

フェイトはバルディッシュを上に向け

フェ「砕け……………」

振り下ろした。

一斉になのはのもとに向かうスファイア。

な「うっつ．．．。」

バインドで固定されているためなのはは必死に受け止めるしかない。受け止め続けていると爆煙が発生し始めた．．．
近くの廃ビルは粉々に砕け散る。

フェ「っ．．．。．．．．Spaak．．．。」

そしてフェイトは左手にスファイアを集め、一本の槍のようなスファイアを形成。その槍は全長10mはあろうか。
そしてそれを．．．

フェ「．．．．．end．．．。」

槍をなのはへ投げ、静かに言った。

槍はものすごい速さでなのはへ向かっていき．．．着弾。

ドッガー——————ン

空間が振動するほどの威力で一瞬金色で満たされる。

フェ「……………はあ。」

プッシュューーン

バルディッシュュから過剰な熱が放出される。

フェ「はあ……………はあ……………はあ……………。」

大技の連発でフェイトは疲れきっている。

フェイトもさすがにこれで終わったと思っていた……………

……………

煙の中の様子を見る。

煙が晴れると、そこにはところどころバリアジャケットが破れているが、しっかりと立っているなのはの姿があった。

フェ「そんなっ!?!?どうして。」

レイ「いけますか?マスター」

な「いけるよ!レイジングハート」

レイ「Cannon mode」

レイジングハートがキャノンに変化する。

フェイトはなのはが立っていることに信じられないように見た。そしてまた力を振り絞るために・・・

フェ「うおおおおおおお。っ!?!?」

叫び、なのはのところに向かおうとするが、

ガチャンッ

フェイトの右手と両足がバインドで固定された。

フェ「バインド！いつ？」

フェイトは思い出す。ファランクスを打つ直前の時を。あの時足元が一瞬光った。あの光はバインドのためだったんだと気づく。そしてそのことを考えているときでもなのは砲撃のチャージが進んでいた。

な「デイベイン……バスター……」

なのはから巨大な桃色の砲撃が放たれた。

フェイトはバインドのかかっていない左手でシールドを展開して

ドガーーーーー

デイベインバスターを防ぐ。

強力な砲撃が集中。

フェ「はっ。うっう……。あの子だって……もう限界のはず。これをつ……耐え切れば！ぐくうう……」

砲撃が止む。

フェ「はあ……はあ……はあ……」

フェイトは耐えた。あの桃色の砲撃を。
少ない意識で周りを見渡す。そこでフェイトは気づいた。
周りの空間で桃色の粒子が遙か上空のあるところに集まっているこ
とを。

彗星のごとく輝くところへ……
高町なのはとこころへ……

レイ「Starrylight breaker！」

フェイトのフアランクスより巨大な魔方陣が展開される。

な「使い切れずばら撒いちゃった魔力をもう一度自分のところへ集
める……」

フェ「集束……砲撃……」

呆然としてフェイトが言う。

な「レイジングハートと考えた知恵と戦術、最後の切り札！うけてみて！これがわたしの全力全開！・・・」

フェ「うあああああああ！」

フェイトの叫びが飛び、フェイトの前には五つのシールドが展開される。

な「スターライト・・・ブレイカーーーーーー！」

ドガーーーーー

フェイトのシールドに直撃するスターライトブレイカー。周りのレイアー建造物を破壊しながらフェイトのシールドに直撃。受け止め

る、しかし威力は止まらず、

バキンツ・・・バキツバキツバキツバキンツ。

五つのシールドは碎かれ、フェイトは桃色の閃光に飲み込まれ建造物を消し去った。

な「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

なのはは肩で息をする。

フェイトは銀によって助けられていた。

TALE 16 に続く・・・

T A L E 1 5 v e r 2 決闘（劇場版） （後書き）

B A L 「T A L E 1 5 v e r 2」

な・フェ「です!」「」

B A L 「うわっ!なのはちゃんにフェイトちゃん?どしてここに
いるの?」

な「今回はSKYさんがわたしたちの劇場版を」

フェ「小説にしてくれたということで結斗と麗華の代わりに来まし
た」

な・フェ「ねえ〜〜」

B A L 「なるほど・・・仲がよろしいことだと思います。」

な「うん。ところでSKYさん?」

S K Y 「ほいほい?」

な「どうしてこれを書いたの?」

S K Y 「ん」。わたしも劇場版見ましたけど最後のなのはとフェイ
トの戦闘を見たとき、すつげえええかつこよかったからです!あと
ですねたのしかったからです。だからわたしはせめて決闘の部分
だけでもわたしの小説に残したかったんです・・・」

フェ「なるほど。それで満足しましたか？」

SKY「はい。結構いいのがかけたかとは思っています。苦勞は
しましたけどね」

フェ「よかったです・・・」

SKY「はい。おっと今回はここまでのようです。それではなのは
ちゃんフェイトちゃん最後に一言。」

な・フェ「劇場版のA'sもよろしくお願いします。あと・・・
せーの・・・結斗（君）大好き！」

SKY「・・・また次回会いましょうバイバイ！」

TABLE 16 自身の意味(前書き)

駄文です。

今回は短い！

それでもいい方はお先へ進みください。

TALE 16 自身の意味

結斗side

銀「大丈夫か？フェイト？」

腕の中にいるフェイトに呼びかける。なのはのスターライトブレイカーを食らったフェイトを救出した。

フ「う……うん。大丈夫ありがと銀……//」

銀「ん。ならいい」

な「フェイトちゃん！」

なのはが駆け寄ってくる

な「わたしの勝ちだよね」

な「どうして雷が？」

白「純水な水は電気を通さないの・・・だから」

な「なるほど！」

雷「がやんだため魔法を解く・・・ジュエルシールドは持っていかれたか」

白「銀！ジュエルシールドが！」

銀「ああ、仕方がない。とりあえずアースラへ戻ろう」

アースラ艦内・・・

今モニターを見ている。どうやらリンディは時の庭園の座標が判明したから突入したらしい。僕はまんまとプレシアを誘う餌にされた。

ったく少しは個人の感情っていうものを考えろよ。

局「プレシアテストタロツサ・・・ここは包囲されています。おとなしく武装を解除しなさい」

一人の局員が停止を呼びかける。後の局員は違う部屋に入っていた。まずいあの部屋は！

局2「これは・・・」

フェイトの目を隠そうとしたが見られてしまった。

モニターに映されたのはポッドの中のフェイトと瓜二つの女の子を映し出していた・・・

フ「わたし・・・？」

プ「わたしのアリシアに触らないで！」

プレシアから紫の雷が放たれる。

リ「いけない！撤退を！」

プレシアがSランク魔導師って知っていたのにこの程度。やはりク
ロノとリンディ以外はレベルが低い。
局員が撤退した・・・何しにいったんだ？

プ「ねえ聞いている？フェイト？」

モニター越しにプレシアがフェイトに呼びかける。
何を言うつもりだ？

フ「母さん……」

プ「わたしのアリシアの記憶を持たせてあげたのに……」

おいおいまさか。それを言っちゃ……

フ「か……母さん？」

プ「あの子はいつもわたしに微笑んでくれた……なのにあなたは……いい事教えてあげるわたしあなたのこと……」

フェイトがもう泣いている。なのははやめると叫んでいる……

銀「フェイト聞くな！」

僕が声を張り上げて、言うが

プ「大ッ嫌いだったのよ！」

言いやがった。……ぜっていゆるさねえ……
フェイトが崩れ落ちる……

銀「フェイト！」

フェイトを抱きかかえる……顔は呆然としてその目はすでに色
をなくしていた

白「許さない！」

白が激怒している。

ク「艦長、いますぐに出撃します・・・」

な「わたしも・・・」

白「わたしもよ・・・」

みんな怒りで行こうとしているが僕は・・・

銀「俺は後で行く。フェイトをが心配だ・・・」

フェイトを保健室に連れて行くべきだと思った。それにフェイトに言わなくちゃいけないことがある。

な「わかったの・・・」

そしてなのはたちは時の庭園に行った・・・

アースラ保健室・・・

ベットにフェイトを寝かせる・・・

銀「フェイト・・・」

フェイトはただ涙を流していた・・・

フ「……………」

僕は封時結界を張り、ジャケットを解く。

結「フェイト……このままでいいの？」

フ「……………」

フェイトは動かない……

結「あの人に言わせておいて。それに自分始めるのは自分なんだよ……」

フ「自分を始める？」

わずかにフェイトの目に光が戻る。

結「うん。たしかにフェイトはアリシアのクローンかもしれない。けどどいまままでフェイトが感じてきた気持ちいっぱいあったでしょ。アルフと一緒にジュエルを集めたこと。僕らとであったこと。なのはと決闘したこと。その時々でフェイトは様々な気持ちを感じたはずだよ。それはアリシアが感じたものじゃないよ、それに前言った

でしょ。自分の存在を決めるのは自分なんだ。僕でもましてプレシアでもない、君フェイト・テストロッサなんだ」

フ「自分の存在を決めるのは自分……」

結「うん。だからフェイトはフェイトだよ……」

そういつて僕はフェイトをそっと抱きしめる。

フェ「ひぐっ、わたしは……わたしでいいいの？」

肩を震わして嗚咽を漏らしながら聞いてくるフェイト。

結「うん……」

フェ「……アリシアじゃなくてフェイトでいいいの？」

結「もちろん！」

僕がそういつとフェイトは我慢していた涙があふれて出てきた

フ「うあわわわああああああああん……」

フエイトはずっと僕の胸の中で泣き続け、僕はフエイトの背中をず
っと泣き止むまでさすっていた・・・

数分後・・・

「ふっめんね。服ぐちゃぐちゃにしちゃって・・・」

結「いいよ。フェイトが元気になったんなら……」

フ「……／／ありがと結斗……」

焰・瀨「またですか……」

結「うん？なに？」

焰・瀨「なんでもない（のじゃ／です）」

結「そう。んでどうする、フェイト？」

フ「母さんと話したい……」

その目には希望の光がともっていた。
これなら大丈夫かな？

結「そっか。じゃあ僕はフェイトを守るよ……」

フ「ありがと……結斗……」

結「瀨。転送を……」

瀨「分かりました……」

そして僕らは時の庭園に転送された……

結斗、フェイトがアースラ内にいる同時刻
時の庭園・・・・・・・・

麗華 side

今、わたしなのは、クロノ、アルフ、ユーノは時の庭園の入り口に
いる。

ん？邸内に多数の魔力を感知・・・

鏡「マスター！・・・・・・・・邸内に多数の魔力を確認。しかしこれは・・・
生命反応がありません・・・・・・・・」

白「わかってる・・・・・・・・魔力があつて生命反応がないということは・・・
」

わたしはそういいながらユーノのほうへ向く。

ユー「おそらく戦闘専用の機械かなにかです」

まあ合格かな・・・

白「ご明察通り・・・十中八九戦闘人形ね・・・それにしてもすごい数ね・・・」

ク「中の様子が分かるのか？」

当たり前でしょう・・・

白「ええ。伊達に銀のパートナーはやってないわ・・・銀がすぎで、わたしは目立たないけど・・・」

な「む・・・」

なのはがなんか不機嫌ね・・・どうしたのかしら？

白「どうしたの？なのは・・・」

な「む」。白さんが銀さんのパートナーっていうことだすし気に入らなかつただけです！つくん」

白「ふふふ……（ゆづは渡さないよ……）さて行きましょ
うか……」

わたしたちは邸内に入っていった……

白「鏡月！ツインガンセット！」

鏡「わかりました……ツインガンセット……」

わたしはまず大多数の敵つまり機械兵を遠距離かたたくためにツインガンにする。

白「シャイニングブレット」

鏡「shining blete！」

わたしの魔力光銀色の光が敵に殺到する・・・
そして正面にいた機械兵を粉々にしてあげた

ク「なんて威力だ・・・本当に君たちはいったい何者なんだ？」

そんなの答えられないって・・・

白「そんなことより次！鏡月、ツインソード！」

鏡「いいですよ。ツインソードセット！」

わたしの両手に白の色の二振りの刀が握られる・・・
刀身から鏢、持ち手のところまで白一色で統一された美しい刀

白「白銀流秘技……」

白「一の太刀、氷花」

わたしは納刀していた双刀を一瞬で居合する。すると10メートルほど前にいた残りの機械兵は粉々に砕け散った……

な「……どうなっているの？」

なのはが思わず口に言ったよ。そんなに驚くことかな？

白「なにして……居合だよ……」

ク「居合って……そんな優しいものじゃないぞ！」

クロノがなんか怒っている……いつも怒ってるよねクロノ。ユーノもなんか知りたそうにしてるし。

白「そんなこといわれても、この白燐と氷雪があるからできるんだけど……」

わたしは刀を四人に見せる。

アル「それは本当に刀なのかい？ロストロギアじゃなくて……」

白「そんなわけないよ。これゆ・銀がわたしのために作ったものだもの……」

ク「つくった？それを？はあく本当に君たちは一体……」

クロノがあきれてる

な「ふえ〜。それを銀さんが……綺麗ですねとても……」

白「ありがと。うれしいよ。銀の腕をほめてもらえて……」

な「あとあの技は？」

白「あれは銀の技のフリジット・コフィンを真似たのよ・・・って
いつでもオリジナルには勝てないし発動スピードがダンチよ。覚え
てるでしょ？クロノを氷づけにした、あれを真似たのよ」

ク「うつ・・・あれは思い出したくない・・・」

な「あれですか・・・」

なんかみんないろいろ考えてるね・・・っていまそんなことしてる
場合じゃないわ！

白「早く行くわよ！」

ク「ああ。僕はプレシアのところへ行く。なのはとユーノ、アルフ
は駆動力炉へ。君はどうする？」

クロノが聞いてくる。なんか仕切ってるし、うざー！わたしに命令で
きるのはゆづだけよ！
ってこんなこと言ってる場合じゃない！

白「わたしはなのはのほうへ行くわ。銀がない今この子を守る
のはわたしだけだし。」

ク「そうか。では終わり次第合流しよう。あと床の穴に入るなよ！」

クロノが近くにあつた穴を指差す・・・

ク「あれは虚空空間といってあのなかでは魔法が発動できない。だ
から落ちたらおわりだよ」

な「ふえええ〜！」

なのはが叫んでる。ちよっとづるぞいよ

ク「じゃあまた・・・」

そういつてクロノは走って大広間のほうへ行った。

白「じゃわたしたちも・・・」

な「うん！」

ユ「はい！」

アル「はいよ！」

わたしたちはクロノとは反対方向へと走り始めた・・・

TABLE 17 に続く・・・

TALE 16 自身の意味（後書き）

SKY「TALE 17」

結・麗「です!」

SKY「今回はフェイトちゃんの話でしたね」

麗「ちょっと!SKY!」

SKY「何?」

麗「なんでゆうと抱きついているの!ゆうに抱きついていいのはわたしだけなのに!」

SKY「あの麗華ちゃん……なのはちゃん、フェイトちゃんもヒロインで入っているので……」

麗「そんなの関係ない!」

SKY「ちょっと。乱暴はよそう。人には喋ることによって平和的に解決できるんだよ、って結斗君!君もちょっと何とか言ってみて!」

結「麗、駄目だよ!」

麗「はい!」

S K Y「変わり身早いっすね〜まあいいけど。とそろそろ時間です
今回はここまで、次回は・・・麗華ちゃん」

麗「何？」

S K Y「いいことあるから ではでは」

麗「ちょっと！いいことって何！？・・・行っちゃった。何だろ？」

結「さあなんだろね・・・」

TABLE 17 物語の終わり (前書き)

今回で無印ラストです！
がんばって書きました。

見てくださる方はどうぞ見ていってください……

TALE 17 物語の終わり

結斗 side

今僕はフェイトをお姫様抱っことで通路を走行している、というより飛んでいる……その理由はこちら……

静「到着です！」

僕たちは庭園の入り口に転移した。ん　麗たちは先に行ったみたいだな。

フ「白い子達はどこかな？」

白い子って……

銀「中にいるみたいだよ。急ぐよー！」

フ「でもここってとても大きいから・・・わたしが走っても間に合うかな?・・・」

ん「たしかに。この前来た時、結構歩いたからな

銀「んじゃーどうしよう」

フ「きゃっ!」

僕はフェイトをいわゆるお姫様抱っこした

銀「僕のほうが速いし、これでいいかな?」

僕はフェイトの後ろに回り、膝下と首下に手で支えお姫様抱っこする。

フ「・・・//・・・ない?」

銀「ん？」

フ「……重くない？」

銀「全然……むしろ本当に食べてる？」

フ「食べてるよー！」

銀「ま〜いいけど……それに……」

フ「これだったらフェイトを守れるしね！」

フ「……／／……結斗ったら……」

銀「とりあえずいくぞー！」

回想終了……

銀「フェイト……」

フ「ん？なに？」

僕の抱きかかえられているフェイトに問いかける

銀「君は君だよ……」

フ「大丈夫……わたし新しく始めるんだ自分を……そのためには母さんに会わないと……」

決意した目でフェイトは言った……

いい目をしているな……

銀「フェイト……迷うことや何かあったとき麗やアルフ、なのはを頼って！もちろん僕にもね」

フ「うん！ありがとう……」

フェイトは笑顔だった……

銀「よし！ついた」

僕らは大広間についた。フェイトをおろして扉に向かわせる……扉の前に立ち取っ手を握る。だが開くことが出来ない……手元を見ると、震えていた。怖いんだなまだ……

僕はフェイトの手にそつと自分の手を乗せた。

銀「フェイト……がんばれ」

フ「うん！」

そして僕らは一緒に扉を開けた……

中はめちゃくちゃだった……床や壁にひどい戦闘の跡があった。
そして中央にはクロノが頭から少々血を流してたっていた

フ「母さん！」

プレシアは漂っているジュエルシードの真下にいた。怪我らしいものは見当たらない……

プ「何しに来たの？あなたにはもう用はないといったはずよ」

プレシアの物言いにまた怒りがわいてきた。

フ「確認してきました……」

プ「確認？」

フ「はい。わたしはあなたになんと言われようとあなたの娘です……
・たしかにアリシアのクローンかもしれない！だけどいままで感じ
たわたしの感情や見たものはわたしのものです。だから
わたしはあなたの娘、フェイトとして生きます」

プ「そう・・・くだらないわ・・・わたしにはアリシアが全てよ！」

銀「いい加減にしるよ、プレシア・テストロッサ。」

僕は怒気をはらませながらプレシアに言った。

プ「何？」

銀「あんたがさっきいったことでフェイトは傷ついたんだ。心にな。でもなフェイトは立ち上がった。自分で立ち上がったんだ！あんたに言いたいことがあるってな！なんで受け入れない！？」

プ「フンッ・・・偉そうに。わたしの娘はアリシアのみ！」

そういつてプレシアは手をジュエルシールドに向けた。すると・・・

麗side

今わたしたちは駆動炉を破壊してクロノが先に進んだところに向かっている……

白「ん？これは……」

な「どうしたの？」

なのはが聞いてくる。って戻ってるよ。口調……

白「ゆうが来た見たい・・・」

な「結斗君が？」

白「間違いない。さあ、速くゆうたちと合流するよ」

な「うん」

わたしは少しだけペースを速めた・・・

なにか嫌な予感がする・・・

わたしは咄嗟にゆづを守るようにゆづと機械兵の間に身を投げ出した……

結斗 side

なにがおきたのかわからなかった……背後で銃声がして振り返ると麗が僕の前にいた。
麗の胸の近くから血がバリアジャケットから滲み出してくる
麗が僕に語りかけてきて

ごめんね……大好きだよ……ゆづ……

銀「麗！」

手を伸ばす

しかしわずかに届かず、
そういつて麗は虚数空間へ落ちていった・・・

結「れ~~~~い！」

僕は麗を追いかけて虚数空間に入った。

フ
ェ
イ
ト
s
i
d
e

フ「ゆ……う……と？」

わたしは呆然とした。麗華が打たれてそれを結斗が追いかけていて二人とも消えてしまった……

すぐ近くで部屋が崩壊してきている。

ク「まずい！早く脱出を！」

な「銀さんたちは！？」

ク「やむをえまい……」

な「そんな……」

ク「とにかく早くここから脱出を！」

フェ「そんな嫌！結斗！結斗！」

泣きながら二人を追いかけるようにする。

な「だめ！フェイトちゃん！」

白い子がわたしを押さえる

フェ「離して！結斗が！（フェイトちゃん！）あっ」

白い子が大きな声を出した。見ると涙を流していた……

それからわたしは白い魔法少女の子に連れられるように脱出した

結斗side

焰・静「ゆう！／結斗様！」

結「んっ…………。」

僕は痛む体抑えながら目を覚ました

結「……」

周りは真っ暗だった

焰「気がついたんじゃない！」

結「ん・・・どうやら無事みたいだ。焰美・・・ここは・・・っ
てそうだ！麗は？麗はどこ？」

僕は辺りを見回す

澁「麗様はあそこです・・・」

僕の右手アリシアの生態ポッドの近くに麗は倒れていた

結「麗！」

痛みを堪えながら近くによる。傷口は・・・っ!？

麗「はあはあ……ぐっ」

澁「結斗様このままでは！」

質量兵器でやられた部分から血が大量に流れ出しているためかすごい苦しそうだ。

結「麗！」

返事を聞く

麗「ゆ……う……」

麗が苦しそうに答える……

結「まってる！絶対助ける！」

結「天使の息吹！」

僕は呪文を唱えるが・・・

結「発動しない！」

焰「無理じゃ！ゆう！ここは虚数空間・・・魔力は役に立たん！」

そうだった・・・

結「んなこといったってあきらめられないよ！なにか手はないのか！？」

！
なにか！何か手は！？・・・魔法は使えない。でも魔力はある・・・

結「滞！」

澁「はい？」

結「ここで魔力は発動しないんだっただな？でも僕の魔力がなくなっ
たわけじゃないよな？」

澁「はい・・・」

だったら！

結「このものに我の生命を分け与えたまえ・・・ソウルスプリッ
ト・・・」

焰「ゆうそれは！」

僕は麗の顔に近づく・・・

結「ごめんね・・・麗・・・」

僕は麗に口付けをした・・・

そして直接僕の命を分ける・・・

唇を離す・・・

麗の顔色も良くなっていった。

傷口からの血はほとんど止まっている

麗「ん・・・ゆ・・・う・・・」

結「よかった・・・」

なんとか意識を戻せた・・・
でもこんなところでは危ないままで。

後は・・・

なのは s i d e

わたしたちはいまアースラにいます。何とか避難してきたの。
フェイトちゃんはただ涙を流しているの。

な「どうして！銀さんたちを！」

ク「あれではどうしようもない……」

な「そんなこと！」

わたしがクロノ君に言葉を言う。自分でも分かってる……あの状況であれが一番よかったと……頭で分かっているても感情が溢れてくるの。

ドサッ……

わたしのすぐ隣で魔方陣が展開されて現れたのは

麗「う……」

な「麗華ちゃん！」

麗「なの……は」

さっき虚数空間に落ちていった麗華ちゃんだったの
今はバリアジャケットが解除されて麗華ちゃんだった。

麗華 side

じめんね……

その言葉が耳に聞こえて気がついてみる……

な「麗華ちゃん！」

麗「なの・・・は」

な「無事だったんだね！」

なのはが起こしてくれる・・・

ク「君は一体？どじやって」「」>・・・」

どじ・・・

麗「！・・・？どじは？」

フ「ううん……転送されたのは麗華だけ……」

麗「そんな……な」

そんなことって……

？「アースラ聞こえますか？」

その時突如音声のみのモニターが入った

麗「ゆうー！」

わたしはゆうに必死に呼びかける。対するゆうは

結「無事に……はあ……転送……できたみたいだね……」

声を聞くととてもつらそうだった……

麗「どうしてわたしだけ！」

結「生命力をね分け与えたからもう体が動かないんだ……あ
と一人送る魔力がしかなかったんだよ……」

麗「そんな……」

目の前が真っ暗になった。ゆうが……

死ぬ？

そんなの嫌！絶対嫌！ずっと一緒に言ったのに！
守るって言ったのに！

結「ごめんね……………麗華……………」

そしてモニターが切れた……………

麗「ゆう？」

な「結斗君？」

フエ「結斗？」

ザーーーーー

無情にもわたし達の声はモニターの音によってかき消された・・・

麗・な・フエ「「いやああああああああああああ「「「

わたしたちの悲鳴がアースラに響き渡った。

結斗 side

モニターが切れた後僕は体が動かなかった。
予想以上にソウルスプリットの反動が大きいためらしい

結「ごめんね二人とも、こんなところで」

焰「なに、ゆうの近くだからいいのじゃ」

澗「はい……ゆう様の近くなら……」

結「ありがとう……ふ……たり……と……
……も」

そして僕はアリシアのポッドを背に気を失った……

後にこの事件はPT事件、ジュエルシード事件といわれた……

行方不明者一名……白銀結斗……

一週間後……………

麗華 side

今わたしはフェイトの本拠区行きの見送りをしている……………

ク「じゃ少しの間だけ……………」

ん珍しく空気を読んでるね……………

クロノ、アルフ、ユーノはわたし、なのは、フェイトから離れていった……………

な・フ「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

なにこの空気・・・・・・・・？

麗「ほら二人とも・・・・・・・・言いたいことがあるんでしょ」

わたしが二人の背中を押す・・・

な「なにいつていいのか急に分からなくなっちゃったね」

フ「うん・・・・・・・・あのね！」

な「うん？」

フ「この前の返事友達になるっていう・・・」

な「うん・・・うん！」

フ「君が言うように友達になりたい！でもどうすればいいのかわからないよ」

ありゃ、わからないか・・・

な「簡単だよ。名前を呼んで、君とかあなたじゃなくて名前をよんで！わたしは高町なのはだよ！」

フ「なの・・・は・・・なの・・・」

な「うん！」

フ「ありがとうなのは……麗華とも友達になりたいな」

麗「なにいつてるの。もう友達よ……」

フ「ありがとう。麗華……結斗とも友達に……」

麗「いつか帰ってくるよ……」

な「えっ？」

麗「そう思うことにしたんだ……お母さんに言われてね。ゆう
が簡単に死ぬわけ無いって……てね」

回想……

ゆうがいなくなって家に帰ってきた。お母さんに

美「結斗は……?」

麗「……ごめん……なさい。ゆう守れなかった。助けるって言ったのに誓ったのに!」

泣きながら言う。

するとお母さんはわたしを抱きしめた。

美「……麗。結斗は生きているわ」

お母さんは私を抱きしめて静かに言った……

回想終了……

ゆう……

そうだよね。ゆう。

絶対帰ってきてよ。

それまでわたしもっと強くなって「なご」そゆつを守るからな

な「そう・・・だよね、生きてるよね！結斗君」

なのはが涙を流しながら言う。

フ「だよね・・・」

フェイトも涙している。

そういつて見上げたわたしたちの先にはどこまでも青い空が広がっていた・・・

T A L E 1 8 に 続 く

T A L E 1 7 物語の終わり (後書き)

T A L E 1 8

新しい物語よ！（前書き）

今回からA・S編です！

そして主人公は麗華になり、少々結斗君は出番ありません。（全くないというわけではありません、ご安心を・・・）

でも面白くなるようにがんばるので応援よろしくお願いします！
感想もお待ちしています

麗華 s i d e

ゆうが行方不明になって三ヶ月、季節は冬。肌寒くなってきた。わたしの日常は変わらない。ゆうがいなくなつてわたしは泣かないようにした。なのはとフェイトはビデオレターが続いているよ

フェイトは今管理局の本局に裁判を受けにいってる。クロノが言うには勝訴確定らしい、だけどプレシアは・・・PT事件後一週間後に亡くなった。病気だった。最後にプレシアはフェイトのことを見てごめんなさいと一言を言った。

フェイトはずっと泣き続けていたらしい。
でも今は泣いてない。

フェ「泣き続けてばかりが母さんの願いじゃなかったと思うから・・・」

と言っていた。

強いなあわたしは素直そう思った。

わたしでもゆうのことを思うと今にも胸が張り裂けそうになる。
でも泣かないって決めたんだ！

以上近況報告でした・・・

そして現在わたしは・・・

ク「僕と付き合ってください・・・」

小学校の体育館裏で告白を受けていた。

今日の朝下駄箱に手紙が入っていた。いわゆるラブレターだ。これが最近の私の困りごとだ。

ゆうがいなくなってなぜかは知らないけどこんなふう到手紙を書かれたり、屋上に呼び出されて告白を受けたりした。

はつきりいつてうざいことこの上ない……

わたしはまだゆうのことを諦めてない。なのに周りが告白してくる。

はあ……

麗「んっ……ごめんわたし好きな人がいるの……」

私は簡潔に答える。

ク「……そうなんだ……じゃ」

男の子は目に見えて気落ちして帰っていった……

わたしが一人になつて……
ずっと私を監視していた人に呼びかける。

麗「もうでてきてもいいんじゃない？なのは、アリサ、すずか……」

な「にゃはは……やっぱりばねていたの……」

ア「これで何人目？」

す「うんと十五人目かな……」

そついいながらわたしの親友たちが草むらから現れた・・・

麗「もう、三人ともなんでここに・・・」

わたしは慥然として三人に聞く。

な「気になったの!」

・・・はあ。

麗「はあ・・・。」

ア「でもどうして断っちゃったの? 彼氏いないでしょ」

麗「ん。わたしが好きなのはゆうだけ！」

わたしがいうと三人は目に見えて気落ちした。
やばっ。三人に思い出させちゃった。三人ともゆうが好きっぽいか
ら……

な「麗華ちゃん……」

麗「とりあえずかえろ……」

わたしたちは帰宅した……

白銀邸……

麗「ただいま」

美「おかえり」

いまわたしたちは二人暮らしだ……お母さんは相変わらずで変わっていない……

美「麗、告白どうだったの？」

お母さんが料理しながら聞いてくる。今現在料理を作っているのはお母さん。ゆうがいなくなっ作るようになった。最初は……

まあお母さんの名誉のためと思って言わないでおくよ。
今はなのはのお母さんに料理を教えてもらいながら練習している。
なんとか食べられるものになってきたよ。桃子さんすごいなあ。

麗「断ったよ。わたしゆう以外興味ないし……」

美「それもそうね。あんなにゆうが好きすきな麗華がほかの男のこ
を好きになる分けないか……」

麗「当たり前よ。ほんとにゆうがいなくなった途端に告白して来る
んだもん正直うざいよ……」

美「あいかわらずね」

麗「お母さんだってわかるでしょ。好きな子がいるのにほかの子に
告白されてもうざいだけでしょ」

美「そうね。ま、わたしは麗とゆうがいればいいし……」

麗「お母さんも相変わらず……」

こうしてわたしたちは会話する……
いつか家族が全員そろつことを願いながら……

その夜……

美「麗〜！お風呂よ〜！早く入っちゃなさい」

麗「うん〜！」

さてもう終わるかな？本を閉じる・・・

鏡「なにをしているの？麗？」

本の内容を聞いているのだろう。

麗「ん？ちよつとね・・・今度ゆうに会う前には少しでも強くなる
うとゆうの書いた技表をみていたの」

鏡「そう・・・無理はしないでね・・・」

麗「わかってる・・・」

キーーーーー

そこで突如この地域一帯に結界が張られた。

鏡「麗！」

麗「わかってる！大きな魔力が……どこかへ……これは！なのはのところに？」

鏡「なのはちゃんのところね！早く！」

麗「うん。いくよ！鏡月！」

赤と青の光を放つクリスタルを首にかける。これはゆうがもっていたものだ。わたしがゆうの部屋で見つけた。手紙には一言。

”麗へ誕生日プレゼント 気に入ってくれたら嬉しいな。”

だった。それからわたしはずっと首にかけている。

わたしは勢いよく階段を駆け下りる。するとお母さんが待ち構えて

いた

美「麗……。いくの？」

静かに聴いてくるお母さんに私は真剣に答える。

麗「うん。ゆうがない今あの子達を守れるのはわたしだけだから。それにゆうだったらいくもの」

美「そうね。ゆうなら……ん分かったわ。でも無茶はだめよ。」

麗「分かってるよ。それじゃ行ってきます」

美「いつてらっしやい、麗」

お母さんから見送られながら
わたしは慌しくなのはところへ向かった……

なのはside

な「うん……」

現在わたしは勉強中です。でもなかなか分かりません……

な「わかんないよ……結斗君なら教えてくれるのにな」

そういつてわたしは結斗君を思い浮かべる……

結斗君……生きてるよね……

な「でも今日の麗華ちゃんは相変わらずだったの……」

やっぱり麗華ちゃんも結斗君が好きなんだね……

そういうわたしも・・・好きなの・・・
優しくて強くて、かつこいい・・・でもそれだけじゃない・・・
結斗君はわたしを支えてくれたり、フイトちゃんるとき背中を押
してくれたりした。だから・・・でも麗華ちゃんも好きだし、フ
イトちゃんもアリサちゃんも、すずかちゃんも・・・うつくライ
バルが多いの・・・

キーーーーン

レイ「マスター！未確認がこちらに接近してきています！」

レイジングハートが冷静に教えてくれる。

な「こつちに？どうして！」

レイ「わかりません・・・」

な「とりあえず、準備しなくちゃだね・・・」

レイ「はい」

わたしは魔法の準備をしながら外に出た・・・

やってきたのはとあるビルの上空・・・

な「ここなら・・・回りを気にしなくてすむよ・・・」

レイ「マスター！きます！」

・
そして上空から一つの鉄球がものすごい速さで向かってきたの・・・

わたしは手のひらを鉄球に向けて

レイ「プロテクション」

鉄球がシールドに当たる……

な「重い！」

とてつもない重さだったの。わたしが鉄球を抑えていると反対側から

「？」「じりじり……」

な「!?!」

赤い女の子が表れて、ハンマーで攻撃してきたの

ドッガアアアアアン

わたしはビルから吹き飛ばされちゃったの・・・

な「!レijingグハート!」

レ「all right! set up!」

わたしは落ちながら変身する。

な「一体どこの子？なんでこんなことを！」

たずねるけど赤い子は答えない・・・
むしろもっと攻撃してくるの

な「話を・・・聞いてってば！」

レイ「divine buster！」

私の桃色の閃光が赤いこへ向かう。

?「protection」

でも女の子のデバイスがシールドで防ぐ。

？「つち！おとなしくしろよな！アイゼン！」

アイ「rocket hammer」

？「ラケーテンハンマー！」

赤い子がデバイスの先を尖らせてこちらに向かってくるの！

レイ「protection！」

レイジングハートがシールドを出してくれるけど

？「ぶちぬけ——————！」

アイ「ya all！」

赤いこのデバイスがすごい音で稼動して

ドッガアアアアアアン

私の張ったシールドは叩き割られて
ビルの中にたたきつけられ気を失ったの……

麗華 s i d e

わたしは魔力を頼りにやってきた。
ちなみにもう変装はしてない。あれからクロノたちにはばれて仕方がなく民間協力者をしている。

麗「鏡月！なのはは？」

鏡「あそこよ！」

みた時、なのははビルにたたきつけられたところだった

麗「なのは！」

わたしはなのはをやった赤い子に攻撃する・・・

麗「プリズムバレット」

?「っ!?!」

当たる瞬間に赤い子が気づいて避ける。

？「てめーは・・・仲間か」

赤い子が乱暴に聞いてくる。てゆうか子供でしょ！なんでそんなに口が悪いの？

麗「あの子の友達よ。何であんなことを！」

？「てめーもちよつと魔力があるみたいだな・・・魔力よこしてもらう・・・」

麗「魔力？なんのために・・・」

？「それは関係ないことだ！アイゼン！」

赤い子はハンマー型のデバイスを持ちこちらに向かってきた。

その時、わたしの張っていたシールドは碎け散った……

麗「なんてパワーなの！」

わたしは驚いた。私はクロスレンジが苦手だ。だからゆうに協力してもらってクロスレンジの場合は主にガードをしてやり過ごす。それなりにガードの固さを自負していたんだけど。あっさり破られてしまった。

鏡「あれを防ぐのは無理そうね……ゆうとなら別だけど。」

麗「うん。ん？ゆう？そうよ！鏡月、レイディアントウイングを！」

鏡「！そうね。あれなら！」

バサーーーーー

背に銀色の羽が出来てそれを確認すると、再び赤い子に視線を戻す。

・
・

？「何だそれは！」

麗「説明してる暇は無い・・・即効で終わらせる！」

わたしは自分の限界の速さで赤い子の背後へと回り込む・・・

？「！なんてはやさだよ！」

麗「説明してる暇はないっていったでしょ！白銀流抜刀術・・・飛燕！」

飛燕・・・ゆうが使っていた抜刀術。

しかしゆうとは違ってまだ大きな衝撃波は出せない・・・

?「アイゼン！」

アイ「パンツァーヒダネス！」

避けられないと判断したのか赤い子はシールドを張る

麗「それはわかっていたよ！」

わたしはそれを読んでいたためすぐに秘技を出そうとする

麗「一ノ太刀氷っ！」

氷雪で氷花を放とうとしたとき、横からの攻撃に気づき、避けた。避けたところを鞭のようにになった剣が通る。

ヒュウウウウウン・・・・・・・・カシャン

攻撃を見てみるとそれは連結刃だった・・・

麗「仲間がいたの・・・（まずい！ガードできない相手が二人なんて・・・）」

表情に出ないようにするが、嫌な汗が流れる・・・
すると・・・

フ「ファイア！」

私の背後からスフィアが飛んでいく。

現れたのはフェイト、アルフ、ユーノだった・・・

麗「フェイト！どうしてニジニ？」

フ「うん・・・裁判が終わったからなのはに連絡したけど応答が無かったから心配してきたの。それより彼女たちは？」

フェイトは赤い子と紫の髪をした今私を攻撃した人を見ながらたずねてくる・・・

麗「分からないよ。いきなり襲ってきたから。魔力が欲しいらしいけど・・・」

フ「魔力？どうして」

麗「わからない。答えてくれないもの・・・」

フ「そう。じゃあとりあえず身柄を拘束しないとね　そういえばなのはは？」

麗「赤い子にやられてちょっとやばい。ユーノお願い！」

ユー「うん。わかった」

ユーノはなののところへいった

麗「さてこれで二対二ね。」

？「われらはベルカの騎士！主のために負けはない！」

麗「そう・・・フェイト！そっちの女性をお願い！わたしは赤い子を・・・」

フ「うん。」

そしてそれぞれの戦いがはじまる

麗「鏡月、後どれくらいウイング維持できる？」

何回か赤い子と打ち合ってダメージは与えているがなかなか決定打にならない。

鏡「あと五分ほどよ。」

後五分……この間にしとめないところら圧倒的不利……そうなるかとされるがままね……

ドッガーーーーーン

麗「フェイト！」

フェイトもやはりあの破壊的までの攻撃力を持つデバイスにはたえられなかったらしい……

フェイトは気を失ったのか動かない……

まずいわね……

？「あと一人！」

アルフ、ユーノも援護は出来ないみたいだし……

？「ゲートリオンシユラーク！」

？「飛燕一線！」

二人の必殺の攻撃が私に向かう

鏡「protection！」

鏡月がシールドを張ってくれるけど

ピキ………ピキピキ………

鏡「だめ！持たない！」

麗「！」

わたしはシールドが破られる直前衝撃備える・・・
ゆう！
ゆうの名前を叫ぶ。

キーーーーーン

するとわたしの胸から光があふれた。

麗「これは・・・」

見てみると首から掛けていたクリスタルが煌々光っている。
その光は温かった。

麗「ゆ・・・う・・・？」

とくんつ。クリスタルが返事するように鼓動する。一体これは。

麗「魔力が！回復している・・・。」

先ほどまで魔力を使い果たしていたのに今は体力、魔力が回復していた。

鏡「麗、このクリスタルの解析したら分かったわ。これは回復専用のストレージデバイスよ。」

鏡月が丁寧に説明してくれる。

麗「ゆう……私にこんなものくれるなんて……」

ありがとうございます。ゆう……

麗「さあ気を取り直していきますか！」

な「（麗華ちゃん！）」

そこでいきなりなのはから念話がかかってきた。

麗「（なのは？気がついたんだね。よかった）」

な「（うん。とりあえず話はあとにして、私がバリアを打ち抜こう
と思うの！）」

バリアが無くなれば援護がくることができるからだ。

麗「（分かった。お願い・・・わたしはこの二人を相手にする）」

な「（うん！）」

なのはがSLB発射のシークエンスに入る・・・

シ・ヴィ「!!」

シグナムとヴィータがそれを見て阻止しようとしている!!

麗「そうはさせないよ!」

私はまた二人を相手にする

シ「ちっ!」

ヴィ「どけ—————!」

どかないよ!

そしてなのはが発射体制をとる
しかし……

な「!？」

なのはの動きが止まる。

なのはの胸からは腕が出ていた……

麗「！他にも仲間が！なのは！」

私はなののもとに行く

な「スター……ライト……ブレ……イカー……
ー……！」

桃色の閃光が空を走り
バリアを抜いた

バタンッ

なのはが倒れる前にたどり着いて抱きかかえる・・・

麗「なのは！なのはってば！鏡月どうなってるの?!」

鏡「待つて今解析するわ!・・・リンカーコアが極端に小さくなっているわ。とりあえず大丈夫。でも応急処置としてさっきの回復のデバイスを使ったほうがいいわ」

麗「分かった!」

再びクリスタルから光が溢れる。その光はなのはこのころへ向かっていく。

フ「なのは！麗華!」

先のダメージをかばいながらフェイトが来る。

麗「ちよつとまって・・・」

集中してなのはを治療する。

鏡「安定してきたわ……もう大丈夫よ」

麗「ふう。これはすごいね」

この回復デバイス。

集中力はいるけど回復できるのはいい。
さすがゆう。

フェ「なのは！」

麗「もう大丈夫……」

フェ「ほんとに？」

麗「うん。でもはやくアースラに行こう。一応応急処置だから」

フェ「うん……」

そして私たちはアースラに戻った。

アースラ艦内……

なのはside

な「う、うん。……ここは？アースラ？」

わたし赤い子にやられて、バリアを打ち抜くためにスターライトブレイカーを打とうとしたら胸から手が生えてきて……

麗「あ起きたみたいね。なのは」

わたしが一人不思議がっていると扉から麗華ちゃんが入ってきた。

な「麗華ちゃん。ここって」

麗「そ。アースラ。覚えてる？撃墜されたこと」

な「うん。おぼろげに……」

麗「そう。今から対策会議をするんだけど動ける?」

麗華ちゃんが心配そうに聞いてくる。

私は足をベッドから下ろし、地につけ歩こうとするが・・・

な「わっ!?!」

フェ「なのは!」

立ち上がれず、転びそうになってしまったがフェイトちゃんがたすけてくれた。

な「フェイトちゃん。ありがとなの」

フェ「んいいよ。よかったなのはが気がついて、麗華の治癒がなかったらもつと起きられなかったらしいから・・・」

麗華ちゃんの治癒?

な「麗華ちゃんのこと?」

麗「あうん。それに関しても一緒に報告するから・・・つとなのはは動けないみたいだし。ここで話し合いできるかな?リンデ伊さん!」

麗華ちゃんがリンデ伊さんにモニターを出した。

リ「はいはい。なんですか麗華ちゃん」

麗「なのはが目を覚ましました。あとなのはも同席させたいのでここで会議をお願いできますか？」

モニター上のリンディさんに尋ねる麗華ちゃん。

ありがとうなの。あの赤い子や女の人のことが知りたかったから。

リ「いいでしょう。なのはさんのところでやりましょう」

麗「ありがとうございます・・・」

モニターが消えた。

麗「どうしても聞かせたかった。」

麗華ちゃんが悲しそうに言う。

な「どうしても？なの？」

麗「うん。二人とも驚かないで聞いてね。実はゆうはこんな風になることが分かっていたらしいの」

！いったいどうゆづこと？

フェ「いったいどうゆづこと？」

フェイトちゃんも私と同じことを思ったらしく、麗華ちゃんに聞く。

麗「それも含めてこのクリスタルに秘密があると思う……」

それに対し、麗華ちゃんは複雑な顔で言い、

首に掛けていた赤色と青色に輝くクリスタルを示した。

海鳴市のとある家の二階から溢れるほどの光が出た。

？「なんや!？」

二階の自分の部屋がいきなり輝きだしたため栗髪の少女は動揺する。

？「主!どうしたのですか?」

？「どうしたの?」

少女の驚く声が一階の家族にも聞こえたらしく紫の髪の女の人、金髪の女の人赤髪の女の子、青い毛並みをした狼が少女のもとへたどり着く。

先になのは達と戦っていた者たちだ。

？「魔力反応がするわ!気をつけて何か来るわ!」

金髪の女の人言う。

？「主下がってください。何かあるといけないので……」

紫の髪の女の人は素晴らしい少女の前に立ち、そのほかの者たちも目の前にある光が晴れるのをまつ。

？「女の子？」

少女は口から発した。光が晴れるとそこには
両手に灰色の分厚い本を大事そうに抱えて寝ていた。
少女らは呆然とし、状況把握するのに時間を要した。

その家の表紙にはこう書かれていた

”八神”と……

T A L E 1 9 に 続 く ……

S K Y 「T A L E 1 8」

麗「です」

S K Y 「というわけで今回からA・S編です……主人公になった気分は？麗華ちゃん」

麗「ゆうと一緒にのほうがいい……」

S K Y 「すみません。っとりあえずがんばってください……」

麗「はいはい。ところでなんでこんなに更新が遅れたの？」

S K Y 「……テストだったんです。悲惨です……」

麗「なるほど……じゃあこれからは早く更新できる？」

S K Y 「いえ、まだ大試があるので。ちょっとあくかもです。それに今大幅にストーリーの改変をしているので……」

麗「また不定期になるのね。」

S K Y 「すみません。でもちよくちよく努力するので……」

麗「はあ……ゆうに会いたいな」

S K Y 「え」と今後ともよろしくお願いします」

T A L E 1 8 ・ 5 登場人物紹介（前書き）

休憩↷休憩。

TABLE 18・5 登場人物紹介

白銀麗華：しろがね れいか

〈容姿〉

身長：125cm

体重：書かせないよ！

黒目、黒髪、腰までのツインテール

小学四年生

魔力光：銀

結斗が大好きな女の子。血の繋がりはなく、従妹の関係。結斗が親から離れたときに一緒に一緒に生きてきた。

将来の夢は結斗との結婚は依然と変わらず。

基本的に結斗、なのは達、知り合い以外には興味は無い。

本人は全く気づいていないが、なのはやフェイトと比べてもそんな色ないほどの美少女である。

容姿がかわいたためクラスや学校でなのはたち同様にもてる。聖祥四大美少女の一人。

デバイス

鏡月：女性型のインテリジェントデバイス

銃、刀のモードになれるが基本的には銃で戦う

（銃を使う理由は結斗のサポートするためである）

ジャツジメントブレイカー

ツインガンモードの集束砲。なのはのSLB以上の威力を誇る。ただしタイムラグが大きい。

プリズムバレット

銃のときの単なるスフィア

一の太刀・氷花

双刀白燐、氷雪があり麗華が出来る氷雪系の技。

居合いで冷気を衝撃波として出し、目標を一気に氷点下にまで下げ、凍らせる。

凍らせるため怪我はしない。

結斗のフリジットコフィンをもとに編み出された麗華のオリジナル技。

二の太刀・？

三の太刀・？

飛燕・白銀流の奥義。衝撃波を飛ばす。

レイディアントウイング

結斗が考案した移動魔法。

発動中は、発動者の背中にその人物の魔力光で作られた翼が作られる。

空中でフェイトのソニックムーヴ以上に移動できる。

しかし扱いが難しく、使用していると刻々と魔力を消耗する。

結斗は難なく使える。

現在使用できるのは、結斗、麗華、なのはのみである。

白銀結斗：しろがね ゆうと

容姿・

身長130cm
体重30kg

黒目、黒髪、腰までの長髪（普段は一つにまとめている）

小学四年生

魔力光・？

くデバイス

焰美^{えみ}：女性型インテリジェントデバイス

白銀夫婦によって作り出された高性能なデバイス。独自にリンカーコアを持っていて魔力が作り出せる。

そのリンカーコアはエンシエントドラゴン（炎の神龍）のリンカーコアの一部が入っているため自然に出てきた魔力は炎にエンチャントされる。魔力変換炎熱のようなもの。

結斗の右手の甲にコアが埋め込まれている。

結斗のことを信頼している頼もしいパートナー。口調は昔の人みたいな話し方。

澗しずか：女性型インテリジェントデバイス

焰美と同じく、白銀夫婦によって作り出された高性能デバイス。エンシエントドラゴン（氷の神龍）のリンカーコアが使われているため氷がエンチャントされる。魔力変換氷結。結斗の左手の甲にコアが埋め込まれている。

主としてパートナーとして結斗を絶対的に信頼する。過保護なところがあり、結斗を常に心配している。

双刀焰氷流・・・焰美と澗をツインセットアップしたときに使える流派。結斗オリジナル。

焰美の刀を焰龍、澗の刀を蒼龍という。その名のとおり焰龍は炎の龍が、氷龍には氷の龍が宿っている。理由は焰美には炎の龍のリンカーコアが澗には氷の龍のリンカーコアが使われているため

夜駆け

結斗の考えた誰でも早くできる移動方法。ちなみに士郎や恭也、美由紀でも習得可能。体にめぐっている気を少々足に集中するだけ。最小限の気を使うため、気を消費しにくい。リスクは慣れるまで足が痛くなるくらい？

療術

いわゆる治療の技。結斗は苦手だができないことはない。
麗華はできないっぽい……

白銀流

結斗が作った流派。様々な場合に備えて多くの流派の技を取り込み、それを効率的にかつ相手を倒すため、新たな流派とした。特に刀術、剣術、抜刀術に優れ御神流にも劣らないほど。他にも槍術などがある。

ブライトネスブレイカー

ツインセットアップ状態で結斗が使う集束砲。
麗華のジャッジメントの二倍。
なのはのスターライトの三倍の威力。

TALE 19 対策よ！（前書き）

え〜なんとなくやるきが出たので投稿しました・・

今回はわりと手抜きっぽいです。

それでもいい方は本文へのボタンを・・・push!

感想や意見お待ちして魔〜す

T A L E 1 9 対策よ！

アースラ艦内・なのはの治療室……

麗華 side

今なのはの部屋にはわたし、なのは、フェイト、クロノ、アルフ、ユーノ、リンディさん、エイミィがいる。襲撃の対策会議をするためだ。

リ「みんなそろったようね。それじゃ会議を始めるわ。まず初めに今回の事件はうちが担当することになりました。して今回の襲撃の犯人は……闇の書の守護騎士達と思われます」

闇の書って……

な「闇の守護騎士？」

ク「ロストログニア闇の書のプログラムさ。彼女達は人間じゃない。闇の書のプログラムだ。彼らの目的は闇の書の完成だ……」

やっぱり……前に一度管理局のデータにアクセスしたときに知

ったけど第一級管理ロストログア。

フェ「どうやって完成するの?」

エイ「闇の書には蒐集機能があつて魔力を蒐集すると本の項目が増えていって全部で666ページつめられるの・・・」

な「666ページ・・・埋めるとどうなるの?」

ク「分からない。管理局は今まで完成させなかった。」

クロノは悔しそうに言った。

いつものと違ってるね・・・。

リ「とりあえずそうゆうことよ、それで今回はなのはさんの世界で彼らは蒐集作業しているようなのでアースラではなく地球を拠点としたいと思いまゝす」

図ったようにリンディが話題を変える。

な「えっ?」

リ「ちなみになのはさんちの近くです」

な「わ~~~~い。やったああフェイトちゃん!」

フェ「うん。なのは!」

なのはとフェイトが喜んでいる。仲いいことはいいいことだね
!うんうん……

リ「つと麗華さんそれで話があるって……」

今度は私が話すことになった

麗「はい……。今回の襲撃の際に私が助かったのはこれのお陰なんです」

みんなに首のクリスタルを見せる・

アル「クリスタルかい？」

ユ「違う。多分デバイスだね」

麗「うん。そうこれはゆうがわたしにくれたストレージデバイス。」

リ「ゆうというのは？」

な「麗華ちゃん家族です。」

フェ「そして銀のことです」

ク「彼か！それで。それが一体どうしたんだ？」

麗「映像が入っていたの・・・」

わたしはクリスタルを机の上に置き

麗「記録読み込み開始・・・」

クリ「lord」

クリスタルは読み込みを始めた。すると映像が出てその中にはゆうの姿があつた。

結「え〜と。これを見ているということは僕はみんなの前にはいないみたいだね。」

ゆう！わたしは抱きしめたい気持ちを必死に抑える。ゆうの声がないつかしかった。

結「実を言うと嫌な予感はしていたんだ。確定的じゃないけど。っ
とそんなこと言ってる場合じゃないね。これが起動されたということ
とは麗やなのはたちはピンチになったんだろっね。そうだったら母
さんに言うといい。協力してくれるよ。・・・あと絶対帰るから

心配しないでね じゃ」

映像は切れた。

麗・な・フェ「ゆう（結斗君）（結斗）・・・」

リ「・・・これは・・・まさに結斗君の言つとおりね。」

ク「ええ。僕らは今瀕死の状態」

エイ「デバイスは壊され、まさにピンチですね」

お母さんに・・・

リ「麗華さんのお母様は？」

麗「一緒に住んでいます。元デバイスマイスターです」

な「そうなの!？」

なのはが驚く。

リ「その人の名前は？」

麗「白銀・・・白銀美緒です」

リ・ク・エイ「」「白銀美緒だって!？」」「

三人が驚く。

どうしたんだろ？

麗「どうしたんですか？」

ク「ああ。え〜と白銀夫婦はとても有名なんだ。ミッドのデバイスの機能を大幅に上昇させて多くの魔法論を確立したんだ」

クロノが冷静に説明してくれる。

知らなかった……

な「そうなの！？ふえ〜美緒さんが……あはは」

いまなのはゆうとわたしへの暴走しているときのことを思い出していることだろう。

エイ「白銀つてもしかしてって思ったけどやっぱりそうだったんだ」

麗「とりあえず相談してみます」

え〜とお母さんに通信つと……

美緒 side

麗華が出かけるの見送り、私はお風呂に入っている。
あゝあ麗華と一緒に入りたかったなゝ・

結斗と同様麗華もとても大好きなようだ。

麗華無茶しなければいいけど。あの子もゆうなみに自分を犠牲にしたりするタイプだからなゝ
しかも止められるのがゆうだけってのも始末が悪い……はあ・

美「んゝゝゝふう……。ゆう……」

湯船の中で伸びをしながら考える。

ゆうのことを……

回想……

・
・ PT事件の時、結斗がジュエルの暴走を無理やり止めてから数日後・

私が調べ物をしているときだった・・・

コンコン

結「母さん・・・？」

美「ん〜ゆ〜？」

私の部屋のドアがノックされた。

結「入ってもいい？」

どこか遠慮気味なゆ〜に私は不思議に思った。

美「いいよ〜どうしたの〜？」

結「話があるんだ・・・」

美「話？」

いつになく真剣な顔をしていたので私も真剣になる。

結「今回の事件良くないことがおきそうな予感がするんだ。あくまで勘なんだけど・・・そんな気がするんだ。で母さんにお願いがあんだ」

唐突に言うゆう。

美「……お願い？」

ゆうのお願いって？

結「もし僕がいなくなる状況になって麗華やなのはたちが母さんを頼ってきたらこれをやって欲しいんだ……」

ゆうからデータが送られてくる……これは！

美「ゆうこれって！古代ベルカ式のシステム、カートリッジシステムじゃない！どうやって……というよりよく解読できたわね……」

失われた古代のベルカ式。これをどうしてゆうが？

結「まあいろいろとね。それでこれは少々普通のベルカ式とはちがうんだ。これをみて……」

ゆうはその中のあるデータを見せる。

美「！これは……」

そのデータを見て驚いた

美「こっ！これゆうが作ったの？」

結「うん。焰美や瀨にも協力してもらってね」

焰・瀨「うむ。(はい)！」

美「すごいじゃない！」

私は思わずゆうをだきしめる。自分の息子がこれ程のものを考えていたことが嬉しかった。

結「わぷっ。苦しいよ母さん・・・でね、まだこれはまだ完成してないんだ。あとはデバイスマイスターの母さんの意見とかも取り込んでいくだけ。」

美「ってことはこれをわたしが完成させればいいのね。」

結「うん。で麗華たちがきたら・・・」

美「この機能を取り付ける。ということね・・・分かったわ」

結「ありがと。母さん」

回想終了・・・

ゆづの考えたあの機構は私も手を加えて完成していた。でもまさかほんとにゆづがいなくなるなんて……

美「ゆづつてば予知能力でもあるのかしら？」

一人湯船に浸かりながら言う。

おっ！誰かから連絡が……つと麗華ね。何かあったのかしら？

麗「お母さん。ってなんでお風呂に入っているの!」

麗華が真っ赤になりながら聞いてくる。

美「そりゃ入りたいからよ。でどうしたの？」

麗「お風呂なら出なくてもいいのに……。ってそんなこと言ってる場合じゃなかった。お母さん、お願いがあるの。」

お願い……

美「ゆづね……」

麗「知っていたの？」

美「ええ。頼まれていたから。それで、えくなのはちゃんと……
フェイトちゃんもかな？」

モニターに映っている、フェイトを見る。

麗「うん。そう」

美「分かったわ。とりあえず明日家に来てもらって。」

麗「うん、分かった。」

プチッ

モニターが切れる。

美「またゆづの言うとおりになったわね。……さてとそんなら準備をしなくちゃ！」

私はこれからすることに気合をいれ、お風呂から出た。

麗華 side

麗「っというわけで明日二人とも家に来て。」

なのはとフェイトに言う。

な・フェ「うん……」

リ「あの方が美緒さん……」

エイ「魔法文化を革新させた。デバイスマイスター……」

リンディさんとエイミィは呆然としていた……

はやてside

光が晴れるとそこには女の子？がおったんや……

シ「何者だ？」

シグナムが甲冑になり相手を警戒する。

？「……………」

しかし女の子？は黙っている。

ヴィ「答えないならっ！」

ヴィータがハンマーを構え女の子？へ攻撃しようとする

は「ちよっヴィータ！」

ヴィータを止めようとするが止まらなくて、ハンマーが女の子？へ当たる！咄嗟に私は目をつぶる。

ガシャンッ

しかしハンマーが当たることはなかった。

？「そこまでじゃ。吾が主を傷つけるのは許さん……………」

さっきまでいなかったのに今は女の子？の周りには三人の女の子がいた。

一人はヴィータの攻撃を刀で受け止めた赤髪の長髪の女の子。

もう一人は白色の肩くらいの髪をした女の子。
最後に金髪で赤眼の女の子。

どの子も私と同年代くらいやな・・・

それを見ての私の一言・・・

何で美少女ばかりなんや！

どの子も美少女やった。

はやて自身も美少女でしょうが！

？「焰美刀を下ろして。」

白髪の女の子が赤髪の女の子に言う。

？「じゃが！」

は「ヴィータも。そんな物騒なもんはおろしてな」

ヴィ「でもはやて！」

？「「は・や・く！」」

私と白髪の子の女の子の音が重なり女の子とヴィータは武器を下ろした。
んゝあの子とは気があいそうやな

？「ありがとうございます。えっと・・・」

今度は白髪の子が喋り始め私に語りかける。

は「はやてや。八神はやて。よろしくな」

？「はやて様ですか。私は瀨といいます。・・・あのはやて様お願いがあるのですが。」

は「ん？なんやろ？」

瀨「・・・真に言にくいのですが私たちのマスターの結斗様を休ませていただきたいのです」

一番最初にでてきた女の子の方へ向く。

は「ええよ。こっちにきて」

瀨「ありがとうございます」

私は結斗ちゃんを客間に寝かした。

八神家リビンググ………

結斗ちゃんを生前両親が使っていたベッドに寝かせて私たちは一階のリビンググでテーブルに就いていた。

静「では改めまして私は静。」

焰「焰美じゃ」

アリ「アリシアだよ」

赤髪の子と金髪の子が名乗る。

は「私はさっき紹介したから。」

シグナムみんなに自分らを紹介してもらおう

シグ「烈火の将シグナムだ」

ヴィ「鉄槌の騎士ヴィータ」

シャ「湖の癒し手シャマルです」

ザファイ「盾の守護獣ザファイラ」

漣「シグナム様にヴィータ様、シャマル様にザファイラ様ですね」

は「それで漣達はどうしていきなり私の家に現れたんや？」

漣「それは私たちも分かりません。ある事件で私たちは虚数空間にいました」

シグ「虚数空間だと！」

シグナムが席を立つ。

は「わっ！驚いたわシグナム」

シグ「すみません主」

再び座りなおすシグナム

は「それで虚数・・・空間？ってなに？」

シャ「魔力をキャンセルする場所です。ここでは魔法が使えません。なので一般的には一回入ると出てこれないため死んでしまうんですけど……」

澗「どうやって脱出したのかは分かりません。ですが結斗様が何かをしたみたいです。それに私たちはデバイスでした。ですがいまは人になっている……分からないことだらけです」

デバイスが人に……？

焰「そういえばアリシア？」

アリ「なに？焰美？」

焰「アリシアはどうやって蘇ったんじゃ？」

アリ「さあ……分からないの。でも所々思い出すとどうやら私もデバイスらしいよ。それもユニゾンデバイス」

焰「そうなのか？……これもゆうが何かしたんじゃろっ」

アリ「多分結斗君は私の生き返りたいって言う願いを叶えてくれたんだと思う……」

焰「かものう……」

とりあえず事情は飲み込んだわ。

は「……そっかそれじゃあしばらくはここにいてもええよ」

アリ「いいの!? はやて」

アリシアちゃんが喜ぶ。

は「結斗ちゃんは動かしたらだめっばいしな」

焰「ありがとの。……ん? はやてもう一回言ってくれんかの?」

は「えっ? うごか(その前じゃ……)にこにいても(行き過ぎぢやー)結斗ちゃん」

焰「それじゃ! はやてちなみにゆうは男じゃぞ。お・と・こ!」

……はい?

は「はい? 男の子!？」

アリ「うん。完璧に男の子だよ」

澁「はい。そのとおりです」

焰「うむ。まあ初見じゃ分からないかも……」

はあく……。あの容姿で男の子……世の中なんかまちがっとなるなあ……

は「事実は小説より奇なりやな……結斗君みたいな男の子がい

るなんて。いや男の娘？」

静「まああの容姿からすると無理ありませんが本人は気にしている
ので言わないようお願いします・・・」

は「分かったわあ。」

こうして八神家に新しい家族が増えました。

T A L E 2 0 に 続 く ・ ・ ・

TALE 19 対策よ！（後書き）

SKY「TALE 19」

瀬・焰「「です！（じゃ）」

SKY「今回は瀬ちゃんと焰美ちゃんですね。よろしく」

瀬・焰「「はい！（うむ）」

SKY「して登場しました瀬ちゃん焰美ちゃんの間化！容姿はこんな感じ」

瀬・fortissimo/Akkord:Bsusvierに出てる黒羽紗雪

の性格を優しくしたっばいの

焰美・fortissimo/Akkord:Bsusvierに出てる里村紅葉

性格は変化なし

SKY「こんな感じですよ！いや〜書いていて思ったんですけど、焰美紅葉とキャラががぶっているなあと思いました」

焰「そんなことはない！」

SKY「まあ夢のコラボでしょうか？なんせ敵の人が味方になるか

ら」

澁「まあたしかに……ですがやってなかったんじゃないですか？」

SKY「fortissimo/Akkord::Bussviera
やってません。買おうとは思っているんですけど三月の下旬に出
るほつもほしいのでどちらを買つか迷っているんです。っともうお
別れのときです。最後に一言」

澁「今回の期ではあまり結斗様はでないと思われませんがどうか長い
目で見てあげてください」

焰「ゆうのいない話なんて認めないが。ゆうが帰ってくるのを待つ
ていてくれ！」

SKY「以上でした。バイバイ」

T A L E 2 0 寝言は黙っていたほうがいいよ (前書き)

タイトルが自分でもなんでこんなものになったのかよく分かりません。とりあえずこれがあったるかなっと思いつけました。かんそくとかありましたらまってますのでお気軽にどうぞ。

TALE 20 寝言は黙っていたほうがいいよ

はやて side

澪ちゃんや焰美ちゃん、アリシアちゃんとの自己紹介をした家族会議の後、澪ちゃんたちは先に寝てもらい、私たちはシグナムからの意見があるということでもたリビングに集まったんや。

シ「主、いいのですか？あのような素性も分からないようなものを招き入れて。」

やっぱりそのことやったんか……

は「シグナム……あかんよ。そんなこと言ったら……」

シグナムをたしなめる。

ヴィ「でもさくはやて。あいつらだって魔導師なんだ。闇の書を狙ってくるかもしれないしさ。何よりはやての身が危ないかもしれないよ。」

拳句にヴィータまで不安を言ってくる始末やし……

シャ「そうね。幸い彼女達のマスターが意識が戻ってない今なら私たちでも太刀打ちできるわ。見たところ向こうの戦闘できる人は焰

美ちゃんに瀕ちゃんだけみたいだし・・・」

シヤマルまで・・・」

は「みんな落ち着いて〜。(ですが主!)大丈夫だよ〜」

私は落ち着いてみんなに話し始める。

ヴィ「どうゆうこと?はやて?」

は「あの子らは大丈夫、襲ってきたりはせんへんよ。」

シヤ「どうしてですか?」

は「あの子ら結斗君をめっちゃ心配してたやろ?好かれとる証拠や人に好かれる人は悪い人やない。間違いないでシグナムたちみたいなもんや」

わたしは笑顔でいった。すると・・・

シ「わかりました。主を信じます。」

ヴィ「はやてが言うならそうなんだろ」

シャ「はい はやてちゃんが言うなら」

ザフ「（こく！） 首を縦に振る」

みんなが了承してくれたみたいで良かったわ。

は「さて、寝ようか。ヴィータと一緒に寝よ！」

ヴィ「うん！はやて」

シ「おやすみなさいませ、主」

シャ「おやすみなさいはやてちゃん」

ザフ「おやすみ……」

は「みんなおやすみな」

私はヴィータと一緒に私の部屋に行った。
今夜も言い夢が見れそうだ……

フエイトside

桃「フエイトちゃん、麗華ちゃんどうだい？お味は？」

フエ「とてもおいしいです」

麗「はい、おいしいです。ありがとうございます」

美「そう、よかったわ」

今私と麗華はなのはの家高町家にお邪魔しています。会議の後なのはにアースラのドクターが

ド「影響はないみたいだね。これなら帰っても大丈夫だよ。でもリンカーコアがとても小さくなっているから魔法は使えないと見てね」

とのことだった。家に帰ろうとしたのはが少し話があると私と麗華に行ってきたので私たちはついてきてこのような状態というわけです。

士「ん？なのは元気ないな？なにかあったのか？」

士郎さんはなのはがあまり会話に入はいつていないことに気づいて聞く。

な「ん。なんでもないの……」

それに生返事で返すのは。

なんでもなさそうには全く見えないよ、なのは。

美由「悩みがあるんなら相談に乗るよ？」

なのはのおねえちゃんの美由紀さんが聞きます。

な「……あのね人が人を傷つける理由ってなんなのかな？って思ったの。」

なのはが静かに悲しそうに言いました。

士「……たしかに人は人を傷つける。それも簡単に……でもね」

士郎さんがなのはの問いにやさしく答えました。

士「それは自分の道を進むためなんだ。」

な「自分の道？」

士「人には必ず譲れないものがある。それが否定されたり、他人が立ちふさがったりする。だから傷つけ合ってしまうんだ」

な「それじゃあどうすればいいの?」

士「簡単だよ。会話をすればいい。相手のことを知ろうとするんだ」

なのははハツとする。

そうだよなのは。わたしとなのはが出会ったときそうしてくれたでしよ。

懸命に私に呼びかけてくれた。

な「!・・・そうだよね。やっぱりそうなんだよね」

さっきまで暗かったなのはの顔は笑顔になっていた。

うんよかったよなのは・・・

桃「さて、冷めないうちに食べましょう」

全員「はい!」

こうして夜は更けていった。

麗華 side

今私とフェイトはなのはの部屋にいる。夕食の後帰ろうとしたら
桃子さんが

桃「今日は遅いし二人とも泊まっていったら？女の子の一人歩きは
危ないし、ねえあなた」

士「うん、そうだな。明日は日曜だしどうだろ？二人とも」

と言われて私たちは泊まらせてもらうことになった。
時刻は深夜、日付かわり始めた頃、
寝ているのはとフェイトの横で目を覚ましていた。

麗「ゆう……ぐすっ。ゆう……ひぐっ……」

さっきクリスタルの映像を見て私は涙が溢れてくる。
もう泣かないで決めたのに……
ゆづに会いたい。触れたい。言葉を聞きたい。
いろんな願いがごちゃ混ぜになって私の中を駆け巡っていく。

な・フェ「麗華ちゃん……」「麗華……」

呼ばれて、涙をぬぐい見るとなのはとフェイトが起きていた。

麗「ごめんふたりとも。起こしちゃって……」

な「ううん。いいんだよ、それよりも泣いているけどどうしたの？」

フェ「結斗のこと？」

なのはとフェイトが優しく接してくれる。

麗「ぐすっ……うん。さっきのゆづの姿をみたらなつかしくなっちゃってね。でももう大丈夫！」

強がりだった。全然大丈夫じゃない。まだこんなにも胸が苦しい。

ギョッ

そんな私を見通していたのかなのはとフェイトは私に抱きついた

な「大丈夫。結斗君は生きてる。きつとどこかで・・・」

フェ「うん。そうだよ・・・」

二人が私を抱きしめてくれると再び抑えていた気持ちが溢れてきた。

麗「うわあああああん。私が・・・ひぐっ・・・あの時もつと・・・うまくやって・・・いれば。(うん・・・)(虚数・・・空間に落・・・ちなければ。ゆうがいないと・・・ひぐっ・・・不安で。もし死ん・・・でいたらって思うとたまら・・・なく怖くなってどうしようか分からなくなっ

な・フェ「大丈夫・・・」

そして私はずっと泣き続けた。

なのはside

あれからしばらくして麗華ちゃんは泣きつかれたのか、寝てしまいました。

フェ「麗華無理してたんだね……」

フェイトちゃんがそつと言いました。

な「うん。麗華ちゃんはずつと無理してた。結斗君が帰ってくることを信じながら帰ってこなかったらなんて悪いほづにも考えちゃったんだと思う。」

フェ「そつか……麗華のためにも結斗早く帰ってきて欲しいね……」

な「うんそうだね。フェイトちゃん、さてもうそろそろ寝よ。明日は日曜だけど美緒さんの家に行かなくっちゃ行けないしね」

フェ「うん。じゃおやすみなのは。」

な「おやすみフェイトちゃん……」

私たちは結斗君が早く帰ってきてくれることを祈りながら眠りにつ

きました。

麗華 side

チュンチュン……

朝の小鳥の声と私に当たる日の光で私は目を覚ました。

麗「どうしてなのは、フェイトが……？………そっか昨日泊まったんだ……。」

それから私はその後のこと。派手に泣き明かしたことを思い出した。

な」「うづうん……………むじゅむじゅ……………」

フェ「結斗……………えへへ……………」

二人が幸せそうに夢を見ている。

麗「ってフェイトはどんな夢をみてるのっ？ゆづが出てきたみたいだけど……………」

私は注意深くフェイトの寝言を聞いてみた。

フェ「えへへ……………だめだよ。結斗、そんなところ。んもっしよ
うがないなあ……………じゃあキスマでね ん……………」

フェイトが顔を寄せてくる。

パシンッ！

腹が立ったので叩いて起す……………

フェ「いったゝゝゝい。……ん？あれ私何の夢を見たの？」

フェイトはそういつて？がっているが表情は笑っている。
これは覚えている！そうにちがいない！

麗「随分といい夢だったことで……フェイト……」

フェ「あつ麗華おはよ……」

のんきに挨拶してくるがそうはいかない！

麗「フェイトゆづの夢見てたでしょ……内容は？」

フェ「んゝ確か結斗と結婚して幸せになる夢だったよ」

あっけからんというフェイト……

麗「むきゝゝゝ。ゆづと結婚するのはわたし！」

フェ「違つよ……私だよ……フフフ」

両者を行き交つゆづをめぐる戦い……

麗「つとなのははさすがに違つわよね……………」

フェ「聞いてみよう!」

今度はなのはの寝言を聞く私とフェイト。

ベッドにいる女の子に詰め寄る女の子二人なかなか見れない光景である。

な「むにやむにや……………えへへ……………」

聞いてみたが特にゆうは出てこない。

麗「ふう、さすがになのはもっていう訳じゃなかった。」

フェ「うん……………ちょっとまって!なのはなんか言ってる……………(結斗く〜ん……………えへへわたし子供は二人欲しいな……………女の子と男の子一人ずつ。うんきつと男の子は結斗君に似てかっこいいだろうなあ。っえ!?そんな女の子は私に似てかわいいだなんて……………えへへ……………」

あんたもかい!

麗・フエ「……………」

いいよねこの子成敗しても。恋人同士ならともかく、結婚まして子供！？

私とフェイトは互いを見る……

麗・フエ「（こく…………）」互いに頷く

さつてと、寝ぼすけを起こそうか…………

麗・フエ「せ〜の…………ちつちとおきなわ……………いっい
いっい」

な「ふみやつ!？」

奇妙な声で飛び起きたなのはであった。

あ~~~~~すっきりした.....。っへっ

next to TALE 21!

TALE20 寝言は黙っていたほうがいいよ (後書き)

SKY「TALE20」

麗・な・フェ「」です！！！」「」

SKY「というわけで今回はこんな感じでした。結構シリアスぽくしました。後最後は笑えるような感じ？にしました・・・」

麗「え」とやっと私中心の話っぽくなってきたわね」

な「うん。麗華ちゃん今回主役なのにあんまりセリフなかったよね」

フェ「うん。やっぱり結斗のパートナーになれるのは私だけかな？」

麗・な「(ピクッ)」

SKY「空気が変わった？」

な「あはは何を言ってるのかな？フェイトちゃん結斗君にふさわしいのはわたしだよ」

麗「なのはまで何を血迷ってこと言っているの？そんなの私にきまってるじゃない」

S K Y「ひい！」

三人「うふふふふ……」

S K Y「三人が怖すぎるので今日はここまでバイバイ。ひい！」

三人「うふふふふふ……」

T A L E 2 1 桃色と金色は怖いよ…… (前書き)

タイトルからして意味深ですが、気にしないでください。
今回もがんばりました。

TALE 21 桃色と金色は怖いよ……

麗華 side

麗「なのは〜いくよ〜。」

なのはに呼びかける

な「分かったの〜ちょっとまって〜……」

帰ってきたのは時間延長の言葉。

桃「なのはったら。ごめんなさいね麗華ちゃん、フェイトちゃん」

フェ「いえ、いいんです。なのはもあと少しで来るので。」

桃子さんの言葉に返すフェイト。

・ 今から私の家に行くところなんだけど、なのはがこの調子で……

桃「あの……麗華ちゃん、フェイトちゃん少し聞きたいことがあるんだけどいいかしら?」

桃子さんが不安なように私とフェイトに聞いてくる。

麗・フェ「はい。いいですよ」「はい。構いません……」

桃「ありがとね。二人とも。あのね聞きたいことはなのはこのことなの。最近あの子よく出かけていってるし、帰ってきたらへとへとになっっているのもしばしば。それでなのはがやっていることを知っているかしら？」

纯粹に答えを求める桃子さん。

なのはのことだからばれないと思って魔法の練習とかをしていたんだろう。

麗・フェ「……………」

私たちは返答に困った。魔法のことは話せないし、かといっていわないと不自然だし……………。あゝもう！こつゆつときゆつがいてくれれば良い案とかを思いついてくれるのに！

桃「……………そう。話せない事なのね……………。それにあなたたちは関わっている？」

麗・フェ「はい……………」

桃「そう……………あつ勘違いしないでね。別に責めている訳じゃないの。あの子がそれ程必死になるなんてあまりなかったから。それじゃなのことよろしくね」

そういつて家に入っていった桃子さん。

麗「完璧にばれてるわね」

フェ「うん。魔法のことは知られてないけど……」

麗「この分だとなのはの家族全員かな？」

フェ「う……うん。多分……」

な「お待たせ〜」

私たちが話し合っているとなのはが大急ぎで来た。
そんな走ったら転ぶ！

な「うにやつ!?!」

スッテーン

見事に転んだ……

麗・フェ「……はあ」

私たちはただ呆然とそれを見るしかできなかった。

白銀邸へ移動中……

な「これから結斗君の家に行くんだよね？」

道中なのはがなにやら意味深に言うてくる。

麗「ゆうとわ・た・しの家ね！」

な「楽しみなの」

なのはの癖に私を無視するなんて！

フェ「そういえば麗華」

心の中で訴えているとフェイトが声を掛けてくる

麗「何？フェイト。」

フェ「今朝はいい夢見れた？」

昨日の夜のことを言っているんだろうな。

麗「うん。ありがと二人とも久しぶりにゆっくり眠れたよ」

フェ「そう良かった。でも夢の途中で起こして欲しくなかったなあ……」

麗「それは別。」

な「そうだよ。私だってあと少しで結斗君と……ぶつぶつ……」

フェ「私だってそうだよ……」

鏡「まっゆうが関わると麗華は豹変するからね……それにねもつとすごいしてるよ、麗華は……」

な「どつゆつこと？鏡月」

鏡「虚数空間で怪我した麗華を治療したのは結斗なんだけど」

ちよ！？それは！

フェ「結斗なんだけど？」

麗「鏡月！」

その先を言わせないために鏡月を諫めたが、

鏡「あはは。その治療の仕方がキスだったの」

言われてしまった。

な・フェ「……………えっ？」

キ~~~~

先を歩いていたのはとフェイトが不気味に振り返る……
笑顔だった。とてつもなく笑顔だった。

な「レイカチャ〜ンどうゆうことかな〜？」

フェ「ソウダネ。どうして結斗とキスしてるのかな？」

麗「……………あはは」

ダッシュユ！（私が逃げようとする音）

ガシッ！（なのはとフェイトが私の肩を掴む音）

グルンツ！（首を回転されてなのはとフェイトの顔に向かされる音）

そんな！逃げ切れないなんて・・・

な・フェ「ちょっとお話ししようか・・・・・・・・・・？」

えっ？ちよつと！これはいわゆるオハナシフラグ？
嫌！だめ！ゆうのならまだしも二人のなんて！

いや~~~~~

親愛なる結斗様・・・

ゆう元気ですか？私は頑張っています。（生きることに）
早く戻ってきてください。・・・・・・・・

はやて side

うん？どっかから女の子の音がするわ………。気のせいかな？
っとお馴染みの八神はやてです

昨日から新しい家族、結斗君達がいるようになって今日がはじめて
の朝です。

ということ朝ごはんを作ろうとしたんやけどな既にそこには瀨ち
ゃん、焰美ちゃん、アリシアちゃんがいて朝ごはんの準備をしてく
れていたんや。

は「瀨ちゃん、みんなおはようさん。」

焰「おはよう、はやて……。」

アリ「おはよう、はやてちゃん」

静「おはようございます。はやて様、失礼と思いましたがキッチン使わせてもらっています」

は「ええんよ。それより焰美ちゃんたちは料理作れるん？」

私は疑問を聞く。

静「結斗様がよく料理していらっしやっただのでそれを覚えています」

そうなんや……

焰「安心して良いぞ。ゆづの料理は絶品だから。それを見ていた私たちもそこそこ出来る……」

は「そうなんや。結斗君はどう？」

アリ「まだ起きないよ。相当疲れているらしいの……多分一週間くらいの間には起きると思うんだけど。」

は「そうか。そや私も手伝っわ」

そついいわたしは手伝おうとするが

澁「いえ、最初の朝は作らせてください。結斗様には劣るかもしれませんが料理で感謝を表したいのです」

は「分かったわ〜じゃお願いするわ〜」

断るのも失礼なので私はお願ひした。
楽しみやね澁ちゃんたちの朝ごはん

結果的に言つとめっちゃおいしかった。澁ちゃんらこれなんやから
結斗君が作るとどれくらいおいしいんやろ？

アリシア side

朝私たちが朝ごはんを作つてはやて達から絶賛されて数時間今は午後。

はやては図書館。ヴィータ達はそれぞれ用事があるとかで家を空けている。私、焰美、漣だけだ。

この際に今の状況を整理しておこうと漣が言ったのでリビングにいる私たち。

漣「さて状況整理しましょうか。現在私たちがいるのは八神はやて様の家。結斗様は意識不明。」

焰「我らが人間になつてゐる理由は不明。そしてゆうの持つてゐるあの灰色の魔導書の詳細も不明」

アリ「私はユニゾンデバイス。おそらくあの灰色の書の管制人格になつてゐる、ことくらいかな？」

とりあえず私たちは分かっていることや疑問点を挙げる。

漣「そうですね。それくらいですか・・・？あとは・・・はやて様ですね。おそらくシグナムたちは守護騎士ですね。はやて様の事を主と呼んでいましたし、はやて様の部屋で怪しい魔導書も発見しました」

焰「・・・・・・・・あまり分からんな。やはりゆづが起きるのを待つしかないか・・・・・・・・」

帰結として焰美がまとめる。

漣「やはりそれが最善でしょう。」

漣も賛同する。

アリ「うんそうだね。・・・・・・・・私結斗君の様子見てくる。。。」

焰「うむ。頼むの・・・・・・・・」

頼まりました……

私は焰美からの声を聞き結斗君のいる二階に行った。

結斗君が寝ている場所ははやての両親が使っていた部屋です。部屋に入り、私は結斗君の状態を見る。

アリ「ふう。どこも異常はなさそう……」

私は結斗君の手を握り、声を掛ける。

私が生きていて、風邪になったときお母さんがこうして私の手を握ってくれて安心したため私もやってみる。

アリ「ありがとう。結斗君私あなたのお陰でまた生きられる。」

ピクッ

アリ「え？」

今動いた！？

アリ「結斗君！？分かる？」

再び手を握る私、それに対し徐々に握り返してくれた。

結「う……………」

気がついた！

澪達に念話を…………

アリ「（焰美、澪！結斗君が気がついた！）」

焰「（なに！？）」

澪「（本当ですか！？）」

急いで二人に知らせると

バンッ

ものすごい速さで二人がやってきた。

焰・澪「ゆう！（結斗様！）」

焰美達の声で結斗君の瞼が上がった。

結「う……。焰美、澪。」

焰「ゆ～～～う」

澪「結斗様～～」

結斗君の反応に二人は抱きついた。

結「わっ！どうしたの、二人とも。涙流して。」

澪「結斗様が目を覚ましましたことが嬉しいんです……」

結「そっか。それより二人？僕の手を握ってくれたの」

焰「違うの。アリシアじゃ」

結「アリシアちゃんか？」

結斗君が私のほうへ顔を向ける。

結「そっか。良かった。成功したみたいで・・・」

アリ「結斗君あなたが私を蘇らせてくれたの？」

結「うん。ちょっと違うかな？人間にすることはできなかった、からわかっていると思うけどユニゾンデバイスにするのが精一杯だったからね」

アリ「それでもありがとう！また生きることができるから」

そう言っただけ私も結斗君に抱きついた。

結「わっ。アリシアもなの？」

焰美、瀨に続いて私も抱きついたことで驚く結斗君・・・

良かった。本当に良かった。

目を覚ましてくれて。

n
e
x
t

t
o

T
A
L
E
2
2
!

TALE21 桃色と金色は怖いよ……（後書き）

SKY「TALE21です。今回はアリシアさんに来ていただきました」

アリ「みんなよろしくね」

SKY「というわけでやっと結斗君が目を覚ましました」

アリ「うんよかったよ」。それとありがとSKYさん私を登場させてくれて」

SKY「いえいえ、いろいろな作者様方の二次創作を拝見していますがアリシアちゃんが出てるものって少ない気がしていたのでここでは中心人物ということにしたんですよ。っともうそろそろですか。アリシアちゃん一言……」

アリ「はい。えっと、今回から私も出てくるのでどうぞ応援よろしくお願いします（ペコリ）」

SKY「それではまた次回、バイバーイ」

アリ「バイバーイ」

TALE 22 創醒の書(前書き)

祭りだ！祭りだ！

一気にだします！

感想とかがありましたらどんどん下さい。

TALE 22 創醒の書

結斗 side

僕が気がついて数分。アリシアや焰美、澪はずっと僕に抱きついていて僕は身動きが取れない状態だった

結「みんな落ち着いて……それよりここはどこなの？見たところ僕の家じゃないみたいだし……」

部屋が全然違うしね。

澪「ここは八神はやて様の家です」

八神はやて？誰？

アリ「女の子だよ。足が不自由だけど優しい女の子なの　結斗君を休ませてくれたし。」

焰「私達を気遣ってくれた。」

そうなんだ。

結「とりあえずお礼を言わないとね。その子に……八神さんは今どこに？」

ここにこないと言っことは今はないということか

アリ「今は出ているよ。もうすぐ帰ってくると思っけど……（た
だいま〜）あっ！帰ってきた！」

アリシアちゃんが急いで部屋から出て行く。
それを見計らってか焰美が話しかけてきた。

焰「ゆういつたいどうゆうことなんだ？私らが人間になっていたり、
アリシアが甦らせたり……」

やっぱりきいてくるよね。

結「その事は八神さんを交えてね。言っよ……」

瀨「とりあえず起きますか？」

そう言って僕の背中を支えてくれる瀨。

礼を言い、起き上がるとアリシアちゃんに体を支えられた女の子と
アリシアちゃんが部屋に入ってきた。
彼女が八神さんだろう……

は「おお〜ほんまに起きとるね。良かったわ。」

結「あなたが八神さん？」

驚く女の子に聞く。

は「そうや。ここの家の主人八神はやてっていつんや、よろしくな」

結「そつか。初めまして、白銀結斗っていいいます。助けてくれてありがとう」

丁寧に挨拶する僕。

は「ええんよ。困ったときはお互い様や」。それより体の調子はどうなん？」

結「うん。ちょっとね・・・まだ動けそうにないんだ・・・」

少し言葉を濁して言う。

瀨「結斗様、はやて様は魔法の関係者です。だから大丈夫です」

補足するように言ってくれる瀨。

結「そうなんだ。八神さんも魔導師だったんだね」

は「そうゆうことや。あと・・・八神さんじゃなくてはやてでええんよ、なんか苗字を呼ばれるの慣れてなくってな」

結「そつか。じゃ僕も結斗でいいよ。はやて」 笑顔

は「／／・・・（かわいい笑顔やな。ほんとに男の子か疑ってしまうわ・・・）」とここで動けないやったらここにいてもええで

少し顔を赤らめながら言うはやて。大丈夫かな？

結「そんなつ悪いよ。僕みたいなのがいたら迷惑だとおもうし。」

瀨「私は賛成です」

迷惑がかかると思っていたら瀨が賛成してしまった

結「瀨！」

瀨「確かに目は覚まされましたがまだ結斗様は重体です。」

焰「体動かんしな」

適切に言ってくる瀨と焰美。・・・はあ仕方ないか・・・

結「ごめんはやて。じゃあ一週間くらいいさせてもらって良いかな？」

事実なのではやての確認の言葉を聞く。

は「ええよ。家族が増えるみたいで私はうれしいし、あの子らも喜ぶしな」

あの子ら？

は「あつ私の家族なんよ。後で紹介するな」

不思議がっているとはやてが説明してくれた。

結「そっか。子ってことは使い魔か何かなの？」

は「違うよ。私の騎士達や」

？・・・

結「はやて、それってデバイスから出てきた？」

少し気になったので聞いてみる。

は「うん。闇の書っていうデバイスやで」

！・・・それって管理局に第一級指定ロストログアに指定されているやつじゃないか・・・

アリ「どうかしたの？またどこか痛いの？結斗君？」

考えていたところにアリシアちゃんが心配してくれた。

結「ううん。なんでもないよ、でもまだ少し寝ていたいかも・・・」

アリ「そっか、じゃあ寝たほうが良いよ。私たちのことはまた後で
でいいから」

結「ありがと、はやての家族の人たちがきたら起こして」

アリ「分かったよ」おやすみ結斗君・・・」

焰「おやすみ、ゆっ」

澗「おやすみなさいませ、結斗様」

は「お休みな〜結斗君・・・」

みんなから言われて僕は眠りにつく・・・
僕の考えが正しかったら、はやての足が悪い原因は・・・

麗華 side

なのはとフェイトからのオハナシを受けて数分後、やっと家に着いた。

はあ〜はあ〜・・・どうして私がこんな目に。
ゆうがいれば收拾つくのに・・・

な「ここなの？」

家の門の前で聞くのは……

な・フェ「」（大きすぎるよ……）「」

大体面積が五百坪くらい。

麗「そうよ。ここが私の家……さあ入ってきて。」

なのは達を招き入れる。

な・フェ「」おじゃましま〜す「」

麗「えっとおかあさ〜ん

シ〜〜〜ン

呼びかけたが応答なし。

寝てるのかな？

麗「いないことはないし、どこにいるんだろ？」

お母さんを探す私。後ろについてくるのは、フェイト。
しばらく探し回って。見つからなかった

麗「んどこにいったんだろ？」

鏡「麗華、研究室じゃない？」

あつまだあそこがあつたか！

そして私達は地下の研究室に着いた。

フェ「ここは？」

麗「私達の研究室よ。お母さんはお父さんがいなくなつてからは使つてなかつたけど、私とゆうは使つてるの・・・」

扉を開け中に入る。

な「ふえ〜すごい本。」

入った途端驚くなのは・・・

私達の研究室の大きさは市立の図書館くらいの大きさだ。

そのところどころに本棚があり、本が所狭しと並んでいる。

麗「前にいったでしょ。なのは、ここでわたしとゆうは魔法を勉強したつて。」

な「えっ！？ってことはこれ全部結斗君読んだの？」

フェ「どうゆうこと？なのは……」

な「えっとねフェイトちゃん。結斗君が魔法に詳しいのはここにある本全部読んで理解したからなんだって！」

フェ「……へ？ちよつとここにあるの千冊以上あるよー！」

麗「そのとおり。驚いた？」

な「驚いたもんじゃないの……」

フェ「うん……」

呆気にとられているフェイトたちを尻目に私はお母さんを探していた。

そして机にもたれかかり寝ているお母さんを見つけた。

……＼シャツ一枚の……。

麗「お母さん……おきて。こんなところでしかもそんな格好で寝ていると風邪引くよ〜」

お母さんを揺り動かしながら起こす。

美「う〜ん。麗〜〜」

しかし起きずに抱きついてくるお母さん。

麗「ちょっと！寝ぼけてないで、早く起きないと……」

小声でお母さんの耳元で言うと……

美「！？っはい！起きました。すぐに起きました。」

一瞬で目を覚ました。ついでに敬礼もしている

麗「おはよ」。お母さん、来たよ。」

美「おはよ、麗。もうその起こし方やめてよ……。私それやられたら泣いちゃうわ……」

麗「起きないお母さんが悪い……」

ちなみに言った内容はこちら。

(起きないと、口聞いてあげないよ……)

これでお母さんは反射的に起きる。もしゆづがやったらもっとすい反応だ。

美「……とりあえず、なのはちゃん、フェイトちゃんもいるわね。」

な・フェ「はい……」

美「今からすることは極力秘密ね特に管理局の上層部には……」

フェ「どうしてですか？」

美「これは管理局史上異例のことよ。」

麗「それで一体何をするの？」

美「擬似リンカーコアを入れます。あとカートリッジシステムも……」

麗「ちょ！？それって大丈夫なの？私達のデバイスインテリジェントだよ！昔のベルカの人たちのデバイスはストレージだったはず……」

美「それを可能にしたのがこのゆうの企画よ。安心して、デバイス、マスターともに負担は極端に少ないわ。なんせゆうがあなた達のために作ったものよ。」

お母さんがやめるようにも言ってくれる……。けど……。今のままじゃどうしたってあの騎士達には勝てない……。それに私はゆうのパートナー！もっと強くならなくちゃ！

余談だがなのはとフェイトも同じことを考えていた……。

麗・な・フェ「ゆうが（結斗君が）（結斗が）私のために……」

美「でも最終的に決めるのはあなた達……。」

麗「お母さん！お願い、鏡月いいよね？」

鏡「もちろん、もしやらなかったら無理やりでもしてもらったわ」

な「私も！いいよね、レイジングハート？」

レイ「はい！もちろんです！」

フェ「私達も！」

バル「はい！」

みんな賛成。

美「……分かったわ。それじゃみんなデバイスを出して！期間は三日。三日かかるわ、分かっていると思うけどくれぐれも擬似リンカーコアやあまり詳しいことは言わないでね。」

それにみんな首肯して自分のデバイスをお母さんに渡したのであった。

結斗side

あれから僕はしばらく眠って今は午後八時。はやての家族はみんな帰ってきて現在は僕のいるところに集合中……
アリシアちゃんたちもいる。

結「改めまして、僕は白銀結斗。焰美や澗、アリシアちゃんたちのマスターです」

アリ「結斗君！私のことはアリシアで良いって！」

結「じゃ僕も結斗で……っと話がそれました。何か質問ありますか？」

シャ「はい。どうやって虚数空間から来たんですか？あそこは魔力がキャンセルされるから出てこれないはずですよ」

向かって斜めのところに座っていたシャマルが僕に質問してくる。

結「えっと、それはこの書が関係しているんだ」

そうやって僕は魔導書を取り出す。

は「それは？最初結斗君が持っていたものと色がちがうんだけど・・・」

おそらく本の覚醒前の色を言っているのだろう。

結「同じものだよ、はやて。これは創醒の書。これのお陰であそこから出てこれたし、焰美達やアリシアを甦らせることができたんだ・・・」

回想・・・・・・・・

あの時僕はどれくらい眠ったのか分からなかったけど目が覚めたんだ。

結「うつ・・・ここはそうか。虚数空間か・・・？これは？」

僕が目が覚めてみると右手には見慣れない本があった。灰色の本だ。

結「澗これは一体？」

澗・焰「・・・」

二人からの反応がない・・・

結「二人とも？・・・まさか！」

咄嗟に手の甲を見る。すると二人のコアの色が褪せてきていた。

結「どうしてこんな！」

！・・・そうかここは虚数空間。通常の場所だと休んでいると魔力は回復するけどここでは魔力が全く無い。だから回復できないんだ。

どうすれば！二人を・・・

パアアアアア・・・

一人で焦って考え込んでいると右手の本が光りだした。すると本から？情報が頭の中に流れ込んでくる・・・

結「創醒の書？・・・これなら二人とあとアリシアちゃんを助けられる！」

そして僕はありったけの魔力を本に注ぎ込み、魔法を発動した。

回想終了・・・・・・・・

結「ということさ・・・・・・・・」

僕が虚数空間であったことを話した。

アリ「だからあんなに魔力が減っていたんだね・・・」

焰「ゆう、ということは我々はもうデバイスではないのか？」

結「いや、そうじゃない。これは実際にやったほうがいいかな。瀨、焰美。二人ともデバイスになれって念じてみて？」

焰・瀨「はい……」

二人が目を閉じると、焰美達の体が光りだした。そして、その光は僕の下に来て耳のピアスになった。

焰・瀨「!?!」

はやて達「!?!」

二人が驚いているのが分かる。ついではやて達も……

結「ふふ、二人とも。今度は人間になれって念じて?」

そういつて再び辺りを光が包み、そこには元の姿の瀨と焰美がいる。

は「は、すごいな!これその創醒の書のお陰ってこと?」

結「うん。創醒の書ははやての闇の書よりも古く作られてね。全ての魔法の原点ともいえるんだ。あと覚醒前は灰色、覚醒後はごらんのとおり、白色だ。」

は「そうなんや〜」

そういつてはやてが机の上にある本に手を伸ばす。
しかし……

は「きゃっ!」

触れる前にバリアみたいなものに遮られる。

ヴィ「はやて!？」

結「だ、大丈夫? はやて? この本は僕とアリシア以外は触れられないようになってるんだ。」

は「大丈夫や。ちょっとびっくりしただけや。」

結「良かった。さてここまでで何かありますか?」

は「はやてと守護騎士達に聞く。……何も無いようだ。じゃこれからは……」

結「はやて?」

は「ん? なに結斗君?」

結「君の足が悪い原因が分かった」

シ「それは本当か!」

シグナムが立ち上がる。
他のメンバーも驚きを隠せないようだ。

結「はい、闇の書の守護騎士。烈火の将シグナムさん？」

ヴォル「!??」

ヴォルケンリッター皆さんが一瞬で騎士服になり、僕らを睨みつける。

結「あと。僕らはあなた達に危害を加えません。」

ヴィ「そんなの信じられるか！」

赤服のヴィータが叫んだ。

結「とりあえず話を聞いてください。これはあなたたちに有益な情報です……」

なるべく刺激しないように言う。

は「みんな、落ち着いて。それで結斗君情報って？」

シグナムたちを落ち着かせ聞いてくるはやて。

結「おそらくはやての足が悪い原因は闇の書だよ。あれがはやての

リンカーコアに負担を与えて足の麻痺と言つ形で出てきているんだ」「
シャ「そつそんなことありません！私達は守護騎士プログラムで
す。それが本当なら私達が気がつかないはずないわ！」

シャマルが僕の言葉を否定する。

結「そうですか・・・ではヴォルケンのみんなに聞きます。夜天の
書と言葉に聞き覚えは？」

埒が明かないので聞く・・・

シ「私は聞き覚えはない・・・」

ヴィ「わたしも・・・」

他の二人も首を横に振る。

結「夜天の書と言つのは闇の書の本当の名前です。はやて、闇の書
に触つても良いかな？」

は「えっ？ええよ、はい。」

闇の書を渡してくれるはやて。

結「・・・・・・・・」

僕は闇の書に触れ、情報を読み込む。・・・・・・・・これは！

澁「結斗様何を？」

事情が分からない澁が聞いてくる。焰美たちも同様だ。

結「……ふう。やっぱり本当の名は夜天の書。ですが何か大きなバグみたいなものがあるってこれがヴィータ達が覚えてなかった理由でしょう……」

は「そうなんか。それよりなんで本に触ったん？」

結「創醒の書のお陰でね。デバイスや魔法に触れると構造やら辿ってきた道みたいのが分かるんだよ……」

は「は、すごいな。」

驚くはやて。

結「それよりはやての足が悪いのもその大元がさっきのバグと言うことも分かりました。」

シ「どうやったらそのバグを直せる？」

今まで黙っていたシグナムが聞いてくる。

結「おそらく直すのは不可能です……」

ヴィ「じゃあどうすんだよ!」

僕に詰め寄ってくるヴィータ。

結「直すのはだよ、ヴィータ。」

ヴィ「どうゆうことだよ……」

結「僕が創醒の書から、夜天の書のデータを復元して夜天の書を初期状態に戻す。そしてなるべくバグのみを切除する……」

シャ「成功するの？」

心配そうにたずねるシャマル。

結「時間がかかりますが、成功させて見せます。」

僕は意思表示する。

シ「どうしてそこまでしてくれる？我らと主のために……」

そこでシグナムが聞いてきた。

結「あなたたちははやての家族でしょ。家族が離れ離れになるんてあつちやいけないんですよ……だからです。」

シ「……そうか。礼を言おう。後お願いだ主を助けてくれ」

頭を下げるシグナムとヴィータ達。

結「はやてとあなたたちを助けます……」

は「……え」と、どうゆうことなん？」

はやては理解できなかったみたいだ。

ヴィ「つまりはやての足を結斗が直してくれんだよ！はやて！」

嬉しそうに言うヴィータ。

は「ほんまかいな!？」

驚くはやて。

結「ほんまだよ。後ねはやてこっちにきて」

僕は動けないからはやてを呼び寄せる。

は「なんなん？」

尋ねるはやてには答えず、僕は足に触れる。

結「穢れを浄化。プリフィケート」

手が光り、はやての足に光が移る。

は「何したん？」

結「はやてゆっくり足に力を入れて」

は「う、うん。………」

そしてはやては立った。自分の足で、

シ」どっどっうゆうことだ！結斗！」

驚くシグナムに僕は説明する。

結「つい事です。バグがはやての足に穢れとしてあったのでその穢れを浄化しただけです。でも一時的です。バグは再生するので一日でいうと4〜5時間が限界です。」

ヴィ「つまり一時的な治療と言うことが・・・」

結「そのとおり・・・どうはやて？」

は「・・・これは夢？」

夢じゃないよ・・・

結「夢じゃないよ。一時的だけど僕がいればはやては少しだけでも歩ける。」

は「ぐすっ。わ~~~~ん。」

するとはやては泣き出してしまった。

結「よくがんばったね・・・」

僕ははやての頭をはやてが泣き止むまで撫でていた。

ヴィータ達や瀨達はそれを泣きながら見ていた。

n
e
x
t

t
o

T
A
L
E
2
3
!

T A L E 2 2 創醒の書（後書き）

S K Y「T A L E 2 2」

結「です！」

S K Y「というわけで今回は久しぶりの結斗君です」

結「みんな久しぶり」

S K Y「今回は久しぶりに出ましたがどうでしたか？結斗君」

結「うん。話せてよかったです。それと大きく原作をブレイクしましたけどいいの？」

S K Y「いいですよ。足が使えないなんてあまりにも不憫でしょう。だからですよ、っと今回はここまで。一言どうぞ・・・」

結「この期はあまり僕が活躍しないらしいけど麗達やなのはたちを見て応援してほしいです・・・」

S K Y「ありがとうございます、それではバイバイ」

結「バイバイ」

TALE 3 日常よ(前書き)

今回はわりと長め？

まあ読んでやってください。

TALE 23 日常よ

なのはside

美緒さんにデバイスの拡張を頼んだ後、私達はリビングでお茶をしています。

どうやら美緒さんがケーキを作ったので試食して欲しいらしいとのことです。

美「えつとここにっど……あつたあつた」

そういつて

美緒さんの手には1ホールのチョコレートケーキがあった。

な「わあああ！おいしそうですね！美緒さん」

それを見てはしゃぐ私。隣のフェイトちゃんもケーキがおいしそうなのでそわそわしている……

美「ありがとなのはちゃん、麗紅茶持ってきてくれる？」

麗「分かった。お母さん」

そう言つて麗華ちゃんを席から立たせ、自分はケーキを切り分ける美緒さん。

美「ありがとね、なのはちゃん、フェイトちゃん……」

麗華ちゃんがいなくなったことを見計らってか、美緒さんが喋り始めました。

美「あなたたちでしょ？麗華を楽にさせてくれたの……」

な「……はい。麗華ちゃん昨日私の部屋で泣いていたんです。結斗君を思い出しちゃったらしくて……それで……」

美「そう……。あの子はゆつと性格がそっくりなのよ。自分の中に何でも溜め込んでおこうとする。そんな子なの……」

フェ「そうですか……」

美「麗華も結斗もそんなことないって言うんだけどね……。まああなたたちみたいな友達がいれば麗華は安心ね。あっ恋のライバルかな？」

お茶目に言う美緒さん。

な・フェ「／／／」

美「ふふふ……。あなた達なら私は結斗の事任せられるわ。二人とも頑張ってね」

そっそれって、美緒さん公認ってこと！？

な・フェ「はい！義母さん……」

元気よくいう私とフェイトちゃん。

むっっ負けないよ！

フェイトちゃんにも麗華ちゃんにも、アリサちゃん、すすかちゃんにも！

結斗 side

はやての足を一時治療してから何日かたち僕はやっと動けるようになった。でもまだ魔法は使えない……。

あれからはやてはもう終始よろこび放つしだったためである。

現在は朝。今も一階のソファにはやてを座らせて治療の最中……

ヒュウウウウウン

結「はい 今日の治療はおしまいっ」と

淡い光が僕の手からはやての足を包む。

はやては自分の足で立ち、

は「ありがとくな……。結斗君」

僕に礼を言った。

結「気にしないで。はやてが笑ってられるんならそれでいいよ。でも忘れないで、これは一時的な治療だから……」

は「わかつとるよ。でもな私うれしいんや。今までずっと車椅子で生活しとって、なんで私の足は動かないんや、どうして私だけって思ってたんよ。でも結斗君が一時的でも私の願いを叶えてくれた……。だからめっちゃうれしいんや……」

はやて……

結「そつか……。安心して僕が一時的じゃなくってその願い叶えてあげるから！」

は「ありがとな 私の騎士^{ナイト}さん」

はやてはそういってキッチンの方へ行つた。

?ナイトって……。

僕もキッチンに入り、はやての隣で料理を手伝いながら聞く。

結「はやて、何?ナイトって?」

はやての言葉の意味が分からなくて聞く。

は「何って……結斗君は私を救ってくれるナイト様やん」

はやては嬉しそうに言う。

結「はは……。はやてにはもうたくさんナイトがいるじゃない？」

は「あの子達も確かに私の騎士達や、でもな結斗君は……。特別なんやで……」

結「えっ？なんだって？最後の方あまり聞こえなかったんだけど……」

は「なっ……。なんでもあらへんよ……／／／」

はやては顔が真っ赤だけど大丈夫かな？

結「……？そう？ならいいんだけど……」

そこでヴィータが起きて来た。

ヴィ「おはよ……。はやて……。結斗……」

は「おはよう、ヴィータ……。顔洗ってきた、今結斗君と合作朝食つくっとるさかい」

ウサギのぬいぐるみを引き連れ眠たそうにヴィータが言ったのたしいしはやてが言った。

ヴィータは朝がとても弱い。それも極端に……。

普段のヴィータとは違い過ぎているので最初は戸惑った。

ヴィ「ん〜分かった〜……………く〜」

寝た……………。それも立ったままで……………。すごい、僕立ったまま眠れる人初めて見たよ。

でもなのはなら出来そうかな？

は「あ〜ほら！ヴィータこっちやで。結斗君少し頼むわ」

はやては未だ寝ているヴィータを押しして洗面所ん向かった。

ふふふ…仲のいい姉妹みたいだね……………。

結「はいはい。っと目玉焼きがと……………。あとはコーンスープかな？」

シ「おはよう、結斗」

シャ「おはよう、結斗君」

ザ「コクッ） 頷く）」

僕がそうっているとシグナムとシャマル、ザフィーラが来た。

結「おはよう、三人とも。もうすぐ出来るから机でまってる」

シ「分かった、美味しい物を頼む。シャマルはそちらに行かせないようにする……………」

シャ「ひっど〜い、シグナム。朝からそんなこと言わなくても……………ひどいですよね結斗君？」

結「あはは・・・シャルは・・・ごめんね。すぐにできるからそこにいてね」

シャ「さわやかに拒絶された!？」

だってシャル何かと隠し味とかっている投入していくんだもん。正直あれはいけないものだと思う。だって・・・一体どうしたらコンスープが紫色になるのさ？

ヴィ「結斗早く！」

おっとヴィータが覚醒したらしいです。

は「ごめんな」結斗君まかせつきりで。わっ！もうこんなに出来たん？」

はやてはテーブルの上に作られた朝食を見て驚く。

結「効率よくやったからね。こんなもんだよ・・・」

は「は」。料理も出来るってどんな完璧超人やねん・・・」

超人って・・・

結「そんなことないよ。っと焰美達は?」() () おはよう、ゆうく様、君>() () おはよう三人とも、朝ごはん出来てるよ」

焰「うむ、ありがとう。」

瀨「ありがとうございます、ゆづ様」

アリ「うん」

そういつてみんなが席に着く。

全員「いただきます！」

こうして八神家の一日が始まる……

ヴィ「うめ〜」。やっぱり結斗も料理上手だな！」

そういつてヴィータが褒めてくれる。

結「ありがとう、ヴィータ。三人ともどう？お味は？」

焰美、瀨、アリシアに聞く。

焰「文句なしだ！」

瀨「さすがです、ゆづ様。私も早くここまでなりたいです・・・」

アリ「美味しすぎるよ〜。う〜んでもなんか女の子として負けた感が・・・」

アリシアがそういつと・・・

は「あはは、確かに。ここまでの腕があると女の子としてのプライドがな〜」。

はやてがあっけからんと言っ。

結「そんなこといわれてもね・・・元々料理はしていたし・・・家でも作ってたし・・・」

シャ「結斗君は何か苦手なものはないんですか？」

シャマルが僕の作った卵焼きを食べながら聞く。

結「う〜ん。苦手なものか〜・・・あっ！」

アリ「何かあるの、あるの？ゆう君！」

アリシアが聞いてくる。

結「あはは、無いよ・・・」

僕はばれないように言っ・・・

は「（にやり）結斗君正直に話してや〜。私結斗君の苦手な事めっちゃ知りたい！」

アリ「私も！私も！」

二人が詰め寄ってくる。

結「・・・ないってば。ほんとに！」

アリ「む〜ならば！焰美、瀨！結斗君の苦手なものって？」

今度はあの二人に！

焰「知ってはいるが、そうそう。ゆうの弱点教えられぬよ・・・」

瀨「はい。私達はゆう様絶対ですから・・・」

助かった！二人が僕に忠実で・・・

アリ「む〜〜ならば。」（じにょじにょ）「焰美と瀨に耳打ちし

ながら話している・・・」

焰「何！？ならば！ゆうの秘密を言おう！」

えっ！？

瀨「はいっ」

ちよつと！二人とも忠義心は？あの言葉は？

焰「ごほんっ、え〜ゆうの弱点は・・・」

結「ちよつと二人とも！」

瀨「ごめんなさい、ゆう様。私はどうしてもあれが欲しいんです！ゆう様の弱点は怖がりなところですよ！」

いっちゃった……

は「怖がり？」

ヴィ「どう怖がりなんだ？」

みんなが？がる。

焰「それはもうな……」

瀨「はい。ホラーの映画が見れないです」

二人が詳しく言う。

は「そうなん？」

アリ「どう怖がるの？」

焰「ん〜。とりあえず見た時は誰かに捕まってるな……」

瀨「はい、それも涙目で……」

僕は黙々と朝食を食べる。

は「は〜今度映画借りてこんとな」

アリ「うんうん」

はやてとアリシアは嬉しそうに言った。

焰「ゆう?」

瀨「ゆう様?」

僕の秘密を喋った二人が声を掛けてくる。

結「(つゝん) 焰美と瀨なんて知らない!」

焰「ゆう!? そんなこというな・・・悪かった・・・」

瀨「ごめんなさい・・・」

結「(つゝん)」

焰・瀨「ゆう~~~~/ゆう様~~~~」(泣)

二人が途端に僕にすがりついてくる。

こうして今日の朝食は終了した。

余談だが・・・

アリ「(ゆう君のふてくされてる顔すごいかわいいよ~~~~~)」

は「（結斗君ほんまにかわいいなあ……）」

と二人は思っていた……。

n e x t t o T A L E 2 4 !

TALE23 日常よ(後書き)

PVが80000突破しました。

ありがとうございます。

一重に読んでくださる皆さんがいるからです。

これからも頑張って投稿していこうと思うので応援よろしく
お願いします。

感想もお待ちしております。

それではまた次回に・・・

BALDR SKY でした！

T A L E 2 4 生まれ変わったわ！（前書き）

今回はデバイス一新の場面ですね・・・
いろいろ考えてこんな形になりました。

はあ最近自分の文才の無さに泣けてきます。

こんな文才の自分でもよければ読んでいってください。

T A L E 2 4 生まれ変わったわ！

麗華 s i d e

お母さんにデバイスの拡張を頼んでから数日が経った。

あと昨日フェイトが転入してきた。どうやらリンディさんの取り計らいみたい・・・

話し戻って今朝お母さんが、

美「今日の夕方ごろまでには出来ると思うから、なのはちゃんフェイトちゃん呼んで帰ってきて。その時に新システムとかについて説明するから」

667

新システムについて激しく気になったがお母さん曰く、見てからの
お楽しみとのこと教えてくれなかった・・・
あゝあ・・・なんだろ？新システムって？

カートリッジ？擬似リンカーコアについて？・・・ああもう！気
になる~~~~~！

先「ではここを・・・白銀さん。答えてください・・・」

麗「……………」

はあゆうの作った機構か……。しかも私達のためにとって……………
／／／きゃっ！

つい照れくさくなっちゃう／／／

フェ「麗華！麗華ってば！」

隣の席のフェイトが声を掛けてくる。

麗「ん？何？フェイト、今考えちゅ……………う。……………あはは、授
業中でしたね……………。すみません……………」

私が言葉を続けようとしたら、今私にクラスの注目を浴びている事
に気がついた。

先「……………白銀さん、ここの答えは？」

え？あれだから……………

麗「11/12です」

簡単ね

先「はい正解です！では……。」

授業中ということをしつかり忘れていた……。

な「すごい……麗華ちゃんなんで分かるの？」

あっさりと先生からの質問に答えた私を褒めるのは。

麗「ん〜私ってばゆつとよく勉強していたからさ。」

な「へ〜結斗君と……いいなあ……。」

なのはの愚痴を聞きながら、

はあく早く放課後にならないかな？

と、私は晴天の中、空に浮かぶ雲を頼杖して眺めながらそう思っていた……。

放課後……。

私、なのは、フェイト、アリサ、すぐかで帰っている時にアリサが話しかけてくる。

ア「ねえ麗華。結斗ってばどこに留学していったの？」

結斗は外国の留学にしに行ったということになっている。なんせ行方不明なんて言えないしね。

麗「ん、ヨーロッパの方だったと思うけど……」

それにあいまいに答える私。

す「あいまいなんだね。麗華ちゃんやお母さんは知らないの？」

あいまいにしか答えられないんだよ、すぐか！

麗「ゆうってば私に言わずに行っちゃったからさ、私にも分からないの。」

フェ「麗華は結斗と一緒に引っちゃうでしょ。だから結斗ってば黙って行ったんじゃない？」

そこでフェイトが私を指摘してくる。

麗「ん？それってどうゆう意味？まあ確かに知っていたら私もついていこうと思っていただけだよ！」

ア「あれ？フェイトってば結斗と知り合いなの？」

鋭い！やっぱりアリサ頭いいんだ・・・

フェ「あ・・・えつとね・・・ここに来た時。結斗が留学する前にね、私が困っていたときに助けてくれたんだよ。そこで知り合っただ」

す「へえ！すごい偶然だね。結斗君の家族の麗華ちゃんと同じクラスになるなんて」

な「そうだよね～～～あはは～～」

なのはが何とか空気を換えようとしている。

ア「っと私達はこの辺ね、じゃあね」

いつのまにかアリサとすずかの分かれ道となっていた。

す「うんまた明日ね。」

麗・な・フェ「バイバイ」

そして私達三人だけとなった。

麗「なのは、フェイト。ちょっといい？」

私はデバイスのことで声を掛ける。

麗「デバイスが完成したらしいよ。だから取りにきてって、お母さんが……」

な・フェ「分かった（の……）」

こうして私達三人はお母さんの下へ向かった。

白銀邸リビンググ……

美「はい、これが三人の新しいデバイスよ」

そういつてお母さんはそれぞれのデバイスを渡してくる。

麗「鏡月！」

鏡「久しぶりね、麗華」

三日振りのパートナーの声が白い宝石から聞こえる。

麗「そうね。どう？調子は？」

鏡「絶好調よ。それに新しいシステムもあるしね」

麗「そうよ！新しいシステムって！？」

しかしそこで周囲が結界を張られた。

結斗side

少々時間を遡り、午後。

現在はやての家には僕、アリシア、焰美、瀨、シグナム、ザフィーラがいる。

は yet は図書館、シャマルはその付き添い。ヴィータは何処かへいつてしまった。

結「はつきり言います。状況が変化しました・・・」

僕は重く口をあける。

目の前にはシグナムと人間のザフィーラ。

シ「」どつゆつことだ？」

結「今朝もはやての足の治療をしたんだけど闇の書のバグが僕の治療に対抗してきたんだ……」

ザ「どのように?」

結「僕の治療が効かなくなってきたんだ。おそらく抗体みたいなものが出来てしまったんだ……」

みんな「?」

焰美やシグナム達が首をかしげる。

結「つまり例をあげると……仮に僕が風邪にかかったとします。この風邪をAとします。Aが治ると次からはAの風邪にはかかりにくくなります。」

なぜならば僕の体がAに対しての抗体を持つからです」

焰「つまりゆうの治療の抗体を闇の書が作ってしまっただけで治療が効きにくくなっているということか?」

焰美が僕の言葉を分かりやすく説明してくれる。

シ「では主は!」

ザ「また歩けなくなるということか……」

シグナムとザフィーラが言う。

結「でもまだ効かなくなっただというわけじゃないんだ。」

シ「どれくらい効きそうだ？」

シグナムが顔を歪めてきいてくる。

結「おそらく立って歩けるのは一週間くらい。それから後はまた歩けなくなる。」

シ「そうか……」

シグナムがただ返事をした。

結「ごめん。偉そうな事言っただけ結局……」

シ「そんなことはない。一時的でも主が歩けた事を主は嬉しく思っていた……」

結「ごめん。なんとしてもデータの復元するから……」

シ「ああ、頼む。」

そういつてシグナムとザフィーラは出て行ってしまった。
残ったのは僕達。

静「どうにかならないのですか？」

結「僕も頑張つてやっているんだけど、情報が膨大すぎて僕の脳だけでは処理しきれないんだ。今も処理をしてる……」

アリ「私が手伝えればいいんだけど……。無理しないでね。ゆう君まだ本調子じゃないんだから……」

アリシアは創醒の書の管制人格だがまだシステム全てを把握していないため書にアクセスできないのだ。

結「分かってる……」

僕はアリシアに返事をする。

はやては絶対助ける！

シグナム side

結斗からの話を聞いて、わたしは家の外にいた。

シ「ザフィーラ・・・」

傍にいたザフィーラに声を掛ける。

ザ「なんだ？」

シ「我らは主の騎士。だから・・・」

ザ「再開するのかわ？」

シ「ああ・・・」

主のためにも蒐集作業を……再び。

はやてside

え〜と今私は図書館にいます。ちなみに車椅子でやで。いきなり治るのもおかしいからな〜……本を持って、机の前に行き本を読む。

?「ん〜やっぱりおもしろいなあ。神話は……」

前の席に座っていた紫の髪をした女の子がそう言った。私も神話は好きでつい声を掛けてしまった。

は「ほやろ〜。やっぱ神話はいいよね〜。なんていっても男の人が女の人のために頑張る姿がよくあるからな〜」

?「うんうん。かつこいいよね〜」

紫の髪の子も同意してくれる。ええ子やな〜

は「私八神はやてって言うんや〜」

す「私は月村すずか。よろしくね、はやてちゃん」

は「よろしくな〜すずかちゃん。」

こうして私にまた友達が出来たんや〜

三人称 s i d e

再び時間は戻り今は結界内。

結界を張ったのは管理局。

そして守護騎士ヴィータ、ザフィーラは管理局魔導師に包囲されていた。

ザ「囲まれたか・・・」

ヴィ「でもこいつらちゃんはいよ・・・返り討ちだ！」

ザフィーラが冷静に言い、ヴィータは自分のデバイス、グラーフアイゼンを構え威勢よく言う。

しかしヴィータがそう言った途端、局員達が一斉に退却し始めてしまった。

ヴィ「どうゆうことだ？」

怪訝に思ったヴィータがザフィーラに聞くが

ザ「！？ヴィータ上だ！」

ク「ステインガーブレイド！エクスキューションシフト！」

ザフィーラの声で上空を見る、そこには魔力で出来た、何百もの刃を従えた執務官クロノ・ハラオウンの姿があった。

ク「食らえ！」

一斉に発射される剣達。それに引き起こされる爆音と煙。煙が晴れる。

ヴィ「ザファイラー！」

そこには数本、シールドを突破した剣を肩に刺すザファイラーの姿が・
・・・

ザ「心配するな、これくらいでやられる程柔じゃ・・・ない！」

ヴィータが心配する中、ザファイラーはほぼ無傷であった。

ヴィ「ふんっ！上等！！」

そういつてクロノを睨みつけるヴィータ。

ク「くっっ！（やっぱり今のデバイスでは性能の差がありすぎる！歯
が立たない！）」

クロノが辛酸を舐める中、クロノにとって吉報がかかる。

エイ「お待たせ！クロノ君 武装局員配置完了！あと強力な助っ人
を送っておいたよ！」

オペレータエイミーからの通信の内容を理解するクロノ。

ク「助っ人って？・・・！なのは、フェイト！それに麗華も！」

クロノの視線の先にはビルの上、自分のデバイスを構えた小さな戦^{ウア}乙女達^{ルキュリア}がいた。

白銀邸で結界が張られて、すぐさま応援に来たというわけだ。

な「レイジングハート！」

フェ「バルディッシュ！」

麗「鏡月！」

な・フェ・麗「「セ〜〜トアツ〜〜〜プ！」「」

三人それぞれのデバイスを持って、高く上げる。
すると三人を中心に光の柱が上がった。

レイ「Order of "set up" was accepted.

バル「Operating check with」

鏡「the new system has started」

三機が機械的に言うと、三人をそれぞれの魔力光の光の柱が包む。
なのはは桃色、

フェイトは金色、

麗華は銀色だ。

な「これって……」

フェ「……今までと……」

麗「違う……」

三人が驚きの声を漏らしていると突如、モニターが声を発する。

三人のデバイスを生まれ変わらせた白銀美緒その人だ。

美「三人ともよく聞いてね。三人にはこの前言ったと思うけど、三機には新しいシステムを積んでいるわ。

だからその子たちは新しく生まれ変わったの。だから詠んであげてその子たちの新しい名前を！

新しいパートナーの名前を！」

戸惑うなのは達に一気に言う美緒。

最初は戸惑ったがすぐに意識を戻し、それぞれのパートナーの名前を呼ぶ。

鏡「Condition All Green」

バル「Get set」

レイ「Stand by・Ready」

な「Raging Heart Excursion！」

フェ「Bardiche Assault！」

麗「鏡月双舞！」

レイ・バル・鏡「「Drive Ignition!!!」」

三人が名前を呼び上げ、三機が答えると周りを光と静寂が満たした。

三人がお着替え中……

内容を描くのは作者が恥ずかしいので、

割愛させていただきます……

光が晴れる。

そこにはバリアジャケットが補強され、デバイスの形も一層され目を閉じたなのは達の姿があった。

ヴィ「あいつらのデバイスって……まさか!？」

なのは達のデバイスを見て、驚くヴィータ。

自分たちのデバイスと同じ機構が目に入って驚いているのだ。

バル「Assault Form・Cartridge Set・

レイ「Axel Mode・Standby・Ready

鏡「Cross Form・complete・start

r.p

なのはの正面にいるヴィータ達から見て、なのはは左。右はフェイト。中央には麗華がデバイスを構え、これからの相手ヴィータ達を見据えた。

ここに再び、一人の男の子の信念を受け継ぐ三人の小さな戦乙女ヴァルキュリアの女の子達が誕生した瞬間だった……

Next TO TALE 25!!!!!!

Expectation that begs the following!!!!!!

T A L E 2 4 生まれ変わったわ！（後書き）

最後の英文は次回に乞うご期待と言っ意味です。
今回はわりと英語を多く使いました。

いやあ〜英語と日本語ではその場の様子みたいなのが変わってしま
うな

と思って英語にした次第です。

次は結斗君とかアリシアちゃん、焰美ちゃん、澪ちゃんらを多く出
そうかなと思います。

………忘れてました。次は対決でした。
といつことで次も詳しく書く所存です

ではでは〜〜

T A L E 2 5 守護騎士達と対決よ！（前書き）

久しぶりの投稿！

チヨイ長め・・・

頑張りました・・・

あとみなさんのおかげでpv90・000突破です。

嬉しいです。ちょく感激です。

では本文へ・・・

TALE 25 守護騎士達と対決よ！

PM 17:00

シグナムらが管理局魔導師と対峙する少し前頃……

結斗 side

現在、はやての家には僕らだけではやてらは出かけている。はやてはもう帰ってくると思うけど……

結「ん〜暇だな〜。そうだ！もうそろそろ刀握らないと、感覚がま
ずい事になっちゃう……」

そう言って僕は庭に出た。

焰「ん？何してるんだ、ゆう？」

ちょうどいいところに焰美が来てくれた。

結「あ〜うん。そろそろ刀を握っておきたいなと思ってさ。感覚とか鈍りそうだし……」

焰「ゆうなら大丈夫だと思うがな・・・」

樂觀的に言う焰美。むっ分かってないな。

結「焰美、評価してくれるのは嬉しいけど僕も人間だよ。やらなくちゃ忘れるし、感覚も鈍る・・・」

少々きつめに言う。

焰「む、悪かった。じゃあデバイスになるかな？」

そっいつて焰美の姿が光り赤いピアスになる。

結「ありがと うんまずは・・・刀かな？」

焰「一本か？」

結「うん、とりあえずね。まだ本調子じゃないし、今日は様子見だよ」

焰「分かった」

そして僕の右手には一本の刀。焔龍が握られる。
刀身も鍔も持ち手の部分も全てが赤。
初めに刃のついてない部分を指でなぞる。
これをするのが引き締まるんだよ・

よしっ！

焔龍を正面に構え、目を閉じ精神統一。

結「やつ！」

キンッ

焔龍を納刀する音があたりに響いた。

焔「さすがじゃ……。」

焔美が褒める。

結「やっぱり、落ちてる……。」

しかし僕はそれに残念に答えた。

僕の前には四等分にされた木の葉。

僕はさっき一瞬で木の葉を四等分にした。

焰「本当は六等分にしようとしたのにできなかった事か？」

結「うん、事件前には出来ていたんだけど・・・」

焰「なに、焦る事はないのじゃ。ゆうはまだ本調子じゃないんだろ。だったらできなくて当然だ。」

焰美が元氣付けてくれる。

結「ありがと、焰美。」

焰「なに、我の主はゆうだけだからな。それ以外は認めん。」

あはは嬉しいこといつてくれる。

結「よしじゃあ次は二つにして！」

気合を入れなおす。

焰「分かった。」

今度は左手にも右手と同じ刀が握られる。

焰「無理はいかんど。瀨達が煩いからな・・・」

結「分かってるよ。大丈夫、型の復習するだけさ。いまじゃそれくらいしかできないからね・・・」

そういつて僕は刀を十文字に構える。

これは白銀流二刀斬の構え。

双刀の時の基本の型。

そしてゆっくりと振る。刀を・・・。

突き、払い、切り上げ、切り下げ・・・

ゆっくりやると自分がどう動くべきかが分かるからだ。

それにこれは結構難しい。

無駄な力が入つてるとすぐにバテル・・・

結「ふう・・・」

ある程度白銀流の型をして一息つく。

焰「見事だったぞ。舞のようだった・・・」

再び褒めてくれる焰美。

結「ありがと。これくらいにしとくかな？」

ここで区切るうとすると……

澪「ゆう様！何をしているんですか!？」

そこで澪とアリシアがやってきた。きてしまった……

結「えっ？ちよつと鍛錬を……」

澪「いけません！まだ傷が治ってないんですから。そんな無理をしたら！焰美、あなたもどうしてデバイスになっているんですか!？」

焰「ゆうが確かめたいといったからな。だからだ……」

怒っている澪に対し、冷静に答える焰美。

澪「ですが……」

肅然としない澪。どうして？

焰「……ははは。もしか久しぶりにデバイスとして使われた我が羨ましいから嫉妬してるのかの？」

面白そうに言う焰美。

澪「そつそんなことない……ですよ……／＼／」

最後は聞こえないくらいの声で言った。

澪は凶星みたいで顔が赤い。

嬉しいね、パートナー達に想ってもらえるのって……

結「ちょうど射撃訓練もしたかったんだ。だから澪イメージ訓練良
いかな？」

澪「はい！」

澪は微笑む。嬉しそうだ……

アリ「ねえ焰美。ゆう君ってどれくらいのレベルなの？」

そこで今まで黙っていたアリシアが焰美に聞き出す。

焰「強いぞ。おそらくランクで言うと……Sか……S+くらいに
いるんじゃないか？」

アリ「ふえええ、すごい。やっぱりゆう君はすごいや」

自分のマスターが高ランクである事に嬉しそうなアリシア。

焰「自分に驕らず、常に努力し、人を助ける。だから我も澁もゆうを最高の主、そしてパートナーとしているんだ。」

アリ「……………私もゆう君みたいになれるかな？」

不安な声を漏らすアリシア。

結「僕みたいはともかく大丈夫さ。アリシアは優しい子だもん。」

アリ「ゆう君……………うん！私頑張る！」

結「頑張ってね、僕の新しいパートナーさん」

アリ「パートナー……………（パートナーって……………うつつまるで恋人みたいだよ……………嬉しいけど……………）／／／」

ありゃアリシアが顔真っ赤。

瀨「準備できました。ゆう様！」

結「ありがと、あっそうだ！訓練モニターに映るようにして、アリシアにも見えるようにね」

瀨「分かりました」

焰「アリシアゆうの凄さをみて腰抜かすなよ」

またまたおもしろそうに言う焰美。

アリ「む、驚くかもしれないけど腰なんて私抜かさないもん！」

少々膨れっ面で言うアリシア。

僕はそれを見ながら瀨のイメージ訓練へといった……

周りは大空。空一面だ。

ここは僕の射撃訓練のイメージした所。

澁「前はMISSION500まで行きましたが何所からしますか？」

左の耳元から聞こえる澁の声。声から若干嬉しそうに感じる。どうやら僕にデバイスとして使われるのが嬉しいようだ。

結「そうだね〜・・・じゃあMISSION498くらいからやるっかな？」

澁「分かりました、ワンハンドとツインガンどちらですか？」

結「とりあえずワンハンドでかな？」

澁「了解しました・・・。Count three・・・」

澁がカウントをしてくれる。

澁「two・・・one・・・start!!!!!!」

そうだった瞬間僕の正面と背後にそれぞれ三対僕の影が現れた。

結「ふっ！」

ガンガンガンガンガン

六連射早撃ち（シックスクイックドロウ）をやる。影はみんな倒れる。

しまった！ひとつ外した！

それから再び現れた僕の影を相手に

トレーニングを続けた……

はやて side

やっとついたわ。私は今自分の家の前にいる。すずかちゃんと知り合った後、シャマルが来て夕飯の買い物をしていたらシャマルが、シャ「すみません、はやてちゃん。醤油買うもの忘れてました、私今から買ってきますから先に帰ってもらっていいですか？」

とのことで一人で帰ってきた。

は「ただいま〜」

アリ・焰「おかえり〜」

家に入ってリビングに行くともモニターっていうんやるか？画面を一心に見ているアリシアちゃんと焰美ちゃんが返してくれた。

は「二人とも何してるん？」

モニターに夢中の二人に聞くと・・・

アリ「今ゆう君のトレーニング中なの」

そうアリシアちゃんが答える。

トレーニングって結斗君大丈夫なんか？

は「結斗君が？でも結斗君寝ているだけ見たいやけど・・・」

ソファに体を預けながら眠るように目を瞑っている結斗君をみながら私は言います。

焰「いわゆるイメージトレーニングだ。このモニターは今ゆうがしているトレーニングを見せてくれる。」

焰美ちゃんが詳しく説明してくれる。

私もモニターを見てみる。

そこには多くの黒い結斗君を相手に一人で銃を使って戦っている結斗君がいました……

は「って結斗君大丈夫なん？あんな大勢相手に……」

つい不安言を言ってしまう。

焰「大丈夫……。吾が主そしてパートナーのゆうはこの程度の相手敵ではないの……」

微笑みながら言う焰美ちゃん。そこには絶対的な信頼と忠誠みたいなものが感じられました。

アリ「すっすすごいね……。一人であんな大勢相手に普通に戦ってるよ……」

アリシアちゃんの驚嘆の啖が静かなリビングに発せられました……

結斗 side

澗「あと150体です！」

あと少しか！よし！

結「澗！ツインガン！」

澗「了解しました！」

今まで右手にあった青一色の銃が左手にも表れ、重さを感じた。
よし一気に！

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガン……

両の手でそれぞれ十弾ずつ発射。すべて命中。

澁「残り130体です！」

なら！

双銃に魔力を集める。

なのはちよつと技借りるよ！

結「TWIN DIVINEMENT …… BUSTER!!
!!!!」

開放。左手の先右手の先それぞれの影の密集地帯に砲撃を打ち込む。

澁「残り50！」

ちよつと四十体ずつ倒したようだ。

これで最後！

残りのいる正面の影の密集地帯を照準にする。

今度は麗の！

結「JUDGEMENT・・・BREAKER.....!」

ドッガーーーーーー

双銃からの集束砲撃が合わさり、影に直撃した。

漣「MISSION COMPLETE!!!!!!」

漣の嬉しそうな声が大空の空間に響いた・・・

目を開ける。そこには啞然のはやてとアリシア。それに満足そうな
焰美と笑顔の漣だった。

結「ふう。どうだった？」

澪「はい。MISSION550まで終了です。お疲れ様です」
嬉しそうに言う澪。

ギョッ

焰「やっぱりゆうは最高の主だな！改めて再認識した」

そういつて抱きつく焰美。

澪「はい」

ギョッ

今度は澪が抱きつく・・・

結「ありがと、二人とも。・・・あ、はやておかえり〜。」

は「あ、うんただいま〜。・・・ってちゃうわ！結斗君もの
ごつつ〜強いな！それと澪ちゃんに焰美ちゃん、結斗君から離れ
や〜！」

興奮気味言い焰美達を剥がしにかかるはやて。

焰「いいではないか・・・」

瀨「はい、私達は嬉しさを態度にしているのです!」

・・・二人はほっと・・・。

結「ああ、見てたんだね。たいした事ないよ。最初外しちゃったしね・・・」

何事も無く、謙遜気味に言う僕。だってほんとに外れちゃったし・

アリ「そうなの?んゝ私もゝゝ」

今度はアリシアが背中からぶら下がるように飛び込んでくる。
今度はアリシアか・・・。
やれやれみんな甘えん坊だよ・・・

アリシア達の気持ちがかく分かってない。

瀨「はい、ですがターゲット2000中199は完璧にど真ん中です・・・」

補足する瀨。

アリ「へ？……つまりあんな大群相手に一回しかミスってないの？」

アリシアの目が点に！

瀧「いえ、ミスではないです。ただ真ん中より何センチか上にずれただけです……」

「は・アリ」「……（それミスじゃないじゃん！！）」

結「はあゝあ。やっぱりブランクがあるね。普通ならあんなミスしないのに……」

瀧「まあ久しぶりですので、そこまで気を落とす事でもないかと……」

フローラをしてくれる瀧。ありがたい……

焰「おゝい。二人とも、大丈夫か……」

未だ呆然とする二人に焰美が声をかけていた……

三人称 s i d e

はやての家で愉快な事になっている頃、海鳴市上空ではなのは、フエイト、麗華とヴィータとザフィーラが対峙していた。
なのは達の背後には使い魔アルフとユーノ・スクライヤの姿がある。

フエ「私達はあなたたちと戦いに来たんじゃない……まず聞かせ
て……」

な「闇の書の完成の理由を！」

ヴィータ達をなるべく刺激しないよう慎重に言葉を発するなのはとフェイト。

麗華は黙っている。まるでこれから起こることがわかるかのよううに……

ヴィ「あのさあベルカの諺にこうゆうのがあるんだよ……和平の使者は槍を持たない。って……」

なのはたちの質問には答えず、唐突に言い始めるヴィータ。

な・フェ「???'」

二人は言葉の意味が分からず、首を傾げる。しかし麗華は違った。

麗「話し合いする人は武器を持つてはいけないという意味ね」

冷静に言葉の意味を理解する麗華。

ヴィ「その通り。話し合いをするやつが武器をも使っなくなってことだよ、バ~~~~カ」

外見どおりな態度をするヴィータになのが言い返す。

な「いきなり有無を言わずに襲い掛かってきた子がそれを言つて〜
？」

怒っているようだ。

ザ「それにそれは小話のおちだ・・・」

ザファイラが的確な助言をいう。

ヴィ「うっせ、こまけえことはどうでもいいんだよ！」

そんな事とは知らずに言ったヴィータは少々恥ずかしい様子。

ドゴオオオオオオオオオオオ

そこで上空から一筋の光がなのは達のいるビルの隣のビルに直撃した。

な・フエ・麗「!？」

驚き三人とも音の発生源を見る。煙がはれ、まず目にしたのはビル
の屋上が焼けた光景。
焼けた中心を見ると一人の女が立っていた。

フエ「シグナム！」

ヴォルケンリッターの将、シグナムが静かになのはらを見つめる・
・

な「ユーノ君、クロノ君。手出さないでね、私あの子と一対一だか
ら！」

シグナムの視線に怯むことなくなのはがヴィータに向かって言った。

ク「マジか？」

ユー「マジだよ……。」

なのはの後ろのビルにいるクロノとユーノが驚く。

フェ「（アルフ、私もあの人と……）」

今度はフェイトがシグナムに向かって念話で言う。

アル「（ああ、私もあの野郎とちよいと話がある……）」

アルフの視線の先にはザフィーラ。

ザ「……。」

アルフからの視線にザフィーラは無言で感じ取る。

麗「（私はどうしようかな？相手がいないし……）」

ク「（それなら麗華も僕とユーノと同じように闇の書を持っている
主を探してくれないか？）」

麗「（ゆう以外に命令されるのは嫌だけどそれが一番良いみたいね・
・分かった。主探しやるよ・・・）」

ク「（よろしく頼む・・・）」

そして全員デバイスを構え、薄暗い空へと飛び立った。

なのはvsヴィータver

お互いが空を飛び、ヴィータが赤色の軌跡、なのはが桃色の軌跡を
残しながらヴィータを追いかける。

ヴィー「へっ！やっぱり戦うんじゃないかよ！」

追いかけてくるなのはに憎まれ口を叩くヴィータ。

な「私が勝つたら話を聞かせてもらおうよ、いいね!？」

ここでもなのは話を聞こうとする。

昨日父士郎に言われた、話し合いをすることでヴィータを理解しようとしているのだ。

ヴィー「やれるものなら……」

左手の指と指の間から合計四つの鉄球放り、

アイ「Swallow Flyer」

ハンマーで打った。

鉄球はなのはへ向かう。

しかし……

レイ「Axel Finn」

カートリッジを取り付けた事で出力が上がり、シールドの強度も飛躍的に上昇した。

レイ「Barrier Burst」

ヴィ「うわあ！」

レイジングハートがシールドを爆発させ、ヴィータとなのはの距離が開く。

レイ「let's shoot」Axel Shooter」

な「うん！アクセルシューター」

レイ「Axel Shooter」

杖の先に桃色の魔力が集まる。

な「シュート！！っ！」

勢いよく杖から出る12個のスフィア、なのはは驚愕する。自分はまだこれ程の量のスフィアを扱ったことが無いからだ。

レイ「Control, please」.

な「っ!.....」

そしてなのはは目を閉じ集中する。

ヴィ「あほか、こんな量を一度に制御できるわけが.....」

悪態つきながらこの隙に乗じて、待機させていた
4つの鉄球をなのはへ向かわせる。

距離にして10メートル

レイ「You can do it, my master. I
f it is mastering to have suc
ceeded the intention of」master
to you」(出来ず、結斗様の意思を受け継いでいるマス
ターなら。)」

あと7メートル

そうだよ、レイジングハート。今度は結斗君を守るの。私はそう

な「シューート！」

スフィアがヴィータを追いかけるがヴィータが出現させた鉄球でいくつかが相殺された。

レイ「The mastering controls as it is I undertake it now .
(マスターそのまま制御を後は私が引き受けます)」

な「レイジングハート?・・・分かったの。」

パートナーを信じ、再び制御に戻るなのは。そしてヴィータを八方向から狙う形となる。だが・・・

アイ「Tank Barrier .」

アイゼンがヴィータの全方向のバリアを張る事で防ぐ。

レイ「Divine Buster .」

しかしレイジングハートがそのバリアに向けて、デバイスバスターを発射する。

「グイッ！くっ……」

それをヴィータは紙一重で避けた。咄嗟にバリア解除する事でバリア破壊による貫通攻撃を回避したのだ。

「グイッ！どつゆうことだ！？あいつのデバイスが魔法を……」
「こんのお……」

ヴィータの混乱し、悔しげな声なのはの耳にも聞こえた。

ガンツ、ガンツ……ガシャン

なのはとヴェータが戦っているその頃、フェイトとシグナムは高速戦闘をしていた。

お互いビルとビルの間を行きかい、デバイスを通して何度も衝突し、鎧迫り合いとなっている。

フェ・シ「はあああああ」

声を叫びながら衝突する中、先に動きを見せたのはフェイトだった。

バル「Plasma Lancer」

合計八つの槍方のスフィアを形成。

フェ「Plasma Lancer……fire!!!!!!」

一斉掃射。やっつの魔法がシグナムへと殺到する。

シ「でえええええい！……」

それをレバンティンを振ることにかき消す。

しかし……

あるうことがシグナムを中心として八方向へ分かれる。
そこで

フェ「turn!!!!!!」

フェイトは右手を振り、ランサーの進行方向を180度回転させ再びシグナムを追う。

シ「っ！」

それをシグナムは高度を上げることで回避した。
しかしまだランサーはシグナムを追いかける。

シ「Levantine!!」

レヴァ「Storm Wave」

ードキユン・・・

レヴァンティンがカートリッジをロードし、排出し

シ「でええええいい!!」

炎熱を発生させ、ランサーを防ぐ。

するとシグナムの背後から影が・・・

バル「Burning Form」

フェイトだった。シグナムがランサーに気が向いている隙に
接近したのだ。

通常の相手だとこれで何とか倒せるのだが・・・

レヴァ「Snake Form」

シグナムは違った。冷静に事を構え、反撃に出た。

ドガーーーーー

鎌と連結刃がぶつかり、辺りに衝撃を満たした。

互いに距離をとる。

シ「強いな、テストロッサ。それにバルディツシュ……」

連結刃を普通の剣に戻しながらシグナムが言った。
胸には浅く入った傷……

バル「Thank you.」

フェ「あなたとレヴァンティンも……シグナム。」

フェイトはそれに感謝の意を答える。

左手上腕部に擦傷。

互いに一箇所ずつ傷を貰い、傷を与えた相手を賞賛しているのだ。

シ「この身になせねばならぬ事が無ければ

心躍る戦いだっただが、仲間達と主のため今はそうも言ってもらえ
ん。」

フェ「はい……私もそう思います……」

フェイトの眩きを合図に再び戦いが始まった……

麗華 ver

誰もいないビルの屋上。そこに一人の長い黒髪をして二つに結んだ女の子が降り立った。
白銀麗華だ。

なのはらが相手を指定したので自動的に闇の書主の搜索となったのだ。

ユー「そこじゃない……」

麗「だ〜〜。また！ユーノ探査下手なんじゃない!？」

麗華の叫び声が屋上に響く。
念話の相手ユーノに言った。

ユー「そんなこといわれても、いろんな魔法が行きかっているから
闇の書だけを特定するのは難しいんだよ！」

麗「そんなのゆうだったら一瞬よ！」

ユー「天才の結斗と一緒にしないでよ！」

理不尽だ……。ユーノはそう思った。

白銀流師範、デバイスマイスター見習い？などの肩書きをもつ結斗
と一緒にされてはどんな人も凡人になってしまう。

麗「まあゆうと比べるのはまずいわね。とりあえず早く特定してよ・
・・・」

やれやれといった感じに言う麗華。

ユー「分かった・・・」

まだユーノ君の憂鬱は続くようだ・・・

シャ「(うん・・・なんとかしたいけど・・・局員がバリア展開していて私じゃ近づけない・・・)」

麗華が今いるビルの屋上から半径10キロ離れたビルの屋上に守護騎士の一人シャマルはいた。

念話の相手はザフィーラ。

結界の中で起こっていることを把握し、対策をねっているが支援担当のシャマルでは手をこまねいてる

ザ「(二人とも手が放せない、止むをえんあれを使うしか・・・)」

シャ「(分かっているけど・・・っ!?)」

しかしそこでシャマルの念話は途切れる。

ク「搜索指定のロストログアの所持、使用の疑いであなたを拘束します。」

理由は執務官クロノハラオウンがシャマルにデバイス突きつけたからだ。

ク「抵抗しなければ弁護の余地はある、同意するなら武装の解除をがはっ！」

淡々と言うクロノにシャマルは動けずにいたが、途中でクロノの言葉が途切れた。

ガシャン……

クロノは腹を蹴られ、隣のビルのフェンスに叩きつけられた。苦しげにクロノは原因を見る。そこには仮面の男がいた。

ク「なか……ま……？」

筋肉質に白い服装に白い仮面。

瞬間的に現れ、足蹴り。不気味なやつとクロノは思った

シャ「……あなたは？」

仲間でもないその男に聞くシャマル。

「使え、闇の書を……。完成するためにはここで捕まってはならんだろ。(でも……)減ったページはまた蒐集すればいいだろう。」

しかし男は質問に答えずシャマルが持つ闇の書に振れながら言った。

シャ「ええ……。そうはさせないわ!!」

答えるシャマルだがそれはかき消された……

麗「prism bullet」

仮「ふっ!」

シャマルと仮面の男に白く光る弾が打ち込まれるが仮面の男にはじかれた。

音の発生源は双銃をもった麗華だった。

麗「ったくいそいで来てみればクロノは飛ばされてるし……ユーノ

は無能だし……。踏んだり蹴ったりよ……」

悪態をつく麗華……

仮「貴様は……」

麗「闇の書確保するわ。いくわよ！鏡月！カートリッジロード！」

鏡「Load Cartridge」

麗「airial rayser！」

なのはのデイベインバスター級の集束砲エアリアルレイザーが打ち込まれる

仮「くっ！」

男はそれを避けずにシールドでガード。

なぜ避けなかったのかと麗華は疑問に思い男の背後を見る。

麗「しまった！」

シャ「闇の書よ守護騎士シャマルが命じます。我が敵を打ちぬく力をいまここに！……」

麗「くっ！きゃっ……」

咄嗟に接近しようとするが仮面の男が前に立ちはだかり、力づくで投げ飛ばされてしまう麗華。

シャ「撃つて！破壊の雷！」

ドガアアアアアアアン

詠唱が完成し、結界を漆黒の雷が直撃した。

音が鳴り止む。

麗華は視線を戻す。そこには誰もいなかった。

麗「……逃げられた。にしてもあの仮面の男は一体……」

麗華の音が空間に広がった・・・

Next to TALE 26!!!!!!

Expectation that begs the follow
ing!!!!!!

T A L E 2 5 守護騎士達と対決よ！（後書き）

ということですが今回は戦闘シーンでした。

やっぱり戦闘は難しいです。

あと長くなる……

自分的には日常を書いたほうがラクなんですけど
まあこれからも頑張ります。

ああと忘れてましたアンケートです。

A・S後新章に入ります。その新章のアンケートです。

1、11eyes編

思い付きです。あと私が11eyes好きだからです。

2、転生編

（結斗君が転生するわけじゃありません。）

以上二つです。

アンケートじゃないじゃん！と思う方いるかと思いますが
これは私の気分なので気にしないで貰いたいです。
あと11eyesで要望があれば聞きます。

例、〴〵をヒロインにして欲しいやこの部分のところを原作ブレイク
してなど……

ではアンケート?応募待ってま〜す。

ではでは〜。

T A L E 2 6 新デバイスとゆづの弱点!!? (前書き)

PV10・0000突破です。

皆さんのお陰ですね。

書き始めはこんなに読んでくださるとは思っていなかったんです。
だからとっても嬉しいです。

とじつとじつで今回もやじつじつ〜

TALE 26 新デバイスとゆづの弱点!?!?

麗華 side

守護騎士の人たちに逃げられて私、なのは、フェイトは私の家に帰ってきている。

お母さんがデバイスの件で話があるらしい。

そしてな・ぜ・か、クロノ、ユーノ、アルフもついてきている。

ってまずくない？カートリッジはともかく、擬似リンカーコアのことは……まっいつか。なんとかなるよね……

美「あら、お帰り麗。つとそのこたちは？」

お母さんがクロノ達の事を聞いてくる。

麗「ただいま、お母さん。え、黒いのと、ペット二匹？」

ク・ユー・アル「違う!?!」「その通りだけど使い魔ね」

クロノとユーノが吼えた。
アルフは少し訂正したよ・・・
とりあえず男二人五月蠅い！！

ク「んっん・・・お初にお目にかかります、時空管理局執務官
クロノハラオウンです」

ユー「ユーノスクライヤです」

アル「フェイトの使い魔アルフだよ」

三人が名乗る。
なんかクロノが気障っぽかった・・・。

美「あら初めまして、ゆうと麗の母白銀美緒です。え〜とみんなが
来たのはデバイスの事よね」

ク「はい、その通りです。」

美「じゃあとりあえず、リビングへ話はそこでね・・・」

そういつてお母さんは屋敷の中に入っていつてしまった。
秘密じゃないの？デバイス・・・
いいのかな仮にもクロノは執務官なのに・・・

i n リビング

洋式の長テーブルを囲みながら座る。

目の前にはさつき食べ損ねたケーキとミルクティー。

美味しいよ〜。

ん〜私このために生きてる！

(あとゆうのためね・・・)

どこまでいつても結斗至上主義の麗華だった。

美「さてデバイスの話ね(ちょっと待って下さい)何かな？クロノ
執務官？」

お母さんが話そうとしたらクロノが遮った。・・・相変わらずK
Yね。

ク「かあ・・・艦長にも聞いてもらいたいのですがよろしいですか？」

絶対今母さんっていいそうになったよね？

美「構いませんが・・・艦長の名前は？」

お母さんが珍しくふざけずにクロノに回答している・・・
明日雨かな・・・？「麗？」
えっなんで？考え読まれた？・・・

ク「リンディ・・・リンディハラオウンです・・・」

美「あらそう、いいわよ。」

そしてクロノがリンディさんと通信を繋げる。
モニターが映り、画面にはリンディさんが・・・

リ「久しぶりね、美緒」

美「そうね、何年ぶりかしら？」

リ「あなたが京二さんと管理局を辞めてだから・・・2年かしら？」

美「もうそんなになっていたのね」

麗「ちょっと！ナチュラルに話してるけどお母さんリンディさんと知り合いだったの!？」

私は驚いたため待ったをかける。

美「あれ言ってなかったっけ？私とリンディは友達、親友よ」

ク「でも前僕らと一緒に驚いていたじゃないですか？」

クロノがリンディさんに言った。

リ「あれは・・・みんなに合わせただけよ それにしてもあなたが子供をね」

ニタニタと微笑むリンディさん・・・

美「違うわよ、ゆづと麗は養子よ。そんな暇なかったわ・・・」

リ「そっ、そう・・・それで？京二さんは？」

そう言ってお父さんの姿を探す。

あっリンディさんそれは・・・

美「京二は・・・死んだわ。事故でね・・・」

お母さんが悲しそうに言う。

リ「ごめんなさい・・・」

美「いいわよ、もう終わった事だし。そ・れ・に・（ふえっ？）今は麗もいるしね～～ん～～」

そっいいながらお母さんは私に抱きついてくる。

麗「ちよっど、お母さん！離してよ～～」

美「はあ～～。ちよっどゆじと麗の抱き心地は最高ね」

しびしびと言った感じに私を解放する。

もう・・・ノノ人前でやらないでって言ったのに・・・
ちなみにここにゆうがはいると30分は開放してくれなくなる。

リ「・・・そう・・・とりあえず良かったわ・・・（あの～）
な
んですか？クロノ？」

ク「そろそろ話を進めて欲しいのですが・・・」

またも空気break！

まあ今回は良かったかな？あのままじゃ話が進まないし・・・

リ「そうね～忘れてたわ。」

忘れてたって・・・。リンディさんとお母さんって似たもの同士だ
よね・・・

美「さて・・・話を戻しましょうか。三人ともデバイスどうだった
？」

カツンッ

お母さんが紅茶を飲み、カップをソーサーに置きながら聞いてくる。

な「はい、えっとこの前は防げなかった攻撃が簡単に防げるようになりまして・・・」

フェ「うん、この前はどんなに魔力を込めてもたたっ切られたのに・・・」

美「それは良かったわ。理由はカートリッジね あれで出力が上がるのよ。」

リ「でも美緒。カートリッジシステムはデバイスとマスターにダメージを与えるんじゃない？」

リンディさんが疑問を口にした。

美「確かに従来の方法ではそうね。でもこのシステムは違う。」

ク「どう・・・違うのですか？」

美「みんなこれから言う事は黙っていてね。特にクロノ君とリンデ

イはね・・・分かったわーりましたーそれを解決したのが擬似リンカーコアよ・・・」

リ・ク「なっ!？」

お母さんの言葉に驚くリンディさんとクロノ・・・

リ「擬似リンカーコアって美緒あなた、そんな凄い事やってたの!？」

リンディが驚きを隠せずに言った。

美「私じゃないわ、確かに私も手伝ったけど一割程度の事しかしてないわ・・・もちろん京二でもないわ。」

フェ「え?じゃあ一体誰が・・・?」

それはくも・ち・ろ・ん・・・

美「私の愛息子の結斗よ!」

みんな「「「「「ゆう（結斗が、結斗君が、）！！！！？？？」「」

私とお母さん以外が驚いて声を上げる。

リ「ちょっと！どうゆうこと！？それって！！」

美「言葉の通りよ、基本プログラムから何まで全てあの子が自分でアイディアを出し、構成したのよ・・・」

リ「結斗君が・・・す、すごいわね。美緒と京二さんを超えちゃったんじゃない？」

茶目「気に聞いてくるリンディさん。

美「ええ、そうね。あの子ったら私と京二が書いた技術書やら魔導書やらなんでも理解していつちやうんだもん。私、自分や京二は今まで天才だと思っていたけどああゆうのを本当の天才って言うのね。少し嫉妬しちゃうわ・・・まあ息子としては誇らしくて自慢できる子なんだけど・・・」

お母さんが微笑みながら言う。

私もそう思うよ・・・

リ「確かにそうね。あなたと京二さんは間違いなく天才よ、それすらも超えるなんて・・・それでどうゆう仕組みなの？」

美「まず最初にこれはベル方式ではないし、ミッド式のどちらでもないわ。敢えて言うなら・・・白銀から取ってシルバ式かしら？まあとにかく、このシステムは両方の魔法形態の長所を取り、短所を補っているわ。さてなのはちゃん？」

な「はい？」

いきなりなのはに話題を振るお母さん

美「ミッド式の長所、短所は分かるかしら？」

な「うーん、長所は～～遠距離からの攻撃が出来ることでしょうか？短所は～～分かりません・・・」

なのはだからね。

美「うん、正解ね。フェイトちゃん短所は？」

フェ「接近戦が出来ない事、というより接近すると圧倒的に火力が落ちることでしょうか？」

美「はい、正解。じゃあ麗ベルカ式の長所と短所は？」

麗「（もぐもぐ・・・）ん・・・。ミッドとは逆に近距離が出来て遠距離が出来ない事・・・かな？」

ケーキを食べ終えて私は答えた。

美「正解、簡単に言えばね・・・麗達が言ったとおりそれならば話は簡単で遠距離、近距離が出来るようにすればいい。んで、ゆうはカートリッジシステムに着目したの・・・」

ク「なるほど。ですが先ほど問題が・・・」

美「そのとおり、無理にカートリッジを使うとマスターの負担となり短い年月しか扱う事ができない。だ・か・らここで擬似リンクカーコアよ。これをデバイスい組み込むことでデバイスとマスターにかかる負担を半分にした。しかもゆうは更に高みに行きその半分の半分まで負担を軽減をさせた・・・」

麗「つまりゆうは1/8にまで負担を軽減させたと言っわけね・・・」

美「それに負担を軽減させるだけじゃないわよ」

フェ「どうゆうことでしょうか？」

美「あれ？もしかしてまだフェイトちゃんはやってないの？バルディッシュユ？」

バル「はい、必要なかったので・・・」

なんか会話してる二人。お母さんはその途端にこやかな顔を始める。

あれは何か楽しい事を考えているときだよ・・・

美「フェイトちゃん、驚かないでね」

フェ「はい？」

未だ訳が分からないフェイト。他のみんなも？がつてる。

美「バルディッシュユ、Thunder blade」

バル> All right.<

みんな「!!!!!!」

そして突如現れた金色の剣。フェイトの攻撃魔法サンダーブレードだった。

美「あゝはははははは」

みんなの表情を見て爆笑のお母さん。かく言う私も表情には表さないが驚いている。

フェ「バ、バルディッシュ？一体どうして？」

美「あはは。あゝ笑った笑った。えっとねフェイトちゃんさっきの答えがこれなの」

な「デバイスが魔法を使う事が出来る・・・ということですか？美緒さん？」

美「なのはちゃんは今もう体験してたか。うん、そのとおり大体マスターの半分の量くらいの魔力を持っているよ。だから自分で魔法が発動できるんだ。まあ使い方はいろいろあるけど一人で違う種類の魔法を同時に使う事もできるし、一つの魔法にして威力強化とかも出来るね」

みんな「.....」

美「あれ？みんなまだ驚いてるの？」

リ「あ、当たり前よ・・・それでこれは量産できるの？」

美「あゝそれは無理。だってわたしも構造知らないし。第一ゆうがどうやって作ったのかも知らないから。それにこれはあの子が作った技術だもの。私はサポートしただけってね」

な「だからさつきレイジングハートディバインバスターを撃てたの？」

レイ「はい、そのとおりです」

美「まあこの技術がゆうが本当に認めた人じゃないと与えないものね。だから三人ともあまり多用はしないでね。それを見たものからぬことを考えて近寄ってくるから」

麗・な・フェ「は〜い」

美「ん よろしい」

ク「・・・なんて奴だ。これで本当に小学三年生か？」

リ「天才を越してもう鬼才ね・・・すさまじいわ・・・」

今まで啞然としていたクロノを筆頭にみんなが驚き始める。
でもお母さんだけは違った。

美「確かに鬼才だね。でも才能だけじゃないのよ・・・」

ユー「どうゆうことですか？」

美「ゆうがこのシステムの相談を私に持ちかけた時言ったのよ。」

回想・・・

美「ねえゆう・・・」

結「何、母さん？」

美「このシステム普通のデバイスマイスターでは、考えられないわ。
どうしてこんなに頑張れたの？」

結「確かに僕がこのシステムを作った。もちろん焰美、瀨のお陰で

でもあるけどね……あのね、麗やなのは、フエイトの負担を少しでも減らしたいんだ。そして彼女達の貫きたい信念を応援したいんだ……」

美「そう……心配なのね」

結「まあね」

美「あと三人が大好きなのね」

結「(ぷしゅ〜〜) / / /」 顔が真っ赤になった

美「きゃ〜〜やっぱかわいいわ〜ゆうちゃん」

結「むぎゅっ。苦しいよ〜母さん」

回想終了……

ってね。確かにゆうには才能がある。それこそ私が羨むほどの。で

もね、ゆうは努力して、そして想いを込めてるの。あなたたち三人を助けられるようになってね」

麗「な・フェ」「だ、大好きって……結斗（君／ゆう）……
・・／／／」「

美「まっこれで擬似リンカーコアは完成っというわけよ。でどうする？リンディ、クロノ君。これ上に話すの？」

リ「……話せるわけ無いじゃない。結斗君が必死に作ったデバイスを……。第一報告するにしても結斗君本人に聞かないといけないわね、これは。」

ク「僕もそう思います。ですがなのは達の事を上は聞いてきますよ……」

美「まあカートリッジのことは言っても問題ないですよ。

あくまで擬似リンカーコアをつけると1／8にまで負担を軽減。カートリッジだけなら1／4に軽減できるわ」

リ「分かったわ、上にはカートリッジのことしか言わないわ」

美「ありがとね、リンディ。やっぱりあたしの親友ね」

そういつてお母さんは嬉しそうに微笑んだのだった……

in 八神家

アリシア side

え〜とはやてちゃんが帰ってきて私達は今夕ご飯をみんなで作っています。

主にゆう君とはやてちゃんがキッチンで作り、私達は盛り付けやお皿の用意などです……。

結「あはは……」

は「そっなんよ〜」

とりあえず羨ましいです。凄く……。
二人で立っているキッチンにまるで新婚さんみたいです。
うう、私もあそこに行きたいのに……。
はやてちゃんってば時間があればゆう君の傍に
いようとしますの。

は「(にやっ)」

羨ましく見ているとはやてちゃんと目が合い、はやてちゃんが小悪
魔的な笑いをしました……。
うううううう~~~~
わたしだって……。

焰・瀨「うううううう~~~~」

一緒に担当になっている焰美ちゃんと瀨ちゃんを見ていると私と同
じようになっています。

結「みんなどうかした？」

私達が唸っているとゆう君が不思議に思ったのか声を掛けてくれま
した。

アリ「うう。なんでもない・・・」

結「そう・・・？さて出来た！三人ともこれ運んで」

私達に野菜やお肉などを渡してくる。

今日のご飯はお鍋と言われるものです。

私は食べた事ないけどゆう君とはやてちゃんの料理なので
とっても期待しています。

は「それにしてもヴィータ達おそいな。みんなどこ行ってはるん
やる？」

手を洗い席についたはやてちゃんが聞きました。
八神家はみんなでご飯を食べるのが決まりです。
ほんとにどこまでいってるんだろう・・・？

アリ「ううん、シグナムたちはともかくヴィータはもうすぐ
帰ってくると思うけど・・・ヴィータってばゆう君とはやてちゃん
の料理好きだし」

は「そうなんよ」

〜
〜

みんなが心配になっているとはやての携帯が鳴りました

は「あっメールや！」

結「はやて、友達？」

は「そうなんよ、今日な〜図書館行ったとき意気投合してもうてん。
それでメアド交換したんよ〜」

焰「へ〜女の子かの？」

興味を持ったのか焰美ちゃんが聞きます。

は「そやで、向こうも私とにて読書家なんよ〜」

はやてちゃんが嬉しそうに言いました

澁「そうなのですか。読書家ならゆう様もそうですね」

結「まあ確かにそうだね」

は「結斗君は何を主に読むん？」

結「うゝん理論書でしょ、哲学書、技術書」

（ちよっと結斗君？）なに？はやて。」

ゆう君が本を挙げていくとはやてちゃんが出た
をかけた。

普通だったら・・・

は「それ本とちやうちゃん！」

うん、はやてちゃんそのとおり。

結「そうかな？どつなの？澁、焰美・・・」

澁・焰「さあ・・・？」

あれ？違うよね、本って小説とかミステリーとかじゃないの！？

は「あれ？うちが間違つとつのか？」

アリ「安心して、はやてちゃん。私もそう思つから・・・」

は「さよか・・・」

結・静・焰「「「？？？」「」

三人が首を傾げます。

焰「それでっ、その女の子の名前はなんて言つんじや？」

は「ああそれはなっつゝただいまっくあつヴェータ達が帰ってきた
！」

そこでヴェータ達が帰ってきたみたいです。

待っているとヴォルケンもみんな入ってきました。

シ「ただいま戻りました、主はやて」

シャ「ただいま帰りました、はやてちゃん・・・」

ザ「(コク)」

ヴィ「ただいま〜はやて〜。うお！もうご飯が出来てる！さっさと食おうぜ！」

結「ヴィータったら帰ってきたら手を洗う、でしょ！」

テーブルに着こうとするヴィータにゆう君が
注意をします。

ヴィ「そうだったぜ！」

そう言つてヴィータは洗面所の方へ行きます。
シグナムたちもついていきました。

ヴィ「はふはふ、ん。うめ〜〜激うまだぜ！」

ヴィータちゃんが熱々の鍋を食べながら言います。

は「そやる、やっぱり寒い日は鍋が一番やな」

結「はい、アリシア。熱いから気をつけてね・・・」

ゆう君がそう言ってよそってくれる。

アリ「ありがと、ゆう君。・・・あっ」

私は受け取って食べようとしましたがみんなが使っている、箸が使えない事に気がつきました。

結「どうしたの？あ・・・そっか箸アリシアはまだ使えないんだっけ・・・」

アリ「うん、>そっだ！<どうしたの？ゆう君」

私が困っているとゆう君が手を叩きました・・・

結「アリシア器を貸して。>うん・・・<ふうふう、はい、あ・・・」

は・焰・瀨「「「ななつつつ!!???」「」

そういつてゆう君が箸を使って私
に野菜を向けてきます。これは・・・いわゆるあ〜んという行為
では?しかもふうふう付き!

結「ほら、あ〜ん」

なおも向けてきます。焰美ちゃんたちをみると
「「「なんて羨ましい!!!!!!」「」
と言う顔をしています。

アリ「／／／・・・あ〜ん。はふはふ・・・」

うう恥ずかしくて味分らないよ〜。でも嬉しいな。

は「ちよつと結斗君アリシアちゃんだけずるいで!!」

焰・瀨「「そうじゃ／そうです」「」

みんな一斉の抗議を開始しました・・・

結「そんなこといっても、しょうがないじゃないかアリシア食べられ
ないんだから・・・」

は「じゃあうち等は？」

結「はやて達は食べられるじゃない？」

焰「そつ、そう・・・じゃ・・・がな・・・」

焰美ちゃんが消え入りそうな声で

は「そ、そうだけど・・・」

はやてちゃんも

漣「でも・・・でもですね・・・」

漣ちゃんも・・・

結「????」

それから私はずっと食べさせてもらって
幸せでした。

といつような感じに今夜の夕飯は過ぎていきました。

はやてside

は「よしこれで、準備完了!!」

夕食を食べて、お風呂入った後私は計画を
実行した。

ヴィ「はやて、何してんの？」

アイスを食べながら話しかけてくるパジャマのヴィータ。
ちなみにめっちゃかわいいです。

は「ん〜？今な私の計画の最中なんや・・・」

準備しながら言う。

ヴィ「計画？」

は「そ・れ・は・・・これや！！！！」

私は一枚のDVDを見せる。

ヴィ「ホラー映画？」

は「せや、今朝聞いたやろ。結斗君が苦手なもの」

ヴィ「ああ〜あれか・・・」

アリ「ほんとなのかな？」

は「そのための計画や。だから協力してやみんな〜」

焰・澪「もちろん（じゃ／です）」

焰美達は結斗の怖がる姿を保存するために手を組んだ。

張り切つて言う焰美ちゃんに澪ちゃん。ちなみに二人ともパジャマ
や。

焰美ちゃんは白いかわいいパジャマ。

澪ちゃんは赤いかわいいパジャマ。

アリシアちゃんは緑のかわいいパジャマ。

みんなちよ～～～かわいいんやで・・・

ちなみに私は水色のパジャマやで。

結「はあ～いいお湯だったよ～」

そう言つて結斗君がお風呂から出てきた。

・・・つてまずいでこれは・・・

結斗以外「～～～ぽ～～～」「～～～」

結「……………ん？みんなどしたの？」

不思議に思い首を傾げる結斗君。

あかん……………だめや！

結斗君は長い腰くらいまである黒髪を結ばずに

いたんや……………普通なら問題はないんやけど……………

結斗君の場合、女の子に見えるんや……………

しかもな髪に残った水滴とかつやつやの髪とかを見るとな……………

まさに男の娘！！！！

破壊力抜群やで！！！！

は「ゆ……………結斗君。ほんまに男の子かいな？」

結「当たり前でしょ！僕はれっきとした男だよ！！！」

少々怒ったようやった。

でもそれでもかわいいで〜。

結「は・や・て？」 満面の笑み

は「はっはい!・・・分かりました・・・。」

結「もう・・・。(むす〜)(」

焰・瀨・アリ「」(ゆう>様ノ君<かわいすぎるよ〜)(「「「

どうやらみんな私と同じ事考えていたらしいわ・・・
っと計画、計画っと

は「結斗君」

結「何?はやて?」

結斗君が冷蔵庫から牛乳を出しながら聞く。

は「今日な〜ビデオ屋さんからDVDを借りてきてん。でなみんな
で見ようって思ってるんやけど結斗君も参加な〜」

結「いいけど、何を見るの?」

痛いところを付けてくるわ。どないしょ・・・

アリ「そこはお、お楽しみだよ。ゆう君。あはは」

結「？そう・・・」

なんとか結斗君をこまかせたようや。

アリシアちゃんナイス！ サムズアツプ

アリ「うふふ・・・」 サムズアツプ

は「さて結斗君も参加ということでもみんな見るぞ」(むふふ・・・)「

と言うわけで映画鑑賞です。

席は右からヴィータ、私、結斗君、アリシアちゃん、
焰美ちゃん、瀨ちゃん、シグナム、シャマルや。
ザフィーラは狼で床や。

テンテレテ〜ンテレレテンテテ〜ン

映画が始まるわ〜。

題名……………

リング

結「>ダッ<」 急いで立ち上がって寝室に行くとする音。

は・アリ「>ガシツ・・・ズルズル・・・ちょこん<」 捕まえて
ひきつってソファに座らせる音。

逃げられへんで〜。

前テレビ見とったときめっちゃ怖いって聞いたから借りてみたっぢ
ゆうわけぢ。

結「離して！はやて、アリシア僕はもう寝る時間なんだ！！」

結斗君が必死に抵抗する。

は「そんな〜私家族で見るの夢やったんやよ・・・」

私は上目使い+嘘泣き・・・でござい！？

結「うつ・・・わ、分かったよ・・・。」

やっとで陥落したわ

始まって数分後・・・

結「ブルブル・・・」

え〜今開始数分です。結斗君は・・・めっちゃかわいく震えて

映画終了後……

結「えぐっひぐっ……」

泣いていた。ごっつ泣いていた。
なんか悪いことしたみたいで……罪悪感が残るわ……。

焰「あゝ泣くなゆう。撫でてやるから……」

結「あじがど〜えヴい……」

結斗君を焰美が撫でている。

焰「／／／なんてことはないぞ……（かわいい！抱きしめたい！）
」

結「でもどうじよう僕今日ねだれないよ〜」

アリ「そっそれなら私が一緒に寝てあげるよ／／／」

あつずるい！アリシアちゃん！

は「私も寝てあげるで／＼／」

澪「私だつて／＼／」

焰「我だつて．．．／＼／」

そういつて私と焰美ちゃんと澪ちゃんも参加します。
すると結斗君が．．．

結「ほんと．．．？」 無自覚の上目遣い

ドキユーーーーー

だ、だめや．．．。結斗君それはあかんで．．．。
見ているだけで顔真っ赤や．．．
隣を見してみる．．．

アリ・澪・焰「／＼／」

みんなも同じみたいや・・・

と言うわけでこの勝負負けられへん!!!!
女の子にはやらなくちゃならないときがあるんや!

アリ・焰・瀨・は「最初はぐぐぐじゃんけんぽん!!!!」

結「す~~~~」

勝ったで!!!!やったわ~~~~、ちなみに勝ったのは私と
アリシアちゃんや~。

アリ「うう、ゆう君すごいかわいいよ~~~~」

アリシアちゃんが寝ている結斗君をみて

悶絶しているわ。

は「ほんとやわ〜・・・な〜アリシアちゃん・・・」

私は気になることがあって聞く。

アリ「何？はやてちゃん？」

は「結斗君の事どう思ってるん？」

アリ「・・・ゆう君は私を生き返らせてくれたの。いや・・・正確にはちがうかな。転生っていうのかな？」

そういつてアリシアちゃんは話してくれた。

自分は本当は死んでいる事。結斗君が新しい命を与えてくれたこと。

は「そんなことが・・・だからアリシアちゃんは・・・」

アリ「うん、大好きノノ。はやてちゃんは？」

そう言って微笑むアリシアちゃん

は「私も・・・私も好きや。足を直してもらうたし。優しいし、強いし、かつこいい。これで惚れん方がおかしいやろ」

アリ「そうだね・・・」

しかも男の娘やしね

Next to TALE 27

Expectation that begs the follow
wing!!!!!!!!!!!!

TALE 26 新デバイスとゆづの弱点!!? (後書き)

はあと言う事で今回はこんな感じになりました。

結斗君の意外な弱点発覚ですね・・・。

いくら強くても弱点がないと楽しくないですからね。

さて話し変わってPSS3ほし～～～

テイルズやりて～～～

ということでした！

バイバイ

TABLE 27 再び相間見る者たち（前書き）

なんとか形にしました。

感想やらアンケートやら

まっているので

答えてくださると嬉しいです。

TALE 27 再び相間見る者たち

結 side

僕の弱点が焰美と瀨に大暴露され、怖い映画を見た翌日。
早朝・・・僕はいつもより早く起きてしまった。
隣には気持ちよさそうに寝るアリシアとはやての姿。

結「うつ・・・二人とも・・・」

抱きついているのだ。僕に・・・しかもささやかな
膨らみを押し付けてノノノ
僕はなんとか右手に抱きついていたたはやてを剥がす・・・
さて次はアリシアの左手・・・

アリ「んっ・・・ゆうくっん・・・えへへっ・・・」

何を夢で見ているか分からないが随分と幸せそうだ・・・

結「よいしょっ……>ダキツくん？」

アリシアの腕をほどいていると反対方向から……

は「結斗くん……あへへ……」

幸せそうなのはやてが再び僕の右腕を掴む。
しょうがない……またほどいて……

ダキツ

今度はアリシア……ほどく。

結「っ……」

ダキツ

はやて……

ダキッ

アリシア・・・

結「だ〜〜もう！これじゃあ起きれないよ〜（泣）」

狙ってるんじゃないかと思いたいくらいに二人のコンビネーションはばっちりだ。

片方ほどくと片方が抱きつく・・・

結「はあはあ・・・」

なぜ朝からこんなに苦労しなければならぬのか・・・
それからこの地獄？から抜けだすのに10分かかった。
疲れた・・・

シ「せいっ……ん？おはよう、結斗」

一階に行ってみるとそこには剣を持ち素振りをしているシグナムの姿があった。

結「おはよう、シグナム。なんで素振りしてるの？」

僕がはやての家に来てからは一度も素振りなんてしなかったのに。

シ「いや……なに……。騎士として常に主を守らなければなら
ないからな……」

シグナムはまるで隠し事があるように言う。

僕はそれに心当たりがあった……。

結「シグナム……昨日、戦闘をしたでしょ？それも近くで……」

シ「どうしてっ！？」

シグナムは驚いた。まあいつも威風堂々としているシグナムがそんなにもれば……。ね。

結「忘れた？僕だって魔導師だよ、今は使えないけどね。魔力を感じる事くらいは出来るさ。」

シ「そうか・・・>シユンツ<・・・なっ・・・どうゆっつもりだ・・・？」

尋ねるシグナムに僕は正面から首下に手刀を構える・・・

結「それはこちらのセリフ。シグナム達蒐集作業をしているんだろ
う・・・」

僕は殺気を出し構えながら聞く、やろうと思えばいつでも首を取れる。

シ「あ・・・ああ。だがそれは主のため・・・」

冷静に答えるシグナム。額には汗・・・

結「それを、はやては？」

シ「もちろんご存じない・・・」

当然だろうあのはやてが、自分よりも他人を優先する子がそれを知れば絶対に反対するに決まってる。

結「はやてを救いたいの分かる。でもそれは犯罪だ・・・」

シ「分かっている、だが我ら守護騎士は本来これが仕事なのだ。それに主がマスターになれば足は治る・・・」

結「それは違うよ。闇の書は破壊にしか使われない・・・というより使えない。どんなに違う事を望んでも・・・」

シ「なぜだ！？本当のマスターになれば治るのではないのか!？」

自分の知っている事と違う事を僕が言った為動揺する
シグナム。

結「理由は分からないが闇の書が完成すると

世界を破壊する闇が現れる分かっているのはそれだけ。

夜天の書の時とはもかく闇の書はそうになっている。管理局のデータでもそうだ」

シ「そんな・・・我らの行為は無駄だったのか・・・？」

下を向き膝つくシグナム。

結「・・・シグナム。はやてを助けたいかい？」

僕は構えと殺気を無くし、聞く。

シ「もちろんだ！！我ら主のためなら命も惜しくない！！」

僕を見上げ威勢よく言うというシグナム。

結「・・・」

僕は見る。目を・・・はあ・・・

結「分かった・・・。なら僕も協力するよ」

シ「だが蒐集は……」

結「確かに蒐集をすると闇が発生する。でもそれを倒せれば……
どうなると思う？」

シ「バグが……なく……なる？」

結「その通り。でも一時的だ。この前も言ったように
バグは再生する。だから倒した後、夜天の書にアクセス
して僕のデータをインストールする。博打だけで
正直こっちの方がいいと思う。バグを倒さずに
インストールをするとどうなるか分からないから……」

シ「それでほんとに主は助かるのだな！？ほんとに！」

結「うん……>話は聞かせてもらった！<焰美、瀨……」

振り向くとそこには焰美と瀨がいた。

焰・瀨「おはよう、ゆう>様<シグナム」

結「おはよう、聞いてたの？」

澁「ええ、先ほどから。では私達が・・・」

結「頼めるかい？」

焰・澁「仰せのままに・・・」

そう言つて二人が膝をつき、頭を垂れる。

シ「ちよつと待つてくれ、蒐集作業は私達でも苦勞するのだ。焰美と澁、大丈夫なのか」

結「問題ないさ、二人とも僕のパートナーだ。僕の動きは大体できるから。」

シ「し、しかし・・・」

直も首を縦に振らないシグナム。
なら・・・

パチンッ

シュンッ

僕が指を鳴らす。

巻き上がる焰髪と蒼髪。

すると一瞬で焰美は焰龍を出し、瀨は蒼の銃を出しそれぞれシグナムへと向ける。

シ「わ、分かった・・・」

焰美、瀨の實力は分かってもらえたようだ。あ、ちなみにどうして二人がデバイスを出せるのかと言うと、僕と分離したことで普通の人間になったからだ。

結「二人とも下ろして・・・」

焰・瀨「うむ／はい・・・」

二人がデバイスを納める。

シ「……>動けもなかった……この私が。この三人一体
どれ程強いのだ……?<」

怪訝そうに僕達を見るシグナム

瀨「私達はゆう様とずっと一緒にいましたから。真似ただけです。
あくまで凄いのはゆう様です。」

それに気づき、瀨は言った。

シ「そうか……ではこれから焰美と瀨が手伝ってくれるというこ
とでいいんだな？」

結「うん、僕は魔法使えないし。体力もね。協力したいのは山々な
んだけど……」

焰「だめじゃ、ゆうは休んどれ。我らがやるから。あんないい子死
なせてたまるか。」

心配してくれる焰美

結「ありがと、まあ安心して。はやては僕が守るから。だからね・・・」

二匹の猫に向かって言う。

ね「にゃ〜」

そういつてどこかへ行ってしまった。

なのはside

美緒さんの話が終わって、私、フェイトちゃん、麗華ちゃんはクロノ君に呼ばれた。

なんでもクロノ君の先生みたいな人が私達を呼んでるんだって。

あとその人はフェイトちゃんの保護責任者？って言うのらしいの。よく分からないけど・・・

麗「は〜なんだって私まで・・・」

始まりました・・・

麗華ちゃんがクロノに愚痴を言います。

やっぱり結斗君以外の男の子には言葉による
容赦がありません。

ユ一ノ君も役立たずって言われてたし・・・

ク「そんな事いったってグレアム提督が呼んでるんだ。我慢してく
れ・・・」

これまたいつものようにクロノ君が苦笑しながら言いました。
これから会う人はグレアムって言う人らしいです。

麗「グレアム提督ね・・・クロノのお父さんクライドさんの師な
の？」

ク「なぜその事を！」

驚くクロノ君。

クライド？

麗「まえゆうがいたとき管理局のデータにハックしたのよ。」

ク「・・・どうやって入った？」

少し怖い顔をしながら言うクロノ君。

麗「簡単によ。ゆう曰く、>こんな脆いセキュリティで管理局大丈夫かな・・・くだつてさ。まあ確かにあれは脆いわ、私でも出来る・・・」

それに麗華ちゃんは全く動じることなく答えます。

ク「一応管理局のセキュリティは万全なんだが・・・はあ、君達のハックに対抗できる人は管理局にはいないと言う事か。頼むから余計な事しないでくれよ・・・」

麗「失礼ね、私が見つかる訳無いじゃない。あんな弱小ガード相手に。」

ク「そ、そうでは無くて・・・ハックするのをやめてくれ・・・」

麗「無理。調べている事があるから・・・」

そういつて麗華ちゃんはそっぽを向く。

私は知っています。

麗華ちゃんが調べている事は京二さんを殺した犯人の手がかりを探

しているんだと思います。

ク「……………はあ」

大きなため息をつき、私達はクロノ君にグラム提督がいるところへ案内された。

ク「グラム提督！失礼します……クロノハラオウン執務官です。フェイトテストロッサ、高町なのは、白銀麗華を連れてきました。」

ノックをして私達の事を告げるクロノ君。

グ「入りなさい……」

扉を開け、

ク「失礼します……」

クロノに続いて部屋に入る私達。そこにはソファに座った人柄の優しそうなおじさんがいました。

グ「初めまして私がグラムだ。」

な「高町なのはです」

フェ、「フェイトテスタロッサです」

麗「白銀麗華よ、ふんっ・・・」

私達も自己紹介をしました。

麗華ちゃん。ふんっ！て・・・

こうしてグラム提督から話が始まりました。

内容は、友を信じ、裏切らない事。

これが守れるならフェイトちゃんに関して何も言う事は無いということでした。

グラムside

クロノや高町、テスタロッサ、白銀ら出て行った後、使い魔リーゼロッテが話しかけてきた。

ロ「父さま、ターゲットが動き始めました・・・」

グ「その結斗君を見張っておき、計画の邪魔になるようなら排除しなさい……」

アリ・ロ「了解っ！」

そういつて二人は転移した。

邪魔はさせない。我らの計画闇の書の永久封印を……

麗華 side

提督の話が聞かされて、その後フェイトの家つまりリンディさんの家に来ていた。

ちなみにクロノはいない。

本局でやる事があるらしい。てなわけで今は私、なのは、フェイト、待機して買い物から帰ってきたエイミィがこの家にいる。

エイ「艦長もう出かけちゃった？」

フェイトに買って来たかぼちゃを渡すエイミィ。

フェー「うん、アースラの武装追加が済んだから試験航行だつて。」

エイ「武装っていうと・・・アルカンシエルか、あんな物騒なもの最後まで使わないで済めば良いけど・・・」

はあくど溜息をつくエイミィ。

それを私はプログラムを広げながら聞く。

このプログラムは鏡月のデータだ。

やっぱり自分で見てみないことには理解も信用も出来ないからね。

まあゆうのことは絶対的に信頼しているけど。

それにしても・・・アルカンシエル・・・ね・・・

発動地点を中心に空間を歪曲させ反応消滅させる魔導砲か。

あんなものがここで使われたら海鳴市は木っ端微塵ね。

な「クロノ君もいないですし、戻るまでエイミィさんが指揮代行らしいですよ・・・」

アル「責任ジユウダ〜イ・・・」

アルフが子犬モード肉を齧りながら言う。

パンツ、スリスリ

エイ「それもまた物騒な〜」

フェイトが持っているかぼちゃを撫でながら言うエイミィ。
そしてかぼちゃを片手でわしづかむ。
って・・・エイミィ強いね〜片手でわしづかみって・・・

エイ「まっ非常事態なんてそうそ>Emergency!!!!<・・・
う・・・

お、起きない筈なのに〜（泣）「

緊急事態発生・・・ね。

麗「エイミィ、どんまい・・・」

私の言葉にエイミィは苦笑した。

焰美 side

今我とシグナムは砂漠の惑星を飛行している。
闇の書の蒐集するためだ。

焰「この辺かの？」

シ「ああ、ここに対象がいるらしいが・・・なあ焰美」

砂漠へと着地しながら聞いてきたシグナム。
その顔は真剣だった。

シ「結斗は一体どれ程努力したのだ？あの歳で
あれ程までにいくのは不可能だ」

焰「ひたすら努力をしていたの。ゆうは……。これ言っているの
か分からぬがゆうはな、後悔をしたくないと言っていた。
そのために力があるなら僕はもっと頑張るとな……」

シ「それだけで……」

焰「確かに普通の人にとってはそれだけじゃな……。だがなゆうは
怖がっておるのだ。

自分の大切なものを失うのを……。我はそう思う」

シ「我々と同じというわけ……か」

802

怪「ぎゃあああああ」

怪物登場か……

焰「おっと役者がお出ましのようじゃの。気合入れるよ」

シ「ふんっ誰に向かっていっている……」

焰「セットアップ・・・」

我は素晴らしい刀、焰龍を出す。

私の髪は焰髪、灼眼、我からは火の粉が

はらはらと舞う。(ぶっちゃけシャ です)

我はゆうの白銀流が使える。

静はゆうの射撃能力を。

射撃が使えないと言っわけではないが

我には刀があってる気がするから

近距離でいく。

さあゆうのため、はやてのため行くかの！

静 side

周りは森林。

私の隣には守護騎士ヴィータ。ゆう様に今朝頼まれ、同行した次第です。

ヴィ「この辺か〜一体どこにいやがんだ？」

焦るヴィータ。

漣「ヴィータ様焦ってはいけません。」

ヴィ「だっ、だけだよ〜。早くしないとはやてが……」

気持ちは分からなくは無いですが……

漣「大丈夫です。私達も協力するんですから、それにゆう様がいるのですよ。あの方はやるといったらやってくれる方ですから」

ヴィ「まあ確かに、結斗が言うところにしてしてくれる気がするな」

漣「もちろんです！……っど、どうやらお客様のようです……

」

私が正面を見る。ヴィータ様も・・・
そこには・・・

ヴィ「高町・・・なんとか・・・」

白い服の高町なのは様がいらっしやりました。

Next to TALE 28

Expectation that begs the foll
owing!!!!!!

T A L E 2 7 再び相間見る者たち（後書き）

つ、疲れた・・・。

これからも頑張ります。

はあ・・・

TABLE 28 収束の兆し（前書き）

今回はなのはVSヴィータand瀧

麗華VS焰美

です。

戦闘シーン難しいよ（泣）

自分では頑張った方なんですがいざ書くとすると
語句や言葉が出てこないです。

これが文才がないって事なんだろうなと

悲しく思っております。

こんな駄文でよろしい方は次へお進みください・

TALE 28 収束の兆し

焰美 side

怪「グギャー—————」

我とシグナムは今怪獣を相手にしている。

へんてこな形をしておるわ。

顔は蛸みたいじゃし、うねうねうねっとるし、

しかも触手があつて、気持ち悪いの〜。

焰「その触手気持ち悪いの。切り落としてやるわ。白銀流奥義……」

飛燕「

衝撃波飛燕は私の炎熱が付加され、炎の刃と化す。

シ「紫電一線……」

怪「があああああああ」

私の隣でシグナムが連結刃で、触手を切り落とす。

焰「やるではないか、シグナム。」

シ「これでもヴォルケンリッターが将シグナムだからな・・・」

我の評価にシグナムは答えた。

焰「それもそうか、さて仕上げといくか>thunder
blades<
・・・ん？来客かの？」

怪「ぎゃああああああああ」

仕上げといこうとしたとき突如空から金色の
剣が怪物に突き刺さり、怪物は絶命してしまった。
やれやれ台無しではないか・・・

シ「テストロッサ・・・」

焰「なんじゃと!？」

シグナムの声を聞き、我は驚いた。

姿を探す。……いた！！空中から舞い降りるかのよう
に来る金髪の幼い少女。
まんまフェイトではないか！？
しかも隣には……………

麗華じゃないか！！！！

フェ「シグナム……それにあなたは……」

驚いていた我にフェイトが声をかけてくる。

焰「我は……え、……焰^{ほむ}じゃ、お主等は？」

焰美と言いつうになったところをなんとか
偽名を言った。

フェ「私は時空管理局囑託魔導師フェイトテストロッサ」

麗「悪者に名乗る名なんてないわ」

囑託になっていたのか……

喜ぶべきか、悲しむべきか……。
って麗華相変わらずよのう……

フェ「焰、投降して下さい。」

焰「断る。我は主と主の守りたいと思うもののために戦っただけじゃ」

フェ「そうですか……じゃあ！あなたたちを捕獲します！」

バル>scythe form<

鏡>twin buster mode<

バルドイツシユの声がして、鎌にしてこちらに向けてくる。

麗華は鏡月を……

シ「え、（焰にしておいてくれ、あやつらゆうの知り合いじゃ）分かった。焰下がっていてくれ、私は一対一でやりたいのだ」

そういつて前へ出るシグナム。

やれやれ騎士道かの？

焰「よかるう、まかせる。」

我は下がった。

……っしてもうた！これだと我が麗華の相手になってしまっ！
どうすれば……いいのじゃろうか……

澗side

私とヴィータ様は白い魔導師、高町なのは様と対面しています。にしても偶然であるものですね。
ヴィータ様が戦っていた相手がなのは様だったなんて。

ヴィ「またお前か！高町なんか！」

なんとかじゃなくてなのは様です。ヴィータ様。

な「なっ！……なのはだっば！な・の・は〜！はあヴィータ
ちゃんと……誰ですか？」

両手を挙げて抗議をして私にきづいたなのは様。

まずいですね、私が瀧って事知らればゆう様も犯罪者と思われて
しまつから……

瀧「名は蒼あおです」

な「蒼さん……お話を聞かせてください。わたし……み……」

ヴィ「おっ、おい！どうして本当の名前を名乗らないんだよ」

なのは様が一人で話していると念話で聞いてくるヴィータ様。
ひどいですねヴィータ様なのは様が一生懸命
話されているに……

瀧「（いえ、あの方高町なのは様はゆう様の知り合いなのです。ヴ
ィータ様もそうゆうことで私を蒼と呼んでください）」

ヴィ「（分かった……あとあのなんとかって言う奴からは蒐集で

きねえんだ。だからとつとと転移魔法で脱出するぞ！」

だからなのは様ですよ・・・ヴィータ様。

漣「（分かりました）」

私もなのは様を傷つけたくありませんからね・・・

な「だからね、お話を聞かせて・・・」

なのは様が話し終わり、私達に両手を広げ迎える形をする。

ヴィータ様は一瞬戸惑ったが気を直し、なのは様に言う。

ヴィ「うるせーてめーら管理局の言うことなんか信じられるか！ 吼えろ、Eisen!!!」

アイ>Iron Howl.<

トガトガドガーーーーー

ヴィ「よしっ今のうちに……」

ヴィータ様がアイゼンで衝撃波を起こし私達は退避しました。
ふうっここまで来れば……

ヴィ「よし、次元転送……」

ヴィータ様が転送の準備をします。私はその間
なのは様の様子をと……あれ？

滞「あの、ヴィータ様……（んだよ！今準備してんだから話しか
けんな！）いえ……あの……なのは様が狙っております……
」

ヴィ「そんな馬鹿な話が……（冷汗）って嘘だろ！！あんな遠
くから!？」

ヴィータ様もなのは様を見ます。

一キロメートル先、

そこにはデバイスを構えたなのは様の姿が・・・
もう打つ気満々ですね〜

な「デバイン……バスター……」!

桃色の砲撃がこちらに殺到。

直撃コースです!!

私はヴィータ様の前に出ます。

静「アイスシールド!」

アイスシールドを斜めに展開。デバインバスターが当たりシールドが砲撃を上方向へ反射します。

反射を利用しての防御案外うまくいくものですね

な「そんな!?!」

なのは様の驚く顔を見ながら私達は転送されました。

第一世界 沙漠

焰美 side

さてどうしたもんかの？

目の前には銀色のBJ長い髪をまとめない麗華の姿が。

私も焰龍を出す。ちなみに気づいてないようじゃ。

麗「あなた・・・その構え。いいえそんな筈ない・・・」

私の構えを見ていぶかしむ麗華。一応構えは変えておるが。

私の癖とかもゆうと同じだからの〜

麗華だからばれるかも・・・

麗「いくわ!」

鏡>prism ballet.<

長い黒髪をなびかせ、合計十個の弾を撃ってくる。

むっ、腕を上げたのう麗華。

単純に我に撃っているのではなく、我が動けないようにそれぞれ時間差を出して撃ってくる。しかも跳弾つき。

この歳でここまでの連射出来るのはゆづくらいかの？

じゃが……我はゆづのデバイスじゃ！

こんなもの見慣れておるわ！！

焰「せいっ！」

まず一番最初に正面二つの弾を焰龍で両断。

続いて右からの三発をばく転して避け空中で一線。

今度は右二発、左二発、正面一発。

焰「飛燕……」

小さい声で言い炎熱を帯びた衝撃波を打って
弾をたたききる。

さらに！

麗「そんな！ちっ！？」

我は足元を炎熱で爆発させ、推進力を得て一気に
舌打ちをする麗華へと肉薄し焰龍を振り下ろす。

ガキンツギギギギ・・・

我の焰龍を麗華は鏡月で防ぐ。

鏝迫り合いの音が響く中麗華が聞いてきた。

麗「あなたのその動き、私の流派の動きが入ってる。

どうしてその動きが出来る？」

自分の名も名乗らぬくせにこちらには聞いてくるのか？

焰「名も教えぬような奴に我のことなど

教えとう・・・ない!!」

ガキンツ

罅迫り合いの状態から我は後退。麗華は空中で一回転して10メートルくらい離れる。

麗「はあ・・・いいわ。あなたのその減らず口言えなくしてあげる。覚えておきなさい!私の名は白銀麗華、白銀結斗の一番弟子、そしてお嫁さんよ!!」

どっちが減らず口なのかの?

しかも我を無視してのゆうとの結婚宣言・・・
許さぬ!!!

麗「いくわよ!シャイニングバス・・・」

焰「くっ・・・」

弾と砲撃に身構える。

しかしいつまでも攻撃は来なかった。

我は麗華を見てみた。

焰「白銀流奥義！陽炎！！」

仮「ぬっ・・・」

我の右からの斬りを

仮面の男がシールドで防ぐが・・・

焰「無駄じゃ！」

シールドで防いだのは焰龍の影。

本物は高速の突き。

この技陽炎は我の炎熱で

焰龍に蜃気楼をまとわせ、相手を惑わせる力。
これならいくら強くてもそうそうかわせぬ！

仮「くっ！」

しかし仮面の男はそれすらも避ける。

なんとゆう奴じゃ！

じゃが・・・手ごたえはあった

仮「ぐふっ・・・」

右わき腹を押さえる男。
何とか手傷は負わせられたの。

仮「ちっ・・・」

舌打ちをして転移をする仮面の男。
追おうと思ったが今は麗華が心配じゃ・・・
我は砂漠の上に転がっている麗華の様子を見る。

焰「ふむ・・・どうやら無事のようじゃ・・・」

じゃが魔力は抜き取られておった。

焰「このままというわけにもいかん・・・仕方ないシグナムの方
へ行くかの。」

我は気絶している麗華を背負ってシグナムとフェイトの
ところへ急いだ。

八神家結斗の部屋

PM 17:00

結斗 side

結「そう・・・麗華達が・・・。」

それぞれの戦闘の後無事にみんな帰ってきてくれた
から安心したよ。

でも麗華とフェイトが仮面の男の奇襲にあってしまった。

シグナムと焰美からの話だと二人ともも背後から仮面の男
にやられてリンカーコアを抜き取られたらしい。

幸い命には別状はない、麗華も。

シ「すまないが、蒐集はさせてもらった。」

シグナムが申し訳なさそうに言う。

結「シグナムは自分のやるべきことをしたんでしょ。それはしょうがないことだよ。僕が許せないのは仮面の男だ・・・しかも仮面の男は二人いる・・・」

拳を握りながら言う。くそっ・・・

アリ「ゆう君・・・」

焰「すまなかったの、ゆう。我がついていながら・・・」

結「焰美も気にしないで、焰美がやってくれなかったら麗華がどうなっていた事が・・・」

謝ってくる焰美に気にしないようにいうが焰美の顔は影が差すのは変わらない。

澁「にしてもその仮面の男は一体何者なのでしょう？」

場の空気を良くする為に澁がみんなに聞き始める。

結「不意打ちとはいえ麗華を奇襲して焰美の陽炎を避けたのは只者じゃないね。

焰美でもまともになるときつかったんじゃない？」

焰「うむ、あれの戦闘センスは高い。我もちと厳しいな……」

結「（僕が戦えれば……。）まあ今のところは警戒しておくしかないかな？向こうの目的も何も分からな>パリーーン<!!?何の音!？」

突如甲高い音が僕の声を遮った。

アリ「一階からしたよ!!」

結「一階にははやてが……」

僕らは急いで一階に下りてはやてを探す。

ヴィ「はやて！」

そしてキッチンで倒れているはやてを見つけた。

結「はやて！しっかりしてはやて！」

僕は首下に左手を入れはやてを起こして、様子を見る。
はやてはしきりに胸を押さえていて苦しそうだった。

は「うっ……うっ……」

シ「結斗主は！？」

あわてるシグナム。

他のみんなも慌てている。

結「みんな落ち着いて……はやて胸が痛いのか？」

苦しみながらはやては小さく首肯した。
はやてのこの痛みが用は相当なものだ。

結「とりあえず医者を呼んで！」

シ「わ、分かった！」

大きな声でいいシグナムは我に返って
電話しに行った。

あとは・・・はやての痛みが少しでも和らぐように・・・

結「cure purify・・・」

右手に淡い青色の光がとる

僕は開いている右手をはやての胸の上まで持っていく
光が胸に吸い込まれていく。

は「うう・・・」

徐々にはやての顔は和らいでいき
静かに眠り始めた。

ヴィ「結斗！！はやては！？・・・」

結「大丈夫・・・治癒の魔法をかけたから。少しはましだと」

ヴィ「よ、よかった〜」

みんなが胸を撫で下ろす。

澁「ゆう様！また魔法を！」

結「あはは、今回は仕方ない・・・さ・・・」

あれ・・・視界が暗・・・

アリ「ゆう君!？」

後ろの倒れそうだった僕をアリシアが支えてくれた。

結「ごめん、アリシア。少し・・・眠・・・る・・・」

アリ「えっ？ちょっとゆう君!？」

僕はアリシアの手に抱かれながら眠った。

アリシア side

ゆう君がはやてちゃんを治療して数分後。救急車ではやてちゃんは運ばれて、ゆう君は部屋で寝ている。
シグナム達ははやてのところへ、私達はゆう君の傍にいて今は瀧がゆう君の状態を診ている最中。

大事無ければいいんだけど。

瀧「ふう……。終わりました……」

アリ「ゆう君大丈夫なの？」

思わず瀨に乗り出すように聞く私。

瀨「ええ、眠っているだけです。先ほど使った

治療術が原因でしょうね。下位術ならまだしも上位術を使ったので
それで……」

アリ「眠っていれば大丈夫なんだ……よね？」

焰「たぶんのう。休んでは大丈夫だとは思うが
やる前でも結構無理しとったからの。」

瀨「ええ、本来絶対安静なのに……」

アリ「ほんとにゆう君は無茶ばかりするんだから……」

ゆう君の髪を撫でながら言う。

さらさらと髪が流れる。

~~~~~

瀨「電話ですね。私が……」



そういつて立ち上がり電話に出る瀨。

瀨「はい、八神ですが……。ああシヤマルさん……。はい。はい……。ええゆう様はなんとか……。そちらは？そうですか……。良かった……。はい……。分かりました……」

少し話した後、瀨は戻ってきた。

焰「電話誰じゃッた？」

瀨「シヤマル様でした。はやて様は目を覚まされたそうです。本人は胸と手を吊っただけと言っているそうです……」

アリ「そんなわけないよ！あの痛み用は普通じゃないもん！！」

あの痛み用は……

焰「ああ、おそらく無理をしているんだと思うがな。はやてもゆつと同じで痛いのか我慢するタイプじゃし……」

澗「ええ、それからしばらく入院するそうです。あとゆう様にありがとうと……」

澗がゆう君を見る。

アリ「今は……無理だよな。」

澗「ええ、とりあえず私達はゆう様が早く回復されるのを待ちましよう。あと蒐集作業も……」

焰「うむ……」

アリ「私も手伝いたいけど……」

澗「アリシアは仕方ありません。ゆう様の世話を中心にお願いします」

アリ「分かったよ……」

何も出来ない自分に歯がゆさを感じながら、  
どうしようもない自分に苛立ちが募りました。

N e x t t o T A L E 2 9 ! ! !

E x p e c t a t i o n t h a t b e g s t h e f o l l  
o w i n g ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

TALE28 収束の兆し（後書き）

SKY「というわけで今回はTALE28でした。」

麗「久しぶりね・・・」

SKY「おや麗華ちゃんじゃないですか!？」

麗「何が麗華ちゃん・・・よ!!どうして最近私達が後書きに出られなかったのよ!」

SKY「いや〜ちょっと間おいた方がこの後書きを見てくれる人がふえるかなあ・・・と」

麗「ふう〜ん・・・本音は？」

SKY「単にめんどくさかったんだ・・・てへっ」

麗「ぶっ殺す!!!」

SKY「わ〜〜〜ちょっと待って!!タイム!!今回はちょっと忘れてた事があるんだ」

麗「忘れてた事？」

SKY「えつとですね、今回の話によく出てた焰美ちゃんと瀧ちゃん、アリシアちゃんのこととかを書くのを忘れてたわけです・・・」

麗「ああ、そうだったね……。じゃあさつさと紹介する！」

SKY「了解です！」

焰美

容姿：fortissimo/Akkord：Bsusvier  
に出てくる里村紅葉

腰までの赤髪（きれいな濃い赤）で普段は髪を結ばない。

身長は麗華らと同じ程度。小柄で人形みたいな美少女。

口調は古風。

セットアップ時：デバイスのときは結斗の右耳の中心に赤い宝石で  
遜色されたイヤリング

人間のときは焰髪、灼眼。（まあシャナです）

白銀流を使いまた自分なりにアレンジをしている

接近戦の方が得意。

魔力変換は炎熱

澁

容姿：fortissimo/Akkord：Bsusvier  
に出てくる黒羽紗雪

肩までの白い髪

身長は麗華らと同じ。焰美と同じく小柄で美少女。

口調は知り合い全員に名前で様をつけてしまう。呼び捨てや

あだ名は珍しい。

セットアップ時：デバイスのときは結斗の左耳青い宝石で遜色され  
たイヤリング

人間時は蒼い髪、蒼い瞳となる。

白銀流は使えはいるが銃の方が得意。

銃の名前はブルーティアーズ、蒼一色で統一され

た美しい銃

魔力変換は氷結

アリシア

容姿：無印と変化なし。

未だユニゾンデバイスとしての機能は目覚めていない。

魔力変換、雷

SKY「と言う感じです・・・」

麗「・・・最強ね・・・。全部の変換資質って・・・」

SKY「その辺は・・・まあね・・・」

麗「はあ・・・っともう時間じゃない？」

SKY「っつとそうでした。というわけで今回読んでくださった人に感謝を！！バイバイ」

麗「またね〜」

T A L E 2 9 ん？また恋のライバル出現なの！？（前書き）

更新更新

頑張った！

え〜現在ブルーな結界を随時展開中なBALDR SKYです。

いろいろありまして・・・

アンケート集計したりして。

忙しいわけです・・・。

この話はまあてけと〜に入れました。  
ですが様子をよく書きました。

なのはや麗華達の様子が少しでも読者様方が  
イメージして下されば幸いです。

感想欲しいです。

アンケートに答えてくださるとなお嬉しいです。  
アンケートは活動報告を見て下さい。

では始まり始まり〜





T A L E 2 9 ん？また恋のライバル出現なの！？

地球時間20:00

次元潜行艦アースラ：医療室

麗華 s i d e

麗「ここ・・・は・・・？」

目を開けた先には何も無い空間。

天井も壁も何も無い空間。

私だけが存在した。

>麗・・・<

背後から声？振り向く。

けど誰もいない・・・気のせい？

>麗華・・・・・・・・<

また！

でもこの声は・・・・ゆづの声？

麗「ゆ・・・・う？ほんとに・・・・ゆづなの？」

>うん。そつだよ元気そつで安心したよ・・・・<

涙声で聞くわたしにゆづはいつも微笑んでくれた  
あの顔で答えるように言ってくれた。  
会えた！

麗「姿を現してよ！！」

>ごめん、それは出来ない。声を聞かせるだけで精一杯なんだ。<

抱きしめたい気持ちがいっぱいで声を大きくしていったが  
ゆづは出来ないと答えた。

麗「そんな・・・やっと会えたのに。」

声だけじゃ足りないよ・・・

<「め・・・ね、時間が。無いみたい・・・<

麗「ゆう？どうしたの!？」

急に声が途切れ途切れになったため  
私は焦った。

>仮め・・・のや・・・に気をつけ・・・。そいつは・・・管・・・  
きよ  
だ。だから・・・しら・・・べ・・・<

聞こえない・・・

麗「何？ゆう聞こえないよ!？」

>そ・・・しら・・・が闇・・・しよでな・・・しよじつ・・・て  
いる。<

麗「ゆう!?!ゆうは無事なの?」

>ほ……は……だいじょ……生きて……だからお  
願い……<

麗「ゆう!ゆう!……!」

手を伸ばす虚空に向かって、  
愛しい人に向かって、  
そこにゆうがいる事を信じて。

な「あっ!起きたの!麗華ちゃん!」

ベッドの隣のいす座っていたのはが嬉しそうに  
声をかけてきた。

麗「私、どうして……」

上半身を起こし、いすに座っているなのはに聞いてみる

な「覚えてない？麗華ちゃんってば、仮面の男に背後から攻撃されて気絶しちゃったの。」

麗「そう・・・フェイトは？」

フェイトの姿がなかったから  
心配になって聞いてみる。

な「フェイトちゃんは・・・ほら・・・」

カシャッ

そういつてなのはわたしから見て右側のカーテンを開け  
隣のベッドの様子を見せた。

フェ「おはよ、麗華・・・」

そこには私と同じく寝て手を振るフェイトの姿があった。見た限り至って外傷は無く、ただ疲れてそうだった。

麗「フェイトもなのね・・・」

フェ「うん、私も後ろから・・・」

声が徐々に小さくしぼんでいくように言うフェイトになのはが声をかける。

な「二人とも！！エイミーさんが言ってたけど、あの仮面の男の人はアースラのサーチャー捕らえられなかったの。だから気にする事無いと思うの。」

私達を元気付けるためなのはが笑顔で言う。

私はその笑顔に少し励まされながら気になってることを聞いた。

麗「あのあと私はどうやって助かったの？」

あの時仮面の男に背後からやられたのは覚えている。

でもその後は気を失って……

な「うんと……麗華ちゃんはその焰髪の女の人に助けられたの。でもその人とっても怒っていたの……」

焰ほむが……？一体どうして？普通なら敵の私にがやられて良いはずなのに……

な「ヴィータちゃんにも逃げられちゃったし……」

麗「逃げられたって……なのはが？」

遠距離攻撃が得意なのはなら敵を逃がすことは無いと思っていたので思わず聞いた。

な「うん、一緒にいた蒼さんって言う人に私の砲撃が効かなかったの……」

蒼あお……その人がなのはの砲撃を……

フェ「その人も仲間かな？」



私達の話の横で聞いていたフェイトが聞いてきた。  
ちなみにフェイトは寝た状態。

麗「おそらく……でも守護騎士は四人だったはず……」

闇の書は主しか使えないし……一緒に行動する意味が  
分からない……。

な「蒼<sup>あお</sup>さんも焰<sup>ほむ</sup>さんも犯罪を起こすような人  
じゃないと思うの。むしろ悪い人をやっつけるタイプの人じゃない  
かな？」

フェ「私、少しだけ話したけど悪い人じゃ無かったよ焰は。むしろ  
麗華の方が失礼だったよ……」

名乗らなかつた事を言っているのだろう。

あ、あれは……

な「じーーーーー」

なのはが詳しく話して的名な目をしてきた。

麗「うっ！ たっ確かに／＼／＼．．．あれは悪かったけどさ。でも最後にはちゃんと言ったわよ。」

な「麗華ちゃん．．私達と結斗君、親しい人以外の人ともう少し仲良くしたほうがいいと思うの．．．」

麗「な、なのはのくせに〜」

容赦なく言うなのはに私は言い訳を言おうと思ったが、事実なので何も言い返せなかった。

な「つとその話はおいて置いて〜私もあの蒼って言う人は悪い人じゃないとおもっの。穏やかな人だったし〜．．．」

お馴染みのおいて置いてのモーションをしながらなのはが言った。

確かに蒼って言う人は知らないけどなのはが言うならそういう人なんだろう．．．焔を見た私もそう思う。

白銀流に似た流派．．．それにあんな綺麗な太刀筋をした人が悪い事を起こすなんて考えにくい．．．  
そっいえばゆうが昔から言ってたー

結「太刀筋はその人の心だよ。だから太刀筋を見れば  
その人がどうゆう人なのか分かるんだ……」

つて。――

フェ「じゃあ一体何のために？」

麗「私もそれが気になってた。焰は主のためって  
言ってたけど……」

な「その主って闇の書の主さんかな？」

なのはが首を傾げた。

麗「うん……分かんない……でも何か理由が……  
ん〜」

フェ「何か他に気になったことがあるの？麗華……」

唸る私にフェイトが聞いてくる。

麗「うん・・・な〜にか忘れてるような気が・・・するの・・・」

額に人差し指を当てながら考える。

傍から見ると美少女が困っていて思わず助けてしまう  
光景。

フェ「ふ〜ん・・・夢で何か見たとか？」

な「まさか！また結斗君の夢！？私まだそんなに見れないのに〜」

フェ「私だってそうだよ〜／＼」

話が脱線させていく二人を軽く無視して考える・・・。  
夢・・・？・・・そういえば夢でゆうが何か言ってた。

麗「ってそうよ！〜！ゆう！〜！」

フェ「！？？びっくりした〜。どっしたの？？」

かわいらしい声を上げて驚くフェイト。

麗「うん・・・さっき夢でゆうが出てきたの。」

な「やっぱり結斗君が？（そうゆう願望の夢じゃなくて！何か言っていたの）そうなんだ・・・でも夢じゃ？」

また暴走しそうだったなのはを  
止めて話を軌道修正する。

麗「確かに夢、でも何か必死に伝えようとしてた・・・」

顎の下に指を沿え考える。

> 仮め・・・のや・・・に気をつけ・・・。そいつは・・・管・・・  
きよ  
だ。だから・・・しら・・・べ・・・く

麗「なのはなにか書くものを頂戴！」

な「う、うん」

紙とペンを受け取り、私はゆうから言われた事を書き出してみる。

だが途切れ途切れでなんて書いてあるのか分からない・

フェ「麗華、それが結斗がいつていた事？」

な「途切れ途切れでよく分からないの・・・」

麗「うん・・・確かに分かりにくいけど・・・。ゆうの言ったことを私なりに想像して・・・と・・・」

頑張つて解読してみる。

すると驚くべき事が分かったー

>仮面の奴に気をつけて・・・。そいつは管理局に関係がある。だから調べて・・・<

フェ「そんな！？管理局の誰かがあの仮面の男？」

驚いて声を上げるフェイトに私もなのはも同様に

驚きのあまり簡潔に返事する。

麗「そうゆうことになるね。後は最後の・・・」

同様に私は書いていく。

> 僕は大丈夫、生きてるだからお願い調べて！<

麗・な・フェ「！！！！」

言葉が分かったとき私達の目には涙が流れてきた。

な「いき・・・てる。。。結斗君が・・・」

フェ「結斗・・・良かった！！」

麗「ゆう・・・ほんとによかった。。。ぐすつ。。。んいつまでも泣いていても仕方ない・・・ゆうの言ったことを整理すると・・・」

フエイトとなのはが涙している中、私は切り替えて  
状況整理する。

フエ「管理局の誰かが・・・」

な「仮面の男の人・・・でもでも！そんなのあるの？」

信じられないといった感じ言っなのは。

麗「ゆうの予想ならそうゆうことになるわね・・・なのはリンデ  
イさんとクロノを呼んで！」

な「分かったの！」

そういつてなのはは部屋から出ていった。

数分後・・・

あの後すぐにリンディさん達が来て、さっきの



ことを話した。

リ「なるほど・・・それが事実なら管理局のサーチャーに引っかけられなかった事にもうなずけるわ」

ク「ええ、あれ程の体術をしているのも・・・」

麗「リンディさん管理局の誰か闇の書を恨んでいる人を知りませんか？」

リ「闇の書には多くの管理局員が犠牲になっているわ、恨んでいる人も・・・ね。」

含みのある言い方をするリンディさん。

麗「そう・・・ですか・・・」

それからみんなで話し合ったがいい打開策は見つからずに解散となった。

数日後

白銀邸庭A M 6:00

それから何日かして私とフェイトは待機。なのははその護衛  
ということは何日か過ごした。

私はその間ずっと初心に帰り鍛錬をしている。

焰との戦闘後私は自分の未熟さを知った。いくら仮面の男が速くっ  
てもゆうなら気がつけたはずだ。

殺気、気配、オーラ、人には纏っているものがいっぱいある。

それを察知できなかつたため今回私は撃墜されてしまった。

だから鍛錬のし直しというわけ。

今はスフィアのコントロール練習中。

鏡「155・・・170・・・190・・・200。それまで  
！」

四つのスフィアを一編に動かし、空き缶に当てる。  
毎回200回を目処にしているわ。

麗「次ッ！」

次は自分を中心に半径20メートルの地点に空き缶を置き、  
双銃で五秒以内に打ち抜く。  
少ないモーションで的確に打ち抜く事を目的としている。

カンツカンツカンツカンツ……

鏡「10発中9発命中ね……」

また……

麗「どうして出来ないの!?!」

思わず大きな声で言う。

鏡「焦っちゃ駄目よ、麗華。」

麗「分かってる、でもまたこの前みたいに守れなかったりしたら嫌  
なの……」

また自分が弱いせいでゆうやなのは達が  
傷つくところは見たくない！

鏡「・・・そうね。でも今朝はここまで・・・そろそろ学校よ。早く準備したら？」

麗「・・・分かった。そうする・・・」

聖祥付属小学校

AM 10:35

フエイトside

な「はやてちゃん？」

今は休み時間です。次の授業の準備をしていた時、すずかと話してたなのはが良かったです。

す「うん、図書館で友達になったの。でねはやてちゃんが入院しちゃってそれで……」

ア「入院って!?!どこが悪いの？」

急いで飛んでくるアリサ。

す「うん、足の不自由な子なの。それでお見舞いに行こうと思って」

な「それなら私達だって」

フェ「うん、すずかの友達は私達の友達。だからね……」

す「うん、じゃあ今日の放課後にと。じゃあ私ははやてちゃんに連絡を……」

そういつてすずかは携帯を取り出してメールをし始めました。

私は隣に座っていた麗華が

会話に入っていない事に気がついて話しかけました。

フエ「麗華？」

麗「・・・」

麗華に声をかけたけど黙ったままです。

す「麗華ちゃん？」

フエ「麗華〜？」

私もう一度声を掛けながら顔の前で手を振る。

麗「・・・。っ！うん？ええそうね、わたしも行くよ」

そこでやっと正気に返ったみたいで反応してくれました。

な「ぼーとしてたけど、どうしたの？」

ア「悩み事？」

心配そうに聞くアリサとなのは、私も心配です。

麗「えっ？ううん、そんなことないよ。いつも通りよ・・・」

明るく振舞うように言う麗華。

全然いつも通りじゃないと思う。でも麗華は話さなと思うしなあ。

みんなもこれ以上深く聞いても答えてくれないと思ったようで聞き返しませんでした。

それからの麗華はどの授業でも

心ここにあらずといった感じでした。

シヤマル slide

私は今はやてちゃんの家にあります。隣にはアリシアちゃん……。みんなの昼食を作っているのです。つて言っても作っているのはアリシアちゃん。私はお手伝いです。(泣)

はやてちゃんが入院してから結斗君も寝てる状態。だからご飯をどうするのかと言う話をしたのですが

―――回想

ヴィ「食えるのなら何でもいい。というより瀨達でいいじゃん！美味いんだし……」

シ「うむ、それで問題ないだろ……」

瀨「私達もいいですけど……それだと蒐集に支障が出ます」

アリ「じゃあ私が作るよ」

焰「うむ、それいいじゃろ……」



シャ「じゃあ私も〜」

ヴィ・シ・瀨・アリ・焰「「「「「シャマルは駄目!〜!」「「「「「

回想終了……

と言っわけなんです。みんなひどいです〜

アリ「ふふ〜ん っとこれを入れて完成!!」

私が回想している間に作り終わったみたいです。

シャ「お疲れ様アリシアちゃん」

アリ「う〜うん。私料理作るの好きだし、それに今私ができるの  
ってこれくらいだから・・・」

俯きながら言うアリシアちゃん・・・  
どこか悲しそうに見えるアリシアちゃん

シャ「そんなこと」~~~~~「<

サポートの言葉を言おうとしたらはやてちゃんのケータイが  
なりました。

アリ「シャマル鳴ってるよ」

シャ「・・・はい。出ます・・・」

確認をするとどうやらメールのようです。相手はこの前図書館では  
やてちゃんと友達になった月村すずかちゃんのようにです。

以下携帯内容――

from 月村すずか

本文：はやてちゃんが入院したと聞いたので  
今日の放課後お見舞いに行きたいんだけどいいかな？

あとそのとき私の友達も一緒に連れて行きます。  
みんな優しい子達ばかりだよ。  
良ければ放課後までに返事が欲しいよ。  
あ、あとその子達の写真を添付するよ

そして私は添付ファイルを広げた。

シャ「こっ、これって!!」

映っているのは五人の女の子達。

そこに私達と何度も戦っている白い魔導師の子と

黒い魔導師の子、銀の魔導師の子の姿が映っていました。

アリ「んんんどうしたの？シャマルんんん？」

私が一人驚いていたためアリシアちゃんが  
声を掛けてきました。

シャ「そ、それが……。さっきのメールの相手がはやてちゃん  
の友達すずかちゃんだったんだけど、すずかちゃんの友達の中に白

い魔導師の子と黒い魔導師の子と銀の魔導師の子がいるの!..!どっ、  
どうしよ〜」

アリ」と、とりあえず落ち着いて・・・ね。それでシグナムに相談し  
てみたら?」

慌てていた私をアリシアちゃんは落ち着かせて、一番最善の  
案を出してくれた。

シャ「そっ、そうよね!..。(シグナム?)」

私は今蒐集作業を行っているシグナムに念話で  
交信する。

シ(どうした、シャマル?)

すぐに繋がりに普通に聞いてくるシグナム。  
も〜そんな場合じゃないのに〜!!

シャ(それが・・・)

私はシグナムに今のメールのことを教えた。

シ（そうか・・・困った事になったな・・・）

話を聞き終わった後シグナムはそれだけを言って嘆息した。

シャ（うん・・・。どうしよう。）

アリ（え〜と会話中にごめんね。私に案があるんだけど・・・）

右往左往する私達にアリシアちゃんが  
念話で言ってきた。

アリシアはまだユニゾンデバイスではないが魔力は感じられるため  
念話は出来る。

シ（案とは？）

期待を込めた声で聞くシグナム。

アリ（案って言ってもそう大層なものじゃないけどね。なのはちや

ん達が来るなら仕方ないでしょ。幸いはやてちゃんの魔力は全部闇の書の中にあるんだから調べられもしない限り分かりはしないと思うよ。(

シャ(た、確かに・・・)

ほんとに不幸中の幸いだったわ・・・。

アリ(まあさすがにシグナム達がいたらばれちゃうと思うけど。)

シ(じゃあ我らは今日は主の下に言うてはいけないと言っわけか・・・)

シャ(それは仕方ないわ・・・)

シ(分かった、ヴィータ達にも伝えておく)

アリ(あ〜と、待って！もうそろそろご飯だから二人に伝えておいて〜)

シ(了解した。ところでシャマルは作ってないだろうな・・・)

シャ（ひどいわ〜シグナム・・・（泣））

アリ（シャマルは手伝ってもらったただだよ）

シ（む、了解した）

そう言っつてシグナムとの念話は途切れしました。

シャ「む〜ひどいです〜。アリシアちゃん！」

アリ「そう言っつてもシャマルは料理作れないでしょ！一体どうしたら料理が光るの?」

ずばりと指摘してくるアリシアちゃん。

シャ「そ、それは・・・隠し味で・・・」

アリ「確かに料理には隠し味って言うものもあるけど、大抵は隠し味なしで美味しいんだよ」

「シャ」でもでも〜もつと美味しくなつて欲しいじゃない!

なんとか答えましたが・・・

アリ「それでまずくなつてたら本末転倒でしょ・・・」

それをアリシアちゃんはやれやれと言つた感じではっさりと切り捨てました。

ううう〜ひどいです・・・。

「シャ」ううう・・・ところで結斗君はどうなんですか?」

私は最近見ていない結斗君の事を聞いてみる。

私達はほとんど家にいないのでアリシアちゃんにまかせっきりなのです。

アリ「まだ・・・目が覚めないの。瀨と焰美は心配ないって言つけど・・・」

小さくポツリと言つアリシアちゃんに私は一言しか言えなかった。



「シャ」そうですね・・・」

それから私達は互いにヴィータちゃん達が帰ってくるまで  
無言でした。

そうゆう雰囲気ではなかったからです。

P M 3 : 4 5

バニングス家の車の中

なのは s i d e

え〜と先程はやてちゃんのお見舞いに行く事になりました  
今はアリサちゃんの車で送迎中です。

ア「さすが、そのはやてって子どもなの？」

私の右隣に座ってるアリサちゃんが正面に座っている  
すずかちゃんに聞きました。

す「う〜ん、優しい子だよ。あと強い子なんだ」

ア「強い？」

す「うん。足が不自由でも元気で普通の子みたいなの」

な「たしかに、普通だったらそんなに明るく振舞えないの・・・」

フェ「そうなんだ・・・」

麗「ほんとね・・・」

そんな会話をしながら私達は海鳴市民病院に

車に揺られながら行きました。

――海鳴市民病院――

というわけで着きました、病院。

まずはやてちゃんの病室をカウンターで聞きます。

す「あの八神はやてちゃんの病室はどこですか？」

すずかちゃんがカウンターの看護婦さんに聞きます。

看「はい、え〜と・・・305号室になりますね」

305号室・・・

す「ありがとうございます・・・」

私達もお礼をいいますかちゃんについていきます。

麗「にしても病院っていつもこんな匂いするわね」

行っている最中麗華ちゃんがふと言いました。

ア「そりゃそうよ、病院なんて消毒の匂いばかりよ」

それに当然のことのように答えるアリサちゃん。

麗「確かにそうなんだけど私あまり病院って好きじゃないのよね」

何か過去を振り返るように言う麗華ちゃん。

私はその事に聞いてみたけど「また今度ね」とはぐらかされてしま  
いその話はそれまでとなってしまう。

「――はやて病室内――」

コンコン

？「は〜い」

すずかちゃんがドアをノックすると中から女の子の  
声が返ってきました。  
中に入ってみると一つのベットの上に華奢で  
かわいい女の子が座っていました。

す「はやてちゃん！」

は「すずかちゃん！いらしゃーい、この子らがすずかちゃんのお友達？」

私達を見て聞いてくるはやてちゃん。

すずかちゃんから聞いていた通り、明るくてとても元気な子でした。

す「うん、そうだよ。みんな私の大切なお友達だよ」

は「そっか〜。じゃあ改めて私は八神はやてです〜。はやてって呼んでな〜」

な・麗・フェ・ア「うん、よろしくね。はやて（ちゃん）！！」

私達はお互いに紹介をして楽しい雑談に入りました。  
はやてちゃんには家族がいるみたいだけど今日は来れないらしいです。  
だから私たちが来たことが嬉しいと言ってくれました。

は「そっか〜いいなあ〜。私も学校行きたいわ〜」

ア「何弱気な事言ってるの？がんばって治すのよ！」

な「そっだよ〜私達また来るから元気になっただけなの〜」

ちよつと弱気だったはやてちゃんに私たちが  
喝破を入れました。

は「ありがとな〜アリサちゃん、なのはちゃん。ん〜頑張るわ〜！」

また・・・君に会いたいしな〜／／／」

小さな声で最後はやてちゃんがなんか言ったので聞こえませんでした。

フェ「うん？はやて顔が赤いけどどうしたの？」

は「えっ？／／なんでもあらへんよ〜／／／」

麗「そういつても顔が真っ赤じゃない？何？もしかして好きな男の子でもいるの？（にやにや）」

ニヤニヤ顔ではやてちゃんに詰め寄る麗華ちゃん  
と・・・

す「そうなの？はやてちゃん」

ニタニタ顔のすずかちゃん。

はやてちゃんは顔を真っ赤にして今にも湯気が出そうです。

・・・実際出てます（笑）

はやてちゃん災難なの・・・麗華ちゃんとすずかちゃんに目をつけられるなんて。

は「／／／／うん．．．」

麗・す「きちゃ〜〜〜」

恥ずかしそうに言うはやてちゃんに麗華ちゃんたちが叫びだしました。

フェ「その男の子どつゆっ子なの？」

は「えっとな〜優しくて、かわいくて、頼りになる子や／／／／」

な「かわいってそれって男の娘？」

男の娘．．．。

私もちよっとというよりすごく興味があるので  
はやてちゃんの言葉に耳を傾けました。

は「そうなんよ〜めっちゃかわいいねん。」

ア「どの辺がかわいいの？」



は「この前な家でホラ〜映画をみてん。それでな〜その子の怖がり方がめっちゃかわいいねん！もううさぎみたいにな〜こっぴぶるぶる震えとんねん」

はやてちゃんがそういって震える様子を手で肩を押さえる動作で表しました。

ア「へ〜その子一回会ってみたいわね。名前は？」

アリサちゃん・・・それはストレートすぎると思うの。

は「そ、それは〜／＼／＼秘密やで〜」

当然このような答えになる。

やっぱりもう少しオブラードに包んで聞き出すべきだったの！

な「そんな〜」

は「乙女には秘密が多いんやで〜」



TALE29 ん？また恋のライバル出現なの！？（後書き）

SKY「・・・」

麗「どしたの？SKY」

SKY「よ・・・」

麗「よ？」

SKY「やった~~~~~!!!!!!」

麗「何？前書きと違って随分とテンションがhighね・・・」

SKY「11eyesの新作が来月に・・・出る！しかも今月は・・・fortissimoの新作の発売・・・。生きてて良かった・・・」

麗「そこまで喜ぶこと？」

SKY「何を言つのかな？麗華ちゃん！この二作はマジやばいっすばないっすー！」

麗「はあ、そうですね・・・じゃなくて！今回はゆうがないじやないー!!」

SKY「あ・・・。結斗君にはしばらく寝てもらいますー！」

麗「どのくらいっ!？」

SKY「機密情報です!！」

麗「ど・の・く・ら・い・?」 ニッコ

SKY「お、お教えできません!！機密情報です!！」

麗「ちっ・・・まあいいわ。じゃあ次の質問この後はどんな感じなの?」

SKY「(助かった・・・)うんとあと五話〜八話くらいかな?そのあとは・・・麗華ちゃんお待ちかねの〜」

麗「ま、まさか!？」

SKY「side story!！」です。良かったですね〜。ここではいちゃいちゃラブラブです」

麗「ゆ、ゆつと・・・ぶしゃ〜〜〜」

SKY「わ〜〜麗華ちゃんが!出血を〜!・・・そ、そんなに激しい事考えてたのかな?ね〜なのはちゃん達?ってえええええ」

な・フェ・は・アリ・焰・澁「ぶしゃ〜〜〜」 辺りが血溜まりとかしている

SKY「・・・え〜。今回はここまで!see you next time!！」

麗達「あはは〜〜げへ〜〜」

あくまでフィクションです。本編とはなんら関係ありません。特に性格。



TALE30心の力(前書き)

短いです。

ごめんなさい。

## T A L E 3 0 心の力

ーアースラ艦内ー

クロノside

麗華から管理局内の者が仮面の男の可能性があると聞いて僕は管理局員を調べた。

しかしこれと言って情報は無く・・・いや、情報が多すぎるのだ。

闇の書は第一級指定ロストログニアでありこれの被害にあった局員や遺族が恨みを持っているため候補が多いのだ。  
僕と母さんも含めて・・・

ク「はあ・・・」

エ「な〜に？クロノ君そんな若いうちから溜息をついてると幸せが逃げるよ〜」



思わず溜息をつく僕の隣でモニターをしているエイミィが僕の憂鬱な気分とは反対に元気よく聞いてくる。

ク「溜息もつきたくなくなるさ。管理局から仮面の男達を特定するにしても多すぎるぞ……。頭痛くなる……」

愚痴を垂らす僕にエイミィが呆気からんと答える。

エ「あはは、ま〜確かにね〜。でもやらないと被害者が出ちゃうよ〜」

そういつて被害にあった幻獣や怪物の写真を出してくる。

ク「前回の戦闘からどのくらいやられた？」

エ「う〜ん結構な量だよ。人間、幻獣とかリンカーコアがあって高い魔力を持つてるものを狙ってる。確認できただけでも十数件は確認されてし……」

真剣に質問をする僕を察してエイミィも

真剣に答えてくれた。

ク「正になりふり構わずだな。」

エ「うん、それに仮面の男達の事もあるし、やる事がいっぱいだね」

ク「ああ」

短く相槌を打つ僕にでもね〜と続けるエイミィ。

エ「麗華ちゃんが言ってたけど、この事件結斗君も関係があるみたいだし頑張ろうよ」

ク「信じられないけどね、虚数空間から生還できるなんて・・・だが確かにな。なのはやフェイト、麗華達はずっと会いたがっていたからな。僕も会わせてやりたいよ」

エ「そりゃそうだよ〜三人とも結斗君に惚れてるし・・・」

――

――

――

……え？

今エイミイ衝撃な事いわなかったか？

ク「おい！それ本当か？」

エ「当たり前じゃ〜ん、誰が見てもそうでしょう〜ですよ〜艦長」

あっけからんと答えるエイミイが艦長席に座っている母さんに話を振った。

リ「ええ、そうね〜 あの三人の姿を見てればね。分かるわよ〜」

え〜母さんも知ってたのか！？

エ「頭はいいし、強いし、かっこいいし、優しい。これで惚れない女の子はいないでしょ〜。それになのはちゃんとフエイトちゃんどつちとも結斗君に助けられてるしね〜」

エイミイが結斗を賞賛する。

エ「えっ？もしかしてクロノ君気がつかなかった？なのはちゃんや  
フェイトちゃんとはかく麗華ちゃんは気づいてたでしょう？」

まあくた・・確かに麗華は他の男にはとても厳しい。というよりえ  
げつない。あの歳で面と向かって使えないとか役立たずとかが言え  
るのは世界広と言えども麗華だけだろう・・  
僕もそんな扱いだし。

そういえばどうして麗華はあれ程までに結斗に執着するのだろう。

僕が違う事を考えているとエイミィが  
ニヤニヤ顔で見てくる。

ク「なっ何言ってるんだ気づいていたに決まってるだろアハハ」  
」

僕は冷静を装って答える。

よし、なんとかごまかせたか！

エ・リ「これは気づいてなかったな>わね・・・」

全然ごまかせてませんー

リ「まあとりあえず今は情報が欲しいわ。という訳でクロノ執務官、頑張って情報を探りなさい。」

エ「そうだぞー！！あの三人のためにもねー」

ク「りよ、了解しました！！」

とりあえず敬礼して返す僕。

ところで……フェイト、麗華はともかくなのははユーノから惚れられてるんじゃないか？

ユーノ……ドンマイだな

母さん達の言うとおりだな。  
そうだ、僕がこの事件の解決の鍵を握っているんだ……  
仮面の男の映像を見る。

ク「ん？」

エ「どしたの？クロノ君？」

エイミイが何か言ってるが僕の耳には入らなかった。  
似ているのだ……この仮面の男の動きがある人と……

ク「いや、そんなはずない……」

頭に浮かんだ予想に頭を振る。  
というよりあって欲しくない……この予想は。

エ「クロノ君？」

リ「クロノ？何か分かったの？」

ク「すみません、急いで調べなければならぬ事が  
出来ました。」

僕は急いで管制室から立ち去る。

お願いだから僕の予想外れててくれよ・・・

誰に言うわけでもなく僕は心の中で叫んだのであった。

はやてのお見舞いから2週間後――

AM6:00

白銀邸庭の結界内――

麗華 side

はやてのお見舞いを行ってから2週間が経過して  
もう12月中旬だ。

肌寒く、私の吐く息が白くなりまだ日が出てない暗い空へと溶けていく。

あれからは私達は見舞いに行つてない。

すずかとアリサ達は行つてゐるみたいだけど・・・忙しいのだ。

守護騎士達が動きを活発化して

私達も搜索するわけで・・・

まあ怪我を治すことが出来たからよかつたけど。

今ではすっかり完治もしていて今朝も鍛錬の最中――

ピンツ、ピンツ、バンツ、ピンツ、ピンツ

60メートル先の的の中心部を狙い打つ。  
ピンツという音は中心部。  
バンツは中心部以外・・・

鏡「五射中四射ね」



麗「はあはあはあ……」

何回やっても結果は同じでいい加減息も上がってきた。

鏡「麗華今朝はこの辺にしたほうがいいわ、これ以上やっても結果は変わらないと思うし……」

麗「あと……少し……だけ……はあはあ……」

カツツカツツ……

何とか息を整えようとしていたら後ろから誰かが歩いてくるのが分かった。

麗「何？お母さん……」

お母さんだった。お母さんは私の問いには答えず、手に持っていたタオルを渡してくる。

麗「ありがと……」

礼をいいタオルで掻いていた汗を拭う。汗をぬいだところから私の火照った体が冷たい空気と合わさり、急速に冷却されてとても気持ちいい。

美「麗……ちょっと根を詰め過ぎじゃない？」

お母さんが私の目を見て言う。

その目はいつものふざけたりしている目ではなく、私を娘として心配している目だと私は思った。

麗「そんなこと……ないよ……」

対し私はそんなお母さんの目を正面から見ることができずに下を見ていつてしまっ。

美「ゆうのこと？ゆうは生きてるんでしょ？」

お母さんには予めゆうの事を言っておいた。

とても嬉しがっていた。

麗「うん・・・」

美「ゆうは麗に今みたいに無理をして強くなって欲しいって言ったんじゃないでしょゆうが（分かってるよ!!）・・・麗・・・」

つい下を向いて叫んでしまった。

麗「分かってるよ・・・でも、でもまた私のせいでゆうに何かあったりしたら嫌だから。もうあんな思いしたくないから・・・」

地面に私の涙が落ちる。

不安だった。とてつもなく。

今の私は弱い。仮面の男にも焰美にも。こんなわたしじゃまたゆうを失っちゃう。

ゆうを失ったあの絶望はもう嫌、絶対。

ギョッ

涙をばたばたと流す私にお母さんは横から抱きしめる。

美「麗、確かに守る強さって必要だと思うわ。それが無ければ守れない。でもねそれだけでも駄目だと思うわ。その強さを引き出すのは心の力。」

思い出してゆうはあなたの大好きなゆうは技だけで守っていた？」

心の力……

麗「……違う。ゆうはいつでも誰かを守るって言って頑張ってた」

美「そうよ。ゆうはいつもそう、心が強い。だからあれだけ強いし信念も固い。必然的に技術も上がるってわけよ」

そっか私に足りなかったもの、心だったんだ。  
技術だけじゃない、力だけでもない。  
心の力が本当の強さだったんだ……

麗「鏡月あと一回だけお願い……」

私はお母さんから離れ、鏡月をお願いする。  
お母さんは見ている。

鏡「分かったわ・・・」

この前やった半径50メートル先に合計16の的が出現する。  
前回よりも距離が伸び、的も増えているが今私には分かる。  
全て当てられる。

鏡「count 5・・・4・・・3」

カウントを始める鏡月。私は意識を集中して備える。

鏡「2・・・1・・・start!!」

パンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッ  
パンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッ

シューウウウウー

私の双銃から熱が放出された。

鏡「結果は……全弾命中よ!!! やったわね!!!」

やった……? 出来た?

鏡月の言った事が信じられず、地面にへたり込む私。

美「やったわね、麗華!!!」

麗「ありがとう、お母さん……」

駆け寄ってくるお母さんに私は自分の今の心情を吐露する。

麗「わたし分かった。どうしてゆうがあそこまで強いのか。」

美「そう……良かったわ。さてと私は屋敷に戻るわ。麗華も早く準備しちゃいなさい。今日学校でしょ……」

麗「うん、分かった……」

お母さんに続いて私も屋敷に戻る。

そこでちょうど屋敷の方から太陽が見えた。

今まではそう感じなかったが今朝は

太陽がいつもより輝いているように感じた瞬間だった。

聖祥大付属小学校

PM 12:35

――昼休み――

アリス a s i d e

今日もみんなで昼食を取っているわ。

昨日違うところ、それは麗華が元気になった事だった。

昨日までは何かに怯えていてそれが何か私には分からなかったけど、今はその何かは吹っ切ったように思う。

す「麗華ちゃん何かあったの？」

それにすずかも気づいていたようで麗華に理由を聞き出した。

麗華は・・・

麗「ちよつとね〜」

嬉しそうにそう言ったただけだった。

な「麗華ちゃん元気になったみたいで良かったよ。」

フェ「うん、ほんとに。麗華ずっと思いつめていた様だったから」

なのはとフェイトも元気になった麗華が嬉しいようだ。

麗「心配かけたみたいでごめんね〜」

ア「ほんとよ〜っと今日はどうする？すずか？」

す「うんと〜今日も行く？」

な「行くってはやてちゃんのところ？」

ア「ええ、あんた達は来てないけどよく行ってるの」



す「はやてちゃんも嬉しそうだからね」

フェ「そっかじゃあ今日は私も行くのかな？」

な「じゃあ私も」

麗「うん、じゃあ私もはやての気になってる男の子気なるしね」

と言うわけで今日は全員で行く事になった。

ちなみにはやてには内緒で

驚かせるためよ！

Next to TALE 31!!!!!!

Expectation that begs the follow  
wing!!!!!!!!!!!!

TALE30心の力(後書き)

麗「短いわね・・・」

SKY「すいません。最近スランプで・・・」

麗「スランプね」

SKY「アイディアは来るんです。ですけどそれがなかなか表せな  
くって・・・」

麗「まあそうゆうこともあるわね。頑張りなさい」

SKY「はい、頑張ります。っと今日はここまでです・・・」

麗「次は守護騎士達と病院で対面ね」

SKY「はい、そうゆうことです。ではでは」

麗「バイバ～イ」

**T A L E 3 1 歪な覚醒（前書き）**

P V 1 5 0 0 0 0 0 0 突破！！！！

嬉しい！！

感激！！

では本文へ・・・

TALE 31 歪な覚醒

PM 17:00

――海鳴市民病院

なのは side

町を照らす太陽の光が赤みがかかり、  
赤一色の町へと変わり始め長い影が出来始める頃。

今日の昼お馴染みのメンバーではやてちゃんのお見舞いに行こうと決まり今は移動の最中です。  
前のときから全く来れなかったので  
楽しみです。

な「はやてちゃん元気かな？」

ア「なのは……病人相手に元気は無いと思うわよ……。まあ

「ただ私達が来てた時は笑顔だったわ」

腰に手を当て特徴的な金髪の髪を靡かせて私に答えてくれるアリサちゃん。

「な」にはは、それもそうだね・・・楽しみだね」

私が微笑んでと隣を歩く、フェイトちゃんを見ると同様に微笑んで答えてくれます。

フェ「そうだね、そういえばアリサとすずかはどのくらい行ってるの？」

す「うん結構行ってるかな？ねえ、アリサちゃん？」

ア「ええ、そうね。もう2〜3回は行ってるかしら？」

麗「もうそんなに行ってるんだ・・・私達用事で全く行けなかったからな〜残念・・・」

す「仕方ないよ〜だって三人とも用事があつたんだから・・・」

麗「まあ〜しょうがない事なんだけど・・・」

フエ「今から会いに行くんだから喜んでくれるよ、きっと・・・」

な「うん!..!」

そうはなしていると私達ははやてちゃんの病室に着きました。  
楽しみだな〜

ガラッ・・・

な「はやてちゃーん、久しぶり〜〜〜Y (^-^)!」

私が勢いよく笑顔で扉を開けると・・・

シ・シャ・ヴィ「・・・」

・・・。

は「あつ……なのはちゃん！来てくれたんや」

ポクポクポクポクポクチーーン

ピシャンッ……

は「あれ？なのはちゃん、どしたんや？」

閉めてしまった扉越しからはやてちゃんが笑顔で言ってくれるけど  
思わず、私は扉を閉めてしまっていました……

だって……あの人達って……！！

ア「ちよつとなんで閉めるのよ!？」

す「なのはちゃん？」

私の行動に訳が分からないというアリサちゃんとすずかちゃんが不  
自然そうに私を見ってきますが今の私にはそれどころじゃありません

でした・・・

ア「はやくまた来たわよ」

す「こんにちわ、はやくちゃん！」

でもアリサちゃんすずかちゃんはそう言いながら入って行っちゃいました。

フェ「どうしたの？なのは」

麗「????」

挙動不審な私を見つめる頭の上に？マークを浮かべるフェイトちゃんと麗華ちゃん。

な「あつ・・・あのね・・・。その・・・中に・・・中に、守護騎士さんたちがいたの」

しどろもどろに手を上下にさせながら  
なんとか私は言いました。



麗「なのほ〜、寝ぼけてるの？あの人たちがこんなところに居るわけないじゃな〜い>ガラッ・・・ポクポクポクポクポクポク  
チーーン・・・ピシャンッ・・・<居たわ・・・」

寝ぼけてないもん！！

麗華ちゃんも私と同じように扉を開けてすぐに閉めてしまいました。

ア「だからなんであんだ達は入ってこないのよ！！」

そこで入りあぐねていた私達をアリサちゃんが呼びにきました。

確かにこのまま帰るといいうわけには行かないので

私達は何の対策も練らずに入りざるを得ませんでした。

麗「ひ、久しぶりね。はやて・・・」

入って早々麗華ちゃんが目を泳がせながら言いました。

は「久しぶりって……一週間前に会ったばっかやんか」 変な  
麗華ちゃんやな〜」

麗「あはは、それもそうね……」

はやてちゃんの指摘に笑いながら答える麗華ちゃん。  
それよりも……

な「あの……そんなに睨まないで……（泣）」

ヴィ「睨んでねーです。こつゆつ目つきなんです……」

ヴィ「タちゃんが怖い。とても……だってすっつごい睨みつけてくるんだよ〜」（泣）  
怖いよ〜〜。

は「こらっ！ヴィータそんなことないやろ。悪い子にはメッやで！」

ヴィ「ぶぐっ……はだじで〜〜」ズンなさい……」

そう言っではやてちゃんがヴィータちゃんの鼻をつまみ、お仕置き  
みたいな事をしていました。  
とても中の良さそうな姉妹って言う感じでした。  
でも……はやてちゃんが闇の書の主なんて……。

## 麗華 side

はやてのお見舞いに行つて偶然守護騎士達と

目撃。

まさかはやてが闇の書の主だったなんて……。

驚いた……。

ヴィータはずっとこっちを睨んでるし、

あっ……はやてに怒られた。

ヴィータが怒られてしょぼんとしてる様子を見て、感情を  
あらわにしてる事にも驚く。

クロノがいつていたことによると彼女達は  
プログラムだから感情は無いって聞いていたんだけど……  
どこがよー!!

クロノ……覚えておきなさいよ……。

っと、シグナムは……フェイトと何か話してるみたいね……  
。アリサとすずかははやてと談笑してるし。

は「そういえばどして麗華ちゃん達これんかったん？」

そんな空気を知らずなのか、天然で気づかないのかははやては私達に聞いてくる。

フェ「ごめんね、私は用事で……」

な「なのはは店のお手伝いで……」

麗「私も用事……」

みんな言い訳ではやてをごまかす。  
良心がとがめるが仕方が無いよね……。  
それに私の場合事実だし

は「そっか、店ってなのはちゃんの家お店なん？」

やっぱり、女の子は甘いものだよね。

ちなみにゆうが作ってくれる甘いものは天下絶品。

市販のもの<ゆうの作ったもの 桃子さんの作ったもの

みたいな感じかな？

あとゆうが桃子さんに負けているわけじゃなくて

ゆうが桃子さん程は美味くないって言ったから。

そんな事ないと思うけどな。

な「うん そうだよ」

ア「喫茶翠家。なのはのお母さんが作ったシュークリーム  
とっても美味しいんだから」

は「わっ！ほんまに？私シュークリーム  
めっちゃ好きなんやわ」

手を叩き嬉しそうにいうはやて。

な「そうなの？じゃあ今度持ってくるね」

は「ええの！？ありがと～なのはちゃん」

な「にははは・・・どういたしまして」

しばらく話し続けてフェイトが席を立った。

フェ「なのは、私のどが渴いたからちよっと自販機まで  
行ってくるね」

な「じゃあ私も！」

シグナム達に目配せしながら言うのはとフェイト。おそろしく  
シグナム達から話を聞くためだろう。  
私も関係者なのでついていくことにする。

麗「なのは、フェイト私も行くわ。」

そうして私達は一旦はやての部屋から出る事にした。

ヴァイタ side

今私は病院屋上に向かっている。はやてが私達の主、  
闇の書の主だということがあのあの白いのと黒いのそれと  
銀色の奴にはれちまったからだ。  
奴らは今屋上で待機している。

どうやら私達を待っているみたいだ。

――――

――どうやらシグナムと接触したらしい。

ヴィ「私も行かないとな……」

あと少しなんだ……。あとちょっとではやて、私達と結斗達

との暖かい未来が待ってるんだ！！

激情を秘めて私は走る歩を早めた。

P M 1 8 : 1 0

海鳴市民病院：屋上

麗華 s i d e

日が落ち既に辺りは暗くなり、煌々と輝くのはビルの光や月の光のみとなったこの時間。

直に私達の意図にあの三人も気づいてるだろう。  
ここにいればいずれ現れる・・・絶対。

ガチャン、キーーーーーー



屋上のドアが開く音がひどく重く感じられる音だった。

私、なのは、フェイトに殺気を込めた視線を  
向けてきたのは言わずともだった。

シグナム……シャマル……

殺気をなんとか受け流しながら最初に口を開く。

麗「来たということは間違いないわね。はやてが闇の書の主」

シ「悲願はあと僅かで叶う……」

シャ「邪魔をするならはやてちゃんのお友達でも……」

冷めた言い方をする二人には揺るぎない決意があった。

でも闇の書の完成は破壊しか生まない……。

それをシグナム達は知ってるの？

その疑問をなのはがとても必死に言う。

な「待って！ちょっと待って！！話しを聞いてください！駄目なん

です！闇の書が完成したら、はやてちゃんは！」

ヒューーーーーー

ヴィ「やあーーーーー！！！」

ガーーーーー

な「！？きゃーーーーー」

しかしなのはが語りかけるときにヴィータが突如飛来。  
アイゼンでなのはを倒そうとするがそれに気づいたなのはは  
なんとかシールドで防いだ。  
しかしヴィータの力に押されフェンスにまで吹っ飛ばされてしまっ  
た。

麗「なのは！！」

ダキッ

私はなのはがフェンスにぶつからない様に夜駆けで先回りして

なのはを抱きとめた。

な「うう・・・ありがとう、麗華ちゃん」

フェ「なのは、麗華!!」

麗「!?!? フェイト避けて!!」

フェイトが私達のことを心配するがそれに乗じてフェイトに迫る影。

シ「はあああああ」

フェ「っ!?!」

シグナムが上段にレバンティンを構え、振り下ろしたところは地面だった。

なんとかフェイトは避けれた。

バ> Assault Form<

すぐにバルディッシュを起動。  
表情の見えないシグナム達を見るフェイト。

シ「管理局に主のことを伝えられては困るんだ・・・」

シャ「私の通信防御範囲から出すわけには・・・いかない！」

幽鬼のようにたたずむシャマルとシグナム。  
私はその姿に言い知れない恐怖を感じた。

カツ・・・カツ・・・

私となのは近づいてくるヴィータ。

なのははヴィータに吹っ飛ばされた時に肩を痛めたらしく  
動けないようだ。

私はシグナム達と同じで幽鬼のようにたたずむヴィータの  
前に出てなのはを守る形になる。

鏡 > C r o s s F o r m . <

双銃をヴィータに構える。

ヒーーーーー

ヴィータがBJを纏い、語りかける。

ヴィ「邪魔・・・すんなよ・・・」

なんとか恐怖を振り払いながら私はヴィータに答える。

麗「邪魔って・・・。あなた達分かってるの？闇の書が完成したら  
はやては>黙れ!!!<つ・・・」

説得を試みたが叫び声で一蹴されてしまった。

とても悲しい叫び声で私には次の言葉を紡ぐ事なんてできなかった。

ヴィ「あともうちょっとなんだ・・・あと少しで助けられるんだ  
！はやてが元気になって私達のところに帰ってくるんだ！結斗だつ  
て必死に頑張ってはやてを治療して、私達に希望を与えてくれたん  
だ・・・クツ・・・」



の事！」

なのはもさつきヴィータが言っていたことを聞いていたんだ。

麗「ええ」

勇ましく言うのはに私も便乗する。

立ち上がり、炎の中から抜け出す・・・

レイ>Axel Mode.<

その途中でレイジングハートを起動させるのは・・・

ヴィ「悪魔め・・・」

青い瞳に涙をため、私達を怒りの表情で見るヴィータ。

悪魔か・・・確かにヴィータ達からしてみれば私達は

悪魔ね・・・。

な「悪魔で・・・いいよ・・・。悪魔らしいやり方で話し聞いても  
らうから・・・」

私の隣でなのはが悲哀ともなんとも言えない表情で言う。  
その顔は悲しそうで、つらそうで、苦しそうだった。

麗「確かに悪魔ね。それでも・・・聞きたい事がある・・・結斗とは誰の事？」

ヴィ「……………」

無言……………答える気は無いようね。

鏡月を構える

一触即発の状態だ。

お互いにデバイスで攻撃し合おうとしたとき

ヒュン

焰「そっままでござ……………」



しかしそこで突如として自分の周りに火の粉を  
はらはらと落とす焔が現れた。

ヴィ「焔！どうして？」

目の前に現れた焔に矛先を変えるヴィータ。  
自分達の仲間が邪魔をしてきたからだろう。

フェイトの方にはなのはが前言っていた蒼って言う人  
がシグナムとフェイトの間に立ち、白い煙で牽制をしていた。  
あの煙恐らくは冷気だろう・・・

焔「落ち着け！武器を向けるだけが最善の手で  
はないじゃろ・・・」

蒼「ええ、とりあえず皆さん話し合いましょ。」

焔と蒼は私達とヴィータ達に有無を言わさないように  
早口でいい、命令した。

ヴィータ達は渋々といったかんじに従う。しかし私達の睨む目つきに変化は無かった。

私達は下より危害を加える気は無いので素直に従った。

焰「さて・・・いきなり魔力を感知してみれば何じゃこれは？」

蒼「まあ概ね理解は出来ませんが・・・」

やれやれといった感じの焰に、大体は分かっている気である蒼に私は思わず口を挟む。

麗「はやてが闇の書の主という事を知ったわ・・・」

な「でも闇の書は完成させたらいけないんです!!」

なのはが必死に叫び、

闇の書の完成の意味を言おうと・・・

焰「悪意ある改変を受け取るか・・・の？」

しかし以外にも焰はあっさりと答えた。

フェ「知っていたんですか？」

フェイトも目を丸くして尋ねる。

蒼「はい、予め我が主から聞いております。ですが主は直せます……」

闇の書の修復って……そんなの……。

な「で、でもそんなの管理局のデータには無かったです!!」

焰「そうかもしれんの……じゃが主には出来る……」

信じられなかったがとりあえず一番聞きたい事を尋ねよう……

麗「質問……。あなた達の主ははやて？」

焰・蒼「NO（じゃ）です……」

二人それって言う。  
やっぱり違った。

蒼「私達の主ははやて様の知り合いです」

フェ「でもその人が絶対はやてを治せるっていつ訳じゃく直るんだ  
!!!<・・・」

ヴィータ・・・

ヴィ「あいつは絶対って言った！私達とはやてを命を賭けてでも救  
ってみせるって！！それにあいつはほんとにはやてを助けてくれた  
！自分を省みずに・・・。」

お前達管理局よりもよっぽで信頼できる！！！」

涙を流しながら叫ぶヴィータ。

騙されてるって感じは・・・なさそうね・・・

蒼「・・・あなた方がどう思おうと私達の主は  
はやて様を救います。それこそ命を賭けるほどです。  
あなたたちはその信念を踏みにじるのですか？」

焰「闇の書は我たちが治すのじゃ。すこし傍観してくれんかの？」

それぞれ聞いてくる蒼と焰。

麗「……最後に聞かせて。あなた達の主って……結斗……  
白銀結斗じゃない？」

声が震えないように……涙声にならない様に聞く。

焰・蒼「……………」

二人は互いを見て考えているようだ。

二人がその長い沈黙を破り、言葉を発する……

バキンッ

な・フェ・シ・ヴィ・シャ「なにっ!? バインド!?!」

くっ！なんて強力なバインド！

仮1「そこまでだ……」

何も無い虚空から現れ仮面の男2人が現れ  
私達を見下ろす形になった。

焰「馬鹿な！？我たちから気づかれなく接近するなんて？」

蒼「一体どうやって!？」

いきなり現れた奴に焰も蒼も驚愕を隠せない……

仮2「貴様らが知る必要は無い……」

そういつて掌に出したのは……

シ・シャ・ヴィ「闇の書!？」

そしておもむろに書は開き光り輝く……

仮「さあ奪え・・・」

闇「Collecting」

何の感情も出さぬまま奴はそう言った。

焰・蒼「うううああああああああああああ」

背中を反らし、痛みの悲鳴を上げる焰達。  
胸からリンカーコアが発生して、凄い勢いで  
小さくなっていつている。

尋常じゃないその変化にみんなが叫ぶ。

ヴィ「焰！蒼！」

麗「やめてー！ー！ー蒼達が死んじゃうー！」

焰・蒼「うああああああああ」

なおも悲鳴を上げ続ける焔達。しかし仮面の男は止めなかった。

ピカッーーーーー

そして辺りを一瞬の光が満たした。

カチンツ…………チャリッーーーー

無機質な音をたててそれは落ちた。

焔達はイヤリング(…………)となって屋上に落ちた。

麗「焔、蒼!? 一体どうゆうこと!?!」

な「分かんないよ!」

フェ「焔達がイヤリングになった?」



動揺する私達。

訳が分からなかった。仮面は出てくるし、焔達はイヤリングになるし。

仮1「お前達もだ……」

シ・シャ・「」うっうあああ……ああああああ「」

仮1「こんなものでは誰も救えるはずがない……」

今度はシグナムとシャマルが消えてしまった。

ヴィ「シャマル！シグナム！何なんだよ！お前らは！！」

仮面の男を睨みつけるヴィータ。  
まだバインドが外せない。

仮1「プログラム風情が……知る必要の無い事だ……」

今度はヴィータを蒐集し始める。

ザ「うおおおおおおお」

影からやってきたザフィーラが攻撃するが  
右手で容易く受け止められて左手でカウンターを喰らい気絶してしまふ。

仮2「もう一匹居るか……」

闇「Collecting」

今度はザフィーラの体も光りだす。しかし途中で蒐集は終わった。  
どうゆうつつもり？

仮1「座標は？」

仮2「問題ない……」

短く受け答えをする奴ら。  
一体何を!?

な・フェ「えっ？」

奴らがカードを額にかざすとそこにはなのはとフェイトの容姿をした奴等がいた。

そして私達はクリスタルケージでロックされてしまった。

麗「ちよつとまだなの？鏡月！？」

鏡「もう少し！」

一刻も早く奴らを叩き潰したかったがバインドが邪魔だった。

光る魔方陣。

一瞬の静寂のあとそこには居ちゃいけない。一番居てはいけない人が転送された。

は「え？なのはちゃん？フェイトちゃん？  
なんなん？何なんこれ？」

首を左右に振り、現状の把握をしようとするはやて。

麗「はやて！！」

私は声を大きくしてクリスタルケージを  
叩くが全く聞こえてないらしい。

私を背にして偽なのはと偽フェイトがはやてに語りかける。

偽な「はやてちゃん、君はね病気なんだよ……闇の書の呪いなん  
だ」

偽フェ「もうね……治らないんだ」

あいつら一体何を！？

偽な「闇の書が完成しても助からない」

偽フェ「君が救われる事は……無いんだ」

は「!!!…………それはもう……ええんや。けどな今すぐヴィータ達を放して!」

はやてが泣いてる…………。

私はその原因であるあいつらが睨んだ。

偽な「この子達はもう壊れてるんだ……壊れたものはいらぬ  
ね…………」

偽フェ「だからね……壊しちゃお」

は「やめっ!やめて——————!」

偽なのはと偽フェイトの意図を知ったはやてが叫んだ  
が…………

偽な「ねえはやてちゃん…………」

偽フェ「運命って残酷なんだよ…………」

願いは叶わず…………



な「麗華ちゃん!!」

フェ「無事!?!」

駆け寄ってくるのはとフェイト。

麗「うん……だけど間に合わなかった……」

闇「また全てが終わってしまった。一体幾度このようなことが起こるのか……」

私が見つめる先、そこには長い白い髪に紅い目、黒いBJに漆黒の翼を生やした闇の書が立っていた。

Next to TALE 32!!!!!!





TALE 31 歪な覚醒（後書き）

SKY「はあ〜」

麗「大きな溜息ね・・・」

SKY「・・・はあ〜」

麗「（うざいわね・・・）何があったのよ・・・」

SKY「ああ麗華ちゃん・・・あのですね・・・」

麗「どうせ進路が決まっていなかったかそんなちゃっちー話でしょ」

SKY「いえ、それはもういいんです。決まりましたから。それが・・・  
最近全く書けないんです・・・」

麗「これが？」

SKY「はい・・・」

麗「スランプね〜」

SKY「そうですね。まあ今に始まった個じゃないんですけど・・・」

麗「まあ頑張れ。そうしないとこれ終わっちゃっわよ〜」

SKY「・・・頑張ります。っというわけで今回はブルーな感じから  
始まりました！」

麗「いきなりね・・・」

SKY「それよりもですね。今回は仮面の男らが出てきましたが・  
」

麗「が？」

SKY「むかつきますね〜。もうね書いてて何度呪い殺そうかと  
・・・」

麗「・・・え、ええそうね。でも悪役はいるでしょ」

SKY「分かってはいるんですけど・・・うざいものはうざいんです  
！」

麗「子供っばいわね・・・」

SKY「っというわけで今日はこの辺まで・・・」

麗「バイバ〜イ」



TABLE 32 新たなパートナー（前書き）

やっとここまでできました。

長かった。でも楽しくかけてきているので  
嬉しいです。

みなさんのご愛読のおかげで

PV158、733アクセス

ユニーク15、772人

です

これからもよろしく願います。

さて長い話はここまでにして  
本文へどどどど〜

T A L E 3 2 新たなパートナー

P M 1 8 : 0 5

フエイトside

どうしてこんなことになってしまったんだろう・・・。  
はやてが主だと分かり、一回はシグナム達と戦わざるを得なかった。  
でも焰と蒼のお陰でなんとか話し合いをする事ができて丸く収まる  
はずだった・・・。  
でもいきなり現れた仮面の男達の奇襲で守護騎士達は  
蒐集され、はやては感情が爆発し彼女に肉体を奪われて  
しまった・・・。

闇「闇に染まれ・・・」

闇の書の意味が上空に右手を上げるとそこには黒い塊が出現した。  
それはどんどん大きくなっていき・・・直径20メートル程にまで

なっってしまった・・・

麗「拙いわよ！！あれって広域空間魔法じゃない！！！」

それに慌てだす麗華。

な「ね・・・ねえ・・・あれやばい？」

隣に浮いているのはが不安そうに麗華に聞きます。

私も空間魔法は見たことがなかったので耳を傾けました。

麗「ええ・・・やばいわよ。バリア発生阻害能力があって喰らうと魔力が喰われるわよ。私でも喰らってあれの相手をするのは厳しい・・・」

フエ「じゃあとりあえず離れよ！」

麗「それしかない、わね！・・・いくわよ！」

な「ふえ？待ってよ～～」

私、麗華、なのはの順で闇の書から離れる。  
なのはが出遅れて情けない声を出している……。

闇「Diabolic Emission」

魔法が発動した。

彼女を中心として広がる闇。

それはどんどん私達に迫ってきた。

な「わ~~~~~!!!!!」

駄目！向こうのスピードが速いつ……！

追いつかれる……！

なのはに迫る黒い塊。

麗「なのは……！しょうがないわね、鏡月……！」

鏡「了解……！Round Shield」

咄嗟になのはを背にしてラウンドシールドを張る。

ズガーーーーー

シールドと攻撃のぶつかり合う音が響く。

麗「くうううう……なんっもんっ！してんのよっ！くう  
う……」

麗華がシールドを張りながら憎まれ口を叩く。

このままじゃまずい！

フェ「バルディッシュユ！」

バル>Yes, sir!!! sonic form.<

私は薄い装甲を更に薄くしたソニックフォームになる。

光の羽根が手には2枚、足には3枚生えている感じとなる。

この光の羽はソニックセイルと呼ばれるものだ。

私は二人を脇に抱え、

フェ「二人ともちよっとおとなしくしててね」

な・麗「えっ？/ちよっとっ!？」



バル>Sonic move.<

高速移動をした。

闇の書から二キロ離れた地点――

麗「・・・はあ・・・死ぬかと思った・・・」

シールドを張っていた右手をぶらぶらさせる麗華。

な「ほ、ほんとだよね・・・それにしてもびっくりしたよ〜フエイ  
トちゃん」

なのははちよつと目を回していた。

フエイ「ごめんね。でも早く脱出しないと麗華が危なかったから・・・

「

麗「まっ、フェイトのお陰で助かったわ。そ・れ・よ・り」

おもむろに麗華がなのはに向き直り・・・

両手をなのはの顔に持っていき

むにゅ～～～～ん。

な「いはいよ～麗華ひゃ～～ん・・・ひゃいひゅるの～～・・・  
？（痛いよ～。麗華ちゃ～～ん。何するの～～）」

両頬を引っ張り始めた。

麗華に両頬を引っ張られ、奇妙な声を出すのは・・・。  
す、すごいね・・・めっちゃ伸びてるよ・・・。

麗「なのはがもう少し早く移動できていたらあんなバカみたいな攻撃受ける事なかったのよっ！！」

むにゅにゅ～～～～ん。

もっとな伸びるのはの頬。

な「ひよ、ひよんなこといっへもーわはひひゅうひよりはから  
ほんにはやくいけないよ（泣）～～～>そ、そんなこと言っても

「――私中距離だからそんなに早く行けないよ〜〜」

ぱちんつ。

麗華がなのはの頬を離した。

頬は・・・某愛と勇気だけが友達のヒーローみたいに  
真っ赤でした。

痛そうでした・・・

麗「つたく・・・フェイトは？無事？」

フェ「うん、私も何とか・・・」

な「ふえ〜〜痛かったの〜。ひどいの〜麗華ちゃん・・・」

未だ頬をさすりながら言うのは。

フェ「まあまあ、それであの子どうする？」

私は遙か病院の屋上に未だ突っ立っている闇の書を指しました。  
分かっているのは広域空間攻撃が出来るということだけです。

フェ「やっぱりクロスに持っていく？」

麗「いや・・・ここはクロスはやめた方がいいと思う。相手の戦力がまだ把握し切れてないから、迂闊に近づくとなにされるか分かったもんじゃない・・・だから>なのは！フェイト！  
麗華！<・・・ユーノ・・・はあ」

麗華が会話の半ばで上空からユーノとアルフが現れました。  
麗華は途中で話しを遮られたのが不満なのか、怒っているようです。

な「ユーノ君！アルフさん！」

ユー「心配で来てみたけど、大変なことになってるね・・・」

アル「フェイト！良かったよ！無事で。」

アルフはそう言って抱きついてきました。

フェ「うん、アルフも！」

私も嬉しくて笑顔で答えました。

アル「ところでなんでフェイトそんな格好してるんだい？」

アルフが私のBJを見て、言います。

フェ「これはなのはと麗華を助けるために、薄い装甲を更に薄くしてスピードを上げたの」

詳しく説明してあげました。

アル「そうなのかい・・・んでどうしてユーノはフェイトをじろじろ見てるんだい？」

フェ「えっ？」

ユー「み、見てないよ!!」

な「ゆ、ユーノ君・・・やっぱり変態さんだったの？」

ユーノから一メートル離れるなのは。

ユー「ちち、違うよ!!」

麗「ビビッてるし・・・」

ユー「ビビってない!!」

な「ビが一個多いの・・・」

ユー「うっ」

呻くユーノ。

麗「はあ……。とにかく今ユーノが変態の事は置いておいて  
>違う!!--!<あゝはいはい。フェイト早く普通のになつて  
ユーノがうるさくて話せない」

麗華がユーノを手で払いながら私にめんどくさそうに言いました。

フェ「う、うん。。。ノノノ」

バル>Assult Form.<

普通の状態に戻る私。

ユー「あつ。。。」

な「ユーノ君。。。」

ユー「違うよ、なのは!君が言おうとしている事は決して!!--!」

必死に弁解するユーノ。

だが。。。

な「変態さんのユーノ君とは友達じゃないの!!--!」

ガーーーーー

ユー「ガーーーーー」

なのはからの言葉は拒絶でした。

ユーノが膝から崩れ落ちた。

精神に1000のダメージ！一撃必殺だ！！

……みたいな感じでしょうか？

麗「……とりあえず闇の書の対策だけ……」

全く意に返さない様に話し始める麗華。

というより視界に入れてない……

完全無視でした。

麗「あの子の戦力はまだ未知数。だから迂闊に近づくのは危険よ。だからなのはを中心とした中距離からの攻撃が一番ベストだと思うけど……どう？」

な「私が……分かったの」

アル「今はそうして様子を見るしかないようだね」

フェ「うん……それが一番いい策だね。私アウトレンジは苦手だけど頑張ってみる」

麗「うん、そうしてね。ところでクロノは？」

アル「クロノだったらもうすぐこっちに来ると思うけど。何かあるのかい？」

麗「ちょうどいい。クロノ応答しなさい!!」

ク「わっ！何だ！？麗華か・・・」

いきなりモニターを出してクロノに怒鳴りつける麗華。  
クロノは驚きながらも応答しました。

麗「時間が無い。簡潔に言う。私の仕掛けたサーチャーを追って！」

ク「ど、どつゆづことだっ!?!」

麗「だから時間が無いって言ったでしょ！こんな時にまで頭悪いの発揮しないで。とりあえずこんなことをした奴の所に行けるから！」

ク「悪っ、って君な〜!! 仮にも執務官だぞ僕は！」

クロノの反撃!



麗「最年少だがなんだが知らないけど私より強くなってから  
言いなさい！」

麗華の攻撃！

ク「うつ．．わ、分かった。サーチャーの位置は．．．ここか。」

クロノ弱いね．．．。

あっさり麗華に言い負かされちゃった。

麗「分かったらさっさと行け！言っとくけど逃がしたら承知しない  
から．．．」

ク「．．．肝に銘じておく」

しぶしぶといった感じにクロノは答え、モニターは切れた。

麗「よしっ！じゃあ行くよ！！」

な・フェ・アル「「お．．．お~~~~~！！」「」

こうしてあの子閻の書との戦いが始まった。



闇の書の覚醒後――

高級住宅の一角。それもとびきりの高級な家の二階。  
一人の少年が眠っていた。

特徴的なのはベッドの端にまで伸びる艶やかな黒髪。

少年は病気ではない。

ただ疲労して眠っているようだ。しかしその疲労はとてもひどいもので少年は既に一週間は起きていない。

？「う……」

少年が呻き、そしてゆっくりと目を開けた。

？「た……たすけ……なくちゃ……」

何を思ったのか少年はベッドから出てしまった。  
ふらつく足、その足には力が入っていないようだ。

？「たすけ……るんだ。はやて……が泣い……てる。」

少年の頭の中には一人の少女しか映らなかった。  
いつも笑っているがどこかつらそうな顔をしているあの子の事を。

？「・・・転・・・移・・・」

少年がそう言つと周りを光が満たし、さっきまでいた少年は  
掻き消えるようにいなくなった。

八神家――

アリスア side

アリ「みんな遅いな〜。一体どうしたんだろ？」

リビングにいる私の声が一人木霊する。

それに答えてくれる声は無かった。

アリ「焰美と滯はなんか急いで出ていっちゃったし。シグナム達も帰ってこないし……」

数分前なにやら物騒な魔力を感じたらしく二人は出て行ってしまった……。私はもちろん留守番。

アリ「はあ……私だけ全く役に立ってない……」

魔力はあるがまだユニゾンデバイスとして覚醒していない  
私は普通の人間と同じなんです。  
分かってはいても手伝えない事が悔しいです。

アリ「……ふう。考えていても仕方ないよね、私は自分が出る  
ことだけを順にやっていくの……」

そういつて握りこぶしを作りながら自分を励ましました。  
まずはゆう君の世話かな？

ほとんど日課となってしまうたゆう君の世話するために私は二階へ  
と上がります。

手には洗面器と濡れタオル、ゆう君の体を拭くためです

アリ「ゆづくくくくん。入るよくくく。っ！！！？」

バチャツ

洗面器が私の手から落ちて、床に水面を作ってしまった。

アリ「ゆづ君！？どこ！？どこにいるの！！？？」

寝ていたはずのゆづ君の姿がありませんでした。  
急いでベッドに駆け寄りました。

アリ「まだ・・・暖かい」

手を当ててみるとほんの僅かにゆづ君がいたと思われる  
暖かさがありました。

アリ「動いちゃいけないのにつ！！？どうしてっ！？」

訳が分からず私は混乱してしまいます。

アリ「！！落ち着いて私。ゆづ君が何も言わずに出て行くはずが無  
い。」

ゆう君なら無理はしない。でも実際にゆう君はいなくなってる。ということば……

アリ「理由が？」

ゆう君が無理をするなら……私達が関係していることだ。じゃあ焰美、澁に何かあったの！？  
それにはやて達にも……

キイイイイイン

アリ「魔力！？それも大きい！！」

突如使われた魔法に私は驚いた。  
シグナム達は……

アリ「いない……？一体どうゆうこと？」

とりあえず私もいなくなっちゃ！

ゆう君の部屋から駆け出ようとして足が止まってしまいました。

アル「私に一体何が出来るの？・・・ただの人間の私に・・・」

いっても何も出来ない。私の頭の中でその言葉が流れました。

アル「私だってみんなを助けたいのに！！ゆう君を助けたいのに！！」

自分の心の声そのまま声から出ました。

パアアアアアアアアアアアア

突如部屋を見たす光。思わず目を瞑ります。

光が晴れ目を開けた。そこには創醒の書が輝いていました。目の前にある書に手を伸ばす・・・

再び光で満たされ・・・

アリ「！？・・・やっと・・・やっとユニゾンデバイスに・・・成れた。」

これでみんなを助けられる！！

ゆう君を救える！！



アリ「創醒の書、セ〜トアップ!〜!」

私の周りを翠の光が満たして行く。

お着替え中〜ちょっと待ってね

光が晴れ自分の姿を見る。

ゆう君とおそろいで翠色を基調としたのロングコート。

髪は一つに纏めている。

ん〜問題なし!

書を取り、開く。

アリ「うん、転移!〜!」

私は転移の魔法を使ってゆう君を追いかけた。

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
3  
3  
!  
!  
!  
!  
!

TALE32 新たなパートナー（後書き）

SKY「やりました！」

麗「やっとアリシア覚醒ね」

SKY「はい。やっとです。というわけで今回は特別にアリシアちゃんに来てもらいました」

アリ「みんな〜久しぶり〜」

SKY「良かったですね。これでみんなを助けられますね」

アリ「うん！みんなもゆう君も私が助けるの！」

SKY「頑張ってください」

麗「一つ訂正・・・ゆうを助けるのはわ・た・し！！」

アリ「私ですよ〜。なんていったって私とゆう君ノノパートナーだもんノノ」

麗「そんなこといったら私はゆうの一生のパートナーよ！」

アリ・麗「むむむ〜」

SKY「あの〜二人とも仲良くしましょ」

アリ・麗「SKYさんは黙ってて!!! / お前は黙ってる!!!」

SKY「は、はい……。え〜ふたりが楽しそうなので今日は」  
「まで!」

See you next time!」

アリ・麗「むむむ〜」

TABLE 3 クロノの想い（前書き）

うわあやっちゃった・・・

まあ閑話見たい感じで読んで下さい

つとこれでは結斗君はおるか麗華ちゃんですらも

・・・なので読みたくないって人は引き返してもよろしいです

最後にこんなの作っちゃってごめんなさい・・・

### TALE 33 クロノの想い

Time: unknown

クロノside

ク「とりあえず到着だ・・・にしても麗華の言葉は相変わらずで相手を決るなあ・・・」

麗華に言われて僕はサーチャーの場所にたどり着いた。  
僕は辺りを見渡して闇の書を覚醒させた者達を探した。  
彼らいや、彼女らを・・・

ク「見つけた!!」

僕のいるビルの屋上から百メートル離れた目視できる地点に奴らはいた。  
僕はカード状態のS2Uをセットアップして彼ら仮面の男達に迫った。

仮2「暴走開始の瞬間まで持つて欲しいな・・・っ!？」

仮1「くっ・・・これは!！」

ク「Struggle Bind・・・。相手を拘束しつつ強化魔法を無効化する。あまり使いどころの無い魔法だけどころゆう時には役に立つよ・・・。」

僕は冷静にそして僕の考えが違って欲しいと願い右手のS2Uを弄びながら術を発動した。

ク「変身魔法を強制的に解除するからね・・・。」

仮1・仮2「ぐわあああああ・・・。」

カラン

僕の足元に変身魔法の媒体である仮面が転がってきた。

その音はこれが真実だと言わんばかりにあまりにも無情の音だった。

口「クロノ、この……」

アリ「こんな魔法教えてなかったんだがな……」

僕に捕まったのが気に触ったのかひどく毒吐く二人。

ク「一人でも精進しろといったのは君たちだろ……アリア、口ツテ……。」

認めたくない真実が目の前にあり僕は、悲しみの顔で二人の師匠の名前を呼んだ。

――管理局本局――

ク「リーゼ達の行動はあなたの指示ですね……グレாம்提督」

リーゼ達を捕獲後僕は本局のグレாம்提督の執務室で



今回の事件の黒幕であるグラム提督に聞いた。

ロ「違う！クロノ！！」

アリ「あたし達の独断だ。父様は関係ない！」

叫ぶロツテとアリア……。その声は必死さがあつた。

二人ともいい加減に認めてくれ……。僕はこれ以上君たちの醜いところは見たくない。

グ「ロツテ、アリア……。もういいんだ」

僕がそれを言おうとしたら提督が口を挟んだ。提督らしいいつもの口調で……。それがなぜだが僕は悲しかった。

グ「クロノはもう粗方のことは掴んでいる。違つかい？」

ク「……。11年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先を探していましたね。そして発見した……。闇の書の在り処と……。現在の主……。八神はやてを……。しかし完成前の書と主を押さえても転生機能のせいであまり意味が無い。だから監視をして完成を待った。」

見つけたんですね、闇の書の完全封印の方法を・・・」

提督は語り始めた。

グ「両親に死なれ体を悪くしていたあの子を見て心が痛んだが・  
運命だと思った。孤独な子であればそれだけ悲しむ人は  
少ない。」

ク「あの子の友人をかたつて援助をしていたのもあなたですね」

グ「永遠の眠りにつく前くらいせめて幸せにしたやりたかった・・・  
偽善だな・・・」

提督が悲しそうに言う。

どうして・・・そんな顔をするあなたが・・・

僕は疑問に思ったが次の質問をする。

ク「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて次元の狭間か氷結世  
界に閉じ込める・・・ですか？」

グ「そう・・・それなら転生機能は発動しない。」

ロ「これまでの闇の書の主だつてアルカンシエルで蒸発させてきたんだ。それとなんにも変わらない・・・」

アリ「クロノ今からでも遅くない・・・私達を解放して。凍結が掛けられるのは暴走が開始する数分だけなんだ！」

未だ勝手な言い分を述べるリーゼ達に僕は怒りを覚えた。

ク「その時点ではまだ闇の書の主は永久凍結されるような犯罪者じゃない・・・違法だ・・・」

ロ「そのせいで！！・・・そんな決まりのせいで悲劇が繰り返されるんだ！クライド君、あんたの父さんだつて！！（ロツテ・・・・・・っ）」

計画を言い捨てた僕に我慢が出来なかったロツテが僕に怒りの感情をぶつけてくるが途中で提督が諫めた。

ク「確かに僕だつてあの闇の書は憎いです。父さんを奪ったものだから。それは母さんも同じでしょう。でもそれはあくまで闇の書というロストロギアです。八神はやてとは全く関係ない」

グ「クロノ……」

ク「提督あなたは父さんの最後を見ましたよね」

グ「ああ」

ク「父さんは最後まで苦しんでもしくは憎しみを言いながら死をとげましたか？」

グ「………違う」

ク「父さんは最後にこう思ったんじゃないでしょうか？あとに残される僕達を頼むくらいの事を頼んだのではないですか？」

グ「ロ・アリ」！！！」

ク「父さんはそんな人だった。僕が小さい頃でもよく覚えていますよ………」

僕の言葉に驚愕する提督。  
そして頭が垂れた

グ「私達は間違っていたのか・・・」

ク「・・・確かに間違いです。でも父さんの息子である僕には嬉しかった。あなたがそこまで父さんを想ってくださって・・・」

グ「すまない、クロノ。」

ク「・・・僕はこれから現地に向かいます。失礼します・・・（クロノ！）はい？」

僕は素晴らしい立ち上がって去ろうとするが提督がイスから立ち上がり声を掛けられた。

グ「アリア、デュランダルを彼に・・・」

アリ・ロ「父様！／そんな！」

グ「私達にもうチャンスは無いよ。持っていたって役に立たん。それにクロノなら・・・クライドの想いを受け継いでいるクロノならこの憎しみの連鎖断ち切れるかもしれん・・・」

アリ・ロ「・・・」

そして僕に銀色で中央に蒼い宝石の絵が書かれたのカードが渡され

た。

グ、どう使うかは君に任せる。・・・氷結の杖デュランダルだ・・・  
勝手だと思っがどうかこの連鎖を終わらせてくれ・・・」

提督が言いカード、デュランダルは一瞬光り輝いた。

その光は闇に対する一条の希望に思われた。

N e x t   t o   T A L E 3 4 ! ! ! ! ! ! ! !

TALE33 クロノの想い(後書き)

麗「……帰る」

SKY「ええええちょっと待ってください麗華ちゃん……って行っちゃった」

SKY「え〜開口一番で麗華ちゃんが帰っちゃいました……ので……

……ここまで?」

SKY「次回こそは彼女達を出しますのでよろ!」

TALE34 守れなかった誓い（前書き）

タイトルから意味深です。

理由はこの話を見ていただければ納得していただけるかと・・・

この話はもう頑張りました。

私的にいい物です。

ではどうぞ~~~~~



T A L E 3 4 守れなかった誓い

P M 1 8 : 2 0

海鳴市上空――

なのは s i d e

ガシャン・・・ギシャン―ガシャン・・・

右、左、上、下

フェイトちゃんと闇の書さん（以降、闇さん）のめまぐるしい速さ  
お互いの攻撃を当てようとする音が私の耳に入ってきてます。

麗華ちゃんに私を主軸とした中距離型の戦いを始めて応戦して  
いるのですがまだ有効打になっていません。

ユ―「はっ!」

ジャラジャラジャラ・・・

闇「？」

二人の戦闘を見ていたユーノ君が闇さんの両脚にチェインバインドを使って動きを封じました。

アル「ふっ！」

今度はアルフさんが闇さんの右手にリングバインドを仕掛けました。  
今なら動けない、これなら！！！！

麗（二人とも！！挟撃するわよ！！）

な・フェ（うん！！）

動きが縛られた事で麗華ちゃんがすぐに私達に指示を出します。  
私は闇さんを見ます。  
全く表情を出さずに

闇「碎け・・・」

と言い瞬間バインドは碎け散ってしまいました。  
でも時間稼ぎは十分！！

私、フェイトちゃんて直線方向なるように包囲して

バル>Plasma Smasher.<

フェ「Fire!!!」

レイ「Divine Buster Extension」

な「Shoot!!!」

一転集中砲火これで!!

私はこれでいけるかと思いましたが・・・

闇「盾」

ズバアアアアアン

受け止めた!?

闇の書さんは私とフェイトちゃんの砲撃を右手と左手それぞれにシールドで受け止められてしまいました。

な「くっくっくっくっくっく」

押し切るうとしましたが一向にシールドは破れません。

麗「上出来よ！二人とも！」

そこで麗華ちゃんが闇さんの上空に現れ、

鏡「Airrial laser」

麗「Fire!!!!」

双銃から銀色の集束砲撃が放たれます。

闇「アイスシールド」

麗「ちっ」

ズバアアアアアアアアアアアアアアアアア

エリアルレイザーがアイスシールドに当たり、それは前蒼さんがデ  
イバインバスターを跳ね返したみたいに全く違うところに返されて  
しまいました。

闇「刃以て、血に染めよ。穿て、Bloody Dagger」

キイイイイイイイン  
ドガアアアアアアアアアン

突如現れた赤色の小剣が私達に殺到します。

私はなんとか砲撃を止め、それを避けることができませんでした。

な「くううう」

闇「咎人達に、滅びの光を。」

今度は闇の書さんの右手の桃色の魔力が集まり始めます。

ユ「あれは・・・」

アル「まさかっ!?!」

ユ「君とアルフさんも驚いています。

そういう私も驚きが隠せません。

な「スターライトブレイカー?」

闇「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。」

私達が驚いている中、詠唱し続ける闇さん。

桃色の光はどんどん大きくなっていきます。

フェ「アルフ! ユーノ!」

フェイトちゃんの言葉に頷く二人。  
私達はその場をすぐに離れました。

闇「貫け・・・閃光・・・」

アル「なのはの魔法を使うなんて!!」

ユー「なのはは蒐集されてるだからコピーされたんだ」

麗「なのは私の言ったとおりだったでしょ・・・」

な「うん、でも麗華ちゃんも蒐集されてるんじゃない・・・」

麗「それは大丈夫じゃない？戦っていたけど私が知っているだけの技は出してこなかったから。おそらく蒐集した相手の使う事のできる技が使う事ができるんだと思うわ」

な「そ、そうなんだ・・・」

麗「まあそれでも事態は一向に解決ならないけどね・・・」

な「あはは・・・。フェイトちゃん？こんなに離れなくても・・・」

私を抱えて飛行しているフェイトちゃんに言いました。

フェ「至近で喰らったら防御の上からでも落とされる、回避距離を稼がないと！」

麗「そうよ〜なのは！あんなのまともに喰らってたら命が無いわよ！もう少し自分の魔法の物騒さを知った方がいいよ・・・」

な「麗華ちゃん、それはひどいの〜〜」

高速移動の中私の声が誰もいない閉鎖空間に響きました。

麗華 side

スターライトブレイカーの回避に距離を稼いだところ鏡月から声が上がった。

鏡>麗華！左方向300ヤードの地点に、一般市民がいる！<

麗「はあ！？一体どうゆうことよ！ここ閉鎖空間よ。一般市民がいるはずが・・・」

フェ「でもそれが本当だったら大変な事になる！」

な「うん、探そう!!」

私はそう言った二人を追いかけた。

アリサ side

アリ「やっぱり誰もいないよ」

私は辺りを見回って、すずかの下に帰り言った。

はやてのお見舞いでなのは達が自販機に行った後、私とすずかははやてにさよならを言っただけでいつも通り帰宅していた。いつもの道ですずかと話しをしながら帰っていると、これが起きた。

急に暗くなるし、人はいなくなるし全然訳が分からなかった。だから私は人を探し回った。

す「……………」

俯いて不安そうな顔をするすずかに私は励まそうかと思ったが



どれも慰めくらいにしかならず余計にすずかを不安にさせそうだった。

アリ「しかもなんか光ってるし・・・」

上空にある桃色の光ってる物体を見ながら私はすずかの手を握った。

アリ「とりあえず逃げよ！なるべく遠くへ！」

す「うっ、うん！！」

我に返ったすずかが頷く。

そして私とすずかは大通りの道をすばやく移動した。

すずかの手は冷たかった・・・

麗華 side

鏡「70ヤード・・・60ヤード・・・」

鏡月の言う距離が私の耳に入ってくる。

麗「この辺ね！」

フェ「なのは！」

な「うん！」

シューウウウウウウウウウウウウ

なのはと私が地面に足をつけ急ブレーキをしながら降りる。

それで私達の周りを砂埃が舞う。

う、よく見えないわね・・・

フェイトも私の隣に降り立った。

鏡「20ヤード・・・15ヤード・・・」

フェイトとなのはが辺りを見渡す。15ヤードなら目視できるだけど辺りの砂埃のせいでなかなか見渡せない。

な「あのすみません！危ないですからそこでじっとして下さい！」

そこでなのはが視界に捕らえたのか声を出した。

私もなのはが見てるほうに顔を向ける。

紫の髪の子供と金髪の子供だった。

す「えっ？今の声って!？」

アリ「なのは？」

す「フェイトちゃん？麗華ちゃん？」

えっ？

麗「アリサにすずか!？」

な・フェ「ああ・・・」

啞然となる私達に時間は無かった。

闇「Starlight breaker!!!」

ついに発射された!!!

私は意識を戻して二人を呼ぶ。

麗「二人とも!!!そこを動かないで!なのは、フェイト!」

な・フェ「うん!」

ドキュンッ、ガシャンッ

私たちがカートリッジをロードする。

バル>Defenser Plus<

フェイトは二人に小さいシールドを用意し、二人の前に立ちラウンドシールドを張った。

私となのはフェイトの前に立ちツートップで広域用のシールドを張った。

ちようどYの字のようになる。  
迫る桃色の嵐。

ズガアアアアアアアアアアア

麗「くううううう……なのはいける?」

な「うん……なんとか……」

なのは大丈夫そうだ。だけどアリサとすずかが……

エイ>余波が収まり次第すぐ避難させる!なんとかこらえて!<

エイミイが通信で叫んだ。

闇「我が敵に裁きの光を・・・」

左手に集う銀色の魔力。

麗「くうっくう、ちょっと！あれ私の！」

な「くうっくう。さすがにあれを喰らうとやられるちゃう！」

スターライトブレイカーを防ぎながら言う私達。

私たちがやられるとフェイトだけになる。それだとアリサとすずかを守れない！

闇「Judgement breaker!!」

ドガアアアアアアアン

パキツ・・・

私となのはのシールドに輝が入る。

フェ「麗華、なのは!!」

フェイトが後ろから叫ぶ。しかし・・・

パキンッ

同時に割れてしまった私となのはのシールド。  
迫る桃色と銀色の嵐。

それがスローモーションのように思えた。  
私は衝撃に備えて目を瞑る。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアア

再び何かがぶつかる音して私は恐る恐る目を開けた。  
目にしたのは衝撃で靡く長い黒髪。その人は私達と同じくらいの背  
で両手を広げ体でシールドを張っていた。

998

な「結・・・斗君？」

なのはが声を出す。その声は枯れたものだった。  
私の喉も枯れた。

結「くっくっくっくっくっくっくっくっくっ」

必死に防ぐゆっ。その背中はとても大きく感じた。

シューウウウウウウウウウ

攻撃が止んだ。

麗・な・フェ「ゆう／結斗君！！／結斗！！」

私たちがゆうに駆け寄る。

な「結斗君！」

なのはが未だ私達に背中を見せているゆうの肩に触れようと  
した……

バタンッ

ちょっと……ゆうなんで……倒れてるのよ……。







**T A L E 3 4 守れなかった誓い（後書き）**

感想いただけるとうれしいです。

次回も頑張るんでよろしくです!!

B A L D R S K Y

T A L E 3 5 立ち向かわなきゃいけないんだ!!! (前書き)

タイトルに対してはあまり詮索をしないで下さい。

今回は急いで書いたため改稿の可能盛大かもです。

暇つぶしどぞ・・・

T A L E 3 5 立ち向かわなきゃいけないんだ!!!

フエイトside

な「結斗君!!?」

駆け寄るなのはと私。

なのははうつ伏せとなっていた結斗を起こして顔をこちらに向けます。

ジャッジメントブレイカーとスターライトブレイカーから守ってくれた結斗。でも攻撃が止んだ途端結斗は倒れてしまったのです。

結「うつ・・・」

目をぎゅっと閉じて結斗しきりに呻いていました。

フエ「結斗!」





結「なの・・・は、離して。僕はあそこに・・・行かなきゃ・・・い  
け・・・ない・・・。うっ・・・はや・・・てと・・・麗・・・華が泣  
いてる・・・」

フェ「駄目！やめて！結斗が死んじゃう！」

結「そんなこと・・・ない・・・さ」

力なく笑う結斗。

どう見ても大丈夫じゃないのに結斗は行こうとします。

フェ「お願いやめて！！今結斗ぼろぼろなんだよ！だったら私が行  
く！」

な「私も！結斗君はここにいて！」

結「フェ・・・イト、なの・・・は・・・」

驚いた結斗が私達を見ました。

ア「ねえなのは、フェイトどうして結斗がいるのよ？」

す「なのはちゃん、フェイトちゃん？」

私達がその場を離れようとした時遠くにいたアリサとすすすが  
近寄ってきて結斗を見ながら言った。



な・フェ「……………」

私となのは何も言えずに立ち尽くしてそれを聞きます。

ア「それに結斗こんなに痛がつてるじゃない！早く病院に連れて行かないと！」

結「アリ・・・サ・・・す・・・ずか？」

ア・す「結斗！／結斗君！」

結「二人を・・・行か・せてあげて・・・くっ・・・なのは、フェイト・・・お願い二人を・・・麗華とはやてを・・・ぐっぐっぐっ」

フェ・な「結斗／結斗君！」

私達の方へ向き、言いかけるがまた呻き始める結斗。

な「……………アリサちゃん、すずかちゃん・・・結斗君をお願い。私行かなくちゃ！」

フェ「……………うん、私も！」

ア「えっ？」

アリサに結斗を渡しながら言うなのはに私ものりました。

ヒイイイイイイイイイイイイイイ

ア「ちょっと！どつゆっ」

す「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

結「おねが・・・い」

そこで転送の魔法が三人の足元に作られ、転送されました。

な「フェイトちゃん・・・」

フェ「うん・・・結斗に頼まれたから・・・」

な「うん！」

な「ユーノ君、結斗君達についてもらえるかな？」

フェ「アルフも、お願い・・・」

ユー「分かった。結斗のところに行くよ」

アル「はいよ！」

アルフとユーノからの返事を聞き、私となのはは再び戦闘の灰色の空を飛びました。

海鳴市上空――

麗「うあああああああああああああああああああああ」

私たちが急いで向かうと泣き叫びながら闇の書に攻撃を仕掛けている麗華とそれを防御している闇の書の姿がありました。

結斗が・・・傷つけられたから・・・。

麗華の心が・・・

フェ「麗華！！」

近くで呼びかけるが麗華は応答せずにただひたすら闇の書に攻撃を仕掛ける。

な「フェイトちゃんどうしょ・・・」

途方にくれるのは。

フェ、「とにかく麗華には止まってもらうしか・・・」

そう言ったけど二人の速さが尋常じゃなく私達では攻撃はおろか捉える事すらできません。

麗「うあああああああああああああああああああああ」

フェ「なんて多さ!？」

麗華が鏡月から計百個程のスフィアで闇の書を包囲。  
そして・・・

麗「エリアル・・・レーザー・・・」

集束砲撃の力押しで叩き潰そうとします。

闇「アイスシールド」

バキンバキンバキンバキンバキンバキンバキンバキンバキンバキンバキン

シールドでスフィアを防いで、

闇「飛燕一線」

エリアルレーザーはレヴァンティンで相殺しました。

麗「うあああああああああああ————っ氷花あああ……  
……！！！！！！」

今度は双刀白燐、氷雪で居合をします……

闇「紫電一閃」

今度は紫電一閃。

麗「はあ……はあ……はあ……はあ……」

息切れをし出す麗華。

闇「なぜ泣いている？」

麗「はあ……はあ……」

闇の書の問いに答えない麗華。

な「麗華ちゃん！！」

フェ「なのは！」

止まっている今なら！麗華を！  
なのはに続いて追いかける私。

麗「うう……あああああああああああ」

ダキッ

な「麗華ちゃん！落ち着いて！」

麗華を背後から抱きしめるのは。

麗「うっうっあああああああ」

暴れる麗華になのはは必死にしがみつく。

闇の書はそれを冷やかに見ていた。

そして書をなのはたちに向け、

闇「そうか・・・お前も我がうちで眠るがいい」

な「えっ？」

麗「うあああああああ」

ピカッ

フェ「二人とも！！」

光で目を瞑りながら私は呼びかけました。

二人は・・・

消えてしまった。

闇「全ては安らかな眠りの内に・・・」

静かに涙を流しながら言う闇の書。

フェ「二人をどこにやった!!!」

闇「我が内にて眠っている。それがあの泣いている者には良かった」

その言葉に湧いてくる怒り。

フェ「あなたのせいで麗華が!このっ!> s i r!!!<っ?バル  
ディッシュ?」

突撃をしようとしたらバルディッシュから待ったを掛けられた。

バル>Please settle down . (落ち着いてください。)<

フェ「でもバルディッシュ!」

バル>Does not you settle down and who helps two people? (あなたが落ち着かないで誰が二人を助けるんですか?)<

フェ「っ!・・・ふう〜そ、そうだよね。エイミィ!」

一息吸いエイミィに問いかける。

エイ「状況確認!・・・なのはちゃん、麗華ちゃんのバイタルまだ健在!闇の書の内部空間に閉じ込められただけ。助ける方法現在検討中!」

良かった、生きてる。

フェ「良かった・・・二人とも・・・ありがとうバルディッシュ落ち着かせてくれて」

あのまま飛び込んでいたら私も書の中に取り込まれてしまっていたかもしれないかった。

そうなら誰も助ける人がいなくなってしまうていた。



バル>You're welcome.<

胸を撫で下ろしていると闇の書が話し掛けてきました

闇「我が主もあの子達も覚める事のない眠りのうちに終わりなき夢を見る。生と死の狭間の夢。それは至高・・・」

淡々と言う闇の書。

フェ「・・・夢はいいだろうね。嫌な事が無くて、忘れたい事も起こらない・・・」

私は肯定を指す。

結斗と母さんの死。  
どちらも忘れたかった。  
だって二人とも私の大切な人だったから。

フェ「でも!」

闇「?」

フェ「嫌な事ばかりじゃないんだ!」

麗華、なのは、アリサ、すずか、はやて。

みんな励ましてくれて友達になってくれた。

それに・・・結斗生きていた事。  
みんなが私の宝物。

確かにつらい事は現実にある。でも支えてくれる人や助けてくれる人がいる限り泣いているばかりじゃいけないんだ！

フェェだからみんな立ち向かわなきゃいけないんだ！私もあなたも  
！」

私と闇の書との戦闘が始まった。

すずか s i d e

す「ここは・・・海鳴公園？」

ア「そう・・・みたいね。」

周りを見渡すと見慣れた光景。

広い面積。遊具。

そこが海鳴公園だということに気づくには時間はかかりませんでした。

ア「結斗!？」

私が周りを気にしているとアリサちゃんが腕の中にいる

結斗君に呼びかけます。

結斗君には外傷は無さそうでしたのでですがでも顔は苦痛に歪められていました。

結「アリ・・・サ、すずか。久しぶり・・・だね」

ア「久しぶりじゃないわよ! あんた大丈夫なの?」

結「うっ・・・大丈夫だよ。寝ていれば・・・ね・・・ぐうっ」

また呻きだす結斗君

す「どうしよーアリサちゃん。こうゆうときって大人の人を呼んだほうがいいよ!」

ア「ええそうね。でも誰もいないし。どうすればいいのよ!？」

腕の中にいる結斗君を見ながら悔しそうに言うアリサちゃん。

私も何をすればいいのかわかりません。

シユンツ

す「っ?」

ア「誰!？」

途方にくれていると私達の前にいきなり私達と同じ歳くらいの男子と年上のお姉さんが現れました。

?「僕達はなのは達の友達です・・・」

そういつて近づいてくる男子の子。

?「助けに来たよ〜」

気さくに笑いかけるお姉さん。

ア「なのはの?」

?「はい、僕はユーノ」

?「私はアルフってんだ」

それを聞き固まるわたし達。



アル「ああ私たちは結斗に借りがあつたからね〜」

す「お願いします！結斗君を助けてください！」

ユー「分かつてるよ」

そういつてユーノ君から緑色の光が発せられ結斗君を包み込みます。

ユー「！？これは！！」

アル「どうしたんだい？ユーノ」

驚くユーノ君にアルフさんが問いかけました。

ユー「結斗には外傷も何もない健康だ。でも・・・」

アル「でも？」

ユー「以前会っていた時よりも極端に魔力がひどく消耗しているんだ」

アル「じゃあ治せないのかい？」

ア「そんな！？」

再び絶望に淵に立たされてしまいます。

ユー「いや、治せない事はない。でもなのは達の支援は無理だね」

す「じゃあ早くお願いします!」

ユ「もちろん!」

再び辺りを照らす緑の光。

結斗君の顔はさつきよりはよくなってきました。

す「あの・・・一体何が起こっているんですか?」

私はアルフさんの聞きました。

アル「え〜とね・・・あまり言い出しにくいことなんだよ・・・でもなのはやフェイト達は頑張って女の子を救おうとしてるんだよ」

町の方を向きながら言うアルフさん。

す「そう・・・なんですか・・・」

アル「ああ・・・っ!? ユーノ!」

そこでアルフさんが身構えました。

視線の先にはアルフさんたちが現れたときみたいな丸い光の陣が引かれていました。

色は翠でした。

ユ「くっ! 一体誰? 忙しいときに」

ヒュンッ

? 「あれ~~~~? おかしいな~~~~。 ゆう君のところへ転送したはずなのに……」

その女の子は向こうを向きながら不思議そうに言います。

す・ア「フェイトちゃん?」 「フェイト?」

思わず私とアリサちゃんはフェイトちゃんの名前を口にします。だってその子はフェイトちゃんにそっくりの後姿をしていたから。

? 「ん? あなた達は……あ~~~~~!!!!!!」

アル「あ~~~~~!!!!!!」

私たちの声が聞こえたのかフェイトちゃんに似た女の子はこちらに振り向きました。

するとアルフさんを見て叫びました  
アルフさんも同様に。

? ・アル「アルフ!!!!」 「アリシア!!!!」

そしてお互いの名前を叫びました。

アリシア……???

誰でしょう???



N  
E  
X  
T  
  
T  
O  
  
T  
A  
L  
E  
3  
6  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

TALE35立ち向かわなきゃいけないんだ!!! (後書き)

今回はフェイトさんに来ていただきました〜

フェ「みんな久しぶりだね」

どうですか？原作とは違いますけど？

フェ「なのはが闇の書の中に入ったけどなのはなら抜け出せ  
ると思います」

そうですね〜なのはちゃんは強いですから。

頑張ってください、なのはちゃんと麗華ちゃんをたすけるのは  
フェイトちゃんですよ！

フェ「はい！頑張ります！」

私も頑張ってフェトちゃんの戦闘を良くしたいと思います。  
では〜

フェ「バイバイ みなさん」

TALE36 夢そして融合(前書き)

・・・タイトル意味わかんねって思われるでしょうが  
察してください。。。

ではじいね〜

## TALE36 夢として融合

麗華 side

パチッ

見慣れた天井、ベッド、空気で目覚めた。  
見渡す。

ゆつと一緒に読んだお父さんとお母さんの技術書。  
ゆつと一緒に勉強した真新しい机。

麗「私の・・・部屋？どうして・・・」

？「麗~~~~？起きた~~~~？」

ドアの外から聞こえた声に私の体が強張った。  
今どうして体が震えたの？わたし・・・

？「麗~~~~？入るよ~~~~」

ガチャッ

そういつて入ってくる。流れる私と同じ艶やかな黒髪。整った顔立ち、柔らかな私を笑顔にしてくれる優しい雰囲気。私が最も愛して止まない白銀結斗が部屋に入ってくる。

麗「ゆうー!!」

ゆうが入ってきた途端に抱きつく私。

私と同じくらいの背のゆうに抱きついたためゆうの肩に顔を乗せる形になる。

結「わっ!どうしたの?いきなり抱きついてきて?」

不安だった。どうしようもなく苦しかった。

それを払拭するように私はおもわずゆうに抱きついたのだ。

愛して止まないこの温もりを感じられることが奇跡のように感じた。

麗「.....」

無言で抱きつき続ける私にゆづはしょうがないあといった感じに私の背をさすってくれた。

結「怖い夢でも見たの？」

麗「分からないの・・・でもゆづがいることがどうしてか奇跡みたいに思えて・・・それで・・・」

結「・・・よく分からないけどこうしてればいいんじゃない？」

ギョッ

そういつてさつきよりきつく抱きしめてくれる結斗。

ちよつと苦しいけどとても嬉しい。

この温かさが私は大好きだ。私の存在全てを包み込んでくれる。

美「あ~~~~~麗だけずるいわ！私もする！！！」

結「えっ母さん!?!」

むっ！いい雰囲気のところでお母さんが後ろからゆづを抱きしめた。前から私、後ろからはお母さん。サンドイッチの状態だ。

結「むぎゅっちよつと母さん~~~~さつきも僕抱きしめてたでしょ！」

麗「！！それほんとゆづっずるいよお母さん！朝に二回もゆづに抱きつくなんて！」

朝ゆうに抱きつくのは一回って言う決まりなの！

美「だってだって~~~~！ゆうちゃんの抱き心地最高なんだも~~~~  
ん。一回やると一日気分がいいけど二回やると仕事とかもつすつっ  
ごいはりきつちゃうんだから~~~~もうねいつもの五倍は張り切っ  
ちゃうね、これほんとに！」

白銀美緒。

私とゆうを養子として引き取ってくれた優しい女性。日本人。

十人中全員が美人と答える美しい人。

小柄で背は160cmくらい。

年齢は・・・不明

前聞いたなら「麗々女の人に年齢はご法度よ！」と行って教えてく  
れなかった。とりあえず外観だけなら20代・・・いやいつてない  
かもしれないということだけ記述しておく。

そして極度の子煩悩なの・・・。言うてはなんだがゆうはもちろん  
私もかわいい部類に入るのもうね・・・愛されています。心の底から。

そんなことを考えていたのをよそに

つぶれるゆうをより抱きしめながら嬉しそうに言うお母さん。

結「も~~~~こんなこと、してる場合じゃ、ないでしょ！さっさと  
と一階に行くよー！」

ゆう君がぶんぶんと怒る。でもーとってもかわいいよ  
それはお母さんも同じようで……

麗・美「はあ~~~~い」「

笑顔で返します。

それに……

結「……二人とも離れてね……」

いまだ抱きついたままである。

だってこれをしたら離れないくらいにいいんだもん！

麗・美「や~~~~だ」「

さっきまで感じていた不安や悲しい気持ちは何処かにいってしまっ  
た。

一階キッチンー

京「結斗~~~~新聞……ってまたやっているのか？お前らは……」

麗「お父さんおはよ~~~~」

既にテーブルについてテレビを見ていたお父さんに挨拶をした。



京「おはよう、麗華。今日もそれから始まるのな・・・」

私とお母さんがゆづに抱きついていてのを示しながら呆れたように言うお父さん。

白銀京二。母さんの夫。

私とゆづのお父さん。優しくって、なんでも知ってて自慢のお父さんです。

暴走がちなお母さんを止める事のできるゆ唯一の人でもあります。

日本人。背は170前後。

歳はお母さんと同い年なんだって。なんでも職場結婚とか。まさにお似合いのカップルだね。

麗「うん、もちろん」

美「ね～～～」

お母さんが笑顔で私に言ってくる。

京「結斗頑張れよな」

結「そう思うなら助けてよ～～～父さん～～～」

京「男子は自分で困難に立ち向かうのだ!」

二カツと笑うお父さん。

結「うづ～～二人とも早く朝ごはん食べよ。冷めちゃうし、時間がないよ」

美「仕方ないわね〜まあ今朝はいつもより一回多くゆうちゃん  
エネルギーを摂取したから仕事がかどるわ」

麗「私は登校中に抱きつけるからもういいよ」

笑顔で言う私にお母さんが恨めしそうに見る。

美「ずるいわよね〜私ゆうちゃんとこの先生になろうかしら」

京「そんなことになったらお前、結斗と麗華のことばかり気にして  
授業なんてできんだろぅが・・・」

美「・・・そっそんなことないわよ〜。やだな〜京二つたら〜」

お父さんの的確なツッコみに  
眼を反らしながら言うお母さん。

京「凶星かよ!」

結「と、とりあえず早く食べよ。いただきます」

麗・美・京「いただきます・・・」

これが朝の私の家の幸せな風景です。

なのはside

膝を抱えて　　部屋の片隅　いつも不安で　震えていた　「本当」  
を知ることが恐くて　トビラを閉じた　優しい嘘に

遠くで聞こえるような携帯の音で私は目が覚めました。  
布団の中は心地よく理性では出ようと思っているのですが  
なかなか出る事が出来なっています。

桃「なのは　朝よ　起きなさい」

ここでお母さんの声が聞こえようやく起床する私。

な「ん　分かったの」

カシャン

カーテンを開き窓を開けると冷たい空気が私の眠気を一気に覚まし太陽の光に、目を細めてしまいます。

な「ん〜」ふう〜」

背伸びをして未だ強張っていた体をほぐした。

な「さて学校行かなきゃ！」

気を取り直して学校の準備をし始めました。

聖祥大付属小学校行きのバスにのると後ろに私のお友達が手を振っていたので私も混ざりました。

フェ「おはよなのは」

な「おはよフェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、麗華ちゃん」

通路の正面一番真ん中に座っているフェイトちゃんが挨拶してきた

ので笑顔で返します。  
でもその笑顔はフェイトちゃんの隣に座っていたアリサちゃんの言葉によって……

ア「おはよ宿題やった？」

な「あ……」

背中を冷汗を伝うのに変わってしまいました。

麗「まさか……なのは……」

す「忘れちゃった？」

私の苦笑にアリサちゃんの隣に座っていたかずかちゃんと反対側に座っている麗華ちゃんの顔がなんともいえない顔に……

な「あはは……見せて！お願い！」

私はみんなに手を合わせる。

麗「仕方がないな……私が見せてあげる 感謝しなさいよ！」

な「ありがと……麗華ちゃ……ん」

感激のあまり抱きつく。

麗「きゃっ！いきなり抱きつかないでよ」

な「うふふ麗華ちゃん」

ア「もうっ麗華はなのはに甘いんだから」

・・・あれ？何か・・・何かが足りない

な「ねえみんな、何か足りなくない？」

フェ「足りないって・・・何が？」

な「ん？なんだろ・・・？・・・何か、何か忘れてるの・・・」

みんな「???」

みんなが私の言葉に首を傾げる。

す「なのはちゃん寝ぼけてる？」

気のせいかな？

な「うっくん・・・そう・・・気のせいだよね・・・」

違和感があったが私は気のせいだと思つ事にした。

フエイトside

フエ「きゃあああ~~~~~」

闇の書の拳撃で海に叩きつけられる。  
それによって小規模の波が発生した。

フエ「くっくっくっくっく」

吐かれる息が気泡となって上へ上へと昇っていく。  
途切れそうな意識を再び覚醒させ私は・・・

ザバアアアアアアアアアン

フエ「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

勢いよく海から飛び出し、闇の書の正面につき急な酸素の補給によって起こる息切れをしながら彼女を見た。  
攻撃してくる様子はない・・・なら！

フェ「リンディさん、エイミーなんとか戦闘を海上に移すことができました。市街地の事お願い！」

私は念話でアースラに連絡を取った。

リ「大丈夫、今災害担当の局員が向かっているから」

フェ「それからもう少し粘って説得するので任せてください」

それを聞き私は安心して念話を切った。

局1「局員到着・・・火災の鎮火作業を開始します。」

リ「無理しないでなんて・・・言える雰囲気じゃなかったわ・・・」

バル「reload.<

カートリッジをリロードして対策を練る。

フェ「マガジン四本。カートリッジ22発・・・いけるかな？」

バル「It might be difficult as it stands. . .今のままでは難しいでしょう」<



バルディッシュに聞いてみたが私の予想通りの答えだった。

バル>The enemy's defense is tough. Therefore, it is not easy to pass an attack here. : 敵の防御が手ごわいです。そのためこちらの攻撃は通りにくいです。 <

その通り……。今の私ではあのアイスシールドを破る事が出来ないでも……。でも一つだけ手段が……。ある。

バル>Please use Zanber form. It is possible to destroy it with our defending if that magic is in this. : ザンバーフォームを使ってください。これにあの魔法があれば防御させることなく崩せます。 <

私の考えを言ってくれるパートナー。

フェー「いけるバルディッシュ?」

バル>There is no problem. Let's go to see the appearance of you utsama early finish. : 問題ありません。早く終わらせて結斗様の様子を見に行きましょう。 <

わたしの気持ちを分かってくれるパートナーが嬉しくてでも無理をさせてしまうことが申し訳なくしているいろいろな事を思った。けど……

フェー……分かった。ありがとうバルディッシュ」

礼だけを言った。言葉は必要ない。だって私とバルディッシュだから……

バル>You're welcome.<

バルディッシュもそれだけ言ってくれた。

闇「お前ももう眠れ……」

私に向かって言う闇の書。

それに私は中腰、バルディッシュを下段で後ろに構える。

フェー「いつかは……いつかは眠る。でも今じゃない！私はのはと麗華とはやて、そして結斗を助けるんだ！それに君も……。バルディッシュ！ザンバーフォーミュグニッション！」

バル>Zanber form.<

起動した途端鎌の部分が柄となり、それに合わせた大型で金色の魔力刃が形成された。

バチバチッ

紫色の電気が刃から剥離して音を出す。

私はそれを向けてさらに魔法を発動する。

バル>ReidiantWing<

バサーーーーーー

私の背中に金色の双翼が出来、辺りを照らした。

海鳴公園 - - -

アリシア side

ユニゾンデバイスとして覚醒後私はゆう君のいるところに転送したはずなんだけど出たのは公園でした。

辺りを見渡していると背後からフェイトという名前が聞こえたので思わず振り向くとそこには私と同じ年くらいの女の子二人に男の子一人それと……

アリ「アルフ？」

アル「アリシアなのかい？ほんとに!？」

フェイトの使い魔、私の家族でもあるアルフが驚いた顔で私を見していました。

アリ「うん、アリシアだよ」

アル「アリシア！」

勢いよく突っ込んできてアルフが私を抱きしめ私はされるがままです。

アリ「アルフ、落ち着いてよ。聞きたい事があるの」

アル「聞きたい事？なんだい？」

首を傾げるアルフ。

アリ「白銀結斗っていう男の子見てない？私その子を探しているの」

アル「あゝ結斗ならほら！あそこに」

そう言っただけアルフは指をさしました。

アリ「っ！？ゆう君！」

抱きついてきたアルフの腕を振りほどき、  
勢いよく金髪の女の子に支えられているゆう君の側により様子をみ  
ました。

苦悶の表情で目をぎゅっと引き絞っていました。

アリ「ゆう君！ゆう君！」

ア「ちょっと!？」

驚く金髪の子。

隣にいた男の子も驚いてる。

ユー「ちょっとまだ治療の最中なんだ！」

その男の子が怒る。

アリ「私ならすぐに治せるよ！」

ア・ユー・アル・す「「!?!」」

みんなの顔に驚愕の表情をする。

アリ「だからお願い・・・私に任せて」

ア「ほんとに・・・ほんとに助けられるの?」

アリ「うん、私の大好きな人だもん」

ア・す「むっ・・・」

いきなり不機嫌な顔になる金髪の女の子と紫髪の女の子。  
どうしたのかな?

ア「アリサ・・・アリサ・バニクス」

アリ「えっ?」

ア「私の名前よ・・・」

す「月村すずかです・・・」

アリ「アリサちゃんとすずかちゃん・・・」

す「お願い結斗君を助けて」

ア「こいつ私達を守って倒れたの・・・。自分を犠牲にして・・・だから」

アリ「うん・・・分かったよ」

私はやる気持ちを抑えてゆう君をアリサちゃんに代わって支える。

アリ「ゆう君！ゆう君ってば！」

結「アリ・・・シア？どう・・・して・・・」

アリ「うんそう！アリシアだよ！私ユニゾンデバイスとしてさっき覚醒したの。だから早くゆう君の側に行きたくって」

結「そう・・・ぐっ・・・がはっ」

笑顔で私に答えてくれたけどまた苦しそうに呻いた。

アリ「ゆう君・・・私とユニゾンを！」

結「でも・・・ア・・・リ・・・シア」

不安そうな顔をするゆう君。

それに私はゆう君を抱き寄せる。

暖かい・・・

アリ「大丈夫、私がゆう君を助けるから。みんなも助けるから。だから・・・だから・・・」

結「・・・アリ・・・シア」

アリ「私を信じて・・・ゆう君」

結「分か・・・った。」



ゆう君は私を受け入れてくれた。  
その顔は私の大好きな笑顔だった。ああ、やっぱり私ゆう君の事好きなんだ。そう思いながら

アリ「ユニゾン……イン」

静かに私は唱えた。

消えていく私の体……。

違う……ゆう君と一つになるんだ……

私はゆう君の体温を感じながら身を任せた。

N E X T   T O   T A L E 3 7 ! ! ! ! !

## TALE36 夢そして融合（後書き）

よっし今回も更新完了！

ア・す「ご苦労様」

おや？二人ともめずらしいですね。

ア「みんな手が離せないって言うから私達が出てきてあげたわ！感謝しなさい！」

そうなんですか・・・ありがとうございます。

す「どうですか？PVとかは？」

皆さんのおかげですばらしいくらいです。

PV194,468アクセスです。

すごいですね〜感謝感激雨あられっていう感じですか？

す「そんなに！？すごいですね」

みんなのおかげですよ・・・

ア「別にあんたのためじゃないんだからね！」

・・・まあ読者の方のためですよ・・・

す「これからも頑張って書いてね」

ア「頑張んなさいよ〜！」

了解です！

ではでは〜

TALE 37 そして……(前書き)

愚だ愚だ……。

とくとととととみよ……!!

TALE37そして……

結斗 side

天井は青空、下は暗黒。まるで天国と地獄のようだ。  
そこで僕は漂っていた。

あれ、どうしてこんなところにいるんだ？僕ってば……

アリ「ゆう君……」

結「アリシア……」

声が聞こえたところを見ると、ぼやけた風景が眼に映った。  
それはだんだんと鮮明になり、アリシアの姿を映し出す。

結「ユニゾン成功した？」

周りの風景を気にしながら聞いた。

アリ「うん、ありがと。私を受け入れてくれて・・・」

結「当然でしょ、アリシアは僕のパートナーなんだから」

アリ「うん、うんっ 嬉しいよ」

結「それで・・・ここは？」

「一番気になっていた上の青空と下の暗黒のことを聞いてみた。

アリ「ここはゆう君の深層意識の中」

結「僕の・・・深層・・・？」

深層意識・・・人間の心の中で最も深いところ。か・・・  
改めて見る。

空は雲ひとつない青空で、それは一切の穢れがないように思える。  
一方暗黒は暗闇が渦巻いていて、何物でも全て覆いつくそうするよ  
うに思える。悪く言つと蹂躪するような感じだった。

アリ「うん、やっぱりゆう君はすごいね」

唐突に言うアリシア。

いきなりなにかな？

結「なにが？」

アリ「普通人って言うのはこんな深層意識をしてないんだよ」

上と下を示しながら言うアリシア。

結「？」

分からず首を傾げる。

アリシアはそれにちよつと微笑んで答えてくれた。

アリ「創醒の書から分かったんだけど、人は絶対この相反する景色が均等にならないんだよ・・・負の感情と正の感情、均等にはならないの・・・こんな風に・・・」

結「つまり・・・下が負の感情、上が正の感情って事？」

負の感情・・・憎しみや妬み、嫉みなどが。

正の感情・・・嬉しいや楽しいなどが。

アリ「うん誰でもこの内のどちらかなんだ。人は言葉で綺麗な事を

言っけていても心の中では全く違う事を思ってる。でも深層意識は心の奥だからその人の本質……っていうのかな？どんな人なのか？っていうのが分かるんだ……。」

結「ふう〜ん……。そうなんだ〜」

気にした様子もないように答えると……

アリ「ふふふ、ゆう君らしいね」

アリシアはそれが可笑しかったのか、笑顔になった。  
そこで一つ疑問が浮かんだ。

結「……？……でもさということとは正の感情だけを持った人がすごいんじゃないの？」

アリ「さすがゆう君賢いね。たしかにそうなんだけど……なんていうのかな……。二つの感情は表裏一体なの。だからふとしたことでそれが裏（負の感情）になる可能性がある。もちろんその逆もね。だから正の感情だけを持った人も負の感情だけを持った人はある意味では危険なの。」

だからこそこんな深層意識してるゆう君が凄いな。」  
結「……なるほど……。まあ今はそんな事はいいや。みんな助けなきゃね」

唸っていた僕が顔を上げるとアリシアが目の前に。



アリ「ゆう君」

結「なつ、何アリッ!？」

目の前で呼ばれて答える間もなく

口を塞がれていた。

目の前にはかわいいアリシアの顔。  
それを機に僕の意識を白一色に染めた。

アリ《ゆう君どう調子は?》

アリシアの声で目が覚めた。  
変わったところは・・・特にないな。たださっきのことが・・・

結《ん》問題・・・ないよ それよりアリシア深層意識で最後どうしてあんな事を／＼／＼？》

アリ《っ！／＼／＼なっ・・・何っ？ゆう君？何のこと言ってるのっ？／＼／》

あれ？最後にキスされたような気がしたんだけど・・・僕の勘違い？

アリ《（えっ！！ゆう君覚えてるのっ！？覚えてないと思ってあんなことしちゃったよ）。でもでも！私はゆう君が大好きだし・・・でも恥ずかしい！／＼／＼も！なんか複雑な気分だよ！！）》

結《？？？》

とりあえずアリシアとの会話を終え、辺りを見渡した。  
元の公園だった。どうやら帰ってきたらしい。

ア「ねえ、あんだ結斗なの？」

驚いた顔をしているアリサが聞いてくる。質問の意図が分からない。不思議に思って他のすずかたちの顔を見てみると同じように

驚いているようだった。

結「？もちろん・・・僕だよ。白銀結斗だよ」

それに笑顔で答える。

さっきまで魔力の枯渇による体への痛みがなくなっていて  
すごい調子がいい。

す「あの結斗君これ見て・・・」

おずおずと持っていた手鏡を僕に渡すすずか。

不思議に思って除いてみると・・・

金髪で赤色の目をした僕がいた。

「・・・なるほど。これで二人は僕か疑ったんだ。

結「二人が言いたいののは僕の髪と目の色が変わったから？」

ア・す「うんうん・・・」

そろって首を縦に振る二人。揃ってやっているためちよつとかわい  
かった。

結「これは・・・なんて言うのかな〜。う〜ん、アリシアが僕  
の中にいるからそれで変わったんだ」

ア「中って……?」

す「?」

?がるアリサとすずかだけど今は説明してる暇がないんだよね。

結「説明は後。今はなのは、フェイト、麗華を助けないと……」  
未だ戦っている子達の魔力を辿った。

ユー「って結斗、ナチュラルに会話してるけど大丈夫なのかい?」

そこで今まで僕達を見ていたユーノが話しかけてきた。

結「やあ、ユーノ久しぶり。元気だった?」

ユー「うん久しぶりってちがうつ!!体調は大丈夫なのかい?」

結「ああそれなら大丈夫。ユニゾンのおかげだね。アルフも久しぶりだね」

アル「ほんとだよ。あんたがいなくなつてフェイト達がどれくらい悲しんだか分かってるのかい?」

これは手厳しい。会って早々言われるとはね。

結「僕だつて帰りがかったけど帰れなかったんだよ。まあフェイト達にはちゃんと謝っておくから。」

アル「そうしてやっておくれよ」

結「ところでユーノ今魔力を調べたけどどうしてフェイトのしかないんだ？」

ユー「それが・・・なのはと麗華は闇の書の内部空間に取り込まれてしまったらしいんだ。」

なるほど・・・だからフェイトだけ戦っているというわけか。

結「なら急いでフェイトの方へ向かわないと・・・アリシア、焰美と澪はどこかな？」

アリ「うっ〜んと・・・わかんない二人とも魔力が無くなっちゃったみたいで探知できないの・・・」

とするとイヤリングの状態か・・・。何があつたかは知らないけどとりあえず二人を呼びださないと・・・

ア「・・・と、結斗ってばっ!!」

結「わっアリサなに？人の目の前で大きな声出して？」

ア「何じゃないわよ！あんたまさかとは思っけど行くんじゃないでしょうね〜？」

ギクツ・・・

結「仕方ないさ。三人・・・いや四人が助けを求めているから・・・」

す「・・・帰ってくるよね・・・」

結「ん？」

す「帰ってくるんだよね？」

心配そうに尋ねてくるすずか。

結「もちろん。さて二人ともちよつと離れててね。」

二人を少し離れさせ僕はリラックスした状態で言葉を紡いだ。

結「我、汝らの主白銀結斗。我が前に現れよ・・・焰美、瀨」

シューーーーーン

・・・何も起こらない・・・

ユー「何も起こらない？」

アル「結斗？」

不思議がる二人。

まあ何も起こらなければ……ね。

ア「ちよつとあれ何っ？」

アリサが指差すのは二つの光。

赫いものと蒼いもの。

す「こつちに来るよ!!」

その光はこちらに向かってきて僕の前で止まり、漂った。

結「お帰り、二人とも……」

焰「ゆう大丈夫なのか？」

澁「そうです、というよりどうしてゆう様がいるんですかっ？」

結「アリシアとユニゾンしたから大丈夫だよ。それより二人とも力を貸して」

焰「我らがそれを拒むと……」

澁「……お思いですか？」

結「ありがと……」

僕は赫い光と蒼い光に手を出す。すると光は収まっていき僕の掌上にはイヤリングが存在した。

結「じゃいくかな？瀧セットアツーーープ！」

僕の周りを蒼色の光が満たした。

一通り確認する。

蒼みがかかった金髪となり、BJは蒼色。そして腰には二つ。  
蒼色の装飾銃Blue Tearsがつけられている。

結「よしっ！」

ア「絶対帰ってきなさいよ！」

す「絶対だよ！」

結「分かってるさ。アルフ、ユーノ僕は先に行くよ！」

アルフたちの返答を待たず僕は転移した。

フエイトside



私の手にはザンバーフォームのバルディッシュ。視線の先には赤い瞳から涙を流す闇の書。

フェ「繰り返される絶望は終わらせられる。はやても破壊を望んでいないはず・・・」

闇「主は望んでいる。家族を失わせた者への復讐を・・・私は主の願いを叶えるだけだ」

フェ「・・・はやてだって人間だ。憎しみの感情を持っているけど本当は望んでいないはずだ！あなたははやてを理由にして逃げてるだけ！」

闇「・・・それでも私は主のために戦うだけだ。それが私の全てだ・・・」

フェ「哀れだね・・・あなたは。諦めて・・・そして主に逃げて。でもそんなあなたが涙を流す。」

闇「・・・。。。。Photon Lancer Genocide Shift」

闇の書の周りにもすごい量のフォトンランサーが作り出された。狙いはもちろん私だ。

フェ「・・・そう。。。。あなたはその選択をするなら私は・・・」

バサツーーーー  
ジャキツ・・・

正面に大剣を構え、背中の双翼を羽ばたかせる。これはレイディアントウイング。

なのはと麗華から教えてもらった魔法。

フェ「あなたを・・・倒して、分らせる!」

闇「っ!?!」

ガキツーーーーー

ギギギギギギギギギギ・・・

一瞬で背後に回り、攻撃を仕掛けたがシールドで防がれた。罅迫り合いをする中間の書を見る。  
今までの無表情ではなかった。

闇「(これ程までにスピードが上がっているとはっ!)(」

フェ「やあああああああ」

そんなことは意に返さず、自分の剣を浴びせる。  
もっ!もっ!と速く!  
ひたすら攻撃をし続け、隙を見る。









T A L E 3 7そして……（後書き）

ぐぐぐ……

結「なんか唸ってるね……」

おやつ久しぶりですね！結斗君。やつとですか？

結「そうなんだよやつとだよ……ってSKYさんがここまで伸ばしたんじゃないか！」

……てへ ごめんなさい

結「……はあまあいいです。今回出られたので……」

というわけで今回は結斗君です

結「みんな久しぶりだね」

いや〜ほんと久しぶりだよ。麗華ちゃん達なんて結斗君がいないと  
凄い落ち込みようだったよ

結「仕方ないでしょ」

まあとにかくよかったですな。

さて今私は重要な分岐に立たされています

結「分岐？」

それは・・・A' S編の後の話しを全く構想していません！

結「・・・頑張って考えてね。読んでくれるみんなのためにも・・・」

それはもちろんです。

・・・はあ。

じゃあ。

結「行っちゃった。っとみなさんやっど僕が帰ってこれました。これからは怒涛の展開になりそうです。応援してね。」

・・・とそういえばSKYさんが感想を欲しがっているそうです。

みんななんでもいいのであげてくださいね。じゃこれで。バイバ～

イ」



TALE38 希望の光（前書き）

うっひゃ〜〜

一日で仕上げたよ！

頑張りました。

感想とかお待ちしてます〜

## TALE 38 希望の光

なのはside

麗華ちゃんから宿題を見せてもらいなんとか授業を受ける事を果たす事ができた日の昼休み。

冬にもかかわらず今日は空が晴れ渡り、日光がさんさんと照り続いていたため昼食は屋上で取ることになりました。

みんなの会話が日の光によるぽかぽか感で子守唄へと変貌しようとしたところまた頭の隅で引っかかります。

朝私が言った事です。

それが私を瞬時に現実へと引き戻します。それが何度かあり今日はまじめに授業も受けられませんでした。

最後には・・・

麗「なのは、今日は早く休みなさい」

といわれる始末。みんなに早めに帰る事を告げ別れ一人になると余

計に考えてしまいます。

そんな煮え切らない思いをしながら私は帰宅しました。

そんな私を見つめるのは紅くなりかけた太陽と雲にかかる下弦の月だけでした。

翠家――

いろんな物の影が紅い夕日と交わり始めた頃私は家に帰宅しました。私自分で思っているよりも長く歩いていたんだ――。

窓からのぞくとどうやらピークは過ぎたらしくお客さんの姿がありません。

お父さんが片付けをしているのが店のガラスから分かりました。

――私が悩んでるのすくにはねちゃうかな？・・・でも心配かけないようにしないと。

な「ただいま〜〜」

なるべくいつも通りに帰宅の言葉を述べる事が出来ました。

士「おや、なのは。おかえり」

私を迎えてくれるエプロン姿のお父さん。手には御盆の上に乗った食器。

お母さんは厨房のようです。

士「なのは顔色が悪いぞ、大丈夫か？」

な「ふえ？・・あはは、大丈夫、大丈夫！！元気いっぱいだよ」

両手に拳を作って、元気をアピールしました。やっぱり私すぐに分かれちゃったよ〜

士「・・部屋で休んでおいで。店はいいから。桃子にもそう伝えておく」

優しく背中を押してくれるお父さん。

な「・・・・・ありがとう。お父さん。」

一言だけ言って私は学校の靴を脱ぎ部屋へと行きました。心配そうな顔をするお父さんに気づかない振りをして・・・・・。

バタンッ

いつもはそんなに気にならないドアの音が大きいなあと思いながら

充電の切れた人形のようにベッドに倒れ込みました。

今は何もしたくないなあ。

体は睡眠を求めてないけど頭が休ませると警鐘を鳴らしている気さえします。

私の中で渦巻く疑問。それが気になって仕方ありません。

な「ん？」

首を反対の机のある方向へと向けてみると見慣れない真新しい本が机の上にあります。

な「何かな？」

ベッドから抜け出し、確かめてみるとそれは青地に白色の文字が表記された日記でした。

こんなの私書いた覚えはないの……。

自分のものではない物が部屋にある理由などの疑問が脳裏をよぎりましたが私は自然とその日記を開けていました。

月 日晴れ

今日嬉しい事があったの。 - 君が帰ってきてくれたの！髪が長くなったり、名前が変わったりしていたけど雰囲気が変わってなくてすぐに分かったの！

——君も私の事を覚えていてくれたから嬉しかったの！

な「——君って・・・？・・・」

擦ったような感じで肝心なところが読めない。

月 日曇り

今日は驚いたの。フェレットさんは倒れてるし、その子から赤い宝石をもらって変身しちゃうし黒い化け物に襲われるし。

いろんなことがあつててんでこまいなの。  
でも化け物に襲われそうになったとき銀さんって言う人に助けられたの。

銀さんは年上みたいに見えただけど魔法で顔は分からなかったの。—  
体誰だろう？

魔法？宝石？銀？

見に覚えの無い単語ばかりが出てきて頭の中ぐちゃぐちゃだよ。

桃「なのは～～？入るわよ～～？」

な「お母さんっ？」

ドアの前からお母さんの声が聞こえ驚く私。

桃「なのは、体調悪いつて聞いたから、あら？それ日記？」

心配そうに尋ねながら私が手に取っていた日記に目を向けるお母さん。

な「うん、でも私日記なんて書いた覚えはないの」

桃「……そう。」

な「それに何か忘れてる気がして……麗華ちゃん達にきいても気のせいだって言われて……」

「ー何言ってるんだろ私。こんな説明じゃ伝わるはず無いのに……」

要領の得ない説明にお母さんは答えられないと思いました  
がそれしか言葉に表す事ができません。

「なのは、大丈夫？」というお母さんの言葉が浮かび上がり、発せられると思いましたが私の予想とは

桃「……なのはは思い出したい？」

全く反対の言葉でした。

な「お母さん？」

真剣な表情で聞いてくるお母さん。その表情は私はあまり見ません。

でもお母さんが根この顔をするのは大事な事がある時と分かっていたので私も真剣に答えます。

な「うん、思い出したいよ。どうしてか分からないけどとても大事な事だと思うの。それに今とても苦しいの」

桃「……………」

私の言葉に考え込むお母さん。

その沈黙は私にとって長いものの様な気がしました。そして沈黙はお母さんの言葉に破られました。

桃「そう……。分かったわ。いいなのは？日記に書かれている名前の子は白銀結斗君」

な「結斗……………君……………っ!!」

ズキンッ

一瞬頭痛の後私に流れ込んでくる映像。  
長い黒髪に優しい表情。

フェイトちゃんの時支えてくれたり、命懸けで守ってくれたりしてくれた。

私が大好きな初恋の男の子。

どうして忘れていたんだろ、忘れるはず無いのに。



忘れちゃいけない人だったのに！

な「結斗君！」

桃「思い出したみたいね」

な「うん、お母さん。……ここって夢の世界だよな？」

桃「そうよ、夢の世界。でも結斗君のいない世界」

この世界で欠けていたのは結斗君の存在。

苦しかったのは結斗君が私の中で大きな存在だったからだったんだ。  
・  
・

桃「いくのね？」

な「うん、私今度は結斗君を守ってあげたいの」

桃「そう……じゃあこれを持っていきなさい……」

手渡されたのは赤く光る宝石でした。

な「レイジングハート！」

レイ>Master.<

久しぶりに聞いた気がするレイジングハートの声。

な「レイジングハートここを出るよ!」

胸の前で握り締めてから宣言するよつに言った。

レイ>Yes・stand by ready?<

BJに着替えて私はレイジングハートを構える。

な「いいかな?レイジングハート・・・」

あえてExellion Modeとは言いません。私とレイジングハートだから。

レイ>Yes!! ignition!!!<

カートリッジが一つ排出され、レイジングハートが変わっていきま  
す。

見た目は杖から槍のようじ。

桃「なのは・・・」

私の名前をいいながらお母さんは私の顔を優しく両手で包み込んで  
くれた。温かい・・・

桃「頑張りなさい。結斗君は競争率高いから・・・」

お茶目に言ってくるお母さん。

な「うん／＼／負けなさい!私だって結斗君大好きだもん!」

ちよつと恥ずかしいけど言い切ります。  
だってほんとに競争率高いですから。

それを機に私の視界は白に染められました。

麗華 side

学校から帰宅途中。横には誰もいない。ゆうは何か用事があるとか  
で先に家に帰ってしまった。

あゝあゝ一緒に帰れたかつたなゝゝ。

一人伸びる影。その横には誰もいなかった。

白銀邸――

いつ見てもでかいとしか言えない私の家。日本としては豪華な方だろう。庭には噴水があるし。バラ園みたいなものもある。噴水から出る水蒸気が私を少々濡らしそれが肌をちよつとずつ冷ましていくのを感じながらを通り過ぎ、玄関に行く。そして慣れた手つきで鍵を開け私の身長は二倍はあろうと玄関をくぐった。

麗「ただいま~~~~ゆつ~~~~?」

先に帰ってるはずのゆつを呼んだけど声は返ってこない。

麗「?・・・まだ帰ってないのかな?」

真新しい靴を脱ぎ、スリッパに履き替えシンとした通路を進む。目の前には円階段それを通り過ぎ真っ直ぐ進むとキッチン、左に曲がるとリビング。と簡単に言ったが他にもいろいろと部屋がある。それも言い出したら切がないし行くのもめんどくさい。

麗「ゆつ~~~~?」

リビングからひよっこり顔を出す。誰もいない・・・

部屋かな・・・?

パタパタ

私のスリッパが床を叩く音だけが静寂の空間に刻まれた。

小学生の私にはちよつと段差が大きい感じのする円階段を上り、突き当たりにある窓から差し込む光の隣に位置する私から見ても一番奥のゆうの部屋を目指す。

麗「ゆう~~~~っでは~~~~隠れてないで出てきてよ~~~~」

行っている最中こんな声をいっても帰ってくるのは静寂。さすがに不安になってくる。

ゆうはほんとに帰ってきているの？

自然と一歩一歩の速さが速くなった。

そして着いた。

扉には結斗の部屋と木のプレートに書かれている。

コンコン

ノックをして声を掛けながら恐る恐る入った。

麗「ゆう~入るよ~」

部屋にゆうの姿は.....

あった。良かった。

ゆうはこちらに背を向けたを向いていた。

ゆうがいた事に安堵していつもの調子にして私は声を掛ける。

麗「もうっ！いるならいるって言ってよ〜！心配になるじゃない！」

回り込んで顔を覗き込んでみる。

結「っ！びっくりした〜」。麗華か・・・驚かさないでよ・・・」

急に私が視界に入ったことで驚いたらしくゆうが言った。  
ちなみにその顔もかわいかった事は内緒だ。

麗「何驚いてるの？・・・っ!!」

ゆうが下を見ていた理由を私も見ると瞬間的にいやな汗が背中を伝った。

今度は私が驚く番だった。

ゆうの掌の上には白い宝石があった。

結「麗華もう>言わないでっ!!<・・・麗華・・・」

ゆうが言わんとしている事を聞かないように耳をふさいだ。  
お願い・・・その言葉を言わないで・・・

結「もう気づいてるでしょ・・・。ここが夢の世界だって事・・・」

麗「いやっ!!いやっ!!言わないでっ!!お願いっ!!」

いつも大好きな声だけど今は聞きたくなかった。  
尚私は耳を塞ぐ。

結「麗華聞いてっ!!!!」

ゆうが私の手を取って声が聞こえるようにした。  
もう声を遮るものはない。

麗「言わないで……お願い……」

瞳に涙が流れた。

優しい瞳が私を射抜く。

結「麗華……ここは夢の世界。本当の世界じゃない。分かっているでしょ……」

麗「……」

分かった。ここが……夢の世界だった事。

だってお父さんは死んでるはずだし……それに焰美も瀨も鏡月もいなかったから。

麗「でも……ここがいいよ！ぐすつ……だって現実にはゆうがないんだよ！そんな世界私要らないよっ！」

結「麗華……」

麗「ここだったらいつまでもゆうと一緒にいられるしお父さんだっている。幸せな世界だもんっ！」

涙を流しながら私はゆうへ抱きついた。  
でもいつもこれで幸せな気持ちになるのに今は全くそうではなかった。



結「でもここはまやかしの世界だ。麗華はいちやいけなよ」

麗「でもっ！（麗華っ！！）っ！ゆう・・・」

ゆうが怒鳴り声に遮られた。でもそれは怒りじゃない。私のためを思つての声だと私は思つた。

結「夢は所詮夢。いつか覚めなくちゃいけない・・・」

ゆうが私の肩に手を置き目を見て言ってくる。

麗「・・・」

私は俯いて聞く。

結「それに・・・僕があんなのでくたばると思つ？」

その言葉に顔を上げる。

麗「・・・嘘。だってあの時・・・」

結「早とちりしたんでしょ、麗華。悪いところだよそこ・・・」

コソソッ

私の額の優しく叩くゆう。

麗「生き・・・てる・・・の？」

結「もちろん・・・生きてるさ。全く勝手に勘違いして、フェイト

達心配してるよきつと・・・」

麗「うん・・・うんっ!!」

嬉しい。ほんとに嬉しい!ゆうが生きてる!

結「ん・・・麗華が笑顔に戻ってよかったよ。それじゃこれ・・・」

手渡してくるのは白い宝石。鏡月だった。

鏡>全くよく時間かったわね!<

第一声に憎まれ口を叩かれた。

むっ・・・

ちよつとむかついたけど私の勘違いのせいなので口をつぐんだ。

麗「いくわよ・・・鏡月!」

鏡>了解!<

セットアップを完了する。

鏡>麗華、ジャッジモードを・・・<

麗「いける?」

鏡「もちろんっ <

麗「よしっ、鏡月！ジャツジモードドライブ！」

鏡「ignition!!!!!!<

腿に装填された私の双銃 silver cannonが姿を変え、  
銀色が暗黒色になる。

でもその色は見る人魅了させるような夜の色だ。  
それに金色の線が遜色されている。

移行が完了した事とところでゆうを見る。

結「頑張って……」

私の大好きな笑顔で送り出してくれた。

麗「うん、私今度はゆうを救ってみせるから！」

結「あはは、面と向かって言われるとなんか変な感じがするよ。でも……お願いね。現実の方の僕は無茶ばかりするから……」

麗「うん だって私はゆうのお嫁さんだから!!」

結「///」

顔を赤くするゆう。

それを見て微笑みながら私は・・・

麗「行つてきます!」

結「行つてらっしゃい・・・」

夢の世界から抜け出した。

海鳴市海上――

結斗side

僕が着いたのはフェイトが双翼で攪乱しながら闇の書を海に叩きつけたところだった。

アリ《うひゃ〜、フェイトってばすごいね。》



澗>直撃ですねさすがゆう様 <

焰>普通のものじゃったらこれで片付くのじゃが……<

フローズンバスターによる冷気が闇の書のいる付近を覆う。

この集束砲はなのはのデイベインバスターの氷結バージョンみたいな感じだ。

当たれば目標は絶対零度の氷に包まれ、戦闘不能になるのだが……

結「もう少し……みたいだね……」

焰「じゃの……」

澗「ですね……」

シューウウウウウ

闇の書の右手から煙が立ち込める。

どうやら咄嗟の一瞬でシールドを張ったらしく闇の書は無傷だった。

闇「……」

無言で佇む闇の書に瞳を向けられた。  
吸い込まれそうな紅い目。

結（なんて・・・寂しそうな目をしているんだ・・・）

一目見た人はその紅い目を見てどんな事を考えているのか分からないだろう。

それにあの表情・・・彼女は疲れ果てている。

根拠は無い。でも僕が最初に思ったことはそれだった。

フェ「結斗っ！？大丈夫なのっ？」

僕が来た事に驚いたのか側に近寄ってきたフェイトが慌て出した。

結「大丈夫さ、アリシアのおかげでね」

フェ「アリシアって、姉さんのことっ！？でもでも姉さんはっ・・・」

驚くフェイトに落ち着かせるように僕は頭を撫でる。

結「落ち着いてね・・・」

フェ「うっうん／＼（やった 久しぶりに頭撫でてもらった）」

途端に冷静になるフェイト。でも反比例してフェイトの顔が異常な速さで赤色に染まっていく。

結「アリシアは生きてるよ。今は僕の中にいるんだ、ユニゾンしてね」

フェ「そ、そうなんだノノノとりあえず話しは後でだよねノノノ」

顔が赤いまま話すフェイト。

大丈夫かな？

アリ・焰・瀨「」（いいなあ〜〜）」「」「」

ちなみに三人のパートナーはとつても羨ましがっていた。

結「その通り！とりあえず麗華となのはを助けなくちゃ……ねっ！」

スフィアが飛んできたのでそれを手で払いながら言う。  
つと……待つてくれてもいいのに〜〜！！

フェ「そっだ……ねっ！」

フェイトもザンバーで両断した。



フェ「よしっ行こっ！（ちょっと待って！）どうしたの？結斗・・・」

勢いに乗って攻撃態勢をとっていたフェイトに待ったをかける。

結「どうやら・・・そう時間はかからないらしいよ」

すると動きがいきなり変わり始めた。

まるで人形が動くかのようにギシギシと音を立てていた。

そこで聞きなれた声が耳に入ってきた。

は「外の方。管理局の方！こちら・・・いや・・・そこにいるこの保護者八神はやてです！」

はやてっ！？無事だったんだ！

闇の書からはやての声が聞こえてきた。その声はいつもの声で問題は無さそうだった。

良かった・・・

フェ「はやて!?!」

はやての声が聞こえたから驚いて聞き返すフェイト。

は「フェイトちゃん？ほんまに？」

はやても管理局の人がフェイトだった事に驚いているようだ。  
さてもっと驚いてもらおうかな？

結「はやて、大丈夫かい？」

は「こ、この声！？結斗君なん？」

結「That's all right!!!!」

英語で答える。するとはやてからすすり泣く声が聞こえてくる。

は「ゆう・・・とくん・・・良かった。ほんまによかった。私を治して倒れたって聞いたから、ずっと心配しとったんやで！」

結「もう大丈夫さ。それよりどうすればいい？はやて達を救うには？」

は「ありがとな／＼また助けってくれようとして・・・」

結「何言ってるの！僕達は家族でしょ！当たり前だよ！」

は「ぐす・・・うん！そうやね！その子をちよつと止めておいてくれる？こっちでなんとかコントロールは奪取したんだけどこのままだと管理者権限が使える。今そっちに出ているのは自動行動の防御プログラムだけだから！」

・・・つまりこの子を倒せばいいんだな！

フェ「結斗どつゆつこと？」

首を傾げて聞いてくるフェイト。フェイトにはすぐ理解するのは難しかったらしい。

ユ「フェイト、結斗！簡単に言うよ！どんな方法でもいい目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！」

そこでこちらに移動中のユーノが言ってきた。  
つていうかしゃしゃり出てきた・・・。

フェ「えっ？ええっ？」

フェイトがユーノが早口だったせいでいまいち理解できてないよ！  
ユーノ早口すぎ！

結「つまり全力全開であの子に攻撃を叩き込むんだ！」

フェ「！なるほど、分かったよ！バルディッシュ！」

バル>Plasma Smasher<

結「静！こつちも最大だよ！」



結「麗華！」

僕達のから見てちょうど右手に浮いているのはと麗華の姿を見てほっとする。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

下からの地響きだ。

エイ《みんな気をつけて！闇の書の反応まだ消えてないよ！》

やっぱりか……はあ。

未だに存命とのもことで僕は肩を落とした。

Next to TALE 39!!!!!!

TALE 38 希望の光（後書き）

はあはあはあ・・・

麗「よく頑張ったわね。一日で完成させたんだって？」

は・・・はい。大変でした。でも私も早くこのラストを終わらせた  
いんで頑張りました。

麗「そういえばアドバイス貰ったんだって？」

はい・・・頂きました。ヨシユキ様から頂きました。  
有難うございます。

麗「へえ〜どんなこと言われたの？」

とりあえず小説からパクレみたいな感じでしょうか。  
私いままで自分の言葉だけでやっていたので  
結構楽になりました。

麗「パクリもいいけど、自分の言葉で表しなさいよ〜そうしないと・  
・・・」

そ、そうしないと・・・？

麗「視聴者減るわよ・・・」

いや〜〜〜それだけは〜〜〜!!!!

麗「というわけで頑張んなさい」

はい・・・今回協力してくださったヨシユキ様本当に有難うございました。

他の皆様も凡人の私めにアドバイスを下さると嬉しいです。

もちろん感想でも構いませんよ。

それじゃまた

麗「じゃあね~~~~~」

T A L E 3 9 みんなが一つに！（前書き）

あゝいろいろあつて投稿遅れました。

まだかよ！とイラついていた人ごめんなさいです。

なんとか形に！

では後書きでまた！



T A L E 3 9 みんなが一つに！

海鳴市海上上空――

結斗 side

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

海が震えそれは僕達の耳を不協和音となりその音は、僕達を不安にさせた。

またその正体をみて呆然としている仲間も……。

みなの中には丸く黒い球体で直径100メートルはあろう巨大なもの。邪悪な存在、闇の書の闇。中は闇のため見えないがそれが邪悪なものだという事をみんな

肌で……そして……本能で感じているんだ。

でも僕は全く不安には思わない。

理由は闇の前に白く輝く球体。闇の球体よりもとてつもなく小さい大きさだ。でもそれは強く、優しく、輝いていて闇よりも大きな存在感を持っていたから。

エイ《みんな下の黒い淀みが暴走が始まる場所になるからクロノ君が来るまで絶対に近づかないでね!》

エイミイの声が唾然としていたなのは達に聞こえたようでハッと我に返った。

つてあんなのに近づくと人いないでしょ・・・エイミイ・・・。

キイイイイイイイイイイイ

そんな事を思っていた時白い球体が柱へと甲高い音を立てながら変貌した。

始まる・・・遂に・・・最後の夜天の主の誕生が・・・。

みんなが柱の眩しい光に目を覆う。

な・フェ「っ!!!」

なのはとフェイトが息を呑むのが分かった。

やがて白い柱は消えていき、元の球体へと戻った。

だが球体の周りにはそれを守るように四つの人が立っている。

な「ヴィータちゃん!」

フェ「シグナム！」

守護騎士の四人が静かに佇んでいた。僕の家族である四人が。

シ「我ら夜天の主に集いし騎士……」

シャ「主あるがままに我らの魂尽きる事なし……」

ザ「この身命ある限り御身の下にあり……」

ヴィ「我らが主、夜天の王……八神はやての名の下に……」

ヴィータ達は騎士の誓いを行っている様に思えた。

それは誓約であり、約束。

彼らと主はもう決して離れたりはしないと決めたという決心があった。騎士の象徴のような光景だな。

パリーーーーーーン

そして白い球体が破られた。

そこには最後の夜天の王、八神はやての姿だった。

はやてが無事であった事に安堵しながら僕を含めたみんながはやてへと近づく。



結「ふう〜〜〜良かった。はやてが無事で・・・」

な・は・麗「誰っ!?!」

みんなが僕を見て警戒しだす。

・・・。そんなに変わってるかな？

正体を知ってるフェイトとユーノ、アルフは笑いを堪えてるし・・・。  
もうっ!

結「分かるでしょ!」

な「もしかして・・・結斗・・・君なの?」

は「なのはちゃん・・・結斗君は金髪さんやないよ」

麗「あんたほんとに誰?」

またこれが・・・

結「はあ〜〜〜分かったよ。これでいいでしょ!アリシア、ユニ  
ゾンアウト、瀧達も人間になって・・・」

アリ《は〜〜い》

焰・瀧>うむ・・・/分かりましたく

パアアアアアアア



結「痛っ！」

あまりにも凄い勢いだっただため受け止めきれずに床に倒されてしまった。

今の音は頭が床を打った音。

ほ・・星が・・・クルクル回ってる・・・。

麗「ゆう！ゆう！この温かさゆうだ！ん~~~~」

星の鑑賞をしている間に麗華が僕の胸に頬ずりしてくるし。  
嬉しいやら恥ずかしいやら・・・。

結「れ・・・麗華・・・この態勢は恥ずかしいからどいてくれる？」

麗「やだっ！ん~~~~今は充電中」

尚も頬ずりを続ける麗華。

仕方なく僕はなのはたちに助けを求める。

結「みんな助け（結斗く~~~~ん！！／結斗っ！！！！）ってえええええええええ」

目の前の出来ことに僕は叫ぶしかなかった。  
お伝えしよう・・・。

なのは、フェイト、はやて、アリシア、焰美、澪が僕に向かって  
.....

ダイブしてきたのだ。

僕は麗華に乗られているため動けない。さすがにこの大人数一気に  
乗られたら僕はつぶれてしまう!!  
だが動けない.....

それを僕は人事のように見ながら迫り来るみんなのダイブをその身  
に受けたのであった。

1111

二分後—————

結「はぁ~~~~やっと出られた。。。」「

一瞬本気で目の前が真っ暗になったよ。。。洒落にならんね、ほ



んとに・・・。  
ダイブしてきた子達はみんな一様に顔を真っ赤にして「ごめんなさい」と呟いていた。

結「まあ僕は大丈夫だからみんな元気出して！」

と言ったらみんな笑顔になった。

麗「やっぱり焰美と澪が焰と蒼だったんじゃない！」

麗華が怒りながら言う。どうやら確信していたらしい。まあ澪はともかく焰美の太刀筋を見れば白銀流だと分かるし、僕の癖もあるし・・・

焰「すまなかったな、麗華。ゆうの事が気づかれなくなかったんじゃない」

澪「ええ、仕方なくです。」

麗「まっ今となってはもういいけどね・・・それより・・・」

視線をアリシアへと移す麗華。その表情は困惑。

麗華もどう切り出しているのかわからないようだ。死んでいた人が生き返ればそりゃこうなるよね。

フェ「姉さん・・・なの？」

自分の目で見ていることが信じられないようでフェイトがつまりな

がら発する。

アリ「んゝもっちのろん フェイトのお姉さんアリシアですよ!」

それをアリシアが元気よく答えた。アリシアらしいね。

フェ「姉さん!」

アリ「わっ・・・もうフェイトってば、泣き虫だね。よしよし・・・」

アリシアがフェイトを優しく抱きしめる光景をみんなそっと見守っていた。

そこで僕らの前にお馴染みの人が現れる。

ク「邪魔をしてすまない、執務官クロノハラオウンだ。時間が無いので簡潔に説明する。あその黒い澱み・・・闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らは何らかの方法で止めなきゃいけない。停止のプランは現在二つある。一つ極めて強力な氷結魔法で停止させる」

右手の白いカードを僕らに見せながら言う。

おそらくデバイスだね。

ク「二つ軌道上に待機している管制アースラのアルカンシエルで消滅させる・・・これ以外にいい方法はないか?闇の書・・・いや夜天の書の主とその守護騎士のみんなに聞きたい・・・」

アルカンシエル……空間歪曲させ反応消滅させる魔導砲か……。  
あれはここで使われるとこの辺は木っ端微塵だね……。  
クロノも二つ目は嫌そうで暗い顔で言った。

シャ「あ〜」

そこでおずおずとシャマルが手を挙げる。

シャ「最初のは難しいと思います……主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから……」

シ「凍結させてもコアがある限り再生が止まらん……」

ヴィ「アルカンシエルも絶対駄目！ここでそんなもの撃つたらはやてのうちまでぶっ飛んじゃうじゃんか！」

ヴィータが×印を手でさせながら言った。

な「そつ、そんなに凄いの？」

そこでアルカンシエルの恐ろしさを知らないのはが聞いてきた。

麗「発動地点を基点に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅させる魔導砲……でよかったかな？ゆっ？」

結「そのとおり、よく覚えていたね麗華」

麗「ゆうと一緒に勉強した事なら私絶対忘れないよ」

結「そっか・・・それよりもうそろそろ離してくれない？」

麗「もうちょっと〜ん〜ん〜ん」

まだ麗華は僕に抱きついていて。ずっと。なのは達の視線が痛い痛い。。。。

みんなの視線の言葉・・・

な「（いいな〜麗華ちゃん・・・でも夢のとき私だつて負けないつて決めたもん！）」

フェ「（あう〜いいなあ〓私まだ頭しか撫でてもらってないよ〜。私だつて抱きついたりしたいのにも〜でも恥ずかしいし〜／＼／＼）」

は「（なのはちゃん達の友達が結斗君つて凄い偶然やな〜。それよりみんなの結斗君を見る瞳・・・これ恋する乙女のものや！あかんっ！競争率高すぎるわっ！でも・・・負けへん！だつて結斗君は私のナイト様やもんな／＼／＼）」

アリ「（ゆう君争奪戦の候補者がどんどん増えていってるよ〜。それにしても麗華ちゃんつてあんなにゆう君にべたべたなの。っていうよりし過ぎ！〜私も後で抱きつこ〜と〜）」

焰「(相変わらずじゃな・・・麗華も麗華じゃがゆづもゆづじゃ。いい加減兄離れ、妹離れしろと言いたいとう。)」

瀨「(はあ~~~~ゆう様を見るみんなの目。。。変わりすぎじゃないですかっ!!はあ・・・半年でなのは様もフェイト様も恋する乙女になってしまいましたか・・・みなさん脅威ですね。。。)」

みんなそれぞれの思案を持ちながらその光景を眺めていた。その張本人である結斗は・・・

結「相変わらず麗華は甘えん坊だね・・・」

麗「ふにや~~~~ん」

麗華の頭を撫でていた。あくまでこれを甘えていると解釈する。それが結斗クオリティ・・・。

な~~~~って麗華ちゃんを見てる場合じゃなかった!私反対です!アルカンシエル!」

フェ「同じく絶対反対!」

二人がクロノに詰め寄る。

ク「ば・・・僕と艦長も使いたくはないよ。。。でも・・・」

クロノが麗華を横見しながら言う。

おそらく麗華のギャップの激しさについていけないから驚いているのだろう。

もう一人の男ユーノも麗華のあまりの変貌にあいた口が塞がらないと言った感じだ。

結「暴走が本格的に始まるとアルカンシエルでここを消滅させるより被害が大きくなる……かな？」

ユー「暴走が始まると触れたものを侵食して無限に広がっていくんだ。だから……」

自分で言うておいてなんだがやっぱり僕も反対だ。

理性ではそれがリスクが少なくて一番安全だと言う事と分かっているても感情がそれを許さない。

ここは僕の生まれ故郷だし、なのはたちと出会った場所でもある。だから破壊なんて絶対にさせたくない……。

エイ《はあ〜いみんな暴走開始まであと十五分きつたよ！決断はお早めに！》

場の空気が悪くなっていたのをエイミイがの通信で少々和らぐ。そんな簡単にこの決断はできないよ……エイミイ……。

ク「何かないか？」

再びはやて達に聞くクロノ。それは真摯な要望だった。

シ「すまない・・・あまり役に立てそうに無い・・・」

ザ「暴走に立ち会った経験は我らにもほとんど無いのだ・・・」

しかし現実には厳しくその願いも断ち切られてしまった。

みんながシリアスな雰囲気できている中この人だけは違っていた。

アル「あ~~~~もうっ。めんどくさいな~~~~！みんなでこう・・・ズバっとやれないのかい！？」

アルフだ。難しい話が嫌らしく苛々した感じで言った。

・・・ズバっとか・・・待てよ・・・これなら・・・いける・・・かな？

ユ「アルフ・・・これはそんなに単純な話じゃ・・・」

ユーノがアルフを宥め始める。僕はそれをみながら考えた作戦の成功率を出す。

・・・・・・30%・・・か。でもこれで・・・僕があれを・・・これで・・・59%・・・ギャンブルだね・・・。

な「結斗君なにか考え付いたの？」

そこで僕の隣にいたなのはが目敏く僕の変化に気づいて聞いてきた。

ク「何かっ！何かあるのか、結斗!？」

クロノを筆頭にみんなが僕を見だす。

結「まあ・・・考えついたにはついたんだけど・・・成功率59%だよ。」

ク「約60%・・・してその方法は？」

結「・・・その前にエイミイ、アルカンシエルって軌道上どこでも打てるよね？」

エイ「そりゃもちろんそうだけど・・・」

麗「ゆうまさかっ!？」

ク「おい!まさか!！」

麗華が気づいたようだ。クロノも理解したようで驚いた顔だ。

は「その方法ってどんなん？」

二人の他のメンバーを代表してはやてが聞いてくる。



結「みんなで一斉にあれを攻撃・・・」

闇を指差す。はっきり言つて分の悪いギャンブルだ。僕だったらレイズはしない・・・様子見する。

結「そしてコアの露出後軌道上へ転送。その後アルカンシエルで蒸発・・・つて感じかな？」

フェ「それほんとに成功できるの？」

ク「それだと成功率は30%くらいしかない・・・それを補つ秘策は？」

結「・・・僕がみんなのデバイスの技をコピーさせてもらつ。それと一緒に攻撃。これでやれば単純に二倍に威力が上がり、闇にも多くダメージを与えられると思う。」

麗「そんな事ができるの!? ゆづ」

結「まあね。幸い焰美と澁は全ての武器に変化できるからね。あとは創醒の書でやるよ・・・」

は「そつか創醒の書は全ての魔法の原点だから!」

結「そのとおり・・・」

麗「それ・・・ゆづに危険は、ないよね・・・」

麗華がそんなものがあるなら絶対にやらせないと瞳で睨みつける。

・・・。

結「もちろん！ないよ、変な事言わないでよ」

ク「じゃあそれで行こう！」

すずか side

私とアリサちゃんは今黒い塊を見えています。結斗君が去ってからすぐユーノ君とアルフさんも追いかけるように行ってしまい、私達二人だけがこの場にいます。

あの黒い塊の近くに結斗君やなのはちゃん達がいるんだよね。帰ってくるかと結斗君は言ってくれたけどやっぱり心配です。隣にいるアリサちゃんも私と同じようであれを見ているしかありません。

ア「光・・・収まった？」

消え入りそうなアリサちゃんの言葉。でも私には聞こえました。

す「海にまだ黒いのがあるけど・・・」

ア「あの黒いの、一体なんなの？」

私も聞きたい答えをアリサちゃんが聞いてきます。

す「・・・」

ア「まさかこんなのがずっと続いたりしないでしょうね」

す「大丈夫だと思うよ。結斗君がいるし・・・なのはちゃん達もいるから・・・」

ア「なのはとフェイト、麗華達がね・・・そうね・・・そんな気がするわ・・・まあそれよりも・・・あ～～～～も～～～～！～～！～～！訳わかんない～～！～～！楽しいクリスマスイブなのに！！」

アリサちゃんが壊れた！！！！

す「アリサちゃん落ち着いて～～！！」

結斗君はやく終わらせて元気な姿を見せて、じゃないとアリサちゃんがすごいことになっちゃうよ～～～～！！！！  
心の中で私は叫びました。

リ《なんともまあ・・・無茶な作戦だことで・・・》

エイ《計算上は実現可能というところがなんともまあ・・・》

二人とも苦笑いしながら言った。やっぱり無茶な作戦だよね・・・

エイ《クロノ君こっちのスタンバイOK！暴走臨界点まであと十分だよ！》

ク「了解。さて・・・実に個人の技能で結果が大きく左右されるギャンブル性の高いプランだが・・・まあやってみる価値はある。それに結斗が60パーセントと言っているんだ。大丈夫だろう・・・」

クロノが纏めて言う。みんな真剣に聞いている。

これからこの町で未来を迎えるために・・・

エイ《あれあれ・・・クロノ君いつの間にそんなに結斗君を信用したの・・・？》

・・・エイミイ・・・見事に破壊してくれたね・・・。

ク「エイミイ！そりゃあ結斗は天才だから期待したくもなるだろ！」

顔を真っ赤にしながら言うクロノ。

頼られるのは嬉しいけど僕にだって無理な事はあるよ・・・  
と言おうとしたのだが・・・

麗「そうよ！ゆうは天才よ！」

な「結斗君ならね」

フェ「そうだよ！！」

は「せや〜！」

アリ「うん！私とゆう君の前に敵なんていな〜い！！！」

焰「アリシア何を言っつ！そこは我とゆうじゃ！」

漣「焰美もなに言ってるんですか！私とゆう様です！」

あら〜・・・エイミイから見事に波紋のように広がっていく僕  
への期待。

結「あはは・・・みんな。はあ〜。はやて防衛プログラムはど  
んな感じになっているの？」

ついていけなかったのではやてに闇について聞いた。

は「えつとくバリアが魔力と物理の複合八層式なんや・・・」

八層・・・多いな。

フェ「バリア破壊後私、なのは、はやて、麗華、結斗のクインティブルブレイカーでコアを露出させて」

な「そしたらユーノ君たちの強制転送魔法でアースラの前に転送！」

麗「でアルカンシエルで蒸発と・・・。上手くいけばいいけどね」

な「麗華ちゃん何を言ってるの！」

フェ「そうだよ！」

は「ここなくなるんは嫌やる！がんばるんや！」

麗「分かってるわよ・・・」

麗華が弱気になったと思ったのか詰め寄り元気付けるのは達。その仲良しの光景をみて僕は顔が綻んだ。

・・・僕がいなかった間に麗華は人嫌いを少しは直したみたい。ちよつと淋しい気がするけど嬉しい。もうそろそろ甘えん坊の麗華とはさよならかな？

エイ《暴走開始まであと二分！！》

エイミイが僕らが闇の書を見つめていたところ声に覇気を出して言ってくれた。

は「わっ！？今気づいたけど結斗君とフェイトちゃん達傷だらけやん！シャマル！」

シャ「はい！！回復ですね、クラールヴィント本領発揮よ」

クラ《Yes!》

シャ「静かなる風よ癒しの恵みを運んで！」

シャマルがそういうと僕らを緑色の光に包まれた。

これは治癒魔法だね・・・

フェ「すごいです」

な「ありがとうございます、シャマルさん！」

二人も回復したようだ。麗華も万全かな？

僕は・・・やっぱりまだか・・・僕の魔力の半分くらいしか回復できていない・・・でもまあなんとかなるかな？

僕以外三人からのお礼の言葉に笑顔で答えるシャマル。  
さてと・・・

結「それじゃ焰美！瀨！二人ともいくよ！」

焰「うむ！」 瀨「はい！」

準備を始めよう。

僕は二人から差し出された手を握り唱える。

結「ツイン・・・セットアップ・・・」

ピカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

空間を満たす。色は赫と蒼。右手に焰色の炎が左手には蒼炎の炎が巻かれる。熱くはない。むしろ心地いい。

やがて二つの炎は僕の胸の前で一つとなり巨大化して僕を包んだ。炎は互いに交じり合う。しかし決して混ざらない。

やがて炎は小さくしぼんでいき、背中の腰の部分に赫と蒼の刀焰龍と蒼龍。太ももの外側のホルスターには赫と蒼の銃。

クリームゾンティアーズとブルーティアーズが装填されている。B」は銀色。髪は黒髪。

な「ほえ〜いつみてもすごいよね。結斗君のツインセットアップって・・・」

フェ「うんうん・・・」

は「／／／／（はっっ！〜！かっ！）おすぎる〜！」

麗「やっぱりゆうは最高」



どの辺が最高かは分からないが一応無視しておこう。  
次はユニゾン。

結「アリシア・・・準備はいい？」

アリ「うん、いいよ。この町をみんなを助けよう」

結「うん・・・」

アリシアの両手を僕の手で握り、

結・アリ「《ユニゾン・イン！》」

僕の中にアリシアが入ってくる。やがて僕の髪が漆黒の黒髪から流れる美しい金髪へと変わった。

特に異常は・・・ない。

結《アリシアこっちはOK。そっちは？》

アリ《こっちもいいよ！》

これで僕のセットアップは終了した。みんなが僕の変貌を見ていた。今僕はみんなのことがなぜ分かる・・・。

誰・・・？と・・・。

もう言わないよ！僕はこの姿なんだ！

は「結斗君……」

結「な……何？はやて……」

はやてが一番に声を掛けてくれた。

嬉しい気持ちで振り向くが……

は「結斗君……生まれてくる性別間違えてるで……」

はやての言葉で僕のガラスのハートは粉々に。  
塵一切無く。細切れに分解されたのであった。

ちなみにはやてがこの事を言った時みんな頷いていた。

ぐすっ……

Next to TALE40!!!!!!



TALE39 みんなが一つに！（後書き）

祝PV224、443アクセス。イエ〜イ

アリ「わ〜い。パチパチ〜」

今回はアリシアちゃんですか。

アリ「はい、みんな忙しいようであちやいました。あのSKYさん

何でしょう？

アリ「今回出てきたゆう君のツインセットアップあれってどうゆう  
仕組みなの？」

あ〜なるほど。お答えしましょう！私の勝手な想像で作りました！  
これはですね焰美ちゃんと澪ちゃんがいて出来るセットアップです。  
なぜこれができるのかと言うと、焰美ちゃんと澪ちゃんが姉妹機い  
や双子機のような感じに作られたからです。

アリ「なるほど・・・メリットは？それとデメリットは？」

メリットは火力が上がる。これはもちろんですね。ちなみに一機の  
時の五倍の設定です。

あとは精密さ。本来結斗君は接近戦を好んでやりますが遠距離攻撃  
つまり集束砲撃やバインドなどの補助魔法を使える距離が大幅にア  
ップです。

アリ「チートだね・・・」

はいチート万歳！

あとデメリットですが、これはT A L E 11で結斗君が倒れたために加減が難しく魔力運効率が悪いとそれだけ多く無駄な魔力を使ってしまうって

ぶっ倒れるというわけです。

アリ「なるほど。大きすぎる力には大きな代償というわけですね」

そのとおり！おっともうそろそろお別れです。みなさん今回で春休みの投稿は終了しそうです。

私も頑張つてあと一話書けるか書けないかの瀬戸際です。のでよろしくです。

みなさん残りの春休みが良い日であることを祈っております。

ではでは

アリ「それじゃあまた今度！バイバ~~~~イ」

TALE 40 総攻撃（前書き）

が・・・頑張った・・・。

人間やればできるものですね・・・

およそ半日投稿・・・。

みんなの休みの間の娯楽になればいいかな？

それでは・・・

TALE 40 総攻撃

結斗 side

ク「始まる……」

鳴動する闇。それは卵。大きな邪悪な鳥を外敵から守る殻。そしてそれが今割れようとしている。

結「創醒の書アクセス開始！」

僕の掌に、純白の書物が出現し、光り輝く。

は「夜天の魔導書を呪われた闇の書と言わせた闇の書の……闇」

アリ「アクセス完了！ゆう君！」





な「ヴィータちゃんもね！」

結「分かってるよ」

ヴィータが僕らに言ってくる。

ヴィ「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵Graf Eisen!!」

アイゼンを後ろに振りかぶり高らかに宣言するヴィータ。

アイ>Gigantform<

カートリッジが一個排出されアイゼンが角柱状のハンマーヘッドに変化する。

結「創醒の書とシステム連結、焰美！」

焰>了解じゃ!Gigantform!!<

創醒の書から焰美にデータが送られ、焰龍がアイゼンと色違いのハンマーヘッドとなる。

焰美単体でも変化は出来るが創醒の書があると限りなくオリジナルに近い性能にする事ができる。

僕とヴィータは色違いの武器を手にした。

同じモーシヨンで振りかぶる。

結・ヴィ「轟天・・・爆碎！Gigant schlag!!!」

巨大な焰色のハンマーと金色のハンマーが闇の書のバリアに当たり、一瞬の抵抗があったが僕達のハンマーは容赦なく二層のバリアを打ち破った。

さて次は・・・

結「いくよ！なのは！」

な「うん！高町なのはとRaising Heart Exelionいきます！」

レイ>load Cartridge.<

結「瀨！」

瀨>OKです！ゆう様！<

瀨のデバイスブルーティアーズが光り輝く。そしてレイジングハートは色違いのものが作られる。

金色の外装で中央に紅く光るレイジングハートのコア。それに対し瀨は青みがかった銀色の外装で蒼く光るコア。僕の両手にいつもとは違った瀨の重量感。

バサアアアアアアアアア



シ「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃、連結刃に続くもう一つの姿……」

レヴァ>B o g g e n f o r m<

シグナムが詩を歌うように唱え、刃が鈍く光りレヴァンティンから一つカートリッジが排出された。

僕は蒼龍を取り出し、変化させる。

蒼い刀身がみるみる変わり弓となる。

漣>B o g g e n f o r m<

結・シ「翔けよ！隼！」

漣・レヴァ>>S t u r m f a l k e n<<

一対の赤と蒼の矢が閃光となりバリアを穿った。

六層目破壊！

フェ「結斗！」

結「うん！これでバリアは最後だ！」

フェイトに答え、気合を入れなおす。  
フェイトも大剣を構える。

フェー、フェイト・テスタロッサ。Bardiche Zanber  
いきます！はあっ！！」

フェイトが触手を一掃した。  
そこでアリシアが言ってくる。

アリ「ゆう君！私の魔力を使って！フェイトと一緒に戦いたいの！」

結「分かった！」

僕はアリシアから魔力を貰い、胸に手を当てる。するとそこから翠色の光が溢れ手に何かを握る感触が現れる。  
僕はそれを思いっきり引き抜く。

そこには刀身が翠色のバルディッシュのザンバーフォームがあった。

アリ「私の魔力で作った剣だよ。」

なんか胸から抜けたよ……。  
そんなことを思いながら僕は剣をフェイトと同じように高く上げる。

ズシャー—————

バルディッシュには紫色の雷、僕の剣には赤色の雷が纏われる。

結・アリ・フェ《「「撃ち抜け、雷神！」「」》

バル>Jet Zamber<

同時に巨大な刃で切りかかった。またバリアに一瞬阻まれたがバタ—のように簡単に切れた。フェイトが右から僕は左からやったため闇の書にクロスの痕が残った。

バリア破壊成功！

シャ「はやてちゃん！」

次ははやてか。

はやては右手に金色の杖を左手に夜天の書を携えてこれから行う魔法を唱え始めた。

は「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。

石化の槍、ミストルティン！」

上空にベルカ式の魔方阵が展開され、合計六つの白い光がバリアの無い、無防備な闇の書に刺さりその部分から闇の書は石化していった。

やがて体中を石化される闇の書。

グシャアアアアアアアアアアアアアアアアン

おえっ・・・気持悪っ。

アル「うわっ！うわああああ・・・」

シャ「なんだが凄い事に・・・」

シャマルとアルフ他のメンバーも闇の書が再生をして気持悪がってる。

エイ《やっぱり並の攻撃じゃ、攻撃した途端再生されちゃう！》

ク「だが・・・攻撃は通ってる！プラン変更はなしだ！いくぞDurandal！」

デュ>OK!!Boss!!<

ク「悠久なる凍土 凍てつく棺のうちにて 永遠の眠りを与えよ・  
」

海上が凍り始め、それは目標闇の書に向かう。

ク「凍てつけ!!」

デュ>Eternal Coffin<

エターナルコフィンが炸裂し、闇の書が凍る。

シャ「麗華ちゃん!結斗君!!」

麗・結「了解!!」

麗「白銀麗華と鏡月双舞いくわよ!」

鏡>Load Cartridge<

チュドン、チュドン、チュドン。

カートリッジが三発排出され、麗華は漆黒の双銃を上へと向けた。  
そこには銀色の魔方陣。

麗「天空より、降り注げ。光の剣!」





一気に双刀を逆手で抜き放ち、横一線。双刀を正常に持ち替え縦一線。合計四つの衝撃波が飛び麗華の攻撃から再生を始めていた闇の書を切り刻む。焰龍の攻撃は肉を絶ち、骨を焼ききる。蒼龍の攻撃は細胞を破壊し、再生できなくする。が……

麗「っ！！あれくらってもまだ再生してるわよ！！！」

結「仕方がない！なのは、フェイト、はやて、麗華！最後いくよ！！！」

麗「ええ」

な・フェ・は「うん！！！！」

未だ再生を続ける闇の書に最後の攻撃を仕掛ける。

な「全力全開！スターライトー」

フェ「雷光一閃！プラズマザンバー」

は「ごめんな……おやすみな……。響け終焉の笛、ラグナロク！」



シャ「本体コア・・・露出・・・捕まえ・・・たっ!!!」

シャマルが旅の鏡で闇の書の内部を見る。その中には暗く光るものがあつた。

ユ「長距離転送!」

アル「目標軌道上!」

シャ・ユ・アル「転送!」

そして眩い光とともにそれは転送された。

――地球軌道上アースラー――

リンデイ side

オペ「コアの転送来ます！転送されながら生体部品を修復。凄い早さです！」

オペレーターの声が私の耳に入ってくる。

エイ「アルカンシエル、バレル展開！」

ピピピピピピピピ

エイミイが凄い速さで指を動かし、準備をする。

アルカンシエルの前に三つの巨大な魔方陣が展開された。

リ「ファイアリングロックシステム・オープン」

私の前に直径二十センチ程の立方体が出現する。

リ「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

クル「了解！！」

やがてアースラの正面に闇の書が現れた……

あなたこれで終わるわ。あなたの屈辱はらせるわ……

私の手で！

リ「アルカンシェル・・・発射！」

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

着弾・・・。眩い光を発しながらそれは消滅した。  
終わった・・・。

エイ「効果空間内完全消滅・・・再生反応あり>Emergency!!!<っ！この艦の背後から転移反応！」

私を含めたみんなが安心しきった時に艦がエマージェンシーを告げた。

リ「何ですって！！！！」

まさか！

リ「エイミイ！モニター出して！！！」

エイ「はっはい！！！！！」

パッ

私の予想は的中してしまった。

そこにいたのは闇の書の防衛プログラム。

エイ「そんな！どうして！！」

エイミイが叫ぶ。

いろいろ理由が思い浮かぶけど今はそんな場合じゃない！

リ「そんなことよりも今はあれをなんとかしなくちゃいけないわ！  
アルカンシエル再チャージ！急いで！！！」

オペ「了解！」

しかし……

エイ「艦長！闇の書の防衛プログラムこの艦に向かってきます！！！」







TABLE 40 総攻撃（後書き）

連続投稿・・・

結「よく頑張ったね・・・」

半日投稿です。お馴染みの全員攻撃です。

結「でも最後のはどうするの？」

安心してください！ってこれネタバレ！！！！

結「あと少しだったのに・・・」

危なかった・・・。この小説の中で一番くろいの結斗君じゃないか？

結「なんか言った？」

あゝいや何も！それよりも報告があるんだ。

結「ん？なに？」

えゝおほん。この度自分はこの小説を読み返しまして・・・それで  
改稿し始めました。

結「ほうほう・・・」

それでよく書けているかはともかく再び最初から見ただけだと  
嬉しいです。

あつ！あと今改稿しているのは prologue と TALE 2 です。  
また改稿していけたらいいなあとおもっています。  
そのときは読んでください・・・

結「なるほど・・・それで次回は・・・」

あ〜うんそれは・・・  
つてまた!?

結「また気づかれちゃった・・・」

く、くろいな〜。

じゃあまた次回に。ではでは〜

結「またね〜〜」

T A L E 4 1 もう一つの力(前書き)

P V 2 4 3 , 2 7 7 アクセス

突破！嬉しいよ。

今回も楽しんでもらえたらなあ・・・

ではどじょう！

## T A L E 4 1 もう一つの力

前回までのあらすじ――

闇の書の防衛プログラムから無事に自身を切り離して、結斗達に再会を果たす事ができたはやてとヴォルケンリッター。

闇の書の防衛プログラムを破壊するには時空潜行艦アースラのアルカンシエルで蒸発させようということになった。

しかしここ海鳴市の海上で発動するとはやての家はもちろんなのはの家も無くなってしまう。それを嫌がったなのは達は新たな策を考え付いた。

それは結斗やなのは達この場にいる全員でプログラムに攻撃。八層のバリアを破壊。その後本体へと直接ダメージを与えてコアの露出後、ユーノ、アルフ、シヤマルの転送で軌道上のアースラにまで転送し、アルカンシエルを発射。蒸発させるというギャンブル性の高い方法だった。

しかし結斗達はこの成功率約60%の方法を見事にやってのけ、転送を果たした。後はアルカンシエルで蒸発するのみであった。

アースラ艦長リンディ・ハラウンも亡き夫への無念の念を込め、

アルカンシエルの発射キーを回した。そして見事着弾を目視し、艦内が安堵の息が立ち込めた時アースラオペレーター

エイミイ・リミアッタの声が艦に響く。

艦の後方に転送反応！その叫び声にみなが振り返り、モニターに注目した。そこには先にアルカンシエルで蒸発させた闇の書の防衛プログラムが映っていた。

リンディはすぐさま体勢を立て直そうとするがそれに迫る闇の書。

リンディが様々な思いを描く中、彼女は目をぎゅっと閉じるしか出来なかった。

リンディ side

私は……死んだのかしら？でもそれならばなぜ……未だ艦の音が聞こえるの？

ピッ・・・ピッ・・・ピッ。

規則正しくなる艦の索敵レーダー。

ク「母さん！！気づいてくださいっ、母さん！」

息子の声が聞こえたため私はぎゅっと閉じた瞼を開けた。  
目の前にはアースラを飲み込もうとする闇の書の防衛プログラム。  
しかし・・・それには・・・

何百本の赫あかく輝く光の剣と蒼あおく輝く光の剣、翠輝みどりきをもつ光の剣が闇の書へと深く刺さっていた。

剣の長さはおよそ50メートルくらいだろうか？それが闇の書を中心に全方位から突き刺していた。

それは肉を絶つ剣、それは精神を砕く剣、それは存在を否定する剣だった。しかし私はそれを見て思った。

なんて美しく、神々しい剣なのだろう・・・と。

剣達は突きたてた闇の書の闇を押さえ込むほどの強さがあった。

結「何をしているんですっ！！早くアルカンシエルの再チャージを！！」

結斗君の叱咤に我に帰り、クルーにアルカンシエルの再チャージを命じた。

どうやら結斗君が何かをしてくれたらしいわね。全くあの子には助けられてばかりね・・・



リンディさんやエイミー達に危険が迫ってる！  
一瞬でそれは理解する事ができた僕は……

咄嗟にさつき麗がやっていたシャイニングブレードを転移場所を軌道上の闇の書へと指定し、ありったけの魔力を注ぎ込んだ翠色のスフィアとブルーティアーズとクリムゾンティアーズを転移魔方陣に打ち込む。

ク「母さん！！母さん！！」

結「何をしているんですっ！！早くアルカンシエルの再チャージを！！」

隣でクロノが艦長とは呼ばずに言った。咄嗟に出たのだろうね。普段からそういつてるみたいだし。  
リンディさんも応答し始めたらしいから成功したっばい。  
よかった、間に合って。

シ「どう・・・なつたんだ？」

ヴィ「わからねーよ！いきなり結斗は撃ち出すし・・・」

シャ「この感じ・・・闇の書はまだ生きてるわ・・・」

ザ「ああ、アースラに寄生しようとしたのだろう。だが・・・止まった・・・」

麗「ゆうまさかつ！」

一番最初に技を使っていた麗華が僕に聞いてくる。それにつられて側にいたみんなも僕を見だした。

な「結斗君・・・何をしたの？」

フェ「結斗・・・」

なのはとフェイトそれにはやて、ヴォルケンリッターのみんなも訳が分からないと言った感じに見てくる。

結「弾を転移させたんだ・・・。これなら間に合うと思って・・・」

焰「無理をしすぎじゃ！<

瀨「ゆう様・・・<

焰美と瀨の心配する声を聞きながらも、  
あまりにも多くの魔力を一気に使ったため眩暈を起こす。なんとか  
みんなに分かられないようにしつつ僕は続けた。

結「でもここままだよ。僕が出来るのは。おそらく保って三分程度。  
それ以上は無理だ・・・」

ユー「と、とりあえず助かったの？」

麗「馬鹿ユーノ！三分しか持たないってゆうが言ったでしょ！後三分で私達がなんとかしないとまたアースラはピンチよ！」

な・フェ・は「そんなっ！！/なんやて！！」

麗の言葉に驚きだす三人。

ク「何とか助けられないのかっ！？最チャージまであと五分かかる  
ようなんだ。それまでアースラは後退しか出来ない」

焦りだすクロノ。もちろん諦めはしない。クロノの母さん、エイミ  
イ、アースラクルーは助ける！

みんなも必死に考える。なにか、手はないかと。

三十秒が経過し、クロノが絶望の顔になりかけた時、僕は思いつく。

結「ひとつだけある……」

ク「なんだっ！？それは！僕も協力するだから頼むっ！！」

すがりつくクロノそれはいつもの冷静沈着なクロノではなく、母と友人、これまで一緒に戦ってきた戦友たちを心配する男の子だった。クロノに落ち着くように言い、僕は作戦を言う。

結「これは……さっきの僕がやったのと同じ方法だよ。ただし僕は攻撃できない。もう魔力が無くてこれ以上は……それで今度はなのは、フェイト、麗華に攻撃をしてもらうよ」

な・フェ・麗「私達に？」

結「うん、ただ一つ注意。闇の書はさっき僕達のブレイカーを受けただ。だからもう効かないはずだ。無論少しはきくと思うけど足止めになるとは思えない。だから違う技じゃないといけない」

麗「でも私達あれより威力高い技なんて知らないわよ。それに私達も魔力残り少ないし……」

な・フェ「うん……」

麗の返答に頷く二人、そりゃそうだろうね。

ク「そ、そんな・・・」

頂垂れるクロノ。

結「クロノちょっと時期焦燥過ぎるよ。僕がそんな事考え付かないと思ってるの？」

ク「!!」

顔を上げ僕を見上げるクロノ。

結「三人とも僕が作ったカートリッジシステム使ってるよね。」

な「うん・・・美緒さんにつけて貰ったよ」

母さんもちゃんとやっておいてくれたんだ・・・

結「ならば話しは簡単だ。三人ともリラックスして」

三人がいぶかしむがいまは気にしてられない。あと二分。

結「我白銀結斗が汝らの封印を解かん。契約の元新たなる銀の剣を  
捧げよ、Raising Heart Exelion、Bard  
iche Assault、鏡月双舞」

レイ・バル・鏡>Yes, Meister!!! Silver  
Form Ignition!!!!!!<

三機の掛け声とともになのは、フェイト、麗華が光に包まれた。

キイイイイイイイイイイ

やがて光が晴れ、三人が姿を現す。どこも変わっていない。

は「失敗かいな？」

はやてがそれに言葉を表す。

結「よく見てはやて。三人のデバイスコアが銀色になってる」

は「ほんまや！それで三人どうなん？」

な「え〜と・・・魔力は完全に回復したかな。あとは変化無いの」

フェ「うん・・・」

麗「どうなってるの？ゆう・・・」

三人もあまり変化が無いため不安に聞いてきた。

結「三人とも・・・さっきやった自分のブレイカーの魔法を思い出してみても・・・」

な・フェ・麗「うん・・・っ!？」



リンデイス ide

エイ「艦の後方に再び転移反応確認！」

今度は一体なんなの！？アースラを後退させ、闇の書との距離は稼げたけどこれだけの距離だったら私たちもアルカンシエルで消滅してしまう。

だから今も距離を離している最中なの。そんな時にまた転移反応。今度は一体……

そうおもいながら正面を見るとそこにはアースラと闇の書の間には巨大な虹色の魔方陣が展開されていて次の瞬間

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ



三色の身に覚えのある巨大砲撃が闇の書に殺到し、すさまじい音を立てている。砲撃は闇の書を徐々に押し出し始めた。これは一体……

ク「艦長！」

リ「クロノ！これは一体？」

通信でかかってきた息子に聞く。

ク「これは結斗の案です。彼が転移魔法を出し、それになのは、フ  
エイト、麗華がブレイカーをだしているんです！」

リ「なんですって!!！」

驚いた。なんて無茶を！

ク「それよりも後どれくらいかかりますか？」

エ「あと……三分！」

クロノに答えるエイミィ。

ク「後三分……」

エ「あつ!!！」

そこでエイミイの声が上がった。私は彼女の視線の先をみる。どん  
どん虹色の魔方陣が小さくなっていく。

結斗 side

くっ……やっぱり持たなかった！今も展開を続けているが魔方陣  
は小さくなるばかり。

結「くっ……もう……魔力が……」

アリ「もう無理だよ！ゆう君！私たちも魔力が残り一割切った！」

僕はとっくに魔力が尽きていた。

挙げていた両手が段々と重くなり、地に下がっていきこうとする

は「結斗君頑張るんやー！」

僕の右手に添えられる温かい感触。はやての左手。

ヴィ「そうだぜ！お前は私達に楽しい未来をくれるんだろ！」

左手にはヴィータの右手。

シ「そうだ、ここで諦めるな！」

右肩にシグナム。

ザ「主やみなのため頑張ってくれ！」

左肩にザフィーラ。

ク「みんなを助けてくれ！」

背中にクロノ。

みんなが僕を支えてくれる。

ユ「転送陣を大きくするよ！」

アル「サポートの意地見せるんだよ！」

シャ「はいつ！！！」

ユノ、アルフ、シャマルが陣の負担を少しかわってくれた。力が湧いてくる。魔力じゃない（……………）力が。

結「……………三人ともまだいけるよね？」

アリ《もちろん！ゆう君がやるなら私も！》

焰＞もちろんじゃ！<

澁＞はい、どこまでもゆう様と一緒にです！<

さつきとは違い、頼もしい三人の声も聞こえ僕はまた力を発揮する。  
三人もみんなから力をもらったんだろう。  
再び拡大する魔方陣。それは最初よりも大きい気がした。  
そしてそれが続き・・・

エイ《アルカンシエル発射準備完了！カウント5・・・4》

アルカンシエルの発射シークエンスに突入した。  
僕もみんなももうギリギリだった。

麗・な・フェ「くっくっくっく」

3・・・2・・・

結達「くっくっくっくっくっくっく」

1・・・

リ「アルカンシエル発射！」

バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

閃光が闇の書を貫いた。そして歪曲化が始まり、それに引き込まれ闇の書の防衛プログラムはこの世から跡形も無く葬り去られた。

エイ《第二射命中を確認。効果空間内異常なし。再生反応ありません！みんなやったー！ー！ー！！》

通信の向こうからエイミイを含めたアースラー同が喜び叫んでいるのがわかった。

結「ふう〜。三人ともお疲れ様・・・」

それを聞きながら僕は一番頑張った疲れした表情をしたのは、フェイト、麗華にねぎらいの言葉を言った。

な「結斗君もお疲れ様・・・」

フェ「結斗大丈夫？」

僕の方を向きながら心配そうに聞いてくるフェイト。

結「大丈夫さ……」

ガクッ

まずっ！

フェ「ゆうっ!?!」

パシッ

倒れそうだったところを麗華に抱きしめられてなんとかたおれずに済んだ。

麗「もっっ!この中で一番無理してるのゆうなんだよ!」

結「麗華ありがと。でも(は)は(や)て(っ)?!?!は(や)て(っ)?!」

言葉を続けようとしたらヴィータが叫びにも似た声が発せられ振り向く。そこには目を瞑ったは(や)て(っ)が横たわっていた。

結「麗華、僕を(は)や(て)の(と)こ(ろ)に!」

麗「うん!」

麗に支えてもらいながら僕は(は)や(て)に近づく。

ヴィ「結斗!は(や)て(っ)!は(や)て(っ)!」

すがりついてくるヴィータ。

結「落ち着いて、シヤマル。はやての状態をチェックして」

シヤ「あっ！はい！………終わりました」

シ「どうなんだ主は？」

いつにもなくシグナムも焦っている様子。

シヤ「大丈夫。ただ疲れて眠っているだけよ」

ヴィ「じゃはやては大丈夫なんだな？」

シヤ「ええ少し眠っていればいいわ・・・」

その言葉にみんなが安堵する。

アル「とりあえずアースラに行かないかい？」

ク「そうだな、結斗も大分疲れているみたいだし。」

僕もくたくただよ……。

結「うん、そうしてくれると助かるかな？」

ク「よし、じゃあアースラに戻るよ」

僕らはとりあえず海鳴市海上からアースラに帰った。

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
4  
2  
!!  
!!  
!!



T A L E 4 1 もう一つの力(後書き)

今回はちょっとお休みです。

次回会いましょう。

では失礼します。

TABLE 2 罪を任せていいのか？（前書き）

最近タイトルのつけ方がピンとこないのだからその話で言っていることをタイトルにしようかな？おもい書きました。

## T A L E 4 2 罪を任せていいの catt ?

アースラ艦内――治療室

リインフォーサイド

先の戦闘後私達はアースラへと帰還し、主と結斗は治療のために休んでおられる。

シヤマルの診断に間違いはなく、ただの魔力の使いすぎと診断された主。

原因は急な魔力消費で体に反動が起こり、倒れてしまった。

そしてこれは素人の魔導師、特に強大な魔力を持つ者がよくなる典型的な事故らしい。

初めほどの程度自分が魔力を持っているのか考慮がしにくいそのため余計な魔力を使ってしまい軽い魔力枯渇となるようだ、主はこれだった。

問題は結斗の方だった。彼は本来その歳では有り得ないほどの魔力を有している。自分を律し、なかつ魔力運効率も高い。そのためそ

の彼がどうして重度の魔力枯渇となっているのか理由は定かではない。

とアースラの医師は言っていた。

現在は眠っている二人。苦しそうな表情ではなく、主は安らかに眠っていたし、結斗も厄介ごとが減ったからなのか枕高くして眠っている。

いや、この場合枕高くして眠ると言う表現があってるのかは分からないがな……しかし……

リイ「詮無き事か……」

主が眠るベッドの隣で一人愚痴る。

シン、ピッ……ピッ……

部屋には誰もいなく、私と主のみだがその空気を刻むように主に接続されている医療機器が集会的な音をはっする音が部屋の音だ。

結斗は隣の部屋だ。あと小さな勇者達はここの艦長のところに行っている。シグナムらも同伴していった。

私も行くかと思ったが主が心配で残ったのだ。

それに最後の時間なのだ。主といられるのは……。

リイ「私は一人でいかなばならない。犯した罪をこの命で償わなければ。それに……」

一人でいけば悲しむ人はいないだろう……。

そんな事を思いながらこの気持は何だろう……  
穏やかだった。死ぬのが怖くない……。いや違うな。主だ。  
私の最後の主がこの幼い少女だったからこそ、このような気持でいられるのだ。最後の光を魅せてくれた八神はやてだったために。  
この人の人生の糧となるから幸せなのだろう……。  
無理やり自分を納得させ、この気分のいい状態を保とうと思ったがそれは叶わなかった。

ウィーーーーーン

どれ程考えていたのか分からないが扉の開く音で私は思考を中断した。  
入ってきたのはヴォルケンリッターのみんな。その顔は難しい顔だった。

シ「どうだ主は？」

その顔を気づかれないようにと思ったのかシグナムが努めて聞いてくる。意図は読めたが乗ってやるのがいいと思って素直に答える。

リイ「見てのとおりぐっすり眠っておられる。」

シ「そうか……。ならば我らが思い残す事はもうないな……。」

シャ「私達は消えなきゃいけないのね……」

シャマルがポツリともらす言葉。

……なるほど。主と離れねばならないからこのような顔を四人ともしていたのか。

みんながさつきから悲しい顔をしている理由を理解して私は納得した。

リイ「いいや、いくのは私だけだ……」

シ・ヴィ・シャ・ザ「!？」

ヴィ「どっ、どうゆうことだよっ!? 私達が消えなきゃ闇の書が再生されちまうんじゃないか？」

驚いたみんなの中でヴィータが最初に尋ねる。

リイ「本来ならその通りだが……いや、これは彼女達もともに話したほうがいいだろう……」

扉の向こう側に向かって言う。

ウィーーン

麗「気づいてたんだ……」

艶やかな黒髪。歳相応には決して見えない落ち着いた態度。

冷静な判断を備えた白銀麗華が部屋に入ってくる。

麗華に続いて高町なのは、フェイト・テストロッサ、アリシア・テストロッサなどの結斗以外のものが入ってくる。そこにはクロノの姿もある。

私達の監視か……。

な「あのっ！リインフォースさんだけが消えるってどうゆうことですか？」

リイ「言葉通りだ。主が正式なマスターとなった時に守護騎士プログラムを闇の書……いや今は違うな。夜天の魔導書から切り離しておいた。」

私にヴィータと同じ質問を尋ねる高町に答える。

フェ「じゃあシグナム達はもうプログラムじゃないんですか？」

シグナムらを見ながら聞いてくるテストロッサ。

リイ「ああ、いま烈火の将や鉄槌の騎士らは人だ。そのかわり寿命ができ、怪我也人並みの回復力となった」

付け足して言う。

リイ「だから私だけが消えればいいのだ……」

主の寝顔を見ながら言う。他のみんなも見守り、しいんとした空気が部屋を包む。しかしその沈黙は破られる。

は「今の話し・・・ほんとうなん・・・?」

瞼を閉じ、静かに言う主。主が起きていることに私は気づいていた。でも敢えて私は聞かせた。

主なら分かってくれると思ったから。

送り出してくれると思ったから。

だから聞かせた。

リイ「はい、事実です。私さえ消えれば夜天の書が再生する事はありません」

は「なんでっ!?なんでそんな事言うんやっ!?」

声を大きくして聞いてくる主。

リイ「いずれは防御プログラムは再生してしまうのです。だから今、プログラムのない今に消えねばならないのです。」

は「そんな私が抑える！押さえてみせるからっ!!」

瞳に涙を溜め、叫ばれ私の決意は一瞬揺らぐ。

もう少しくらい主といていいのではないかと・・・

だが心の中で頭を振り、甘い誘惑を打ち消す。

リイ「駄々をこねないで下さい主。私が消えても烈火の將たちが主をお守りし続けます。私さえ消えればみなが幸せになれるのです・・・

」

は「そんなんっ！駄目や！リインフォースがおらんもん!」



腕を掴まれる。その力は弱く、すぐに振り解けるものだった。だが私にはこの力が重く感じた。私は心を鬼にして席を立つ。そのときに腕を掴む主の手は離れた。ここにいるのが堪えられなくて背を向ける。

は「リインフォース!!」

主が後ろで叫ぶ。みんなは扉までの道を開けてくれた。

だがその表情は悔しみの表情。

「ああ・・・最後にこのように思ってくれる者たちによって救われた私は世界一幸せな魔導書だな。そう思いながら私は扉に向かう。」

だが私が立つよりも先に扉が開かれた。

な・フェ・麗・アリ「結斗君! / 結斗! / ゆう! / ゆう君!」

四人の驚きの声上がるがそれに結斗は答えない。

結「どこに行こうとしているの・・・リインフォース」

リイ「旅立ちだ・・・私は消えねばならない・・・」

結「・・・」

リイ「私が消えればみなが幸せになり、救われるのだ。だからそこを退いてくれ……」

答えを聞かずにわたしは結斗の隣を過ぎる。

が出来なかった。

結斗が扉の側面にもたれながら手で進路を塞いだのだ。

結「みんなが幸せになるだって？」

静かに言われる言葉に私は言い知れぬ恐怖を感じる。これを聞くとわたしの決意は鈍ってしまう。

そんな気がしたが足が動かなかった。だが声を出せた。

リイ「そうだ。それに私が生きていていいわけないだろう……この手に何千と殺した過去を持つ私が……」

結「……るな」

リイ「……？」

聞こえない。何を言ったのだ……？

結「ふざけるなっ！！！！！」

部屋に響く声。それは怒気。

結「幸せにだって？じゃあどうしてはやてが泣いているんだっ！！  
？どうしてお前も悲しそうなんだっ！！？」

リイ「……………」

結「おかしいだろ！泣く幸せなんてあるわけないだろっ！！」

リイ「っ！…………だが！だがっ！人を殺し続けたのだ！この手で、  
例え本意で無いせよ裁かれねばならないのだ！！」

なんとか反抗する。が結斗は意に返さず言い続ける。

結「じゃあ聞くけど君の命一つと殺してきた人の命が同等だとそう  
思うの？」

リイ「それはっ……………」

確かにそうだが言ったことはそうゆうことだ。私の命一つと殺し  
てきた人の命が等価だと…………否だ。

結「言わせて貰うけど、リインフォース…君は殺してきた事実か  
ら逃げようとしているだけだ。その事実を直視しなくなって、死へ  
と逃げようとしているだけだ。

それに例え君が死んでも今回の事件や今まで事件ではやてに恨みを

持つ者が多くなった。なつてしまった・・・その罪をはやてやヴ  
イータたちだけに押し付けるの？」

言い返せない私に辛辣な言葉を言われた。  
その事で私の理性が切れてしまった。

リィ「じゃあどうすればいいのだっ！！偉そうな事を言っておいて  
お前は私に何をしろというのだっ！？どうにか出来そうも無いのに  
偉そうな事を言うな！！！」

私は消える以外の選択肢は無いのだ！」

半ば逆切れみたいな感じに言ってしまう。

そんな私に近づく者がいた・・・

その人アリシアはズンズンと私の前に無言で立ち、

パアンッ

右手で平手打ちされた。睨みつける。がアリシアの顔をみると一気  
に消沈してしまう。

アリ「……ゆう君……ゆう君がどれ程頑張っていたと思うの……。ずっとゆう君はあなたやはやて達を助けるためにっ！それなのに！そんなの……ゆう君がかわいそうだよ……」

怒りではない。主に対する慈しみでこの子は耐え切れなくて私を張ったのだ。

この子は本当に結斗のことが好きなのだな……。  
頬が赤くなるのを理解しながらも冷静に観察し、アリシアの結斗に対する気持に感服したのであった

結「ありがとアリシア……」

そこでアリシアは背後から結斗から抱きしめられて嬉しそうに頷き自分の手を結斗の手に重ねた。

やがてアリシアを開放した結斗が私に語りだした。

結「さっきの答えだけど、僕じゃ出せないよ。その答えは君が出すんだ。リンフォースがしたいことを願いを！僕達も協力してそれが叶うようにする……」

リイ「……」

その言葉に私の決意はまた揺れ動いた。この少年なら私を助けてくれるのではないか、願いを叶えてくれるのではないかと……。

リイ「……たい」

結「なに？聞こえないよ！」

リイ「生きたい！主らと一緒に！」

言ってしまった。今の私の禁忌の願いを……

結「その願い叶えるよ……」

その時の結斗は私が見惚れるほどの美しい笑顔だった。

アースラー―訓練室―

結斗 side

僕の前にはリインフォースがいる。彼女の願いを叶える為だ。治療室では何が起こるか分からないので訓練室に移動する。背後には焰美や澁、なのはや麗たち。

クロノやリンディさんたちもいる。背後からの多くの視線を感じながら僕は作業を開始した。

結「やる前に一つ・・・」

リイ「なんだ？」

結「やる事は極めて簡単。僕の創醒の書の中にあつた夜天の魔導書の初期プログラムを移動させるだけ。ただ・・・」

リイ「ただ・・・？」

結「ユニゾンが使えなくなる。元々夜天の書は魔法の蒐集だけのものでユニゾンは防御プログラムが主を乗っ取るために後付されたものなんだ。だから・・・」

リイ「初期のプログラムには含まれないか・・・」

結「そう・・・だから・・・」

はやての方に向く。

は「リインフォースが生きられるんやったらお願いや・・・」

はやては笑顔で僕に告げた。

結「分かったよ、じゃあいくよリインフォース！」

リイ「ああ・・・」

アクセス開始！……サーチ、夜天の魔導書……。確認……  
ロード……。コンプリート。

よしデータを実物化。

僕の手には青い球体が出現する。

結「リインフォースこれに手をかざして……」

白く長い手がかざされ球体の表面に数字が浮かび上がる。

やがてそれはリインフォースに取り込まれていった。

何十秒か経過して球体が無くなった。

リイ「データを確認。初期プログラムと断定。……。ロード完了。……ふう」

事務的な声から安堵の溜息がリインフォースからして後ろにいたみんなの肩の荷も下がった。

ク「終わったのか？」

そこで切り込み隊長クロノが声を掛けてくる。

結「うん、終わったよ。ご覧の通り、リインフォースは無事。再生機能も消えた」

ク「そうか……」



は「リインフォース！」

レイ「主！」

二人が嬉しさのあまりに抱きつく。

は「良かった・・・ほんまに良かったわ〜」

レイ「はい。ユニゾンは消えてしまいましたが私はあなたや守護騎士たちとともにいたいんです。いいでしょうか？」

は「何をゆうとるの！？リインフォースはもう家族やで！」

レイ「っ・・・あり・・・がとう・・・ございます。」

リインフォースから一筋の涙がこぼれた。

ク「よかったな・・・」

結「うん・・・」

リ「結斗君・・・」

微笑ましい光景を眺めているとリンディさんから歩いてきた。

リ「結斗君ありがとう・・・」

いきなり頭を下げだす彼女に僕は混乱したが察して答える。

結「リンディさんそれは・・・さっきのことですか？」

リ「ええあなたが闇の書を押さえてくれなければわたしたちは飲み込まれていました・・・本当に感謝してるわ」

結「自分にできる事をしたままでですよ。それに・・・」

僕はクロノのほうへ向く。

ク「ん？なんだ？」

首を傾げるクロノ。

結「クロノに凄い頼まりましたから。泣いて頼むほどに」

ク「なっ！／＼／」

リ「あら　クロノにも同年代の友達がね〜（ニタニタ）」

ク「母さ、艦長！僕はそのっ・・・艦長たちに死んでほしくなかったから・・・」

顔を真っ赤にし俯いて答えるクロノ。

ちよつとからかいすぎたね。

結「クロノごめんね。からかいすぎたよ。でも君のお母さんを助けてほしいって気持は素敵だと思うし、隠す事じゃないよ。誰だって肉親はかけがえないものだからね」

ク「結斗・・・ああ。改めて・・・ありがとう。艦長・・・母さん達を助けてくれて」

今度は言い直さずに堂々と言ったクロノ。  
それでこそクロノだ。

結「礼なら僕だけじゃなくて麗やなのはたちにもだよ。僕だけじゃ出来なかったか・・・ら・・・」

ク「おいっ！？結斗？」

足元がふらつき始めた。まだ無理っぽかったらしいね。

人事のように思いながら再び僕の目の前は暗転した。

治療室――――

結「・・・んんん。また治療室か」

鼻につく独特なおいでここが治療室だと分かった。また僕は倒れたか……。はあ……。今は……。あれから2時間か。

ベッドの隣にある机の上にあった時計で時刻を確認しながら起き上がる。まだたるさが残ってはいるがもう大丈夫だろう。

それにしても誰もいないあゝ。一人くらいいてくれてもいいのに。  
・  
・

一人寂しさを感じていると治療室の扉が開き、誰かが入ってきた。ちなみにベッドの周りがあるしきりで僕からは見えないようになっている。

な「結斗くくくんくくまた……。き……。たよ……」

勢いよく仕切りを手で開き入ってきて僕の姿を見た途端、どんどん動かなくなっていくたなのは。ちよつとホラーぽかった。

結「なの（結斗君！）はあああああ？」

またか……

なのはが空中で僕にダイビングをする光景をみながらなのはからの攻撃？を身に受けたのだった。

結「で・・・なのはここはアースラで合ってるんだよね？」

な「うんそうなの。やっぱり結斗君無理をしすぎなの。」

ぷくくと頬を膨らますのは。

風船みたいだね。

ピュ~~~~

それを指でつついて奇妙な音を出させる。

な「// // //」

結「まあ・・・あれは仕方ないよ。リインフォースを救うのが最優先だったし・・・」

コテンツ

なのはが僕の肩に頭を横から乗せる形になり自然ともたれかかる。

な「結斗君は相変わらずなんだね・・・」

ぽつりというなのは。

結「？そりゃ僕だからね・・・」

答えるがなのはは分かってないな〜といった感じのやれやれの表情になる。

な「（私はこの人を守る力が欲しい。みんなを支えてくれて、優しくしてくれるこの人の力に。でも・・・それなら結斗君を支えてくれる人は誰なの・・・）」

結「なのは？」

急に黙り込んだなのは。

な「・・・ん？なに？結斗君・・・（どっちもなりたくない。結斗君を助けられて、支える存在に・・・）」

結「いや〜後の人はどうしてるのかな、と思って・・・。ほら何時間か経ってリインフォースたちが心配だしさ。」

な「結斗君・・・違うよ。今はあの時から二日たった日なのっ！」

・・・え。

結「・・・ふ・・・つか？」

な「うん。二日・・・。みんな心配してたんだよ。特に麗華ちゃんとはやてちゃんなんて泣きっぱなしだったし・・・。」

結「うぐっ」

麗華達の様子が突き刺さる。

な「フェイトちゃんはそわそわしてるし……（かく言う私も泣いてたの……）」

結「ぐふっ」

面白がって言うのは。僕はただ申し訳ない気持だった。

結「まあもう大丈夫だからさ。いまみんなはどこ？」

な「待合室にいるよ、ちょうどみんないるし……」

結「そっかなら」

言い事思いついた

な「？」

首を傾げるなのはに僕はいたずら小僧の笑顔で言ったのであった。

待合室——

とりあえずみんなには気づかれないように来てみた。なかには麗華

たちははやて、ヴォルケンリッターとリンフォース、クロノ、リンディさんまでいる。ただみんなが座っている丸テーブルの一つだけ空席があった。

麗「はあ、交代まだかな？」

イスの背もたれにどっかりと女の子らしくなく座り天井に向けて愚痴る麗華。

それに対しまだ始まったよ・・・と言わんばかりの目をするフェイトたち。

フェ「さっき交代したばかりじゃない、麗華」

疲れたように言うフェイト。

麗「そうだけどさ。ずっと看病してたいんだもん。・・・はあ、ゆづの寝顔がみたい」

・・・今更麗華の性格はきにはしないが人の寝顔をじっくりみるのはやめてほしい。

は「結斗君の寝顔か、私も見たで」

フェ「嘘っ！？ほんと？はやて」

嬉しそうにいうはやてにフェイトが驚いた表情で返した。



はて・・・はやてに寝顔を見られた・・・。いつだっけ・・・？

は「ほんとや」。なあアリシアちゃん？」

自分の隣、麗華の正面に座るアリシアに話しを振るはやて。

アリ「そうだね。あの時だね。あのゆう君はかわいかったな。」

自分の前にあつたミルクティーに手を伸ばしながら反応するアリシア。

フェ「かわいかったって・・・はやてが病院で言ってたこと？」

は「せや」。結斗君モフモフしとってな。すごい抱き心地ええんや。」

麗「ゆうが抱かれて寝たのか気に入らないけどやっぱりそうでしょ。あの抱き心地は・・・。」

アリ「うんうん。それに男の子なのに良い匂いするし・・・。」

は「私結斗君抱いとつたら気持ちよすぎて永眠してまうで。」

・・・僕枕なのっ？

フェ「いいなあ。私も結斗モフモフしたい！」

フェイト！君は騙されているんだ！！僕はそんなにモフモフしてない！！

本人はこのように言っているが事実は羽毛枕や今話題の低反発枕も越えるほどのモフモフ？感。

な「（私もモフモフしたいの〜〜！！）」

僕の隣に隠れているのははずっと考えているようだった。そしていきなり顔を戻し、僕に向く。

な「結斗君・・・それでこれからどうするの？」

これから・・・というのはどう行動するかということだろう。

僕はなのはに耳打ちする。ほのかに女の子の特有の香りがするが気にはしない！

というより今はみんなを驚かせたいんだ！

結「ごによごによ・・・」

な「うん・・・うん・・・それでいいの？」

結「これをすれば驚くはずさ。さあ！ミッション開始！」

な「りよ了解なの！」

僕となのははそ〜と麗華の背中に近づく。その時はやて達麗華以外の子達と目が合い声を出されそうになったのを口元に人差し指を当て、静かにしてもらった。

・・・さて、みなさん麗華の背中のおすぐ後ろに到着です。

僕は後ろから手で麗華の目を両手で覆った。





T A L E 4 2 罪を任せていいのっ？ (後書き)

疲れた久しぶりの投稿や。

今はすっごい眠い。とりあずじゃあね

TALE 3 じねからのじよ・・・(前書き)

短いです。それでもいい方はどうぞ・・・



今の僕の位置は母さんの膝の上。突貫から磁石のS極N極よろしく全く離れる気配を見せない母さん。

えっ？離れると言えはいいつて？その・・・なんていうのか・・・僕は大きい心配を書けたこともあり強くはいえないんだ。それをすると絶対母さんが泣く。間違いなく。

。いつのまにかもの扱いされ、僕の所有権をめぐって争ってるし・・・

まあそんなことよりも当初の疑問に帰ろうと思う。

母さんは元局員らしいが局の意向についていけずに辞めたはずだった。なのになぜここにいいのか・・・  
大体は予想はついているが・・・

結「ねえ・・・母さん・・・」

美「ん～～～なに～～～?」

嬉しそうに僕を後ろから抱きしめながらいう母さん。言わずともその顔は満面の笑顔だ。

大きな果実が頭を挟み込んだりしているが無視だ！

結「・・・母さんがどうしてここに居るの？母さんもう局員じゃないんじゃない?」

美「あらゆうがそんなのが分からないなんて珍しいわね。いいわ、私がここにいる理由はリンディとは親友だからよ。ねっ?リンディ



」？  
「

そこで隣の席に座っていたリンディさんに話しを振る母さん。

リ「えっ、ええそうよ。仲良しの親友ね。ところで美緒」

美「ん〜なに？んふふ」

ムギユ〜〜〜

結「（いい加減離れてほしい・・・）」

心の中で吐露した。

リ「あなたそんなに子煩悩だったかしら？」

美「ん〜そうね〜。ゆうと麗だからこうなっちゃうんだと思うけど。

・・ね。実際私も驚いてるわ。私こう見えても子供苦手なのよ」

麗「そうなのっ？お母さん？」

母さんの意外な発言に目を大きくする僕ら。

母さんずつとこんな感じだったから子供が苦手だなんて・・・

美「そうよ〜だって子供ってよくわかんないんだもの〜すぐ泣いちゃうし・・・」

尚も僕を膝に乗せ、机にあったダーズリンに手を伸ばす母さん。

赤ん坊は、嫌な事があるとすぐに泣いちゃうしね。言葉も話せないからよく分からないっていう母さんの言い分も分かる気がするね。

まっ僕は好きだけど。

麗「へ〜以外母さんってば私とゆうが小さい頃からずっとそんな感じだったから」

僕をみながらいう麗華。

美「それは別。あなた達が世に言う美少年と美少女だったからよ〜」

結・麗「……………」

呆れてものも言えない……

リ「と、とりあえずまあいいでしょう。結斗君体はもう大丈夫なの？」

これ以上子煩悩の話しをされては困ると顔にくつきりと表しながら話題を変えたリンデイさん。

結「特には問題ありません。ところで焰美と澪がいないんですが……」

見渡しても二人の姿が無い。

リ「彼女達ならもう少しでくると思っけど、今はエイミィと一緒にだから……」

何か手伝っているのだろうか？

ウィーーーーーン

するとちょうどいいところの三人の影が・・・

焰「ゆう!」

澁「えっ?!?!ゆう様!」

いち早く僕に気がついて近寄ってくる二人。

結「やあ二人とも・・・」

母さんの膝の上から・・・というなんとも情けない格好で二人に二日ぶりの挨拶をする。

焰「やあ・・・ではないぞ!心配したのだ!」

澁「そうですよ!」

身を乗り出して心配そうに言ってくる二人に僕は若干引くが、心配してくれたのは事実なので感謝する。

結「ごめんごめん。もう大丈夫だからさ」

焰「ほんとか?」

澁「じゅ〜……………」

白い目で睨みつけてくる二人。あはは……………」

結「だ、大丈夫だよ！」

焰「……………まあいいじゃろ」

美「結斗……………」

渋々納得しましたと言い、二人が言った時母さんが聞いてくる。

美「この二人は……………本当に焰美と澁なのね……………」

二人をみながら言う母さん。

まあ確かに信じられないか。デバイスが人になるなんて。

結「そうだよ……………母さん。正真正銘焰美と澁さ。僕が二人をこっし  
たんだ……………」

美「二人の事を調べてもいいかしら？」

結「？もうしらべたんじゃ……………」

美「二人この身は結斗のものだからっていつて許さなかったのよ」

結「……………あはは」

焰「当然じゃ、我はゆづのものじゃ。髪の毛の一本から血の一滴までゆづのものじゃ。」

澁「はい、だからゆう様の許可が無ければ例え美緒様でも嫌です」  
つーんと首を振る二人とも……

美「とまあこんな感じで……」

結「……二人とも……母さんが生みの親なんだし、そんな事言ったら母さんが悲しんじゃうから言っちゃ駄目だよ……」

シュン……

焰・澁「う、うむ／＼はい……」

目に見えて落ち込む二人。まずうちよっときつくいい過ぎたかも……  
結「で、でも二人の僕を思ってくれる気持嬉しかったよ。ありがとう」  
う

パアアアア

途端に向日葵のような笑顔をする二人。よかった笑顔になって……

美「相変わらず……フラグばんばん……万々？立ててるわね」

結「?・・・そんな事より・・・リンディさん」

リ「何かしら?」

結「お願いがあります・・・」

リ「お願い?たくさん助けられたあなたに頼まれたら断る事なんて出来ないわよ、それで・・・何?」

この人はやはり・・・信用できるひとだ。これから僕がすることに彼女はクロノのような本当の正義を持つ人を味方に加えないと・・・と僕は思った。

結「僕を・・・管理局に入れてもらえませんか?」

な・フェ・は・アリ・麗「!!!!」

同じテーブルに腰掛けるのはたちが息を呑み驚いているのが分かる。僕の背後にいる母さんは、予想してたとばかりにあまり驚いていない。

麗「ゆうっ!!それはっっ!!」

リ「理由を尋ねてもいいかしら・・・。あれ程私達を信頼してないなかったあなたがどうして管理局に入ろうとしているのかしら?」

結「特にありませんよ、この力を誰かを救うのに使いたいです。」

「

僕は敢えて自分の考えを秘めて答えた。

理由は・・・なのは達だ。

なのははおそらくこれから管理局に入って、人を救いに行くだろう。フエイトも優しいから自分のような子供を助けにいこうとする。はやても何らかの形で管理局に入るだろう。

彼女達を守るために・・・

何秒かリンディさんの目を見つめながら返答を待つ。おそらくばれてるね。僕の考えを・・・

リ「いいでしょう・・・それでどれになるつもりかしら？個人的にはとても気になるのよあなたがする資格」

だが大して気にしないようにリンディさんは僕に聞いてくる。どれって・・・教導官か執務官、監査官か・・・。

麗「ゆうならどれでもとれそうだけど・・・」

フエ「さすがにそれは・・・」

な「にやはは・・・でも結斗君なら出来ちゃいそうだね」

は「ほんまやね・・・」

みんながさすがにそれはないだろ、的な空気になっているが僕はそれを否定する。

結「全ての資格を受けます」

みんな「っ!？」

リ「本気?いくらあなたでもそれは・・・」

結「本気です。僕には全ての状況の時に動く立場が必要なんです」

無茶でもなんでもない。やるんだ。麗華たちを救うために、それに自分のために・・・

再び僕とリンディさんの睨み合いが始まったが今度はさっきよりも時間をかけずに目は逸らされた。

リ「・・・分かりました。そのように言うておきます。試験の日時は追って伝えます。」

そういつてリンディさんは立ち上がり部屋から出て行った。

N e x t   t o   T A L E 4 4 ! ! ! !



T A L E 4 3 これからのこと・・・（後書き）

麗「今回はS K Yがいないから私が紹介するわ。え」と・・・何々・

あと何回かでA・S編は終了。次はデート編、中学生編らしいわ。なんでもここであの子と出会っらしいわね。

あと私とゆうの出会いを書くかもしれないわね。あとは読者さんの要望とかがあれば書いていくらしいわ。

じゃあ今回はこれまで次回もちょっと遅く更新される可能性大かもね。

それじゃあね」

T A L E 4 4 泣いて、いっぱい泣いて、それから頑張るんだ(前書き)

ネタです・・・。

もう訳わかんない・・・。

それでもいいかたは・・・

TALE 4 泣いて、いっぱい泣いて、それから頑張るんだ

麗華 side

麗「ん〜ふふ〜 あ〜楽しみ。」

アースラの治療室に行く私の足が羽ように軽い！だって今日は・・・

ゆうが屋敷に帰ってくるんだもの！待ちに待ったゆうの帰宅。笑顔じゃない方がおかしいものでしょ？  
えへへ・・・まず〜一緒にお風呂入って〜。一緒に寝て〜もちろん抱き枕にして・・・。

麗「ぐふふ・・・」

あまりの嬉しさに笑顔がどす黒いになっているが麗華は全く気づかなかった。

カツツカツツカツ。

それからご機嫌な私のスキップが止まった。

それは私の前に肉の・ゲフンツゲフンツ・人間が立ち塞がったためだ。

麗「……な、なんているのよっ!!なのは、フェイト、はやて!!」

な「結斗君を守るためのの!!麗華ちゃんに結斗君を任せると狼さんになっちゃうからなのっ!!」

フェ・は「うんうん!／せや!」

頷く二人。

むむ〜三人ともゆうが好きみたいね。なのは、フェイトはともかくとしてはやてまでって・

ほんとにゆうはしょうがないなあ。まあ私が勝つから別にいいけど・

麗「狼上等!ゆうがかわいすぎるからいけないのよ。……んで私への敵対行為とみていいの?いいよね、いいわよね!」

見られたものを冷たくさせる瞳をなのほらに向ける。しかしなのはらは怯むことなく私に目を向けてくる。  
やるわね……

麗「いくわよ！白色の魔王、金色の夜叉、狸。魔力の貯蔵は充分？あなたが挑むのは無限のゆうへの愛……。愛の極地、恐れずしてかかってきなさい！」

な・は「魔王じゃないもんっ／誰が狸やっ！」

ここに世界にとってどうでも良さそうな戦争が開かれようとしていた。

麗・な・は「（絶対勝つ！そして一番に結斗に抱きついて撫で撫でしてもらうんだー！）」

訂正・・・良さそうではない。どうでもいい戦争だ。

ヒートアップする三人だが、唯一そんなことのない子がいた。その子フェイトは着実にそして慎重に結斗のいる部屋へと近づく。

フェ「（あと少し……）」

必死にフェイトは抜き足をして目立たないようにしていた。





私はゆうを助けるために頑張ったのに！！ 自分の欲望そっちのけ。

結「それで？どうしてみんながここに？」

ゆうの華奢な体が！！。なんだか私、顔が熱い！隣を見るとなのはやフェイト、はやてまで顔が赤かった。くっ目潰ししようかしら？

麗「／／／ゆ、ゆうを迎えに来たの・・・」

なんとか答える。

結「・・・ああ退院のことね。わかった。じゃあ次、アリシア、焰美、漣どうして僕のベッドにいたの？」

焰「我らはいつも一緒だからじゃ。（一緒に寝たかったなんぞとも言えんっ！）」

漣「はい（言えません。ゆう様がかわいすぎるから一緒に寝たなんて・・・）」

何がいつも一緒よ。単に一緒に寝たかっただけでしょように・・・

結「ふうくん、でもだめだよ。いきなり潜り込んできたら、びっくりしちゃうからね。今度からは気をつけるように」



焰「むむ、仕方ないのう。(とりあえず一緒に寝られなくなるのは回避できたか)」

澗「分かりました(良かったです。一緒にねるの禁止と言われたら私の癒しがなくなるところでした)」

二人の思惑に見事に嵌った結斗。相変わらず甘いんだから・・・

結「それで、アリシアは？」

ここで未だ黙って俯いているアリシアに聞く結斗。  
ちなみに今は結斗のベッドにみんなが座って話してる状態ね。

ギシッ

いきなりベッドが揺れた。衝撃の発生地点はアリシア。彼女がゆうに抱きついた！！

またか！と思ってアリシアをひき剥がさそうとしたがアリシアからはいつものふざけでは無い

真剣に悲しんでいる事がその震える背中から分かった。

そのため私を含め、他のみんなもアリシアが次に言う言葉を失ってしまった。

ゆうも抱きつかれて一瞬戸惑ったがアリシアの雰囲気を知りて落

ち着いたようだ。やがてゆづのそれ程大きくは無い手がアリシアの背中をさすり始める。

結「どうしたの？」

お母さんと似たように優しい声で聞くゆう。

アリシアは背中がさすられた事で落ち着いたのかゆっくり話し始める。

アリ「あのね、私母様に会いたかった……」

プレシアさんに……

フェ「姉さん……」

フェイトから発せられた声は深く悲しみの声だった。思い出してしまっただろう。

アリ「生き返った姿を見せたかった……でも……」

プレシアさんはもう……。それを知ってしまったんだ。昨日……。再び背中が震えだし、声も涙声になり始める。

フェ「姉さん……」

耐え切れなかったのかフェイトはアリシアに抱きついた。



それを両手で大事そうに受け取り、見る。

結「・・・二人とも僕に触れて。なのは、はやて、焰美、澗、麗華はそのままできて・・・」

何かをするつもりなんだろうな。この二人のために。私達はそれを察して頷いた。

アリシア、フェイトはそつとゆうの肩に触れて、やがて三人ともベツドのに倒れ込んだ。

な「っ！！三人が倒れちゃったの！！」

は「どうしてやっ!？」

慌てだす二人。無理も無いが少しはなにかあると思つて欲しい。

静「落ち着いて下さい二人とも。ゆう様に任せておけば大丈夫です」

麗「そうよ・・・私たちが出来るのは待つことだけ」

私や静の言葉にやつと落ち着き出す二人。

そんな二人を見ながらゆうが帰ってきたらどんなことをしようかと思いを巡らしていた。

アリシア side

フェ「姉さんっ！」

アリ「ん〜フェイト？」

耳元からのフェイトの声で私は目を開けました。  
そこはアースラの医務室でした。三つの仕切り付きのベッドあり、  
一つだけに仕切りされています。

？「ごめ……さい」

小さな声で仕切りの向こうにいる人は言っています。

フェ「この声は……母さん？」

アリ「えっ!？」

フェイトの言葉に驚く。

私とフェイトは意を決してベッドに近づきました。手で仕切りを動かそうとしましたが掴めずに  
向こう側へと抜けてしまいます。

結「二人ともそのまま進んで……」

背後からゆう君の声が聞こえ、私達は中へと進みました。

アリ「母様……」

私のものとは思えないほどの声がかすれています。母様はベッドで起き上がり、座っています。

フェ「結斗……これは？」

疑問がったフェイトが横に並んでその光景を見ているゆう君に尋ねます。

ゆう君は私から見ても複雑な表情でそれに答えました。

結「ここは過去の世界。プレシアさんが生前に強く思っていた時の光景を映し出したんだ。だからこの世界のものには触れないし、相手にも認識されないんだ……僕は二人をプレシアさん直接に会わせたかったけど……」

ゆう君の言葉を切るように母様が泣き出してしまいます。

プ「ごめんなさい、フェイト。あなたを傷つけてしまって……」

プレシアさんの涙の眩きが無人の部屋へと響く。  
フェイトとゆう君、私を含めた三人は母様も言葉を静かに耳を傾ける。

プ「あなたを作ってどうしてアリシアではないの、とずっと思っていた。アリシアが大好きだったから  
フェイトにはアリシアでいて欲しかった。でも違った・・・あの男の子の言った事で私は・・・あなたがフェイトというアリシアの妹ということわかった・・・それを気づかせてくれたあの男の子を殺してしまった。」

男の子が虚数空間に落ちた時にフェイトの悲痛な叫ばせてしまった・・・と母様は続ける。  
隣を見るとポタポタとフェイトの瞳から流れるもの。  
それを見ながら私はまた母様の話しを聞く。

プ「アリシア・・・目でいいからまた会いたかった。太陽のような元気な顔を見たかった。  
でもフェイトを傷つけていた私にはその資格は無いわね・・・」

アリ「そんなことっ！」

母様の言葉に私は叫ばずには要られなかった。例え母様に聞こえなくても。

フェイトを傷つけられたかもしれないけどそれは私を思っていること。  
私のほうこそ母様をそこまで  
追い詰めていたことに罪悪感が後を立たない。

プ「ごめんなさい・・・アリシア、フェイト・・・」

そう言っつて母様は体を横にして目を閉じた。

そして私達の体はだんだんと薄くなっていった。

結斗 side

僕、アリシア、フェイトは一緒に目を覚ました。僕を挟んで二人とも仰向けの状態。

部屋には誰もいない。

僕らは体を起こして座る。

フェ「結斗・・・あれは・・・」

結「真実だよ・・・プレシアさんが思っていたことはああだったんだ」



アリ「母様っ、うっっ……」

隣で二人が涙を流し始めたため僕はそっと二人を抱きしめる。

結「今は……泣いた方がいいよ。泣いて、いっぱい泣いて、それから頑張るんだ。頑張ってプレシアさんのためにも笑うんだ。あの人が心配することのないように……」

二人の心からの叫びが部屋に伝わる。そこにはプレシア・テストロツサが愛しいと思っていた娘アリシア・テストロツサとフェイト・テストロツサだった。

二人の背中をさすりながら、二人にまた笑顔が戻るようにと願った。

ウィーーン

な・麗・は・焰・瀨「あ~~~~~!!!!!!」

シリアスな雰囲気だったのだがいきなりな来訪者達が登場した。

な「二人が抱きついてる~~~~!!」

は「ずるいでっ……!!」

結「・・・二人とも・・・。はあ・・・」

少しは空気を読んで欲しいなあ・・・。  
呆れていると麗華が近寄ってくる。

麗「終わったの？」

ただ一言。それだけ麗は言った。

フェ・アリ「うん・・・」

まだ涙が流れていたのを二人は服で拭い、麗の言葉に答えた。

麗「そう・・・」

麗はこうゆうことよめるんだよな・・・

麗「じゃあ私もゆうに抱きつく~~~~~!!!」

あれっ？

結「ふぐっ!!」

麗からの抱きつきでベッドに押し倒される。

焰「ずるいぞ！我もっ!!」

澁「私もです!!」

結「えっ二人ともっ？ふぐっ！ごふっ」

な・は「わたしも（なのっ！）」

結「うぎゃ~~~~」

うう・・・お、重い。

アリ「ぐすっ・・・あはは」

フェ「うふふ」

その光景を見ていたアリシア、フェイトが笑っているし、人事みに！！

結「みんな~~~~退いてよ~~~~！！」

僕の叫びが静かだった部屋に響き渡ったとさ・・・ちゃんちゃん

結「ってそんな終わり方あるか~~~~~~~~！！！！」

麗「どしたの？ゆづ・・・」

結「・・・なんでもない。」

ここは僕の家。白銀邸の方ね。あれからみんなを剥がしてなんとか帰ってこれたよ。今は夕食の準備中。

ん？母さん？母さんは・・・ちよつと眠ってもらってる。

だって帰ってきたら・・・僕に襲い掛かってくるんだもの・・・

麗「ねえ～～ゆうつ～～まだ～～？」

麗がリビングの机にグデ～～と餅みたいに伸びながら聞いてくる。

結「もうちよつと待っててね。今日は麗の好きなものばかりだよ」

麗「ん～～待ってる～～」

再び麗の間延びした声が聞こえ、僕は調理を再開する。

今日の献立はホワイトシチュー。寒い日はやっぱりこれだね。

結「～～～～っ？・・・どうしたの？麗・・・」

鼻歌を歌いながらシチューを混ぜていると後ろから手を回して抱きしめられた。

麗「ん～ん。なんでもない、ただうれしいの。ゆづが帰ってきてくれて・・・」

なのは達がいたふざけてた時と違って今回は真剣なことが麗の震える声からわかった。随分と心配をかけてしまったようだ。

結「ごめんね、帰るのが遅くなって」

回された手に僕は手を添える。

麗「ううん、いいの。私のところに帰ってきてくれるなら・・・」

結「麗・・・)ところではやたとアリシアと寝たってほんとう！？)えっ？」

あれ？なんかいつもと同じような空気に・・・？

結「Yes」

麗「そう・・・」

おっ？ここだと、ずるい！私も！！とか言ってくるのに。

やっぱり麗も成長したかうんうん・・・)ゆづ後で一緒にお風呂に入っ  
つてね」

・・・なんだと・・・？

結「それはむ(拒否権無しっ！！)(え~~~~)」

理不尽だ・・・。いくらなんでもそれは拙いでしょ・・・

麗「いいじゃん、私達家族だし」

こつゆう時だけ家族って言うし……。普段は嫌って言うてるのに……。もちろん嫌がつてるのは僕と結婚できないからだとか……。はあ〜  
結「それでも……。無理。母さんと一緒に入って。もうそんな歳じゃないんだし……」

麗「むむむ……。なら一緒に寝てよ!」

やっぱこつなるか……。でもまあお風呂よりはましか。

焰・瀨「我もな!」「私もです!」

焰美と瀨もか……

麗「私とゆうの間に割り込んでこないでよ。二人とも!」

ギャ〜ギャ〜

そして三人がなにやらにぎやかに騒いでいる間にシチューが出来上がってしまった。

さてもつそろそろ母さん呼びに行かないと。

美「ゆうちや〜ん」

結「わわっ母さん？どうやっておきたの？」

一応眠り薬とかやったんだけど。それも強力なのを・

美「もうくくなんで私を眠らせたの？」

結「だって母さんなんか怖かったんだもん・食べられちゃいそう  
で・」

美「ぎくっ・私がゆうちゃんに怪我させるわけないじゃない。や  
だなあくくあはは」

あさつての方向をむいて笑い出す母さんに若干不安になるが信じる  
しかない。

結「まあそれはいいとしてご飯で来たからテーブルについて、ほら  
三人もだよ！！」

リビングではしゃいでいた三人を呼び席に着かせる。

美「久しぶりのゆうの料理ね。楽しみだわ。」

嬉しそうに微笑む母さん。

そこで麗が何かを思い出したのかあのねと言ってくる。

麗「母さん料理できるようになったんだよ！」

えっ？母さんが？

結「ほんとに?」

美「ええ、桃子さんに教えてもらったのよ。」

桃子さんグツグツジョップです。僕は机に下でぐつと拳を握った。なんせ母さんの料理はすさまじかった。

シヤマルほどにはないにしろ・・・とてもじゃないが食べられるものではない。

どれ程かと言うとお菓子とかによくある食べちゃいけませんっていう乾燥剤?保温剤?くらいに危ないのだ・・・

結「そ、それは良かった。さっはやく食べて冷めちゃうから・・・」

焰「食べる方がいいと思うがのう」

澁「はい・・・」

?・・・二人がどうしてそんな事を言うのか分からない。

麗・美「いただきま〜す・・・あむっ・・・っ!!!!!!!!!」

二人が動かなくなった。

結「二人とも~~~~?」

麗・美「お、おいしい!!!!!」

麗「ゆう、また料理上手くなった?」



結「ああ、うん。はやての家で練習したんだ。はやても料理上手だね。結構勉強になったよ」

美「ゆうちゃん・・・負けたわ・・・」

いきなり敗北宣言をし出す母さん。

焰「やはりこうなったか・・・。ゆうの料理はおいしすぎるからう。美緒みたいな料理の駆け出しが食べたら一瞬で自信喪失じゃ・・・ん相変わらず美味しいのう。」

澪「ゆう様今度また料理教えてくださいね」

料理の感想を言ってくれる二人。美味しすぎるってそんな事ないと思うが・・・。

でもまあいろいろと大変だったがここが僕の家だと改めて感じて温かい気持ちになった。

結「そういえば言うの忘れてた!!」

麗・美・焰・澪「??」

結「ただいま」

麗・美・焰・澪「お帰り（なさい／なさいませ）」

n  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
4  
5  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

TALE 4 泣いて、いっぱい泣いて、それから頑張るんだ（後書き）

「ごめんなさい・・・」

麗「・・・・・・・・・・」

すみません！！

麗「・・・・・・・・・・ふんっ」

今回はしっちゃんかめっちゃんかでした。

麗「あんたがいうな。」

ごめんなさい・・・

麗「もう・・・いいわ。そこでじっとしてなさい。みんなには私が言う。」

はい・・・

麗「え〜とごめんなさい。今回は最悪・・・でした。読んでくださった人には感謝です。あと今回でA'sは最後ね。次回からは学園生活になるらしいわ。それとバトルがないからもう読まないってのはなしね。

ここでもバトルはあるわ。ただし減るかもしれないってことらしいわ。と云うわけでこれからもよろしくちなみに次回からはゆうが主人公に戻るわ。

それじゃあね「

えっ？ほんとに喋らせてくれなかった！！今回でA・S終わりなの  
に！！

ちよつと????ええええええ?????

T A L E 4 5 えっ？ここから始まるの？（前書き）

亀更新です・・。それからこのはなしから新章です。  
頑張って書くのでどうぞみていてくださいね〜

TALE 45 えっ？ここから始まるの？

AM 6:40

結斗 side

チュンチュンーーー

遠くから小鳥のさえずりが聞こえる。未だベッドに留まり続けたい欲を抑え、背中を起こそうとするが……

結「う……動けない……」

ー またか……

……首を動かす。カーテンから零れる光を眩しく思いながらも右腕にかかる力の正体がいた。

着崩れかかったパジャマから可愛らしくお腹を出しながら寝る麗。・  
・長いさらさらな黒髪は、僕の髪と重なりベッドに広がっていた。

麗「zzzzzz……」

／／／／うう．．．これは．．無視！回れ〜右！！  
麗の無防備な状態に顔が熱くなるのを感じた。  
頭を振り反対を向くが．．．

焰・澁「zzzzzzzz．．．」

．．．こつちもか！！  
反対にはアウトフレームの焰美と澁が僕の左腕を枕にして幸せそうに寝てる。こちらも麗と同様にパジャマがはだけて二人の白い肌がいろいろと見え隠れしてるよ〜／／／／

結局昨日はみんなに押し切られ、一緒に寝る羽目になってしまった。  
みんなして涙目で詰め寄って来るんだよ！  
僕がいない間に母さんの影響受けすぎじゃない？麗．．．

結「くぬぬ．．．くは〜」

そんな麗の先行きを不安に思いながら両腕を動かそうとするが．．．  
動かない．．．。

なんつー力してんの？万力を込められたように全く動かない．．．。  
人ってこんなに強い力出せるんだ．．．。

結「し、仕方ない。麗のためにも……くぬぬぬ……くは〜」

「またも敗北……」

今日は月曜日。学校がある日だ。だから麗もそろそろ起きないと遅刻してしまう。それは避けなければならないので僕はこの状態を抜け出す奥の手を打つ。何？動かなければいい思いがし続けられるって？

んなこと麗の遅刻に比べれば些細な事だよ！

さて奥の手を発動しようか……

僕は焰美と瀨の耳元に口元を近づけ、

結「ふ〜〜〜」

焰・瀨「ふきやつ／きやつ」

息を吹きかけた。

二人は見事に跳ね起き、きよろきよろというらんところを見て僕の視線と重なりあちゃ〜

といった感じの空気となった。

焰「またか……」

瀨「すみません、ゆう様……」

申し訳無さそうに言う二人。……二人が今みたいにベッドに潜り込んでいるのはよくある。というよりここ毎日だ。



二人の弁によるといつのまにかベッドのなかにいる・・・だそうだ。  
やっぱり僕が二人のマスターである事に関係あるのかな・・・？

結「いいよ、別に。それより麗を学校に行かせないといけないから  
離れてくれる？」

焰「／／／う、うむ了解した（寝ぼけているとどうしてもゆうの側  
にいつてしまう／／／）」

瀨「すみません／／／（ゆう様の側が居心地がよすぎるから私達  
は引き寄せられるんですね／／／／）」

二人が左腕から頭を上げる。さてとこれで左手が自由のみに・・・  
あれ？動かない・・・その時僕の左手に独特の感覚が走り、その理  
由が分かった。

結「手が・・・痺れた・・・。」

びりびりとした感覚。あれだよ・・・。

瀨「すみません！！ゆう様・・・。」

ものすごい勢いで謝ってくる瀨。

結「大丈夫だよ。こんなのそのうちに治るさ。それよりも・・・」

僕は麗の方を向く。先程と寸分変わらず気持良さそうに僕の腕を抱えながら寝ている。いやちよつと変わってる。僕の腕に脚をかけてまるでお猿さんみたいないように抱きついていた。

その扇情的な光景に顔が赤くなるが、焰美らに気づかれぬように表情をいつも通りにする。

結「ほらっ・・・麗起きて・・・遅刻しちゃっよ〜」

ゆさゆさと肩を揺さぶるが変化なし。

お？麗がなんか言っ。

麗「あと・・・」

これはお馴染みの・・・

あと五分か？それくらいの時間ならまだ時間ならいいが・・・

麗「十光年・・・」

結「長いわっ!」

ニタニタと笑いながら言う麗に思わずつつこみを入れてしまった。つてそんなことしてる場合じゃないよ〜

結「もうっほら・・・起きてっ!麗」

麗「うえぎりはしじどふいひさ・・・」

寝ている状態から座った状態し、肩を揺さぶる。それも強めに。  
麗から言葉ではないものが発せられたが・・・

麗「く~~~~」

臉完全に閉じてる。はあ・・・ヴィータみたいだね・・・。

結「全く・・・」

焰「相変わらずの寝ぼすけじゃのう麗華は・・・」

澗「まあ分からなくないですが・・・」

結「？」

澗「ゆう様が帰ってきたからだと思いますよ。麗華様の性格はゆう様至上主義ですのでゆう様が帰ってきた事で安心しきっているのでしょう」

結「なるほどね。まあ頼られて嬉しいけどももう少し自立してほしいかな？」

澗「それほど心配していらしたんだと思いますよ」

結「／／／／」

全く可愛いんだから……。素直にそう思った。  
白くて細い首筋に形のいい唇とか可愛い小顔。

焰「ゆう?」

結「はっ!・・・麗~~~~起きてっば~~~~」

じっと麗を見つめていたようで焰美の問いかけで僕は麗の観察を中止する。

麗「く~~~~」

尚も寝続ける麗。全く・・・前より寝癖悪くなったんじゃないかな?僕がいた頃はこれ程までじゃなかった。朝が弱かったがこれ程ではなかった気がするし。

腰に手を当て迷う。だがこのままだと遅刻だ。

結「むむ・・・仕方ないなあ・・・よつと」

そつと麗の首元と足に手を入れ、抱きかかえる。  
軽っ!!!

久しぶりに麗を抱っこしたけどこんなに軽かったかな?

前フェイトを抱っこした時でもこれくらい軽かった。

女の子はマシユマロか何かで出来ているのかな?そんなアホなことを考えていると

隣で焰美と瀨がわめき始める。

焰「っ！！ずるいぞっ！！」

瀨「そうですねっ！お姫様抱っこなんて〜」

僕の行為に顔を赤くしながら言ってくる二人にあとで二人にもやってあげるからというと

途端に微笑み出した。

そんなに好きなのかな？お姫様抱っこ・・・

まゝ女の子はそうゆうので嬉しい気持になるらしいけど・・・。男の僕にはあまり分らないね・・・

そんな事を思いながら麗の部屋へと急いだ。その時麗の顔が目を瞑ったまま微笑んでいた事に

僕は気がつかなかった。

結「いつてらっしやい麗・・・」

麗「い／＼／行って来ます／＼／＼／（びっくりした〜今朝起きたらゆうの顔が目の前に。しかもお姫様抱っこされてるし、今私顔まっかつかなんだらうな〜）」

麗を焰美と瀨に着替えさせて、僕は朝食の準備。丁度いい頃合の時に三人は下に降りてきた。

三人とも着替えを済ませている。

麗は聖祥の白い制服に茶色いコートを羽織っている。ツインテール

は僕の  
いた頃と変わらずしているみたいでぴゅこんぴよこんと歩きたびに  
跳ねるみたいに動く。

焰美は焰色の髪に合わせたように黒い和服を身に纏っていた。漆黒  
の服が彼女の焰の髪を際立たせ、  
凛々しく感じさせている。

静は大人しめに、ネクタイのついた白いシャツ下は水色ロングスカ  
ート。

それに肌色のカーディガンを羽織っていた。大人っぽいセレクトだ。

みんなで麗をおみ送りする。外は晴れ。それも雲ひとつない快晴だ  
った。

寒さが本格化して今夜から雪が降るとかってニュースで言っていた。  
麗が大きな白銀邸の庭を横切りこちらに手を振ったので振り返す。  
そして麗の姿が見えなくなると屋敷の中に入った。

美「ゆうちゃ〜〜ん、おはよ〜〜」

屋敷に入った途端に間延びした声が僕の頭の上から聞こえてくる。  
上を見ると母さんが階段の手すりから身を乗り出してこちらを見下  
げていた。

タッタッタキッ

階段を駆け下り僕を抱きしめる。

焰「ずるいぞ!!!美緒!我もっ!」

澁「じゃあ私もっ」

結「むぎゅっ・・・ちゅちゅぶねる〜」

ぐは〜サンドイツチ状態だ〜。

結「お、おはよ、母さん。朝食出来てるよ」

挟まれるのになれたためなんとか母さんに言う事ができた。

美「ありがとう」

礼を抱きしめる力を強くすることで表す母さん。

だがいつもよりされる時間が短く、そっだ！と手を叩く。

美「今からゆうちゃんには行って欲しいところがあるの」

結「行って欲しいところ？」

美「うふふ・・・」

母さんはとても楽しそう（・・・）に微笑んでいた・・・。

とぼとぼ・・・

一人聖祥のバス停まで歩く。いつもより距離を長く感じた。前まではなのはやフェイトが私の家まで来てくれていて、話しながら言っていた。でも最近はいろいろと忙しくなってきたし、大変と云うことでバスでみんなと会うと言う事になっているのだった。

もちろんそんなことは分かっているのだが今日は長く感じた・・・でも私がそれを感じた理由は・・・

麗「ゆうが帰ってきたからよね」

ゆうと一緒にいるとこんな距離なんでもない。昨日帰ってきて朝ゆうにお姫様抱っこされてまた実感した。

ゆうが帰ってきたんだって・・・

麗「早く一緒に通いたいなあ〜」

私の白い息から発せられた言葉は冷たい朝の空気に溶け込んだようだった。



―――聖祥大付属小学校―――

麗・な・フェ・ア・す「おはよ～～～」

四人とバスで会い、ゆうのこととかを話して学校に到着したためクラスに入り、みんなに挨拶する。ちなみに抱っこの事は言っていないわ。言ったらなのはたちゆうに頼んで鈍感なゆうなら躊躇いもなくしちゃうから。

女子A「おはよ～～麗華ちゃん」

麗「おはよ～～」

挨拶してくれた女の子に挨拶を返した。

この頃はなのは達以外にも喋るよう心がけてきた。そのかいあつてか、クラスの女子とは普通に喋れるようになってる。ただ男子はまだ無理。

やっぱゆうと比べちゃって無理して話そうとは思わないのよ。女子は気が合ったりするからいいけど・・・

ア「それで？結斗はいつ戻ってくるのよ？」

窓際の席に着き、茶色のスクールカバンの中から今日使う教材を机の中に入れていた時アリサが聞いてきた。

麗「う〜ん・・・いつだろ？」

ア「麗華・・・そうゆうことは一番に聞くべきでしょ！」

麗「そんなこと言われてもゆうを前にしたらどうでもよくなっちゃ  
うもん・・・」

ア「あ、あんたね〜。そんなんだったら私とすずかいつまでたっ  
ても結斗に会えないじゃない!!」

ぶんぷんと怒り出すアリサ。

麗「う〜ん分かった。今日聞いておくわよ〜・・・」

それを聞いたアリサは席に戻っていった。っていつてもすぐ前なん  
だが・・・。

そういえばすっかり忘れてた。ゆうの学校。今週・・・かな？

担「は〜い、席について〜」

思考に耽っていると担任の先生が教室へ入ってきた。

担「みんなおはよう。いきなりだけど今日から新しいお友達が出ます。入ってきて〜」

な・フェ「あっ!」

なのはとフェイトが驚く。私もその一人で三人の姿に釘づけになる。はやとアリシア、それに男か女か分からない黒いレンズでサングラスのような眼鏡を掛け、長い黒髪を下のほうで止めている子だ。顔はよく分からない。いずれにしろクラス中から好奇の目にさらされていた。

三人は担任の前に行き、自己紹介を始める。

は「八神はやてっぺいいます〜。ちょっと怪我で学校を休学しました。でも今日からは普通に通えるのでみんな仲良くしてな〜」

聞き慣れた大阪弁で話すはやて。

このときクラスの大半の男子が顔を赤らめていた。あれ?おかしいわねここの男子ならうおおおとかって言うはずなのに・・・

疑問に思ったが次はアリシアの紹介で遮られた。

アリ「次は私だね。私はアリシア・テストロッサ。フェイトのお姉

ちゃんです。フェイトと容姿が一緒なのは双子だからね この学校で楽しい思い出をいっぱい作りたいです。みんなよろしくね」

アリシアが可愛らしく、ウインクをする。また男子どもは吼えなかった。最後には俯く始末。

・・・？

分かった！アリシアたちが可愛すぎるからどう反応していいかわかんないんだわ！だからみんなしてこんな反応を・・・。

最後は私も気になっている謎の子。

？「名前は・・・ガラツ（失礼つ！！！！）」

転校生が以外にも男の子だった事に驚いたがそれは突如の来訪者によつて遮られる。

そいつは教壇の隣のドアを開け放ち、教室をキョロキョロと見渡す。

誰？あいつ・・・その突入してきたのは世間で言う美形の少年だった。将来かつこよくなるだろう顔を持っている。興味ないが・・・

男1「おいあいつって・・・」

一人のクラスメートの男子がそいつをみて何かを思い出したようだった。

潜めた声を聞いてみるとなんでもどっかの偉いとこの坊ちゃんらしい。それもアリサの

ところでそいつと私の目があった。それでズンズンと近づいてくる。

？」「・・・白銀麗華。僕と付き合え」

・・・。

そいつは教室のど真ん中で偉そうにそんな事をほざきやがったわ。普通クラスで告白する？

クラス中が騒ぎになり、転入生の自己紹介どころじゃなくなっってしまった。

麗「嫌よ、第一お前誰？」

即答してやった。

？「僕を知らないのかい？あはは、おもしろいなあ〜麗華は・・・」

笑いながら言ってくる男子。

「〜むかつ・・・知り合いでもないのに私の名前をこいつは平然と呼びやがった。

名前を汚された気分だった。こいつはもうモブ決定。

モブ「いいだろう、敢えて名乗ろうではないか！僕の名は（別に聞いてないし）なっ！」

私の冷たい反応に驚くモブ。

麗「あんたの名前がどうであろうと私には心に決めた人がいるの。だからさよなら」

しっしつと犬を払うみたいにする。

すると、

モブ「あはは、本当に冗談がうまいなあ。容姿端麗で選ばれた人のこの僕を君が振れる訳無いだろ〜」

きもっ！

あまりのキモさに次の言葉が発せられない。

モブ「さあ改めてまた聞こうじゃないか？当然君の答えはきまってるがね。」

モブの問いに一度騒いでいたクラスの子達が静まり帰った。視線は私に集まっている。

まあ・・・確かに答えは決まってるわね。

麗「NOよ。私の好きな彼はお前よりもかっこいいわ。それよりあんた邪魔さつさと消えて・・・」

変わらない答え+容赦ない言葉で奴の顔に青筋が見えはじめる。

モブ「この僕より美しい人がいるわけないじゃないか!!!」

いまだ振られた事を認めようとせず、しつこく聞いてくるモブ。  
・・・いい加減このやり取りうざくなってきたわ。

ガタンッ

私は席から立ち上がり、モブを睨みつける。

麗「私の好きな人は白銀結斗ただ一人。お前なんかより知的だし、綺麗。お前と比べるのすらおこがましい」

モブ「じゃ、じゃあその人を連れてきて貰おうじゃないか！まあいればの話だが。」

モブの言葉に再び騒ぎ始めるクラス。当然よね。その人は留学という形でここを転校している事になっているのだ一般的には。だけど今は邸にいる。呼べば来てくれるだろうが・・・

麗「（こんなことで呼びたくないわよ・・・）」

モブ「ほら、どうした？その結斗君を連れて来いよ」

私の言葉が途切れた事が白銀結斗がないという証明と思ったのかニタニタと私を見始める奴。

くっ！！こんなやつに嘗められるなんて！

？「じゃあ行つてあげるよ」

麗「えっ？」

モブ「へ？」

そこで今まで黙っていた例の転校生の声上がり、モブが間抜けな声を出した。

私も思わず驚いた声を出す。

モブ「だ、誰だよ！転校生がしゃしゃり出てくるな！！」

？「君が言ったんじゃないか？連れて来いって・・・」

そういつて転校生は髪を解いて、何も縛ってない状態にし黒いレンズの眼鏡を外した。

長く黒い髪が振り解かれ、それはまるで夜を照らす月の光のように美しい。

な・フェ・ア・す「結斗（君）！？」

なのはたちが驚きの声をあげる中、ゆうは歩いてきて私とモブの間に立ちふさがった。

結「ご紹介に預かった、僕が結斗。白銀結斗だ」

ゆうの佇まいに後ろに下がるモブ。ゆうの容姿の良さが自分以上だということに気づいたらしいが、



モブ「お、お前が麗華をたぶらかす奴か!！」

威勢よくゆうを睨みつけて言うモブ。その言葉に私は

パン

思わずそいつの頬を張ってしまった。そいつは床に転げ、私を見上げる形となった。

麗「ゆうを侮辱するのは許さない。それに・・・勝手に人の名前呼ばないで。気持悪い」

むっくりと立ち上がり私を睨みつけてくる。

モブ「なにしゃがんだ〜〜!!!!このあま!！」

大声で腕を振り上げ、こちらに向かってくる。それは鍛錬している私には簡単に避けられるもので  
カウンター

で返そうとするが突如私の前に立つ影。

パン

結「これは何のまねかな?・・・」

ゆうがモブの手を受け止めて、語りかける。

ゾクツ・・・今まで感じたことないほどにゆうが怒っているのがそ

の背中から分かる。

モブ「はな、離せよっ！」

モブが力を入れ手をとろうとするが掴まれた手はびくともしない。

結「女の子に手をあげる奴が素晴らしいわけない。ちょっとお仕置きね」

モブの額に差し出されるゆうの人差し指。

モブ「はあ？デコピンかよ、そんなの痛くもかゆくも」

モブは大きな声を出す。・・・あれは痛いわよ・・・  
ほくそ笑むモブに鉄槌が下される。

ピン・・・バアアアアアン

ガシャーーーーーン

ゆうはそいつにデコピンをして、吹っ飛ばす。結構吹っ飛んでから奴はぴくりとも動かなくなった。  
気絶してみたい。

シーーーーー

その光景に一齐に黙りだすクラス。先生もちょっと震えてるし……  
それにしても

あ、相変わらず凄い威力ね。この威力で傷つけないから尚凄い。

結「あ……やりすぎた……」

ゆづの茶目っ気の声が聞こえて私は我かえる。

麗「ってそんなことより……」

な「どうして、」

フェ「結斗が」

ア「……」

す「……いるの……」

次々と質問をし出す私達にゆうは苦笑を受かべたのだった。

結「白銀結斗です。一時留学という形で転校しましたがまたここで過ごすことになりました。よろしくね」

ゆうがニコツと微笑みながら言う。私はサツとみんなを見渡した。

じよ、女子みんなが顔を赤くなってる！！

元々ゆうは人気があった。頭いいし、運動できるし、かつこいいし。性格でも穏やかで誰にでも

訳隔てない。……さっきのモブみたいのは別だけど。

っとにかく！ゆうの人気は半端ないの。

麗「むむ〜〜」

思わず夕の人気ぶりに呻く私。隣をみると……

フェ「うう〜〜」

フェイトが唸っていた。可愛らしく唸ってる。

どうやら私と同じらしい。

他のなのはヤアリサ、すずかも同様のようだ。

担「はいっ！では結斗君は～～～以前の席ね。」

結「分かりました」

担「アリシアちゃんとはやてちゃんは・・・」

男1「先生！ここ開いてます！！」

シュビつと立ち上がり隣を指すクラスメイト男子1。

男2「ああ？なに言ってんだ！！俺がいるじゃねえか！お前こそそこをアリシアちゃんに譲れ！！」

隣にいた男子2が反論を言い出す。

それを機にクラス中で俺の隣とかって言い出す男子ども。

それを見た担任がちよつと声を大きくし、静止させる。

担「静かにつ～～～全く（あの～～～先生・・・）？何かしらはやてさん、アリシアさん」

がそこで騒動の当事者であるアリシアたちが弱々しく手を挙げる。

この後、はやてたちが言う言葉がなんとなく私分かる・・・。

私達・・・

は・アリ「私達・・・」

久しぶりの学校なので・・・

は・アリ「久しぶりの学校なので・・・」

友達の近くがいいんですが。

は・アリ「友達の近くがいいんですが。」

担「う〜ん・・・。確かにそうね〜はやてさんはまだ本調子じゃないようだし。アリシアさんは外国人だからいろいろ大変でしょう。・・・分かりました。それで誰の隣がいいですか？」

まんまとはやてらの思惑に嵌った先生。・・・先生今影ではやてたち親指立ててましたよ・・・。

は・アリ「えつと・・・その・・・」

・・・くぬぬ。私には見てるしかできない。

この後言う言葉は遮れない・・・。

は・アリ「結斗君の（ゆう君の）隣がいいです!！」

結「ほえっ?」

／／／ひ、久しぶりにゆうの驚いた顔見た。・・・かわいいってちがあああああう!!!!!!

あの子達の思い通りにさせないわよ!

麗「先生!!」

担「あら？麗華さんどうしました？」

いきなり立ち上がった私に先生が疑問に思う。はやてたちの好きにはさせないわ!!

だって・・・もし二人がゆうの隣になったら・・・私が

離れちゃう!!!!!!!!

それだけはなんとしてでも回避を!

麗「私、はやて達と友達です。(恋のライバルでもあるけど・・・)だから私の隣でも構いません!」

担「あらそう・・・じゃあ」

やった なんとか回避できそう。

アリ「先生、でも私ゆう君じゃないと不安です!」

くっ!アリシアめ。猫被ってゆうの隣をもぎ取ろうとしてる。

担「それもそうね~~~~」

ええ〜先生〜。

担「よっし、こうしましゅう」

数分後。

新しい私達の席……

はやて

女子A

アリシア

窓

麗

ゆう

フェイト

際

アリサ

なのは

すずか

といつことになったの。これならゆうはみんなのものだね。先生頭  
い〜〜〜

担「ではみなさん、今日も頑張って勉強しましょうね」

男子「おおお〜〜〜〜〜」

女子「はあ〜〜〜〜〜い」





TALE 45 えっ？「ここから始まるの？」（後書き）

結「TALE」

45!!!

やった~~~~~新章だよ!!

結「嬉しそうだね」

決まってるよ。だってここまで書けるとは思わなかったし。最初なんて

ただの自己満足な話しだったし。

結「そんな奇跡みたいに・・・」

そのとおり奇跡さ！ぶっちゃけシナリオ訳わかんないし、見てくれる人なんていないだろうなって思ってたもん。

結「まあこれから頑張って書いてね。」

がんばるさ~~~~

結「んじゃあね~~~~」

では~~~~

TALE 46 お弁当と騒がしい日常とクリスマスパーティーと（前書き）

くはっ！

みなさんはこれを読んだ後このように言ってください。

新章第二話です！

TABLE 46 お弁当と騒がしい日常とクリスマスパーティーと

結斗 side

数教「ええ〜だからここがこうなりました〜」

数学を教える若い男の先生の声をBGMに僕はこれからのことを考える。

これからのこと……まず執務官。警察と検察の権限の兼ね備えた法務職。

次に教導官。魔導師に魔法の使い方からアドバイス、それぞれの特性を導き出し、その人物の最適な戦闘方法を教える。捜査官。部隊を指揮し、現場の後方を担当。状況をいち早く判断し、最適な方法を導き出す。

……どれも大変なものだ。

改めてそう思う。だが僕にはこれらの資格がどうしても必要だ。これから為す大きなことのために……

フェ「ってば〜」結斗「ってば!!」

結「わっ!び、びっくりした〜」。驚かせないでよフェイト。」

フェ「ううう〜」結斗「気づかなかったから!」

膨れっ面するフェイト。その顔は怒っているというよりも、気づいてくれなかったから拗ねている感じがした。そんなのはのかわいー一面を見て苦笑しながら用件を聞く。

フェ「お昼だからみんなで一緒に食べよって誘いに来たんだ。」

結「そっかじゃあいこっか」

席を立ち上がり、先に教室を出ようとしたフェイトに続く。なのは「たちはいない。どうやら先に行ったみたいだ。」

女子A「結斗君」

その時後ろから声を掛けてくる女の子。振り返ると大人しめな子が「もじもじしながら立っていた。」

この子は僕の前に座っている女の子でクラスの中心人物みたいな感じかな。分け隔てないし、優しい。ちなみにこの子もフェイトたちには劣るが美少女だ。

結「ん?なにかな?」

折り返し聞く。

女子A「／／／あのっ・・・そのっ・・・私達と一緒にお昼ご飯食べない？」

しどろもどろになり、いきなり後ろを向いてまた僕の方を向いて恥ずかしそうにいう。

なんだろ？どこ向いたのかな？

そう思つて彼女の向いた方をみると五、六人で机を固めた女の子の集団がお弁当を囲んでこちらを見ていた。どうやらこの子が代表で僕を誘いに来たらしい。

結「あの〜ごめんね。今日は麗やフェイトたちと一緒に食べるんだ。先に誘われちゃって・・・」

女子A「そ、そうなんだ・・・」

シヨポ〜〜ン

と一気に落ち込む。

そこまで落ち込む事かな？

結「で、でも誘ってくれてありがとう。今度一緒に食べよ」

女子A「うん!」

フロアの言葉に笑顔に戻って待たせてある女の子の集団のほうへその子は帰っていった。

それを見届け教室を出ようとするが・・・

結「わわっ!!・・・ふう・・・フェイト・・・僕を驚かせるのそんなに楽しい?」

廊下と教室を遮る扉の影に隠れていたフェイトに言う。

ジ~~~~~

がフェイトは僕をじつとみて答えなかった。その目は細くなっている。てなんかやらしかった。

結「ねえフェイト?」

つ~~~~~ん

フェ「結斗もてもてだねっ!」

結「えっ?」

いきなり言われた言葉に理解が追いつかなかった。  
は？もてもて・・・？

フェ「結斗は今クラスの女の子から狙われているんだよ！」

結「？狙われてる？」

フェ「そう・・・」

つゝゝんとまたあさつての方向を向くフェイトに疑問に思つ。  
あっ！もしかして！！

結「・・・パ、パシリの対象？」

ズゴゝゝゝゝゝゝ

おおフェイトがずっこけた。うう、フェイトがこんなに感情豊かになつて僕は嬉しいよ・・・

フェ「ち、違うよ！ってどうして結斗涙目なの？」

結「いや・・・ぐすつ・・・フェイトが感情豊かになっているのが嬉しくってね。嬉しくて泣いちゃった。えへへ」

ハンカチで涙を擦りながら僕はフェイトに努めて笑顔になる。

フェ「／／／／・・・あ、ありがと・・・。」



結「ん？」

小さくて聞こえなかった。

フェ「その・・・今の私があるのは結斗のおかげだから・・・」

真剣に僕の目を見て言うフェイト。

僕が励ました時の事をいつているらしい。その通りなんだが・・・僕は首を横に振った。

結「違うよ。確かにきっかけは僕かもしれない。けど、フェイトが自分を始めたからそうだったんだ。勇気を振り絞ってプレシアさんに会ったからさ。それは君の力だよ。強い・・・ね」

自然とフェイトの頭を撫でながら呟く。

もちろんなのはヤアリサ、すずか、そして麗のおかげだと思うけど。そんな事はもうフェイトだって分かっているだろうから言わないでおく。

フェ「／／／み、みんなが待つてるから早く行こ。」

結「うん。分かった」

またフェイトの後姿を追いかけける形になるが二、三步しないうちに歩みが止まった。

フェ「あ、あの結斗・・・」

結「ん？どつしたの？」

フェ「手……」

て……？

フェ「手繋いでもいいかな？」

恥ずかしそうに俯きながら言うフェイト。  
？よく分からないけどそのくらい……

結「別にいいけど。どうして？」

フェ「……私結斗が帰って来てから頭を撫でてもらっしかしてもらってない……」

そうゆうことか……。

結「分かった……はい」

僕は右手を出す。左手には大きな包みがある。中身はじきに分かるよ。

フェイトは恥ずかしそうに僕の手を握った。

フェ「うん……ありがと……」

結「どついたしまして」

フェイトの手は暖かった。

屋内テラス――

ここは聖祥全学年の生徒が使えるテラス。多くの窓が取り付けられ、そこから差し込む光が明るく照らしている。ちなみに収容数は半端ないくらいに大きい。また今は冬なので外で昼食を取らずにここに生徒は集まるためこれ程の賑わいをしているのだ。

僕とフェイトがついた頃にはテラスは満席の状態だった。

結「え〜〜と〜〜なのはたちは・・・」

フェイトの左手を握りながら僕はなのは達の姿を探す。だがいかんせん僕は背が低い。いや低いといっても平均身長なただけだね。とにかくそのため中学生や大学生の背で全く見えない。

結「どこにいるのかな？フェイトどこか分かる？」

フェ「……………」

あれ？フェイトから応答がない。

気になってフェイトへと顔を向ける。どうやら

じっと繋いでいる手を見ていて気づかなかったようだ・

結「フェイト……？」

ひらひら顔の前で手をひらひらさせるとやっと気づいたのかこちらに聞いてくる。

その顔はさっきと変わらず赤かった。

フェ「えっ？…………ど、どうしたの？結斗」

結「いや・あのね。なのはたちがどこにいるのか知らないかなって思って聞いたんだけど……………」

フェ「う、ううん。私も分からない。…………でもなのはか麗華の魔力をたどればわかると思うけど……………」

結「おお……そういえばそうだね……………っと見つけた。よしいこっ！フェイト」

フェイトのナイスな提案に僕は

魔力を頼りにフェイトの手をひいていった。その時なにやらやたらと注目された。

中男「なあ……あれ……………」

中女「かわいいわね。手繋いで〜」

僕とフェイトの方を見ながら言う中学生の人たちに目が合わないようにしながら僕はなのはらのところを目指した。その間フェイトはなんかうつうつ〜って唸ってた。

ア「もう〜遅いわよ！」

結「ごめんごめん・・・」

到着一番にアリサから言葉を賜った。  
着いた場所は丸机を囲んだ大人数用の席だった。僕たちもそこに混ざる。ちなみに僕の隣はフェイトとアリシア。

麗「ねえゆづ？」

結「どしたの？麗」

食べようとしたら麗に眩かれる。

麗「・・・どうしてフェイトと手を繋いでいるの？」

麗の冷たい視線がフェイトを射抜く。フェイトは……ビクッと震えてその視線に対抗している。かわいそうなので助け舟を出してやる。

結「これ？フェイトが僕が帰って来てから頭を撫でる事しかしてないなあって思ってたやっってるんだ」

僕がという部分を強調して言う。これなら麗はむくくとしか言えないだろう。

麗「むむむ……」

本当に唸ってる……

結「そんなことより早くご飯食べよ」

麗「う……うん……あ……」

釈然としなさそうな麗を尻目にみんな自分の弁当を包みから出そうとしたら麗の声が上がった。するとどんどん麗の肩が尋常じゃない速さで落ち込んでいった。

す「どっどっどしたのっ！？麗華ちゃん」

その落ち込みように心配になったさすがに心配する。他のみんなも視線を集める。

麗「お……お弁当忘れた~~~~~!!!!!!」

うえええええええん

と泣き出す勢いで叫ぶ麗。はあ~~~~

アリ「麗華ちゃんお弁当忘れちゃったの？」

は「あちゃ~~~~大変やな。」

麗「ぐすつ……私もう生きていけない……」

ア「そ、そこまで……？」

な「麗華ちゃん……」

麗「だって！だって！ゆうの久しぶりのお弁当なんだよ！」

フェ「？……結斗料理できるの？」

麗の叫びに疑問に思ったフェイトが聞いてくる。そういえばこの中で僕が料理できるの知らないのフェイトだけだ。はやて、アリシアは一緒に作ってたし。アリサ、すずかには前僕の卵焼きを食べさせてあげた。

結「うん、作れるよ。そんなに上手くはないんだけどね」

アリ「あれで上手くないって……」

は「結斗君は……世辞が過ぎるんや。」

？

な「フェイトちゃん、結斗君の料理すっごい美味しいんだよ。お母さんと同じくらいに!」

大げさにいうなのはに苦笑しながら僕は当初の問題である麗のお弁当について戻る。

張本人の麗は……

麗「うう〜私もうかえろっかな……」

鬱になっていた。ここまで来るとかわいそうになってくる。

結「れ……麗……」

麗「なあに……ゆう……」

涙目の麗。そこまで大切なんだ……。

結「はい……麗のお弁当」

麗「えっ……。ほ、ほんとに!??」

途端に顔を上げ机に出された包みを凝視する麗。さっきフェイトと手を繋いでいた時に持っていたのはこれだった。

今朝麗がお弁当を忘れた事に気づいたからもってきておいたんだ。

結「もちろん麗のだよ。持ってきたんだ」

麗「ゆう……ありがとう!」



さっきとは打って変わって笑顔をいっぱいにして言う麗。  
全く表情がころころ変わるんだから・・・

結「さっ！食べよ！いただきます」

みんな「いただきます！」

自分のお弁当をつつき始める。

そこで隣から僕の弁当を注視するものがあつた。

結「フェイト・・・食べてみる？」

なのはが言っていた桃子さん程の料理の腕前に興味に誘われたフェイトだつた。

あまりにその熱視線に尋ねる。

フェ「じゃじゃあ・・・た、卵焼きを・・・」

結「ふふ、はい。あ〜ん」

フェ「ゆ、結斗っ!？」

麗・な・は・アリ・す・ア「なっ!!!!!!!」

俯きながら言うフェイトに卵焼きを口元に持っていつてあげる。  
隣でなんか驚愕の空気になっているが僕は知らない。

結「ほらっ、口開けて・・・あ〜ん」

フェ「／／あ・・・あ／／／／」

小さなフェイトのお口が開けられ、卵焼きを食べさせてやる。

フェ「お、美味しい!」

結「ふふ・・・良かった。」

顔が綻んだフェイトをみて僕も自然と笑顔となった。

さて・・・昼食の続きをと・・・あれ?・・・

結「ね・・・ねえみんな・・・」

みんな（フェイト以外）「どうしたの（んや）?」

結「みんなの弁当がどうして僕の前にあるのかな?」

僕の青色の弁当の隣には様々な弁当の姿。先ほどまで自分の持ち主のところにあつたものがどうして一斉に移動を・・・?

弁当の持ち主、なのはやアリシア、アリサまでのフェイト以外のお弁当が置かれていた。

一体なぜ?・・・供え物?

な「フェイトちゃんだけずるいから・・・」

す「私達にも・・・」

は「欲しいなあ〜」

三人がリレーのように言葉を言っていく。その顔は笑顔なんだが・・・なんか怖い。

結「つ・・・つまり・・・」

このあとと言われることを静かに理解する。

ア「結斗が・・・」

アリ「私達に食べ・・・」

麗「させるってことよ!」

結「そ、そんなことしてたら昼休み無くなっちゃうよ〜」。

アリ「そんなのはどうでもいいの。とにかくゆう君は私達にあ〜んで食べさせないといけないのです!」

僕の抗議に人差し指を立てながら先生みたいな事を言うアリシア。

みんな「うんうん・・・」

一斉に首肯する方達。

みんな大いにアリシアと同意見のようだ。

なぜこのようなことに?・・・

くいきい・・・

そこで制服の端が引つ張られる。その犯人はフェイトだった。

フェ「結斗・・・私にも食べさせてね・・・」

・・・全く。初日から騒がしい日々だよ・・・。

一人心中で愚痴った僕だった。

その頃白銀邸では・・・。

焰「ゆう~~~~~」

静「ゆう様~~~~~」

結斗のデバイス二人が玄関の扉に掴まって叫んでいた。

外から見るとまるで刑務所に収監されている囚人みたいな光景である。

美「二人とも！仕方ないでしょ！今日はデバイスとしての機能チエツクの日なんだから！」

その囚人らに慈悲のない言葉が掛かり二人は首元を掴まれ引きずられていく。

今日は二人のフルメンテの日だ。そのため結斗とは一緒に学校に行けなかったようだ。

焰「美緒！お主我らが嫌いなんじゃない！」

澁「そうですね！何も今やらなくても！」

引きずられながらもぶくぶく文句垂れる二人に額に手を当て呆れる美緒。

美「あのね〜そんなわけじゃない。あなた達の事を思ってるのよ。あなたたちは異例な存在なのよ。人型のインテリジェントデバイスって……。それに万が一必要な時に調子が悪くて作動できなかつたら嫌でしょ？」

焰・澁「うぐっ！」

美緒の指摘で同時に呻きだす二人。

美「それにゆうちゃんに頼まれたのよ。」

漣「なんてですか？」

不思議そうに尋ねる漣に美緒は微笑む。

美「あなたたちを無理させすぎたからメンテしてあげてっ。あと二人は僕の大切なパートナーだっって言ってたわよ。」

焰・漣「／／／／／」

美「二人が大切だからこそいつも元気でいて欲しいっ。それにあなたたちはただでさえ創醒の書で他のデバイスとは打って変わってるんだからきちんと調べないといけないのよ」

焰「むむむ・・・仕方ないの」

漣「ええ。不本意ですがゆう様のご意向もありますし、素直に聞きましょう・・・」

美「良かったわ。さあ始めるわよ！」

焰「なあ美緒？」

やっとはじめると思われたときに焰美に待ったをかけた。

美「何？焰美・・・」

焰「その・・・今日ゆうはいつ帰ってくるのかの？」

美「うっくん今日は・・・遅くなるって言ってたけど。何でもなのはちゃんの家クリスマスパーティーをするから・・・」

焰「なにっ!?!?・・・そうか・・・遅いのか・・・」

ズ~~~~~ン

愕然とする焰美。ついでに瀨も。

美「?そんなの行けばいいじゃない?」

瀨「!!そうですね!さっさとメンテをしていけばいいんですよ、

焰美!」

焰「う、うむ!!そうだな!」

途端に元氣復活する二人。元氣なものである。

美「さて気を取り直して、さっさとメンテするわよ〜」

焰・瀨「お~~~~」

二人がやる気にみちた声が邸を超えて道路まで聞こえ、前を通りがかった通行人がなにかしらと呟いたそうな・・・

戻って時間経過……

放課後……

お昼の人騒動があつて、僕は幣易しながらも午後の授業を受けた。僕がいなかった間にそれ程進んではいなかったので存外楽に先生の話しを聞くことが出来た。

そして現在……。今はみんな一旦家に帰り、なのはの家に向かっている。僕と麗も邸に一旦帰り、私服へと着替えて邸を出た。その時焰美と滯がとても上機嫌だった。母さんに聞いてもうふふと微笑んでばかりではぐらかされた感じ。

まあ今はそれよりもなのはのところへ向かうのが先決だ。白銀家全員で邸を出る。

今日は12月24日。クリスマススイブだ。だからみんなが集まりパーティーをしようという話だった。

参加者は高町家、ハラオウン家、八神家、バニングス家、月村家、それに白銀家だ。

麗「ねえゆう……」

結「ん？」



麗「今日話してくれるの？その・・・行方不明になったあとのことと・・・」

横を歩く麗に真剣に尋ねられる。

結「そのつもりだよ。それになのはもうそろそろ魔法の事話すだろうしねいきっかけさ。それと・・・僕がどうやって帰ってきたか気になるんでしょ？」

麗「もちろんそうだよ・・・虚数空間からは出られない。これが常識だから・・・」

麗達にははやてらと会う前のことはまだ話してなかった。もちろんアースラのクロノヤリンディさんも同様に。  
纏まったところで話そうと思ったのだ。それが今日というわけさ。

結「まあ・・・ね。とりあえず今はなのはの家に向かうよ。話しはそれから」

美「ほら二人ともいくわよ〜」

先をいく母さんにせかさながら僕と麗は急いで母さんを追いかける。僕の耳にある二つの色違いのイヤリングが夕日に照らされて赫く、そして蒼く強く輝いた。

リ〜〜〜〜ン

翠家の扉をくぐり、中へと入る。

扉にはすでに準備中の札が掛かっていたがそれはパーティをするため店を閉めることを知っていたので構わず僕らは中へと入った。

桃「あら？美緒さん」

前にいた客の後片付けをしていたのか一番最初の声を掛けてきたのは桃子さんだった。

あ・・・相変わらず若作りだよね・・・。

改めてそんな事を考えていたが母さんと喋っていた桃子さんが僕へと視線を向けた。

桃「結斗君・・・よね？」

結「お久しぶりです。桃子さん」

半信半疑だったのか尋ねてきた桃子さんに笑顔で答えた。

それで納得がいったのか喜びだす桃子さん。

桃「びっくりしたわ。留学したって聞いていたから」

結「それは違います。」

きっぱりいう僕に桃子さんはちょっと戸惑う形になる。

その顔のまま

桃「どうゆづことですか？」

母さんに尋ねる桃子さん。

美「桃子さん……あのね……この子ちょっとした事件に巻き込まれていて……」

桃「ええっ！？大丈夫だったの？」

慌てだす桃子さん。

事件って……

結「母さん、事件じゃないでしょ。ただ行方不明になってただけだよ」

麗「それは事件って言うのよ……」

焰・澪「うむ／はい……」

僕の応答に呆れたように言う麗と焰美達。

桃「……事情があるみたいですね……」

悟ったように聞いてくる桃子さん。さすが桃子さん。ちゃんとわかっ  
つてくれる。

結「そのことは後で……クリスマスパーティーの前に言います。あ  
と……なのはのことも聞いてますよね？」

桃「ええ。あの子から話したいことがあるって聞いてたけど・・・」

結「そのことにも関連があるんです。その時にでも話します・・・」

桃「分かったわ。じゃあ私厨房に入りますね。」

厨房に消えようとしていた桃子さんを追いかける。

麗と母さんは解散といった感じに飾り付けやらなんやらをしていた。

結「あ！じゃあ僕も！！」

桃「あら？結斗君なのはから聞いてたけど料理できるのね？」

結「はい、白銀家の料理はほとんど僕が作っていました。」

桃「それは凄いわね。それじゃあ腕前見せてもらいましょうか？」

うっっ〜プレッシャーかけてくれるなあ・・・

結「が、頑張ります・・・」

桃子さんにプレッシャーに負けそうになりながらもそう答える事が出来た。

Next t o T A L E 4 7 ! ! ! ! ! ! ! !



TALE 46 お弁当と騒がしい日常とクリスマスパーティーと（後書き）

GWだ~~~~~!!!

麗「いえ~~~~い」

おや？めずらしく麗華ちゃんがはちゃけてますね。  
どうしたのですか？

麗「どうしたもこうしたもゆうが帰ってきてくれたからよ。しかも  
お弁当も食べられたし・・・」

なるほどだからご機嫌なのですね。

麗「そうよ。ところで次はどんなものなの？」

え〜次はセオリーどおり結斗君がはやてちゃんとの暮らしてると  
きのこととかを書こうかと思えますね。  
そしてパーティーですね。

麗「次も何かが起こる？」

もちろんです!!

この章で何かが起きないっていうのはないようにするのが今の  
目標です！

麗「そう〜また次回」



T A L E 4 7 今まで（前書き）

GW中にこれで二話投稿です。

頑張って投稿しましたが雑になってます。しかも短いです。



T A L E 4 7 今まで

なのはside

結斗君のいるテーブルを囲んで私達は結斗君の口から放たれる言葉を待ちます。

今日はクリスマスパーティーというわけでフェイトちゃんやはやてちゃん、それにアリサちゃん、すずかちゃんを交えてのにぎやかなパーティーとなるはずだったのですが、結斗君が言いたいことがあるというので待っているというわけです。

結「さて・・・何から話しましょうか・・・」

士「結斗君・・・事件に巻き込まれていたと桃子から聞いたが・・・」

口火を切ったのはお父さんでした。

本当に不思議に思ったのでしょうか。お父さんを含めた魔法を知らないアリサちゃんやすずかちゃんもそのようでした。

ただ事情を知っている私を含めた事件に関係した者たちがフェイトちゃんとアリシアちゃんの顔に影が差し込むの気づきました・・・

ガタッ

その時結斗君が立ち上がり、フェイトちゃんとアリシアちゃんの方へ歩いていき優しく撫でてあげ静かにいいいます。

結「気にしないで……ね」

士「？」

事情を知らないお父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃんが不思議に思っているのが分かりました。

結「士郎さんの問いにはある意味ではYesですがそれは自分が招いた結果です。」

きっぱり言う結斗君。

桃「では……真実は……」

答えを急ごうとするお母さんに手を出しその先を言わせないようにして

結「その前に……士郎さん達に聞きたいです。あなたたちは魔法を信じますか？」

と尋ねる結斗君……

結斗君の口から出た魔法という非科学的な言葉にお父さん達はやはり俄かには信じられないように表情が崩れます。

恭「魔法だった？」

美由紀「そんなの・・・ねえ・・・」

恭「ああ。俄かには信じられないな。」

結「どうしてですか？恭也さん、美由紀さん・・・」

平然とその理由を尋ねる結斗君にお姉ちゃんが笑いながらそれに答えます。

美由紀「だって魔法って作り話の話でしょ？」

結「常人のひとから見たらそうでしょうが・・・美由紀さんや恭也さん、それに士郎さんは違うでしょう。御神の剣士でもあるんですから・・・あなたたちの奥義、神速もほとんど魔法に近いでしょう・・・」

士「あれは身体のリミッターをはずしているだけだ。魔法ではないよ・・・」

尚も信じれないというお父さん達に痺れを切らしたのか自分の付けているイヤリングを指し示しました。

結「・・・まあいいです。それじゃあ論より証拠ですね。焰美、瀧出てきて・・・」

焰・瀨「うむ……」「はい……」

高町家（なのは以外）「どこから声がつ!?!」

いきなり聞こえた聞き覚えの無い声に動揺するお父さん達。

ピカアアアア

私達のいるラウンジを一瞬の光が満たし、後にいつの間にか結斗君にもたれ掛かっている同年代の女の子二人が出現しました。  
焰美ちゃんと瀨ちゃんです。

つてずるいです……

結「これで魔法が信じられましたか？」

お父さん達があんぐりと口を開けているのを面白そうにみながら尋ねる結斗君。

士「こ……この子達は……」

結「僕のデバイス……いってみればパートナーです。デバイスって言うのは魔法を使う際に必要な媒体の事です。通常デバイスは人工知能を持つ機械ですが焰美達は特別製でして人間になる事ができるんです。」

恭「……分かった。結斗が魔法使いということは理解した。そ

れで……」

美由紀「どうして私達にそれを話したの？」

結「それは……本人から聞いたほうがいいでしょう……。なの  
は？」

そこで結斗君が出て行きやすいように合図してくれました。

な「うん……。あのね。お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄  
ちゃん……」

桃「なのはが……？」

もしかしてと先を読んでお母さんが確かめるように聞いてきます。

な「うん。私も魔導師なの……。あのね……」

それから今までであった全ての事を私は四人に話しました。四人は静  
かに聴いてくれていて、私では説明しにくい事や分からない事は結  
斗君が代わりに話してくれました。

な「………といつことなの」

士「だからあの時のなのは・・・落ち込んでいたということか。  
結斗君が行方不明となればああなるな・・・」

お父さんが言っているのは結斗君が虚数空間に落ちて行方不明にな  
った時の事。

その時私は麗華ちゃんほどではないけどとても悲しくて何をするに  
しても結斗君のことが気にかかってしまっていました。

思えばこの時から私は結斗君が好きだという事を意識し始めのかも  
しれません。

結「ごめんね、なのは・・・」

な「ううん。結斗君が無事だったからそれでいいの。」

申し訳無さそうに言ってくる結斗君に私は気にしないでの意味を込  
めての笑顔をしました。

なのはの士郎さん達への話しは終わった。士郎さん達だけではなくアリサやすずかも驚いている様子だった。やがて再び僕に話しの矛先が向けられた。

リ「それで・・・結斗君はどうやって虚数空間から脱出したのかしら？」

今まで黙って話を聞いていたリンディさんが話題展開をしてくれた。

結「あの時・・・麗をアースラへ転送した後、僕は術の反動で気絶してしまいました。そしてふと目覚めた時手にはこれがあったんです・・・」

僕は創醒の書を出す。以前はやて達に見せたときと変わらずの様子で白く輝いている創醒の書を。

ク「っ！！なんて魔力だ！」

リ「・・・これはロストロギアね。」

結「はい・・・こいつの名前は創醒の書。ここに全ての魔法の原典であり、いかなる魔法でもここに内包されています。」

ク「じゃあ死者蘇生もかつ!？」

僕の簡潔な答えにクロノが座っていた席を立ち、焦りながら聞いて

くる。

リ「ちょっとクロノ……」

それを諫めるリンディさん。クロノも自分が未だにその願いを持っていた事を恥じたのか静かに座る。  
それを見届け

フルフル

期待には答える事が出来ずに僕は首を横に振った。

結「それは無かったんだ。そもそも死者を蘇生させるって言うのは最大の禁忌。やってはいけないこと……。」  
魔法っていうのはそもそも等価交換なんだ。何をするにしても魔力が必要になってくる。だから蘇生となればどれほどの対価を支払わないといけないか想像できない。第一人間と等価値なんてものはないんだ……」

ク「……そうか……その通りだなすまない。取り乱した……。」

結「いいよ、誰だって愛した人を蘇らせたっていう願望はあるもの……。」  
さて話を戻しますね。僕が創醒の書を手にした時、流れ込んできたんです……」

美「流れ込んできた……？……何が……？」



結「虚数空間から脱出する方法だよ。これで僕は脱出する事ができたんだ。」

一同が静まり返る。未だ半信半疑のようだ。無理も無い・ロストロギアとはいえそう容易くあそこから出られるとは思わないからね・。。。

フェ「・・・それで結斗はどうやって・・・姉さん達を人間にしたの。やっぱり書の魔法？」

とりあえず虚数空間でのことは置いておいてフェイトが聞きたがっていたであろうことに答える。

結「うん。そうだよ。たださっきも言ったとおり人間を蘇生するなんて出来ないからアリシアをユニゾンデバイスとして転生をさせたんだ。焰美たちも同様にね」

フェ「そう・・・なんだ・・・」

自分が思ったとおりの答えで安心したような不安なような顔をしたフェイトがする。

麗「それで・・・？」

ここで静かに聞いていた麗が口を挟んだ。麗の口からは僕の予想し

たとおりの事が発せられる。

麗「対価は・・・？」

結「・・・・・・・・」

みんな「じ〜〜〜〜〜」

うん・・・聞こえなかった事にしよう・・・。

敢えて聞こえなかった振りをしてみんなの反応をみるがみんなして僕を疑わしい目で見てくる。

な「結斗君・・・？」

フェ「結斗・・・・・・・・」

ア「あんた一体何を対価にしたのよ・・・」

す「結斗君・・・？」

澪「ゆう様の魔力ですよ」

結「澪！」

澪の言葉を咎めるが気にした様子も無く変わって話してしまう澪。

澪「仕方ないですよ。いずればれてしまう事なんですから」

焰「そうじゃな・・・」



な「はやてちゃんの家に移り込んだというわけなの？」

結「うん。・・・あとははやてたちも知ってのとおりだよ。」

は「なるほどな。」

麗「それではやてたちとはどんな風に暮らしてたの？」

結「あはは・・・。」

は「私らと結斗君の出会いはそのりゃあ衝撃的なものだったなあ。」

な・フェ・麗・ア・す「衝撃的っ！！！！???。」

お～～いはやて～～みんなに誤解されるような言い方はやめてくれ  
～～～

は「せや！あれは・・・。」

僕の話が終わると今度ははやてが話だし、士郎さんたちに説明していった。最初は若干はやての説明に不安になったがまあ詳細に述べていたよ。

フェ「はやてが結斗と暮らしそんなだったんだ・・・」

な「はやてちゃんも結斗君に助けられてたんだね」

は「せやで〜。結斗君は私のナイト様や〜」

ナイトつてまだ続いてたんだ・・・

まあ・・・吝かじゃないけど僕に務まるのかな？

結「まあともかくそんな感じなんです。リンディさん・・・」

リ「事情は分かりました。それで結斗君は創醒の書はコントロールが出来るのですね？」

結「それはもちろん。書の機能を使うにはまた膨大な魔力が必須ですが完全な制御下です・・・」

リ「分かりました。この事は上には言いません。クロノ執務官もそれでいいですよね？」

ク「ええ。もしこの事がばれると創醒の書は処分と云う形になってしまい下手をすればアリシアも強制送還される可能性がありますからね」

リンディさんとクロノが僕の危惧していた事を防いでくれた。

結「有難うございます。リンディさん、クロノ。」

二人に丁寧に頭を下げる。それに一人が慌てて頭を上げるように促される。

リ「あなたには何度も救われたのだから当然よ。それに私は美緒の親友ですからね」

ク「君には母さんやエイミィを救ってもらった借りがあるしね。それに僕らは友達だろ？なら友を助けるのは当然だろう？」

結「ふふ。ありがとクロノ。だけど少し違うかな？」

ク「？」

結「親友だよ」

ク「ふふ・・・そうか。」

照れそうながらもうれしそうに言うクロノに僕も笑顔になる。

結「あつと・・・もちろんユーノもね〜」

ユー「ありがとう。」

パンッ

いきなり手を叩く音がしてみるとそれは桃子さんだった。

桃「さて！堅い話はこのまでにしませんか？」

リ「そうですね。もう話すべきことはないようですし……」

美「じゃあお待ちかねの……」

な・フェ・は・麗・アリ・ア・す「クリスマスパーティー……」  
「いえええええええい」

母さんの合図でみんなが一斉に騒ぎ出す。そして桃子さんが次々と厨房から料理が出てくる。僕も手伝ったが凄い量だ。

な「わ……お母さん。凄い量だね……」

その量になのはが驚きの言葉を発する。他のみんなもそれと同じようだ。

桃「そうね……久しぶりに張り切っちゃったわ。それにこれ全部私  
が作ったわけじゃないわよ」

は「もしかして……」

桃「ええそうよ。結斗君も手伝ってくれたわ、びっくりしちゃった  
わよ。小学生があんなに料理が上手なんて……」

フェ「じゃあこれが結斗の実力？」

は「やっぱり結斗君はすごいなあ。私も負けてられへんな。妻

より夫が料理上手なんて面目たたへんからなあ〜」

そして桃子さんの持つてきた料理を機に一人また一人と料理に群がっていった。

その中でも一際凄い方達が……

ヴィ「うめ〜〜〜〜」

麗「おいし〜〜〜〜」

この二人。

物凄い勢いで二人の胃袋に消化されていく。

アリ「ヴィータちゃん、麗華ちゃん！食べすぎだよ！！すぐになくなっちゃうよ〜〜〜」

アリシアがその光景を見て嘆きながら負けじと食べていく。  
そんな折に声を掛けてくる人が……

恭「結斗……」

恭也さんだった。後ろには土郎さん、桃子さん、リンディさんそれにシグナム、リンフォースの姿が。

結「どうしたんですか？早く行かないとヴィータ達に全部食べられちゃいますよ？」

士「もちろん、それは頂くよ。けどね……」



リ「あなたにまた心苦しいんだけど頼みがあるのよ・・・」

結「頼みですか？」

シ「ああ・・・主たちのことだ。」

士「さっきの話からなのはが魔導師だという事が分かった。」

恭「おそろくなのはもフェイトちゃんたちと一緒にに管理局に入る事になるだろう。」

結「そうですね・・・なのはは優しいから。魔法で多くの人を救いたいと思っっているでしょうね。もちろんフェイトはやてもそんな感じでしょう・・・」

桃「だから・・・なのは達を見守ってあげてほしいのよ。」

結「・・・それは構いませんよ。友達ですから。」

リイ「そうか・・・」

結「安心しろとは言えませんが僕の出来る限りで彼女たちを守っていこうと思います」

士「ありがとう・・・ただ結斗君自身も傷ついてはいけないよ。なのはたちが悲しむから・・・」

結「はは・・・肝に銘じておきますよ」

僕の返答に嬉しく思ったのか保護者一同は料理の方へ向かっていった。

自身も・・・か・・・

焰「ゆう・・・」

結「何？焰美・・・」

今度は側で見ていた焰美が声を掛けてきた。

焰「士郎らが言っておったとおりじゃぞ・・・ゆうが傷ついては我は悲しいからな」

結「うん・・・そうだね・・・僕が動けなかつたらなのはたちを助けられないからね・・・」

焰「そうでは・・・ないのじゃが・・・まあ今はそれでよい」

納得が言ってなさそうだ・・・。

結「ほら焰美もいっておいで、ケーキもあるから・・・」

焰「うむっ」

嬉しそうに焰美はかけていった。  
するとまた一層騒がしくなった。

焰「麗華！！それは私の好物なのじゃ！！！」

麗「知らないわよ……だ。早い者勝ちよ!!」

ヴィ「じゃあこれは私のもんだがんな!」

麗「あ……!! ヴィータ!!!」

向こうで騒がしい食事が続いている。僕もまざろつと立ち上がり行くとみんな笑顔で迎えてくれる。

ア「ほら結斗! あんたの作ったものなんだから早く食べなさい」

す「ほんと美味しいよ……」

は「結斗君……今度また一緒に夕食作ろうな……」

な「はやてちゃんずるい! 私も……」

フェ「結斗……私が食べさせてあげるね」

アリ「フェイト、お姉ちゃんを差し置いてなんてことを!! ゆう君に食べさせるのはわ・た・し……」

みんなして声を掛けてきた。今はこのときを大事にしよう。壊れないように。壊されないように……いつまでもこんな幸せな時間が続くように祈りながら……

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
4  
8  
!  
!  
!  
!  
!

T A L E 4 7 今まで（後書き）

あと三日でGWが終わります〜。これでGW中の投稿は最後かもです。

かもっていうのは以前もやりましたが半日投稿

これが出来ればです・・・。

不可能ですが・・・。自分でもあの時が一番フイーバーしてたなと思いますね。

愚痴になるかもしれませんがオリジナルですし・・・  
時間がかかりますから・・・。文才無いですしね。

とりあえずこれからも頑張ります〜

B A L D R S K Y でした！

TALE 48 とある女の子の一日（前書き）

とある女の子はすぐに分かります。

いろいろ言いたいことは後書きで言います。

それではごっごー！

TALE 48 とある女の子の一日

AM 5 : 15

フェイス side

フェ「んん……」

夢見心地な気分では瞼を開ける。そこには三、四ヶ月の間見慣れた天井が広がっていた。

フェ「んん」おはよう。バルディッシュ「

バル《Yes sir》

身体を起こして座った状態で伸びをし、脚を床へと下ろす。机の上にあったバルディッシュに挨拶をし、スリッパを履き、暗い部屋に光を取り込むためにカーテンを開く。

ガラツーーーーー

内と外での温度変化で水滴が付着している窓を開け放つと一気に冷たい空気が部屋の中にあつた暖かい空気と交じり合い未だ眠りを訴える体がシャンとなり背中がピツと伸びた。

フェーん~~~~ふう・・・今日も楽しい一日でありますように・・・  
」

いまだ暗い空に言うと私の言葉と白い息は未だ目覚めるものの少ない町の空へと消えていった。  
それを背後に私は部屋を出た。

トントン

通路を歩いてリビングの方へ進むと聞き慣れた音が耳に入る。  
この音が聞こえるとなんでか私は嬉しい気持ちになるんだ。

フェー「おはよう、母さん」

リ「おはよう、フェイト。今日も早いよね」

フライパンを操作しながらいう母さん。



私は今ハラオウンの家に住んでいる。というよりリンディさんが私と姉さんを養子にしたいと言ってくれたので正式に私はハラオウン家の一員だ。

そうゆうわけで私はフェイト・テストロッサ・ハラオウンという名前だし、姉さんはアリシア・テストロッサ・ハラオウンというわけになる。だからリンディさんは私の母さんだし、クロノはお兄ちゃんというわけになるんだ。

それにテストロッサの名を残させてくれたから嬉しかった。それから養子になる前・・・

アリ「だったら私ゆう君のところの養子になりたい！」

と我俣を言ったが、

結「アリシア、そういつてくれるのは嬉しいけどフェイトと一緒にいなくちゃ・・・たった一人に家族なんだから・・・ね」

と結斗が説得をしてくれたので何とか事なきを得たのは私達だけが知るところ。

そんな事を考えていると母さんが私の返答を待っていた。

フェ「うん・・・いろいろやりたい事があるから。」

私がこの時間に起きているのは魔法のトレーニングをするためだ。私は執務官になりたい。

私のような子がいれば手を差し伸べてあげたい。結斗やなのは、麗華に助けられたみたいに今度は私が誰かの助けになってあげたい。そう思っって執務官志望にした。

リ「頑張つて。それと朝ごはんまでには帰るのよ?」

フェ「うん・・・分かつてるよ。母さんそれじゃあ行って来ます!」

母さんに元気よく答え、着替えて部屋にあつたバルディッシュをポケットに入れ私は玄関へと向かった。

AM 5:35

### 海鳴市臨海公園

未だ暗く照りつける公園。辺りは公園に設置してある街灯のみだ。ブランコや滑り台がある広場を突っ切り、私は海が一望できる高台を目指す。

フェ「今日は何をしようか?バルディッシュ・・・」

トレーニングの内容をバルディッシュに聞いてみる。

バル《How is it the menu usual? The practice of the sickle also

to it . . . いつものメニューどうでしょう？それに鎌の練習も《バルディツシユの答えに私も賛成する。

フェ「そうだね、それくらいにしておこうか。 . . . ん？」

高台へと着いてそこには既に先客がいた。漆黒の髪を靡かせ、その人結斗は額に汗を溜めながら刀だったかな？両手で握った刀をゆっくりと振っている。

振っているといつてもブンブンといった音は聞こえずに刀を移動させていつているといった風がしっくりくる光景だ。

しかしそれは私にとってあまりにも美しすぎた。一つ一つの動作に髪がついていき、その線がいつそ神秘的な光景に思わせているように感じた。二つの銀閃と一つの黒閃が交じり合い、ある時は果敢にある時は妖しく . . . それに私は目を奪われずにはいられなかった。

やがて終わりに近づいたのか動きが停止して左右の刀を切り払って逆手に持ち替えて腰の鞘に納めた。

結「 . . . . . ふう。ん？フェイト？」

フェ「あ . . . . . うん . . . . . おはよう。結斗 . . . . .」

じつと見られていたことに気づいたのかそれとも結斗の把握する空間に踏み込んでしまったことなのか結斗が私にその整った顔をこちらに向ける。

あの光景を壊してしまったことに少し罪悪感を覚えた。

結「おはよ。どうしてここに？」

フェ「私は魔法のトレーニングで・・・結斗も？」

結「うん、僕は白銀流の鍛錬だけだね。」

そういつて結斗は私の隣を過ぎて公園に備え付けられているベンチに座る。

私も隣に座った。

フェ「そうなんだ・・・。いつもここで？」

結「う？うん・・・今日は気分転換。ここだとこの時間誰も来ないし綺麗な日の出が見られるからさ」

持ってきていたタオルで汗を拭きながら言う結斗。

フェ「ふ〜ん」

結「あのさ・・・僕のどうだった？」

フェ「えっ？」

おずおずと聞いてくる結斗にさっきの刀を使った鍛錬の事だと分かった。

フェ「ああ・・・うん。何ていうのかな？・・・その・・・綺麗だった。神秘的でこの世の光景じゃないみたいだった」

結「そつか・・・ありがとう。さっきのは双刀の舞って言ってね、白銀流の基本鍛錬なんだ。こう・・・ゆっくりと刀を振って身体と刀を繋げるんだ」

ベンチに立てかけた二つの刀の内一つを先ほどと同じようにゆっくりと横に振る。

刀と・・・繋がる・・・。

フェ「刀と繋がる。・・・」

私が呟いた事で詳しく聞かせてくれる。

結「刀が身体の一部であるようにまた自身を一本の刀としてそう思いながらやるんだ。これをする最小限の動きで刀が振れるようになるんだよ」

フェ「結斗はもう出来てるよね？」

あんな無駄のない動きが出来るんだ。当然という言葉に期待したのだが・・・

結「とんでもない！僕なんてまだまだだよ！！」

ふるふると体の前で手を振る結斗。

そんなことないと思うけどな。私、結斗程魔法と武術に優れた才を持つ人はいないと思う。

私はもちろん、おそらく麗華やなのは、それにはやても多分勝てないと思うし。みんなでかかって結果は同じだと思う。

あくまで私の勘だが……

フェ「そんなことないと思うよ。さっきの舞って言ったっけ？それ  
もとても綺麗だったし……魔法だって発想とか運効率とかもすご  
いじゃない？」

結「た、確かにフェイト達からしてみればそうかもしれないけどそ  
れは僕がフェイトたちより少しだけ魔力が大きかったり、魔法の発  
想が優れているっていうだけだ。そこまで凄くないよ……」

……麗華が言ってたこと本当だね。結斗ってば絶対に自分は凄  
くないって言ってる。それに自分の評価が過小評価過ぎるね。

フェ「ま、まあ私がどうこういうことじゃないよね……っと。

勢いよくベンチから飛び跳ねて立った私を見て結斗が驚いた表情に  
なる。

結「そういえばフェイトもここに鍛錬に来たんだっけ？」

フェ「うん……頑張って結斗みたいになりたいから。困った人を  
助けたいから……」

そこで不意に左手が温かいものに包まれる。辿ってみると結斗の手  
だった。

ゆ、結斗／／／

結「フェイト……フェイトならきつとなれるよ。頑張つてね」

いっぱいの笑顔で言ってくれる結斗をみて顔が熱くなる。

フェ「う、うん／＼／＼あっ!!」

そこで私の視線いっぱいに広がる暖かなオレンジ色の光。

視界の端にある海がオレンジ色となり美しいものへと栄え変わった。

結「夜明け……だね。さて……フェイトちよつと鍛錬に協力してくれない?」

フェ「うん、私も結斗にお願いしようとしたから」

結「そう……ちょうど良かった。じゃあやるっか?」

フェ「うん」

それから30分程私達は二人つきりで一緒にトレーニングをしたんだ。

二人だけの時間が過ごせて嬉しかったよ。

公園で結斗とトレーニングをした後、一緒に帰って私達は自分の家に帰った。

靴を脱いでいるとリビングの方から朝の香りがした。

トーストや卵の焼かれた匂い。

早くそこへ向かいたい衝動を抑えながら私はトレーニングでかいた汗を流しにお風呂に向かう。

シャーーーーー

バスルームに響くシャワーの音を聞きながら結斗のことを考える。

フェ「結斗ってば・・・一体どれくらい強くなるんだろ・・・」

単純な好奇心だ。それに・・・

フェ「結斗の魔力値ってどれくらいなのかな？」

銀であった時は焰美と瀨の魔力を使っていた事は知っている。

それにはやての時も・・・。

なら結斗自身の魔力は？

好奇心が渦巻く中、私はお湯で温まった体を冷やさないよう急いで出て服に着替えたのだった。



フェ「おはよう、お兄ちゃん」

お風呂から出て、リビングについてお兄ちゃんに挨拶する。

ク「お、おはようフェイト／／／」

お兄ちゃんの顔が赤い。どうしたんだろ？

フェ「顔赤いけど大丈夫？」

そういつてお兄ちゃんの額に手を伸ばそうとするが仰け反らされてしまった。

ク「も、問題ないよ．．／／／」

そういうとクロノは手元にあった新聞に見入ってしまった。

リ「クロノ、フェイトが心配してくれているんだからちゃんと答えなさい！」

ピシヤ

母さんがそんなクロノの態度を改めさせようと新聞紙を取り上げた。

ク「か、母さん．．．．．す、すまなかつたフェイト。どうにも慣れてなくてね．．」

新聞を取られて顔を遮れなくなったクロノがまた顔を紅くして言うてくる。

「――慣れてない？」

フェ「慣れてないって何が？お兄ちゃん……」

首を傾げて聞いてみる。

ク「そ……その……お兄ちゃんという……呼び方だ」

フェ「えっ？もしかして嫌だったっ？」

ク「ち、違う！！ただね……」

リ「急に出来た妹にお兄ちゃんと呼ばれて戸惑っているわけね」

な……なるほど……。

クロノが言いにくそうだった事を母さんが言った事で私は納得した。私も急に姉さんが現れた時は動揺したから、その気持はよく分かる。

フェ「じゃあクロノって呼んだほうがいい？」

私としてはお兄ちゃんのほうがいいんだけど……

ク「駄目だ！！それだと他人みたいじゃないかっ！！僕らは兄妹なんだから……その……」

二の次を言えないお兄ちゃんを見ながら嬉しく思った。兄妹という言葉が嬉しかったんだ。

フェ「ありがとう……じゃあお兄ちゃんで……」

ク「うん……それでいい……」

リ「ふふ……さて出来たわ。フェイト、アリシアを起こしてきて。」

フェ「あ、うん。分かった」

それから席を立ち、姉さんの部屋へ急いだ。

リ「良かったわね、クロノ？」

ク「ええ、まあ／＼／＼」

リ「頑張りなさい、お兄ちゃんとして。」

ク「／＼／＼／＼／」

ガチャッ

フェ「姉さ〜ん。起きてよ〜」

部屋へと入り、姉さんの寝ているベッドの横に立つ。

アリ「むにゃ・・・zzzzzz・・・ゆうく〜ん」

フェ「ね、姉さん・・・」

姉さんの顔がだらしく笑っている姿に感情が揺れ動く。姉さんは結斗のことが大好きだ。私も結斗のことが好き。

そんな姉さんが幸せそうに夢で結斗と何かをしているのは例え夢でもいい気分はしない。いつもなら姉さんをこのままりビングへ持っていつているような乱暴な事をするけど今日の私は違う！

なんて言ってもさつき結斗に会ったからね

フェ「ほら！姉さん起きて〜」

アリ「にゃ〜」

いや〜とばかりに布団から離れようとしない姉さん。いつもこうなんだ。姉さんってば朝が弱い・・・弱すぎだよ・・・

アリ「zzzzzz・・・」

私の引く力がなくなるとまた元の場所に戻ってしまった。



でも口に出すとどうしても恥ずかしくなっちゃうの。

フェ「そ、それよりもう朝ご飯だから。起きてね」

アリ「う、うん。分かったよ」

やっと出た言葉に姉さんも動揺しながら答えてくれた。

急いで部屋を出て廊下で姉さんの部屋の扉に背を預けながら

火照った顔を母さん達に見られないように時間が経つのを待った。

AM 7:30

ブロオオオオオンピーーーーーーガシヤンッ

私と姉さんの前に聖祥大付属小学校行きのバスが来て扉が開かれ乗車する。

姉さんを起こした後私達はそろって未だ顔が赤くも朝食をとり学校へと向かう。

な「フェイトちゃん、アリシアちゃん」

アリ「なのはちゃん」

バスの後方でいつもの場所にいたなのはから声を掛けられたため姉さんが嬉しそうに行き、私もそれについていく。

アリ「あ~~~~アリサちゃん、すずかちゃんずるいっ!! ゆう君の隣なんて!!」

ア「偶々よっ!! 偶々結斗の隣に座ったの……よ」

す「ふふ……」

結斗をはさんでアリサとすずかが座っている様子に姉さんが頬を膨らます。それにアリサはお馴染みに怒りながら言い、すずかはその光景を見て微笑んでいた。

結「おはよ……アリシア、フェイト。って二度目に挨拶するのも変かな?」

考えてみるとそうだ……。

は「二度目ってどうゆうことや?」

疑問に思ったのかはやてが私と結斗の顔を行き来しながら聞いてくる。

結「今朝フェイトとはもう会ってたんだよ。鍛錬でね。」

麗「鍛錬って・・・ゆう今日いなかったのはそうゆうことだったの？」

結「そうだよ」

麗「もうっ！ゆうがいなかったから大変だったんだよ!!」

大げさに言う麗華になのはが聞いた。

な「どこが大変だったの？麗華ちゃん」

麗「朝起きたら一番にゆうの温もりを感じたいのにいないし・・・ゆうがいないからお母さんに叩き起こされるし・・・」

は「ちよつとまち〜〜!!」

そこではやてが待ったをかけた。

麗「どしたの？」

それに不思議そうに首を傾げる麗華。私もはやてが言わなかったらそう言うところだった。

は「結斗君の温もりってゆうたけど・・・まさか・・・麗華ちゃん結斗君と一緒に寝ているんじゃない？」

な・アリ・ア・す「嘘っ!!!!!!???」



はやての言葉に驚愕の新事実!!とばかりに驚くのはたち。

麗「そんなの当たり前じゃない?」

この言葉で胸を撫で下ろした。

・・・良かった。当たり前なんだ・・・

な「良かったの。」

アリ「うん・・・」

みんなして安心しきっていると麗華が首を傾げる。

麗「???・・・ゆつと寝るのなんて当たり前じゃない?」

はい?

は「ってそっちの当たり前かいつ!!!!」

ビシッと突っ込みを入れたはやてに続くように私は不平を言う。

フェ「ず、ずるいよ!!麗華!!」

アリ「そうだよ!!」

な「結斗君と一緒に寝ているのなんて!!」

麗「ふっふっくん。これが家族の特権よ!!それに毎日ゆつを抱き

枕にして寝てるのよ。いいでしょ〜」

へっへ〜んと胸を反らしながらいう麗華にある種の殺意を覚えたのは悪くないと思う・・・。

ニタニタする麗華に私を含めた結斗好きーズは唸るしか対抗手段が無かった。

聖祥大付属小学校

P M 1 2 : 4 0

今朝の麗華の発言から半日。今はお昼の時間。いつものメンバーで昼食。

結「ね、ねえみんな。もうそろそろ機嫌直そうよ・・・」

麗「仕方ないわよ、ゆう。みんな自分の立場がいかにも不利かを悟ったんだから……」

結「不利って……？……それより麗が余計な事を言うから……」

麗華が弁当を食べながら笑顔で結斗に話しかけているのに対し私達はそれを無言で見る。見続ける。  
嫉妬の視線を込めて……

結「み、みんなどうしてそんなに怒ってるの？」

……

結斗相変わらずの鈍感だよね……

結斗の言葉に麗華以外のみんながそう思ったに違いない。

フェ「結斗が麗華と一緒に寝ているから……」

結「ん？でもそれは麗が眠れないって言うから……」

絶対嘘だ……

無垢な表情で言う結斗の言葉を聞いてみんなの目が麗華に向く。

麗「あははは……本当よ！ゆうがないと私眠れないんだから！！」

ほほ……

そうゆうことは私達の目を見て欲しいなあ……

結「あれ？でも麗、前までは一人で寝ていたような・・・」

じいじいじいじい

再びみんなの視線が麗華に集まる。

麗「ひゅ〜あ〜やっぱり美味しいな。ゆうの弁当は!」

吹けていない口笛をしながら私達の視線を受け流す麗華。

な「じゃ、じゃあ結斗君!」

結「どしたの、なのは?」

緊張した声でなのはがそれに恥ずかしそうに言う。

な「その／＼／＼・・・ゆ、結斗君がお泊りに来てくれない?／＼」

結「えっ?でもそんなの・・・」

なのはの意図を汲み私も便乗する。

フェ「結斗忘れてないよね。結斗私達に心配かけたんだから私達には逆らえないんだよ」

結「うっ!」

結斗もそれは自覚していたようで呻いた。

は「そりゃあ名案やな！！結斗君はこれから一週間毎の休みの日に私達の家で変わりばんこで泊まりに来てな？」

はやてが嬉しそうに手を叩いた。

結「うう……」

アリ・ア・す「返事はっ！！！！？」

結「ううう……はい……」

麗「ってそんな事私が許さないわよっ！！！！」

な・フェ・アリ・は・ア・す「な・に・か・な・？」

一斉に私達は麗華を見つめる。

麗「い、いえ……なんでもありません……（こわっ！！）」

私達が睨みつけると萎縮したように麗華が小っちゃくなった。

一体どうしたのかな？かな？

ちなみにその時のフェイト達の顔はあの結斗大好き的美緒でさえ恐怖を感じずにはいられないものであったことを追記しておく。

フェ・アリ「ただいま〜」

ク「お帰り、二人とも」

家に帰ってきて挨拶をすると奥からクロノがやってきて出迎えてくれた。

アリ「ただいま〜兄さん」

姉さんが笑顔で言うのに対しクロノもそれに笑顔で答えた。

姉さんはお兄ちゃんのことを兄さんと呼ぶ。

年齢的にはこの中ではクロノが一番上なので順当なんだが姉さんの言い方には何か面白がっている節があるような気がするのは私だけなのかな？

クロノもクロノでそれには何も触れずにいる。

ともかく私の自慢のお姉ちゃんとお兄ちゃんです。

ク「母さんがお菓子にってなのはのところのシュークリームを買ってきてくれたよ」

アリ「わ〜い、なのはちゃんのところのシュークリーム私なのはちゃんのところのシュークリーム大好きなんだ」

両手を上に挙げて嬉しがりながら、トテテと急いでシュークリームのある冷蔵庫へと向かっていく姉さんを見ながら幣易しながらもク  
ロノに尋ねる。

フェ「お兄ちゃん、母さんは？」

ク「母さんなら午後に出てって今は本局にいると思う。多分結斗の  
試験絡みかと思う」

結斗の……

フェ「お兄ちゃん結斗どれくらい強いと思う？」

いきなり私の問いにお兄ちゃんが一瞬驚いたが答えてくれる。

ク「いきなりどうした？……う〜ん。結斗は僕よりも強いと  
思うよ」

フェ「執務官のお兄ちゃんよりも？」

あっさりと認めたお兄ちゃんに今度は私が驚いた。

ク「ああ。最初会った時は魔力が大きいだけの魔導師と思っていた  
んだけど最近になって気づいた。」

フェ「何を？」

ク「あいつは……色んなこと天才だ。」

天才は理解できるけど、色んなことって？

ク「あいつの使っている白銀流という流派どうゆうものか知っているか？」

フェ「？それは白銀家で代々伝授されているものじゃないの？」

ク「違う。この前麗華から聞いたんだが結斗が作ったんだ。白銀流を・・・」

フェ「えっ!!????」

もしかして・・・

ク「ああ。あいつは一代であそこまでの技術を会得したんだ。それも九歳の子供がだ・・・そしてそれは未だ白銀流は未完成ということの意味している。だから結斗の進化が白銀流そのものというわけだ」

フェ「す、すごい・・・」

改めて結斗の凄さを感じた。

確かに結斗は今も鍛錬を欠かさずにやっていて技術がもっと伸びていくだろう。だから白銀流はまだ未完成なんだ・・・。

ク「ああ凄い。だからそこまですぐのにも僕には想像できないほどの努力をしたんだろう・・・おまけに頭の回転まで速い。しかもデバイスまで作れる・・・こいつに勝てると思うか、この僕が？」



お兄ちゃんちよつと卑屈になつてる・・・

フェ「あはは・・・」

ク「全くこの世にあんな完璧な人間がいていいのか？つて思つな・・・」

フェ「でもお兄ちゃんだつて最年少の執務官だしそれにユーノだつて・・・結斗の親友じゃない？」

ク「そのことに関しては嬉しいよ。彼みたいな人に親友だつて言ってもらつて」

そう・・・なんだかんだ言つてもお兄ちゃんは結斗のことを私にとつてなのはや麗華、アリサ、すずかのように親友と思つているのだ。

フェ「ふふ・・・良かったね」

ク「ああつと話が逸れたようだ。つまりをいうと結斗が執務官試験を受けると必ずと言つていいほど合格すると思うし、魔導師ランクは正直図りかねているよ・・・」

フェ「無理もないね・・・結斗が規格外過ぎるから・・・」

ク「本当だ・・・（ねえ・・・）」

アリ「二人とも・・・そんなところにつつたつてないで早くシユークリーム食べようよ・・・」

姉さんがリビングの扉から少し顔を出しながら可愛く言ってくる。  
私とお兄ちゃんはそのをみて微笑みながらリビングへと急いだ。

P M 2 1 : 4 5

今私はベッドの中にいる。そしていろいろな事に思考を廻らせていた。といつてもほとんど結斗絡みなんだが・・・。

フェ「ほんと・・・結斗は近くて・・・遠いよ・・・」

私の愚痴が静まり返っていた部屋に留まる。

今朝やお昼の時みたいにすぐ手を伸ばせば容易く触れることが出来るけど、魔法の事に関しては遥か彼方をつつ走っていつてしまっている。一人で。

それは寂しいよ・・・。

寄りかかれる人が誰もいないなんて・・・。寄りかかれるのは多いのに・・・。

バル《There is only approaching

》 y o n e s t e p . . . 一歩ずつ近づいていくしかありませんよ。

フェーバルディッシュ・・・」

机からの上からバルディッシュが励ましの言葉をくれる。

バル《It might not have been stronger first than that in your either .  
Were chirono external said? When having made an effort .  
sir is also certain only so thought you is a genius of the effort .  
I experience of the current acquiring of sir , and am looking at its blood that has been thrown . Therefore , it is likely to be able to become a person who can do the thing that you entrusts the back some time . I guarantee . : 結斗様だつて最初はあれ程までに強くはなかつたでしょう。クロノ様も言っていたのではありませんか？努力をしたと。

確かに結斗様は努力の天才ですがサーもそうです。

私はサーが今までに積んできた経験、流してきた血を見ています。だからいつか結斗様が背中を預ける事の出来る人になれるでしょう。私が保証します》

バルディッシュの言葉が私の空虚さを埋めていつてくれるのが分かった。

フェ、「ありがとう、バルディッシュ」

バル《No problem》

フェ、「これからもよろしくね」

バル《Yes sir》

バルディッシュの心強い声援に礼を言うといつも通りに返してくれる。本当に嬉しかった・・・。

その時カーテンから洩れ出た闇夜を明るく照らす月の光がバルディッシュに反射した。その光景は

私が今朝見た漆黒の美しい髪をもち神々しく両手に持った刀を振る姿とお昼の時に私達に迫られて

困った顔をする結斗の表情を思い出させた。

同じ人なのにこうも違う表情をもつことにクスリと微笑しながら私は眠りの海に身を任せた。

Next To TALE 49!!!!!!

TALE 48 とある女の子の一日（後書き）

うわ〜今回はフェイトちゃんサイドだ〜！フェイトちゃんファンの皆さんどうでしたか？

フェ「私が主役」

おやつ？フェイトちゃん。来ましたね

フェ「うん、今回私が主人公だしね。それにしてもどうして私だったの？」

う〜んなんとなくが多いんですが・・・読み手の皆様やこれを見てくださいる作者様方がフェイトちゃんファンが多い気がしたからかな？

フェ「そうなんだ。ちなみにSKYさんは？」

う〜ん迷いどころです・・・こんなこと言っちゃうと恨まれちゃうかもしれないがみんなファンです。

なのはちゃんもフェイトちゃんもはやてちゃんもかっこいいところとかいっぱいありますからね。誰が一番と言われても答えにくいです。

フェ「へ〜そうなんだ・・・」

あっでも！

フエ「でも？」

付けるとしたら一番は結斗君でしょ！

フエ「それはずい・・・」

ではで～～

フエ「またね～～」

T A L E 4 9 それぞれの思い（前書き）

ごめんなさい！！  
更新が遅れました！！

TALE 49 それぞれの思い

結斗 side

なのはらから家に泊まるよう強要された次の日。なのはたちは・・・

な・フェ・アリ・は・ア・す」~~~~~」

目に見えて上機嫌だった。そりゃあもう・・・ご機嫌もご機嫌、超ご機嫌でした。みんなしていつでもニヘツて笑ってるし、あのアリサでさえ・・・

ア「ふふふ・・・」

笑ってるし・・・い、一体ば、僕は何をされるんだ？なのはたちのあの喜び様、唯事じゃない・・・。



結「ねえ〜麗・・・なのはたちどう・・・って大丈夫??？」

先生のありがた〜い話しを聞きながらもなのはたちの不気味な表情の理由を麗に聞いてみたが思わず心配してしまった。  
なぜなら・・・

ズーーーーー

反比例して麗がとてつもない落ち込みようだったから。顔をみたらもうなんかムンクの叫びみたいな酷い事になってるし。  
今にも叫びそうだ。

麗「・・・る」

ん？麗がなんか言ってる・・・。  
そっと覗くように聞いてみた。

麗「ゆうが穢されるゆうが穢されるゆうが穢される・・・。」

・・・。。うん・・・聞かなかったことにしよう・・・。  
顔を上げ、

結「せ・・・。」

先生〜麗が鬱になっているので保健室へ連れて行ってもいいですか？と言おうとしたが・・・

言えなかった。

あからさまに先生も麗の方を向こうとはしていなかったからだ・・・  
先生は触れないほうがいいと判断したらしい・・・。

澁（ゆう様はもう少しご自身のことを考えた方がいいですね）

結（・・・どうゆう意味？）

左耳にかけていた蒼色のピアスから少々気疲れしたような声が麗への注目を奪った。

僕のパートナー澁だ。

焰（ゆうが思っている以上になのはたちはゆうを想っているんじゃないよ・・・）

は？思っている？何を・・・

もう一人のパートナーからも同じような声色の声が聞こえる。  
焰美だ。

結（????ますます分かんない・・・）

澁（知的で頭もよろしいのに一体どうして・・・そのところだけは・・・）

焰（鈍いのかのう・・・）

僕が首を傾げると更に疲れたような声で二人が言葉を投げかけたのだった・・・。

放課後……

結「というわけで僕の家に来ました〜」

ア「何がと言うわけなのよっ!!」

パシャー————ン

アリサの完璧な角度から放たれるチョップが僕の脳天を直撃した。

結「いった〜い!!!!何するのさアリサ!!」

ア「う、……うるさいわね!あんたがいきなり訳わかんないことを言ったからツッコミを入れてあげたのよ!!!(こ、こいつなんて可愛い顔して言ってくんのよ!!!)」

な「チョップで突っ込みは無いと思うのアリサちゃん・・・」

ア「し、仕方ないじゃない・・・結斗がアホなことを言ったからよ」

は「それで、結斗君なんで私らを家に呼んだんや？」

はやてがアリサのことを横目にしながらも僕に尋ねる。いつものメンバーで少しやりたい事があったのでちよつときてもらったんだ。

結「なのはやフェイト、麗華が今使っているデバイスたちの細かな説明だよ。」

麗「それならお母さんに教えて貰ったよ？」

結「実は母さんにも把握してもらっていない機能があるんだ。闇の書を倒した時にやったでしょ？」

は「ああ〜あれのことかいな!!」

ポンツと手を叩いて思い出すはやて達に何のことか分かんないと訴えているアリサとすずか。

す「それなら私たちは関係ないんじゃない・・・」

結「う〜んそうなんだけど・・・二人共僕の家にも一回も来てないなあと思ってきてもらったんだけど・・・駄目だった？」

す「ううん!!そ、そんなことないよ!!」

手を振りまくってそんなことないと言わずかに安堵しながら僕はいつものように玄関の大きな扉を開こうとした。  
が………

は「どしたんや？結斗君……？」

扉を開く手が止まった。それにはやてが疑問に思う。

結「何かいる……凶暴な何か……」

アリ「えっ!!ど、泥棒!!??」

後ろにいたアリシアが怯えた声をだし、僕の袖を掴んだ。

結「いや……違う……。もっと貪欲なもの……」

ア「あんなんでそんな事分かるのよ？」

僕の低い声に怯えたように言うアリサ。

結「気配でなんとなく分かるんだ……でもまあいつまでもこんなところにいるわけにも行かないし……」

手で扉を押す。と……

シュンッ

結「っ!!」

みんな「キャ~~~~」

扉を開けた瞬間にそれは僕に飛び掛ってきたため、遠心力を利用しながらなのはたちとは反対方向に投げ飛ばす。

投げ飛ばされたそれは受身をして着地をした。顔はちょうどかげで隠れて見えない・・・

す「なにっ!!??」

ア「あんた一体何者よ!!!」

後ろから威勢よく二人が声を張り上げてそれに言う。

いやこの場合威勢よくっていつかな?

二人とも僕の服の袖をぎゅっと握り締めながらいつてるんだ。

?「何って・・・?」

しかしそれは逆に質問を返した。

ア「質問してるのはこっちよ!!!ここは結斗の家よ!ささ、さつさとさりなさい!じゃ、じゃないとバニングス家が社会から追放してあげるわ!」

す「わ、私の家月村家もだよ!」

?「ふ~~~~ん。ならやってもらおうじゃない?」

ア「上等よ！待ってなさい！！」

そういつて二人とも一斉にケータイを取り出す。ちよつと！本気で社会から滅殺する気ですか？

ア「もしもし！！鮫島？至急滅殺準備を（ちよつと待った！！）何よ！結斗！電話中に！つて電話切らないでよ！！」

このままだと收拾がつかなさそうなのでアリサからケータイを取り上げて止めた。すずかの方は麗が止めてる。安心したところで影の主に聞く。

結「はぁ・・・母さん、どうしてそんなこといかな・・・」

？「いや〜〜やっぱばれてたか・・・えへへ」

ア・す「母さんっ！！??？」

正体を表した母さんに驚いた二人。

美「ゆうちゃ〜〜〜ん！！！！麗〜〜〜！！！！」

結・麗「むぎゅっ！！」

さっきの倍になるほどの速さで向かってくる母さんを今度は避けることは叶わなかった。おまけに麗まで餌食となる。

く・・・くるちい・・・。

ア「母さんって・・・結斗あんたのお母さんなの？」

結「うん・・・そう・・・これが（・・・）僕と麗の母さん」

麗「はあ〜」

僕と麗を抱きしめて笑顔満点の母さんとそれを指差す僕。呆れ果てて為されるがまま諦めになっている麗の温度差はとても激しかった。

美「初めまして〜〜ゆうちゃんと麗の母、美緒です〜。美緒って呼んでね」

す「っ、月村すずかです・・・」

ア「アリサ・バニックスです」

母さんの天邪鬼な態度に面を喰らいながらもアリサとすずかは自己紹介を済ませる。

焰「そろそろ我らも外に出たいぞ！」

おっと忘れていた・・・

結「いいよ、二人とも」

一瞬の光とともに二人が現れる。

静「やっと出られました・・・」



焰「ううっくん、ふう・・・」

仕方ないとはいえやはり人間でいたいよな。 澪とともに伸びをする  
焰美。

な「澪ちゃん、焰美ちゃん」

ア「はじめてみた時もあったけど・・・」

す「ほんと魔法って不思議だね・・・」

その光景に改めて驚く二人を見ながら母さんからの抱擁を甘んじて  
受け入れていた僕と麗だった。

## 白銀家・庭

結「さて！準備はいい三人とも？」

ここは封絶の内部。 結界内の時間は静止し、動くものは僕らのみだ。  
辺りは緋色一色に染め上げられ、ここで動けるものは魔法関係者の  
みだ。

当然アリサ、すずかは動けない人の対象だがそこは僕がコントロー

ルをして二人が動けるよう改良した。現在二人と母さんの三人は僕達を離れたところから見守るかたちに収まっていた。三人の表情をみると一人だけ難色を示す御人がいる。

それはもちろん我らの母こと母さん。

どうやら未だ僕と麗の充電？かどうかは知らないが不足しているらしく少々不機嫌なご様子。

また後で母さんに締め上げられるのか・・・僕が溜息をつくとき正面に同じようにする麗の姿が目に入る。

「・・・またあとで離れてくれなくなるよね・・・」

「・・・うん。ほんともう大人なんだから少しらしくなってほしいよ、母さんは・・・。」

「・・・無理だよね・・・」

「・・・だね。むしろ想像出来ないよね。母さんのそんな態度。」

「・・・うん・・・」

結・麗「はあ~~~~」

僕らが盛大な溜息を漏らす。「はあ~~~~い  
先生！！」そこで大きく手を挙げるなのは。

結「はい！なのはさん！！」

ちよつとふざけて先生みたいな真似事をする。

な「全く意味が分かりませ〜ん。どうして私たちはセットアップをさせられたのでしょうか〜?」

なのはが乗ってくれた

んじゃあちよつとあれやってみようかな?

結「んん・・・うむ・・・では説明しようかのう」

声の調子を整えて焰美の声真似しながら言ってみる。

みんな僕の声がいきなり変わって驚いてる。

焰「ゆ、ゆう／＼真似するでないわ・・・」

ほんのりと紅くなる焰美。

結「みなさんにセットアップしてもらったのはこれから確かめる事に必要だったからです」

澁「今度は私のですかっ!?!」

うう〜ん、みんななかなか乗ってくれる。

今度は・・・

結「覚えてるかな〜? 闇の書を破壊して時のことを。さっき言ったみたいに私が作ったカートリッジシステムにはまだ機能があるんだよ〜」

アリ「わくくしい 私のだ!!」

フェ「ね、姉さん落ち着いて・・・それでどうゆう機能なのあれは？」

僕の口調真似を苦笑いしながらも聞いてくるフェイト。

は「（こ、今度は私や!!）」

自分の口調をしてもらいたくてそわそわしている約二名。

一人はやて。もう一人麗。

結「せやな〜。まず仕組みからいこか？この仕組みはな〜簡単  
に言うとマスターとデバイスを繋ぐ事なんや!!」

は「（私結斗君からみてあんなように会話しとるんか・・・）」

麗「つ、繋ぐって？（私、私!!）」

結「文字通りよ。これをすれば両者が一つになってもうワンランク  
色んなもの上がるのよ 例えば魔法運効率とか、発生速度とかね。  
これらが二倍の速さになるわ。」

麗の真似をしながら言う隣で麗が拳を握んでいた。

な「に、二倍・・・だからスターダストブレイカーを出せたんだね  
・・・」

結「そうだよ。だからこれから三人にはあれを再現してもらおうよ」

最後は声を戻した。

麗・な・フェ「分かった(の)!!」

五分後・・・・・・・・

フェ「で、出来ないよ・・・・」

な「どうしてなの!？」

麗「むむむ・・・・・・・・」

やっぱりか・・・・

五分程試しにやってみてもらったがシルバ機能は発動しなかった。

無理も無いか・・・闇の書の際は極限状態だったし、リンディさん達を救いたっていう気持ちが強かったからシステムが少しだけ使えたんだ・・・

三人が唸る中、まずはと思い僕は焰美と澁に目配せをする。

澁「分かりました」

焰「仕方ないの〜〜なのは、フェイト、麗華見ておけ！！我らとゆうが手本をするからの〜〜」

二人が答えてくれて僕は二人をセットアップした。ちなみにツインセットアップだ。

麗「？・・・ゆうなんかコスチューム変わってない？」

基本的には黒のロングコートは変わらないがちょっとした装飾がされている。（なのはフォースでのトーマ・アヴェニールの第二形態の服）

このようになったのは焰美と澁にも僕が作ったカートリッジシステムを装填して気分を一扫しようかなと思って変えたんだ

結「僕もカートリッジシステムを付けたんだ。作り手の僕が一番良く分かるからね。だからさ」

麗「な・・・なるほど・・・それで続けて？」

結「分かった・・・二人ともいけるよね？」

焰・澁「いつでもいいぞノはい、どうぞー！」

結「よし！シルバフォームイグニッション！！」

焰・澁「Silver mode ignition！！！！」

瞬く間に銀色の光が満たされて僕にも変化が見られた。焰美と瀨のデバイスコアが銀色となり、黒かったBも銀色しかし髪は黒のままという状態となった。

フェ「す、すごい・・・（かっこいいな／＼／＼）」

な「結斗君が・・・（か、かっこいい／＼／＼）」

麗「かっこよすぎるわ・・・（やっぱりゆうは天才ね・・・）」

若干一名本音と言葉がごっちゃになっているが敢えて気づいてない振りを敢行する。

結「つとこんな感じかな？三人とも分かった？」

麗「ってそんな簡単に言われても分かんないよ！！ゆう」

フェ「そうだよ！！どうやったの？」

詰め寄る三人に静止させるジェスチャーを送る。

結「うゝゝん・・・そうだなゝゝここを預け、預かるかな？」

な「どゆこと？」

結「言葉通りさ。パートナーと同化するといつてもいくらいにこの機能は繊細な事なんだ。だから少しでも疑いやずれがあると出来ないし発動もしない。でも・・・まあ三人なら次は出来るさ！」

そういつて僕は三人から離れ、はやてとアリシアの元へ向かった。

は「お疲れ様や〜」結斗君「

アリ「ゆう君〜」

結「そんなに言うほどは疲れてないよ」

近寄った僕へ駆け寄ってくる二人に優しく言った。

は「なあ〜」結斗君「

結「何？はやて・・・」

心苦しそうに言うはやてに問い返す。

アリシアもはやてが真剣なために口をはさむのをやめた。

は「私も強くなりたい・・・何か教えて!!」

結「・・・理由を聞いても？」

は「私なヴィータ達が来るまではずっと一人やった。だから生きるのを諦めとつたんや・・・でも・・・」

結「・・・」

は「・・・今はちやう！結斗君っていうかっこいいナイト様もある



しヴィータ達もなのはちゃんたちもおる。」

結「はやて・・・」

は「だけど時々おもうんや。どうしようもない時に私はどうしたらいいか分からん。だから今の幸せが壊れてしまうんやないかって・・・」

は「はやてが俯きながら言う。  
がハツとして

は「分かってるんやでっ！！結斗君がそんな事させへんて。でもな心配になるんよ・・・」

付け足して言った。

は「はやてそんな風に思っていたんだ・・・」

結「・・・分かったよ。はやてがそこまで覚悟を決めているなら特別に教えるね。確かはやては古代ベルカ式の魔導書型だよな？」

は「せやで。リインフォースの二代目の子もそう設定するつもりやよ。」

結「了解したよ。ならばはやてに教えるのはブラストだ・・・」

は「ぶらすと？」

結「自己魔力ブーストのことさ。これで一時的にも高出力の魔法を放てる。ただ・・・」

は「ただ……?」

結「無理やり魔力を底上げしてるわけだから使った後が極端に消耗が激しいんだ。まあ魔力量だけならはやてはなのはたちの中でも一番上だから……言ってみれば保険さ。その気持を貫く時に使って……ね?」

最後の方はアリシアに聞こえないようにはやての耳元で言った。

は「ありがとな、結斗君ノノ」

アリ「ねえ〜ゆづ君〜」

はやてが顔を逸らしながらも礼をいっただとところでアリシアが間延びした声で聞いてくる。

アリ「私には何か無いの〜?」

結「アリシアも強くなりたいのかい?」

アリ「うん!だって私ゆづ君のパートナーだし!」

アリシアのこの言葉に遠く練習していた三人娘と隣にいた女の子の耳が鋭く動いた。

結「ははっ……ありがと。う〜ん、そうだね〜アリシアには特別にコーチを呼ぼう」

アリ「コーチ……ってまさか!」

結「うん・・・焰美、澗。お願い出来るかな？」

焰「うむっ！任せておけ」

澗「私たちの技術の粋を叩き込みます！」

アリ「そんな~~~~だったたら私ゆう君がいい!!」

結「ごめんね、アリシアそうしてあげたいのは山々なんだけど今はちよつとね自分の勉強をしたいんだ・・・」

アリ「もしかして試験の？」

結「うん・・・やりすぎてことはないからね。それに僕なんてまだまだだし・・・」

アリ「う~~~~ん・・・分かった。。。じゃあさ！」

途端に僕の顔を寄せてきてキラキラと目を輝かせてくるアリシアをしり込みしながらもとりあえず聞いてみた。

結「な・・・なに？」

アリ「ご褒美が欲しいんだよ!!」

は「ずるいで!!アリシアちゃん！結斗君私もや!!」

麗・な・フェ「私達もっ（なの）!!」

ここで麗華たちも騒ぎを聞きつけて言ってくる。

結「うゝゝん・・・じゃあおいしいお菓子をつくって待ってるよ。それでいい？」

みんな「やったゝゝゝ！！！！」

それに喜ぶ五人。

それを見ながら僕はいそいそと自分の勉強をしに行ったのだった。

N e x t    t o    T A L E 5 0 ! ! ! ! !

TALE 49 それぞれの思い（後書き）

今回は二話同時投稿。というわけで  
次の後書きで・・・

**T A L E 5 0 試験前夜（前書き）**

え〜二話投稿です。

頑張りました。

T A L E 4 9 は失敗した感があります。

なのでこちらを頑張りました。

また今度改稿しようっと

TALE 50 試験前夜

結斗 side

なのは達の特訓をした日の三日後。

その時はお風呂から上がり、焰美と髪を梳きあっていた。

焰「うむ〜相変わらずゆうの髪はさらさらじゃな〜。どうしてこんなにさらさらなんじゃ？」

僕の髪を梳きながら言う焰美。僕も焰美の髪を梳きながらそれに答える。

結「う〜ん特別なことはしてないよ。普通に髪洗って、ドライヤーをかけて寝てる。それだけ。第一それをいうなら焰美もでしょ？」

焰美の髪もさらさらで艶かしくかりと出ている。その燃えるような焰色の髪はいつみても目を奪われる。

焰「そうじゃがの〜〜」

そして焰美は僕の髪に小さくキスをする。

焰「ゆうの髪はいつ見ても美しいから好きじゃ……」

結「ふふ……ありがと（むくく）ほらっ！瀨……そんなところで不貞腐れてないでこっちにおいで……」

ソファに涙目で顔をクッションにうずめながらこちらを見ていた瀨に呼ぶ。

瀨の髪はショートなので僕や焰美のように髪を梳く必要はない。しかしなにやらそれが御気に召していないようだ……

結「どうして瀨はあんな風になってるのかな？」

焰「大方我とゆうが髪を梳きあっているのが羨ましいんじゃないか（これこそロングヘヤーの特権じゃ！）」

結「？別に髪が長くなくても梳いてあげるのに……瀨おいで……髪を梳いてあげるから」

瀨「は、はい！！」

嬉しそうに顔を上げてこちらにはいはいで来る瀨。さっきまで暗かったなんて思えないほどの明るさだった。

結「はい……ここに座って」

胡坐をかく僕の膝を叩き、指示すると瀨は



澁「はい……／＼／＼／」

スポンツと効果音を付けたくなるほどのぴったりと座ってくる。ほんとに焰美も澁も華奢だよね……。

それから焰美が僕の、僕が澁の髪を梳くかわいらしい状況となった。今まさにそれをしようとした途端、通信で連絡がかかった。

結「？……リンディさん？」

焰「もしかして試験の事じゃないか？」

結「ああ〜そうかも!!」

焰美の言葉に納得いった。

澁「ゆう様〜はやく〜」

しかし僕の膝の上で今か今かと髪を梳いてもらつのを待ちわびている様子の澁。

仕方ないのでこの状態のまま通信に出るかな？

結「はい……結斗です。リンディさん、試験の事ですか？」

リ「ええ。日時が決まったわ。明日午前が筆記試験。午後が実技試験よ」

結「明日ですか……分かりました。」

リ「執務官と捜査官、それに教導官の試験があるけど・・・ほんとに大丈夫？なんなら日にちを変えるけど・・・」

その辺は問題ない。

結「いえ、筆記は前からやっていますから大丈夫です。」

リ「そう、それじゃ・・・あっ！！言い忘れてたわっ！！筆記の前にあなたの魔導師としてのランクを計測するのでそのつもりでいてね それと、それ・・・とってもかわいいわね」

可笑しそうに僕と瀨、焰美を見ながらそういつてリンディさんとの通信は切れた。

かわいいって・・・

焰「明日か・・・」

結「らしいね・・・」

そういつて僕は瀨の白い髪を丁寧に上から下へと梳く。髪は僕以上にさらさらしていて触っていて気持ちいい。

瀨「ん・・・筆記に関しては問題ないでしょう。ゆう様が落ちるはずがありませんから・・・。問題は・・・」

僕の梳き方が御気に召したのか気持良さそうに顔が蕩け始める瀨。

焰「実技じゃな・・・」

実技は対戦相手を伴う。試験を受ける魔導師ランクに合わせた対戦相手が選ばれる。

つまり試験を受ける人のランクがSであればSかAAA程の試験管が管理局内から選定される。もちろん希望の役職の人でだ。

結「じゃあ僕の相手は普通の人だね。僕の相手だし……」

澪・焰「……………」

僕の言葉でかどつかは分からないが澪が振り返り、呆れたような顔で僕の顔をじつと見る。

意味が分からず、後ろにいる焰美に聞こうとしたがこちらも澪と同じような呆れたような顔をしていた。

結「……………な、何？二人とも……………」

焰「いや……………なんでもない（ゆうはどうして自分のランクの高さが分からんじゃ？我が見たところSは下らないと思うのじゃが……………」

澪「ゆう様……明日の人は強いですよ。間違いなく（恐らくランクは既にSでしょう。全く本当に自分のことは無頓着ですよね、ゆう様は……………」

結「またまた……僕程度だよ？そんなの機械かなんかでしょ。人の試験管なんてない」

顔の前で手を振る動作をする。

焰「まあ明日分かる事じゃからとやかくは言わんが……………」

澁「最善の準備をした方がよろしいかと・・・そういえばアリシアはどうするのですか？」

結「う〜ん・・・やっぱり来てもらわないといけないよね・・・  
・・・アリシア？」

通信でアリシアを呼ぶ。通信はツーコールで取られた。

アリ「は〜い！アリシアだよ ゆう君何かな？」

画面に水色のパジャマ姿で金色の長い髪を下ろしたアリシアの姿が映った。

どうやらアリシアもお風呂上りらしい・・・

アリ「あ〜〜〜！！澁、焰美するいよっ！！ゆう君に髪を梳いてもらうなんてっ！！」

あれ？

焰「いいじゃろ〜〜ゆうの髪さらさらなんじゃぞ〜〜ほらっ」

焰美が僕の長い髪を一房持ち落とす動作をする。

アリ「いいなあ〜〜私もゆう君の髪触りたい！！しかも澁なんてゆう君に髪梳いて貰ってるし！！」

澁「ふふ・・・ゆう様の梳き方は気持ちいいです。思わず寝てしまい  
そうですよ・・・」

アリ「むむ〜〜いいな〜〜やっぱり私もそっちに住みたかった！  
」

画面向こうで悔しがるアリシア。  
そこまでのことかな？

結「アリシア、前も言ったけどフェイトがいるじゃないか。それにリンデイさんたちが家族だけど、僕達ももう家族みたいなものさ。だからいつでも遊びおいで、もちろんフェイトも一緒にね」

アリ「うん、分かった それよりゆう君話しがあつたんじゃ・・・？」

あ、アリシアからこの話しが始まったんだけどなあ・・・。まあいやとりあえず明日の事を・・・

僕は首を傾げるアリシアに目的の試験の事を話した。

アリ「・・・なるほど。分かったよ。それで明日はどうしよう？」

結「午後からが実技試験なんだけど・・・午前の試験前にランク測定をしないといけないから僕と一緒に来てほしいんだ」

アリ「私の魔力も測定する訳だね。分かったよ」

結「アリシアはユニゾンデバイスと言う事になっているからね。お願いねそれじゃあまた明日ね」

アリ「うん！明日頑張ろうねゆう君！！」

その言葉を機にアリシアとの通信は切れた。

漣「アリシア張り切ってましたね・・・」

焰「当然じゃろ、ゆうの試験じゃからな」

結「はは僕には頼もしいパートナーばかりだよ・・・」

焰「・・・ゆう一つ聞いてもいいかの？」

僕が軽く微笑していると焰美が対照的に厳しい顔で向き直ってくる。

焰「此度の試験を受けようと思った理由はやはり・・・」

漣「・・・」

二人の顔に先ほどとは違って影が差す。

焰美の質問に僕は・・・

結「うん・・・」

一言だけ言った。

漣「私達はいつまでもゆう様と一緒にですよ」

焰「うむ、我らがついておる。だから安心してそれを果たせ。我等はそのためにおるのじゃ、もちろんアリシアもそう言っと思っぞ・・・」

「  
たった僕の一言に二人は僕の気持を分かってくれて嬉しい言葉を言  
つてくれる。」

結「うん・・・ありがと。二人とも・・・」

二人の無償の愛情に嬉しく思い、そんな彼女らのマスターである事  
を誇りに思いながらも僕は瀟の髪を梳いていった。  
僕達の間を流れる時間は穏やかであった。

アリシア aside

アリ「明日か〜」

ゆう君の連絡から三十分が経ち、私はベッドに入り眩きました。  
明日はゆう君の役職試験。それに私はユニゾンデバイスとして、そ  
してパートナーとして行きます。

アリ「私足引つ張らないようにしなくちゃっ!!」

ユニゾンデバイスは適合率がある。適合率が高ければ高いほどマスターの余分な魔力消費を抑えることもできるし、運効率も大幅にアップする。

私とゆう君の適合率は98%。この数値は私とゆう君、焰美、瀨のみが知っている。ここからみても私達が相性がばっちりということに分かる。

アリ「えへへ・・・ゆう君とベストパートナー・・・」

その事実には私は微笑まずにはいられない。

明日の試験万が一にも不合格はないと思う。だけど不測の事態は想定をしておく。

アリ「ゆう君の相手するほどの人だから、絶対母様くらい強いよね・・・」

私は明日の相手をどれほどの人なのか想像しながら深い眠りに身を任せた。

Next to TALE 51!!!!!!





TALE 50 試験前夜（後書き）

まず謝罪をさせていただきます。

一週間以上間をあけてしまいですみません！！

バイトが入り忙しい日々明け暮れなかなか執筆できないのです。

そんな泣き言は聞きたくねえ〜

っていう人もどうかご容赦の程を・・・。

ついでにアスラクラインの方も最近また書き始めましてそれでこのスピードなのです。

もちろんこちらも一生懸命執筆させていただきますがアスラクラインの

ほうもどうぞよろしくお願いします。

では〜〜〜

TALE 51 試験開始!! (前書き)

今回は三人称 side です。

なんか書きたくなっと思ってしてみました。

自分的には上手く書けたかな？

気に入らなかつたりしましたら感想ください。

直します。でもこのまま続けたいなーっっておもっています。

長くなりましたがそれでは本文へどうぞ!!

T A L E 5 1 試験開始！！

地球時間 A M 9 : 1 0

第1管理世界ミットチルダ

結「ここか……」

大きな建物を見上げながら結斗は呟いた。

アリ「うん……」

それに寄り添うように答えたのは傍らに立っていたアリシア。

二人が見上げる建造物の名前は管理局地上本部。

今日ここへ結斗が来たのは三役職同時受験という前代未聞なことをするためだ。

さすがにいつも冷静沈着な結斗も緊張し、顔が強張っていた。だがオロオロとはしらずむしろ堂々としている。

それは今まで結斗がこの試験にかけてきた時間と労力から裏づけされたものだった。

焰「大丈夫じゃ・・ゆう」

瀨「はい、ゆう様ならきつと受かります。今日は合格祝いですよ」  
励ます二人の言葉に感化されたのか結斗の表情が少し和らぐ。

結「あはは。二人ともそれはちょっと気が早いよ・・・」

アリ「さっ！いこっゆう君！！」

楽しそうに言葉を発するアリシアに手を引かれながら結斗の表情は更に軟らかくなったのであった。

大きなビルに入り、その中央に彼らの見知った顔があった。  
結斗と同じくらいかの身長でその人クロノは結斗とアリシアの姿を視界に入れるとこちらに近づいてきた。

ク「やあ、結斗」

結「クロノっ？なんでここに？」

クロノのいきなりな出現に驚く結斗。一方クロノも結斗が驚いた顔

をしたことに目をぱちくりとさせる。

ク「いや悪い・・・君が驚く事があるんだなと思ってな」

苦笑いしながら言うクロノに対し、結斗は心外な表情をする。

結「僕が驚いたのはどうしてクロノに言っていないのにここにいるかってことだよ。麗華にも内緒にしてきたんだから・・・」

ク「?・・・麗華が来るとまずいのか?」

結「いや・・・まずいってことはないけどさ。考えてもみてよ。麗華だったら僕の応援って言って絶対に来るだろ?」

ク「ああ。間違いなくそうだな」

確固たる確信を持って言うクロノ。

結「当然・・・なのはたちもついてくるわけさ。応援してくれるのは嬉しいんだけど・・・ちょっと緊張しちゃうから。なるべく一人でいたいんだ・・・」

ク「なるほどな・・・(あ~~~~~)~~~~つつつ!!!!!(ど、ど  
うしたっ!?アリシア!!)」

腕を組み納得が言った様子を示していたクロノの背後、結斗の隣で話しを聞いていたアリシアの口から大きな声が響く。

アリ「そ……そのゆう君……」

気まずそうに言うアリシア。その顔はやっちゃった……という同年代の男の子が惚れるほどのお茶目な可愛らしいものだった。

アリシアは俯きながら続ける……

アリ「今朝フェイトに起こされたんだけど……その時、うっかり……」

結「……話しちゃった？……ま、まあ……いいさ。もう緊張も取れたし」

プルル

そこで通信が入った。通信相手は麗華。それにびくつとしながらも通話のボタンを勇気を出して結斗は押した。

麗「もしもし……？ゆう？どうして今日が試験の日だって事言わなかったのよっ！？」

画面に詰め寄る勢いで言う麗華に思わず逆に体を離す体勢をとってしまう結斗。画面越しでも迫力があるものはあるらしい。

結「やあ麗華。だって麗華とか来たらなのはたちにもいうでしょ？それで迷惑になるかもって思ったから……」

麗「なに言ってるのよ!!そんなわけ無いじゃない大好きな人の雄姿見ないわけには行かないでしょっ!？」

結「あ、ありがと。それで来てくれるなら・・・午後からの方が嬉しいんだけど・・・午後が模擬戦だから・・・」

麗「分かったわ、みんな連れて行くわ。ちょっとお母さんっ?えっ?私も行く!!っってお母さんもっ!？」

通信越しで麗華に話しかけているのは母美緒だ。

一言二言彼女らが話し合い、再び麗華は結斗に向き合った。

麗「うん・・・うん分かった。ゆうお母さんも行くからそのつもりでだってさ～～んじゃあまた後でね」

笑顔で手を振りまきながらそういつてモニターはぶちっときられた。まるで嵐だなとそばで聞いていたクロノが思ったことは秘匿としておく。

結「というわけでアリシアが言ってもいわなくてもどの道麗たちが来るようだ・・・」

アリ「あはは・・・」

疲れた様子の結斗に乾いた笑いをするアリシア。  
三人の歩きは少し遅くなっていた。



試験室――

あの後他愛無い会話をしながら目的の場所に三人は試験室に到着した。

ク「ここで試験を受ける。あっと忘れるところだった・・・」

アリ「どしたの、兄さん？」

ク「君らの魔力測定をし損ねるところだったよ」

そういつてクロノが取り出したのは小型の機械だった。丁度掌を添えるくらいの大きさのものだ。

ク「ここに手を乗せてくれ」

結「分かった・・・」

アリ「うん・・・」

順に機械に手を添えた二人。機械は手を添える度に薄く発光して測定完了の文字をクロノに知らせる。

結「随分と簡単だね。それでこの場で教えてもらえるの？」

ク「いや、これはあくまで解析のみのものでデータを読み込めないんだ。だから一旦専用の機械と接続しなければ確認できないんだ。わるいな……」

結「ああ、いいんだよ。自分の魔力がどれくらい少ないのか確かめなかったから……」

ク「……」

結斗の言葉にキィィとアリシアのほうへ向くクロノ。アリシアもそれに肩を竦めるくらいしか反応する事が出来なかつたのであった。

結「よしっ！行くよ！！」

そんな二人を知って知らずか結斗は試験室の扉を開いた。

四時間後――――

筆記試験が終了して結斗の姿は局員の食堂に見られた。周りには誰もいない。今の時間局員は既に仕事へと戻り始めているためここにはいないのだ。

だが無人というわけではない。遅い昼食を取る人もいれば、遅すぎる朝食、早すぎる夕食を取る人がいるためだ。

その端々の局員らが結斗を見ると決まって同じことを言う。

あの綺麗な男の子は誰なのかと・・・。

今更記述する必要もないが結斗はなのはや麗華たちとつりあうほどの容姿を持っている。

艶やかな長い黒髪。

クリツとした目。

すらっと伸びた手足。

彼が食事をすると一枚の美しい絵画へとなる程だ。

彼らがそんな勝手な評価をしているとは露とも知れず、向けられた視線には愛想笑いを続けその度に若い女性局員は顔を紅くして歩いていってしまった。男性局員は同姓にも関わらず、結斗に見惚れる構図が出来てしまったのであった。

しかし結斗は愛想笑いを抜きにしても笑顔になっってしまう理由があったのだ。

「ー上手くいったよ。過去二十年間分試験予習やった甲斐があった。」

彼の言葉からお分かりのようだと思うが結斗は全ての問題を正確にしかも早く答えきることが出来たためこのような顔になっているのだ。

そして後に結斗の筆記試験を採点した局員は顔を青くしたそうだ。

麗「ゆう~~~~」

一人テストの評価を考えていると食事のホールに聞きなれた声が響き渡った。

視線を横へとずらすと麗華が手を振りながら結斗の下へやってきていた。そして背後にはお馴染みのメンバーが揃っている。アリシアも合流したように姿があった。

結「ん？やあ、麗。それになのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかまで。ありがと応援しに来てくれたんだよね？」

ア「ええそうよ、それにちょっと管理局って言うのも気になったからね」

す「私も〜」

通常なら魔導師でも局員でもない二人が入局するのは無理だが今回はリンディさんへとお願いをしてくる事が出来たアリサ、すずかが言った。

な「結斗君は今から昼食？」

机の上にある結斗の弁当の包みが未だ開かれていない事に気づいたなのはが聞く。

結「うん、さっき終わったばかりかです。昼食取る時間がなかったん

だ」

な「そうなんだ〜」

なのはの言葉を機に、みんなが結斗の周りに座り始める。隣に座るのは麗華とはやて。

この二人がどうして隣となったかは、なのはの話しを二人以外が聞いているときにさりげなくかつ迅速にポジションを奪取したためである。その手並みは鮮やかだったと表現しておこう。

二人の他が気づいた時は既に遅く、止む得なく結斗の隣ではないイスへと座ったのであった。

は「それでどやったん？試験は」

結「多分大丈夫かな？」

先ほどは自身を持って出来た言っていた問題を結斗は多分と返答した。

人前では決して有頂天にはならないのだ。

は「多分て・・・」

焰「安心せい。合格じゃ」

はやてがいぶかしんでいたのを結斗のピアスからの焰美の声が答えた。

フェ「やっぱり結斗すごいね」

澁「ゆう様全ての解答を埋められたんですから、そこは出来たとい  
うべきですよ。」

結「で・・・でも合ってるか分からないし・・・」

な「絶対合ってるの」

自分のことのように自身を持って言ってくれたなのはを嬉しく思う  
結斗。

結「ありがと、なのは」

な「うんうん／＼／＼／」

結斗がなのはに微笑んだことで顔を朱色に染めるなのは。

ア「それで！？午後が実技試験だっけ？」

なのはの様子に出遅れたと思いながらもアリサが聞く。

結「うん・・・」

麗「相手は誰なの？」

麗華が口を挟んだ。

結「うゝん聞いては無いんだけど・・・なんでも凄い人らしい」

麗「凄い人？」

結「うん。筆記の試験管が言ってたんだ」

フェ「もしかしてストライカーだったりして」

フェイトの言葉に結斗と麗華、アリシア以外の子達みんなが首を傾げた。

す「ストライカーってなに？」

フェ「技術が優れていて、華麗に優秀に戦える魔導師を「エース」と呼ぶんだ。そしてその人がいれば、困難な状況を打破出来る、どんな厳しい状況でも突破できる、そういう信頼をもって呼ばれる名前が、ストライカーっていうんだよ。」

す「へ〜〜じゃあストライカーの人は全員強い人ばかりなんだ。」

フェイトの分かりやすい説明で納得した様子の子供たち。

麗「そうよ。普通ならそんな人が試験程度の事に呼ばれることは無いんだけど・・・ゆうならもしかしたら・・・」

麗華の探るような目で結斗を見る中、みんなも便乗する。

結「ないない！それは絶対に無い。だって僕程度だよ？」

それを物ともせず謙遜する結斗にみんな溜息をついたのであった。

結斗や麗華達が午後の実技試験の試験場へ向かっている最中その試験場をモニターする部屋に六人の人の姿があった。その中にクロノとリンディの姿があった。

リ「どうだったクロノ、結斗君の筆記試験は？」

手元でモニターの作業をするクロノに聞くリンディ。

それには答えられず数瞬間沈黙が続き、モニターの作業が終わってクロノが口を開く。

ク「全て満点です。異例ですね。ほんとあいつはどっなっているんでしょう・・・」

リ「さすがね」

レ「ほう・・・それは・・・凄いではないか。執務官の試験で満点を出すとは・・・」

ラ「リンディ提督が推しただけはあるのう」

リ「はい。ですが彼は魔導師としても突出しています」



「ミ」あらあら。それは楽しみね・・・」

三人の言葉にリンデイが苦笑する。

この三人は時空管理局黎明期の功労者として伝説とされている「伝説の三提督」だ。

レオーネ・フィルス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥、ミゼット・クローベル本局統幕議長の三人だ。

いずれも最高の権力を持ち今の管理局のトップと言えよう。

レジ「ふん・・・それは見てみなければ分かん」

それに水をさす言葉を発した男性局員。

レジ「事実を言ったままでです（それは聞き捨てならないわね！）  
多くの実権を握り、多大な影響力を行使できる事実上の地上本部総司令だ。」

「ミ」相変わらずレジー坊やは厳しいのね」

レジ「事実を言ったままでです（それは聞き捨てならないわね！）  
誰だっ？」

レジ「アスが冷静にミゼットの言葉を返すとこの場にはいない声が聞こえる。」

やがてモニター室の扉が開けられ、入ってくる女性。

リ「美緒っ!?!」

美「はあ〜いリンディ。それとクロノ君も」

ク「どうも・・・」

白銀美緒の登場に目を驚くリンディと軽く会釈するクロノ。

レジ「ほう・・・お前がどうしてここにいる？白銀美緒技術開発局総務副長」

ここでどうして入ってこれたとはレジアスは言わなかった。

美緒の実力ならこの扉をハックして開けることなど造作もないことだと分かりきっていた事だったからだ。

美「あら久しぶりに再開したのに第一声が嫌味？相変わらずねレジアス。」

かつての役職を言われ不機嫌になりながら言う美緒。

レジ「ふんっ。貴様と京二のおかげで空戦魔導師が増えたのだ。嫌味の一つ言わせる」

美「ほんつとその態度懐かしいわ。いつも眉間にしわ寄せて疲れない？なんならいいマッサージ紹介しましょうか？」

二人の間に行き交う嫌味の言葉。その遠慮のない言葉にクロノ以外

のものが懐かしいように見ていた。

ク「リンディ提督、お二人は知り合いなのですか？それに美緒さんは副長って……」

いつものように母さんと言いかげずにリンディに小声で尋ねるクロノ。

リ「ええ美緒が管理局に所属していた頃よくあんな風に喧嘩してたわ。ああ見えるけど二人とも嬉しがつてるのよまた会えて。」

ク「そうなのですか……」

リ「あと副長だったわね。あれはかつての役職。管理局技術開発局総務の副長だったのよ。ちなみに首長は京二さんね。」

ク「技術開発局って大変なエリートなところじゃないですかっ!？」

美緒と京二の正体を知り驚くクロノ。

リ「まあそうね」

リンディは再び二人の嫌味合戦に目をむけ、クロノもそれに習うのだった。

美「ふんっ！今日はこの辺にしてあげるわ。感謝なさいレジ」

レジ「レジと呼ぶなど言っておるだろ！！それで局員を辞めたお前がどうしてここに居るのだ？」

熱くなっていた二人は今度は冷静に質疑応答を始める。

美「自分の息子の局入りを見て悪いのかしら？」

レジ「息子・・・なるほどお前と京二の息子が。」

美「血は繋がってないわ。ただあの子と娘の麗華は私達の宝物よ」

レジ「ふん。かつての技術局副長の名が泣くな。」

美「その名で呼ぶなつての。今はただの美緒よ。息子と娘が大好きな母よ」

レジ「勝手にしろ。だが今回の試験はどんな奴でも合格はないな・・・」

美「どうゆう意味よ？」

レジ「不本意ではあったがストライカーを二人用意した。だから合格は有り得ん」

美「ふふ・・・あははははは。」

レジ「何が可笑しい？」

笑いすぎたために目に涙を溜めた美緒が尚も可笑しそうに言う。

美「いやごめんなさい。あの子をストライカー程度で測れると思っ  
っているあなたが可笑しかったの」

レジ「なっ!？」

美緒のストライカー程度といった言葉にレジアスは驚愕した。  
当然だろう。ストライカーとは最高の魔導師に与えられる称号であ  
り、管理局の主戦力を担っている事でもあるのだから。

例え二人のストライカーであつても戦力としては十分で、どのよう  
な任務でも失敗はない程だ。

それを美緒は程度と言った。レジアスは彼女の性格をよく知ってい  
る。ふざけてはいるが美緒の観察力や技術者としての腕は一流だ。  
その彼女をこつも言わせる存在。

レジアスは未だ見ぬ白銀結斗と云う存在に興味を持ったのだった。

美「最初はおの子でも堪える事しか無理でしょうね。でもね最後に  
立っているのはあの子よ・・・」

レジ「・・・ふん。お前の自信見させてもらおうじゃないか。」

美「ええ〜どうぞ。いい年なんだからびっくりしすぎて腰抜かすん  
じゃないわよ」

レジ「じゃかましい!?!」

最後レジアスの声が響き二人の会話が収束した。六人の視線の先には試験場に入ってきた結斗の姿があった。

実技試験会場 . . . . .

ザッ

地面を掻く音がした。結斗とアリシアはそれを聞きながらこれから相手する試験管が誰なのか考える。なのはや麗華達は部屋の外で別れた。今頃ここの様子をモニターするところにいる。

エ「はあ〜い結斗君、アリシアちゃん」

アリ「エイミィさんですか？」

突然空間から響く知り合いの声に驚く二人。その様子を見ながらエイミーは試験について説明しだす。

エ「はい、今回の試験の説明をさせていただきます。まず始めに今回の試験の内容は執務官と教導官資格試験ですね」

結「はい・・・」

エ「了解しました。実技試験では対戦相手と模擬戦をしてもらいます。ちなみにここで勝利はしなくても結構です。結斗君とアリシアちゃんの技量を試すものなので」

アリ「でも勝つ事に越したことはないんじゃない？」

エイミーの言葉にアリシアが疑問を口にする。

エ「もちろんそれに越したことはないでしょうが今回はさすがに・・・」

言いかけるエイミーに首を傾げる二人。

結「それで対戦相手というのは・・・」

エ「今から彼らを転送します。ご武運を・・・」

そういつてエイミーの説明が終わった。その数秒後試験場に転送される気配が発せられる。

澁「来ますよ……」

焰「ああ、覚悟せいよ。三人とも……」

焰美からの声で結斗とアリシアは転送陣を見る。

結「あなた方はっ!!」

その姿を見て一番に驚いた結斗は思わず声を上げたのであった。

麗「やつぱり……」

結斗のいる試験場をモニターする美緒やリンディらとは違う部屋でモニターしている部屋で麗華の声がなのはらの耳に届く。

麗華の確信を持ったその声になのはやフェイト、はやて、アリサ、すずかは答えを求めるように麗華の方へ向いた。

みなに見つめられる中、麗華はそれに答えるようにいった。

麗「あのゆづの対戦相手……二人ともストライカーよ……」



は「ってことは結斗君はさっき言ってた凄い人たちを相手にしないといけないのかいなっ!?!?」

麗「そうゆうことになるわね・・・」

「ー今のゆうで勝てるの?・・・いいえ、ゆうのことだ私のいない間怠情に過ごしていたはずがないわね。

はやての驚愕の言葉に冷静に答える麗華だったが内心は不安だった。だがその不安を払拭する程に結斗の成長が楽しみでもあった。

ア「なに?どうゆうことよっ!?!?」

す「そっだよ!?!」

四人で納得してたところをアリサとすずかが動転してなのはとフェイトに詰め寄った。

な「あのね・・・さっき言ってた凄い人って言うのがあの人たちなの・・・」

画面に映る二人を指差すなのは。画面内には若い二十代の男と四十過ぎの男性が映っている。

フェ「右に映っている銃を持っている人がティータ・ランスター執務官。左の人槍を持っている人がゼスト・グランガイツどちらも優秀な魔導師で今の私達では到底叶わない人だよ。」

な「うん・・・私、フェイトちゃん、はやてちゃんが纏めてかかっても叶わない。麗華ちゃんが入っても・・・三割程かな？」

なのはの言葉に二人が信じられないようにティータとゼストを見た。二人はなのはたちが稀有の魔力を持つ事を知っていたし、それを自分の目でも見ていたからだ。（闇の書の時）

麗「ええ、そうね。でもある意味では面白い戦いになるわよ」

は「麗華ちゃん、不謹慎やで・・・」

麗華の発言をはやてが咎める。それに悪びれもなく麗華は頭の後ろで腕を組みながら飄々とした様子で答える。

麗「考えてもみなさいよ。ゆづの本気が見られるかもしれないのよ？」

フェ「麗華は見たことないの？結斗の本気・・・」

麗華の自白に意外だと顔で表したフェイト。他のなのは、はやても同じ顔をしていた。

麗「いつもゆづの側にいるけど見たことないわ。一度もよ・・・」

な「一度も・・・なの？」

麗「そう・・・一度も・・・」

同じことを二度言う麗華。そして話す事はもう話したとばかりに麗華は再びモニターへ目を向けた。なのほらもそれを機にモニターを見る。どの人も結斗の行動一瞬一瞬を見逃さないように見ている。だがそのなかでも麗華だけはそれに加えてどのようなものを見せてくれるのか期待の眼差しで見つめていた。それは違う部屋で結斗を見る美緒と同系の眼差しであった。

結「ティーダ・ランスター執務官。騎士ゼスト・グランガイツ。」

結斗の探るような言葉に聞き、二人は関心の顔をする。

ティー「へえ、その若さで僕らを知っているなんて驚きですね。ゼストさん」

ゼ「ああ」

ティーダの軽い言葉にゼストは相槌を打つ。

結「ご謙遜を・・・お二方は管理局のストライカーではないですか？知らないなんて有り得ませんよ・・・」

それに小学三年生とは思えないほどの綺麗な敬語を述べた結斗に更に感心した二人。

それを見た結斗は二人のデータを口にする。

結「ティード・ランスター執務官。精密射撃魔法を得意としており、ガンナーとして優秀な成績を残している。しかしそこだけではなく、最も注意するべきは戦術の上手さ。彼が考える戦術は相手の二手、三手先を読む。そのため指揮官としても優秀」

ティード「ヒューーやるねえ・・・僕のデータだ」

口笛を吹くティード。それは結斗が自分のデータを正確に言い当てたためだ。

次と言って結斗はゼストに向かい合う。

結「ゼスト・グランガイツ。またの名を騎士ゼスト。管理局・首都防衛隊に所属するストライカー級の魔導師でベルカ式カートリッジシステムを使っているため騎士の名がついた。装備は槍。その実力は一騎当千の如くストライカーの名に恥じぬ実力を持っている」

ゼ「ほう・・・私のデータまで・・・」

ティード同様感心したゼスト。

二人のデータを言い終わった後結斗は確認へと入る。

結「それで・・・僕の相手はあなた達ですか？」

ゼ「ああそうゆうことになっている。お前が白銀結斗なのだろう？」

結「はい、そうです」

ティー「三役職の試験を同時に受ける奴なんてたいした事ないと思  
っていたけど訂正するよ。君・・・その歳でとんでもないもの持っ  
ているね・・・」

結「ありがとうございます・・・ところで二人同時に戦うのでしょ  
うか？」

ティーダを軽く受け流し、結斗が尋ねる。ガクツとティーダの肩が  
下がったが、それも結斗は流した。

ゼ「だろうな・・・全くストライカー二人掛かりで相手するなん  
て何を考えているのだ・・・」

ゼストがここにはいない親友に当てた言葉を言った。

それに結斗は少し微笑んだ。

それをゼストとティーダは不愉快に思う。

二人はストライカーだ。その二人を前にして小学三年生に笑われた  
のだ。それは気分を悪くもする。

結「失礼しました。不快に思ったのなら謝ります。ただ・・・楽し  
みなんです。今まで僕は全力を出していませんでしたので。いえ出せな  
かったんです」

微笑みながら言う結斗に二人は一瞬背筋が凍るような感覚に襲われ  
る。

二人はまだ気この時その正体がつかめなかった。

結「さあ始めましょう・・・」

結斗が恭しくお辞儀する。それを機に実技試験は開始されたのであった。

N e x t   t o   T A L E 5 2 ! ! ! ! !

TALE 51 試験開始！！（後書き）

疲れております。いろいろと・・・  
とりあえずかんそー待ってます～～

では～～

T A L E 5 2 福音の魔閃(前書き)

タイトルが厨二過ぎますが気にしないでもらえたら嬉しいです。  
どこからとったのかは分かる人には分かりますよ。

それでは本文へ〜



## TABLE 52 福音の魔閃

ビル街に戦いの火蓋が機つて落とされた。

それが落とされたのは管理局地上本部実技試験場。多くの目がそれを視るなか揃ってみる人はこう思った。この模擬戦は後々に語られていくだろうと……。

ティーク「フェイクシルエツト!!」

ティードの第一声は攪乱の魔法だった。発動後ティード姿が当たり一面に見られる。その中には当然ゼストのフェイクも混じっている。

結「いきなりですかっ!! 焰美!!」

焰「了解したのじゃ!!」

フェイクとはいえ取り囲まれ、後手に回ってしまった結斗が焰美の名前を叫ぶ。焰美のセットアップされ、黒いBに右手には愛刀焰龍が握られていた。

結「白銀流奥義、飛燕……二閃……」

シャシャリン

刀から発せられたものとは思えない綺麗な音がする。

焰龍で素早く抜刀し、奥義飛燕を発動したのだ。二閃とは単純に180度の剣圧が飛ばしたのだ。合計360度の全方向の剣圧でシルエットは跡形もなく消え去った。  
しかし手応えを結斗は感じなかった。

アリ「逃げられちゃったね……」

結斗のすぐ隣でそれを見ていたアリシアが呟く。それに結斗は首肯しながら二人がどこにいるのか探る。

結「アリシア、ユニゾンを……」

アリ「分かったよ、ゆう君!!」

結斗とアリシアが手を握り、唱える。

結・アリ「《ユニゾン・イン!!》」

アリシアの体が光り輝き、光は結斗へと取り込まれる。その途端結斗の黒髪が輝く金髪へと変貌した。B Jは未だに黒のままだ。

結「よし……っ!! 焰美!!」

ユニゾンの成功を確認して前方を向き直ろうとしたが背後からの闘気に結斗は気づいた。

振り返りながら焰龍を変化させ、槍にする。それを構えると体をとてつもない圧力が押す。

槍同士の鏝迫り合いになり、結斗とその状態になっているゼストは、自分の初手を防がれた事に驚く。

ゼ「ほう・・・お前は槍も使えるのか・・・。」

攻撃を防がれながらも自分の体重を槍に圧力として乗せながら余裕で呟く。

結「ええ・・・くっ！僕は大体の武器が扱えます・・・からっ！！」

一方結斗はゼストの尋常じゃない圧力に押され、膝を突く寸前まで持っついていかれる。

子供と大人の力ではそもそも違いすぎるため当然の構図だろう。それでも結斗はよく堪えている方だ。自分の体にある様々な力を使っているのだ。

力とはがむしゃらに振るうものではない。自分の筋肉から力を振り絞り、的確なところに力をつけるだけで今の結斗のような不動の状態にもなり得るのだ。

バンツバンツバンツバンツバンツ

結「ちっ！！アリアシア！！」

アリ《シフト　！ファイア！！》

ゼストと三竦みの状態が数瞬続いた時、背後からの五つ水色のスフィアの対応をアリシアに言い渡す。アリシアがそれに答え結斗の背後に同じ数の翠色のスフィアを展開され迎撃した。

結「ありが・・・とっ！！」

その迎撃に気を取られたのかゼストの重心が一瞬ずれた事を見抜いた結斗はアリシアに礼を言いながら槍を押しだし、三回ほどバク転をしながらゼストと距離を取る。バク転した理由は上空から再びスフィアが打ち込まれたためだ。

結「フツフツ・・・よつと・・・。フウ」

「さすがだ。お互いの長所を最大限且つ効率的に出すために誘導されてた。やっぱり侮れない。」

地面に足を付け息を整えながら作戦を練る結斗。

アリ《危なかった～～大丈夫？ゆう君》

結《大丈夫だよ・・・でも今みたいなものが何度もやられるときついかも・・・》

アリ《そうだよね……どうしよ……?》

内にいるアリシアと会話しながら結斗は考える。

目の前にいるのはゼストのみだ。ティーダの姿が見えない。

恐らく隠れているのだろう。指揮官は最前線に出てはいけない。指揮官つまり頭がやられてしまつとその戦力は空中瓦解してしまうからだ。

結《とりあえずティーダさんを引きずり出さなきゃ!》

ティー「シューーーート!!!」

ティーダを見つける事を最優先と考えた結斗だったがその張本人からの声でどこからの攻撃かみる。唯のその弾道は……

アリ《ゼストさんに直撃コース!?!》

アリシアが結斗の内で驚く。

それもそのはずだティーダの放った弾はゼストへの直撃コースだったのだから。

しかし……

ゼ「火龍槍!!!」



恐れ入ったと呟く結斗にアリシアは再び状況が最初に戻った事に気づく。

最初もシルエットで後手に回り今回も目を阻害され相手の視界に入れることさえもままならないという状況だ。

アリ《どうしよ・・・》

結《この規模の霧だと相手はこちらに気がつけないけど・・・僕らは違う・・・》

澁「あれですね・・・」

アリ《あれって・・・もしかして!!》

結斗の言葉に心当たりがあるのか澁が便乗した。

アリシアも知っているのか声を上げた。

結《うん・・・必中の技を・・・》

結斗は一人パートナー達に自信の技を悟らせた。

ところ変わって美緒たちのいるモニター室。

レジ「ふんっこの程度か・・・期待して損したわ。」

画面の状況を見て不評をもらすレジアス。それに美緒の整った眉が上がった。

美「レジやっぱ馬鹿ね」

レジ「なにっ!？」

美緒の小馬鹿にした態度に今度はレジアスが眉がっり上がった。

美「あの子はまだ諦めてない。第一最初に言ったでしょ。始めはいくら結斗でも後手に回らざるを得ないって。だってストライカーが相手だもの」

レジ「負け惜しみだな・・・」

美「言ってなさい。結斗は絶対勝つわ」

レジ「・・・」



美緒の絶対的な自信にレジアスは黙る事しか出来なかった。

美緒とレジアスが言い争いする中、背後でクロノとリンディ、三提督がモニターを見る。

ク「不利な状況ですね・・・」

リ「ええ・・・でも・・・」

ク「結斗なら勝ってしまう・・・ですか？」

リンディが言葉を濁したところをクロノが補足する。

リ「そう・・・あの子が負けるビジョンが浮かばないのよ・・・」

ク「僕もです・・・」

ミ「ほっほ・・・この程度でやられる者ならそれまででしょう・・・」

リ「ミゼット本局統幕議長・・・」

ミゼットの冷たい言葉にリンディとクロノは内心穏やかではなかった。

しかしそこでミゼットはですが・・・と付け加えた。

ミ「あなたたちの言う結斗君がそのような人物ならこのままでは終

わからないのでしょうか？」

ミゼットの「こやかなだがリンディとクロノを逆撫でする発言に二人は当然ですと答えたのだった。」

麗華、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかがモニター見  
中始めに光景を表したのはフェイトだった。

フェ「す……す……す……」

な「うん……後手に回ってるけどちゃんと対応していているの  
。」

は「ほんまに結斗君は半端ないわ……」

麗「・・・」

はやてらの言葉に麗華は未だモニターを複雑な表情で見つめていた。

ア「どうしたの？麗華・・・そんな浮かない顔して・・・」

麗「いや・・・そんなことないけど・・・でもちよっと悔しいかな・・・」

す「悔しい？」

麗華の言葉にさすがが尋ねる。

麗「うん・・・私頑張ってゆうに近づけるように努力した。でもこれを見て分かるようにゆうにはまだ遠く及ばないなって思ってた・・・」

な「麗華ちゃん・・・」

は「強くなるうで・・・」

フェ「そうだよ！いつかは追いつけるよ！！」

麗華が沈みかけたところをなのはらが励ます。

麗「そうね・・・頑張って追いつかなきゃ！」

そういって六人はモニターへと視線を戻した。

場面は戻り――

ティー「ありがとうございます、ゼストさん」

ゼ「気にするな・・・」

ティーダの礼にゼストは無愛想に返したただけだった。ティーダはそれがゼストの感謝の表れと知っていたので気にせずに続ける。

ゼ「それにしてもよく考え付いたな・・・水蒸気爆発なんて・・・」

ティー「ええ、まあもしかしたらと思つてやっただんですが・・・予想通りでした。それにあの場面だと引いて体勢を整えるのが一番でしたから」

ゼ「ああ、たかが小学三年生に俺の槍が止められるとは思わなかったから・・・」

ティー「はい・・・僕の死角からの攻撃も難なく迎撃されました・・・こりゃとんでもない奴だ・・・」

頭を手で掻きながら困った表情をするティーダにゼストも相槌を打つ。

お互い舐めてかかったわけではないが子供に自分達の攻撃が意図も容易くかわされた事に少しならずショックを受けているのだ。

ティー「でもまあ・・・これで少しは時間稼ぎになりますでしょう。視界が悪くこちらを攻撃できませんから」

ゼ「こちらも・・・だがな・・・」

二人ともが発生させた霧の中で話す

ティー「あはは・・・それは仕方ありません。ですがこれでいくだけでも作戦が練れます。こつちと向こうでは経験が違いますから・・・お～～～い・・・聞こえるか～～～?」

ティーダが結斗がいるであろう方向に声を向けた。  
結構おちやらけた感じで・・・。

それを見たゼストは呆れた。

結「なんですか……?」

それに合わせる結斗にもゼストは呆れる。

ティー「これから俺らはお前を全力で潰しに行く。さっきのは少しお前を甘く見てたんだ」

結「御気になさらず……僕も本気出してませんから……」

ティー「にやる……んっ……それじゃ本気でいけど。こ  
ちにはいくらでも手はあるが、お前にはないんだろ……? 降参す  
るなら今のうちだぜ……あつと安心しろよ……。負けても俺らの  
攻撃に耐えたんだ役職の見習いくらいなら採用だと思っぜ……?」

結斗の言葉に少し冷静さを欠かせられそうになったが子供に戯言だ  
と思っ流す。

結「あはははははは……」

その返答は笑いだった。それは子供の笑いでその意味が分からない  
ティードとゼスト。

人数でも経験でも、真っ向からの勝負ならこちらが断然と有利。に  
もかわらず黒髪の少年、いや金髪の少年はどうして笑っているの  
かと……。

ひとしきり笑った後再び結斗の声が聞こえる。

結「お二方〳〵何か勘違いされてませんか〳〳？僕はここからでも  
あなたたちを撃てますよ〳〳」

ティー・ゼ「なっ!?!」

結「それを今から証明しますね。瀧セットアップ!!!」

ティー「はったりだ……この悪影響の中攻撃できるわけが……」

ティードの驕りを嘲笑うかのように白い霧に青白い光りが灯る。

結斗が瀧をセットアップし、両手にブルーティアーズが握られた。  
しかしここで終わることはなかった。

結「……汝の封印を解かん……契約の元我に新たなる神蒼の力  
を……エクステンド!」

瀧「extend!」

結斗の言葉に瀧が答えると結斗のBJは黒一色から蒼一色へと変化  
した。

ジャキンッ

両手にある双銃から輝かしい蒼色の魔力が溢れ出し、一陣の旋風となつて大気を震わす。それは霧をも吹き飛ばす程の者で結斗を中心として台風の目のようにぽっかり穴が開く。

結「Es ist ein Ende!!!」(終わり)

バシンッバシンッ

小さく日本語ではない言葉で話し、

結斗の咆哮に似た叫びで一対の高密度の砲撃が放たれるが……

ティー「ははっ!!!…何やってんだ？全然違つところに撃つてんじゃねえか……」

結斗が放った砲撃は二人のいるところとは全く違つところ、真逆といつてもいいほどのところに放たれてしまった。

あまりの高密度の魔力弾と身構えたがあたりなければ意味はないと思ひ、ティーダが嘲笑うがゼストは笑わなかった。

既に結斗が普通の魔導師ではないということが分かっていたから。その声を聞きながら結斗がほんの少し笑った。





フェ「あれはっ!？」

結斗の必殺の砲撃に思わず席を立つフェイト。

な「砲撃が曲がった？」

は「・・・麗華ちゃんあれは・・・？」

はやてが麗華に尋ねる。

麗「・・・分からない・・・けどなのはのディバインバスターを見て自分なりに改良したものだと思う。」

は「もう・・・なんでもありやな・・・」

な「私のディバインバスターを・・・」

なのはが麗華の言葉を聞いて顔が綻ぶ。あの必殺の技に自分の技が参考にされていると思うと嬉しくなってしまったのだ。それが大好きな男の子だったらなおさら。

ー「まるで私も一緒に闘っているみたいなの  
なのはが僅かばかり上機嫌になったことに誰も気づかなかった。

ク「母さんあれはっ!？」

結斗の福音の魔閃を見てクロノが騒ぐ。思わずリンディを母さんと呼んでしまうほど慌てていた。

リ「分かんないわっ!美緒あれはなんなの!？」

自分でも見た事もない砲撃が展開され動揺するリンディが矛先にしたのは冷静だった美緒だった。

美「ゆうちゃん・・・ついに出来るようになったのね」

一人納得している美緒はそれをスルーした。

リ「美緒ってば!！」

美「!！」ってリンディ?何?耳元で?」

リ「あれはなんなのよ?」

モニターを指差すリンディ。こちら先ほどのクロノと同様冷静ではなかった。

美「あれは……福音ヴァイス・シユバルツの魔閃ゆうちゃんオリジナルの魔法よ。音で相手を判別するの、それこそ極小の音でもよ」

リ「音って……でもティーダ執務官と騎士ゼストは話していただけよ。たったそれだけの音で……」

リンディの不満の声が上がるが美緒はそれにチツチと右手の人差し指を立て振る動作をした。

美「そんなのめじゃないわ。いい？これは心音を頼りに動くのよ」

ク「心音……それじゃ絶対当たるものじゃないですか!」

美「ええそうよ。だからこれはゆうちゃんの必殺の技でも……」

リ「でも？」

美「魔力の消費が激しいのよ。いくら音で追跡できてもそこらのスファイア程度の密度だと意味はないのよ。それに砲撃だしね……だからゆうちゃんは一つエクステンドしたの」

エクステンド。結斗が焰美と瀨に作った自己封印プログラム。有り余る焰美と瀨の魔力を開放し、自分に送り込むこと。

これをするBと髪が焰美であれば焰色。瀨であれば蒼色となる。今回髪がなかったのはアリシアとユニゾンをしているため。

リ「やっぱりすごいわ・・・」

美「でしょでしょ！やっぱりゆづちゃんは最高よ〜」

レジ「調子でつくでないわ！」

美「何よ！レジ！負け惜しみ〜？」

レジ「負け惜しみだと？貴様あれが目に見えんのか？」

美「ん〜？・・・嘘・・・」

美緒の驚愕した先にはティーダを庇う形で槍を構えているゼストの姿だった。

シューーーーーー

ティー「た、助かりました。ゼストさん・・・」

ゼ「気にするな・・・」

ティーダとゼストは間一髪で結斗の砲撃を防いでいた。ゼストがその強靭な防御力で防いだのだ。

ティー「僕だったらやられてました……」

ゼ「俺もギリギリだ……そう何度も受けられない……」

カツンツカツンツ

砲撃の反動で未だ動く事が叶わない二人に結斗が近づく。

結「さすがです……僕の福音ヴァイス・シュバルツの魔閃マジツバシが防がれるなんて……」

ティー「お前、ほんとに小学生か？」

結「もちろんですよ。」

ティーダがゼストを動けるようになるまで時間稼ぎと思い、結斗に話しかける。それに気づきながらも結斗は乗った。

それは先ほどティーダが取り憑かれていた驕りと云う名の悪魔がそれとも自信の表れなのかティーダも判断出来かねるものだった。

ゼ「お前はもう既に立派な魔導師なのだな……」

結「ありがとうございます。騎士のあなたに言われるて嬉しいです・

・・・」

回復が完了したゼストが立ち、結斗に言う。  
それを見た結斗は重心を前に倒してゼストたちに突っ込む。

結「焰美！」

焰「うむー！」

一瞬でBJと武器が変化し、その手に焰龍が握られる。

ガチイイイイイイイイイイイイ

刃と槍の柄の部分が火花を散らし、辺りに音が響く。

ゼ「(さっきより力が上がっているっ!?)」

その身にかかる力が初撃の時よりもましていることに気づくゼスト。

結「逃がしません!! やああああああ」

距離を詰め再び斬りあいを持っていく。

結「そこっ!!」

一瞬ほんの僅かな一瞬ゼストが結斗の猛攻で隙が出来た。それを見逃さず結斗は、

結「白銀流奥義・飛天紅龍翔破!!」

ゼ「っ火龍槍!!」

奥義を放ち、ゼストも一瞬遅れたが自身の炎熱を槍に付加させ、技を放った。

ギヤオオオオオオオオオオオオ

ギヤ—————

互いに紅き龍を象った魔法は敵に襲い掛からんとする勢いでぶつかり合う。

ギギギギギギバシャー—————



しかし均衡が保たれたのは一瞬で火を纏った龍は紅き龍に飲み込まれ、そのままゼストに襲い掛かった。

ゼ「ぐっ………がはっ!!」

槍でガードをしたが到底堪えられるものではなくゼストは吹き飛ばされ、地面で気を失った。

結「っ!! 瀧!!」

瀧「はいっ!!」

そこへ撃ち出されたスフィアを瀧をセットアップしながら避ける。

ティー「まさか本当にゼストさんをさしで倒すなんてな……」

辿るとティーダがこちらと同じ双銃を構えながら話しかけてくる。

結「さしっていつでもギリギリでした。それじゃあいきます!!」《シヤドウ・シルエット》「!!」

ティー「これはっ！！・・・はは参ったねこりゃ・・・」

ティーダ周りに展開されたのは結斗の分身。

先ほどのティーダがやったフェイクシルエットと似たものだ。それに乾いた笑いをするティーダだが瞳は諦めていなかった。

ティー「全て打ち落とす！！クロスファイアシューーーート！！」

ありつたけに魔力を注ぎ、合計五十のスフィアが一斉に分身の結斗に向かった。

ティー「つなに!?!」

しかし分身がシールドを張り、それを防いだ。だが二方向から攻撃された分身は跡形もなく消えた。

三分の一の分身を消せたがティーダは今の状況が理解できなかった。

ー今のシルエットは間違いなく俺のを真似たものだ。だがどうしてやつらはシールドを張ることが出来た？俺のシルエットは衝撃に弱く、攻撃を受けると消滅してしまうのに・・・。

結「不思議ですか？分身がガードした事が・・・？」

ティードの理解不能の表情を判断した本体の結斗が声を掛けた。

結「簡単な事です。ティードさんのフェイクシルエットを少し改良させてもらいました。それぞれの分身に魔力を持たせただけです」

ティー「だからガードが出来たというわけか・・・」

結「ご名答・・・さて幕引きです・・・」

ティー「こちららそう簡単にやられてたまるかっての!!」

やがてティード周囲には彼を取り囲む檻のように集まる幾線の蒼いスフィア。

それに対しティードを守るように展開される水色のスフィア。

結・ティー「《シユトウルム・クロイツ聖邪必滅の流星群》」

「ファントムブレイズ!!」

二つの蒼と水色の光がぶつかり合い、辺りを光りへと満たした。

Next to TALE 53!!!!!!



TALE 52 福音の魔閃（後書き）

頑張って一日でやりましたよ。  
かんそーまってま〜す

ではでは〜

**T A L E 5 3 試験結果発表！（前書き）**

短いです！

それとお気に入り件数が200件を突破しました！！  
嬉しいです！！  
なんか記念に書こうかな？

### TABLE 53 試験結果発表！

ここは美緒達が結斗らをモニターしていた管制室。しかしそこにあるモニターの画面は全て暗く何物も映してはいなかった。そこにいる美緒以外の人物はその場を動く事ができなかった。

それは先ほどの戦闘の余韻だからか今は黒髪の少年がなした事を信じられないかのように、そんなことは有り得ない・・・有り得ていはずがないとそれぞれの頭で囁くのだ。そのため体が動こうとはしない。

美「みんな分かったかしら？ゆうちゃんの実力が？」

えへんとまるで自分が為した偉業かのように胸を張る美緒に対し、誰も何も言えない。先ほどまで言い争っていたレジアスでさえも口火を切ることが出来なかった。

それほどまでにシヨックが大きいためだ。  
ストライカー二人を相手に勝利。

これは異例中の異例だ。

リ「まさかほんとうに勝ってしまうなんてね・・・」

ク「恐れ入りましたね・・・」

二人が現状把握に戸惑っていると美緒が二人に向き直り、嬉しそう





ク「落ち着け！それで・・・そんなに慌てるほどの事なんだよっぱ  
どの事なんだろ？」

エ「うん！！結斗君とアリシアちゃんの魔力測定が今終わったの。  
それで見てもただけど・・・」

リ「どうだったの？」

エ「今から送ります！！！」

そういつて凄まじい速さでキーボードを打つエイミー。やがて数秒  
後にはその問題のデータがクロノに送られる。

ク・エ「なっ！！！！？」

それに目を通したクロノとリンディが驚愕の瞳をし、お互い自分で  
見ているものが間違いではないのかと見合っただのであった。

薬品の独特な匂いが充満するこの部屋に先ほど戦いあっていた四人の姿があった。

ストライカー二人、ゼストとティーダは目を覚ましている。ここへ結斗が運び込んだ時には既に目を覚ましていて自分からベッドに入ったのであった。

結斗は二人には付き添いというかたちで残っている。アリシアもその傍らに寄り添うように並んでいた。

しかし四人の中での会話はなかった。ティーダとゼストにしてみれば油断していたとはいえ僅か小学生に敗北してしまったのだ。声を掛けづらいのだろう。

一方結斗もこれから役職で先輩となる二人の面目を保つために自分から話す事は避けている。

そんな気拙い雰囲気を満たされる部屋で一番のきっかけとなったのはティーダであった。

ティー「その・・・悪かったな。お前を甘く見ていた・・・」

結「？」

ティーダの唐突的な謝罪に首を傾げる結斗。

ティー「だから俺は執務官になるのがずっと夢だったんだ。それで

ここ最近・・・まあもう一年になるかなって？それで調子に乗っていたらしい・・・」

結「そんなことはありませんよ。今回はティーダさんのその慢心に付け込みこちらが勝利しましたが戦術やあらゆる点でも僕はあなたには勝てません。それはもちろんゼストさんですが・・・」

ゼ「ああ・・・」

結斗がゼストに向き直って言ったのをゼストは相槌を打つのみで返した。

それに関して特に結斗も思うところはなく、話しを続ける。

結「ゼストさんとの最後の一騎打ちだって不意打ちみたいなものだし、ティーダさんとの最後の戦闘もこちらがデータを知っていたのですからこちらは断然と有利です」

ゼ「それでもお前は自分の力に過信しずに俺達を倒したという事実には変わらない。どのような過程があってもだ・・・」

結「・・・」

ゼストからの言葉で結斗は悟る。

自分の力を過信しすぎるのも悪いが不信すぎるのも問題だ。それでは負けた俺達の立つ瀬がないと言われているような気がした。

結「分かりました。僕はあなた達に勝ちました。実力です」

ゼ「ああそれでいい・・・」

結斗の答えに首を縦に振るゼスト。

ティードもそれが言いたかったのかうんうんと隣で頷いていた。

ティードにしてもよ結斗お前ランクはいくつなんだ？ぶっちゃけすっげー知りたいんだけど・・・」

いきなりな話題展開に一瞬たじろく結斗だったがティードの軽い態度は戦闘前も戦闘後も経験していたので普通に返す。

結「それは分かりませんよ。僕まだ計っていませんからちなみにアリシアもですよ・・・」

ティード「俺らを圧倒した魔力持つてるんだ。既にSは下らないですよね？ゼストさん？」

ゼ「ああ・・・最後の龍の技あれ程の高密度な魔法が放てるんだ間違いないだろう・・・」

結「そうでしょうか？」

ティードとゼストが結斗を高く評価しているのを首をかしげながら聞く結斗。パートナーのアリシアはうん間違いないよね！と二人に便乗していた。

ウィーーーーーン

その時大勢の足音が部屋へと乱入してくる。カーテンの仕切りがあ

つてもその騒音とも呼べるほどの声は結斗のよく知る声だった。

ク「結斗……」

カーテンを開け結斗らを視界に入れるクロノ。その後ろにはリンデイさんとなのはらを始めとした結斗の知り合いばかりだった。しかし見慣れぬ顔もある。結斗は三提督とレジアスを見て一瞬誰かと思ったが脳内検索をかけすぐに頭の中のデータを取り出した。

結「やあクロノそれにみんなも……」

アリ「みんなっ」

は「すごかったな〜」

フェ「うん……ほんとに勝っちゃうなんて」

な「驚きなの！」

なのはらからの評価を聞きながらありがとうと返し、声を掛けてきたクロノやリンディに目を向ける。

その視線にデータを呼び出すことに答え、クロノが代表として発表する。

ク「これより以下のものに執務官ならびに特別捜査官、教導の資格を与える。白銀結斗。」

結「はい・・・」

形式ばったクロノの言葉に結斗もそれに倣うようにいった。

ク「そして空曹長。その補佐アリシア・テスタロッサ」

アリ「はい！」

アリシアも元気に答えた。

ク「おめでとう。君達は試験に合格した。それではリンディ提督」

一言祝福を送りリンディを促すクロノ。それに結斗は大体のことは予想できた。

リ「先ほど計ったあなたたちの魔導師としてのランクを言います。まずアリシア・テスタロッサさん」

アリ「はっはい！！」

リ「あなたはAAAランクと認められました」

アリ「あ、ありがとうございます！！」

嬉しそうにお辞儀するアリシアに結斗も嬉しく感じながらも母親に頭を下げるのは変な気がするなあと場違いなことを考えていた。

リ「そして白銀結斗君あなたは・・・」

リンデイが結斗の方を向き、それに答える。ほかのみんなも次に言われる言葉が重要だと肌で感じている。その表情は緊張。だが一部のというより美緒だけは笑顔のまま聞いている。

リ「……………S+ランクです。おめでとう……………」

リンデイの発言が空間を行き、みんなの耳に届き理解するまで数瞬かかった。

みんな「やった……………!!!!!!」

なのはや麗華たちの声が部屋に響き、それに結斗は微笑んだのだった。

Next to TALE 54!!!!!!

**T A L E 5 3 試験結果発表！（後書き）**

前書きで言っていたOVAみたいな書こうかなと思います。  
何時書くかは未定ですが・・・

ではでは〜



T A L E 5 4 旅立ち（前書き）

今回は後書きで！！

## T A L E 5 4 旅立ち

結斗の執務官並びに教導官、そして特別捜査官資格を得た事に麗華やなのは、フェイト、はやて、アリサ、さすが飛び切りの嬉しさを自分らで表現する中、その本人である結斗がリンディに声をかける。

結「リンディさん……」

リ「なにかしら？」

結「どうして僕みたいなのひよっこな奴の試験に伝説の三提督や地上本部の英雄レジアス・ゲイズ中將がいらっしやるんでしょうか？」

彼らの顔を真剣に見つめる結斗。その顔は小学生のそれではなく歳不相応なものであり、それを見つめたリンディの顔が一瞬紅くなっただがそれは結斗の頭上にいるものを見ることで消沈する。

リ「それはね……っていうより結斗君は驚かないの？美緒が一緒にいることに……」

結「母さんのことは前に聞かせてもらいました」

美「そうよ、リンディ。ん~~~~」

ちなみに美緒が今まで会話に入らなかったのは結斗に抱きついていただけである。それは現在も進行中だ。今は結斗の頭の上に自分の顎を置き、後ろから抱きしめる姿勢となっている。

密着してだ。当然豊かなお胸をモロあてだ。

結斗もいい加減にこんなのは慣れっこなので普通にスルーしている感じになり、リンデイさんの視線が結斗の顔から美緒の顔を行ったり来たりしてしまっている。

結「母さん、今はリンデイさんの話を聞きたいから離れて・・・」

美「でも・・・」

リンデイの話し難そうな表情をしているのを気づいた結斗が美緒に珍しく言ったが美緒は泣きそうな顔でそれを返そうとする。  
が・・・

結「でもじゃない・・・大事な話しなんだから・・・そんなことばかり言ってるよ一週間口聞いてあげないよ!」

結斗の容赦のない言葉によりすぐさま離れる美緒。その速さは結斗でも追いつけない程だった。

そのスピードが何もなしで出せたことに驚愕した結斗だったが文句言った手前なるべく驚いた事を顔に出さないようにして再びリンデイに向き直った。

麗華たちもピタッと騒ぐのをやめて話しを聞き始める。

結「それで……」

リ「ええ、それはね私がお招きしたのよ。あなたを審査してもらうためにね」

結「審査？」

試験とは違う意味合いの言葉に首を傾げる結斗。

ミ「ええ……そう。私達はあなたにお願い、いえ命令をしたいの……私達直々にね……」

その疑問に答えたのはリンディの隣に立ったミゼットだった。  
ミゼットの言葉にハツとした結斗が数秒考える素振りをした後、納得が言ったとばかりの顔をする。

結「なるほど……そのためのこの無茶な試験内容だったのですね」

結斗が勝手に納得した事をリンディを含めた管理局員らは彼の洞察力に目を見張ったのだった。

しかしそれを理解できたのはその人たちのみだった。

麗「どつゆつこと？」

フェ「さあ・・・私にもよく・・・」

は「どうゆうことじゃ？」

な「なの？」

ア「す」？」

麗華たちが意味が分からず首を傾げていると結斗がそれに答えた。

結「つまり・・・この試験は執務官と教導官、捜査官の試験だけではなく三提督と地上本部共通の管理局員を選定するものだった・・・というところでしょうか？」

ミ「ええ・・・私達とレジー坊やの直属となるのですからそれ相応の実力がなければ体裁的に問題ありますからね」

アリ「でも・・・それに何の意味が・・・？」

ミゼットの言葉に継ぐアリシア。

ミ「・・・あなた達ならいいでしょう、お話します・・・。私達が結斗君に望むのは空と海のパイプ役つまり大使役です。今空と海は様々な問題を抱えています。局員の数、武装・・・その所々で部分的に口論が起きる始末・・・レジー坊やも武力派などと言われているが空の方が勢力が大きく割かれていることは事実なので無理から

ぬことでしょうか・・・そこで・・・」

アリ「溝が出来てしまった空と海を繋ぐパイプ役つまり抑止力のよ  
うな人物が必要と言うわけですか？」

ミゼットに続いて言うアリシアにレジアスが首肯する。

レジ「ああ・・・だからこの役は重要な位置でもあるのだ。」

アリ「なるほど・・・」

ミ「それで受けてもらえるかしら？もちろん相応のメリットもありますよ。現場では少将扱いとなり、あなたのランクはS+・・・なのでそうあなたに命令できるのいないでしょう・・・」

ニコニコと歳相応の笑顔で結斗を見つめるミゼット。

「ーこんな選択肢は一つしかないじゃないか。局員になるうとす  
るなら受けるしかない。・・・でも好都合だ。僕にはやらなくちゃ  
いけないことがある・・・」

結「・・・分かりました・・・それで僕はどのような立場になる  
のでしょうか？」

ミ「ええ・・・あなたを三提督そして・・・」

レジ「地上本部レジアス中將の名を以って直屬の局員という形になる」

結「・・・・・・・・ふむ・・・。お受けします」

麗「・・・・・・・・」

あまり嬉しそうじゃない結斗になのはたちは首を傾げた。

しかし麗華は顔をしかめた。今のやりとりの真意を気づいたからだ。このような汚いやり方に屈する結斗を見たくはなかった。しかし結斗と麗華にはやらなければならないことがある。だから麗華はその様子を見ていることしか出来なかった。

美「さ～～～～てつと帰って祝賀会よ！みんな行くわよ～～～～」

そういつて騒ぐ美緒に続いてなのはらが部屋を出て行った。残ったのは結斗、アリシア、クロノ、リンディ、ゼスト、ティード、レジアス、三提督だ。

結「あ・・・・・・・・さっきの話で自分の希望があるのですが・・・」

ミ「希望？」

レジ「なんだ？」

結「……実は……」

レジアスに促されて結斗は重い口を開けたのだった。

その日の夜

地球白銀邸 P M 1 9 : 0 0

結「みんな~~~~できたよ~~~~」

結斗の掛け声でリビングにいた麗華、なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか、焰美、瀬、美緒が小走りで行ってくる。



な「うわあ〜ごちそうなの〜!!」

フェ「これ全部結斗とはやてが作ったの？」

フェイトやみんなの前には大きな机の前に所狭しと並べられた料理の数々。いずれも美味しそうに輝き、それは高級レストランとさえためをはれる程のものであった。

は「ちがうんよ、私はアシスタントさんや。主につくったんは結斗君やで!!」

何処か誇らしそうにいうはやて。

麗「相変わらず凄いね」

麗華も久しぶりに結斗の本気の料理を見たので目を丸くし、苦笑するのみだった。

ア「ほんとよ・・・結斗本気でうちで働かない？」

前回と同様に勧誘し始めるアリサ。

結「あはは厚意嬉しいけど遠慮しておくさ。僕の料理の腕はアリサたちが知ってればいいよ」

す「どうして？」

結「例えばの話しだけど・・・僕が料理を作ったら有名になりすぎちゃってなのはたち食べられなくなるかもしれないよ？それこそ食べるまで何ヶ月の予約待ちになったりしてーーーーー

ーあはは・・・ってみんな！冗談だからね！本気にしないでよ！！」

一斉に俯きその可能性が高確率であることを今になって思い知る結斗以外の女の子達。

す「駄目だね！結斗君の料理は私達だけのものね！」

ア「私としたことが・・・そうね。結斗の料理は私達の中だけで秘密にしておきましょう」

麗「共有財産というわけね・・・」

結「・・・」

麗華の共有財産と云う言葉にみんなが同意する素振りを見せ始める。

は「異議なーーし！！ついでに結斗君の人権は私の物や！！」

みんな「異議アリ！！！！」

ギヤアギヤア

はやての言葉を機にみんながというより結斗に淡い恋心を持つ少女らが騒ぎ始める。

自分の人権が少女らによって決定されている事にひどく落ち込む結斗だった。

美「（ニタニタ）ゆうちゃん〜どうするの〜？みんながゆうちゃんを狙ってるわよ？」

ニタニタと詰め寄る美緒に？がる結斗。

結「狙っているのは僕の人権でしょ？」

美「・・・ぷっあははやっぱゆうちゃんはそうゆう子よね〜」

結斗のまたの天然（朴念仁）発言によりお腹を抱えて笑い出す美緒。それに対し結斗は謎は深まる一方でしきりに首を傾げていたのだった。

結「あそうだった！母さんに言いたいことがあったんだ！」

美「ん？何？私のスリーサイズなら・・・」

結「・・・・・・・・」

美緒のお茶目な言動に目を冷たくする結斗

美「ごめんなさい・・・ちゃんと聞きます」

その瞳に睨まれた美緒は一瞬で白旗を揚げ、麗華達が隣で騒ぐ中、結斗の話しを聞いたのだった。

麗「ごめんください・・・い・・・」

小さく囁かれるような声が静寂だった部屋に木霊した。部屋の主の返答は無言。それもその筈、部屋の主結斗は自分のベッドの上でぐっすりと気持良さそうに寝ていたのだから。

それを確認した麗華たち（・・・）はそつと結斗のベッドの側による。

今日は祝い事なのでなのはたちは家には帰らず、白銀邸にお泊りする事となったのだ。

それに加え一番に楽しみにしていたイベントと言うのがこの夜這いである。

麗華はいつもやっていることなのでそんなことはないがなのはらは顔が朱色に彩られていた。

な「き・・・緊張するよ～～」

フェ「／／／／」

ア「こ、これが結斗の寝顔・・・／／／」

す「かわいいよ～～」

は「にしても麗華ちゃんいつもこんなこととんのかいな？」

麗「だって行きたいんだもん・・・」

焰「我らも人のことはいえんが・・・」

澗「もう少しゆう様から自立した方がいいと思いますよ。麗華様は・・・」

麗「無理ね」

焰美たちの呆れた提案が即決で跳ね返される。それに幣易した。

アリ「それにしてもゆう君起きないね・・・今日の試験が来たのかな？」

焰「強敵だったからの・・・仕方あるまいて」

澁「さあゆう様のベッドに突入しますよ！」

みんな「お~~~~~!!」

ギシギシ

麗華たちがベッドに突入する度にギシギシと揺れるベッド。しかし結斗が瞼を開ける事はなかった。

そして予め決めていたのかみんなが所定の位置につく。

なのは、フェイト、はやては結斗の右腕を枕にアリサ、すずか、麗華は左腕。

焰美、澁は頭の上。アリシアは結斗のお腹の上となった。

この配置を決めるにしても乙女達の戦いがあったことを記述しておく。

ア「こいつほんとに男の子なの？腕の線細すぎるわよ？」

す「ほんとだよ。この細い腕のどこにあんな力があるんだろう？」

寝ている結斗の腕を凝視しながら言うアリサとすすか。あんな力とは今日のゼストの初撃を受けきった事だろう。

アリ「う〜ん・・・実を言うとゆう君はあんまり力を使ってなかったんだよ・・・」

それに答えたのは結斗にこれでもかかっていくくらいに抱きついていたアリシア。

な「どうゆうことなの？」

フェ「力を使っていない・・・？」

接近戦を好んでするフェイトが耳をたてる。

それを聞き矛盾した事だとフェイトは思った。

「力」力がなければあのような攻撃を受けきれはるはずがない。

焰「違うのう。そもそも力を常に出し続けるとどうなる？」

は「え〜とすぐにばてるんとちゃう？」

澁「ええはやて様の言うとおりです。だからゆう様は同じ量の力を出し続けているのです。それこそ極少の・・・」

な「?・・・よく分かんないの・・・」

瀨の言葉の理解が追いつかないのは。それはフェイト、はやて、アリサ、すずかも同じであった。

麗「つまり・・・タイミングよ。力は人が出しているんだから常に力を出し続けていても、波はあるの。強い時と弱いとき。分かりやすい例えなら・・・腕相撲かしら?」

アリ「うん・・・そうだね攻める時が力が強くてもいつかはばてちゃうよね。だから相手のその出鱈目なくらいな力を常に同じ力で防ぎ続けて好機になったら一気に力を解放する。それがゆう君が今日の試合でした事だよ・・・」

麗華とアリシアの分かりやすい例えにやっと考えに至ったのかなのはらが分かった顔をした。

は「なるほどな〜〜」

な「よく分かったの」

フェ「うん・・・(ん〜〜)し〜〜!!結斗が起きちゃう!!」

はやてとなのはの声が大きかったのか結斗の気持ちよさげにしていた顔に影が出る。



それを見たフェイトがみんなに口元で人差し指を立てた。

な「ごめんなさいなの……」

は「さて今のままじゃ結斗君が何時起きるか分からんなさつさと寝よか？」

麗「そうね……」

麗華の言葉がみな眠りの海へと誘った。

なのはside

な「んん……朝なの……」

瞼をあける。

いつもとは違った爽快感のようなものがあり、いつもとは違ってす

んなりと起きる事が出来ました。  
傍らを見てみると麗華ちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが私と同じように気持良さそうに寝ていました。

な「二度寝するの・・・あれ・・・結斗君？」

二度寝をしようとしたら眠る前まではいた結斗君の姿がないことに気づきました。

結斗君がいたところを触つてみるとそこは既に冷たくなっていました。それが引き金となったのか私の頭の中に突然氷でも入れられたように急激に冷めていきます。

な「結斗君っ！！!?？」

私は飛び起きました。また結斗君が遠くへ行ってしまうのではないかと思っただからです。

麗「ん~~~~なに・・・何の騒ぎ?？」

は「どしたんや?なのはちゃんーあれ、結斗君は?？」

寝ぼけた顔をするみんなに私は一喝の意味を込めて

な「結斗君がないの!!!」

と叫びました。

ドタドタッ

一斉に寢室を飛び出し一階に下りてリビングでコーヒーを飲んでた美緒さんに聞きます。

な「美緒さん!!」

美「っ!ど、どうしたの?みんな朝からそんなに慌しくして?」

フェ「結斗がいないんですけどどこにいるか知りませんか?」

美「ゆうちゃん?ゆうちゃんならそこに・・・」

すると美緒さんが指差した方向にはエプロンを着てキッチンに立っている結斗君が呆気にとられた様子でこちらを見ていました。傍らにはアリシアちゃんや瀨ちゃん、焰美ちゃんまでいます。

結「どしたの?みんな・・・」

ア「どうしたもこうしたもないわよ!」

す「そうだよ!!姿が見えないから心配したんだよっ!!」

じつとりと朝っぱらから汗を流し、みんなが怒りながら言う私たちを見て結斗は何がなんだか分からないと顔が言っていたが内容を整

理し始めます。

結「……つまり僕が何も言わずに出て行ったと思った……つてこと？」

麗「そう……」

若干悔しそうに言う麗華ちゃんに結斗君がくすくすと可笑しそうにしているのを顔を紅くするしか出来ない私達。

結「ふふふ……みんなの前から何も言わずにはいなくならないよ。」

そう結斗君が呟いてくれて私達はやっと穏やかな朝を迎えることが出来ました。

その二日後――――

いつものように私達はバスで学校までみんなで行き教室へと入りました。

最近は暖かくなり始めていい季節だねとみんなで話していたところです。ただ今日はいつもとは違います。

結斗君とアリシアちゃんが休みなのです。

麗華ちゃんとフェイトちゃんが言うには・・・

麗「遅刻だつてさ。何でも今日中にやらないといけない仕事らしいわ」

フェ「姉さんもその付き添いみたいな感じかな？」

結斗君が正式に管理局員として指令が起きたのは昨日からです。なので昨日の今日で任務とは考えにくいのですが・・・

は「そこは結斗君やから。いろいろあるんとちゃう？なのはちゃん  
は心配性やな〜」

とはやてちゃんに言われてしまいました。

むむ〜好きな男の子なんだから心配して当然だと思っけどな！

な「それならはやてちゃんは心配じゃないの？」

少し拗ね気味に聞くと、

は「もちろん心配や！」

と即答。はやてちゃん・・・

私は思わず目を細めてはやてちゃんを見る。というより睨みました。その視線を軽く流すように

は「心配やけど帰ってくるっておもっとるんや。だから私は待つだけや・・・」

この言葉に私ははやてちゃんに見惚れてしまいました。

ちゃんと結斗君を信じていることが分かったからです。

だから少しでも結斗君が帰ってきてくれないのではと信じるのが出来なかった私は恥ずかしくなってしまうました。

は「それが奥さんの務めや!！」

クワツつと目を見開いていうはやてちゃん。

「ーはやてちゃんに少しでも感動した私がお馬鹿さんだったよ。

な「それは私の務めなの!！」

はやてちゃんに言い返すように言ういつものようにアリサちゃん  
とすずかちゃんも乱入。そんなわけで私達は今日も楽しくいつも通  
り朝のHR前を過ごしました。

担「え〜〜皆さんにお話しがあります・・・白銀結斗君が・・・」

いつも通りに・・・

担「また留学というかたちでここを去ることになりました」

な「えっ？・・・」

留・・・学？どうして・・・そんなこと一言も・・・

ガタンッ

途切れ途切れの私の思考を遮ったのは突如教室に響いたイスの音でした。

それを発したのは、麗華ちゃんでした。

麗「先生！私確かめないといけない事が出来ました。なので早退します！！」

そういつていきり立ち、さっさと教室のドアに向かう麗華ちゃん。

担「ちょっと！麗華さん！？」

こうしてはられないの！！

な「先生！私も！！」

フェ「私も！」

は「私もやつ！！」

ア「あたしも！！」

す「私もです！！」

私に続いてフェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが席を立ちます。

担「えっ？えっ？・・・ちょっとみなさん！！??？」

先生が私達をに静止するように呼びかけましたが今の私達の頭の中



にあるのは結斗君のことだけだったのでまったく気にせず教室から出て先に出て行った麗華ちゃんを追いかけてました。

な「麗華ちゃん!!」

麗華ちゃんを見つけたのは教室を出てすぐで約20メートル先を歩く麗華ちゃんに追いついて声を掛けました。

1488

麗「なのは？それにみんなも！どうしてここに？」

ア「そんなのあいつのことが納得いかないから直接聞きに来たに決まってるじゃない！」

怒り心頭といった感じで叫ぶアリサちゃん。

麗「・・・そっか」

たった一言相槌を打つ麗華ちゃんに私達は聞いてみる。

な「それで結斗君はなんだって？」

麗「さっき通信したけど、ここの屋上に来てたってさ」

フェ「屋上・・・じゃあ早速いこっ！！」

は「せやでー！！」

フェイトちゃんに促されて私達はすぐさま屋上へと足を向けたのでした。

なのは side end

ガチャンツキーーーーーー

屋上に上がるためのドアがけたたましく開かれる。やってきたのは六人の少女達であった。麗華たちである。

麗華たちが目的とする人物は、なのはたちに背を向けて屋上に備え付けられているフェンスを掴んでいる。

彼、結斗の傍らには麗華たちと同年代の少女三人が立っていた。

アリシア、焰美、澪である。

結斗たちの背中はどうも寂しそうな形をしており、やってきた麗華たちも一瞬話しかけることを躊躇われた程だった。

しかしいつまでも結斗たちの哀愁の背中を眺めるべきではないと判断した麗華が意を決して話しかける。

麗「ゆう……」

結「来たね……つと、やっぱり五人とも来ちゃったか〜」

先ほどの哀愁を漂わせていた人物とは思えないほどの変わり身の笑顔で答える結斗。

結斗は麗華たち五人が来ることを想定済みだったようであり驚いてはいなかった。

な「そんなことよりどうゆうことなのっ！？結斗君！転校って！」

けたたましく喋るなのは。他のみんなもそれが一番に聞きたいらしく口を挟むことはなかった。

そんなみんなを見た結斗は正反対に穏やかに喋り始めた。

結「この前僕試験に合格したじゃない？それでね・・・前からやりたい事があったんだよ・・・それを早急にやりたいんだ・・・」

結斗の言葉に心当たりがあった麗華となのはの表情が崩れ始める。何も知らないフェイト、はやて、アリス、さすがが二人を気にせず口にする。

フェ「やりたいことって・・・何なの？」

結「ごめんそれは言えない・・・知られたくないことなんだ・・・」

フェイトからの質問を苦しそうにしながら答える。

は「そんな理由で私達が結斗君をはいそうですかって送り出すと思っ？」

結「はやてたちは優しいからね・・・送りだしてくるって信じてるさ・・・」

はやてからの嫌味のような言葉に微笑む結斗。それにははやては何も言えなかった。

ア「帰ってくるのよね？」

結「もちろん・・・」

アリスからの言葉には自信を持って答えた。

す「どのくらい掛かるのかな？」

結「二年・・・三年かな？それは分かんないね・・・」

すずかの質問にはあいまいに答えるだけだった。

麗「私も行く!！」

結「それは駄目・・・麗華はお留守番・・・僕がいない間みんなの事  
お願いね・・・」

結斗の確固たる意見に言葉を失う麗華。麗華はどんな時でも結斗の  
命令を優先する。今回もそれは例外ではなかった。

麗「・・・して・・・」

小さな呟かれる声。それは結斗の真正面にいる女の子の声。

結「ん？」

声を聞き返す結斗。

麗「ぎゅってして・・・会えない分補充するから・・・」

結「・・・分かったよ」

仕方ないと困ったなという言葉を顔に書きながら結斗は麗華を抱きしめる。それを見たなのはたちは揃って

みんな「後で私もやってもらおう!」

と意気込んで見ていたのであった。

麗「・・・もういいよ・・・」

結「もういいの？いつもはこれの倍以上の時間なのに・・・」

不思議がる結斗に麗華はなのはたちの方へ向かい結斗に背を向ける。その途中に麗華が振り返らずに呟く。

麗「これ以上すると離れたくなるからいいよ・・・」

そうだったのだった。

——ゆうは頑張つてこの選択をしたんだ。だから私が引き止めたらいけない。ゆうの目標は私の目標でもあるんだから・・・

麗華が心のなかで決意を固めた瞬間だった。

この後、麗華以外のなのはたちも結斗に抱きしめてもらったのであった。

彼らの顔は清々しいものだった。それは時間が空くが必ず再開できると信じているからのものであったのであった。

こうして白銀結斗は麗華たちの側から姿を消したのであった。

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
5  
5  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!



T A L E 5 4 旅立ち（後書き）

疲れました。穴だらけ。もう眠いですね  
寝ますわでは！！

TALE 55 さくら舞う季節(前書き)

みんな~~~~待っていたか~~~~?

久しぶりの投稿だ~~~~!!

待っててくれた人に最大の感謝を!!

待ってくれなかった人はごめんなさい!!

TALES5 さくら舞う季節

二年後――

第?管理外世界

白い・・・真っ白な世界が続く。山と雪で覆われたそんな世界。  
普段なら深々と降り積もる雪の音のみがあるのだが今現在は違った。

ヴィ「おいっ、なのは!!おいってばっ!!!!くそおおお!!お  
い!!早く病院に!!」

白い少女の側に座り込み、必死な形相で叩き起こすように呼び掛け、  
白い少女の意識を覚醒させようとする紅い少女。

しかし白い少女、高町なのはは赤い少女、ヴィータの音が聞こえた

のか聞こえていないような呆然とした顔をする。  
いや実際聞こえないのだろう。今なのは目の前には夢中に自分に  
呼びかける女の子の姿が映っているだけなのだ。  
その間にもなのは背中からはおびただしい血が白い雪を赤色へ侵  
食していく。

それは人として流れてはいけない量の血液だった。

ぐったりしたなのはを見ているヴィータはいても立ってもいられず  
に直情的な行動のみしか出来ないよう陥っていた。必死になのはの  
傷口を自らの手で押さえ、少しでも血が流れないよう努めるヴィー  
タ。

そんなヴィータが叫んだ先にはどうすればいいのか分からないとい  
った混乱している局員らの姿。

A・S級の魔導師の撃墜。

これが予想以上に局員らの士気が停滞させ、このような状態になっ  
てしまったのだ。

「……っち使えない奴らだ！……くそっ！……どうすればっ？……待  
てこんなときあいつならどうする？あっ！……」

心の中で舌打ちをしたヴィータが考えたのは一人の男子の姿。彼な  
らこの状態で一番にすることはと考える。

「――そうだ！冷静になることだ！あいつはどんなときでも焦った事はなかった。」

「ヴィー~~~~~。。。。。。静まれ！」

一喝。その声は雪山に消される事なく同員らの耳に入れられ、右往左往していた局員がピタツと止まった。  
それを見たヴィータは彼らに指示を出す。

その後。。。ヴィータたちが僅か二分後だった。

管理局本局医療処置室――

ピシ……ピシ……ピシ……

あの後ヴィータの機転が利き、すぐになのはは病院に運ばれた。そのかいもあって一命を取り留めることが出来たなのは。

今彼女は、血液のついた服を脱がされ、代わりに病院に服を着てベッド上で寝ている。

口には酸素を送るためのマスクがされており、なのはが少ない息をする度白く曇る。

そして最も痛々しいのは、なのはの動きを阻害するように包帯が巻きつけられている事だ。そこには元気で活発な第一印象の面影すらなかった。

側に立つ、シヤマル。

なのはの胸に聴診器を当て、やがて唇をかみ締めて話し始める。

話す相手は部屋にいるフェイト、はやて、麗華、ヴィータ、シグナム、ザフィーラの七人。

シヤ「……………」

は「はは……冗談きついでシヤマル……」

シャルの言葉にはやての乾いた笑いが部屋の空気に溶かされる。そしてその空気は彼らの心を硬く閉ざして、無心へとさせる鎖となつてしまつた。

フェ「なのはが・・・歩けない・・・かもしれない・・・？」

シャ「・・・ええ・・・なのはちゃん元々無理をしていたらしく過労気味だつたんです。今回はそれが戦闘中にほんの一瞬、敵に隙を見せてしまつた・・・背後からの攻撃はなのはちゃんの脊髄を傷つけています。これが原因でなのはちゃんは体を動かす事もままならない状態です・・・。ただ・・・動かせないというわけではないです。その代わり想像を絶する痛みが体を走ることになります」

麗「リハビリをして治る可能性は？」

みんなが黙り込む中、壁に背を預けながら聞く麗華。その表情は複雑な表情だつた。

シャ「二割・・・」

麗「・・・」

その絶望的な数値にみんなが頭の中が真っ白となった。  
今気がついた。なのはがどのような立場に置かれたのかを。

フェ「そんな、なのはが何したっていうの？こんな・・・」

フェイトが口を押さえ、瞳に涙を溜めてしまう。部屋にいる麗華たちもどうすればいいのかわからないで瞳から止め処ない涙が流れてきてしまっていた。

ピーーーーー

？「だめですっ！！やめてくださいっ！！」

？「うるさい！！私達の娘なんだ！！」

そこで部屋の外で激しい口論がフェイトたちの耳に入る。  
一人は男性のもの。もう一人は先ほどこの部屋から出て行った女性の看護婦のものだった。



士「なのは！！っ！？」

扉をぶつ飛ばすような勢いでやってきたのはなのはの父。

高町士郎。扉の前で叫んでいたのは彼だったのだ。

その背後には母、桃子。兄、恭也。姉、美由紀の姿もあった。

そして看護婦の警告に気を止めず、入ってくる一同。

看護婦が士郎らの態度を咎めようとしたがシャマルが合図する事で  
渋々ながらも部屋から退出した。

残された士郎らは騒然としてなのはを見る。

桃「な・・・のは？・・・」

静かに呟き、手探りになのはの元へ行こうとする桃子。

桃子の声に答えられる筈もなくなのはは唯、酸素マスクからの返答  
をしただけだった。

それにフラッと体が傾く桃子。

美由「お母さん！！」

倒れそうになった桃子を支える美由紀。

恭「・・・・・・・・・・どうゆう・・・・状態なんですか・・・・？」

それを見ながらも冷静にシャルルへなのことを聞く恭也。兄として剣士として状況把握を優先するといった感情が表情から浮かび上がっていた。

しかし恭也の握る手は爪が食い込み血が出ていることにみな気づいていた。

数分後……

なのはが寝ている傍らシャルルが士郎と恭也になのはの状態を細かに話す。桃子はあまりの衝撃に精神不安定となり美由紀の付き添いで隣の部屋で寝ている。

士郎と恭也はシャルルからの話しを聞き、話し最後には顔が俯いている。

士「目を覚ますのはいつでしょうか……？」

俯き呆然とした表情で尋ねる士郎。

シャルルはその問いに口にするのが悔しく思った。

私の技術ではなのはちゃんを治すことはおろか、意識が戻ると思われる時期ですらも曖昧になってしまう……助けてあげたいのに……

……

シャ「一週間程度かと思われます・・・ただそれも希望的ものではありません」

士「そう・・・ですか・・・」

士郎と恭也の顔が翳りシャマルを含めたフェイト達は二人に声を掛けることが出来なかった。

その一週間と三日後なのはは目を覚ました。

ユ一ノside

なのはが大怪我をした。

その凶報を聞いたとき僕は顔が真っ青になった。  
僕は急いでなのはのいる病院へと駆け込んだ。

ユー「なのは!!!」

な「ユーノ君?どうしたの??そんなに慌てて・・・」

息を切らせながら入室してきた僕を目を丸くしながら見つめるなのは。僕は俯いて息を整えていたからその声あまり変わり内容で安心した。

ユー「っ!?!?」

しかしそれは僕の大きな間違いだった。顔を上げて目に飛び込んできたのは痛々しい包帯が袖や首元から見え、座っているなのはの姿。

ユー「(どこが変わってないんだよ!!僕の馬鹿!)・・・さっきその仕事が終わってなのはの事を聞いたんだ。その心配になって・・・」

な「ありがとうユーノ君」

僕の表情の変化に気づいてなのか、なのはが微笑む。だがそれは元気だった頃のものではなく、儂い今にも消えてしまいそうな微笑だった。

ユ一「その……いつ目を覚ましたの？」

なのはにそんな顔をして欲しくない為なんとか僕は話題をふった。

な「うん……昨日なの……」

ユ一「そう……フェイト達は？」

な「フェイトちゃんたちはさっきまでいてくれたの……」

ユ一「……」

な「……」

それっきり会話をつなげることは出来なかった。

な「ごめんユ一ノ君……今日は帰ってもらえるかな？一人になりたいんだ」

ユ一「うん……ごめんね、なのは。また来るよ……」

そっぴいながら僕は個室を退出した。その時

な「う……うっ……うっ……うっ……」

扉越しになのはが声を殺して泣いた。僕は再び扉を開け、なのはを励ます事も抱きしめてあげる事も出来ずになのはの咽び声を聞いているしかなかった。

なのは s i d e

今日はユーノ君が来てくれました。

私のことをさつき聞いて飛んできてくれたようです。ユーノ君が来てくれて嬉しい気持ちと悲しい気持ちが同時に出てきてしまいました。

その気持の反発に私は何を話したらいいのか分からずユーノ君に冷たい態度を取ってしまいました。

バタンッ

な「う……うっ……うっ……うっ……」

ユ一ノ君が部屋から出て行って私の目から止め処ない涙が流れていつてしまいます。  
でも声は出せません。  
すると私の目には一人の人の姿が目には焼きつかれました。

な「うっっ……怖いよ……結斗君……」

足が動かない事が怖い。  
フェイトちゃん達と友達じゃなくなるのが怖い。  
結斗君を助けられなくなる事が怖い。

いろんな恐怖が私を襲ってきます。  
その日私は何もする気がおきず、ただ寝ていました。

なのは side out

同日――同部屋

人が眠りを刻々と刻む時間に動く影が二つあった。暗闇に包まれた病棟の静寂を切り裂く二つの歩音。しかしそれに気づくものは誰もいない――何も無い――。そして二つの影の足がぴたりと止まる。

？「――なの？」

一つの影がもう一つの影に尋ねる。

？「――だ――よ」

問われた影はそれに首肯し、返事した。そして二人は部屋の中へと静かに溶け込むように入っていた。

二人が入っていったほんの数分後、部屋から淡い緋色の光が漏れ出す。しかしそれに気づいたものは先と同様に皆無だった。



シャ「……………なのはちゃん大丈夫かしら？」

シャマルの問いに両隣の人は答えない。

右隣・ヴィータは顔を俯け、左隣シグナムは唯無言だった。

やがて目的の部屋なのは部屋に辿りつく三人。その時ヴィータの顔が一層翳った。

それに気づきながらもシャマルは部屋に二人を伴って入った。

な「あっ！シャマルさんにヴィータちゃん、それにシグナムさん！」

シャ・ヴィ・シ「……えっ！？（なっ！？）」「」「」

なのはの言葉に驚く三人。

ヴィ「おいつ！なのは！何でお前……………」



さくらの花が芽吹くこの季節。一人の女の子がさくらの舞う道の端で佇んでいた。

風にそよかれるように彼女のサイドポニーの髪が揺れ動く。彼女は私立聖祥付属中学校の制服に身を包んでいた。

フェ「なのほ〜」

な「フェイトちゃん！はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、麗華ちゃんおはよう」

挨拶を交わし六人は、学校への道を進み始める。

は「今日から中学生か〜〜早かったな〜」

カバンを持ち、手を伸ばしながら言うはやて。

す「はやてちゃん、親父くさいよ〜」

そんなはやてに笑いながら答えるすずか。

フェ「でもほんとに毎日早かったよ」

な「そうなの……」

麗「フエイトとなのはまで親父くさい発言を……」

ア「でもそれは毎日が楽しかったからじゃない？」

な「そういえば、アリサちゃん今日は新入生代表で前に出るんだよね？」

アリサの顔を見て思い出したなのが言った。

ア「それが……今日私が言わなくても良くなったのよ……」

す「どつゆつこと、アリサちゃん？」

意味が分からず問い返すすずか。

ア「昨日屋敷に電話があったのよ」

は「電話？」

ア「ええ。なんでも昨日採点をした転入生の生徒が全教科満点を出したらしいわ。それで私はやらなくても良くなっただってわけよ」

まあ私はやりたくなかったから良かったんだけどね」と続けるアリス。

フェ「それじゃあその転入生の子が壇上に出るの？」

ア「そうゆうことになるわね」

は「は~~~~アリサちゃんを追い抜く人がいるなんてな~~~~アリサちゃんこの前のテスト何点だったっけ？」

感心するはやて。他の四人も同じ事を思っていた。

ア「498点よ。負けるとは思わなかったわ・・・」

麗「アリサも凄いけどその人もすごいわね・・・」

ア「何言ってるのよ!!!麗華!!!あんた私より頭いいくせに!!!」

麗「私は490点よ8点負けてるわ」

フェ「ノ・勉でね・・・」

ボソツと呟いたフェイト。

そう麗華はノ・勉でこの点数を叩き出したのだ。

な「全く麗華ちゃんずるいの。勉強しなくてもできるなんて・・・」

麗「私の場合一回ゆつと一緒に勉強したから復習なのよ」

麗華の言葉に出てきた男子の名前に六人がだんだんと複雑な表情をする。

それぞれの思いを秘める中、口に出すのはたち。

な「結斗君今どこにいるのかな？」

フェ「さあどうだろうね・・・」

は「連絡の一報くらいよこさんかいなっ！」

ア「帰ってきたらあいつ締めなきゃね・・・」

す「アリサちゃん程々にね」

麗「ゆう・・・そういえばなのは？」

結斗の名前を呟きながらなのはに声を掛ける麗華。

な「うん、麗華ちゃん？」

麗「無理してないでしょうね？」

な「してないよ・・・」

麗「そう・・・良かった・・・さああはやく学校行きましょ。アリサの言った転入生とやらの顔を見物してあげるわ」

淀みもなく答えるなのはに安心した麗華が再び歩き出す。

麗華が言ったのは一年前の事件がまた起きないようにするためだった。

実際のところ詳細は不明のままとなっている。

どうしてなのはの怪我が治ったのか？

誰が治したのか？

疑問が飛び交う中とりあえず本人のなのが怪我を完治したことでその疑問はどうでもいいことになったのだった。





T A L E 5 5 さくら舞う季節（後書き）

というわけで今回はなのはちゃんの撃墜シーンと中学生編の邂逅でした！！

いろいろあってここまで更新が延びましたが投稿できてよかったです。

感想まってま〜〜す！！

**T A L E 5 6 帰還(前書き)**

前書き休みます

TABLE 56 帰還

ガヤガヤ

麗華、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかが学校の校門に着くとそこは生徒の波とかがしていた。

は「あっちゃ〜〜出遅れたかいな〜〜」

頭を抱えて楽しそうにするはやて。

な「この生徒みんなクラス分けを見に行っているみたいなの」

生徒達が昇降口に立てかけられている掲示物に取り巻いているのを見たのは。

す「どうしよ〜〜これじゃあ先に進めないよ〜〜」

麗「大丈夫よ、すずか。ほらみんな行くわよ!」

フェ「麗華?」

フェイトの呼びかけにさして気にした風もなくすんずんと麗華は進

んでいく。  
するとそれに気づいた生徒達が道を開けていくではないか。  
それに続くのはたち。

フェ「どうゆうことなの？」

は「なるほど！」

フェイトが疑問がっているとはやてがポントと手を叩いた。

は「みんな私達が何て呼ばれとるか知つとるか？」

ア「?・・・ああ、なるほどね」

はやての言葉に納得した様子のアリサ。他のフェイト、なのは、す  
ずかは分ならず首をかしげている。

麗「私達聖祥六大美少女つて呼ばれているらしいわよ・・・」

そこで前を歩いていた麗華が歩幅を遅くしてなのはたちの隣に並ん  
で言った。

フェ「び、美少女つてノノノノノ」

美少女という言葉に顔を紅くするフェイト。なのはとすずかも同様  
だ。

は「まあそんなわけで私らはなんか特別扱いされとるわけやな」

ア「少しずるい気もするけど、まあ有名税として有効活用させて貰

「いまして」

そして一同は生徒の波を掻き分けるように掲示物にたどり着くことが出来たのだった。

聖祥大付属中学校入学式――

第一体育館――

でかでかと大きな看板が体育館の入り口に立てかけられている。それを見た多くの生徒と保護者がここまで大きくしなくても思った。麗華たちは自分達の教室に行き、体育館で入学式のために来たのであった。

な・フェ・は・す「（今日から中学生）」

なのは、フェイト、はやて、すずかの四人がわくわくして落ち着きがないところは未だに小学生気分が抜けきっていないようだ。

一方大人びている残りの美少女二人は……

ア「（転入生って誰かしら?）」

麗「（めんどい……）」

とのことを心の中で愚痴っていた。しかし二人はそんなことを思いながらも佇まいは屹立としていた。パイプイスの上にピシッと背筋を伸ばし、お嬢様のように座っているのだ。アリサは元々お嬢様なのだが・・・

校長「あ～～～であるからして・・・」

麗「（あ～～～もうっ！長いわねあの禿げ頭！！そんなことくっちやべってる暇があるんだったら禿げ頭何とかしなさいよー）」

校長の話があまりに長いため麗華の素で叫んでいる。

な「ねえ・・・フェイトちゃん・・・」

フェ「なに？なのは」

麗華の隣に座っているのはが麗華の変化に気づいてフェイトに声を掛ける。

ちなみに座席は自由となっており、右からアリサ、すずか、麗華、なのは、フェイト、はやてという席順となっている。

な「麗華ちゃんが・・・」

フェ「？・・・あ～～～また・・・だね。相変わらず麗華は辛抱がないんだから・・・」

な「うん。きつと今喋ってる校長先生の悪口を心の中で言ってるの」

なのはの的確な分析は見事に的を射ていた。

フェ「まさか〜それは・・・ねえはやて・・・」

まさかそれとは思いつェイトはなのはの反対に座るはやてに言うが・  
・  
・  
・

は「くか〜〜〜」

寝ていた。大きく口を開け腕を組みながらパイプイスで上手くバランスをとりながら・・・美少女らしからぬ姿である。  
そんなはやてを見たフェイトとはやての隣に座っている女子生徒で視線が交錯した。

フェ・女子「あは・・・」

フェイトは親友がなんとも情けない格好をしている事に恥ずかしさを思い、女子生徒ははやての美少女としての姿と今の姿とのギャップの激しさに戸惑いながらフェイトに合わせて微笑むしか出来なかったのだった。

「――校長先生ありがとうございました。次は新入生代表の言葉です。代表の方お願いします。」

長い・・・亀とウサギの話し程にまで思われた校長の話はようやく終わりを迎えた。そしてそれに放送の人が次の演目である新入生代表の言葉を促した。

ア「いよいよね・・・」

な「どんな人かな？」

フェ「気になるね・・・」

アリサたちがわくわくしていると先生が騒ぎ出した。

先1「おいっ！彼はまだなのか？」

先2「ええ先ほどまでは一緒だったのですが・・・」



す「どうしたのかな？」

麗「うーん・・・どうやら新入生の奴が行方不明らしいわね」

麗華が先生ら声の慌てようから判断する。しかしそれは杞憂に終わった。

先1「おお！どこにいたのかね？」

先2「心配したのよ？」

？「すみません・・・ちょっと緊張しちゃって・・・」

フェ「見つかったみたいだね」

麗「そうね・・・さてどんな奴なのかしら？」

麗華が目を皿のようにして見る。やがてそれに合わせるかのように

再び放送が流れる。

「――大変お待たせしました。只今から新入生代表の言葉を行います。」

フェ「はやて起きてよ！」

いつまでも寝ているはやてにフェイトが起こそうとする。

は「ふがっ……私寝とったんか……あはありがとなフェイトちゃん」

眠り浅かったらしくはやてはすんなりと起きた。

フェ「ううん、いいよ。今から新入生代表の言葉だよ」

は「今朝アリスちゃんが言っとった人か。どんな人やるな？」

口から出ている涎を拭いながら言うはやて。

フェ「そうだね、どんなひとだろ？」

やっと視線を壇上へ向けることが出来たフェイト。  
それはちょうど代表が出てくるところだった。

カツンッ

麗・な・フェ・は・ア・す「えっ!!??」

カツンッカツンッ

小気味にいい靴音が体育館中に響く。それがこのときの中心物から発せられたもので自然とその人にみな視線が通う。

は「なあみんな・・・私の目がおかしくなったんやろか?・・・私今結斗君とそっくりさんを見とるんやけど・・・」

な「・・・うんはやてちゃん見間違いないの。私にもそう見えるの・・・」

はやての自分の目に対する疑問をなはらに聞くと、はやての他全員が首を揃えてなのはの答えに首肯した。  
なのはらの目には確かに結斗の姿があった。  
三年前とは違い長い腰まである髪を三つ編みにし、大きく育った背中を曝け出していた。

結「私達は今日をもってこの私立聖祥大付属中学校に入学します。

その実、学生の本分たる勉強、小学生の時とは違った生活。様々な変化で戸惑うかもしれませんが私達新入生一同はそれを含め中学校生活が実りあるものへとなるよう努力していきたいと思えます・・・  
新入生代表、白銀結斗」

結斗の簡潔な代表の言葉で入学式は閉幕した。

なのはや麗華たちは結斗のことで多くの疑問が残る中、

教室へと続く廊下を歩き始めたのであった・・・

中学1 - B

ここは中学棟1年B組。現在このクラスは大いに盛り上がっていた。

ク1「すっげ〜〜〜！！聖祥六大美少女が一つのクラスに集まるなんてな！！」

ク2「ああ。俺達は今人生で一番の転機なんだ！！」

との興奮しだすクラスの男子。

ク3「麗華ちゃんたちがクラスメイトだなんて鼻が高いわ〜」

ク4「そうよね〜」

男子と同様な盛り上がりを見せるクラスメイトの女子達。普通このような場合だと女子はなのは達のような美少女を毛嫌いするのだがそんなものは皆無だった。

その理由が全員が素晴らしい性格の持ち主のためである。

誰にでも優しく接し、その容姿を鼻にかけることもない。むしろ自分たちが六大美少女だなんて呼ばれていることに不満に覚えるほどののだ。

フェ「それで麗華あれは結斗だったんだよね？」

クラスメイトらが自分らを評価している中、フェイトたちは違う事で頭がいっぱいだった。

麗「ええ。最後に白銀結斗って言ってたし・・・」

な「会えなかったの？」

なのはが麗華に尋ねる。麗華は入学式が終わり次第、鍛錬で鍛えた脚力をフルに使って結斗の元へと特攻していったのだ。相変わらずの結斗精神である。

麗「駄目・・・距離が離れすぎていて会えなかった。ああ〜ゆ  
う〜ゆ〜ゆ〜!!」

くなくねと自分の体を抱きしめる麗華。

は「麗華ちゃんの発作が起きてしもうた・・・」

くねる麗華を見ながら言うはやて。麗「何よ？発作って!？」

麗華以外「・・・」

麗華の言葉に固まる一同。結斗依存症の麗華が自分をノーマルなし  
oveしていると、思い込んでいる麗華に呆れての反応だった。

麗華以外「・・・麗華<sup>ちゃん</sup>の結斗(君)依存症・・・」

麗「なっ！何言ってるのよ！」

見事なタイミングの麗華への指摘されたことに怒った様子の麗華。  
さすがに言い過ぎかな？となのはらが思ったその時、  
麗「そんなの当たり前でしょ!!」

麗華以外「・・・」

再びなのはら一同は、口を開けてしまったのであった。

？「みんな席についてね」

女「あつ！ちゅちゃん！」

？「ちゅちゃんって言わないですよ！」

そんな時、教室の前にあるドアから女性の先生が入って来た。それに気づいた女子生徒が先生の名前を言うと、その女性はぷりぷりと怒ってしまう。

女性の名は、奥田<sup>おくだ</sup> 千恵<sup>ちえ</sup> 新入クラス1・Bの担任である。彼女がちゅちゃんと呼ばれる所以それは・・・

は「ちゅちゃんさつきも見ましたが、めっさちっさいですね」

千「うわ~~~~ん！！言わないですよ~~~~」

そう彼女の背の高さは140cm程しかないのである。

加え、可愛い子顔。精一杯に背伸びしながら黒板に文字を書く姿。これらが合わさるのだ。

そのため朝SHR、初めて対面した時万丈一致でクラスであだ名が決まったのだ。それが・・・ちゅちゃんである。またの千恵ちゃん。本人はあだ名が大層に不満らしく、言われる度に怒る。しかしその姿が原因で、怒っても全く怖くないのである。

麗「駄目よ、はやて。そんなこと言ったら！」

千「れ、麗華ちゃん……」

はやての言葉に異議を唱えるように話しを遮った麗華。それに千恵が嬉しさのあまりまた泣きそうになるが……

麗「千恵ちゃんだって分かっているんだから！そんなこと言ったら駄目！」

千「う、うわ~~~~ん!!」

フェ「追い討ちだね……」

な「とどめなの……」

麗華の天然な発言に涙する千恵。それをみたクラスのみんなは哀愁漂う表情をしたのであった。

千「ぐすっ……えっとさっき話したと思うけど今日からみんなの担任になりました奥田千恵です。よろしくね 先生って呼んでね！」

みんな「「「分かりました！千恵ちゃん!!」」」

みんなしてちゃん付けだった。



千「・・・もういいです。諦めます。さて・・・報告ついでに今日から新しい友達がいいます。というよりみんなは、もう知ってるのかな？さあ二人とも入ってきて〜」

泣く泣くクラスへの説得を諦めた千恵が廊下へ呼びかけ、外にいる人物が入ってくるよう促した。

麗・な・フェ・は・ア・す「「あっ！！！！」」

麗華達の表情に体育館のときと同じように驚愕の顔へと変化した。その先には体育館と同じ光景だった。

結「白銀結斗です。帰ってきました！」

アリ「アリシア・テストロツサ・ハラオウンだよ〜みんな、またよろしくね〜」

教壇の隣に進み出たのは、三年前とは違って大人びた二人の姿だったのだから。

Next to TALE57!!!!!!

TALE 56 帰還（後書き）

更新です!!

今日戦女神VERITA買いました！

気分いいので出しました!!

かんそく待ってます~~~~

それと誰か戦女神知りませんか~~~~？

T A L E 5 7 黄昏(前書き)

だ~~~~~!!!!なんか変な題名に~~~~~!!!!

この言葉の意味。・hack知っている方は分かるかも。

TALE 57 黄昏

結「ちょ、ちょっとっ!?!?アリサってば!?!」

ア「黙ってなさい・・・」

結斗が何かなんだか分からず、結斗の腕を掴んで離さないアリサに聞こうとするが妙に冷めた声で受けられてしまう。

数分前――

結斗とアリシアがクラスのみんなに自己紹介をし終え、千恵からの話を聞いた。

今日は入学式なので午前中までしか学校がない。よって午後からは遊ぼうとクラス中が喧騒している。

中でも最も大きな喧騒が、教室のど真ん中にあった。

女1「久しぶりだね〜結斗君」

男1「今度はどこに行ってたんだ？」

気さくに結斗に話し掛けるクラスメイト。

結「ほんとみんな久しぶりだね。また会えて嬉しいよ・・・」

千恵の話が終わり次第、まるで蝶が花に集まるかのように結斗の周辺に集まったのだ。結斗がクラスでどれ程、親しみが持たれているかが予測できる。

アリシアも結斗の傍らでクラスメイトからの質問に丁寧に答えていた。

しかしその輪を乱す者が現れる。

ア「結斗、ちょっといい？」

アリサであった。背後には六大美少女全員が控えており、その瞳を一心に結斗へと向けていた。

合計十二の目から見られ、緊張しながらも答えようとするが

ア「答え聞いてないから、ほらさっさと歩く！」

アリサに手を掴まれ、問答無用に連行されたのであった。

なのはや麗華たちもそれに続く。

そして教室に残されたのは、意味が全く分からないと、考え込んでいる。結斗の周りに集まっていたクラスメイトの構図であった。

屋上――

結「ちょっと待ってよ、アリサ！」

幾度も呼ぶ結斗にアリサは、何度も聞こえていないかのように振る舞う。

そして屋上についたからなのかアリサが歩みを止めた。アリサが結斗の手を離す。

ア「結斗、あんた今まで連絡寄越さずにどこ行ってたのよ」

何か含んだ言い方をするアリサ。

結「悪かったよ。いろいろあったんだ」

ア「いろいろって……。あんたね！なのはが大変な事になったの知ってるの！」

結「……」

アリスの叫びにも似た声が屋上に響き、そこにいた他の生徒が何事かと結斗らに視線を集中させる。

結斗はそれに戸惑う表情をし、ただ一言。

結「知ってたよ……」

そういった。

その言葉にアリスを含めた麗華たちの顔色が変わる。その中なのは、悲しい表情をしていた。

ア「……なのはずっとあなを呼んでたのよ！ 怖い、助けてって！」

結「……」

再び沈黙する結斗。



ア「くっ！」

パン！

空間に濁いた音が出された。それはアリサが右手で結斗を張ったものだった。

ア「あんたがそんな奴だなんて知らなかったわ。さよなら・・・」

辛辣な言葉を言って結斗の脇を過ぎるアリサ。

ア「行きましょ、みんな」

アリサがなのはらに言い、彼女らは屋上を後にした。その時麗華となのはは、その場を立ち去るまで結斗を見つめ続けていたのであった。

アリ「・・・ゆう君」

アリサ達が立ち去った後、屋上に残っていたのは、結斗とアリシアのみだった。アリシアの結斗を想った問いに、反応しない結斗。

「・・・反応できないんだ。」

アリシアは、そう思った。それ程までに彼女らの存在が大きい。そんな彼女らから別れを言われたら誰だってこうなってしまふ。

だからアリシアは、待つ。

結斗が次に発する言葉を待ち続ける。

そのうち結斗の背中が、小さく震え始めた。

不意にアリシアが背中から結斗を抱きしめた。一瞬びくつと結斗の背中が震えた。

やがて・・・

結「帰ろっか？」

結斗から口火を切った。

アリ「……………うん……………」

アリシアはそれにただ肯定を示すしか、結斗のために今できることは思いつかなかったのであった。

同日PM23:37

結「ごめん……………ごめんね……………」

結斗の寝息とともに、言われる謝罪の言葉。それが誰に対してなの

かー

結斗の隣で横になっっているアリシアには、分かっていた。  
「ーアリサちゃん達は誤解してるよ。」

一人昼の事を思いながら、不機嫌に言う。

焰「アリシア、何を考えとるんじゃ？」

不意にベッドの反対側からかけられる声。

アリ「焰美・・・ゆう君は、どうして本当の事を言わないのかなって思っ・・・」

澪「・・・それはあの時、ゆう様はなのは様ではなく、自分の事を優先したからだと思います」

アリ「それはっ！！」

澪に言われた事に必死に反論しようとするアリシア。

焰「アリシア。過程はどうであれ事実は、そうなのじゃ。だからゆうは深く後悔をしておるのじゃ」

澪「ゆう様は優し過ぎますからね・・・」

焰美と瀨の言葉に下唇を噛む気持ちになるアリシア。

アリ「ゆう君・・・」

隣で苦しそうに眠るマスターを伺い見る。

そこには涙が滲み出ていた。小さなマスターの悲しみが少しでも軽くなり、良い夢がみられるよう涙を拭った。

その日から、アリサ達は一向に結斗には話しかけなくなった。アリサ以外のなのはらは、どう話しかければいいのか分からないと言った様に機会を逃していたのであった。

当のアリサは、いくらなんでも結斗の頬を張ったのはやりすぎたと思っている。しかしなのはが結斗の事を必死に求めたのは事実で、それに答えなかった結斗が許せなかった。だから張った。そのため既にこの件に関しては、引っ込めない状態なのである。

結斗も話し掛けなかった。クラスメイトらと楽しく喋る。しかしその笑顔が本来の笑顔ではないことにアリシアと焰美、瀨は気づいていたがどうする事もできないのであった。

そして結斗がなのはたちとの会話がないまま、四日が過ぎた。

PM 17:25

下校途中

アリサ side

日が落ち始め、さくらを照らします。その光景が美しく、私は足を止めて見惚れた。

思い出すのは、四日前の出来事。

「私の馬鹿。どうして結斗にあんなこと言っちゃったのよ。結斗が意味もなくなのはを見捨てるような真似するはずなのに。でもあの時のなのは本当に結斗に助けを求めてた。私達じゃなく、結斗に。」。

麗「アリサ？お〜い!!」

ア「っ！麗華。。。何？」

私の隣を歩いていて麗華の顔がまじかにあったことに驚いた。今日もいつも通り、私達のみで帰っている。結斗の姿はない。

な「アリサちゃん、いい加減仲直りしようよ……」

ア「……」

喧嘩の原因であるのはに言われ、なんか無性に腹が立った。

ア「あんたね〜誰のせいでこんな風になったと思うのよ!」

な「それは、私だって嬉しかったの。アリサちゃんに言われて。でも結斗君にも何か事情があったに違いないの」

フェ「アリサはいつも口より手が出ちゃうからね……」

は「ほんまや。アリサちゃんそのくせ直さなあかんで?」

す「アリサちゃんいつになったら仲直りするの?アリサちゃんだって仲直りしたいんでしょ?」

みんなからの言葉を聞きながら、すずかに言われた事を反芻する。―――したいに決まってるじゃない。初恋の男の子なのよ?当たり前じゃない。

今にも心の中で思ったことをぶちまけたい衝動に駆られる。

ア「……」

な「アリサちゃんが無言だったの・・・しょうがない。私の家に行つてケーキ食べよ？」

私が黙り始めた事に提案するのは。

私達はなのはの家、翠家へと向かった。

私たちが翠家に到着していつも通りに入り口の扉を開けると・・・

結「・・・・・・・・」

恭・士「・・・・・・・・」

首に小太刀を構えられた結斗。それに殺気だった士郎さんと恭也さんだった。



アリサ side out

場は数刻戻り、五分前 - - - -

澁「行くのですか？ゆう様・・・」

澁の問いかけにその場に佇む結斗は、頷いた。彼が今立っている場所、なのはの家、喫茶翠家の前だった。

アリ「ゆう君・・・ここに・・・」

側で心配そうにいるアリシアに結斗は、

結「なのはの事で話さなくちゃいけないからね・・・」

焰「・・・恐らくただでは済まされないと思うぞ・・・」

結「それでも僕は、彼らに謝らなくちゃいけない・・・だからアリシア達は黙ってて・・・どんなことされても・・・」

アリ・瀨・焰「・・・」

結斗の決意に口を出すべきではない、と判断したアリシアたちに礼を言いながら結斗は重い扉を開けた。

カラ〜〜〜ン

士「いらっしやい・・・ま・・・せ」

呼び鈴が鳴ったことでカウンターにいた士郎が挨拶をするが、それが最後まで抑揚なく言われる事はなかった。

結「お久しぶりです・・・みなさん・・・」

ちようどなのはの家族全員がフロントにいたため、挨拶をする結斗しかしそれに返されたのは無言。それに加え、射殺すような目であった。

その対応を予め予期していた結斗は、後ろに控えているアリシアや焰美、瀨を引き連れてカウンターへと歩き始める。

他に客はいないらしく、何物の音もしない。

普段賑わっている空間が全くの無音である事に恐怖しながらも結斗は歩み続ける。

士「何をしに来た……」

以前会った優しい声ではなく、本物の殺気が乗せられた土郎の言葉。結斗は、土郎のそんな対応を悲しく思いながらも、はつきりと告げる。

結「謝罪に……」

ガタンツツツ!!!!

結斗の言葉が乗せられる前に空気が動き、一瞬で結斗の首には、土郎が持つ小太刀と恭也の持つ小太刀の刃先が触れていた。美由紀と桃子も普段の優しい表情ではなく、怒りのものであった。

ツツツツツ

正面から土郎が。背後からは恭也の小太刀により、結斗の首には両側に一筋の赤い線が流れた。

それに動揺する事なく、結斗は言葉を吐く。

結「すみません……土郎さん、桃子さん、恭也さん、美由紀さん。なのはを傷つけてしまって……」

士・恭・桃・美由「……………」

無言の四人。

それに続けるよう結斗が言葉を紡ぐ。

結「斬るなら斬って構いません。僕はなのはを助けられなかった・

」

カラーーーーーン

そこで再び入り口の扉が開かれた。そこにいたのは・

麗・な・フェ・は・ア・す「「結斗（ゆう、君）！？」「」

麗華たち六人だった。

結斗のされている状況が全く理解できずに狼狽する麗華たち。

な「やめてっ！！お父さん！！お兄ちゃん！！」

一番に理解したなのはが二人に静止を呼びかけるが、

士「なのはは……………黙ってなさい」

な「っ！」

普段には見せない冷徹な声で士郎に言われたことで萎縮するのは、しかしなのはは、声に力を込め、

な「やめてっつてば!!!!!!!!!!!!!!」

先ほどより力強く言葉を発する。

しかしそれでも士郎と恭也の二人は、刀を手放さなかった。

結「いいんだよ……なのは……」

な「結斗君っ!?!」

結斗の言葉に驚愕するのは。それに意識を戻された麗華たちがなのは同様呼びかける。  
すると……

恭「なのは達に感謝するんだな……」

恭也が刃を引いた。だが……もう片方の刃が離れない。

な「お父さん!!」

士「……いいか、なのは。結斗君は私達との約束を破ったんだ。……いやそれはいい……。だがどうしてなのはが入院し

てる時、退院の後、どうしても様子を見に来なかつた？」

初めて結斗に問いかける士郎。

結「…………それは…………自分の事を考える事しか、出来なかつたからです…………」

士「っ！」

再び構える士郎。

アリ・焰・漣「もうやめて、るのじゃ、ください（っ！！！！）」

それは止められた。

反射するかのように叫びだしたアリシア、焰美、漣によつて。

今までの様子をみているだけだった三人が叫ばれた事で士郎らの注目が向けられる。

焰「もう…………もう良いじゃろ…………士郎…………」

漣「これ以上ゆう様を…………傷つけないで下さい…………」

アリ「お願い、士郎さん……」

士「……………」

涙を流す三人。

三人の必死な懇願でやっと刃を引く士郎。

しかしその表情は未だ結斗を、憎しみの表情で滾らせていた。

結「ごぶっつっ！」

その時結斗の顔が苦しみで歪められる。瞬間的に口を手で押さえるようにする結斗。

そして手が赤く血で染められる。指と指の隙間からポタリと血が垂れる。

アリ・焰・瀨「ゆう（君、様）っ！……」

駆け寄る二人。

結「三人とも・・・邪魔しないでって言ったのに・・・」

力ない言葉で言う結斗。

その顔色は青白く、異常な状態である事はすぐに分かる。

焰「そんなこと言ってる場合かっ！！早く休まねばっ！！」

澁「ゆう様、行きますよ！！」

アリ「ゆう君肩に掴まってっ！！」

アリシアが結斗に肩を貸し、入り口に向かおうとするが、

アリ「・・・・・・・・六人とも、退いて」

アリシアの前には、麗華たちが立ちほだかる。

麗「外に出なくてもここで休めばいいじゃないっ！！」



アリ・焰・瀨「……………」

な「そうなの!!お父さん、お母さんいいよね!!??」

なのはの言葉に頷かずには、いれない士郎と桃子の二人。

アリ「……………」

フェ「姉さん?」

アリ「勝手なことばかり言わないでよっ!!!!!!」

アリシアの怒りの言葉が店内に響いた。

アリ「あの日の真実も知らないのに!!知ろつともしないのにっ!!」

焰「止せ……アリシア……」

瀨「そうです……理屈じゃないんです。自分の子供が傷つけられたらどの親だって怒って当然でしょう」

アリ「でもっ!」

瀨「それより……休める場所を提供してくださるのですか?」

アリシアの批判を無視をして、瀨は士郎へと尋ねる。

士「あ、ああ。こっちだ・・・」

士郎に促され、焰美と瀨それと士郎を睨みつけているアリシアは、家の奥へと入っていったのであった。

高町家道場 - - -

道場内は殺伐とされていた。静かに横になり、眠る結斗。吐血の血は、洗い流されたが服についたものはとることは出来なかった。その結斗を見つめる高町家一同と麗華たち。

そしてその間に座るのは、厳しい表情をする焰美、瀨、アリシアの姿であった。

な「・・・アリシアちゃん・・・」

アリ「・・・」

顔だけに向け、反応するアリシア。

な「教えて欲しい事があるの……」

アリ「……何を知りたいの？」

非協力的に言うアリシア。

その表情は、さっきと同じような怒りのものであった。

な「全部なの。真実って一体。結斗君が吐血したのは……？」

アリ「……」

静かにアリシアは隣に座る焰美と瀨に顔を向ける。

焰「……いいじゃろ……」

瀨「……このままゆう様が傷ついていくのは見たくはないですから……」

アリ「・・・あの日、なのはちゃんが怪我をした日。私達はある事件の犯人を追っていたの・・・」

アリシアが嫌そうに口を開ける。

ガタンッ

恭「おいっ!!こいつは、なのはの所には来なくて、仕事をしていたって言うのかっ!!???」

アリシアの言葉に再び怒りの形相で立ち上がり、寝ている結斗を指差す恭也。

アリ「・・・黙って」

恭「っ!」

それにアリシアがとても中学生とは思えないほどの、冷ややかな声を恭也に叩きつける。

それに驚き、背中に冷や汗を掻く恭也。

アリシアの突如の変貌になのはや麗華たちも驚きを隠せない。中でも、フェイトが一番驚いていた。

アリ「話しを続けるよ……私達が追っていたのは、ゆう君のお父さん、京二さんを殺害した人の関係者」

みんな「っ！！！！！」

息を呑むのはたち。

アリ「……恭也さん。……先ほどの質問に問い返すよ。肉親を殺した相手でもそんなことが言える？自分の親を殺した相手より友達を優先しろと？」

それをみたアリシアは、視線を向け、恭也に皮肉気味に言った。

恭「そ、それはっ……」

目に見えてうるたえる恭也。

それは彼もまた経験があった。

以前、士郎が大怪我を負った時の事、怪我を負わせたテロリストに

今まで感じたことのない殺意を感じ、自分を見失ったことがあったためだ。そしてそれが原因でなのはに辛い目を遭わせてしまった事も思い出す。

アリ「ゆう君は、絶対に捕まえるって言ってたよ。父さんを殺した人を捕まえるって……。私は京二さんとは、会ったことはない。でもゆう君が尊敬している人。

そんな人を殺した相手が目の前にいるのなら、冷静な判断が出来ないのも、仕方ないじゃないの？  
ねえ、違う？」

恭也から視線を外し、士郎、桃子。恭也、美由紀に向く。

士・恭・桃・美由「……………」

アリ「あなたたちにゆう君を許せとは言わない。でもゆう君もあの日のことを悔やみ続けているんだよ。  
知ってる？あの日からゆう君ずっと寝ている時に、涙を流して言うてるんだよ。

ごめん、ごめんねって。少しはゆう君の事も考えてあげてよ」

麗・な・フェ・は・ア・す「……………」

焰「アリシア言い過ぎじゃ」

漣「そうです。少し落ち着いて下さい」

アリ「……ごめんなさい。……私ゆう君の事になるとどうしても見境がなくなっちゃって……」

焰美と漣に言われ、ハツとしたアリシアは、申し訳無さそうに土郎達となのはらに謝った。

麗「それで……ゆうがさっき血を吐いたのは？」

場が静まり返った時に尋ねる麗華。

焰「あれは……ゆうなりのけじめの結果じゃ」

麗「けじめ……」

な「もしかしてっ!?!」

なのは今にも泣きそうな声で叫ぶ。

士「なのはっ!?! 一体どうしたんだっ?」

な「……………」

士郎の言葉に答えられず、ガタガタと肩を震わすなのは。

澁「……………士郎様……………」

士「なんだ?」

澁「ゆう様が吐血した原因は、なのは様です」

士「どうゆう意味だ…………?」

澁「……………なのは様の怪我。まさか本当に奇跡的に治ったとお思いですか?」

静かに尋ねられた事で、澁も静かに返す。しかし声には、怒りが込められている。

なのはは依然として下を向く。

士「だからどうゆうことかと聞いている!?!」



澗のもつたいぶつた言い方に怒鳴る土郎。

澗「…………ゆう様は、なのは様の怪我を治癒しました。

……………自分の身体を引き換えにして…………。遭えてそれを選択したんです。なのは様の痛みを知るために。どれ程なのは様が痛がっていたのかを自らに知らしめる為に…………。」

土「っ！！！！」

焰「分かったかの。土郎、桃子、恭也、美由紀。それ程までにゆうは後悔しておるのじゃ。お主等、ゆうがなのはを見捨てたと思っっているらしいがの…………。」

ダンッ！

そんなことあるわけないじゃろっ！！！！！！！！！！」

怒り心頭の焰美の声と拳を打ち付けた音が、道場へと響く。

焰「確かにあの時、ゆうは自分のことを優先した。だからゆうは、侘びを込めてなのはを治療した。自分勝手と言われればそれまでじやが、ゆうは今も苦しんでおる！それを忘れるなっ馬鹿たれどもがつ！！！！！」

士郎達「……………」

焰美の言葉に何も言い返せない。言い返すことが出来ない士郎達。それをみた漑が……

漑「焰美……どうしてあなたまで怒るのですか……」

と言った。アリシアも、

アリ「そつだよ……」

それに便乗する。

焰「ふんっ！知らんっ！！こやつらがあまりにも自分勝手なことば

かり言っていたので、堪忍袋が切れてしまったわ!!」

そっぽを向く焰美。

結「はあ~~~~焰美言い過ぎ」

道場に結斗の掠れ声が聞こえた。どうやら血が喉に溜まっていたらしく、その顔は不快そうだ。

焰「なっ!!ゆっ!!」

みんな「結斗(君、様)!!??」

目がパチパチと開ける結斗。

結「あの日悪いのは僕だ。なのはを見捨てて、自分の事を優先して、

拳句に犯人には逃げられる……全く……情けない」

身体を起こしながら言う結斗。

アリ「ゆう君もう身体は？」

結「大丈夫。もう行けるよ。いつまでもここに厄介になってたら土郎さんたちに悪いし、帰るよ。（ちよっと、待ってくれ！！）土郎さん？」

土「済まなかった……事実も知らずに君に刃を向けて」

結「別にいいです。僕はそうされても仕方ない事をしましたから」

桃「そう言わず、私達があなたにしたことは例えなのは親としても許されない行為だわ」

結「いいんですよ。所詮僕が独りよがりで、勝手になのはの怪我を治したんですから。桃子さん達が気に病む必要はありません」

桃「でも……」

尚も顔色が明るくならない士郎、桃子、恭也、美由紀。

結「・・・じゃあこうしましょう。美味しいコーヒーとケーキを下さい。それでチャラです」

恭「そ、そんなことでいいのか！？俺達は結斗お前を（ストップ！）結斗」

結「もういいですから。これ以上言い続けると、終わりません。だからいいんです」

美由「ありがとう・・・結斗君・・・」

結斗に礼を言う美由紀。

他の三人にもいつもの笑顔が戻っている。それを嬉しく感じる結斗であった・・・。

Next to TALE 58!!!!!!



TALE 57 黄昏（後書き）

長い！！！！それに重い！！

最近シリーズを書きたかつたんで書いてみました。

出来は・・・

うん。頑張ったから良しとします！！

では～～～

TALE 58 女の子達の成長（前書き）

舞うひらひらと。それはさくら。それは僕のなにか。  
再びの日々。それは僕が望んだもの。  
続けたい。この日々を。  
だから僕は強くなる。



TALE 58 女の子達の成長

ドキューーーーーン、ドキューーーーーン  
バーーーーンッ！バンバンッ！！

直線の軌跡が空間に交わる。その発射物は四丁の拳銃であった。その内二つは赫い拳銃と蒼いガバメント。もう二つは宵の闇で漆黒のガバメントであった。

結「ふっ！はっ！！！」

麗「せいっ！！やあああ！！！」

互いが相手の一手、二手先の動きを予測し、銃弾を打ち込む。しかし互いにそれをさせまいと手首を使い、相手の銃を持った手を逸らさせる。

いく度か結斗が麗華の、麗華が結斗の手首を返しながら、超接近射撃をする。やがてどちらが言うまでもなく、2 m程離れた。麗華に

疲労が見え始めた。

麗「はあ・・・はあ・・・」

結「麗華、動きに無駄があるよ！」

麗「そ、そんなこと・・・言っても・・・ついてくのに精一杯よ・・・はあ〜」

息を切らしながら言う麗華。

無理もない。いくら銃の扱いに慣れた麗華であっても、時速200キロを越える弾丸を直感と結斗の動きから先読みをする。更に相手を目の前に立たせるプレッシャーもあるだろう。そのためいつもより体力の低下が激しいのだ。

大きく息を吐き、新鮮な空気を体内に取り込む。ほどなくして麗華の息が整われた。

二人が実践しているのは、超至近距離での銃の鍛錬である。ガンマンは、基本的に接近戦を苦手としているものが多い。麗華も、その例外ではない。

そのため結斗は、この独自の練習方法を編み出した。

内容は、互いに1メートル程の距離で、相手目掛けて弾を撃つだけの単純なものである。しかし腐っても結斗が考案したもの。相手の動きを一瞬で判断し、最小限の動きで攻撃を避ける又は銃身で受け流し、自身の攻撃を命中させる。つまり銃を打撃武器として扱っているのだ。

そしてガンマンの苦手な超至近距離での戦闘を経験させることを目的としている。

結「麗華は、直前にビビっちゃうのかな？それが原因で判断が一瞬遅れているんだよ」

腕組みながら言う結斗。

麗「そんなこと言っても、目の前で弾合戦してれば誰だってびびるわよ・・・」

余裕の態度の結斗を恨めしく思いながら、反論をする麗華。

結「それは駄目。その隙が命取りになるんだから、慣れて！」

そう言うなやいなや、結斗が麗華に接近し、愛銃ブルーティアーズ

とクリムゾンティアーズを麗華へと標的<sup>サイト</sup>する。

麗「つく！」

二つの銃を向けられた麗華は、腕を立て結斗の懐に入り、結斗の腕を払った。それによつて的無いところへ、発射される結斗の弾。それを予測していた結斗は、半歩後退し、左脚での回し蹴りををします。

それをよんでいた麗華は背中をを逸らし、蹴りを右脚で蹴り返す。

そのような肉弾戦のやり取りが、弾の発射音<sup>シエル</sup>、そして格闘術が重なり合い、ワルツを奏でる。

二人の動きは、互いを求め合うアダムとイブかのようにだ。しかし、

結「せいっ！！」

麗「くっ！！」

シッシー！！！

小気味にいい音、発せられた。

結「チエツク、メイト」

麗華が結斗の弾を身体を半回転させることで、避けた。しかし結斗は、それを先読みし、麗華の額にクリムゾンティアーズを構えたのであった。

チャキツ

終わりとはかりに結斗が徐に双銃を手の中で回転させながら頭上高く投げた。

そして二つの銃は、意志をもつかのように美しい放物線を描いて、両脚の外側のホルスターに淀みなく、収まった。

麗華もそれに倣い、同じ動作で同じ位置のホルスターに双銃をしま

結「お疲れ様」

麗「ぐへ〜〜」

結「わわっ！麗、重いよ〜〜！！」

結斗の労いの言葉に麗華が結斗にしな垂れかかってきた。それを麗華の背中に手を添える事で、受け止めた結斗。

麗「むっ！失礼な！！私重くないもんっ！！そんなこと言うゆうには~~~~こつだっ！！！」

こちよこちよ・・・

結「わひゃっ！！！」

結斗の身体を縦横無尽にこしょぐる麗華。結斗は、たえられず男の子としては可愛らしい声で叫んだ。

結「うひゃ・・・ひゃい・・・ね、麗~~~~！！やめてよ~~~~！！！」

白銀邸に結斗の可愛らしい泣き言が響いたのであった。

は「ずるいでっ！！！！麗華ちゃんだけ！！」

はやての悔しがる声が、ここ1・Bに木霊した。彼女の声は、廊下まで響き、一斉にはやてが叫んだ原因である結斗らへと注目するのは、自然な事であった。

フェ「はやて！！声が大きいわ！！」

は「しもたっ！！」

急いで口にチャックするはやて。それを見たクラスメイトらは、またいつものことかと、それぞれの雑談などに再び耽り始めた。

ア「何叫んでるのよ？はやては・・・」

す「はやてちゃん？」

そこで騒ぎを聞きつけたアリサとすずかが結斗らへ足を向ける。

結「うっくん・今朝、僕と麗華鍛錬をしたんだけど、それがずるいんだって。なんでだろ？」

アリサとすずかに説明する結斗。

ア「あ、あんた……相変わらずの鈍感ね……」

結斗に額に人指し指を当て、呆れた表情を見せるアリサ。隣にいたすずかは、それにくすくすと忍んで微笑んでいる。

昨日の翠家でのこと以降、アリサやなのはらは結斗に謝った。

特にアリサの謝りようは、凄まじいものがあった。

アリサは謝った時、泣いていた。

友達ましてや好意を持っている相手に、別れの言葉を一方的に言ったり、頬を叩いてしまった。

それに罪悪感を感じてしまったのだった。だから仲直りは無理ではないかとアリサは思った。

しかし結斗の返答は、そこまで「追いつめてごめんね……」と逆に謝るものであった。

改めて結斗の途方もない優しさに触れ、更に涙腺が緩み、結斗に胸に抱きつきながら、ごめんなさい……ごめんなさいと泣き続けたアリサであった。

まあともかく今は、以前より以上に、仲良しっぷりに二人である。

結「アリサ、もう大丈夫？」



ア「だ、大丈夫よ／＼／」

アリサの綺麗な小顔と赤い瞳を覗き込みながら言う結斗。  
目の前に好きな男の子の顔がドアップになったことで顔を朱色に染めるアリサ。

結「そう、良かった　アリサは、僕にとって大切な人だから良かったよ」

ア「わ、私も・・・／＼／＼／」

結「ん？何？よく聞こえない・・・」

ア「な・・・何でもない／＼／／」

アリサが顔を真っ赤にして言う。  
以前のアリサならこの時、小突く位のことをするだろうがそれが全く無くなり、もじもじとしている状態だ。

アリ「アリサちゃんのデレ期だね・・・」

な「うん……」

アリシアの二人を見ての感想に周りにいたなのは、フェイト、すずからは首を揃えて頷いたのであった。

二分後――

結「なるほど……要するにみんな僕に魔導師としての習熟度を測って欲しい訳だね」

腕を組み、納得した様子の結斗。麗華やなのはらの、昨日とは違って変わっての態度の変化を気に様子はない。  
それ以上にまたこんな幸せな日々が過ぎせるなら、”前の”なんて全く意に返さないようであった。

は「せやでー!」

フェ、「うん！私達、頑張ったんだから！」

な「そうなの！！」

胸の前で拳を握る三人。

その様子に結斗は三人の相棒達デバイスに話しを聞いてみる。

レイ>There is no problem・Master  
ing masters the silver form・：  
問題ありません。マスターは、シルバーフォームを使いこなして  
います<

バル>Here is also similar・：こちらも  
同様です<

二機の答えに満足した結斗。

結「分かった 今日僕の家に来て？確かめるよ」

は「あ~~~~結斗君？」

授業の時間が迫っていたので打ち切ろうかと思った結斗であったが、

はやてのおずおずした割り込みでそれは流れた。

は「結斗君が私たちを評価するんやろ？」

結「もちろん。僕が教えたからね、それで？」

は「じゃ、じゃあ！私らが上手く出来とったら願い事一つ聞いて欲しいんや！」

結「？それは・・・僕が願いを叶えるっていう事？」

は「も、もちろん！！」っていうより結斗君しか頼めんちゅーに！！」

激しく首を縦に振るはやて。それがちょっと可愛く思えて、微笑みながら

結「ふふ・・・分かった。僕ができる事ならやろつ。はやて達のやる気に繋がるだろつし・・・」

と言った。

は「その言葉取り消さんといてな！！」

ピシッ！！と効果音を付けたくなるくらいに結斗を指差すはやて嬢。

結「はいはい。なのはとフェイトも別にいいよ〜」

はやてにひらひらと軽い感じに受け答え、なのはとフェイトに言う  
結斗。

後にこの選択が大いなる桃色の嵐の中心に自分を据え置く、発言だ  
ったなんて露にも思わず……………

願い事を一つ叶えてくれると聞いて、はやて、なのは、フェイトは、  
結斗のある部分を集中的に見出す。

な・フェ「う、うん（こ、これで……………つ……………遂に！！結斗（君）  
の……………



ボタンッ

す「わあああ！……！……！麗華ちゃんが倒れた！……アリサちゃんどうしょー！……？？」

ア「ほっときなさい……そのうち帰ってくるわ」

す「で、でも……」

ア「すずか。麗華の顔見て見なさい？」

す「？……ああ、なるほど……」

すずかとアリサの視線の先には、これ以上無い恍惚した表情の麗華。

ア「こんな幸せそうな顔してるのに、そんな簡単にくたばんないわよ……」

す「そ……そうだね……」

アリ「……むむむ。やっぱり久しぶりのゆう君の、可愛すぎる  
仕草に堪えれなかったね麗華ちゃん……」

その頃アリシアは、状況を分析していた。

男子の唇をガン見する少女二人。

赤い花を咲かせる少女一人。それに呆れる少女二人。

その状況分析をする少女一人。

カオスな雰囲気とは、このようなことを言うのだろう。



結・麗「ただいま~~~~（お帰り!!!）うええええ??？」

結斗の驚きの声が上がった。隣の麗華は、その原因たる人をジト目で、睨む。

美「むふふ……」

その人美緒は、結斗に後ろから抱きつきながらそれを軽くスルーした。

麗「お母さん、はなっ……れてよ~~~~!!！」

美緒の腰を引っ張る麗華。

しかし万の力で掴まっているのかびくともしない。

美「なによ~~~~いいじゃない!麗華は、ずっと一緒にいられたかもしれないけど、私は違うのよ~~~~!!！」

結斗の腰に引っ付きながら喚く美緒。それを結斗は、感慨めいた思いに耽りながら傍観している。

補足だが、結斗の身長は152cm。美緒の身長は156cm。麗華の身長は、150cmだ。

——ゆうが帰ってきてきて私やっと気づいたわ。麗華と結斗の成長。

ほんと大きくなったものね。

そんなふうに思った美緒であった。

それから麗華が美緒を引き剥がしに成功したのは、30分後であった。

ちなみにこれは最長記録ではない。最短記録なのだ。

白銀邸――鍛錬場――

麗・な・フェココシルバフォーム、セットアップ!!」「」

銀色にとかされる空気。その神聖な、気が発せられた事に嬉しさを  
感じる結斗。

やがて眩しい光が晴れ、デバイスのコア色が銀色、それに加えそれぞれBに銀色の線が入った、変化をしていた。

結「なるほど……。それじゃ……。あ、はやてはつと……。？」

三人の成長具合を一目で察した結斗が今度はと、はやての方へ首を向ける。

は「よっしゃ！いくでっ！リン！！」

リ「はいですっ！！」

次ははやての優しく包む白い光と少し青が混じった光であった。

は「ん 今日も絶好調や」

変身後、黄金の杖シュベルトクロイツを軽く振る動作をするはやて。

結「へえ〜はやてユニゾンデバイス作ったんだ？」

は「そうや〜。私の戦い方やどうやっても一人では制御し切れんからな〜。まあ〜家族が欲しかったんのもあるけど」

結「そっか。ちょっといいかな？」

は「へっ!?!」

そういつて徐にはやての顔に手を伸ばす結斗。

ピッ

結斗の冷たい手と、はやての温かい顔が触れ合う。

結>聞こえるよ〜?<

リ>聞こえますよ〜<

結>はじめましてなのかな?僕は、白銀結斗。リインでいいのかな?  
<

リ>はい〜。正確にはツヴァイですけど<

結>そっか。これからはやての事よろしくね<

リ>分かってるですよ〜<

結斗とリインの会話が終了する。やがてはやての頬から手を離す結斗。

は「な・・・なにしとったん？」

疑問顔のはやて。その顔は紅い。

結「何って・・・リインとちょっとお話をしたただだよ」

は「話って・・・」

結斗の物言いに呆れるはやて。ユニゾンデバイスがユニゾン中に話しかけられるのはそのマスターのみだ。

だから例え皮膚に触れていたとしても、中のユニゾンデバイスに話しかけることなんて不可能だ。

だが結斗それをやったのけた。

ほんとに話していたのかリインに聞いてみる事にするはやて。

は「リイン、結斗君なんて言ってたん？<

リ>>これからもはやてを頼むよ〜って言われたのですよ〜<

は>そうなんや／／／．．．まあええわ．．<

二人が話していたことが分かり、頬を朱色に染めるはやて。

結「それじゃあ四人の成長具合を計る為に、テストをしようかな？」

麗・な・フェ・は「テスト？」

結「そう。僕に何でもいい．．．どんな方法でもいいから一撃当ててみて。そしたらご褒美も考えてあげる」

麗「そ、そんなの．．」

な「私達に有利過ぎるけど．．」

フェ「いいの？」

は「ほんまに？」

結斗の出した破格の条件に、躊躇う四人。  
それに口を出すものが現れる。

焰「安心せい。今のお主等なら、ゆうが本気出せば五分も保たぬわ」

麗・な・フェ・は「むかつ！」

焰美のニタニタしたいやらしい笑みに、ムカついた四人の女の子ら。

麗「いい度胸じゃない!!」

は「やったるわ!!」

な「絶対負けないの!」

フェ「うん!」

麗華たちのボルテージ、マックスの状態に……

結「ちょっと……焰美、張り切らせすぎ」

麗華たちのやる気に少し冷や汗を掻く結斗。

焰「そんなことないでじゃろう。ゆうは、それ程の実力と経験を持ち合わせ取る筈じゃぞ?それを我、瀧、アリシアは、見ておるし、知っておるぞ」

大したことないと気軽に言う焰美。

瀧「ですね。それよりどうしますか?」

結「うゝん。じゃあアリシアは、ここで見てて。二人は僕と一緒に戦闘ね」

アリ「分かったゝゝ」

焰・瀧「了解(したのじゃ/しました)」





フェイトであった。

それを目視で確認し、結斗は攻撃をある武器で受けた。

フェ「えっ？・・・鎌？」

フェイトの呆気にとられた声が結斗やなのはらの耳に入る。

結「言ったでしょ？僕は、刀を使わない。つまり大体の攻撃手段が封じられているわけだけど・・・皆無じゃない」

ギギギギギギギギ

金色のハーケンと焰色のハーケンが鏢迫り合いとなる。しかし・・・

結「はっ！」

一瞬力を抜き、フェイトがよろけたところを再び力を発揮し、

フェ「きゃっ」

フェイトを鎌を振り切ることで吹っ飛ばした結斗。

ザザー――

手を地面に逆立ちの状態につき、受身をとるフェイト。

フェイト「どうして結斗が鎌を・・・使えるの？」

最もな疑問を発するフェイト。

はやてたちも気になっているようで口を挟まない。

結「ううん・・・そもそも鎌ってどうゆうものか知ってる？」

は「そりゃあ。棒に曲がった刃がついたものやないか？」

結「正解。じゃあその棒の先に直刃をつけたら？」

フェイト「!!!!!!・・・槍・・・」

ハッというフェイト。

結「その通り。だから僕にとってみれば槍と鎌なんて同義なんだよ。ただ刃が長い、もしくは大きい、曲がっているかの違いなんだ」

麗「じゃあゆうは、鎌でも白銀流が使える？」

結「まあね。でも今回は、白銀流は使わないよ」

麗「……ゆうが技なんて使ったら、勝ち目なんてなくなるわよ……」

結「分かってる。だから使わない。さあ再開しようっか？」

今度仕掛けたのは、結斗。その手には、

な「今度は、レイジングハート？」

であった。色違いのレイジングハート。それは澁が変化したもの。

結「行くよ！アクセル」

なのはらになのはの技、アクセルシューターと同じものを放つ結斗。

な「アクセルシューター、シュート！」

迎撃するなのは。

しかし……

な「そんな！？全て相殺したはずなのに！！」

迎撃後、後から追うようにでてきたスフィア。それに驚くのは。

結「時間差だよ。こうゆうのも戦術だよ！ただいっぺんに打っているばかりじゃ、相手にこっちの作戦とかもばれちゃうよ。」

な「くっ！シユーーーーー！」

なんとか身を翻し、相殺し切れなかったスフィアを打ち落とすのは。

結「お見事。さっそくものにしたかな。（喰らいや！！デアポリックエミツション！）おっと・・・」

はやての声とともに広がる闇。それを結斗は、自らの脚力で後退して行く。しかし・・・

は「無駄や！この辺一体飲み込むからな。絶対に当たるで！」

勝利を確信した、意気揚々とした声で叫ぶはやて。

はやてたちの勝利条件は、一撃を結斗に当てる事。

ならば話しは簡単で絶対に当たる攻撃をすればいい。そう考え、なのはらははやての技に賭けたのだった。

結「考えたね・・・ならっ！」



均衡が保たれたのは一瞬。

緋色の刃が、暗黒の球体を縦に切り裂き。半球へと変貌させた。所詮広範囲攻撃。一点突破が直撃すると、力負けしてしまうのだ。

は「はは・・・相変わらずのチートぶりやな・・・結斗君は・・・」

自分の最高位の魔術が破られた事を悔しくも思いながらも、結斗の技術の高さに畏敬するはやて。

結「これくらいはやれないと、やっていけないんだよ」

それに何でもないように答える結斗。

それを見た結斗を相手する四人は、更に気を引き締めた。

結「おっと・・・時間だ・・・」

その時屋敷の景色が一変する。

戸惑う四人。それをみた結斗が説明を始めた。

結「安心して。空間が切り替わっただけだから」

言葉を反芻して、周りを見渡す四人。  
そこは青一色の景色。

結「見ての通り。海上だよ。さて、どっしする？」

笑う結斗。

それに対し、

麗「(三人とも、あれいくわよ!)(」

な「(麗華ちゃん、あれってまさか!)(」

フェ「(あれしか、なさそうだね)(」

は「(やな)。結斗君に度肝抜かせたろうや!)(」

念話で作戦を立てる四人。

麗・な・フェ・は「」「」「うんっ!」「」「」

領き一斉に散らばる四人。

麗華となのはは、結斗を中心にして囲うように回り込む。

麗・な「シューーーー！」「」

二人の一斉射撃が放たれる。全方向からの攻撃だ。

しかし結斗は、それをハーケンで打ち落とす。その動きには、全く淀みが無く、無駄がない。そして最も驚く所は、結斗はその場から動いてない。

柔軟に身体を左右に振り、避ける。当たるものは、容赦なく叩き潰す。それは究極の鎌であった。

麗「全く、どんだけ強いだよ。ゆうつてば!」

な「ほんとなの!」

結斗のあまりのチートぶりに文句を垂れる二人。しかしそれでもスフィアを打ち続ける。

結「なにをつ・・・たくらんでつ・・・いるの?」

攻撃を避けながら尋ねる結斗。その顔は涼しそうだ。額に汗すら掻いていない。

結「ほんとに・・・っ!!!」



言葉を続けようとするがそれは遮られた。驚愕する結斗。  
結斗の背後に、

フェ「ああああ!!!!」

金色の双翼を背中に掲げ、手にはザンバーフォームのバルディッシュを握った、フェイトが瞬間的に現れたためだ。さすがの結斗も、背後を取られたことに驚く。

が……それは一瞬であった。

瞬間後すぐに分析をし、冷静を取り戻しフェイトのザンバーを受け止める。

先ほどと同じ鏢迫り合いの千日手の状態に戻った。

結「驚いた。フェイト、すっごく速くなってね」

フェ「速さは私の取り柄だから。でもそれだけじゃないよ（えっ？）はやて!!!!」

は「ブラスターション、リリース!!!」

はやての叫びとともに彼女の祝詞が紡ぐられる。

は「大気より集え水神の槍・彼方より来たれ銀雪の吐息・・・逆巻き連なり天に座せ・・・」

紡がれた言葉とともに、空間に変化が生じる。

結斗とフェイトの周囲一体に、氷の塊が形成された。氷の直径は、一つあたり一メートル程。それが合計100個作られた。

結「これはっ!!!」

は「フェイトちゃん、ええよ!!!（分かった!!!）ヘイムダル、いっけええええ!!!」

はやてが呼びかけたと同時にフェイトが、氷のカーテンの範囲外に移動する。

それを確認したはやては、同時に杖を振り下ろした。

シュガシュガシュガシュガシュガシュガシュガシュガ  
ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

さすが結斗と言つべきか無数の氷塊をハーケンで叩き伏せていた。  
しかし氷塊の物量が増さり、一斉に氷に囲まれ、結斗の姿は見えなくなつてしまった。

シューーーーーー

氷塊が沈黙する音が空気を刺す。それになのはらは、固唾を呑んで見る。

氷塊の中心部を……  
そこには……

は「いないやてっ!!!???」

氷塊の中には、結斗の姿はなかった。

結「やれやれ・・・凄い攻撃だったね・・・」

声は、はやての背後から聞こえた。そこには、掠り傷一つ無い結斗の姿。

は「ヘムダルでも駄目なんか・・・」

リ「結斗さん強すぎます〜〜〜」

落胆するはやてと嘆くリイン。

へたり込む二人を見て結斗は、次何をするのか全員の顔色を見る。

結「あれ？なのはは・・・」

彼が確認できたのは、フェイト、はやて、麗華のみであった。結斗の顔が冷めていく。そしてその時、

な「結斗君！！」



近くに寄ってきた麗華、はやて、フェイトに答えないのは。  
なのはたちの作戦は、こんなものだった。  
まず麗華となのはが牽制のスフィアを打ち込む。そしてそれに紛れてフェイトの攻撃ができるよう隙を作る。  
次にははやてが一気に畳み掛ける。  
そんな作戦だった。

しかしそれだけでは不安だった麗華たちは、最後にあえて遠距離専門のなのはを突撃させた。  
まさかなのはが突っ込んでくるとは思わないだろうという算段だったのだ。  
逆になのはのスタイルを知っていた結斗が、相手だったからこそ使えた手でもある。

やがて煙が晴れる……

結「……………はい、合格」

BJの右胸の部分を焦がされた結斗が立っていた。

な「やったあああああああ!!」

それを聞いたなのは、一番に感激したのであった。

N e x t t o T A L E 5 9 ! ! ! ! !

**T A L E 5 8 女の子達の成長（後書き）**

長いです。

本文にあったはやてちゃんのヘイムダルは、F o r c eを想像してください。

にしても書いてて思ったんですがほんと結斗君チートっすね。

ではまた次回



T A L E 5 9 日常part 2 (前書き)

あなたが遠い。近くにいるのに遠い。

私が見るのはあなたの背。

駆け上っていく大きな純白の翼を生やしたあなたの背中。

あなたはどこまで行ってしまっの？

麗華



目を瞑った状態で呟く結斗。

すると結斗を中心として竜巻の旋風に近い衝撃が走る。

その動きは、あまりの速さに赤い燐光を放ったように見えた。

スパンツ・・・ドサツ・・・

結斗を中心に半径10メートル程の距離に置いてあった十もの直径1mの木は、その中心から横一線に切り開かれる。

結「ふう・・・」

カチンッ

その光景に満足がいったのか、息をつき鈍く焰色に輝く焰龍を納刀する結斗。

途端に彼を覆っていた、ピンと張り詰めていた空気が和らいでいく。それを見計らった右耳と左耳のピアスから声が掛けられた。

焰「沙綾紅燐剣か・・・」

澁「いつ見ても凄まじい広範囲剣戟ですね・・・」

結「あは・・・そりゃあ広範囲専用の剣戟だからね」

笑顔を見せる結斗。

彼らが今話している、結斗が先ほどやって見せた技。

あれは白銀流奥義、飛燕の派生系のものである。

白銀流について改めて記述する。この流派の開祖は、デバイス二人と歓談をしている白銀結斗である。

白銀流は、開祖：結斗が存命中のため今尚、成長を続けている。

結斗の進化が流派の成長なのだ。

この流派には、使える武器が多々ある。

刀、槍、正棒、薙刀など、言ってしまうえば武器と呼ばれるものは、全て習うことが可能である。

それぞれの武器によって剣術、抜刀術と別れていくのだが、その前に奥義について説明しよう。

白銀流には、奥義が存在する。

その奥義の中でも、習熟度が一番低いとされるのは、飛燕と呼ばれる奥義である。

この飛燕という技は、単なる衝撃波でしかない。よってどの武器を

手にしても最初に習う技は、飛燕なのである。一見ただの衝撃波と思われたかも知れないがそれは大きな間違いである。飛燕のその本懐は、枝別れするように分かれる派生系にある。つまり飛燕は、全ての奥義、技の基本、基盤・・・土台とされているわけなのだ。そのため飛燕なしでは、白銀流は有り得ないのである。

話しを戻そう・・・飛燕の派生系は、多く広がり、現在それぞれの武器に最低十種類ほどある。

今結斗が行った沙綾紅燐剣とは、刀術飛燕の派生系のもの。五つあるレベルの内の上から二番目に習得が困難とされている。

焰「そういえば、ゆう。なのはや麗華達から何を言われたのじゃ？」

結「？・・・ああ、昨日のね。なんかみんなして僕に詰め寄ってきて言うんだ・・・」

澁「何てですか？」

結「き・・・なんとかだつて・・・なんだろう？」

焰「き？・・・気、木・・・なんじゃそれは？」

結「さあ？あとそうだな～みんなして顔が真っ赤だったよ。みんな

なして風邪かな？」

次に発せられた言葉で、ハッと息を呑む瀨と焰美。

瀨「ゆう様……」

結「ん？分かったの、瀨？」

瀨「いえ……その……本当に分からないのですか？」

ジト目で見ると瀨。珍しく煮え切らない態度をとる瀨を疑問に思う結斗。しかし思い当たることがなく、疑問が残るばかり。  
そのため答えは……

結「全然……全く……」

ふるふると首を横に振る。

あっさりと答える結斗にごまかしている様子は無い。それを瀨と焰美は感じ取った。

瀨「今ほどゆう様の鈍さを嬉しく思った事はございません……」お

そらくなのは様達が言いたかった事は、キスのことでしょう。でも  
恥ずかしくて言えなかった様ですが」

焰「うむ。本当じゃ。(キスカ……。そういえば我一度もゆうと  
キスをしておらぬわ)」

結「????」

しきりに首を傾げる結斗であった。

AM7:55

朝から女の子は、不思議な事ばかりだ……。と考えた結斗。彼は今、  
麗華とともにバス停までを腕に力をかけられながら歩いていた。ま  
だ袖を通して間もない彼らのチョコレート色の制服は、輝いている  
ようにみえる。

——中学生にしてはスカートの丈短くないかな？

思春期の男子なら全く正反対の事を思っているであろうことを、結斗は考えていた。

麗「ゆう～～な～～に考えてるの～～？」

結斗が制服について思考していると、右肩から麗華の間延びた声がした。

なぜ肩から声がしたのかというと、今現在結斗の右腕に抱きつき、頭を肩にのっける感じにいるからである。そうなると必然的に抱きつく形となる。先程腕にかかる力とは、麗華のことである。よって成長したものが当たる。もちろん麗華は、それを承知でやっていたのであった。

どこからどうみても恋人のそれである。

結「ん？麗華が・・・可愛くなったな～～って思ったただけだよ」

麗「かつかわっ！！！！」

素直に褒められた事が嬉しかったのか動揺する麗華。

面と言われると嬉しく思う麗華。ただこれは結斗に限ったもので他の男に言われてもこんな事にはならない。



結「そう言えば……」

麗「？」

結斗が告げたことに火照る顔を抑えながら？を浮かべる麗華。

結「麗華、彼氏作らないの？」

麗「……………」

焰・瀨「あちゃ〜〜」

黙る麗華。それにあ〜〜あと言った感じのデバイス達。

鏡「どうして結斗は、そこだけは駄目なの……………」

麗華の胸元にあった白い宝石、鏡月が呆れる。鈍感スキルを大いに発揮した結斗。

再び今朝と同じような沈黙が、二人を学校へ誘う道に続いたのであった。

はやてside

は「ん・・・よしっ！今日も絶対調や」

ヴィ「んん・・・はやて・・・おはよう・・・ふわあ〜」

自分の部屋にある鏡台で姿を確認しながら一人愚痴る私。

それは昨日一緒に寝ていたヴィータに聞こえてしまったようで、起こしてしまったらしい。

まだ眠たいようで盛大な欠伸をかいている。そんなヴィータを可愛らしく思いながら、数日前から私の服となった聖祥大付属中学の制服に袖を通す。

ヴィ「はやて〜今日、ご機嫌だな。何かあったの？」

「ーおっと私とした事が顔に出てたかいな。」

昨日の事で頬が緩んでいたらしくヴィータからそつなく聞かれた。

は「んん」もしかしたら今日、私は大人の階段を登るかも知れない  
ってことや、キスでな・・・／／／／／

ヴィ「？・・・ああ」結斗の事か。ほんとはやては結斗が好きだ  
な」

昨日の結斗君の事をヴィータたちには、既に伝えてある。もちろん  
願い事を一つ叶えて貰えるって事もやで。

は「もちろんや。だって私の初恋の相手やで？強いし、優しいし、  
かっこいいし。それに頼りになるからな」

ヴィ「まあ確かにな」

は「ヴィータは・・・その・・・結斗君が家族になったら嬉しい？」

ヴィ「そりゃあ、もちろん。あたし達の事件の時は、命懸けではや  
てを助けてくれたんだ。異論なんてないぜ？」

は「ちやうちやう・・・それを抜きにして結斗君が私に相應しいか

ってことや」

ヴィ「難しい事聞くな……。んんんあたしも素直に嬉しいかな？  
だって頼れる兄貴みただし。料理もギガうまだしな！」

は「ぶつ……。あははは。やっぱりヴィータは、かわええなあ〜」

ヴィータの純真な言葉が可愛くて私は思わず抱きついた。  
すっばりと収まるヴィータの身体は、やっぱり抱き心地が最高や〜。

ヴィ「は……。はやて〜こんなことしてる場合じゃないんじゃない〜」

は「しまった！！今何時や!？」

ヴィ「7時30分……」

は「ぎりぎりやー!ーやばい、いくわっ!」

急いで私は、部屋を出る。

ヴィ「いつてらっしや〜い〜い」

階段を駆け下りている時、ヴィータの声が聞こえた。  
私は靴を履き、勢いよく外光に身を投じた。

はやてside out

聖祥大付属中学校――

フエイトside

理科教「え〜」なので・・・全ての物質には、炭素が含まれており・・・」

中年の白衣を着た理科の教師の話が私の耳に、入り込む。しかし今の私に、それを聞く余地は無かった。その原因である正面の人に目を向ける。

結「」

鼻歌を歌いながら、先生の話しを聞き淀みなく手を動かす。すると綺麗な字がノートに、先生の言った事や重要な事が埋められていく。理科の授業は、四人班で受ける事となっている。私の班には、私、結斗、姉さん、それとなのはとなっている。その班で実験をやったりする。

理科教「ここでは、この物質を有機物と言います。他に炭素がない、燃えないものを無機物と言います。（先生！）はい、結斗君」

先生が話しているところ私の目の前で、手を挙げられた。それをニコニコと答える先生。

結斗は、いつもこのような感じで先生に良い印象を持たれている。分からない事があればすぐに聞く。

これは一見簡単なようで難しい。なぜならどうしても恥ずかしく思ったりして、授業中に聞くのは考えられないのだ。

結「質問なのですが・・・炭素を含むものを有機物と言うのは理解しました。ならば炭素の集合体は、どのように判断すればいいのでしょうか？」

理科教「ふむ・・・そうですね。結斗君の意見は最もでしょう。ちなみにみなさん。今の質問の意味が分かりましたか？」

先生が結斗以外の私達に尋ねる。それに無言のみんな。というよりさっぱり分かんない。私も含めて・・・

理科教「う〜くん、いい質問なのですがね……。いいでしょう解説します。結斗君が言った事を分かりやすく例を挙げるなら、ダイヤモンドですね」

ダイヤモンド……確か黒鉛の集合体。物質の中で最も硬度のある物質で宝石として価値がある。だったかな？  
……ああ、なるほど！だから……

理科教「おや？分かった方が数人いらつしやいますね。そうです、ダイヤモンドは、確かに黒鉛の集合体なのですが燃えないのです。だから疑問に思った、そうですね？結斗君」

結「はい……」

理科教「分かりました、解説しましょう……そもそも……」

再び先生が自分だけの世界に入ってしまった。この先生授業が分かりやすいんだけど、自分の世界にはいると私達にお構いなしに喋っていつちやうんだ。

そして結斗もさっきと同じようにノートに向かう。

……はあ……いつになったら結斗とキスできるのかな？

溜息を吐く私。昨日のご褒美で言おうとはしたんだ。でも恥ずかしくなっちゃって結局言えなかった。それはなのはとはやても。

フェ「ねえ・・・姉さん・・・」

隣に座る私と同じ容姿で色違いの瞳をした姉さんに声掛ける。

アリ「何々・・・？フェイト・・・」

フェ「姉さんは、結斗とキスした？」

アリ「っ！！！！／／／／／い、いきなり何？」

ひどく驚いた姉さん。

これは・・・

フェ「したんだね・・・」

ついじと目で見てしまう。

アリ「でもでもっ！あれは、夢の中だし・・・」

フェ「ゆめ・・・ね」

アリ「そうだよ・・・／／／／」

フェ「いいなあ、夢でもキスしたんだ・・・」

アリ「フェイトは、ゆう君にキスがしたいの？」



フェ「えっ？そ、そりゃあ好きな男の子だし／／／」

本人を目の前にしてこの会話。その本人は……

結「……ん？んっ」

フェ・アリ「／／／／／」

私達の視線に気づいたのか、伺い見て優しく微笑んだ。そして再び先生の話しに注目したのであった。

結斗の微笑んだ顔に顔を赤くする私達。

あゝあ……早く結斗この気持ちに気づいてくれないかな？

フェイトside out

同日PM2:15

現在結斗達のクラスは、五限目のHRを受けている。教壇にいるのは、相変わらずの千恵。命一杯背伸びをしてようやく黒板の中間あたりに文字を書く事が出来る。

そんな微笑ましい光景をクラスで温かい目で見ながら、結斗達1 - Bクラスは千恵の話しを聞いていたのであった。

千「来週から球技大会が始まります。よってこのHRで何に出場するのか決めないといけないのです」

やっと球技大会という字を書き終えた千恵。

は「ちゅちゃん、競技は何なんですか？」

千「はやてちゃん・・・はあ。えつと競技は、バスケット、サッカー、バレー、テニスです」

はやてに愛称で呼ばれた事に溜息を吐きながらも競技を発表した千恵。

ア「四種目・・・」

千「はい〜それじゃあみんな選んでね〜」

パンツ

千恵の手を叩く音とともにクラス中が、どれにするなどの相談を持ちかけ始めた。

な「ねえ、結斗君はどれにするの？」

なのはは、一番気にかかっている結斗の所在を聞く。  
それに結斗は、眠そうに目を擦りながら答える。

結「ううん。僕は・・・バスケットかサッカーかな・・・」

す「結斗君、眠いの？」

HRとはいえ眠たそうにしている、結斗を珍しく思ったさすが結斗に言う。

それにこれまた眠そうに答える結斗。

結「うん、ちょっと・・・」

やがてその背中が徐々に丸まっていき、机に完全に突っ伏す結斗。周辺に座っている麗華、なのは、フェイト、アリシア、はやて、すずか、アリサがそれに気づいた。

アリ「ゆづくくくん?」

後ろに座っていた・・・アリスアの声が掛かる。

結「くうく・・・くうく・・・」

しかしそれに帰ってきたのは、可愛らしい寝息であった。

フェ「ちよつと結斗ってば!」

そんな結斗に小声で結斗の肩を揺するフェイト。しかし一向に起きる気配を見せない結斗。

麗「待つて、フェイト」

フェ「え、麗華?」

そこで反対の席に座る麗華が待ったをかける。

麗「しゅしゅ!み、見なさいよ・・・こ、このゆづの無垢な寝顔  
／／／／」

鼻息を荒くし、結斗をつつとりとした表情で見る麗華。

そのちよつと引く様子に尻込みしたフェイトだが、

フェ「!!!!!!」

結斗の端正な顔を見ると雷鳴を打たれた心地がした。

フェ「か、かわいい／＼／＼」

普段大人びた雰囲気醸し出している表情からは、正反対のあどけなさ、それも赤ん坊のような無垢で気持良さそうに眠っていた。

パシャツ

その時、携帯のフラッシュ音が鳴り響く。

麗「こんなレア画像は、永久保存しとかなきゃ  
（れ・い・かちや  
く〜ん？）あ・・・千恵ちゃん・・・」

油断した麗華が、携帯を使っていた事を千恵にばれた。このまま謝るかと周りのみなが思ったのだが・・・

麗「千恵ちゃんも見てよ!!!このゆづのあどけない寝顔」

千恵の服を引っ張り、結斗の顔を見させよつとする麗華。

千「ちよつ麗華ちゃん、私そんなことしてる場・・・あ・・・い、じゃ・・・」

始めは強気に言っていた千恵の言葉が段々と薄れるかのように小さくなった。

そして下を向いたまま、動かなくなってしまった。

ア「あの・・・千恵先生？（かわいい~~~~~!!!(へっ?)

不安になったアリサが呼びかける。

すると彼女の声を、興奮した千恵が掻き消した。

それに啞然とするアリサを含めたクラスの面々。

そして千恵も麗華と同じように携帯を構え始める。

それはまるで戦闘行つような雰囲気であった。

千「かわいいわ~~~~!!私、可愛いには弱いよ~~~~!!ほらっ!みんなも見てみなよ」

どうやら千恵という人は、シヨタな人のようだ。

は「千恵ちゃん・・・授業中やで〜・・・っ！！！！」っ、これは  
「！！」

アリシアの隣の席を立つはやて。しかしはやても結斗の表情を見た  
途端、フェイトのように表情を一変させ、手に携帯を持つ。  
それからみんなして結斗の寝顔を見ると携帯を持ち始めたのであつ  
た。

ちなみに撮影された写真、または動画は聖祥大中学きつての高値で  
売買されたそうなの・・・

P M 1 8 : 2 4

少しだけ日が落ちるのが、遅くなったこの時期。  
まだまだ街灯が無ければ、苦しいものがあるが街が夏先の雰囲気  
を取り戻そうとしている。

その街を一人の少年と六人の少女らが歩いていた。

結「ふわあ~~~~いつの間にか寝ちゃってたし・・・」

大きな欠伸をかく結斗。

は「全くいいも・・・じゃなかった。駄目や無いか、寝とったら・・・」

頭を振り、言いかけたことは正反対のことを言っているはやて。その後、一番ノリノリに結斗の寝顔写真を激写していたのは、何を隠そうこのはやて嬢である。

はやて以外の少女らが全員ジト目ではやてをみる。

は「うっ！ええ、やる〜みんなだつて写真とつとつたんやから・・・」

麗・な・フェ・ア・す・アリ「うっ！！」

結「写真？」

麗「なっ何でもないよ〜あはは・・・」

耳聡い結斗に事の顛末を聞かれそうになってごまかす麗華。なのはらもちよつとした冷や汗をかいているのは、内緒だ。



結「ふう〜ん・変なみんな・・・（ね〜）ちょっといいかな〜そこのかわいい子達〜？」

足を止めていた事が、災いしたのか結斗の前から柄の悪そうな六人組の男達がやってくる。

服装は制服。どうやら違う中学の生徒らしい。

チ1「君達かわいいね〜ちょっとお茶しない？」

いかにもリーダーですと言っている様に、彼らの前を歩いていたチンピラの一人が麗華たちに目を向ける。

麗「結構よ。ほら、みんないきましょ？」

大したものではないと判断した麗華が呼びかける。  
なのはらが頷く。

チ2「そんな事言わずに・・・な〜」

するとリーダーの奴の隣にいたチンピラが一番前にいた結斗を触ろうした。

バンッ

チ2「痛ッ！」

殴るような音がして一瞬遅れてチンピラが手を押さえた。

麗「ゆづに触らないで・・・」

そこにはいつの間にか木刀を持った麗華がいた。

チ2「お〜〜いって〜。こいつ何しやがんだっ!!」

手をぶらぶらとさせながら言うチンピラ。

麗華にとってみれば一撃でチンピラの手の骨を砕くのは、造作も無いがさすがに公衆なのでやめたのであった。  
しかしそれが裏目にでた。

チ1「ちっ・・・先走るからそうなるんだ。おいっ！」

悪態を吐きながらリーダーが残りのチンピラに言い、麗華達を円状に囲った。

麗華は、内心焦った。自分一人だけなら楽勝だが、今はなのはたちもいるのだ。もちろんなのは、フェイト、はやては喧嘩より危険な

戦闘を経験しているがそれは魔法が使えた時である。いくら魔力が天才的でも魔法が使えなければ只の中学生の女の子たちである。

チ2「おら・・・どうした？さっきの威勢はどこいった・・・」

麗華に手をやられた奴が言ってきた。

ジリジリと詰め寄ってくる男達。

それにどンドン下がる麗華たち。

チ1「ふん・・・所詮いいところの女どもだ。つれてい）・・・  
さい）はっ？」

リーダーを遮る声。それは詰め下がっていた麗華たちの中心から聞こえた。

結「うる・・・さい・・・」

結斗であった。

なにやらご機嫌斜めである。

チ1「なんだ女。お前からやられたいか？（だから・・・うるさい  
つてば！！！！）ゴハッ」

バアン

またもやリーダーの言葉が遮られその瞬間には、リーダーが吹っ飛んでいた。

結「人が・・・少しだけ眠れそうだったのに・・・」

やったのはもちろん結斗。

チンピラが来る前、起きていたのだが限界が来て立ったまま寝てしまっていたのだ。

麗「あゝあゆうに言っちゃった。女って・・・」

ドガツ・・・バキツ・・・バコオンツ

それから不機嫌な結斗は、チンピラをしばき倒したのであった。

? 「ちつ……ミスつちまつた……」

毒吐く男。彼は、今倒れていた。周りに人気はない。

彼の黒い衣服は、腹の部分から真つ赤な鮮血に色取られていく。服に血が染み出すことで、彼の生命としての力が磨耗されていく。

? 「くつ……はあ……はあ……」

汚い地面に転がる男。既に彼の、目に光は無い。呼吸をするのに精一杯な状態である。

? 「……悪い……ティア……ごめんな……。……」  
・結斗……ティアをたの……。む……。」

唯一の肉親の名前を吐き、最も信頼の置ける小さな執務官に託した言葉が彼の最後の言葉であった。  
そして彼の生命としての活動は、静かに止まった。

N e x t t o T A L E 6 0 ! ! ! ! !



TALE59 日常part2 (後書き)

前回に続いて今回も前書きで詩みたいなの書いてみました。  
ようわかりませんが心情が知ってもらえればいいかな？  
いつまで続くかは未定です。

今回はやばいくらいに崩壊しました。  
かんそー待ってます〜

ではでは〜

TALE 60 小さな炎（前書き）

最初会った時は、只のマスターであった。  
しかし我は、惚れた。あいつの生き様に。

我はあいつがマスターということが  
誇らしい。

あいつのためなら我は、幾千の剣となろう。  
焰美



## TALE 60 小さな炎

結「……よしっ！書類整理終わり！」

白銀結斗は、背もたれのあるイスの上で手を高く挙げ伸びをする。

今彼のいる場所は、第一管理世界ミッドの執務室。

基本執務官には、それぞれ執務室が与えられている。ベッドやお風呂、冷蔵庫、キッチンまで完備してあり生活すら出来るほどの部屋である。

しかも結斗の部屋は、通常の執務官の部屋よりも二倍の大きさとなっていた。これは、彼が三提督、地上本部の直属なところが大きく関係していた。

アリ「お疲れ様〜ゆづ君」

結斗を労わる声があった。

彼のユニゾンデバイス、アリシア・テストロツサ・ハラオウンである。

アリシアは、キッチンで作ったコーヒーを四つ、お盆に載せ結斗の下へやってくる。

結「ありがと、アリシア。焰美、澁も休憩しよう？」

焰・静「うむ……」「はい……」

三人は、アリシアからコーヒーを受け取り、来賓用のソファに腰掛ける。

しばし、コーヒーを飲むために無言となった。ただその無言は、言葉が出ないという沈黙ではなく、単にコーヒーの味を楽しむためのものであった。

アリ「どう？ゆう君……手掛かり見つかった？」

半分ほどまでコーヒーを飲んだアリシアが結斗に尋ねた。

それに結斗は、俯きながら左右に首を振る。

結「ううん……だめ。なのはの時以降、僕たちのことを警戒してなのか手掛かりが皆無だ……」

アリ「そっか……」

焰「しかし妙ではないか？」

アリ「何が？」

焰「我等は、三提督、そして地上本部の直属じゃ。知ろつと思えば知れない情報は、無い。にも拘らず……」

澁「情報が無い……」

アリ「……確かに。ということば……」

結「誰かが情報の隠滅をしている……管理局誰かが」

焰「そう考えるのが妥当じゃろつ」

結「やつぱ管理局か……」

複雑な気持の結斗。仮とはいえ自分の所属する組織に不正を働いている輩がいるからだ。

結「まだ力が足りないか……」

その管理局を暴くのに、父京二を殺した犯人の手掛かりを掴むに

も現在の力では遠く及ばないことを呟く。  
その後、少し冷めたコーヒーをもう一度口に含む。

ピピッ

結「？緊急通信……」

アリ「誰だろ？」

焰・瀨「？」

突如緊急を知らせるモニターが現れた。

結斗を含めた四人は首を傾げるが、とりあえずと通信にでる結斗。  
その主は……

結「クロノ？……はい、結斗です……」

ク>繋がったっ！結斗！！<

通信の相手は、フェイトとアリシアの義兄クロノであった。  
焦ったクロノの様子にアリシアも何かあったのかとそわそわしはじめる。

結「どうしたの？そんなに慌てて？」

緊急回線での通信にただ事ではないと思いながら、焦るクロノに問う結斗。

ク>結斗・・・落ち着いて聞いてくれ・・・<

暗い声で落ち着くよう言い聞かせるクロノ。疑問に思いながらも、クロノの言われたとおり冷静に落ち着く結斗。  
やがてクロノが意を決したように言った。

ティードダ執務官が・・・亡くなった・・・

結「……は？……ちょっと、クロノ……性質の悪い冗談やめてよ。ティードさんが？」

ク>事実だ……先程、遺体がミッドに引き渡された……<

結「……」

クロノの言葉に声が出ない結斗。

ク>現在原因を調べている。それで……<

淡々と述べていくクロノ。クロノにとってはこのような事例は、今まで多々あった。しかし結斗は、違い身近で人を失ったのは、二人目である。

そのためショックが大きい。

結斗は、クロノからの報告を聞いているがそれを頭が拒絶するかのように、頭に全く言葉が残らなかった。

ク>以上だ……葬儀は、今日の午後。ミッドの墓場で行われるく

結「わかった……」

プチッ

モニターを切り、伏せる結斗。

結斗の様子にアリシア達が寄ってくる。

アリ「ゆう君……ティードさんに何が……？」

結「……ティードさんが……亡くなった……」

アリ・焰・瀨「っ!?!」

驚愕する三人。

上を向き、必死に涙が流れないようにする結斗。しかしそれは後か

ら後から溢れてきて、ティータとの思い出を嫌が応にも追憶させる。やがて三人は、結斗に抱きつく。漣は、左。焰美は、右。アリシアは、正面から抱きついた。結斗は、関わりを持つ人との繋がりや他人よりも、ずっと大切にしている傾向がある。それは元の両親の件が大きく関わっている。

三人は何も言わなかった。

それが結斗は、嬉しかった。

それから結斗は、アリシア達に抱きしめられながら、ティータに弔いの涙を捧げたのであった。

P M 1 4 : 0 0

――ミッド――墓場

静粛な音が流れる。それは弔いの歌。別れの歌。生人から死人への



鎮魂歌。

その歌の中心部に、一人の年端もいかなない女の子が立っていた。オレンジ色の髪の下は、涙で一杯であった。

彼女の名は、ティアナ・ランスター。葬儀の故人ティード・ランスターの妹に当たる。

彼女の側には、誰もいない。只一人の肉親だったのだ。それがより一層彼女に、涙の跡を作らせた。

多くとは言えない友人が見守る中、ティードは棺桶の丁寧に入れられた。

やがて葬儀が終わり、みなが帰途の道に足を運ぼうとした時、声が差し向けられた。

？「全くなんたる失態だ・・・」

？「ああ。執務官がこの体たらく。死んでも任務をこなすべきだったのだ・・・役立たずめ・・・」

ティア「兄さんは、役立たずじゃない!!!」

心無い言葉が兄に向けられてティアナは、思わず大声で叫んだ。

二人は、提督の制服を身に纏っていた。

叫び声は、その二人の提督に届き、踵を返しながらティアナへ言い返す。

提1「お前の兄は、役立たずだ。なにせ任務に失敗したのだからな」

提2「ああ。任務は絶対だ、死んでも遂行しなければならない。だが貴様の兄は、失敗した。役立たずといって何が悪い・・・？」

二人の提督が吐いた言葉がティアナの心を抉る。

しかし兄の侮辱は許せなかった。何も言えない兄さんに悪口を言うなんて、卑怯だと思ったからだ。

だからさつきよりも大きく叫んだ・・・

ティア「兄さんは、強いのっ！役立たずなんかじゃない！！」

涙を溜めながら叫ぶティアナ。それに対し、二人の提督は叫ぶしか出来ない子供ということしか映らなかった。そのためティアナの存在が目に残り、

提1「ふん・・・目障りだ・・・いくぞ」

提2「ああ」

やがて二人の提督は、ティアナに背を向ける。  
背を向けた後も、二人はティーダへの侮辱をやめない。

ティア「兄さんは、役立たずじゃない・・兄さんは、役立たずじゃない!!!!」

それを見たティアナは、ポケットに入っていた小型のナイフを出す。

「許せない。兄さんを馬鹿にした奴は・・」

ティアナ目に、憤怒の色が宿る。そして躊躇い無く、ナイフを両手に込め、離れている提督二人の内、一人の右わき腹に狙いを定めた。

ティア「兄さんは、無能じゃない!!!!!!!!!!」

叫びながらティアナは、突き進んでいった。

提督「!!!!」

それに気づいた今にもナイフで刺されそうになっている提督は、避けることは叶わなかった。

ドスツ……………ビチャ……………

ナイフを伝って血が地面に落ちる。ティアナが目を開け、ナイフの先を見る。

？「くっ……」

刃に晒されたのは、黒コートを身に纏った男の右掌だった。

提1「おいつ！！こいつを取り押さえろ！！殺人未遂だ！！」

命が狙われた事に今更気づき、叱責をする提督。

ティア「ああ……あああ……」

「……わ、私……人を刺した……？……」

今更に自分の犯したことに動揺するティアナ。

提2「早く取り押さえろ！！（ちよつと待ってください……）なんだっ！」

もう一人の提督が怒鳴りだす。しかしそれを止めるものがいた。

黒コートの男である。

彼の右手は、血が溢れかえり、見るに堪えない状態だ。今も尚血が流れ、下へばたばたと流れている。

しかし黒コートはそんなことお構いなしに言う。

？「あなたがたは、怪我されていないでしょう。この子も動揺していたようだけですから許してあげれば・・・」

傷の痛みに堪えながら言う黒コート。

提「な、何を馬鹿な事を言っているっ？こいつは、私達を殺そうとしたのだ！提督の私達をだぞ？殺されても文句は言えまい！！」

鬼の形相で黒コートに食って掛かる提督の一人。

その言葉に黒コートの纏う空気が一変した。

？「そもそも・・・あなたたちがティードさんを冒流したのが原因では？」

冷たい、凍えるような声色で告げる。

黒コートの言葉に苦虫をかみ締めたような表情をする提督二人。

提督「う、うるさい！私達は提督なのだ、民間人一人くらいどうにでもなる！」

……シューーン

提督のその言葉により大気の温度が下がった。提督らは、その時々と気づいた。大気が冷えたのは、黒コートが原因だと。しかしにも拘らず我を通そうとするが

？「……お前ら……いい加減にしろよ……。そもそも提督がそれほど偉いのか？」

黒コートの言葉で一蹴される。

提督「当たり前だろう！貴様一体なんなのだ？」

？「……」

無言で黒コートは、自身の階級を一人だけに見せた。

局1・局2「っ！！！！」

二人が驚く。

？「・・・明日も仕事がいりたかったら。さっさといけ。僕の視界から消える・・・」

提1・提2「くっ・・・」

悔しそうに顔を歪めながら提督の二人は、その場を後にした。

？「痛～～～～」

一瞬の沈黙の後、黒コートが右手を押さえながら蹲る。  
駆け寄るティアナ。



ティア「あ．．あのっ！すみません！！」

？「ああ．．．いいよ。あいつらの言った事は間違いだ。君が正しい。ただナイフは、駄目だね．．．」

ティア「す、すみません．．．あの！家に来てください！治療します」

？「いいよ、別に．．．（駄目だよ！！）アリシア．．．」

コートを翻し、その場を後にしようとしたがそれは、背後からやってくる三人に遮られた。

アリ「治療しなきゃ駄目！ばい菌とか入ったらどうするの？」

？「．．．．．」

黙る黒コート。

焰「言い返せないことがあると、いつもすぐに黙るのじゃから．．．

」

漣「ははは・・・」

ティア「あの・・・あなたたちは・・・」

おずおずと尋ねるティアナ。

命の恩人の、黒コートの知り合いという事で少し萎縮してしまっているようだ。

アリ「私は、アリシア・テストロッサ・ハラオウン。この子のユニゾンデバイスです」

黒コートを指差すアリシア。

焰「焰美じゃ・・・まあ知り合いじゃな」

漣「漣です。焰美と同じく知り合いですね・・・」

ティア「アリシアさん・・・焰美さん・・・漣さん・・・?」

順に名前を呼び、気掛かりがあったのか首を傾げるティアナ。

ティアナは、焰美、瀨の二人はともかく、アリシア・テストロッサ・ハラオウンの名に聞き覚えがあった。そしてふと思い出したかのように……

ティア「あ、あの人のパートナーの……じゃっじゃあ!!!」

叫び、黒コートをみる。

そいつは、観念したかのようにフードを取った。

ティ「っ!!!」カドラ 双刀双銃」

現れたのは、大人しそうな小顔。しかしそれは落ち着いている故。見惚れるティアナ

結「……はじめまして、ティアナちゃん。白銀結斗です」

ミッド中心街・ランスターの家

ティアナに案内されるまま、結斗、アリシア、焰美、澪はその後についていった。辿りついたのは、ミッドの中心街にあるマンション。ティエダが埋葬されている墓からそれ程、遠くではない距離にあった。

案内をしている最中、ティアナはしきりに結斗らの存在を気にしてビクビクとしているのに結斗らは気づいていない。

アリ「（ティアナちゃんかわいい〜）」

一部の子が全く違うことを考えていた。当の原因である結斗は、ティアナのビクビクのように悪い事をしたかなあ・・・と思いつんでいたそうなの・・・。

ガチャン

マンションに入り、玄関の扉が閉まる。通路を抜け、そこには綺麗にされた空間があった。ガラスの机、それを囲うように少々くたびれた様子で向かい合う二つのソファ。

しかしそれらにはティエダとティアナが暮らしていたという温かみを思わせた。

それを見た結斗は、とりあえずとソファに座る。アリシア、焰美、澪はそれに控えるように立った。

やがて人数分の飲み物を持ちやってきたティアナ。そして結斗の対面にあつたソファに座つた。

ティ「あの・・・傷の方は・・・」

結「ああ・・・うん、大丈夫だよ。さっきアリシアに少し治療してもらつたから」

ティ「でも・・・」

納得できないティアナ。

結「ん〜じやあ絆創膏あるかな？」

ティ「あ、はい!」

そういつてパタパタと通路の方へいき、一つの絆創膏を持ってきた。それを結斗の傷口に張つた。傷口の方は既に治りかけていて傷跡も少しだけであつた。

ティアナは、たつた三十分ほどでここまでの治療をした結斗お付の金髪の子に驚愕した。

アリ「あ〜私ね・・・治療は得意なんだ」

ティアナの視線に気づいたアリシアが付け加えるように言った。その答えを聞き、再びティアナはソファへと座る。

ティ「それで・・・どうして双刀双銃カドラのあなたが・・・」

双刀双銃カドラ・・・結斗に付けられた通り名。

変幻自在に両手の刀と銃を扱ったため、名づけられた。

意を決して告げるティアナ。

ティアナの質問に答えるのを先にする。

結「君のお兄さんがどんな仕事をしていたか知っているかな？」

穏やかな声・・・最初に聞いた時も思ったが、あらためてティアナは実感する。

「私とは5くらいだけ違うだけでこんな表情が出来るの。」

ティ「執務官・・・ですよね・・・」

結「うん・・・ティアナちゃんも知って通り、ティーダさんは執務官だ。それは僕も認めている・・・」

ティ「兄を知っているんですか？」

結「うん・・・知ってるよ。なんせ僕の執務官認定試験の試験管は、ティーダさんだったんだ。それに色々なことを教えてもらったしね・・・」

ティ「兄さんが・・・」

ポツリというティアナ。兄が世間で有名な双刀双銃カドラと知り合いのためだった。

結「ティーダさんは、優秀な人だった。堅実な銃。それをサポートする戦術。ティーダさんから僕は、様々な事を学ばせてもらったよ。だからさっきの提督どもの言った事は、狂言だし、只の嫉妬だ。だから気にしないほうがいい・・・ね？」

ティ「・・・はい・・・」

しばしの沈黙。

ティ「あの・・・それで・・・」

空気に堪えられなかったのか、聞くティアナ。

結「ああ、うん。分かっていると思うけど僕は、葬儀だけのために来たわけじゃない。用件はティアナちゃん・・・君の事だ・・・」

ティ「私の？」

焰「ティアナ、お前さん知り合いとかおらぬのだろうか？」

結斗の背後に控えていて部屋の壁にもたれ掛かっていた焰美が尋ねる。

ティ「えっ・・・あ、はい。私には、兄さんしかいなかったから・・・」

澁「これからどうするのですか？」

今度は澁が聞く。



ティ「それは……一人で暮らしていきます……」

アリ「……ねえ、ティアナちゃん。一人は寂しいよ」

ティ「……」

黙るティアナ。

結「ティアナちゃん。もしよかったらでけど……僕らと家族にならない？」

ティ「えっ？……どうして……」

いきなりの言葉に動揺するティアナ。

結「んんんティアナちゃんが心配だからかな？いくらティーダさんの妹とは言え、歳相応の女の子だしね……」

ティ「でも迷惑じゃ……」

結「そんなことないよ・・・断つてくれてもいい。それはティアナちゃん次第だ。ただ小学生のティアナちゃんが、生きていくのは厳しいだろうから僕が保護者・・・後見人という形になるね」

長い結斗の話しに理解しようと考えるティアナ。

ティ「あの白銀さん（結斗でいいよ）結斗さん・・・どうして他人の私のためにここまでしてくださるんですか？」

結「・・・ティアナちゃんならいいかな？」

ティ「？」

結「実はね、僕捨てられたんだ実の親に・・・」

ティ「っ！」

結「詳しくは省くけど、僕の元の両親は魔法が使えない一般人だった。だけど僕は違った。

だからあの人らにとっては恐怖の対象になっちゃったってわけさ」

結斗の話しが事実かアリシアらに目を向けるティアナ。  
三人は、悔しそうに頷く。

焰「事実じゃ。あいつらは、ゆうをまるで化け物のようにみたんじや」

再び結斗へ視線を戻す。

結「・・・だから今のティアナちゃんの一人ぼっちの気持ちは、少しだけ分かるよ。だから見てるだけなんてできないんだ」

ー結斗さんは、純粹にそう思ってる。私が心配で。

ティアナは、結斗のどこか不安そうで真摯な目をみてそう判断した。だからティアナの決断にそう時間は、掛からなかった。

ティ「結斗さん・・・」

結「何かな？」

ティ「私・兄さんみたいな執務官になりたい。でも一人じゃどうしていいか分からないです・だから・その・」

結「うん・落ち着いて言ってみて・」

ティ「・・・力を貸してもらって良いですか？」

結「ティアナちゃんはその夢を見失わずにいるなら僕は、力になるよ、いつまでもね」

ティ「ありがとうございます！」

結「お礼なんていいよ。それと敬語もね。僕らはもう家族なんだ。困った事があればいつでも相談して、力になるよ」

ティ「はい・・・」

未だ早鐘のように緊張する心臓を落ち着かせるティアナ。にしてもと改めて考えてみる。

「――双刀双銃カトラの結斗さんが家族……って考えてみれば凄い事だよね。

ティアナの言うとおり、結斗の通り名、双刀双銃カトラは大きな意味がある。

ミッドで、双刀双銃カトラの名を今や知らぬものはいない。若干13歳で全ての役職を持ち、その実力は管理局に類を見ないほどに凄まじく高いといわれている。

結「さてとっ……」

話しは終わりとはかりにソファーから立ち上がる結斗。もう帰っちゃうの？と、ティアナが残念そうな顔をする。

結「あっ！帰るんじゃないよ。お腹減らない？」

ティ「えっ？あ、はい……」

結「キッチン借りていいかな？」

ティ「どうぞ・・・」

呆気に取られたティアナは、適当に相槌を打つしかなかった。それを確認した結斗は羽織っていたコートをソファーへかけ、キッチンへ消えていく。

アリ「以外そうだね、ティアちゃん？」

ティアナが面白かったのかアリシアが話題を振る。

一瞬間おうか迷う素ぶりをしたが、意を決したように言った。

ティ「その・・・カトラ双刀双銃といわれるくらいの人だからー」

澁「ふふっ、気難しい人だと思いましたか？」

微笑む澁。

そして四人は、鼻歌を歌いながら料理を作る結斗に目を向ける。

焰「無縁の言葉じゃのう」

ティ「ごめんなさい」

焰「なぜ謝る？」

ティ「双刀双銃カトラの名前だけで怖い人だと思っちゃったから・・・」

焰「ティアは、優しいのう」

ティ「そ、そんなこと／＼／＼」

アリ「ん〜ん、優しいよ。ティアちゃんは、ゆう君を見てそう思ったんだから」

ティ「？」

首を傾げるティアナ。

いまいち分からないようだ。

瀨「要するにですね・・・ゆう様を名前だけで判断する方がいるのですよ」

「テイ……………」

つい結斗の様子を伺い見るティアナ。それに三人は苦笑しながら結斗の夕食を心待ちにするのであった。

Next to TALE 61!!!!!!



TALE 60 小さな炎（後書き）

というわけで今回はティアナちゃんが登場です！

悩みました。どうやって結斗君と絡ませるか・・・

なんとか書けました。

次回からは、お楽しみものを企画しております。

お楽しみを！！

ではBALDR SKYでした。

TALE 61 デート（はやて編）（前書き）

あの方は、私が最も敬愛し、尊敬し、愛しい人。

誰にでもその陽だまりの様な温かい優しさに目が離せない。

でも自分のことは疎かにしてばかり。だから私は、あの人に  
ついていく。どこまでも・・

静

TALE 61 デート（はせて編）

結斗がティアナを家族とした次の日。

ポーン

白銀邸の屋敷に來人を知らせる音が、朝食中の五人の耳に入る。五人とも食事の手を止めた。

美「こんな朝から誰かしら？」

結「さあ・・・」

麗「来たわね・・・」

澁「来たってなにがですか？」

焰「？」

四人が首を傾げる中、一人麗華だけは来客の正体が分かっているのか知った風な答えをした。しかしその表情は、おもしろくないといった悔しげな顔である。

麗華の変化にも疑問を覚えながらも、結斗は来客の対応をしようと席を立つたのであった。

ポーーーーーンポーーーーーン

連続でチャイムの音が鳴り響く。どうやら来客の人は、短気な方らしいね、と分析をしながら結斗は大きな木造の玄関を開け放つ。そこには………

は「結斗君……迎えにきたで……」

結「はやて？」

そこには笑顔満点のはやてが手を振っていた。  
とりあえずと状況を整理しようと努める結斗。しかし結斗にとって  
みれば、今日はやてと何かを約束した覚えはない。  
よっていくら考えてもその答えに辿りつくことは出来なかった。

は「  
」

悩ましげに唸っている結斗を、にこやかな微笑で待つはやて。それ  
はやはりと言ってもいいほどの、機嫌のいいものであった。

結「あの・・・ごめん。はやて。今日、僕何か約束してたっけ？」

仕方なしに本人に聞くという愚考を、犯さなければならなくなった  
結斗。

「――これが僕の落ち度だったら、失礼以外の何物でもないよね。」

は「ううん。私と結斗君今日は何も約束してへんよ〜」

ガクッ

あっけカランとのたもう大阪弁を喋る、女の子の答えに肩を落とす。

結「じゃ、じゃあどうして？何かあった？こんな朝早くから・・・」

苦笑いで聞き返す結斗。それに対しはやての顔は、先程よりも更に笑顔になった。

それも小悪魔的なものに・・・

は「結斗君、今日は何の日かいな？」

結「いきなり何？・・・え〜と、GWの最初の日・・・だね」

はやての質問の意図が分からず、困ったように答える。

今日はGWの最初の一日目である。今年は、なんと幸運なのか休みが土日と重なり、七連休という日本国民が微笑まずにはいられない習慣なのだ。

といっても結斗にとってみれば休みではないのだ。先日のティアナの養子の件であったり、執務官の仕事、教務官として研修生を教練したり、捜査官としての勉強もあつたりと多忙なGWを送る筈なのだ。

「・・・なんたる・・・はやての笑顔が無性に怖い。というより、この後の話を聞いてはいけない気がするの・・・」

ここで察知能力の高度な結斗は、うすうす身の危機を感じていた。

は「せやで……とらうわけで……デート行くで……！」

はい？

はやての言葉を理解するまで、少し硬直してしまっただ結斗であった。

は「それにしてもええ天気やな〜」

日差しが降り注ぐ、いつも歩きなれている街並みを見ながらはやてが言った。その隣には、

結「そうだね・・・GW中は、晴れるらしいよ」

結斗であった。はやてに連れ去られるように来てしまったのだ。そして驚いたことは、麗華が一言も何事も言わなかった事であった。いつもなら引き止めたり、ましてやはやてはデートと評していることのイベントに黙っているはずがないと思ったのだ。しかし麗華は、全くの無関心。

これが結斗にとっても、焰美と澪にとっても驚きでしかなかった。



むぎ〜〜・・ゆうが好きにされるのはムカつく〜〜!!!

そのとき丁度一人の女のこの叫びが上がったそうなの。

結「それで・・・はやてどうして僕を連れ出したの？それに焰美と  
滯まで同行禁止されちゃったし・・・」

結斗が愚痴るように言う。ここは管理外世界とはいえ、結斗は双刀  
双銃<sup>ドラ</sup>で有名な身だ。その彼が彼女達を置いてこなければならなかつ  
た。  
心中不安で仕方がないのだ。

・  
とはいえそこらのヤクザや危険な奴らよりも戦闘力は上なのだが・

は「さつきゆうたやん。デートや！ってだから私と二人きりで行っ  
てほしかったんよ・・・」

結「だからどうしていきなりそんなことを・・・」

は「いきなりやないで。みんなで決めた事や〜」

となりではやてが嬉しそうに言った。

結「・・・ま、まさか・・・」

はやての言葉に顔色が青くなる結斗。

は「ご察しのとおり、さすが結斗君や〜。私、なのはちゃん、フエイトちゃん、アリシアちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、麗華ちゃんやで・・・」

ーーだから麗華は黙ってたんだ。

麗華の態度にやっと納得がいった結斗。

結「・・・これってもしかしてこの前の願い事？」

結斗が一番に思いついた懸案を尋ねた。  
しかしそれに首をふるはやて。

は「ちやうちやう。これは三年前のや・・・」

結「三年前？」

的が外れて複雑な気分になった結斗だが、三年前という単語に今度は思考し始める。

は「ほら～～三年前。私らに心配かけたさかい、私達の家にお泊りするってやつ～～」

結「・・・・・・」

キ～～～～～～

ゆっくりはやてのいるところとは反対側に目を背けた結斗。その表情は、しまった～～～というものだった。

というより忘れていた模様。

は「まっ結斗君は、忘れてても構わへんよ。なんせ……（ニタニタ）私らが覚えてるからな〜」

ニタニタと再び小悪魔的な微笑みで言うてくるはやて。それに一息溜息を吐く結斗。

今更三年前のことを吹き返してきた、と疎ましく思ったからではない。

結斗が気づいたことそれは……

結「（じゃあこの前の願い事を一つ叶えるってやつ、未だ解消されていないってわけだよね……はあ……）」

もう一つの願い事であった。ということとは当然麗華やアリサたちも関わってくるわけで、結斗は人数×2の願い事を叶えなければならぬのだ。

——あのご褒美の話し早まったかな……。

少しだけ溜息をついてしまったのであった。

そんな結斗の様子に気づくはずもなく一方はやては……

は「（にしてもほんと結斗君かっこええわ〜）、今10時くらいやけど道行く女の人みんな結斗君に見惚れてるで・・・）」

心の中で一人愚痴っていた。

結「はやて・・・はやてつてば！」

は「わわっなんや？結斗君」

はやてに話しを聞かれていなかったのが、ちょっと不機嫌になる結斗。

結「それでこれからどうするの？」

は「デートっていうからには、ここは結斗君にエスコートを頼もうかと思ったんやけど・・・」

結「連れられるように来たんだから、無茶言わないでよ・・・」

はやての言葉に呆れる結斗。



騒がしい音や声が辺りから耳へと嫌が応にも入ってくる。

結「ここ？はやてが行きたかったって所は・・・」

隣のはやてに声を届かせるために、いつもより大きな声で叫ぶように言う結斗。

は「そうや～～私、ボウリングや～～」

結「へえ～～～～」

彼らが今いるところは、海鳴市のアミューズメントパークRound d5である。ここは、海鳴市で一番大きいアミューズメントパークで若者の足が堪えないところとしても有名である。

カラオケ、ボウリング、ゲームセンター、映画館、漫画喫茶、はたまたショッピングまでできる選り取りみどりなところなのだ。

は「にしても混んでるな～～～～混みすぎちゃっくん？」

辺り人ばかりの光景に圧倒されながら、率直な感想を述べるはやて。

結「まあこの時間帯だしね・・・あつはやて、あそこが受付みたいだ」

は「ほんまや。じゃあいくで！結斗君！」

ギョッ

指差したそれを確認したはやてが結斗の腕を掴みながら、受付へと向かう。

結「は、はやてのささやかな・・・ものが・・・／／／／／／／」

は「(うわあ〜成り行きとは言え、腕組んでしもうた・・・恥ずかしい／／／／／／／．．．でもやっぱり安心する)」

それぞれ突発的な行動で頭が沸騰するのを抑えながら、受付へと向かうのであった。



五分後――

17レーン

受付を済ませ、ボウリングのレーンへと入る結斗とはやて。

は「……………(むす……………)」

結「はやて……………機嫌直したら？」

眉間に皺を寄せるはやてに結斗が言う。

は「(誰のせいだっちゅ……………に!!)(別に私、機嫌悪くないもんっ  
「!

……………  
……………

明後日の方向を見ながら言うはやて。  
それにどうすればいいか分からない表情をする結斗。

はやてが不機嫌な理由は、受付の少し年上の女の人にある。受付で必要事項を書いている時に、不明な点を受付の女の人に聞いたのだが、しかし女の人から帰ってきたのは、結斗への熱い視線。そして我に返ったかと思うと、女の店員はあろうことが結斗を顔を寄せながらアプローチしたのだ。

後ろに控えていたはやてにとっては只事ではない。  
その場は、さっさと事項を書いてレーンをとってもらったのであった。

レーンに向かっている最中でも、女の店員の熱視線が後ろ姿の結斗を射抜いていた。

結「何が気に入らないのか分からないけど、今日ははやてとデート  
なんだからそんな顔しないで・・・ね？」

可愛らしく三つ編みの髪を翻し言う結斗。受付の女が結斗をロック  
オンしていたことは、結斗自身全く気づいていなかった。  
それに少しだけ安心するはやて。

は「せやな／＼／＼／（今日はデートや！心待ちにしとったんや。  
それを自分で悪くするのは、勿体ない）うん、ごめんな。結斗君、  
嫌な思いさせて・・・」

笑顔を取り戻すはやて。  
それに安心した結斗。

結「そんなことないよ。はやてが楽しいと思うデートができれば良いんだから」

は「ありがとな〜結斗君・・・」

この光景を隣のレーンの人たちは、バカカップルと思ったそうなの。

結「それで僕、ボウリングは初めてなんだけどはやてやったことある？」

は「そうなん？ちなみにあるで、なのはちゃんたちと行ったんや」

結斗の意外な言葉に目を丸くしながら答えるはやて。

結「そつか。じゃあ手本として見せてもらえる？」

そういつて結斗は、手をフィールドの方へ促してはやてに見本を見せてもらおうとする。

は「ええで・・・ちなみに私、なのはちゃんたちの中で一番上手いんやで、見とつてや？」

そういつてボールを取り出し、十本並ぶピンの正面に立った。やがて綺麗なフォームで、はやてはボールを放った。

ガコンッ

ボールは、綺麗な直線を描いて・・・

ガシャンッ

全てのピンを倒した。  
レインの上にあるスコアが表示されるパネルに、STRIKEとい  
う文字が眩しく点滅する。

結「すごいすごい！はやて上手いね〜」

子供のように手を叩き、はやてをもちはやす結斗。

は「うむうむ。苦しゅうないぞ〜」

結斗の隣に座りながら、満更でも無さそうに答えるはやて。好きな  
男の子に褒められて素直に嬉しいようだ。

結「じゃあ次は、僕かな？」

そういつて立つ結斗。

は「始めは気楽にいったほうがええで。余計な力が入ると、肩とか  
が悪くなる可能性があるからな〜」

結「なるほど……」

手をメガホンにした、はやての注意事項を聞きながら、先ほどのはやての立ち位置に立つ。  
その時……

ガコンッ

隣のレーンの若い男がストライクを取った。そのフォームは、綺麗なものであった。そして結斗の脳が閃いた。

結「この人のなら……」

結斗は、今の男がやったフォームを反芻する。

結「こんな……感じかなっ！」

ガコンッ

男と全く同じモーションで手からボールが離れ、美しい曲線を描きながら

ガシャンッ

中央のピンにドンピシャで命中し、全てピンが倒れた。

結「やった~~~~!! はやて、見て!」

初めてピンを倒した結斗が感動と共に、はやての下に戻ってきた。

は「ああ・・・さすが結斗君やな・・・ってどしてあんなフォームが出来るんや!? ほんまに初心者かいな?」

至極当然の疑問を尋ねるはやて

結「ああ、うん。初心者だよ。だからちよつと隣の人のフォームを真似させてもらったんだ。ただ・・・ちよつと無理があるね、このフォーム・・・」

は「隣の……って！！あれ有名なプロのボウラーやないか！」

無理があるのも当然である。はやてに言ったとおり、隣の男は、二十代後半のプロボウラーである。対して結斗は、十台。未だに発育途中な子供が、大人のフォームをやるうとするところかしら無理が発生するものだ。

結「そうなの？まあ後は、このフォームを自分のフォームにして……」

ぶつぶつと独り言を繰り返す結斗。

は「……ほんと相変わらずの規格外やね、結斗君……」

冷静に事を構える結斗に呆れる他なかつたはやてであった。



結「あ~~~~ふう。楽しかった。はやては、どうだった？」

騒がしいところから一転し、隣を歩くはやてに聞く結斗。

一通りボウリングを満喫した二人は、今公園の中を歩いていた。

は「も、もちろん楽しかったで・・・（あの後、結斗君は自分でフォームを作っちゃって、ほとんどストライクやったな）。隣のプロの人なんか涙目やったわ……。しかも受付の女も結斗君のスコア見て目をぱちくりしてたし……。」

先程のことを振り返るはやて。

それを傍目に結斗は、

結「えっと・・・それで今日は、ほんとに僕はやての家に泊まらな  
いといけないの?。」

再度問う。

は「もちろんや！ちなみに着替えとかは、麗華ちゃんに転送してもらったからな〜」

結「…………準備がよろしいことで……」

は「ふっふっふ。私は、備える女なんやで〜」

逃げ場がないと分かったことでがっくしと肩を落とす結斗に対し、これ以上にないくらいの笑顔のはやては、揃って家に向かった。

――八神家

は「ただいま〜〜」

結「お邪魔しま〜〜す」

元気よく帰ってきたが、帰ってきた返答は……

シーーーーーー

静寂であった。誰もいない空間。はやてにとっては、それは寂しいものであり、耐え難いものであった。しかし今の彼女の表情に暗いところは無い。

それはアイン、リイン、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラがこの家に帰ってきてくれると信じているからである。

「前は大きいと思ってたこの家が、今は狭く感じるわ。それを気づかせてくれて、助けてくれた結斗君には感謝してもし切れんなあ。

つい隣に佇む特別なナイトに目を向けるはやて。

結「?・・・」

「一瞬いぶかしんだ結斗であったが、すぐにはやての大好きな笑顔で返す。」

は「／／／／さ、さあ～～リビングに行こか～～」

不意打ちな結斗の攻撃に、瞬間的に顔を赤くするはやて。それを気取られたくなくて、顔を背けてリビングへと足を運んでしまった。残された結斗は、少し疑問に思いながらもはやてに続いて、二週間ほど過ごした部屋へと再び足を踏み入れた。

は「はい、結斗君・・・」

腰掛けたソファの前にある机にコーヒーが置かれる。

結「ありがと・・・」

結「は・・・」

程なくして沈黙が訪れた。

今は午後二時。夕食を準備するには、早すぎる時間帯。そのためにははやては、手持ち無沙汰な状態だ。いつもなら本を読んでいたたり、なのはたちと遊んでいたりする時だ。

結「はやては、いつも何をしているの？」

そんなはやてを見透かしてなのか結斗が、声を掛ける。  
声を掛けてくれたことに若干嬉しさを感じながら、それに返答する。

は「え？ああ、えつとな私やったら読書してるかな。結斗君は？」

結「僕？うっくん・仕事かな？」

考えながらもこれが無難かと答える結斗。

は「結斗君そんなに忙しいなん？」

結「そ、そんなことないよ・・・」

は「・・・（じ〜〜〜）」

結斗の下手な嘘は、はやてに通じなかった。

事実、結斗は多忙な身である。表面には、出さないが結斗の行う任務や書類は、通常の局員の処理する量を遥かに超えている。

それこそ通常の局員の五人分程の量だ。

その度に、アリシアや焰美からは小言を頂戴したり、澗から心配されたりしている。

は「まっ……ええわ。結斗君は、いつか話してくれるだろうしな  
あ」

結「はやて……」

は「さて、結斗君。暇やし一緒に本読もか？」

話題を変えるはやて。はやての気遣いを少し嬉しく思った結斗。

結「良いけど……僕本なんて持ってないよ」

は「大丈夫、大丈夫」

そういつてははやては、二階へと上がっていった。本をとってくるの  
だろう。何気なく、数十日過ごしたリビングを見渡す。

結「?……」

そこで目に止まるものがあった。それはテレビの隣にある棚の上に  
ある三つの写真立て。

ソファから立ち上がり見る。

「――僕たちがいたときは無かったな。」

「一つははやてとシグナムたち。もう一つは、グラム元提督、その  
・ 使い魔アリア、ロツテが写っているものだった。そして最後のは・

結「優しそうな男の人と女の人……」

写真に写っている男性と女性は、結斗が良く知る幼い女の子と手を  
繋ぎながら微笑んでいた。

は「私のお父さんとお母さんや……」

結「あ……はやて、ごめん。なんか盗み見るみたいに……」

本を取って来たはやてが、並び立って言い放つ。

は「ええんよ。ここに置いておいたんやから目に付いて当然や……」

・聞いてくれるかな、結斗君……？（うん……）ありがとな。……結斗君がここに来る前、私が一人やったときはこの写真、自分の部屋にあったんや。そうすればお父さんやお母さんがずっと私を見てくれてるって思ったんや……」

結「……………」

はやての独白に結斗は、黙って聞くことを選択した。  
尚もはやては、続ける。

は「でもシグナムやヴィータ、シャマル、ザフィーラ達がやってきて家族になった。嬉しかった。新しい家族が出来たのが……だけど闇の書で一時私たちはバラバラになりかけた。でも結斗君がそれを打ち破ってくれた……」

嬉しそうに言うはやて。それは瞳をうつすらとしたらせていた。  
それに戸惑いながら返す結斗。

結「僕はそんな大したことしてないよ……」

は「ぐす……結斗君にとつてはそうでも私やヴィータ達にとつては、奇跡に近いことやったんや。実際奇跡やしね……。だから家族が揃ったことをお父さんとお母さんに見てほしかったんや……これが今の私の家族やって。これから私達を見守って欲しいっ



てなあ・・・」

涙を拭き、明るく言ってくるはやて。それがとても綺麗ではやての素晴らしいところだなと思った結斗であった。

結「そっか・・・」

はやてに一言だけ答えた結斗。  
それに満足したのかはやては、

は「さて、結斗君、本読もうや?」

感傷は終わりとばかりに、トテトテとソファに歩むはやて。

は「ほら結斗君!座って・・・」

パンパン

ソファを叩き、催促するはやて。  
それに続いて座る結斗。

ギョッ

結「あの……はやてさん……何をしていらっしゃるのですか？」

思わず尋ねる結斗。尋ねられたはやては、先程とは違い結斗すぐ隣に座っている。

は「これで二人で見れるやん、ええ案やろ？」

結「た、確かにいい案だけど……」

いろいろ問題あるでしょと続けたかった結斗だが、

は「今日一日結斗君は、私に逆らえへんで」

結「は……はい……」

不服だったが頷ざるを得なかったのだった。

「……何の本だろ？え〜と……」

とりあえずと本を読むことに集中する結斗。その時、はやての右肩と結斗の左肩が触れ合う。

しばらくそんな状態が続いた。

そして本をめくる音のみがある中、それは起こった。

は「結斗君……」

結「何はや、んんっ!!」

はやてに名を呼ばれて隣に向いた瞬間、はやてが結斗に

キスした「……」

抵抗する暇も与えてもらえず、頭の中で現状を整理しようとするが、理解が出来ない。  
やがて長いような、短いような一時の楽園は終わりを告げた。この場合、どちらが楽園なのかそれぞれに判断して欲しい。

は「んん・・・はあ~~~~」馳走様「

チエ口つと舌を出すはやて。それは妖艶なものであった。

結「は・・・はや、はやて？な、何を!？」

いきなりな事に動揺する結斗。

結斗は、不意打ちで唇を奪われたのは、二度目である。

は「そんなんキスしたにきまつてるやん／＼／＼私、結斗君大好きやからな」

結「あ、あ~~~~／＼／＼／」

素直なはやての言葉に、顔を真っ赤にし、フェイトみたいに唸る結斗。

は「言うとかわ／／／／私八神はやては、白銀結斗君のことが好きです／／／／／」

顔を真っ赤にして言ったはやて。

結「あ、ありがとう／／／」

とりあえず礼を言う結斗。そして告白の返事をしようとしたが、それははやてが手を翳す事で遮られた。

は「返事はもうちょっと待ってや。そうしないとズルになってまうから・・・」

結「？・・・うん、分かった・・・」

ズルという単語に首を傾げながら、結斗はそれを承諾した。

は「さて・・・続き読もか？／／／／／」

結「うん・・・／／／／／」

そして二人の同じ時間は穏やかにリビングの秒針の音に、流れていくのであった。

その間、二人が触れ合う肩と手は温かい熱を帯びていた。

結「んん……ふわぁ〜〜」

カーテンの僅かな間から零れる日の光を見ながら、結斗は心地よい朝を迎えた。寝ぼけた頭で未だに睡眠という欲求を欲し続けている身体で部屋のドアのほうへ寝返りを打つ。

は「おはよう 結斗君」

結「あ、うん……おはよう……」

再びドアとは反対の窓へ寝返りをする結斗。

ギョッ

すると背中が抱き締められる。その時、足も絡められ傍から見たら何かあったなと問い詰めずにいられない状況である。

―――……………?

結「ってはやてっ!?!なんでっ?？」

雷鳴のごとくおめめがぱっちりとなった結斗が聞くが、はやてに背中から抱き締められているため動きが取れなかった。

結「あの……………はやてさ……………ん……………?」

は「や!?!」

呼びかけたがはやての即答で更に抱き締められる。

結「いや……………や、じゃなくてですね……………」





N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
6  
2  
!  
!  
!  
!  
!

TALE 61 デート（はやて編）（後書き）

やってきた！デート編だ~~~~！！！！

自分したこともないのに！！

まあそれはさておき、上手くかけてる？

感想まとめてま~~~~す。

ていつかマジで下さい。どーも自分は、デートとか向かないかも

では！！

TALE 62 デート(なのは編) (前書き)

あの子たちは、大きく成長している。

私が予測できなほどの速さで・・

あの子たちの成長は楽しみだわ

美緒

TALE 62 デート(なのは編)

AM09:50

春を過ぎ、緑芽が、息吹出す。春と夏の匂いを感じながら、結斗はある場所に足を向けていた。

時刻は午前十時頃。まだ五月ということもあり、少しだけ寒さを感じるが、そんなことは道を行く、結斗にとっては些事ではなかった。それは彼が今、只の一点の事だけを考えていたからである。

「――はやてに言われ来てみたけど、臨海公園で待つてる人って誰だろ？」

青い空を見上げながら考える。

はやては、起きて早々準備そして結斗に帰宅を命じた。そして今度は、海鳴市臨海公園に行けと言う。

結斗にしてみれば行く義理は、無い。仕事に差し迫っている状態で遊ぶというのは些か、疑問に思うのだ。

しかし昨日聞いた、麗華たち、いつものメンバーが関わっていると

いうことで公園で待たせている人もそのうちの誰かだろうと目星をつけ、行かないという意見は、焼却されたのであった。

やがて辿りついた目的地の展望台付近に一人の女の子が佇んでいた。その子は、上空に右手の人差し指を掲げ、何かを操っていた。

な「アクセセル！」

ガンツガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

なのはの声で上空のあった合計十個の桃色スフィアは、一斉に打ち上げられ地上に落ちようとしていた空き缶を、更なる上空に上げる。十個のスフィアの動きは、それぞれ意思をもっているような動きで瞬く間に缶が、上空に打ち上げられていく。

そして目標を完遂したのか、パタリとコントロールをやるのは。そして一つのスフィアを残してあとのスフィアは消滅させた。

ヒューーーーーー

凄い勢いで落下してくる空き缶。着地地点は、なのはの一米ートル  
右手の地点。

そして地上まで残り一米ートル……

な「シューート!!」

カンツカラン

絶妙なタイミングで側面から、打撃を与えられた空き缶は、放物線  
を描いて結斗の立つすぐ隣のゴミ箱に、シュートされた。

結「お見事」

パチパチと手を叩きながら、賞賛する結斗。

な「ゆ、結斗君?にやはは、いつからそこに?」

結斗がいたことに気づかなかった事に恥ずかしいのか少し頬を染め  
るなのは。

結「ラストからだよ。にしても上手くなったねなのは、シュートイノベーション」

な「私なんてまだまだだよ／＼／＼それをいつなら結斗君のほうが・・・」

好きな子に褒められて嬉しがるのは。

結「僕のこととはともかくさ。凄いじゃないか？十個も同時に操れるなんて」

な「毎日練習してるから・・・」

結「へえ〜おっと、こんな所にまだ空き缶が・・・」

感心していた結斗がベンチの上にあつた空き缶を見つけた。

結斗は、缶の上部を持った。

な「結斗君、やってみてよ！」

それを見たなのはがせがむ。なのはからしてみれば、結斗は魔法の





な「(は、速すぎて見えない……)」

レイ>(相変わらず凄いですね、マイスターは……)<

その光景に圧倒されているとなのはに胸元に架けている赤い宝石、  
レイジングハートが声掛ける。

な「(うん……ほんとに結斗くんてばすごい。私も三年前よりも強くなっていると思っていたけど、結斗君はもっと……)」

レイ>(それだけじゃありませんよ……)<

な「(どうゆうこと?)」

レイ>(見ていれば分かりますよ……)<

ふふふと忍び笑いをするレイジングハート……そして再び観戦をする。そして結斗の上げていた缶の高さがなのところより少し高い位置まで上昇した。すると、九つのスフィアが消失した。やがて重力によって落下する缶。

先程なのはは、これを地上メートルのところまで見送ったが結斗は違った。

ガンツカンツガンツカンツガンツカンツガンツ

な「えっ！！！」

なのはが驚愕に目を見開いた。彼女の目には、上から缶に衝撃を与え、重力と打撃で落下スピードを上げさせた缶を今度は、下から打ち上げるようにしてスピードを落とさせている光景が写っていた。そして缶は、急降下と急上昇を続け、やがて

カラン

地面に小さな音を出し着地した。

結「ふう~~~~こんなもんかな？」

な「す、すごいよ！！結斗君」



結「さて……それで今日デートするのは、なのはなのかな？」

な「……………ああ、うん!!! そうなの!!」

結斗の所業に驚くばかりしていたなのは、一瞬だけ遅れて反応した。

結「分かったよ……じゃあどっしする??どこ行く??」

な「う〜んと……………」

言つべきかわわざるべきかという態度がはっきりと出たのは。それに苦笑する結斗。

結「今日は、三年前に心配かけた分としているんだから、なんでも言っても良いよ??」

朗らかに言う結斗に安心した様子なのは。

な「じゃ、じゃあ遊園地がいい!!」

結「了解と……それじゃあいっつか?」

な「うん!」

そういつて嬉しそうに結斗の腕に抱きついたのはであった。

海鳴ワンダーランド――

電車で乗り継ぐ事、一時間。結斗となのはは、海鳴ワンダーランドに到着した。

結「さて、最初どっしする?」

入場ゲートをくぐりながら聞いた結斗。

結斗にとっては、昨日のボウリングと同様、初めて来た場所なのでどのように行けばいいのか見当がつかないのだ。

な「う〜んと・・・あれから行こっ!」

なのはが指差したのは、メリーゴーランド。

結「は、恥ずかしくない?」

な「今日の結斗君に拒否権はあります〜ん」

少したじろいた結斗に楽しそうに聞かせるのは、仕方なしに、結斗はなのはの後に続いたのであった。

PM 12:40

ひとしきりに遊んだ後、結斗たちは近くのレストランへ足を運んだ。メニューを運びながら、外にあるテラスへと向かう結斗となのは。このレストランは、外で食べる事の出来るテラスがあるのだ。

な「わ〜結斗君のナポリタン美味しそう〜」

席に着いた途端、なのはが結斗が注文した、ナポリタンに目を向けた。ちなみになのはは、ハンバーグである。

結「なのはのも美味しそうだよ……それじゃあはい、あ〜ん」

な「にやつ！／／／／」

結斗の行動に一気に顔を染めるなのは。美味しそうと言っただけでこんなことをされてしまった事に、驚いているのだった。

な「あ、あ〜ん／／／／」

モグモグ

小さくなのはが咀嚼する。

それは可愛いハムスターのようである。

———そういえばこうしてゆっくりする時間は、昨日を含めて、久しぶりだな。

その様子を微笑みながら見守る結斗。

それから交互に食べさせ合いながら、昼食を終えたのであった。その間、なのはは終始、真っ赤になりっ放しであった。

———観覧車内

窓を通して、綺麗な紅色の閃光が結斗となのはを包んでいる。最後にと、とって置いた観覧車の乗車であった。



しかしなのは顔は、ここに入ってから浮かばれなかった。

な「あの・・・結斗君・・・その・・・」

俯きながらのなのは言葉。

結「ん？」

対面に座る結斗が首を傾げた。

なのはは、視線を下けたまま。それはまるで自分には顔を挙げる資格が、無いかのように・・・

な「ごめんなさい・・・」

結「急にどうしたのさ？」

さっきとは大違いのテンションに動揺を隠せない結斗であった。

な「だって・・・私が結斗君に怪我させちゃったから・・・」

「――怪我？……ああ、なるほど……」

結「怪我って……身代わりで、なのはの治療をした事？」

な「うん……だってあれから一年経つけど、しっかりと謝ってなかったから……」

結「いいってば……あれは僕の責任。例えなのはの不注意でも、なのはが辛い時僕は側にいられなかったから……」

な「でも！――結斗君、今も痛いんでしょ？」

叱責するかのような声だった。しかしそれは、自分に対してのものだった。

少しアツくなりすぎと思った結斗は、なのはに落ち着くよう笑顔を向けた。

結「まあ、時々ね。でもこれは、自分に対しての戒めなんだ。自分となのはたち、今度優先するとした絶対になのはたちを先にとってね。感情が先にいかないように。怒りで我を見失わないように――だからいいんだ」

その時、ゴンドラが揺れた。なのはが結斗の隣に座ったのだ。

な「私……今度こそ結斗君を護る……」

真摯な言葉で告げるなのは。見つめる結斗の視線と交差するが、決して視線を外そうとはしなかった。

結「なのは……」

な「いつか言ったよね。結斗君は、結斗君だねって」

結「えっと……はやてたちの事件の後だよね……」

な「うん……あれね結斗君は、頼られる事はあっても頼る事は、少ないって思ったからなの……あなたは、私に孤独の闇から救ってくれた。恐怖から救ってくれた。フェイトちゃんたちを救ってくれた。でも私は、結斗君に何かをしてあげられた事が無い……」

結「……」

なのはの決心に口を挟む事をしない結斗。

な「だから私が結斗君を助けてあげたい。だから強くなったの」

「ーなのはは、そんなことを思ってたんだ。僕からしてみれば、僕のほうこそなのはたちからいっばい色んなものをもらってるのにな・・

結「なのは・・・」

な「でもね、それだけじゃないの・・・んっ!」

結「んっん!!!!」

言葉とともに顔が急接近し、唇がなのはの唇に塞がれた。

な「はあ／＼／＼／＼これもあるの・・・」

結「な、なのは!?!」

慌てる結斗。

な「好きです……私と付き合ってください……／／／／／」

結「はわわ……／／／／」

一人で喋り続けたなのは。そして全てを喋りきったのか、はやてと同様に、

な「返事は今じゃなくてもいいの……みんなの気持ちを受け取ったら考えて。それから選んで欲しいの……」

結「わ、分かったよ……／／／／／」

観覧車が下までおりたのは、それから五分後の事だった。

喫茶翠屋――――

カラン

美由「いらっしやいませ〜ってなのはか。お帰り、今日どこ行ってたの？珍しくお店の手伝い断るから」

な「あはは、お姉ちゃん。そのことは、後で……。お兄ちゃんは？」

店を見渡すなのは。店には、美由紀とカウンターにいる土郎だけであつた。

美由「恭ちゃん？今出掛けてるよ？」

な「よ、よかつた〜」

ホッと息を下ろすなのは。

美由「?・・・それよりさっきの事って・・・(こんにちわ、美由紀さん)あ、結斗君。こんにちわ。で、なのはなにがあったの?」

話途中でなのはの背後から挨拶する結斗。  
それに合わせる美由紀。

な・美由・結「・・・・・・・・」

互いに見つめ合う事数秒――

美由「って、結斗君!!」

びっくり仰天の美由紀。

な「お姉ちゃん、反応遅い・・・」

結「あはは・・・」

呆れるなのはに苦笑いの結斗。

美由「えっ？もしかしてなのはってば、結斗君とデート？そんなわけないか。なのはが・・・」

な「／／／／／」

ふざけ半分で聞いた美由紀の問いになのはが頬を染める。

美由「・・・マジ？お父さーん！！」

士「なんだ？美由紀、騒がしい・・・。おや、結斗君いらっしやい」

結「こんにちわ、士郎さん」

美由「そんな場合じゃないんだって！！」

士「聞こえていたさ。なのはが結斗君とデートしたんだろ？」

やれやれという感じの士郎。



美由「あれ？驚かないの？」

士「そんなもの予想できるだろ？まあほんの数日前はそれを許さなかつたが、今では君以外なのはを任せることは出来ないと思つよ。  
なあ、桃子・・・」

士郎が結斗を正面から見つめる形になる。

桃「ええ。結斗君ならなのはの事を一番に考えてくれるから・・・」

そこでキッチンから出てきた桃子が士郎の隣に立ちながら言った。

な「も、もう・・・お母さん、お父さん！／＼／＼／＼／」

美由「確かに結斗君以外に、なのはのお相手は考えられないか・・・」

「

ふっふと顎に指を添えながら唸る美由紀にまで、からかわれなのはは、顔を沸騰しっぱなしである。

それを隣で微笑ましく見つめる結斗。

「ーやっぱり家族っていいね・・・。僕の元の父さんと母さんも

こんな風でだつたらー

感傷に少しだけ浸っている結斗であった。

カラン

恭「ただいま」

そこでまたも扉のベルの音と共に、新たな闖入者の来訪であった。

な「お、お兄ちゃん・・・お帰りなさい・・・」

なのはの兄、恭也であった。

恭「なのは、ただいま。なんで今日店の手伝いを・・・ってそ  
うゆうことか・・・」

結「こんにちわ、恭也さん」

恭「ああ、結斗」

なのはの隣に佇む結斗の姿を視界に入れ、合点がいった恭也。

美由「あれ？恭ちゃん、それだけ？前までの恭ちゃんなら、勝負だ！とかつて言って結斗君に勝負挑んで、いつぞやみたいにベッコボコにやられるパターンなのに・・・」

面白くなさそうに言う美由紀。

予想外な恭也の反応に土郎、桃子が目を丸くしている。

何より一番驚いているのは、なのは本人であった。

恭「ベッコボコって・・・あのな〜。はあ・・・なのはが結斗とデートしたんだろ？そんなもの今朝のなのはの喜び様から分かるさ。それに結斗は、俺が認めた男だ。結斗ならなのはを大切にしてくれるだろう・・・」

一息を吐き、諭したように言う恭也。

な「ありがと、お兄ちゃん・・・」

桃「それで告白したの？」

な「ええっ!!??」

桃子の爆弾発言に叫びに似た声をだすのは。

ちなみにもう一人の本人、結斗は成り行きに任せるみたいな感じに傍観を決め込んでいる。

恭「なんだ、まだ告白してないのか？」

士「なのは、早く告白しちやいなさい。結斗君を狙っている女の子は一杯いるだろう?」

なのはが告白した事を知りもしない高町家は、なのはの集中砲火する。

なのはなのはで、うにゃにゃああってみたいな猫語になってしまっていた。

さすがにこれ以上はと思った結斗が助け舟を出す。

結「告白ならされましたよ……観覧車の中で……」

な「うにゃっ結斗きゅんっ!?!」

名前をかむなのは。

桃「そ、それで返事は・・・?」

おずおずなのはに尋ねる桃子ら。

な「それは後でにしてもらったの。だってそうしないとずるになっちゃうでしょ?」

士「フェイトちゃん達にかー」

な「うん、だってみんな結斗君のこと大好きだし・・・」

美由「なのはがそういつならいいけど」

な「うん、ありがとう」

PM20:40

――なのはの部屋

結「どうしてこうなったんだろ・・・」

な「何か言った、結斗君？」

櫛を片手に結斗の背中を見ながら言うのは。ここはなのはの部屋。あの後、高町家と夕食をとった結斗は、誘われるままになのはの部屋で眠ることになってしまった。しきりに問題があるとなのはに抗議をしても、拒否権はないよ〜と強弁を振るわれた。最後の頼みに、土郎と恭也に縋り付くような視線を与えたが、無駄であった。むしろ結斗となのはの同室に賛成だった。

そして止む無く、なのはに連れてこられた結斗であった。

――閑話休題

な「結斗君の髪、さらさらなの〜」

結斗の漆黒に光る髪を砥ぎながら、なのはが嬉しそうに言った。

結「そんなことないよ。所詮男の髪だよ。女の子の髪には、負けるさ」

な「だってこんなに光ってるよ？」

結「光ってるって・・・ただ水滴がついてるだけだよ」

結斗が謙遜気味に言った。しかしそれは無駄なものである。なのはの言ったとおり、水滴が光に反射して、光っているように見えるのだ。

な「これくらいかな？」

結「ありがと、なのは。もうそろそろ寝よっか？それで僕の布団は・・・」

な「？そんななのはと一緒に寝るに決まってるからいらないの・・・」

結「why？」

動転しすぎてつい英語で聞いてしまう結斗。

な「Because it is a decided thing  
g>決まった事だから」

なのはも英語で答えた。

そんななのはに頭を抱える気持になる結斗だが、再び拒否権はないといわれてしまえばそれまでなので諦めて、なのはの布団に入った。

な「結斗君あつたか〜い」





TABLE 62 デート(なのは編) (後書き)

というわけで今回はなのはちゃん編でした。

そして恐縮なのですが今回から二週間ほど更新をストップさせていただきます。

詳しくは活動報告にて・・・

ではでは〜

**T A L E 6 3    デート（アリサ編）（前書き）**

お久しぶりです、みなさん。

約三週間ぶりの更新です。

タイトルの通り今回はアリサ編です。

まだまだデート編続きます。その後も一応ちょっとしたものを企画しています。

どんなものは秘密です。

それでは、長くなりましたが久しぶりにどうぞ〜

TALE 63 デート（アリサ編）

AM9:25

GW三日目。結斗は、とある高級住宅街の歩道を歩いていた。

昨夜なのは家でお泊り、そして一緒になのはと就寝。起きてみると、可愛く眠るなのはに結斗は、顔を染めたのは今朝の話。

その後、高町家＋一人の朝食をし、温かい目で見送られた結斗であった。別れ際しきりに、なのは以外の高町家が一致団結して、『なのはの事お願い』と頼まれる始末。

やんわりと返事し、退却。そして今の状況である。

結「今度は・・・アリサか・・・はあ」

歩きながら溜息ではないが息を吐く結斗。

「・・・いくら心配をかけたとはいえ、連日女の子達とデートしていると、自分がなんか軟派野郎に思えてくる・・・」

もてる男の弁である。

こんなことに悩むのは、男として嬉しいはずなのだが、結斗がその実感をするのは彼の人生ではないことだろう。

そしていつのまにかたどり着いた、目的地。周辺の住宅をさらにワ

ンランク上の敷地であった。

結「到着。それピンポーンと」

自分の邸と同様の大きさを誇るアリサの家の呼び鈴を押す結斗。やがて十秒もしないうちに向こう側に応答があった。

鮫「はい。どちらさまでしょうか……」

画面に応答したのは、アリサの執事、鮫島であった。呼び鈴越しでも分かるが、執事に恥じない貫禄があるなど考えた結斗。

結「おはようございます。鮫島さん」

鮫「これは、これは結斗様。お待ちしております。今、門を開けますので……」

結「ありがとうございますー」

結斗が礼を言つと目の前の三メートルほどの鉄格子が音を立てて、開き始める。

静謐な空気を醸し出している、庭園を過ぎ、玄関へと向かう。  
やがて玄関の扉の前に行くと、自動で扉が開けられそこには良い歳  
をとり、執事服に身を包んだ鮫島が頭を垂れていた。

鮫「お再びおはようございます、結斗様」

結「おはようございます、鮫島さん」

まるで臣下の礼のように挨拶をされ、戸惑った結斗だがそこは彼ら  
しく丁寧な挨拶で返した。

鮫「しばらくお会いしておりませんでしたが一息災のようでは何よ  
りです」

鮫島の言葉にアリサが魔法の事を、話していないことを気づいた結  
斗はそれを流した。

結「ありがとうございます、それで今日は……」

鮫「お嬢様ですね。少々お待ちを・・・（その必要はないわ）お嬢様、おはようございます」

屹立とした声がホール内を掌握した。周りにいた鮫島を含めたメイドラが、頭を下げる。

その中心にいる人物、この邸の主の娘アリサへ結斗は、挨拶をする。

結「おはよ、アリサ」

ア「おはよう、結斗。悪かったわね、その・・・急に・・・呼びつけて・・・」

少々罰が悪そうに言いながら、結斗の下へ行くアリサ。仕事の事を言っているんだなと、理解した結斗はそんなの気にしないで、と返事をした。

それに少しだけ安心したアリサ。

結「それで、僕はどうすればいい？」

ア「んっっシヨッピング！」

少し考える振りをして、意気揚々と言ったアリサ。

結「ふふ、分かった。じゃいこうか？」

元気なアリサの様子に微笑む結斗。

ア「／／／／」

結斗に笑われた事に恥ずかしさ半分、かわいい笑顔を見たこと半分で頬を朱に染めるアリサ。

鮫「それでは、車を・・・」

そういつて場を離れる鮫島。

結「相変わらず、すごいね、鮫島さん・・・ん？・・・どしたの、アリサ？」

鮫島の後姿を見ていた結斗の右手が温かいぬくもりに包まれる。その行き先を辿ると、アリサの左手があった。

ア「べ、別にいいでしょ！！デート・・・なん・だから」

普段の時みたく言おうとしたが、自分で言ったデートの単語で最後の方は、縮みこむような小声であった。

結「／／／うん・・・」

アリスのギャップの差にたじたじの結斗。

鮫「お嬢様、結斗様。ご用意が出来ました」

ア「っ！は、早いわね。ほら行くわよ？」

結「うん」

鮫島に気づき返事したアリスは、結斗の手を引っ張りながら車へと向かったのであった。



鮫島の安全ドライブのリムジン車に揺られること10分。二人は、目的地のショッピングモールへと到着した。ちなみに後部席に乗った二人が手を繋いでいたことに、微笑む鮫島であった。

鮫「それでは、お嬢様。お帰りもご連絡して下さい。お迎えにあがります」

ア「ありがと、鮫島」

鮫「いえ。結斗様、お嬢様のことよろしくお願いします」

結「分かりました」

自然と言葉になった結斗の返事で鮫島は、安心し、リムジン車で来た道を戻っていった。

ア「さあ！行くわよ」

それを見届け今度は、結斗の右腕に抱き着くアリサ。

結「はいはい・・・」

返事し、アリスがかける僅かな重みを連れて歩き出しはじめた結斗であった。

ア「こんなの、どじっ?」

結「うん、似合ってるよ」

ア「これは?」

結「ばっちし!」

そんな感じにシヨッピングは、続く。

ア「んーまあまあだったわね」

結「なるほど、あれは・・・」

批評しながら店から出るアリサと思索する結斗。

ア「結斗、あんたってばさっきから何唸ってるのよ？」

結「・・・？えっ、何アリサ？」

ア「だから何唸ってるのよ？」

結「あゝ。これ癖なんだ」

ア「癖？」

結「うん、僕ってば料理よくやるじゃない？」

ア「ええ、私でも舌巻く料理をね」

自分が料理出来ない事を少し皮肉気に喋る。

結「あはは・・・まあとにかく、それが元で僕、食べれば素材とかが分かるんだ」

ア「？そりゃあ分かるでしょ？」

結「じゃあ調味料とかの量も分かる？」

ア「そんなの分かるわけないじゃない！って、まさか！？」

大袈裟に結斗に振り返ったアリサ。

結「えへへ〜ブイツ！」

驚いたアリサに人差し指と中指を立て、Vサインをする。

ア「・・・じゃ、じゃあ、今食べたものを再現出来るの？」

結「そりゃあもちろん。・・・でもないよ・・・」

ア「何だよ？」

意外な言葉に傾げる。

結「料理は人それぞれの味があるからいいんだ。その人が一生懸命  
思考して、考えて、工夫したものだから。だからその人のがんばり  
を壊したくはないんだ」

ア「・・・」

結「アリサ？聞いてる？」

ア「えっ？ええ、聞いてるわよ。いいことじゃない、あんたらしい  
わ」

結「ありがとう」

ア「じゃあ今晚のディナー結斗が作って？」

結「うん、分かった・・・あれ？なんで？」

ア「結斗の作った料理が食べたいのよ。いいでしょ？期待してるからね」

結「はあく分かったよ。さてこれからどうし（うえ〜んっ！！）？」

ア「あの子みたいね」

アリサにつられ目を向けたところ、道路を挟んだ反対側の歩道で大きく泣いている、五、六歳の女の子を結斗も発見する。

ア「あなた、大丈夫？」

少女に近づき、膝を折って視線を合わせるアリサ。結斗も後に続く

少「うえひっく・・・お姉ちゃん誰？」

涙一杯にアリサと結斗をみつめる少女。

ア「私は、アリサ。こっちは結斗よ」

「……こっちのですか……アリサ……」

ちよつとした不名誉な呼ばれ方をして呆れた結斗。

それを横目に気づいたアリサだが今は少女を慰めることを優先し、スルーをきめこんだ。

少「アリサお姉ちゃんと結斗お兄ちゃん？」

アリサが軟らかく微笑むことで、少女は少しだけ笑顔を戻し、泣き止む。

ア「ええ。それでどうしたの、泣いちゃって」

少「ひつく、お母さんとはぐれちゃったの。」

自身の言葉に再び悲しさが込み上げてきたのか、大粒の涙を溜める少女。

嗚咽をもらす少女に困った表情をする二人。

結「迷子だね（ガスッ！）痛ッ！！何するの、アリサ？」

結斗の言葉を遮るかのような瞬間的な速さで結斗の脳天にアリサのチヨップが炸裂した。その痛みに蹲る一歩手前までいきそうになったが少女の前では、と我慢をする結斗。

ア「（あんだね〜）只でさえ不安で一杯の女の子にそんなこと言わないの！」

小声で叱られる結斗。

結「大丈夫だよ・・・」

薄く微笑んで、さっきのアリサがして見せたように膝を曲げ、泣く少女へ視線を合わせた結斗。

少女「っ！？結斗お兄ちゃん？」

ビクッと電気が走ったかのように一瞬体を強張らせた少女。それは自分の頭の上に何か添えられたからであった。その正体は、結斗の右手であった。



結「大丈夫だよ・・・君のお母さんは、僕たちが見つける・・・必ず。だから泣かないで・・・泣いてばかりいるとかわいい顔が台無しだよ？」

にこやかに微笑む結斗。それに安心したのか、目を離さずに、やがて泣き止んだ少女。しかし隣で見ていたアリサは、まったく違うことを考えていた。

なんて表情をしているのだろう・・・と。  
子供から見たら目の前の少女のように安心するだけだろう。しかし大人や少しだけ生きているものたちにとっては目が離せない、離すことができないものであったのだ。

それはまるですべてを包み込むかのような優しさ、慈愛に満ちた微笑だった。大人びた表情をしてみせた結斗に自身とは明確な違いをみせられる気がしてならない。

だからそんな表情をみせた結斗を伺い見ることしかできず、戸惑いを隠せないアリサだった。

少女「ほんと？」

結「もちろん！ほらっ」

少「っ？わー！抱っこだ！」

少女を腕の上に座らせる結斗。

先ほどの表情は、なりを潜めたのか今は、いつもの結斗の表情であった。それに少しだけ安心感を覚えるアリサ。

ア「さすが結斗。そうゆうのはあなたが一番ね」

結「まあね〜さっ行くよ！」

足早に人ごみに消える結斗。見失いかけたが、なぜか結斗の元へいくことができたアリサ。

このときどうして結斗の元へいったのか自分でも理解できなかったアリサであったのだった。

PM16:00

茶褐色の土がオレンジ色へ染め上げる。その中を高台の空気は潮風にそよがれていた。

その元で立ち並び、伸びる二つの影。どちらも髪が光輝いているかのように見えた。一つは、宵の闇の漆黒、もう片方は金色に靡くもの。どちらも沈む太陽の光を一身に浴びて、美しい光景を作り出していた。

ア「結斗・・・あんなんで泣いてるのよ?」

金色の影アリサが尋ねる。

結「・・・嬉しかったんだよ・・・。あの子がお母さんに会えて・・・」

それに漆黒の影、結斗は沈む太陽に目を向けながら言った。彼の瞳には泣いた後が残っている。

少女の親を探し始めて二十分後、母親が見つかった。母親の弁のよ

れば、目を放した隙にいなくなってしまうていたらしい。母親は、しきりにお礼を言い、二人を照れさせた。別れ際、少女が大事そうに母親と手を繋ぎながら、その顔一杯にした笑顔で手を振っていたことが結斗とアリサの記憶に印象深く残り続けていた。

その後結斗とアリサは、高台へと足を向ける。そこで二人が交わした言葉はなかった。

それはアリサが結斗の瞳の涙に気がついたためであった。しかしいつまでも結斗の複雑な表情を見ていたくはないためアリサが確かめるように聞いたのであった。

ア「そんなことで泣く訳ないじゃない！」

叱責の声が夕日が照らす。

ア「あんたが泣くなんてよっぽどなことよ、ねえそうでしょ!!?」

アリサは、感情を破裂させるかのごとく喋った。優しさで溢れている結斗が泣くほどのだ・・・アリサにとってそれが、心配で仕方がない・・・。

結「…………ふう…………。少し昔話に付き合ってくれるかな？」

そのため息は何のためか……。ポツリとアリサに向けられる許可の言葉……

結「一人の男の子がいました。その子は、ごく普通の男の子です。変わらない日常、変化しない光景、誰に聞いても平凡……。普通の人生を歩んでいました。ある日、公園で同じ歳の女の子が泣いているのを見つけた男の子。いてもたってもいられずその女の子に話しかけます。そして女の子と友達になりました。男の子と女の子は仲良しでした……」

ア「…………それで……？」

黙って結斗の横顔を見ながら発するアリサ。

結「…………ある日女の子との遊びで男の子は、大怪我を負ってしまいました。命にかかわるものです。そこで彼を治療したのは、魔法使いでした。魔法使いは、彼の動かなくなりかけた足を治すために、男の子の両の甲に魔法の石を埋め込みました。するとどうでしょう。彼の足が治っていくではありませんか……」

ア「…………」

結「それから男の子は、怪我の治療を行い、無事に両親の下に帰りました。一時、家族の下で過ごした男の子。でも男の子の不注意で甲にある宝石が見られてしまいました。」

なんとか説明をしようとした男の子は両親に近づこうとしますが、しかしそこで受けたのは……拒絶と恐怖でした。(ツ！！)

両親が彼を見る目は一変し、異形を見る形となったのです。

彼の日常は、音もなく一瞬で崩れ去ってしまいました」

ア「……………」

アリスの顔がこれまでにないほどの、驚愕に染まった。そしてみる内に、何を言ったらいいのか分からない戸惑いの表情を始めた。

言葉を発しようとしても、出てこないそのような感じだった。

結「両親に捨てられてしまった男の子は、魔法使いの家に住みました。そこで幸せに暮らしたとき……………」

終焉を迎えたお話。

二人の間を沈黙のみが支配する。

ア「……………ねえ……………今のって……………」

結「うん……………僕の話……………」

ア「・・・」

いつもの軽口が開けない。結斗の言葉の節々から、彼の心を感じたからだった。

結「無理しないでいいよ。別に同情されたくて話したわけじゃないから……。さっきの迷子の女の子。不安だったと思うんだ、僕みたいに……。だから再会できて嬉しいんだよ。僕もね（ギョッ）・・・アリサ？」

会話の途中でアリサに抱きつかれる結斗。

ア「もういいわ……。もう・・・そんな辛い事・・・ごめん・・・。あんたにそんな過去があつたなんて・・・」

結「いいんだよ、もう過ぎたことだし・・・それに今は母さんや麗華が・・・ってあ・・・れ・・・？・・・あれね？」

頬を伝うものーっゆっくりとその手に触れる。

熱いものが伝い落ちる。さまざまな思いを込めたものが・・・流れる。

結「どうして・・・いまさら・・・ヒグッ・・・あの時・・・いつ

ばい・・・泣いたのに・・・」

拭っても拭っても、やむことはなかった。

それから言葉も言えなかった。嗚咽とともに、流れる涙、それをアリサは、結斗の肩口に顔を埋めて、一緒に泣いてあげることしかできなかった・・・。

結「ありがとう・・・」

ア「もういいの？」

結「うん・・・あんまり男が女の子に泣きつくのはよくないからね・・・」

ア「そんなの別にいいのよ・・・さて帰るわよ！」

結「うん、あっアリサ。鮫島さんに電話するのちょっとまって！」



携帯を手にもかけようとしたところを待ったがかけられた。

ア「何よ？他の方法で帰るの？」

結「まあ・・・うんそうだね。さっきのお礼かな？」

ア「そんなの別にいらぬのに・・・」

結「まあそんなこといわずにね・・・」

そういつてアリサから少しだけ・・・といっても二メートルほど遠ざかった結斗。

アリサにとってみれば何がなんだか分からなかった・・・。

結「我望む、天空を駆けし、緋色の翼を・・・私の背に顕現せよ・・・  
・レイディアント・ウイングー！」

バサアアアアアア

呪文とともに彼の背には、光り輝く緋色の双翼が存在した。一つまた一つと背中に圧倒的な存在感をもつ、翼から羽が落ちる。その美しさに目を奪われるアリサ。双翼だけにではない・・・。結斗を含め

たものでだ・・・

ア「綺麗・・・（アリサ？）ッそ、それでどうするのよ？まさか空飛ぶわけじゃないし・・・」

思わず零れた言葉が結斗の耳に入りそうになって、ごまかしたアリサ。

結「さすがアリサ。察しいいね、ホラッ！」

一瞬でさっきの少女のようにアリサを抱きかかえる。しかしそれは違う体勢であった。

ア「これって・・・お姫様抱っこ・・・」

結「軽いね、アリサ。さて、お姫様を空の旅に連れて行きましょう」

ヒュウウウウウウ

言葉とともに結斗の足が地を離れた。しかしアリサをもつ体勢は、一瞬のぐらつきもない。それからどんどん地面が離れていく光景を見続ける。

結「地面ばかりみていても面白くないよ？ほら前をみて」

膝と首を抱えられた状態で言われ、アリサは恐る恐る前を見た。

ア「わ~~~~~すごいわ！」

一面茜色に彩られた光景。いつも見ている木や川、家、空がまったく別のものを生み出していた。

結「ふふ良かった、喜んでもらえたみたいで」

ア「結斗もつと下に行つて！！海が見たい！」

先程の少女のような表情を見せるアリサ。それに気を許し、もっとそんな表情をみたいと思ひ始める結斗だった。

結「了解！」

緋色の双翼を羽ばたかせながら二人は、空の旅を楽しんだのであつ

た。

PM 17:00

アリサ邸

鮫「むぐぐ。一向にご連絡がない……」

執事鮫島は、呻いた。彼は、ずっと待っている。現在仕えているバニックス家の長女アリサ・バニックスからの迎いの連絡を……。

鮫「まさかつ！？誘拐など……」

不穏な単語が頭をよぎった鮫島であったが、それはすぐに消された。今日連れ添っている、少年

白銀結斗はそんなものにも屈しないほどの力を持ち合わせているのをなんとなく考えたためだった。

柔らかな物腰、それでいて隙のない風格なのだ。そんな人が主の側

にいるのだから、万が一のことは  
ないと断言する。

鮫「しかし……………」

それでも心配がよぎるのだった。

鮫「むむ……………（……………じま……………）……………（……………？）……………気のせいでしょうか……………」

いつものように呼ばれ方で思わず、振り向く鮫島。しかし彼の前には誰の姿も見えなかった。

——鮫島……………

遠くからの主よりの声、再び振り向く鮫島。しかし今度も姿がない。

ア「上よ上……………」

鮫「……………ッ……………お嬢様……………何をしてらっしやるのですか……………！」

慌てて叫んだ先には、アリサを抱えた結斗の姿が目に入った。

ア「なに……って空を飛んでるのよ」

結「アリサそろそろ降りるよ……」

ア「ええ」

鮫島が目を丸くするなか、結斗と抱えられたアリサは地面に降り立つ。六十年以上生きてきて鮫島は、尚も自分の見た光景が信じられない。

鮫「お嬢様……どうやって……」

ア「そつかまだ言っていなかったわね……。結斗は、いわゆる魔法使いってやつよ」

鮫「魔法使い……ですか」

ア「あら、それだけ？驚かないのね……」

鮫「驚いてはいますが・・・今証拠を見ているので・・・」

そういつて見るのは、結斗の背に生えた二つの翼。もちろん作り物ではないことがその存在感でわかる。

なにより揃わなかったパズルのピースが当て嵌まるかのように納得したのだった。

結斗がもつ誰とも違う雰囲気、それは魔法使いによるものが大きい。そう自己完結した鮫島だった。

結「すみません、驚かせちゃって・・・」

鮫「いえ、それはいいのですが・・・本当に結斗さまは・・・その・・・」

結「ええ。魔法使いです。正確には、魔導師と呼ばれるものです」

鮫「魔導師・・・」

ア「ね〜おなかすいたわ。結斗早く作って」

鮫島の思考はアリサの声で中断を余儀なくされた。

鮫「お嬢様、本日の夕食は結斗さまがおつくりになられるのですか？」

ア「ええ。悪いわね、用意させといて。でも結斗の作る料理とつても美味しいのよ」

鮫「さようでございますか。分かりました・・・シェフにそのように伝えておきます」

ア「ええ、お願いね。ほら、結斗いくわよ!」

楽しそうに結斗の腕を引くアリサの光景を見る鮫島。

「――お嬢様があのような笑顔を見せるなんて何年振りでしょう・・・」

。。結斗さまこれからもアリサ

お嬢様のことよろしくお願ひします・・・

一人心中で、主の笑顔の永続を願った鮫島であった。

PM20:00



コンコン

結「?・・・誰だろ?」

アリサの邸で豪華な客間に案内された結斗の部屋のドアをたたく音。ノックに気づき、結斗はデスク作業を辞め、立ち上がった。

ガチャ

ア「こんばんわ、結斗」

ドアを開けると、寝間着を身に着け、金色の髪を下ろした姿のアリサが立っていた。アリサの姿に少し目を奪われる結斗であったが、気を取り直しアリサに用件を尋ねる。

結「どうしたの、アリサ。こんな夜更けに・・・」

ア「ちょっと話が・・・ってあんたその髪!!!」

結斗の髪を指差すアリサ。

その先には、まだ水滴がついたままである長く下ろされた髪。

結「？ああ、いつものことだから・・・」

意に返した様子もなく言った結斗であったが、アリサにとっては重大問題であった。

ア「馬鹿なの！？あなたの髪すっごい綺麗なのに。そんなことしたら、痛んじやうわよ！！来なさい、私が入入れしてあげる！！」

結「えっ？ちよっと？」

ズンズンと容赦ない足取りで部屋の中に入られてしまい、結斗はベツドに座らされてしまった。

それからアリサが結斗の髪を梳き始める。

ア「あんたどうしてこんなにさらさらなの・・・」

結「さあ～～？分かんない・・・」

ア「はあ～～・・・ほんとあんたって不思議ね」

結「不思議？」

ア「あんたといると落ち着くのよ・・・」

後ろから結斗の背に抱きつくアリサ。

結「それは・・・」

反応に困り顔の結斗。

ア「私、結斗が好き・・・ッ！（もちろん、男の子としてよ）」

衝撃の告白を受け、狼狽する結斗。

ア「なのはとはやてとは、どうだったの？キスマでした？」

結「////////////////」

ア「したのね・・・結斗こっち向いて・・・」

結「アリサ？んっ……」

感じた唇の感触。

ア「んっ……はあく。これでスタートラインね」

結「アリサッ!?!」

ア「今は、私の気持ちだけ知っておいて」

結「わ、分かったよ／＼／＼／」

ア「さ、寝るわよ」

結「寝るって……まさか……」

ア「もちろん、あんたを抱き枕にして……よ！麗華の言ってた、もふもふ感を堪能させてもらっわ」

結「はあ~~~~」

すでに寝る気、満々のアリサにため息をつく結斗であった。

Next to TALE 64

TALE 63 デート（アリサ編）（後書き）

というわけでTALE63でした。

いろんなことを考えて今回は執筆しました。

でもやっぱりblankがあるのかちょっと雑になってしまいました。  
感想などお待ちします。

それでは、またの次回の機会に〜

TALE 64 デート(すずか編) (前書き)

やっと・・・デート・・・中盤

疲れるぜ・・・。

感想よろしくです

TALE 64 デート（すずか編）

にゃ〜〜

結「うひゃッ！あははっ！くすぐったいよ〜みんな〜」

す「ふふ……」

都心のドーナツ化現象のように、結斗を輪中心とし、多くの猫が結斗の膝元へと殺到し、みるみるうちに、猫の波に飲まれていく結斗。それを楽しそうに恋慕の表情で見つめるすずか。傍らに佇む月村忍、メイドのノエルとファリンも微笑ましく見つめているのであった。

事の起こりは、今朝から始まる。

GW四日目の今朝。昨夜の宣言通り、アリサが抱き枕として結斗に抱きついていて。毎度のことながら万力を込めたような力で離れる事が間々ならないものがあった。やっこのことで起床。

枕を取られたことで、少々不貞腐れた感じのアリサであった。



そして今回の相手は、すずかとなったそうだ。  
ここまで来ると結斗は諦めの境地であったのだった。

結「にゃ〜〜？にゃにゃにゃ・・・にゃ？」

猫達の囲まれ、なぜか猫語で話しだす結斗。

猫達「にゃにゃ〜」

猫達もそれに答えるような事を鳴きだした。まるで本当に会話しているかのようである。

忍「ちょっと、すずか。あの子、本当に男の子なの？」

す「あはは・・・うん。確かに女の子見えるけどれっきとした男の子だよ」

忍「は〜。傍から見てたら女の子にしか見えない・・・(にや〜〜?)・・・あ〜〜もっツ！我慢できない！！結斗くんお持ち帰りしていい？」

す「だッ駄目ッ！！！」

我慢できなくなった忍が結斗の下へ駆け込んでいこうとするが、それをすずなが脅威の速さで忍の襟元を掴んで阻止した。

忍「ぶ〜〜」

不服そうにぶ〜〜垂れる忍にすずかは、少しだけ呆れた表情で姉に説教を始めた。

す「お姉ちゃんには、恭也さんがいるじゃない？第一、結斗くんは、私達の共有財産になっているんだよ？」

忍「何それ？共有財産？もしかしていつものメンバー全員？」

す「そう〜・・・。私、アリサちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、はやてちゃん、麗華ちゃんで・・・」

一人ひとり、指を追って数えるすずか。

忍「は〜〜全員美少女揃いね……。やるじゃない、結斗くんも。にしても結斗くんにそこまで惚れ込む要素があるの？」

聖祥七大美少女たちが一途に一人の男子を想っている事に、疑問を覚えた忍がすずかへ問うた。

忍を含めて、ノエルとファリンは結斗が魔導師ということを知りていない。

それは教えようと思ってても、実物を見なければ納得も理解も出来ないすずかは、考えたため今まで伏せていたのであった。

す「見たほうが早いかも……。結斗く〜ん」

声高に結斗を呼び付けるすずか。呼ばれた結斗は、猫たちとじゃれるのを止め、すずかからの下へ行く。その間、未だ遊び足りないのか猫たちがハーメルンの笛吹よろしく、一緒についてきてしまった。

にゃ〜

す「……」

結「なに？すずか」

猫達の好評があまりに凄かったため、少々度肝を抜かれたすずかと忍。

す「結斗くんのお姉ちゃんに話してもいいかな？」

結「僕のこと……？……ああ……。魔法の事？いいよ、他言しないなら」

ヒラヒラと軽そうに言っただけの結斗にすずかは、少しだけ驚く。だが結斗の性格は今更なので忍へ話しかける。

忍「……魔法……。すずか、結斗くんってもしかして……電波ちゃん？」

結「失礼なっ！忍さん、僕は普通です！……ってなんでちゃんなんですかッ！？そこは、くんでしょッ！？」

忍「……あは……。で、すずかどうなの？」

結「えっ？スルーですか？」

す「お姉ちゃん……。結斗くん言った事はほんとなの……。  
結斗くんは魔法使いなの。正確には、魔導師っていうものらしいん  
だけど……。」

忍「ふう〜〜ん」

す「ってお姉ちゃん。相槌打っておきながらなんで私のおでこに手  
を当てるのかな？」

忍「いや……さすが熱でもあるんじゃないかなあっと……。」

す「無いよ!!」

結「あはは……。さすが。無理も無いさ。いきなり魔法が実在す  
るなんて言われてもね。忍さん、これでどうでしょう……。」

ヒューー

そついつて結斗の足が地面から離れていく。

忍「……?……!!」

目をしきりに擦りながら、やっと理解したのか。  
忍が唾然とする……。

忍「私も疲れているのかしら……」

米神に手を当て、現状の理解が追いつかない忍。

結「事実ですよ」

その様子を見ながら、地上へ戻る結斗。

す「お姉ちゃん、結斗くんは正真正銘魔法使いなんだよ。見たでしよう？結斗くんが空を飛んだの」

忍「……あゝはいはい。分かりました。さっきの結斗くんを見たら信じずにはいられないわ」

何が何でも結斗のことを認めさせようと少々声を高くしたすずか。妹の必死な様子に、お手上げですというような様子になった忍だった。

す「良かった。お姉ちゃんが素直に信じてくれて」

うふふと妖しい微笑を浮かべるすずか。

忍「し・・・信じてなかったら？」

すずかのその様子にビクビクしながら忍が尋ねる。

す「そりゃあね～～」

明後日の方向を見ながら楽しそうに言うてのけるすずか。

忍「（良かった・・・信じてほんによかった！）」

今までの人生で今日ほど、すずかを恐ろしいものはないと感じた忍。  
その傍からみている張本人は・・・

結「にゃ～～」

未だに猫達を戯れていたのであった……

――その日の午後。

ガオ~~~~~

結「わわっ……でっかい口だね〜」

檻の中で大きく口を開けたライオンを見た結斗が感嘆の意を漏らした。傍らに立つすずかも同意のようで、大きな口と鳴き声に圧倒されたのであった。

す「結斗くん、本当に良かったの？ここで……」

心配そうに尋ねるすずか。



結「ん？どうして？」

す「だって私が行きたかったところだけど、動物園なんて幼稚園か小学生までが行くようなところなのに・・・」

結「あゝそゆことね。別に良いよゝだって僕動物好きだし。それに来る機会とか無かったしね」

す「そうなの？意外だね、美緒さんのことだから一通り連れて行つてると思つたよ」

結「あはは・・・母さんあれで結構な奔放主義だから・・・それに仕事とかで忙しかっただろうし。・・・ま・・・まあ・・・今は見る影も無いけど・・・」

日頃の美緒の子煩悩を思い出したのか、苦笑いを浮かべる結斗。

す「そっか・・・それじゃあいこっ！私がこの案内をしてあげる」

結「よろしくね」

そういつて二人の手が繋がれたのは、自然な流れであった。

す「麒麟のとじ」

結「なが〜い」

す「お猿さん〜」

結「ちつちや〜い」

す「うたぎさん〜」

結「もふもふ〜」

とまあほのぼのとした様子に二人は、園内を歩き回ったのであった。

月村邸前――

す「楽しかった？」

自分の家の門を通りながら、笑顔で尋ねるすずか。

結「うん・・・すごいね。すずか、動物のこといろいろ知っているんだね」

す「私動物好きだから・・・一番は猫だけ」

結「猫天国・・・だね・・・お。お出迎えかな？」

話しの途中で結斗が見た先は、朝結斗にじゃれていた猫達であった。愛くるしく、結斗とすずかの脚に頬ずりをする。その数十匹以上。

結「ただいま〜みんな〜」

そういつて一匹の猫を抱きかかえる。

結「あれ？君見ない顔だね・・・痛ッ！」

猫を抱きかかえると、その猫は嫌がって結斗の指に噛み付いて何処かへ行ってしまった。

す「結斗く・・・っ！！」

それを見たすずかが息を呑んだ。彼女の視線の先には、噛み付かれたことに発生した血。  
するとすずかの雰囲気が変わった・・・。顔色が青白くなる。

結「すずか？」

その異常に声をかける結斗だが、すずかからの返答は無い。俯いて何かを呟き続ける・・・。  
次の瞬間・・・。

徐に手を伸ばされ、血のついた指がすずかの口の中に入れられていた

丁寧に血を舐めていることが舌のざらつき方から分かった。しかしすずかの目は虚ろな状態。

結斗の背筋に冷ややかなものが伝う。それほどまでにすずかの豹変振りだった。

結「っ！！すずか！すずかっばー！！」

叫ぶ結斗。

す「！・・・わ、わたし・・・また・・・ッ！」

ダッーーーー

一瞬結斗の顔を見て、顔を背けるように走って邸に入っていった。まった。

結「・・・すずか・・・」

取り残された結斗が最後に見たのは、すずかの涙だった。

すずかの部屋――

すずか s i d e

どろじよう!どろじよう!どろじよう!!

頭の中でさっきの光景がリフレインする。抗えなかった・・・結斗くんの血を見た瞬間抑えられた血の衝動が意識を奪い、気づいたら結斗くんの指を啜っていた。

甘美だった・・・今までのどの血よりも濃くて、美味しかった。

す「駄目ッ!!」

さっきの思い出し、また衝動に駆られそうになったが何とか気力で抑えた。

す「うっっ……」

瞳から涙が流れる……。  
嫌われちゃう……初めて好きになった人なのに……。

す「嫌だよ……」

私の涙は、枕を濡らすばかりだった……

すずか side out

すずかが邸に駆け込んだ数分後。月村家の玄関に結斗の姿あった。その顔は、神妙な表情で数分前のことを反芻していた。

「――すずかのあの時の態度。別人みたいだった。それに僕の血を・

ノ「お帰りなさいませ、結斗さま……」

考えに耽っていると、玄関に迎えのノエルがやってきた。しかしその言葉は、何処か棘々しいものであった。

結「ただいま、ノエルさん。その……すずかは……」

ノ「お嬢様はお部屋です……」

今朝の優しい言葉をかけた人物とは、別人のような雰囲気で冷たい言葉を発したノエル。

結「あの……聞きたい事が……」

ノ「それを知って……どうするのですか？（えっ？どうゆうことで



すか?)あなたは聡い方です。みなまで言わずとも、結斗さまは知る必要の無い事を知ろうとしています。

結斗さまが見たもの、何かは存じ上げませんがお嬢様に関わる事でしょう。先程ここを通った時お嬢様は泣いていらっしやいました・

「

結「……………」

ノ「半端な覚悟でするかお嬢様になんて声をかけるつもりですか? ……それならばいっそ(それくらいにしたら?) ……忍お嬢様……………」

忍「結斗くん……………ちょっときて」

結「はい……………」

案内されたのは、リビング。長大な机を前に忍が語り始める。

忍「わたしたちは、夜の一族なの」

結「夜の一族?」

忍の突飛な言葉に首を傾げざるを得ない結斗。

忍「そう……簡単に言えば、吸血鬼ね」

結「吸血鬼……。あのホラー映画とかであるやつですか？」

忍「あんなのと一緒にしないで。私たちはあんな怪物とは違う……」

琴線に触れたのか、ムツと表情を変えた忍。

結「ごめんなさい……」

忍「……私たちは吸血鬼。でも無闇に血を吸うわけじゃない。でも……本質はそうゆうことだから、衝動に抗えない時もある。それが……血を見たとき……」

結「……」

忍「血を見た瞬間、衝動が一気に活性化されるの。個人差もあるけど、これは理性で抑えようとしても抑えきれないものじゃない……」

結「それで……」

忍「はあく……すずかがやっちゃったみたいね……。それでこの事を知られてしまったいじょうあなたに決めてもらわないといけない。私達の眷属となるか……。物言わぬ……」

結「死体となるか……。ですか……」

忍が躊躇う言葉を結斗が続けた。

簡単に相手の口から死体という言葉が出たことに一瞬驚いた忍だったが、意を返して結斗を見つめる構図となった。

忍「ええ。それに逃げようとしても無駄だから……」

忍の合図で背後のノエルとファリンが身構える様子を見せた。

しかしそんなもの最初から注目もまして見てすらいらないように結斗は普通に答えた。

結「……一つ質問が……」

忍「言ってみて……」

結「……………ですか？」

忍「違う。私たちは……………」

結「なら……………です。僕は……………」

続けた言葉に目を瞪る忍だった。

リビングにいる三人だけの存在。

結斗がすずかの下へ行き、残ったのは忍とノエル、ファリン。先程の張り詰めていた空気が、今は穏やかなものへと変貌していた。彼女達の表情は、明るく小さく微笑んでいる。

忍「まさかあんな答えを返すなんてね……………」

ノ「はい……………。とてもすずかお嬢様と同じ歳とは思えないですね……………」

ファ「うん……………とってもかっこよかった……………」

忍「ええ、危なかったわ……。恭也がいなかったら私、惚れていたかもね。夜の一族相手にあんな事、言うなんて……。こりゃあ認めないといけないか。すずかの相手として」

ノ「はい……。私もそう思います」

ファ「うん。私も同じです」

また三人結斗への考え方を変化させた者たちが誕生した瞬間であった。

コンコン

静寂……。沈黙された部屋に扉を叩く音が渡る。しかし部屋の主には聞こえなかったようで無音の反応であった。再び扉を叩く音が聞こえる。しかしやはり帰ってきたのは、無音。

結「わずか・・・聞こえる?」

――!!

扉の先で息を呑む声が聞こえ気がした結斗。一つの遮蔽物で遮られているが、それが顕著に分かる。

結「開けて・・・くれない・・・かな?」

取っ手に手をかけるが、開けるのは躊躇われた。

――怯えている・・・。分かる。わずか何を恐れているのか、どうして怖がっているのか・・・。

結「聞いたよ・・・すずかが、吸血鬼のこと・・・」

その言葉に一気に部屋の内部の空気が変わった。恐怖から諦めに・・・。

意を決して扉を開ける結斗。暗い部屋にはいる。そこは闇に彩られた世界。

そして膝を抱え俯くようにして、ベットに座っているすずかがいた。

す「……何を……しに来たの？」

何の感慨も無い言葉がかけられる。

結「すずか……」

す「やめてよッ！！同情なんていらない！！結斗くんだってこんな化け物といたくないって思ってる！！」

すずかの叫びが結斗の耳から脳へ、そして心へ伝達された。

す「血を見ると抑えられないの！美味しそうって思っちゃう！私こんなのになりたくなかった！！」

子供のようになり、泣きじゃくる赤ん坊のように言葉が発せられる。それを黙って聞く結斗。

やがて闇の空間に差し込む光……。それは月の光……。それを見た結斗は、口を開けた。

結「生まれは、決められないよ……。それはすずかの運命だ」

す「運命って何っ!?!どうして私だけ!?!.....普通の女の子に.....なり.....たかったよ.....」

癪癪を起こし、怒鳴るすずか。しかし最後には、すすり泣くようなものへと変わった。

結「.....じゃあ忍さんやノエルさん、ファリンさんそれにお父さんとお母さんが嫌いななの?」

す「っ!そ、それは.....」

結斗の言葉がすずかの表情を劇的に変化させた。それに構わず続ける結斗。



結「違うよね……。確かにすずかは夜の一族の吸血鬼かもしれない。でもすずかでしょ？家族が大好きで、猫が大好きで、いつも僕たちの心配をしてくれてる、優しい女の子でしょ？」

す「ゆ……。うと……。くん……」

結「僕は、夜の一族、吸血鬼すずかだけの友達じゃない。優しくて可愛い同年代の女の子のこと……。全て含めて月村すずかという女の子の友達だよ。だから……。自分を化け物なんて言わないで……。ね？」

す「結斗……。くん……。うわあああああああああ  
あんん」

結斗の腕の中に納まるすずか。徐々にその肩が震え始める。いつものすずかが戻ってきてくれたことに嬉しさを感じ、すずかの髪を指で流しながら、カーテンの隙間からの月光に目を当てていたのであった。

一頻り泣いたのか、数分後にはさすがに笑顔が戻っていた。それに安心した結斗。

それから癖になってしまったのかずっと結斗のおなかの辺りに抱きつき続けているすずか。

す「えへへ〜結斗くん」

結「?・・・なあに？」

す「なんでもな〜い」

そんな感じにイチャこらする二人。そしてやっとすずかは、凭れ掛かっていた身体を話し始めた。  
すると恥ずかしそうに顔を赤らめるすずか。

す「あのね・・・ありがとう、結斗くん」

結「僕は、当たり前のことを言ったただけだよ」

す「ふふ・・・」

——ちゅっ

その瞬間、重ねられる唇。何度目なのか、結斗の思考回路がフリーズに支配された。

す「お礼だよ……それと……私がしたかったから……。私、結斗くんが好き、大好き!!」

結「あっっ／／／／」

すずかからの好きの単語の連呼にコンマ秒で顔を真っ赤に染め上げられた結斗。

す「ふふ……ほんと可愛いね、結斗くん」

いつもなら声を上げて反応する言葉だったが、今はそんなことに割く余裕はなく、ただたじたじすることと顔を赤くするしか出来ない

結斗だった。

同日

11PM23:45

残り数十分で日付けが変更される時間帯、穏やかな月光に照らされ続ける庭園に二人の影が存在した。  
昼間猫達と戯れる空間だが、今は静かに、神々しく輝く月により神聖な場所と化していた。

す「お姉ちゃん……」

忍「あら？すずか・・・」

イスに座っていた忍に近づくすずか。忍は、片手の赤ワインが入ったグラスを傾けながらそれに答えた。  
数十秒無言の、月光浴がなされた。

す「初めて・・・」

忍「・・・そう・・・」

何がとは問わない忍。そんなものは分かりきっていた事だったから。自分達の血筋状、化け物と呼ばれやすい。裏の世界でも、名の通るほうだ。

そのため正体を知っても、付き合ってくれる人物なんて皆無に等しいのだ。しかしそれでも好きだといってくれる人がいる。忍には、恭也が・・・すずかには、結斗だった。ただそれだけだ。状況を解析すれば、たったそんなこと。

それでも二人は、嬉しかった。自分の醜い部分を含めて好きだといってくれるから。

忍「すずか・・・結斗くんが夜の一族を知って、私達になんていったか分かる？」

す「・・・分かんない。でも・・・良いことでしょ？」

忍「こういったのよーーー」

「ーーーあなたたちは感情があるんじゃないんですか？身体なんて人であるでは、二の継ぎです。だってそうでしょう？普通の人でも、同じ骨格の人なんていなんですから。それこそ、僕たち魔導師も化け物の部類に入ってます。

僕、思います。人って・・・心を持つ者じゃないかなって。それが一番大事じゃないのかなって。

すずかを嫌いに？・・・それこそ有り得ないですよ

す「//////////」

忍「愛されてるわね〜すずか」

からかう忍。

す「////////私、やっぱり大好き、結斗くんが・・・」

忍「頑張んなさい、あの子ほど良い子はいないと思うわ」「

す「うん!!……お姉ちゃん、ちょっとワイン貰ってもいい?」

忍「?」

す「ちょっと興奮しちゃって眠れないから……」

忍「ふふ、はい……」

もう一つのグラスに傾けられるワイン。

す「ありがとう……」

カチンッ

グラスが合わさる音が清浄の夜に響いた。

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
6  
5  
!  
!  
!  
!  
!



TALE 64 デート（すずか編）（後書き）

やっっちゃったぜ!!

これであと三人ですかな？

頑張ります！

かんそくくまっています

おっと忘れるところでした。

PV667、601アクセス

ユニーク55、133人

すげえ嬉しいです。というより外伝に入ってから一気に  
増えました。

これからも結斗ちゃんと麗華ちゃんのお話を

お楽しみください

TALE 65 デート(フェイト編)(前書き)

残り三人!!

頑張れ~~~~私!!

みんなの感想が私のやる気になる!!

今回は長めです・・・

それでは・・・

TALE 65 デート(フェイト編)

AM9:45

見慣れたマンションを目前に一人の男子が立っていた。  
結斗である。

GW五日目の朝。

結「ここか・・・そういえば、僕フェイトとアリシアのマンションには行った事無かった」

先程出てきたすすかの邸でそれとなく聞いておいたのだった。  
なにぶん結斗が麗華たちと再会したのは、つい最近のこと。よって  
知らないのも無理ないものだ。  
ちなみに月村邸を出たとき、忍が「すすかのことよろしくね」と  
耳元で呟き、それをジト目ですすかがみる光景が作られていた。

結「もう五日帰ってないんだよね〜母さん達大丈夫かな？」

マンションとは反対方向に目を向け、呟く。

結斗は、一目目はやてに連れ出されてから、家には帰ってないのだ。着替えなどは、麗華が逐一転送していたとだけ追記しておく。

その際の麗華の表情は、日に日に涙している。結斗成分を補給していないため

結「まっ僕がいなくて半年過ごしていたんだから大丈夫だよね」

笑顔を浮かべ、再び目的地のマンションを見上げる構図となり、歩み始めた。

一方とある豪華邸の一角では・・・

麗「あはは・・・ゆう、そんなところにいたの？まったくもう、五日も家を空けて・・・私寂しかったんだから」

焰「麗華、それは枕じゃぞ。ゆうではない・・・」

鏡「やれやれ・・・結斗がいなくなった途端にこれとは・・・」

美「あはは～～～ゆうちゃんはわたしのもの～～～」

澁「美緒さま、それは私です！って離・れ・て・ください～～～！！  
ああ～～～ゆう様～～～ッ！！！！早くご帰宅ください！！！！」

大変な事になっていた・・・

さてはて邸の一角が大変な構図となっている時、結斗はエレベータ  
ーで地上へと上がっていた。

チンッ

小さな箱内部に、目的地に到着した事を知らせる簡素な音が耳に入る。自動ドアを潜り、目的の一番奥の部屋へ歩みを進めた結斗。

ピンポーン

インターホンを鳴らし、反応を伺う。  
すると……

ク「はい……っと、結斗？どうした？」

出たのは、ハラオウン家長男クロノ・ハラオウンであった。その顔は、半年前とは違い、何処か大人びたものが感じられた。体形も結斗と同様に順調に、上へと伸びていつているようだった。

結「久しぶり、クロノ。えっと……フェイト、いる？」

ク「……そうか今日だったか」

結「？」

ク「デートだろ？フェイトと……それにアリシアと。今朝、二人の悦びようはそうゆうことだったか。まあいい、それより中に入るだろ？」

結斗が言葉をかけるよりも先に、納得した様子を示したクロノに促されて結斗は、遠慮無くハラウン家に突入していった。

ク「あれからどうだ？仕事は……」

通路の先、ガラスのドアへの通路を先歩く、クロノが尋ねる。どうやら近況の報告のようだ。

結「まっ忙しい日々を送らせて貰っているよ」

ク「さすが双刀<sup>カトラ</sup>双銃だな。引く数多か。全く恐れ入る」

茶化した風に呟くクロノ。それに苦笑を示す。

結「あはは・・・そんなことないよ。それにそっちも色々とやっているみたいだし」

ク「ふふ・・・」

結「あは・・・」

結・ク「お互い様だな（ね）・・・」

二人が顔を合わせ笑い合う。そして二人が辿りつくは、リビング。

ク「フェイトは今、母さんと出かけている。アリシアは・・・」

結「本局の方だね？システムチェックでしょ」

ク「ああ、よく分かったな？」

結「僕たちは、パートナーだしね。それくらい分かるよ」



ク「そうか……そういえば、あの子はどうした？」

座りかけていた結斗へ盆を手にながら、クロノが尋ねる。あの子とは、ティアナのことだとすぐに見当がついた結斗。礼を言い、クロノが持ってきたコーヒーカップを手を取った。

結「ティアナなら、もう僕の家族だよ。了承済みさ……。ん 美味しい」

ク「そうか……。良かった。ティード執務官の遺言が果たされて」

クロノもカップを手に取り、コーヒーを含むが予想以上に苦かったのか少しだけ顔を歪めた。

その様子にクスツと微笑みながらいる結斗。

結「遺言か……」

カップの中にある自分の顔を見ながら、呟いた。酷い顔だなと心の中で苦笑する。

ティードの最後の言葉は幸か不幸か、デバイスの記憶メモリの中に音声データとして残っていたのだ。それを事前に聞いていた結斗は、すぐさまティアナの存在を知り接触する形をとったのであった。

ク「局内でも混乱している。ティード執務官は、優秀な人だったからな。余計にだ……。ティアナはどうしてる？」

結「そんな簡単には、割り切れないよ……。大好きな唯一人の肉親を失ったんだ……。それもあんな小さな時に……」

ク「すまん、失言だった……」

結「……。僕たちの前では、元気な様子なんだけどね。やっぱり一人になると、泣いてるみたいなんだ……」

ク「そうか……」

結「ティードさんの代わりにはならないと思うけど、僕がこれからティアナを視ていきたいと思うよ（ただいま……）（？）」

ク「母さん達が帰ってきたな」

しんみりとしていた空気に一種の清涼剤がもたらされ、一掃された。二人はそれに感謝しつつ、出迎えた。

リ「ただいま……あら？結斗くん」

フェ「えっ!? 結斗ッ!?」

驚く二人に挨拶を交わしながら、結斗はここに来た目的とした。

結「フェイト来たけど・・・」

フェ「あ、うん／＼／＼」

リ「あら 二人とも今日は、デート?」

フェ「ええっ!? た、確かに今日は、そのつもりでいたけど、でもみんなもしてるし。私はずっとこうしたかつたし／＼／＼」

リンディの茶化しに目に見えて動揺し始め、感情がダダ洩れしてしまっている方が一名。

ク「母さん・・・茶化さなくても・・・。それにフェイトも年頃なんです、あまりからかわないでやってください」

リ「そうゆうあなたもエイミィとはどうなのっ?」

思わぬ飛び火を被ってしまったクロノ。しかし目標の、リンディの気を逸らす事に成功したため、手でリンディには見えぬようにフェイトに合図を出した。

頬を赤く染めていたフェイトだったが、結斗に肩をたたかれ、我に返りクロノの合図に気づく。「ありがとう」と小声で礼を言って、結斗の手を引きながら二人はリビングを後にした。

その内、残ったのは息子の恋話に夢中なはた迷惑な母親と苦労顔の息子の絵であった。

ーーーーフェイトの部屋

フェィさ、入って」

結斗が手を引かれ連れてこられたのは、可愛らしい部屋だった。中

に入ると、女の子部屋特有の香りがし、少しだけ動悸を早めてしまった結斗。気を紛らわせるために、部屋内部を観察する。水色のシーツに彩られたシングルベッドの隣には、学習机。その上には、中学生の教科書ではなく、カートリッジシステムに装填する為のマガジンやシエルが広がり、中心には金色に輝く三角形の宝石が鎮座していた。

結「やあ、バルディッシュ。久しぶり」

バル「お久しぶりです、マイスター。サー頑張りましたね。昼間から意中の相手を部屋に呼び込むなんて」

フェ「バルディッシュユっ!？」

結「?」

またフェイトが慌て始めたことに首を傾げる結斗。

フェ「もうっ、バルディッシュたらっ! 結斗、バルディッシュのことなんて気にしないでね」

バル「おや、酷い・・・」

二人の話しに全くついていけず、置いてきぼり感が否めない結斗。それに気づいたフェイトが話した

フェ「今日は・・・その・・・デートでいいのかな？」

結「ん・・・フェイトがその気なら・・・」

フェ「うん！じゃあ、ミッドに行ってもいいかな？紹介したい子がいるんだ」

結「紹介したい子？」

フェ「うん・・・とりあえず行こっ」

嬉しそうに右手で手を引き、左手でバルディッシュを持ったフェイトが先に行く。

フェイトの笑顔に自身も幸せを感じながら、引かれるままに部屋を後にした。

第一管理世界・ミッドチルダロー

転移をし、早々に辿りついた結斗とフェイト。フェイトが会わせたい人というのは、転移場所から徒歩二十分の距離にあるらしく、そこまで歩いていくかたちとなった。

フェ、「そういえば、結斗って双刀<sup>カトラ</sup>双銃って呼ばれているんだっよね？」

結斗の右手に抱きつき、その発展途上とはいえない程のスケールをもったモノをさりげなくかけながら言うフェイト。

ここ数日抱えられてばかりだと他人事のように、考えながらフェイトの質問に答えた。

結「うん、そう呼ばれているね」

フェ「知ってる？今、また違う呼び方が知られてるんだよ？」

結「え？何それ？知らない、どんなの？」

フェ「ふふ……戦女神……」

結「は？」

フェイトの言葉に思わず、脚を止めてしまった結斗。自然とフェイトも歩みを止め、解説に入る。

フェ「結斗の一騎当千の戦闘力とその外形の綺麗さからそう呼ばれているんだよ」

結「ちょっと待った……僕、男ですよ……」

フェ「それは知っているけど、しょうがないんじゃない？髪長いし、小顔だし、綺麗だし……それにもうほとんどこれ、出回ってるよ？」

結「そ……そんな……僕は男なのに……女神なんて……」



世間では女の批評をあびていたことを知り、頂垂れる結斗。

フェ「あはは、諦めるしかないね。あつ、ここだよ！」

フェイトが指差したそこは、そこそこな分譲マンションであった。

結「……ここに僕に会わせたい子がいるの？」

未だ女の批評が響いているのか、少しだけテンションが下がり気味な男の娘。

自分の言葉に少しだけ罪悪感を感じながらも、話しを続けるフェイト。

フェ「うん……この前一ヶ月くらい前に私が仕事で保護した子でね、私が身元引受人になったんだ」

フェイトが自分と同じように引受人をなっていたことに少なからず驚きを示す。

そして尚も話し続けるフェイトの割り込まないよう聞く。

フェ「その子が言うには、どうやら結斗のファンみたいなの……」

結「ファン？」

フェ「うん・・・ちなみに男の子だよ。っとここ、ここ！」

マンションの内部に入った二人が、その扉を通り過ぎようとした時に、フェイトの声で歩みを止めた。

フェ「エリオーー！。いる~~~~？」

チャイムを鳴らし、堂々と扉を開けたフェイト。

結「フェ、フェイトそれだとチャイムする意味が無いよ・・・」

呆れる結斗へ部屋の奥から足音と共にこの部屋の住人が姿を現した。背は低く、7、8歳くらいの燃えるような赤い短髪の男の子だった。

？「フェイトさん、こんにちわ！！・・・？？」

笑顔一杯の男の子、エリオ・モンディエルはフェイトを見たが隣に立つ結斗を見ると、固まってしまった。

エリオの視線を辿ったフェイトは、仲介役として結斗の紹介をしだ

す。

フェ「エリオ、この人が私の友達兼魔法の先生、白銀結斗。結斗、この子がさっき話したエリオ。エリオ・モンディエルだよ」

結「こんにちわ、エリオ」

エ「あ、こんにちわ・・・あの・・・その・・・」

紹介を受けたエリオがしどろもどろになりだす。その様子は、つい先日ティアナの時に見た結斗。

フェ「エリオ、ほんものだよ・・・。結斗がエリオがこの前かっこいって言った、<sup>カドラ</sup>双刀双銃、戦女神だよ」

結「フェイト、戦女神はやめてよ・・・」

本当に嫌そうに愚痴る結斗。

エ「すごいっ！！あの！！結斗さんって呼んでもいいですか？」

結「ふふ・・・いいよ」

無邪気なエリオの撫でながら、返事する。それを微笑ましく見つめていたフェイトであった。

エ「結斗さん！結斗さんはどうしてそんなに強いんですか？」

向かいの席に座るエリオが嬉々として、聞いてくる。あの後、まるで背中を押されるかの様な勢いで案内された結斗であった。フェイトは、エリオの隣に座り、結斗と対面している。

結「エリオ、僕はそこまで強くないよ・・・」

エ「えっ？でも・・・」

フェ「エリオ、結斗はねずっと努力しているんだよ」

エ「なるほど・・・」

結「う〜ん。そうなのかな？僕的には、そんなことないけど・・・」

エ「と、結斗さんは仰っていますが・・・」

フェ「こんなこと言ってるけど凄いだよ。だってね、私が戦っても負けちゃうし・・・それに」

エ「それに・・・？」

フェ「私、なのは、はやて、麗華四人と戦っても余裕なんだよ？」

エ「ええっつ！！？なのはさんとはやてさんと麗華さんってフェイトさんの友達の人たちですよ。どの人も優秀な魔導師って・・・」

フェ「うん、そうだよ。ちなみに結斗は、なのはたちの先生でもあるよ」

結「そんなかしこまったものじゃないけどね。ちょこつとアドバイスしているくらいさ・・・フェイトたちは優秀だからそれだけでいいんだ」

エ「すごいですねっ！！フェイトさん！！」

結斗のフェイトたちへのべた褒めにキラキラと目を輝かせるエリオ。

フェ「もっつ！結斗ったら！エリオ、結斗の教え方がとっても上手なんだよ。だからわたしたちは早く強くなれるの」

エ「やっぱり結斗さんもすごいです！！」

今度は結斗にキラキラの目を当てる。

純真な少年の瞳に見つめられ、苦笑いを浮かべる結斗。

結「……ってこんなの堂々巡りだね」

フェ「だね」

自然と見詰め合った二人が笑い合う。その光景を見たエリオが衝撃の言葉を発する。

エ「結斗さんって……フェイトさんの彼氏さんですか？」

結・フェ「ええっ！！／ふえっ！！」

エ「だってそんなに仲が良いし、二人ともとても楽しそうです」

至極客観的な状況分析をしたエリオにこの歳の男の子は、こんなに色恋敏感だったかと甚だ疑問に思った二人だった。

答えに詰まった二人は、数瞬後答え・・・

結・フェ「／／／／・・・」 「まだ違うよ」

恥ずかしがり俯く結斗と笑顔でサラリと己の願望をいつてのけたフェイト正反対の答えだった。

エ「あはは・・・（頑張ってください、フェイトさん！！）」

フェイトの言動に大体の二人の間柄を察したエリオは、心の中で激励を送ったのであった。なんとも出来た男の子である。

結「ところでエリオは、もうデバイス持っているの？」

話題転回にと今度はエリオの事を聞きたがった結斗。

エ「いえ……まだ……。でも使いたい武器は、決まっています！」

憧れの結斗に自分の事を気にかけてくれたことが嬉しいのか少し興奮した様子のエリオが答えた。  
隣の座るフェイトも、その事には初めて聞いた事だった。

フェ「そうなんだ……。エリオは、何を使いたいの？」

エ「僕は……。槍が使いたいです！」

フェ「槍か……。エリオ、槍の練習したい？」

エ「あ、はい！フェイトさんが許可して下さいなら……」

フェ「うん、いいよ。それに、先生も紹介しちゃう！」

エ「ええっ！？いいんですか？」



フェ「もちろんね、結斗」

エリオの嬉しそうな顔を横目に、フェイトは結斗へと視線を向けた。

結「……来ると思っていたよ……まあ……見るくらいなら……」

フェ「良かったね、エリオ」

エ「……でも結斗さんの使う武器って……剣と銃じゃ……？」

結「ああ、そっか。エリオは知らなかった……僕は、殆ど全ての主要の武器が使えるよ」

エ「ぜ、全部ですか？」

フェ「結斗の本髄は、剣や銃のオールレンジ対応のスタンスじゃないんだ。相手がどんな武器や魔法を使ってくるにも対応できるオールマイティーなところなんだ」

エ「す、すごい……」

結「まあ、悪い意味、優柔不断、節操なしなんだけどね……」

フェ「でも結斗のは、そんなレベルじゃないでしょ？どれも本職の私達よりも強いよ」

エ「つてことは……実質、最強つてことなんじゃ……」

結「大袈裟だなエリオは、僕だつて人間だよ。苦手の部分もあるから短慮に最強つてわけじゃないさ……」

フェ「ともかく……エリオは、結斗から教えてもらつて頑張つて！」

エ「はい……!!」

元気に返事したエリオは、活気に溢れていた。

十分後――

三人は、広場にいた。広場といっても、天然芝生が現生しており、自然公園と表現したほうがいい。

先ほどのエリオの鍛錬を今日少しだけやろうと言う魂胆のようだ。

結「さて・・・エリオは、槍のことについてどのくらい知っているかな？何でもいいよ・・・」

エ「えつと～～～～～長い武器です・・・」

なんでもと言う言葉に戸惑うエリオだが、一番に思っていたことを口にした。それを聞いた結斗は、嬉しそうだ。

結「そうだね・・・槍は長物だね。じゃエリオ・・・これを」

そういつて差し出されたものは、木の棒、棍棒といってもいいもの

だった。しかしその長さはエリオの身長よりも長かった。

エ「これを……どうするんですか？」

結「とりあえず、横と縦に振ってみて。それが終わったら突く動作をしてみてください……」

そういつてエリオから離れ、成り行きを見ていたフェイトの隣に立つ結斗。エリオは、とりあえず手にある二メートル弱の棍棒を握り、振ってみる。

エ「えっ？（お、重い！！）」

あと少しで手から離れてしまいそうになった棍棒。一頻り横と縦を自分なりに振り、突いてみた。終わってみると、手が異常に疲れていて、驚いた。

結「エリオ、どうだったかな？」

「またも曖昧な質問だが、自分の考えを述べればいいと思い、正直に言った。」

エ「えつと・・・重かったです」

結「うん、身体が小さいのもあると思うけど長物は、見た目以上に重いんだ」

フェ「長いって言うのは、長所でもあり、短所でもあるんだよ」

エ「なるほど・・・」

二人の講義に感心するエリオ。それから結斗は、エリオの棍棒を持ち、ある程度はなれる。

結「いいかい、見てて・・・はっ！せいっ！！！いやああっ！！」

シュツ

結斗が流れるような動作で横振り、縦振り、突きをする。その度に空気を鋭く切り裂くような音がエリオとフェイトの耳に入った。

結「フェイトの言ったとおり、短所があるけどそればかりじゃないよ。えっと・・・簡単に言うと、力を逃がさないようにする」

エ「？」

結「今度は、スローでやるよ」

そういつて再び棍棒を横へ振る。振り切った瞬間に持ち手を替え、今度は上方向に半円を描かせ、今度は縦に振り下ろす。次に脚の力を使い、振り下ろした力を前方に出し、突きをした。

フェ「エリオ今の動作の意味分かるかな？」

優しく尋ねるフェイト。

エ「うーんと・・・分かんないです・・・」

目標は明確でも未だ幼い男の子。やはりそこまで難しい事は分からないようだ。

フェ「ふふ・・・結斗の動作は全て繋がっているんだよ。今棒の先が全く止まる事が無かったでしょ？・・・だから余計な力も掛か

らないし、かける必要も無い。しかも強い力が出せるんだ」

結「持ち上げすぎだよ、フェイト。まあ、若輩の身だけどこれくらいは出来るよ」

エ「やっぱりすごいです、結斗さんは!!」

結「ありがと、エリオも頑張れば出来るようになるよ」

エ「はい!!」

フェ「さて……二人とも帰ろっか？」

エ「でも……」

フェイトの言葉に未だやりたりないのか渋るエリオ。しかしそれに反対する結斗。

結「エリオ、もう休んだほうがいい。君が思っている以上に疲れているはずだよ。大丈夫、また教えてあげるから」

エ「・・・はい！！分かりました！」

それに元気答えたエリオ。

それを見届けた結斗とフェイトは、帰路についたのであった。

PM 17:05

フェ「ただいま〜〜」

鍛錬後三人が帰ってきたのは、エリオの家ではなくフェイトのマンションだった。

なんでも週に四、五回はハラオウン家で食事を取っているというエリオの弁。

子供のため心配したフェイトの気遣いだろう。

リ「おかえり〜〜あら、結斗くん先ほどぶり。エリオもよく来たわ」



結「こんばんわ、リンディさん」

エ「こんばんわ・・・」

リ「それでどこまでいったの？（ニタニタ）」

ニタニタ様子のリンディ。やはり娘の恋路は気になるらしい。フェイトもそれが分かっているのか少しだけ頬を染める。

結「どこって・・・ミッドまでですよ」

それに対し、我らが鈍感王は普通に答える。それに事情を知ったりリンディは、我が娘の恋が実るのか本気で心配になった。

リ「フェイト・・・頑張って・・・」

フェ「うん・・・」

結「？・・・あのクロノは・・・」

リ「クロノなら部屋で来客中よ。むふふ」

フェ「母さん？」

リンデイのとてもいい笑顔が気にかかるフェイト。しかしそれにも笑顔しか答えないリンデイ。

リ「行ってみれば分かるわ」

そういつて再び調理をするためにリビングのへ行くリンデイ。  
残された結斗、フェイト、エリオの三人は、クロノのことが気になりだす。

エ「誰でしょうか、クロノさんのお客さんって？」

最近知り合ったばかりのエリオが首を傾げる。

結「多分……」

フェ「……かな？」

二人は予想がついているのか苦笑いをする。リンディのニタニタ顔を見れば一目瞭然だったのだ。

フェ「ここだよ・・・」

玄関から右二番目の部屋がクロノの部屋らしくフェイトが呼ぶ。クロノたちに気づかれぬように三人は、見事なスニーキングでクロノの部屋の扉に近づき、そつと五センチ程開けた。隙間から見えるのは、クロノと・・・

結「やっぱりエイミィだったか」

フェ「うん・・・」

中腰で覗く結斗に対し、フェイトは結斗の上、屈んだ状態。エリオは結斗の下で匍匐前進の状態だ。

エ「仲いいですねクロノさんとエイミィさん」

部屋の中で楽しく談笑をする二人を見たエリオがそういつた。  
エリオの言うとおり二人とも満更でもなさそうな雰囲気を出して  
て所謂お似合いですと言いたい結斗とフェイト。

結「も〜〜なんでクロノは、そんなに鈍チンなのかな？エイミーが  
クロノを好きなのなんて明らかじゃないさ！！」

フェ「（それは結斗もだよ！！！！）」

小声で親友の鈍感さを呪う傍ら『あなたもだよ！！』と声を大にし  
て言いたかったフェイトだった。  
なおも続く二人の観察。

エ「僕もそう思います」

フェ「でもやっぱりあと一押しが足りない感じだよね」

初心な二人の反応を見てフェイトが愚痴る。

？「だよね〜〜兄さんは、へんな所で慎重なんだよね」

結「やっぱり職業柄確信が持てないと、行動できないのかな？」

？「あゝ確かにそれはあるかもゝ。さすがゆう君」

エ「あの．．．結斗さん．．．誰と話しているんですか？」

結「誰って、そんなのフェイトとだよ」

フェ「．．．．．」

結「あれ？フェイト？」

フェ「私じゃないよ．．．」

結「え？じゃあ誰が？」

フェ「ん」

そういつてフェイトは向かって右を指差した。そこには．．．

アリ「ハロハロゝゝゆう君 会いたかったよゝゝ!!」

結「あ、アリシアッ!?!」

フェ「わっ!結斗の馬鹿!!」

バタンッ

フェイトの声も空しく、アリシアの存在に驚いた結斗は咄嗟に扉へ余分な力をかけてしまった。

その後は、容易に想像出来よう・・・

ク・エイ「・・・・・・・・」

結・フェ・アリ・エ「ああは・・・・・・・・」

黙って状況を理解し頬を少し染める二人に、乾いた笑いしか浮かべられない四人。



ク「まったく・・・君たちは子供か？もう中学生だろう。そうゆうことは卒業したらどうだ？」

夕食の最中クロノの先ほどのことへのお説教は、続いていた。テーブルには、七人分の箸と茶碗それにおいしそうに香りを出す料理の数々があった。

リ「クロノそのへんにしておきなさい。エリオが食べたがってるわ」

エ「い、いえ！そんな！！」

とは言つものの食欲が湧いてきて今にも飛び出しそうなエリオに不憫に思ったのかやつとのことでハラオウン家+3の夕食が開始された。

みんな「いただきます〜す〜す！！」



やっと夕食が開始され、勢いよくエリオがいろんなものをかき込み始めた。

結「それで二人は、付き合ってるの？」

ク・エイ「ぶ~~~~~~~~!!」

開始早々に結斗の遠慮ない問いに二人は、口に含んでいたご飯と味噌汁を吐き出しそうになる。

結「うわっ汚いッ!!二人とも、お行儀が悪いよ!!」

ク「ゴホッゴホッ!!結斗の方こそそうだろ!!いきなり聞いてくるなんて!!」

エイ「そうだよ！もっとうこう・・・ナイーブに言ってよ！」

咽ながら文句を垂れる二人に、魚がかかったと笑い出す結斗。

他の二人も二人がどのような状況にあるのか気になるのかこの成り行きを生暖かい目で見ている。

リンディは将来の義娘として、フェイトは義姉として気になるようだ。ちなみにエリオは、凄い勢いで広げられた料理を平らげていつている。

三人の視線がなんだか無性に気になったクロノとエイミィだったがとりあえずと置いておく事にした。

結「ナイーブってことは・・・二人は付き合ってるんだくくへくくほくくくふくくくん」

面白そうにニタニタする結斗。普段は逆の立場をされたばかりだが今回は、違つたため少しだけ嬉しいのだった。

ク「ま、まあ、エイミィ以外に僕の補佐官を務められる人は、いないと思うからノノノノノ」

照れ隠しながら言うクロノ。

結「クロノく少し正直になりなよ。好きなら好きでいいじゃない。  
エイミイもクロノのこと好きなんでしょ?」

エ「あ、うん／＼／＼」

恥ずかしそうだがしっかりと答えたエイミイに更に顔を赤くするクロノ。

ク「え、エイミイ／＼／＼」

結「はは、二人ともおめでとう」

アリ「おめでとう、兄さん!」

フェ「お兄ちゃん、エイミイおめでとう〜」

エ「おめでとう〜おめでとうございます!」

リ「孫が早く見たいわね」

ク「か、母さん!?!」

リ「冗談よ・・・ふふ」

エイ「かんちよ～～」

心臓に悪いジョークを入れられ、鼓動を早めた二人。

リ「99.999%くらい?」

ク「殆ど本気じゃないですか!!」

再びドタバタ騒ぎの夕食。

ク「それでフェイトは、どうだったんだ?」

・  
・  
夕食後コーヒーを飲みながら聞くクロノ。その話題の本人たる人は・

結「なんだって!!」

エ「結斗さん、弱いです」

リビングでエリオとゲームなるものを興じていた。やっているのは、レーシングゲームである。

赤と青のおじさんやその嫁や緑の弟が出演のやつである。

今結斗の順位は最下位。エリオは・・・なんと一位だった。なんでも出来る結斗だがゲームそれもテレビゲームだけは、苦手のようだ。

結「わ~~~~!!また落ちた!!うわッ!今度は、でっかい石に潰された!!」

エ「やった!!また一位!!」

結斗が使う赤と青のおじさんは全てのトラップに引っかけかかっているようだ。エリオの使うキノコは、既にゴールしていた。

そんな傍から見たら微笑ましいと思わずにはいられない光景だった。それを見ながら他の五人は、休憩中である。

フェ「どうって・・・楽しかったよ？」

エイ「フェイトちゃん、クロノ君が聞いているのはそゆことじゃないよ」

さすがにじれったく思ったのか、エイミィも加勢する。

リ「どこまでしたの？A？B？C？」

フェ「え？A、B、C？」

恋のABCが全く分からないフェイト。

アリ「つまりキスくらいしたのかってこと」

フェ「ええ～～～！！し、してないよ！！まだ！！」

リ「へ～～～まだ（・・・）ねえ～～～。どうするの阿里シア、フェイトがほんとにご執心みたいだけど？」

ニタニタとアリシアを見るリンディにアリシアは、悔しげな顔をす  
る。そして勢い任せて・・・

アリ「い、いいもんッ！わたし、もうゆう君とはキスしたから！  
・・・あ・・・」

爆弾発言してしまった。  
静止して顔を強張らせるアリシア。

ク・リ・エイ「なんだって~~~~~!!!!」「なんですって！  
!!!!」

アリシアの爆弾発言に叫びだす三人。フェイトは、予め知っている  
のでそうはならなかった。

ク「ど、どうゆうことだ!？」

慌てて迫るような勢いで詰め寄るクロノ。妹が兄の自分よりもワン  
ステップ大人の階段をいつのまにか登っていたことに驚愕と敗北感  
を感じてのものであった。

アリ「え〜〜と……」

観念したアリシアは、仕方なしに三人に聞かせるのだった……

お話中 ( O H A N A S H I I じゃないよ…… )

リ「へ〜〜夢でね……」

エイ「でも結斗くんも覚えていたわけですから、一概に夢とは言えないのですか？」

夢という酷く曖昧な事例に残念感が否めなかったリンディへエイミイの的確な状況分析をしたコメントが寄せられた。

ク「確かに……だがそれをすぐに勘違いにするとは……さすがというべきか、なんとというべきか……」



呆れかえり鈍感な親友を見つめるクロノ。

フェ・アリ・エイ・リ「うんうん!!」「」

女性四人も一斉に頷いた。

その先には……

結「いゝやゝゝゝゝゝゝ今度は、小さくなったゝゝゝ!!!!しかも  
爆弾つけられた!!!!うわゝゝゝゝん!!!!」

またも最下位にゴールインした鈍感な男の叫びが、ハラウン家の  
居間を満たした。

――フェイトの部屋

エ「えへへ・・・あつたかいです～～」

エリオの悦びの声が隣に体を横たえている二人を嬉しい気持ちにさせた。

今、例によって例の如く、結斗はフェイトの部屋で寝ていた。それも一つのベッドに・・・。

もちろん結斗は、反対を推したのだがフェイトは、聞く耳持たずこの状態になってしまったのだった。

しかしシングルベッドに中学生二人、子供一人はきつい。そのため身を寄せるように川の字で寝るのだった。

フェ「ふふ・・・良かったね、エリオ」

エ「はい～～うれ・・・しい・・・で・・・す・・・。す～～す～～」

やがてエリオが二人より先に寝息をたてる。

結「寝ちゃったね・・・」

フェ「うん・・・。。。。。。聞か・・・ないんだね・・・」

ポツリと漏らす様な声。それは不安の色。

結「エリオのこと？」

フェ「うん……」

いくら仕事で保護したからといっても身元引受人となるのは、普通に考えて不自然だ。フェイトもそれを承知で今日結斗をエリオに会わせたのだった。当然結斗としてもその辺は気にはなるが、自分もティアナを引き受けている以上、少なからずフェイトに何かしらの理由があると思つての配慮であつた。

結「フェイトが言わないならいいよ」

フェ「でも……ううん。……やっぱり結斗には、言っておく……」

そういつて切り出すエリオの事。自分と同じ人造魔導師のこと。親に見離される形で決別した事。

フェ「今では明るいけど最初は、敵意剥き出しだった。誰も信じられない、信じたくないっていうようなそんな目だった。……私

の時みたいに」

結「……」

フェ「だから私はエリオを引きとったんだ。私みたいに変わる事ができるかもって……変わる手伝いが出るかもって……」

結「結果は……」

フェ「うん……」

二人は間にいるエリオを見た。寝心地良さそうにしている。フェイトの行いは、一人の男の子を救ったのだ。

フェ「ありがとう、結斗。結斗が私を助けてくれたから、私はエリオを助けられた。救う事ができた」

結「うん……でもフェイトが助けたいって思ったからエリオを助けられたんだよ」

励ますような結斗の答えにフェイトは……頬を染め……

フェ「……結斗……んっ／／／／」

結「んッ!!??」

瞬間、フェイトの顔が近くなり結斗の唇に軟らかい感触あった。

フェ「んっ!」

結「ふえ、フェイト……」

積極的なフェイトの行動で逃げるように唇を離す結斗。

フェ「大好きだよ、結斗／／／／」

結「ふえ、フェイト／／／／?」

惜しげもなく言うフェイトに一瞬でリング化した結斗。

フェ「おやすみッ!!!!／／／／」

それだけ言うとフェイトは、結斗と視線を合わせないようにうつ向き側を向いてしまった。

結斗は……

結「(え?え?……ふえ、フェイトもなのツツ!?)」

再度奪われてしまった自分の唇に指を当てながら、フェイトの告白を知ったのだった。

N e x t   t o   T A L E 6 6 ! ! ! ! !

TALE 65 デート(フェイト編)(後書き)

きました。ついにフェイトちゃん編！！残りアリシアちゃんと麗華ちゃんです！！  
頑張ります！！

感想お待ちしてます〜〜

TALE 66 デート(アリシア編) (前書き)

前回に続き今回もなんかデートじゃない気がしてきました。

まあいいです・・・

ちよつと今回は・・・ディープっぽい？

とりあえずどっぞぞ〜



TALE 66 デート(アリシア編)

AM7:35

結「んん……ここは……そっかハラオウン家か……」

温かい体温を感じながら身を起こす。隣を見ると静かに眠るエリオとフェイトの姿があった。

フェイトの寝顔を見た瞬間、寝る直前の事を思い出す。

結「(あの……柔らかい唇でキスされたんだよね……)」

ついフェイトの唇を凝視する結斗。

結「ッ!! 僕何を考えているんだッ!!」

そう言い聞かせ視線を解き、床に脚をつけた。一晩中温められた足へ冷たい感触が触れ、ビクッと身体全体が震えた。

結「……顔洗って、少し鍛錬しよ……」

捲れ上がったシーツを再び二人にかけ直し、意識を覚醒するために洗面所へ向かう結斗であった。

マンション屋上――

顔を洗い、意識を急浮上させた後リビングで朝食の用意をしていたリンディ、まるで朝の父親のように新聞を手に行っていたクロノへ挨拶。その後結斗は、マンションの屋上へと登っていた。当然普通には、屋上など行ける訳がないので普通じゃない方法で登った。

ク「それで何をするんだ？」

背後出始めていた太陽とは反対にいるクロノが尋ねてきた。その視線は、これからなにをするのかという興味の色が混じっていた。

結「どうしてクロノが？」

ク「いやなに・・・結斗が普段どのような鍛錬をしているのか気になったんだ。それと参考になりそうだったからだ・・・」

結「そつか・・・まあいいけどね。白銀流はそう簡単には、習得は不可能だし。但し、殊更に口外しないでね。結構知られると厄介なものもあるから・・・」

ク「厄介なもの？」

不吉な言葉に首を傾げざるを得ないクロノ。

結「見てれば分かるよ・・・」

そういつて彼の掌に出現したのは・・・槍であった。そうすると槍を掌の中で2〜3回遊ぶ。槍が彼の周りを縦横無尽に駆け回り、その度の軌跡により円が描かれた。

そこで体重を落とし、刃先を地面から五センチのところまで止めた。

結「はあッ!!!」

ズダアアアアアアアアア

瞬間――一気合一線。一針入魂の如き針突で空気が引き裂かれた。当然彼の前には、何も無い。ただ大気があるだけである。昨日エリオとフェイトに見せた突きよりも速く、鋭く、それでいて破壊的なものということが見えているクロノにもわかった。一瞬ビクツとクロノの身体が震えた。

次に出したのは、ライフル型のデバイスであった。デバイスといっても焰美や瀨、鏡月のような高性能のものではなく、一般局員が持つようなストレージのものだった。

結「ターゲットを設定。距離、1000ヤード。ターゲットの大きさを30センチ」

スト「了解」

ク「おいっ!?!1000ヤードって!?!」

結斗の言葉にクロノは、横から口を出し始める。しかし聞こえていないのか結斗は、無言をきめこむ。そしてマンシヨンの縁に銃身を置き、安定した体勢をとる結斗。

ちなみに1000ヤードとは、メートル換算すると1キロのことである。

やがて彼の周囲の空気が底冷えしているような、酷く冷たいものへと変貌した。

ク「な、なんだ……この得体の知れないものは……」

クロノの中でまた一つ重いものが押し掛かる感じた。

シュンッ

ターゲットが出現。それをスコープで確認した結斗は、躊躇わずに引き金を引く。

ダアアアアアアン

独特の反響音が朝の海鳴市に響いた。その音は、隣町まで聞こえた

のではなかるうかというほどだった。

スト>ターゲットへの命中を確認<

結「次、距離2000ヤード」

スト>了解<

ダアアアアアン

再び響く発射音。

またも命中。

やがて距離が5000ヤード、5キロの地点で――

スト>ターゲット破壊に失敗。5センチ右上方にずれた模様<

結「了解……トレーニング終了」

スト>了解。終了します……<

そしてライフル型のストレージは、消えた。  
今度は、入れ替わりに双刀が後ろ腰に出現。それを驚愕の表情で見  
るクロノ。

ク「……………」

言葉が出ないとは、この事を言うのだろう。それも意識を奪うほど  
に、結斗の並外れた戦闘力に恐れを抱くほどだった。

ク「(なんて……………戦闘力だ……………才能云々の話じゃないぞ  
これは……………。あいつは一体どこまで……………)」

今更に気づくクロノ。彼が感じたのは恐怖。結斗の規格外な力をあ  
りえないと思ってしまった。同じ生物の種族なのかとさえ…………

アリ「兄さん……………」

そこでクロノ肩を叩き、声かけたのはアリシアであった。  
アリシアによって結斗の束縛といってもいいほどの威圧感のような  
ものから解放されたクロノは、ホッと息を撫で下ろした。

ク「あ……………ああ……………ありがとう、アリシア」

素直に礼を言うクロノ。それに答えずアリシアは、未だ鍛錬を続ける結斗を見つめる。その表情は、苦しそうで見ているのが痛々しいと言っているようなものだった。

アリ「兄さん……ゆう君のあれどう思う？」

ク「……正直……恐怖を感じた。結斗の戦闘力は、既に人の域を超えている……」

アリ「うん……私も最初そう思った。でも誤解しないで……ゆう君は、ゆう君だから。それにゆう君があなっただのは、自分で望んでなの……」

ク「望んで？」

アリ「うん……ああやって神経張り詰めて、私達を護ってくれるんだ。なのはちゃんが大怪我をしたのがきつかけだと思うけど……。文字通り神経を擦り減らして……もう何も失いたくないって言ってた」

ク「……」



アリ「私ずっと隣にいたい……いつまでもゆう君が安心して背中を預けられる存在に……」

ク「……ああ、そうだな……」

結斗の冷たく、悲しげな背中を見ながらそう答えるしか今のクロノには、出来なかったのだった。

AM9:30

鍛錬後結斗たちは、朝食をとった。その間、クロノの視線を幾度となく感じたが、気にかけないようにする結斗。そんな二人に疑問を覚えたフェイト、エリオ、リンディ、エイミィだったが聞けずいた。

アリシアは、いつもと変わらなくニコニコとしていた。

エ「あの・・・結斗さん」

朝食後、リビングでイメージトレーニングしているとエリオが話しかけてきた。

結「槍の練習かな？」

今朝の鍛錬をしていた時とは、段違い別人ではないかと思うぐらいいつも通りの結斗だった。

エ「あ、はい！！教えてもらおうと思って・・・」

結「うーん・・・エリオ、ちょっと力について話しをしようか・・・」

エ「力の話ですか？」

促され結斗の隣に腰を落着けたエリオ。それを遠目から見るとクロノとリンディ。現在、フェイト、アリシア、エイミィは自室。何をしているかは分からない。

結「エリオは、どうして強くなりたいの？槍を使おうって思ったのは、少なからず、強くなりたいって思ってるからだよね」

エ「はいッ！もちろんです!!」

勢いよく答えるエリオに複雑な思いを感じながら静かに結斗が言う。

結「……じゃあ覚えておいて……。力は、所詮力だ。それに力は、壊すものなんだ……」

エ「壊すもの？」

理解が追いつかず案の定首をかしげたエリオに詳しく説明する。クロノとリンディも気になるのか、静観している。

結「う〜ん……分かりやすく言うなら……よくテレビのドラマとか本とかでもある、誰かを力で護るところあるよね？武力や知力、魔法を使って……」

エ「ああ、はい。あります……」

分かりやすい事例だったのかやつとエリオにも理解が出来た。

結「じゃあその人は、何を想って力を使ったのかな？」

エ「そんなの・・・護りたかったから・・・」

当然のことに言うエリオ。

護る・・・護るために力を使う。人とは護るものがあれば強くなる  
うとするものだ。

結「正解。でもそれは自分で考えを放棄している。力で相手をねじ  
伏せる。護りたいっていう大義名分を盾にして・・・。力はどこま  
でいっても力でしかない。例え護るための力であっても、力に変わ  
りないし、当然人を傷つける」

エ「？」

いまいち分からないエリオ。しかしクロノとリンディには、否が応  
でも理解してしまった。二人は、自分の頭の回転の速さの呪う。そ  
れほどまでに結斗が言った事が二人にとって重いものだった。

護りたいものが背にある。だから力で護る。しかしそれは自分の戦

う理由を、護りたいものに背負わせてしまっていると、結斗は言っているのだ。

結「いいかい、エリオ。力は、自分のために使うんだ。どんな状況でも、自分の戦う理由を、自分以外に求めちゃいけない。それは、逆に護りたいものに業を背負わせることになる」

エ「結斗さんは……」

結「うん、自分のために戦っているよ。僕が護りたいんだ。誰のためにじゃない。自分のために……」

エ「う……ん……」

唸りだすエリオに苦笑しエリオの頭を撫でる結斗。

結「はは……今は理解できなくていいよ。いつか思い出して。逃げちゃいけない。自分が力を振るって傷つける人がいることから」

エ「はい……」

結「さて！話しは終わり！いこっか？（ストーーーーーッブー！）

アリシア？」

エリオと共に玄関へ向かおうとしたところ、リビングへはいつて来たアリシアに通せんぼされた。

アリ「ゆう君は今日、私とデート！忘れないでよッ！..！」

頬を膨らませるアリシア。

結「ああ、そつか。そうだった・・・エリオ〜（いいです！いいです！..！また今度教えてもらえるなら）そう？..ごめんね・・・」

アリ「・・・わたし悪い事しちゃった？」

結「ま、まあ最初にアリシアとのことだったから、悪い事じゃないよ。それで？..どこいくの？」

アリ「とりあえず、一緒に来て！」

結斗の腕を抱きながら、アリシアは急いで玄関へ向かったのだった。

リ「行つたわね……」

ク「はい……」

残されたリンディとクロノが視線の先にある、二人を挟んだ机を見る二人。

いまだに結斗の言葉が頭から離れない。

リ「あんな……まだ……13歳の男の子があんなことをいうなんて……」

ク「ええ……あいつは、全てを背負って戦っている。誰の責任にするわけがなく、自分を先頭に立たせ、みんなを護っている。例えば敵でさえも傷つける業を背負っている……」

リ「結斗くんが局に居れば、局も変わるわね」

ク「はい……間違いなく、組織のリーダーに相応しいタイプだと思えます」

リ」でも……あんなことしてたらいつか潰れちゃうわ、結斗くん」

ク「それに関しては、大丈夫かと……。アリシアやフェイト、なのははやてたちがそんなの黙って見ているはずがありませんから」

リ「そうね……」

二人の考えが行き交う中、リビングへ再び顔を見せたエイミィをその後交えて談笑をしたのであった。

――マンション前

アリ「これ……」



腕に抱きつきながらアリシアは、不安そうに一枚の髪を手渡した。それを受け取り中を見る。すると結斗の顔が一変、

結「あの、困ったちゃんは!！」

そうだったのだった。正直アリシアも同意見だった。家族となった自分達にこんな大事なことを隠すなんてと思った。しかし判る気もした。つい先日家族となつたばかりなのだ。まだ遠慮というものがあるのだらう。

だがやはり信用されなかつたみたいで少しだけ悲しい自分がいた。

結「でも・・・いいの?アリシア、デートなんじゃ・・・」

アリ「ゆう君、関係ないよ。ゆう君と一緒にならどこでもデートだもん。ほら、行こッ!！」

そういつて二人は、陣に乗って目的地第一管理世界に向かう。転送の瞬間一瞬風が吹き、結斗が持つ紙が大きく晒された。

そこには『授業参観』と大きな字があり、ところどころに皺がよっていた。

ティアナside

ティ「はあ~~~~」

私の溜息が軍事学校の初等科に洩れた。その理由は――

先「それでは今日は、保護者さま方と一緒に実践経験を積んでもらいます」

このためだった。今日は、軍事学校の授業参観の日だ。この学校、卒業後は士官候補生で局の訓練校に入校する事ができるのだ。当然、

相応の実力が必須なわけだが……。  
以前からティード兄さんみたいな執務官になりたかったから私は、  
すぐにここに入った。だけど私には兄さんみたいな才能がなかった。  
頭も良くないし、射撃も出来ない。

ただ子供だからと言われればそれまでだが、他のクラスメイト達は、  
違った。どの子も優秀な親を持ち、その才能を持っている子達ばかり  
だった。何も無いのは、わたしだけだ。

先「さてまずは、みなさんの保護者様方がどのように実戦を経験し  
ているのか見てみましょう」

いつ外に出たのか定かでないが、いつのまにかわたしを含めた三十  
人弱のクラスとその親たちは、訓練場にいた。

そこで披露される親たちの勇姿。近距離の人は、シュミレーション  
の相手を。遠距離の人は、ターゲットを狙い打つことをしている。  
やはりどの人も優秀で素晴らしい成績を上げている。それを見る子  
供たちは、目が輝いている。尊敬の眼差しをあげてばかりだ。

ティー「はぁ……」

再び溜息を吐く。ティード兄さんが生きていれば、あの中に私も入  
っていたのだろう。けどもういない。ティード兄さんは、死んで  
しまった。

そう思うとツンと鼻をつく感覚がわたしを襲う。せめて涙は流さま  
いと努めた。

そこで浮かぶ顔。

新しいわたしの兄。結斗さんーあの人は、わたしを優しく家族に迎え入れてくれた。アリシア姉さんも焰美姉さんも澁姉さんも・・・

でもまだ私事を言えない。四人は、優秀だ。結斗さんはもちろん。アリシア姉さんも結斗のパートナーだし。焰美姉さんと澁姉さんは、結斗さんのデバイスだしーだからこんなことで時間を割いて欲しくないのだ。

先「次・・・えつと・・・ティアナ・ランスターさんの保護者様」

その時呼ばれるわたしの名前と保護者。当然進み出る人はない。当たり前前だ。迷惑が掛かると呼んでいないのだから。でもー

ー

なんで悲しいんだろう。

心が苦しいよー

ク1「なああいつの親っていないんじゃないか・・・」

ク2「さあね〜分かんないわ。だってわたしあんな何も出来ないような子と友達じゃないし〜」あはは「

クラスの子の言葉がわたしを穿った。

分かっていた事・・・

わたしには、もう・・・誰も・・・

―――はい

声が聞こえた。その途端クラスメイト、親たちが一斉にそちらに向き直る。わたしもだ。ざわつき始める。

そして歩いてくるのは二人の男女。異国の長い黒髪を靡かせ落ち着き、戦士としての風格を放つ男性。それに従うように後ろに控える金髪、翡翠色の瞳の女性。

ティ「兄様、アリシア姉さん」

零れた言葉だった。

ティアナ side out

転送後すぐに大切な家族の下へ急行する結斗とアリシア。

結「つとにッ！ティアは、どうしてこんな大事なことを黙ってるかな？」

先を早足で行く結斗と同じく後ろへつくアリシアへ問うた。

アリ「多分だけど・・・言い出しにくかったんじゃないかな？わたしたち家族になってまだ日が浅いし・・・」

無難な解答でやり過ごすアリシア。

結「ほんとにツ！そんな律儀なところティードさんに似なくても、家族に年月なんて関係ないのに！」

アリ「ほんとだよ〜」

そう愚痴りながら二人は、ティアナの通う学校の門を潜った。

歩き出すと丁度授業なのか大きな団体が訓練場にあることを知る二人。そしてその輪に入らない、入っていない生徒を見つける。奇しくもそれは二人の家族であった。

その背は、か細くクラスメイトやその親たちから威圧されてしまっているかのようにだった。

先「次・・・えっと・・・ティアナ・ランスターさんの保護者様」

結「はい」

妹の名が呼ばれ、結斗とアリシアの両者は躊躇わず、そこへ突き進んでいく。

返事と共に向けられる視線。それは驚愕の眼差しが殆どであった。

結「すみません、遅れました」

先「あつ・・・は、はい！今回は、授業参観とのごことで保護者様方の戦う姿を見せていただき、それから子供たちに学んでいただきませ

結「分かりました」

返事をし、自分達の妹の下へ行く二人。

ティ「兄様・・・アリシア姉さん・・・」

ティアナの言葉も驚きを含んでいた。呼んでもいないのにきてしまったことに驚いているのだろう。

アリ「ティアちゃん、どうして言わなかったのかな？」



凄い笑顔で妹に言うアリシア。

ティ「あの……その……」

結「まあとりあえずは、先生に言われたことをするよ。アリシアは、ティアと見てて」

アリ「は〜〜い」

元気に右手を挙げ、左手でティアの手を握ったアリシアの姿を見て満足したのか結斗は、遠距離のトレーニングへ向かった。

アリシア side

わたしは今、ティアちゃんの手を握ってゆう君を見ている。既にトレーニングは始まっている。ターゲットをより正確に打ち抜くものだ。ゆう君は、それを難なくこなしていく。

周りは、その光景に圧倒されているようで見つめるしか出来ない。

アリ「ティアちゃん、どうして今日のこと言わなかったのかな？」

隣で所在無さ気にいるもう一人の可愛い妹に問いかける。

ティ「……言えなかった……」

アリ「違うよ、それは。言えなかったじゃなくて、言わなかった」

ティ「……」

アリ「ねえ……悲しいよ。ティアちゃんとは家族なんだから言つて欲しかった」

ティ「ごめんなさい。でも家族になったの最近だし……迷惑だし……」

アリ「うっ……ん……これゆう君の受け売りだけど……家族に時間は関係ないよ。それに迷惑なんかじゃないんだ。家族からかけられる負担なんて迷惑にはならないんだよ、絶対……」

ティ「うん……」

嬉しいのか俯くティアにまた一步心が近づく事が出来たと思った。

ピーーーーー

そこでトレーニングの終了音が響いた。そこには当然のことのように全ての目標を破壊し、悠然と佇むかっこよくて大好きなわたしのマスターがいた。

アリシア side out

結「ふう……終わりっとな……」

結斗から洩れる言葉に回りは、微動だ出来ない。それを横目にしながら結斗は手を繋いでいる二人の下へ歩いていく。

アリ「お疲れ様、ゆう君」

テイ「兄様……」

二人をきっかけに意識を取り戻したかのように他のクラスメイトや親たちが騒ぎ出す。

ク1「あの人……双刀<sup>カトラ</sup>双銃じゃ……」

ク2「そんな！だってあの子の親って！！」

結斗の容姿や経歴は明かされているが、家族構成などの個人に関する情報は、一切公開されていない。そのため彼の妹の立場にあるテイアナに嫉妬の眼差しが集まる。

結斗への一般的な周りの見識は、一騎当千の戦闘力。戦場を華麗に舞うかのような容姿。管理局の切り札。空と海の皇太子等などの一人の人が配する称号を大きく上回っている。

結「間に合ってよかったよ・・・」

周りの評価を物ともせず結斗は、パートナーと妹に話しかける。視線は彼に固定されている。しかし一部はアリシアの方も向いていた。アリシアも結斗のユニゾンデバイスとして広く名が知られている。優秀なユニゾンデバイスで多くの任務を結斗と共に解決しているのが確認されているためだ。

そんな彼女を見ながらティアナは、また考え始める。

「・・・やっぱり兄様とアリシア姉さんは凄い！・・・でもわたしなんて・・・」

ポンッ

ネガティブな考えをしていると不意に頭に温かいものがティアナに乗せられた。

結「ティア、君はまだ小さい。出来なくて当たり前。（でも・・・）ティアは僕たちの妹だよ？それにティーダさんの妹なんだから才能がある」

ティ「・・・」

アリ「始めは誰だって初心者！ゆう君もティードさんも・・・ですよ？」

ティ「！・・・はいっ！」

二人の励ましに元気を取り戻すティアナ。しかし未だ不安の色は取れない。しかし今二人がしてあげられるのはここまでなのだ。後は、自分で乗り切るしかない。どうかこの子の進む先に幸があらんことをと祈るばかりの結斗とアリシアだった。

P M 1 5 : 0 0

現在結斗とアリシアの二人は、ティアナの学校の校門前にいた。ティアナを待つためである。

それだけで遠目から彼らを好奇の視線で見つめる者が多々ある。有名な彼らには仕方ない事だが、いい加減この視線に飽き飽きな彼らだった。

ティ「兄様~~~~、アリシア姉さ~~~~ん」

校舎から走ってくるティアナ。

結「よし、ティアが揃ったところでここを離れるよ！」

アリ「さんせ~~~~い!!」

ティ「ええっ？」

ティアナの驚きを尻目にすぐにその場を離れた三人だった。

走ること数分目的の場所に辿りつく三人。

ティ「兄様・・・スーパーってことは今日は、私の家に泊まるの?」

結「うん・・・あ、もしかして迷惑?」

ティ「そ、そんなことない!! / / / / /」

首が取れんばかりに左右に振るティアナ。

アリ「ティアちゃんはゆう君好きだもんね〜」

ティ「ね、姉さんっ!？」

アリシアのからかいに頬を染めるティアナ。

アリシアの言ったとおりティアナは結斗のことが大好きなようだ。

ティ「(だ、だって・・・かっこいいし、優しいし、強いし／／／／  
／)」

一人心中で吐露するティアナ。

それを見ておもしろかったのか今度は結斗に向き直るアリシア。

結「ん〜？僕もティア大好きだよ」

事も無げに言う我等が主人公。

ティ「はう／／／／／」



もっと頬を朱に染めるティアナ。それをふふと微笑みながらアリシアが今晚のおかずの話しをしだす。

アリ「ゆう君……今日はなに食べるの？」

結「そうだな……ティアは何食べたい？」

ティ「わたしは……あれが食べたいです！」

アリ「あれって……あれ？」

浮かぶはこの前作った料理。

結「よ……しじゃああれを作りますか！」

そういつて意気揚々とスーパーへ突入する結斗だった。

デデンッ

と効果音がつけたくなる様な料理がランスター家のテーブルに並べられる。どれもレストランに置いても遜色ないほどの出来栄である。

アリ「あ、相変わらずゆう君の料理は凄すぎだよ・・・」

ティ「うん」

それを見た二人が感想を漏らした。

結「さて、それではいただきます」

ティ・アリ「いただきます」

ティ「そついえば兄様」

結「ん？どしたの？」

ハンバーグを切るティアナが結斗へ問う。ティアナが結斗へ頼んだのはハンバーグだった。結斗のそれはレストラン顔負けの美味しさである。

ちなみに麗華もこれが大好物である。

ティ「焰美姉さんと澪姉さんは？」

結「ああ〜あの二人は、今日はいないよ。一応ね・・・」

アリシアとデートのために連れてこれなかったとはいえなかった結斗。理由はどう考えても恥ずかしいためである。

アリ「だって今日わたしとゆう君デートだったんだよ？」

結「ぶふっ！！」

慌てて口に含んだものを吐き出すところなんとか持ちこたえる。

ティ「ええっ！？じゃ、じゃあ今日は大事な日だったんじゃ？」

アリ「い・い・の わたしは、ゆう君の側にいらねばいっだって  
デートだもん」

ティアナの不安の色を示した声に笑顔で答えるアリシア。その様子  
に少しだけ安心したティアナであった。

ちなみに対面に座る結斗は……

結「／／／／／／／／／／」

アリシアの発言で首まで真っ赤にしていたのであった。  
なんとも初心な男子である。

例外なく人が眠る時間、夜。どこの世界でも夜は、静謐としていて  
夜空には、満点の星が輝いている。暗闇を照らす月光と人がもたら  
した電気という光。  
今、結斗はそれをテラスから出て眺めていた。

アリ「ゆう君・・・」

しつとりと闇に身を晒したのは、アリシア。自然と結斗の隣に並び、  
それに何も言わない結斗。  
彼にとってアリシアは、家族。そしてパートナー。身近な女の子。  
e t c . . . である。  
二人は、強い絆が結ばれている。

結「ティアは？」

アリ「お風呂」

結「そっか・・・」

交わした言葉が夜天へと上がる。

結・アリ「……………」

それだけの会話で空間が静まる。しかし息が詰まる沈黙ではない。それは静寂。二人とも何処か安心しているのだ。

アリ「ねえ、ゆう君……」

結「ん？」

アリ「今朝どうして兄さんに見せたの？」

鍛錬をと続けるアリシア。結斗の人を超えた力。行き過ぎた力。努力が最大限に実った力のことを言っていた。  
それは見る人によっては恐怖、嫉妬などになる場合がある。それをなぜクロノに見せたのか、と聞いているのだ。

結「分かんない……………ただ……………知って欲しかったのかな？」

自分のことなのに酷くあいまいな答えをされて釈然としないアリシアだった。

アリ「……ゆう君……」

ギョッ

再びマスターの名を言いながら、アリシアは結斗の背中に回り後ろから抱き締める。

アリ「どんなこと言われても……あっても……わたしはゆう君のパートナーだからね……わたしはいつでもあなたと一緒に……」

結斗の肩に顔を埋めながら言うアリシア。

結「ありがと……アリシアがいるから僕は頑張れる……」

アリ「ゆう君、先に謝っておくね んんっ」

結「何をっ？……っ！？」

謝罪の言葉を問い返そうと思った結斗が見たのは、アリシアの円らかな瞳。翡翠色に輝くそれは、誰よりも澄んでいて唇の感触をも忘れ

て、安堵を齎す。

そのため自然と抱き合つかのように結斗もアリシアの背中に優しく手を回した。

アリ「んんっちゅぽっ……んんっ」

結「んむ、ちゅ、ちゅぶっ、んむっ……」

積極的なアリシアに促され……というよりなにより望んでしてきたアリシアのために結斗も出来るだけ強張らないようにアリシアにキスをした。

そんな結斗の一生懸命な態度が嬉しく感じ、それを舌で表すアリシア。

やがてどちらからか二人の重なっていた部分が離れる。  
すると……

ボンッ！

結「きゅ……// // //」

一瞬で顔を真っ赤にした結斗がショートした。自分のやったことを思い出したのだろう。



アリ「ふふ／＼／＼ねえ、ゆう君？」

結「にゃ・・・にゃに？アリシにゃ・・・／＼／＼／」

噛み噛みのしかも猫語になってしまつ結斗。

アリ「（な、何？この生き物とってもかわいいんですけど！！／＼／＼）大好き」

結「にゃにゃっ！！／＼／＼／」

アリシアの言葉にまた一段階朱色を染める結斗。それを見るアリシアがまた悶える。という素晴らしいサイクルが出来上がっていた。

結「にゃにゃにゃ~~~~~／＼／＼／」

それから結斗が普通に喋れるようになったのは、十分後だった。

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
6  
7  
!  
!  
!  
!

TALE 66 デート(アリシア編) (後書き)

最後の結斗めっちゃかわいくしました。

感想あれば欲しいです〜

さて次回は、おまぢかねのあの人です!!

TALE 67 デート(麗華編)(前書き)

やっちまった!!!

でも後悔はしてない!!

早速どうぞ!!

TALE 67 デート（麗華編）

朝。小鳥が群れを為して陽気に澄み渡った空を駆け巡る。彼らが見つめるは、早朝訓練に身を付しているものか。はたまた散歩の出かける人か。そのパツチリとした瞳に多くのものを写す。一羽の鳥がある構造マンションのテラスに降り立つ。それが見るものはカーテンの中。中は薄暗く、朝の光のみが見渡せる範囲であった。

カシャッ

視界の隅で何かが擦れる音。驚いた鳥は、すぐにまた大空へと舞い戻って行った。

結「んん・・・」

意識が浮上する感覚が身を包む。布団から感じる温かさを恋しく思いながらも、瞼を開ける。

結「../../../../な、何してるの?」

起床一番結斗の発した言葉はそんなものだった。彼の視界には、隣に眠るティアナと……。

アリ「ゆう君のかわいい寝顔を見つめてたの」

にこやかに嬉しそうな顔をしたパートナーのアリシアだった。

結「も、もう……アリシアって男の寝顔なんて面白くもなんともないでしょ？」

自分だけ寝顔を見られたことが不公平だと、ちよつとばかり不機嫌な結斗。

アリ「そんな事ないよ〜。わたしゆう君の寝顔好きだもん」

事も無げに言うアリシア。どうやらアリシアには、逆に意味の効果があつたようだ……。

ティアナを挟んでの会話。普通なら起きてもおかしくなくらいの声で喋っているが、ティアナには起きる気配が無い。

結「よく眠ってる……」

あるところに目を向けながらティアナの寝顔をみつめる結斗。視線の先には、大事そうに掴む結斗とアリシアの服の端。大事そうに握られ、それを握る事で安心感をえているかのようにであった。

アリ「安心したんだよ・・・きつと・・・」

昨日結斗とアリシアが突撃していった授業参観。このことがきつかけでティアナは今まで掛かっていた錘のようなものを吹っ切れた感じであった。そして笑顔が増えた。これが二人にとって嬉しいの一言だったのだ。

ともかく二人とティアナとの作られていた大きな壁は、突き崩されたのだ。

そして一番に願ったのは、一緒に眠ることだった。そのため三人は、同じベッドで寝ている。

結「よかった・・・しよっ」

安堵しながら結斗は、ベッドから降りる。

ティ「んんんんんん」

結「チュッ」

その時離れたティアナの手が所在無さ気にベッドのを彷徨つ。その手を取り、結斗はキスをする。するとアリシアの服を掴んで収まった。

アリ「帰る？」

結「うん・・・ちょっと家を開けすぎたから、心配になってきた・・・朝ごはんは作っておくよ。もう少し寝てて？」

アリ「分かったよ、ゆう君。行ってらっしゃい、あと大好きだよ」

結「も、もう／＼／＼」

アリシアのからかいに頬を染めながら答える結斗。そして眠り始めるアリシアを見ながら、寝室を後にした。



――第98管理外世界・地球

AM9:25

ティアナの家出た後、転送ポートを経由し、結斗は地球に降り立った。時刻は朝の9時30分。ちらほらと通りを歩く人を見かけながら結斗は我が家を目指す。

結「ただいま〜」

シューシュー

元気よく帰宅の声を掛けたが帰ってきたのは、静寂。不思議に思うが、リビングにいるのかと決点づけ、慣れた動作で自分のスリッパを履き、リビングを目指す。

結「ただいま〜」母さん〜？麗華〜？焰美〜？瀨〜



結「ど、どうしたのさっ!?二人とも」

余りの慌てように結斗も驚きを隠せないでいた。

しかしそんな事お構いなしに、二人は自分達の入ってきた扉に向き直り……

焰「逃げるのじゃっ!!--ゆう!!--」

静「今すぐにお逃げください!!--」

必死に叫ぶ。

揃っていわれ理解が出来ない結斗。

結「逃げろって?どゆこと?」

焰「いいから!!--ああ来てしもつたっ!!--!!--!!--!!--!!--」

バ-----ン

今度扉を放ったのは……

結「麗華に母さん？ただいま・・・」

見慣れた二人だった。

しかし二人は返事が無い。しきりに下を向いてばかりだ。

澁「ゆう様はわたしたちが守ります！！」

意気揚々の焰美と澁、変なオーラを身に纏った麗華と美緒。またも理解が出来ず頭を抱えそうになるが・・・。

麗・美「「ゆう~~~~~／ゆうちゃ~~~~~ん」

二人の獣の雄叫びで中断させられた・・・

結「へ？」

焰「あの二人昨日からああなのじゃ・・・ゆう成分が足りないとか何とかであんな風に・・・」

澁「抑え様にもあの二人ですので・・・」

解説をする二人。しかしその間にもジリジリとにじり寄ってくる麗華と美緒。その目は、欲望の塊だった。

結「た・・・食べられちゃう・・・」

思わず口にする言葉。まさにその通りだった。

今の麗華と美緒は普通じゃない。人間の理性にたかが外れてしまったようだ。さながらどこからどう見ても――――

変態のそれである。

麗・美「いただきます~~~~~す」

澁「させません!」

焰「ゆうは我等が護る！！」

頼もしい二人の背中に隠れる。  
帰宅後も賑やかな白銀邸であったのであった。

5分後・・・

麗「はあ~~~~~幸せ」

美「わたしも~~~~」

理性が復活した二人が満足気の様子。

熾烈な戦いは麗華と美緒の勝利に終わった。

焰美と瀨も、健闘したが相手は麗華と美緒である。

それも結斗という極上の餌が目の前にあればいくら結斗のパートナーのデバイス二人でも、歯が立たなかつた。

ちなみに麗華は、鏡月をセットアップすらしてない……。美緒は言わずもがな……。乙女の力とは、未恐ろしいものであることを再認識させられた瞬間であつた。

敗者二人は、足元に転がっている。この待遇はあまりにもかわいそうなので、後でなにか好きな事させてあげようと誓う結斗。そしてそれを考えている結斗は……。

結「はあ……」

悦ぶ二人見ながら溜息を吐いていた。

結「ほんとにふたりは……。どうしていつまで経っても成長しな  
かな〜？」

麗・美「そこにゆう（ちゃん）がいるから！……」

結「……」

親バカとブラコンにもはや呆れてモノも言えない。結斗は、ソファに座らされながら悩む。  
今の彼の態勢は、美緒に抱きかかえられ座り、麗華を膝に乗せながら座る。

美「やば……眠たくなってきた……」

結斗の肩上で目をトロンとし出す美緒。もちろん結斗から睡眠剤の類は発生していない。

麗「わたし……も……」

膝元で身体を預ける麗華も結斗に凭れ掛かって来て、欲求を言い出す。

結「ちょっと二人とも……はぁ……くすっ」

漣「ゆう様？」

二人が眠り始めそれを見た結斗は、小笑みをし出す。ようやく復活してきた焰美と漣が疑問に思うが……



結「内緒」

口元に指を当てるだけで教えてはくれなかった。

結「（どんな夢を見てるのかな？まあ・・・二人のこんな仕草も久しぶりだしいいかな？）」

また不適に笑う結斗。その前後には、幸せそうにこれ満足だという表情の麗華と美緒であった。

六年前――――

わたしは弱かった……。何もかも……。  
心も……。  
体も……。

家族で交通事故に遭った。原因は、反対車線の車の脇見運転。  
被害は……。両親の命……。

わたしだけが助かった。  
その事がわたしに重く押し掛かった。  
お父さんとお母さんの命を奪ったのは、わたしじゃないのか？  
もちろん容疑者の運転手が悪いのは明らかだけど、わたしだけが生き残るなんて。だから……。

わたしがお父さんとお母さんを殺した？  
と思っていた。

病院での治療でわたしは一命を取り留める。足の骨が折れていたり、腕を怪我していたりなどの比較的軽い怪我だった。

真「はじめまして、舞ちゃん。わたしは黒堂 真理くろどう まり」

わたしが目を覚ました日の次の日、若い女の人がわたしの病室にやってきました。後ろには少し年上の男の人と、わたしをさっきから見つめ続けている男の子がいた。

真「こっちは、夫の巽たつみと息子の燈夜」

巽「はじめまして」

燈「よろしく・・・」

男の人は、丁寧に男の子はぶっきらぼうに挨拶してきた。

真「今日はね・・・」

要約すると、わたしがこの人たちの子供になるということらしい。なんでも真理さんは、わたしのお母さんの妹にあたるひとみたい。後継人になっていてわたしを引き取りに来たとか・・・

真「返事が決まったら教えてね？」

その日はあっさりと引き上げる真理さんと巽さんと燈夜くん。その姿をみながら今のことを考える。

返事つていつても受けるしかないじゃない。子供一人で生きていけるほど世界は優しくはない。

一晩悩んだ末わたしは、話しを受ける事にした。

次の日また真理さんが尋ねてきた。しかし今度は、燈夜くんの二人だけだ。巽さんは仕事らしい。

とりあえずとわたしは昨日の返事をする。

わたしの返事に悦ぶ真理さん。

それにちよつとだけ嬉しい表情をしてくれた燈夜くんだった。

それから毎日二人は、わたしのお見舞いに来てくれる。たまに巽さんも一緒だ。

嬉しい事ばかりだ。でも一つだけ誤算があった。

わたしの足が一向に動かないのだ。骨折は完治しており、至って健康そのもの。しかし動かない。

何が原因か分からないとの担当医の先生の話し。  
そして一週間が経過した。

今は真理さんがわたしの担当医と話しをしている。そのため病室には、わたしと燈夜くんの二人だけだ。

燈「……………」

燈夜くんは無口だ。でもそれは何を話せばいいのか分からないと彼から偶にでる仕草から分かった。

頑張って話しかけてくれようとしている彼が嬉しかった。

燈「……………あ……………もうっ！！考えるのめんどくさい！！」

忍んで微笑んでいると突如吼え始めた燈夜くん。わたしは笑っていた事がバレタのかと思い、ちよつとビツクリしてしまった。

しかし彼の言葉は全く予想とは違うものだった。

燈「なあ、舞。どうしてそこから動かないんだ？」

舞「えっ？……だって足が動かないんだもん。仕方ないじゃない・  
」

燈「違う……お前は、自分から動こうとしてない・」

舞「っ……るのよ」

燈夜くんの勝手な言い分にわたしの何かが切れてしまった。

燈「えっ？」

舞「燈夜さんに何が分かるって言うのっ！……!?」

わたしの叫び声が、病室に響き外の木に止まっていた鳥達が飛び去ってしまった。

舞「お父さんとお母さんが死んじゃったんだよッ！！わたしにもう家族はいないの！！！」

燈「それは・・・俺達が家族に・・・」

舞「結局は他人でしょッッ！！血の繋がりも無いし、姿も似てない！！！」

感情の咆哮が収まらない。出来もしなかった。

燈「・・・・・・・・」

舞「それにわたしは人殺しなんだよ！！！」

燈「お、おい・・・それって・・・」

衝撃的な言葉に目を剥く燈夜くん・・・  
わたしは聞かせた・・・。事故の時を――――

燈「そうか……」

ただ一言言っただけだった。

舞「だから言っただけでしょっ！？わたしは人ごろ（それは違うな……）え？」

燈「舞、確かにお前だけが生き残った。だけどそれはお前の父さんと母さんが望んだからじゃないか？」

舞「……え」

望「……だ？……お父さんと……お母さんが？」

燈「お前の事故の話し、俺母さんから聞いてたんだ。ちよっち盗み聞きだが……。」

ともかくお前は発見時両親に抱きかかえられていたそうだ」

舞「お父さんと……お母さんが……」





いっぱい泣いた。それを抱き締めてくれて慰めてくれた。  
だからわたしは、燈夜お兄ちゃん（……………）が大好きになった

麗華 side out

麗「んん……」

背中にあつたかい感触を感じながら、瞼を開ける麗華。  
その温かさが心地いいのか後ろを向いて抱き締める。

ムニユ

そこで顔を柔らかい感触が包んだ。

麗「あれ？ゆう、胸なんてあつたかしら・・・」

未だ半分寝た状態なので、そんなおバカなことを考える麗華。

麗「ってゆうにそんなものあるわけない！！！」

ガバツと起き、自分を包んでいた正体に目を向ける麗華。  
正体は・・・

美「ぐ~~~~zzzzzz」

母、美緒だった。  
予想通りというべきか、外れて欲しかったというべきか複雑な心情  
で目標を搜索する。

麗「ゆうは何処にいったのよ~~~~」

リビングへと木霊する声。それに答えるのは……

美「むにゃむにゃ……むふふ」

と、だらしなく微笑む母親。と、

焰「少しは静かにしたらどうじゃ？」

足元の絨毯に座る焰美であった。

二の次を継ごうとしたが、それは遮られた。

焰美の膝を枕に眠る結斗によって……

ソファは麗華たちが使っている。よってソファがないため絨毯の上で眠っているようだ。

焰「お前達が我らを打倒した後、ゆうが要望を聞いてくれたのでな。我は、膝枕を所望したのじゃ」

麗「ずるいつ……！」

静「そんなことありませんよ……」

闖入者、澗が現れる。

澗「麗華さまたちはずっとゆう様をおんぶに抱っこしていたんですからいいじゃないですか・・・はい、焰美交代です」

焰「むむ・・・仕方ないのう」

ぶつぶつ言いながら今度は、澗の膝に乗せられる結斗。麗華からみると、羨ましすぎる光景だった。

麗「わたしもゆうを膝枕する～～!!」

甘えた声で立ち上がるうとするが・・・

麗「あれ？ちよっとお母さん!ど・い・て・よ～～」

美緒の決まりまくっている抱き方に全く立ち上がることが出来なかった。しかし美緒は未だ起きる気配がなく、麗華という最高のクッションを自身で包みながら眠るばかり・・・

澗「し～～麗華さま静かにしてください。ゆう様が起きてしまいます・・・」

騒がしい麗華を注意する瀨。

「――そんなこといって、自分だって私の立場だったら騒ぐくせに・

・  
そんなことを思いながらむむくく唸る麗華。

実際問題、瀨と結斗の髪を撫でている焰美も麗華と同じ状況になっ  
てしまっていたら、麗華とそれ以上に騒ぎまくるだろう。

鏡「麗華・・・結斗も疲れているんだから少しは休ませてあげたら  
？」

胸元の白い宝石鏡月からそんなこといわれ、反撃とばかりに言い返  
す。

麗「そんなのわたしの膝枕でもいいじゃない!!」

鏡「それが出来たら結斗は、苦労しないと思うわ・・・」

瀨・焰「うんうん・・・うむ・・・」

鏡月の言葉に同感で二人は、思いつきり頷く動作をする。

麗「むむむ・・・」

呻く麗華は、少しでも気を癒そうと結斗の寝顔に注目する。

麗「はあ~~~~かわいい~~~~」

うつとりとする麗華。そしてまた美緒の拘束から逃れようとするが・  
・失敗した。それが何回か続き、そのうちに諦め最後には結斗の  
かわいい寝顔を見てうつとりしながら、悶々とするしか出来なかつ  
たのであった。

PM 15:20

甘い香りが麗華と美緒の鼻をくすぐる。

麗「いけない・・・わたしまた寝ちゃった・・・」

正確には不貞寝である。結斗のもとへたどり着けず、目にはいつてくるかわいい光景。それに何度自分の目を呪った事か・・・。

とまあ悶々すら通り越してしまった麗華は、現状の確認する。腰に回されていた美緒の腕は弱くなって今なら抜けだせるようになっていた。腕から抜け、天井に向かって伸びをする。その時、美緒が麗華を探そうと空中で手が右往左往していたが、ソファにあったクッションを持たせ、事なきをえた。

麗「あれ？ゆうは？・・・」

さつきまで絨毯で寝ていた結斗の姿はなく、あるのは空間のみ。仕方なしに探索を開始する麗華。もちろん結斗探しである。

結「あ、おはよう〜麗華」

即見つけた。マイエプロンを身につけ、長い髪をポニーテールにして何かを作っている。

結斗の姿に思わず、女としての理性も忘れかけた。しかし結斗の持つ甘い匂いに現実へと戻される。



耐熱性の手袋を嵌め、その手にもつのは、レモンパイだった。表面は、甘く焼いたレモンを薄切りにしてあり、底部の生地は見るだけでサクサクしてそうであった。

麗「美味しそう〜」

結「今日初めて作ったんだけどね・・・こうゆづの麗華好きでしょ？」

麗「大好きよ。でも一番の条件は、ゆづが作ってくれる事だよ」

結「ふふ・・・ありがとう さ、母さん起こしてきて。温かいうちに食べよう？」

麗「うん」

嬉しそうに返事しながらリビングへ駆け込む麗華。よっぱどレモンパイに惚れたようだ。

結「相変わらずだなあ・・・」

澗「ゆづ様、紅茶はどれにしましょう？」

カップを取り出しながら尋ねる瀨。その彼女の表情も嬉しいようだ。

結「う〜んレモンパイは、酸味が効いてるから、甘いのがいいんだけど・・・」

焰「ミルクティーはどうじゃ？」

焰美も瀨を手伝いながら、提案をする。

結「妥当かな？うん、じゃあミルクにしようか」

焰「うむ・・・やったのじゃ。我はミルクティーが好きなのじゃ」

瀨「焰美は甘党ですからね・・・」

子供だからと言いきりになったところを寸止めし、無難にコメントをする瀨。

結「瀨は・・・コーヒー派だっけ？僕と一緒に」

澁「はい コーヒーは、大人の飲み物です」

チラチラと焰美を見てこれ見よがしにアピールする。  
それに焰美の対抗心に火がついた。

焰「わ、我だって飲めるぞ！コーヒー！！」

無理に威勢よく言ってしまった焰美。

澁「はいはい・・・砂糖とミルクを入れてですよね・・・」

焰「むかつ」

結「あはは・・・まあまあ二人とも。今日はミルクティーってことでね」

待ったをかける結斗。

その時ちようと眠たそうにしながら美緒と麗華がキッチンへやってくる。

美「甘い匂い~~~~はっ！！！？？わ~~~~いパイだ~~~~」

目を細めながらやってきたかと思うといきなりカツと目を最大に開けだして、レモンパイを賞賛し始める美緒。

麗「はあ~~~~おなかすいた。さ、食べよ、食べよ！」

急かす麗華と美緒を見ながら、結斗、澁、焰美も着席しケーキを切り分け始める。

美「むむ~~~~これはまたなんと美味しそうな・・・」

結「自分的には上手くできたほうなんだ。ただパイの焼き方が少し難しかったよ。さ、食べてみて？」

焰・澁・麗・美「~~~~いただきます~~~~す~~~~」

サクッ

パイの崩れる音が出る。それから判断しても、美味しいに間違いはない。

麗「おいしいっ！！美味すぎるよ！！」

美「うっっん、レモンの酸味が効いてて美味しい。疲れた時にいいかも」

瀨「ゆう様がどんどん料理がお上手になっていかれます……。料理の弟子としては嬉しいのですが、女としては複雑です」

焰「やっぱりゆうの料理は、大好きじゃ」

それぞれの賞賛の嵐に笑顔になりだす結斗。  
そして自分もパイを口に入れた。

結「ん よく出来てる。桃子さんに教えてあげようかな？」

とまあ中学生男子の言葉とは思えない言動を発する結斗。

再会してから結斗は桃子と密に連絡を取り合っている。主にお互いの料理のことについてだ。

結斗は料理は得意だがデザートのみならず桃子に負けるようだ。そのため自分で作ったデザートを桃子に試食してもらって感想を貰う。いいものなら翠屋に並ぶのだ。

そして桃子は、若い世代の好きな味などを細かくリサーチが出来る、とまあ打算的で要領のいい方法である。

しかしバカにできないのも事実。結斗の開発したデザートの商品が

現在、翠屋に並んでいる。二つとも、好評であり売切れ続出だ。

麗「あ、これって中にレモンのムースが入ってるんだ？」

結「気づいた？これにも苦労したんだ。砂糖入れすぎるとレモンの酸味が無くなるし、かといってないと酸味が強すぎてパイに向かないだ。ま、ご覧の通り完成したけどね」

美「そこまでいくと、もうゆうちゃんが何を目指しているかわからないわね・・・」

嬉しい表情とは一致しない言動をする美緒。

結「あはは・・・デザートは難しいからね。苦労するけど、麗華や母さん、焰美や漣が食べて笑顔になってくれるのが嬉しいからチャラになっちゃっよ」

漣「ゆう様！あとでまたご指導お願いします！..!」

感動したのか涙ながらに言う漣にいいよ〜と返す結斗。  
ここで一緒にはいえない二人がいる。

麗・美「ぐぬぬ」

麗華は基本自分で料理をしない。ちなみに普通になのはくらの腕前もある。しかし結斗に頼りきりで腕が落ちているのもたしかだろ  
う。

一方美緒は、桃子さんのおかげで食べられるものに昇華させる事ができたが当然、今まで料理を作り続けてきた結斗たちに叶うはずも無く少しだけ疎外感を感じている。

焰「んんんん美味いのじゃ」

一人全く意に返さず、幸せそうにフォークを握り締めるデバイスがいたそうなの・・・

コンコン

結「は〜い」

自室の扉のノックオンに返事をする結斗。軽い足取りで扉を開けようと、歩みだす。

このとき彼は、過ちに気づくべきだった。一片たりとも注意を怠ることがないように――

結「っと、麗華？どしたの、こんな深夜に？」

麗「いつも通り」

尋ねる結斗に麗華は手にもつ枕を示した。

結「またか・・・まあいいや・・・。ちょっと仕事があるからそれが終わったら僕も寝るよ」

背を向けて再びデスクワークを再開する。麗華は後につき、結斗の



ベッドに飛び乗った。

麗「わふっ！は~~~~ゆうに匂いだ~~~~。ごろにゃ~~~~ん」

猫のようにベッドで丸くなり、転がりまわる。彼女がごうなのはいつものことなので結斗も黙々と作業を続ける。

麗「ねえ~~~~ゆう~~~~？」

寝転がりゆうの枕に顔を埋めながら聞く。それはふざけているようにしか見えない。

結「ん~~~~？」

結斗もそれに倣い、仕事を進めながら耳を傾ける。

麗「ゆうがそんなに頑張ってるのってやっぱりお父さんのため？」

突如真剣な声色で尋ねられ心臓が驚？みされる感覚を結斗を襲った。麗華は、父京二の死の真相を知っている。

それならば結斗が嫌っていた局員になったことも説明がつく。当然の帰結である。

結「まあ・・・そうだね・・・でも麗華たちを護る事を第一に考えているよ」

麗「・・・分かった。ま、元よりわたしはゆうのやることに口出す気は無いしね。わたしは、ゆうがいないときになのはたちを護る。友達として・・・」

麗華の口から友達という言葉が聞けたことが嬉しいらしく、結斗の頬は僅かに上がる。

結「麗華は、囑託でやり続けるんだよね？」

麗「うゝん。だって組織に入るのなんてめんどいし、それにゆう以外の奴に命令されるのなんて真っ平ごめんだわ」

結「そっか・・・さて今日の分、終わりっ！僕も寝るよ」

モニターを閉じ仕事を終わらせた結斗はベッドに寝転がる。すかさず麗華も隣に並ぶようにして、眠る体勢をとる。しばらく互いに近すぎる顔を見つめ続けた。

その時・・・

結斗の視界が反転し、気づいた時には麗華に馬乗りになされていた。

結「れ、れれ、麗華？この態勢は、ちょっと……」

魅惑的な麗華の体勢にしどろもどろになる。しかしそんな事お構いなしに麗華は、顔を近づけ……

麗「なに言ってるの？今日、ゆうはわたしと一緒に大人になるんだよ？」

そういつて結斗のボタンを上から一つ一つ外していく。

一個一個外していくごとに麗華の表情が、小悪魔の艶やしいものに変わっていく。

結「お、大人？どうゆうこと？」

戸惑い、訳が分からない結斗。

麗「ゆうはそこで大人しくしてて……わたしが全部するから……んっ／＼／＼／＼／＼／」

上半身全てのボタンを解き、ゆうの胸板をさらけ出した麗華は、そこに飛び込むようにして一気に結斗と顔を近づけて唇を接触させた。

麗「んんっ……／＼／＼はぁ……ちゅあ……ちゅぱっ」

舌が出し入れて官能的な音が二人の唇から奏でられ、結斗の部屋に消えていく。

その間麗華は、曝け出した胸板を手で愛撫する。触られた瞬間、結斗に電気のようなものが走った。

麗「んんっ　ゆう、かわいい　ちゅ……ちゅぱ……あ」

それからどんどん麗華の柔らかな唇は、結斗の綺麗な鎖骨から胸元……下へどんどん下がっていく。

結斗は、自分に起こっている初めての感覚に戸惑ってそれどころではない。

そして更に下に向かう麗華……

焰「そこまでにするのじゃっ！…！」

ボカンッ

その瞬間、ここにはいないはずの焰美の声が聞こえたかと思うと、麗華がボフツと結斗に倒れてきた。

結「焰美~~~~、瀨~~~~」

結斗が情けない声を出し、二人に礼を言い始める。

瀨「間に合ってよかったです・・・」

焰「うむ、本当にじゃ。あと少しでゆづの貞操が奪われるところじやった」

無事なマスターの様子に本当にホッとする瀨と焰美。

瀨「焰美、この場合純潔ですよ。それにしても本当によかったです。何か嫌な予感がすると思ってきてみれば・・・」

焰「ゆうが麗華に犯されておったからの・・・」

結「ほんとにありがと二人とも。どうなることかと思ったよ・・・」

瀨「ご無事ならいいのです。それでこれどうしましょう・・・」

麗華を指差す。

その表情は硬い。焰美も睨みつける。

焰「外に捨て置くか？ゆうを犯そうとした罰は万死に値する」

さすがにそれは・・・と思った結斗だったが瀨にそれは却下される。

瀨「わたしもそうしたいのは山々なのですが、それを決めるのはゆう様です・・・ゆう様どうします？」

結「えつと……このままでいいじゃない？外なんてかわいそうだし……」

焰「しかしのう……そうじゃ！」

結斗の寛大な処置に不満を漏らそうとする焰美だったがひらめたのか声を出した。

焰「我らも一緒に寝ればいいのじゃ。そうすれば問題ないのう」

澁「そうですね。ゆう様それでいいですか？」

現状最も最善の策を提案した焰美に賛成の意を示す澁。

結「うん……それでいいよ……それで……あの……」

結斗もそれに依存はないらしく了承をしたが、聞きたいことがあるのかもじもじとし始める。

自分のマスターがこんな表情を見せたことが驚き二人は、結斗の次の言葉に耳を傾けた。

焰・澗「「？」」

結「麗華は何しようとしたの？」

焰・澗「「……………」」

主の衝撃的な言葉に黙るしか出来ない二人のパートナーであった。結斗は、本物の天才であるがこの手の知識は乏しいようだ。必然的に今夜の麗華の行動も訳が分からなかったのだろう。しかしその手の話は人に話すのは恥ずかしいものである。よってマスターの要望に答えられないことに若干の背徳感を感じながらも口



を嚙んだ次第であった。

麗「むにゃむにゃ・・・ゆう大好き〜〜〜」

隣には幸せそうにゆうの腰周りに抱きつきながら眠る容疑者がいた  
そうだ・・・

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
6  
8  
!!  
!!  
!!  
!!

T A L E 6 7 デート（麗華編）（後書き）

なにこれ・・・ちょっとディープすぎましたかね？

麗「むき〜あと少しで！！イケたのに！！」

うわ出ちゃいました・・・この子・・・

麗「何よ！文句ある？わたしはゆうが好きなの！将来もずっと！だつたらいいじゃない別に！！」

いやそれでも道徳的に考えましょ・・・

麗「道徳なんてくそ喰らえ・・・よ！つくそれにしてもキス止まりなんて、不完全燃焼よ」

すみません。ってあなたた中学生ですよ！いけませんって、それより上にいったら

麗「わたしはいつかゆうの純潔を奪う！！！！」

いや、俺は海賊王になる！みたいなノリで言わないで下さい。  
とまあ今回は非常にディープでした。まあちょっとしたマンネリ対策みたいな感じです。

かんそうお待ちしてます~~~~  
では!!!

麗「わたしは諦めないわよ!!」

いやそこはね.....諦めようよ.....

TALE 68 過去との再会（前編）（前書き）

というわけで今回は、予定通り新しい話です。

これを少しと中学生生活をやって11eyes編に突入しようかと思  
います。

さてここでアンケートというか質問なんですが・  
ズバリッ！

11eyes編には、誰をパートナーに持っていきますか？

- 1、いやここは無難に焰美でしょう
- 2、なにを言うか瀬がパートナーなら安心だ
- 3、意外性と出演量を考えて鏡月！！

以上三人の内一人を選んで下さい。

票がない場合は、こっちで考えちゃいますけど（笑）  
期間は、十月終わりまでです。

ぜひご参加を〜

では本文へどうぞ〜

TALE 68 過去との再会（前編）

麗「みんな集合ー!!」

1 - Bクラスに声が響き、いつものメンバーが集められる。もちろんメンバーは、結斗、なのは、フェイト、はやて、アリシア、アリサ、すずかである。

その時、余分な男子数名が勇敢にも近づいてきたが、麗華の一睨みで回れ右をした。依然麗華の男子嫌いは顕在のようだ。

麗「あ、ゆうはいいから・・・」

珍しく結斗を外し女の子達だけで話し合いをする七人。

自分だけ疎外された事に若干ショックを受けそうになる結斗。

結「（麗華たち何、話してるんだろう？）」

念話でピアスの二人のパートナーに尋ねる。

澁「（ゆう様・・・女の子には、男の子に知られたくはないこともあるのです）」

焰「(うむ。その通りなのじゃ……。ゆづも麗華たちに話しくくて、クロノやユーノに話しやすいことがあるじゃろっ？。そうゆづことじゃ)」

疑問へ解答を示しながら、同意を求める瀨と焰美だが――

結「(？……。僕、麗華たちに話せないことってないけど……。)」

結斗の場合は例外であった。

焰「(そうじゃった……。ゆづは、こうゆづ事に関しては赤子もいいところじゃったのを忘れとった……。)」

瀨「(純真なところは素晴らしいですが、時にはそれがいけないこともあります。ゆづ様、もう少しご自身でお考え下さい。)」

結「(むむ……。分かった。じゃあ、昨日のこと教えて?)」

唸る結斗の言葉に二人が昨夜と同じように焦りだす。

瀨「(ゆう様／＼それは……。わたしの口からは申せません、

すみません」

焰「自分で調べーい／＼／我もちと恥ずかしいわ」

デバイスとは言え、人間形態の時は思春期の女の子である。さすがにその二人が答えるには、結斗の問いの壁は高すぎた・・・

結「(むむ〜〜)」

再び唸りだす結斗。それを見たクラス半数の女子が血の海に沈んだ  
そうな・・・

さて結斗が唸って相談を持ちかけている間、GWを好きな人と楽しく、ラブラブに過ごした七人は教室の隅で屈み合いながら、話をしてきた。どうやらプライベートな問題のようだ。他のクラスメイトら察して四方に散る。

慎重に周りを確かめた司会人、麗華はさっそくと本題に入る。

麗「集まってもらったのは他でもないわ……」

机にひじをつき俗に言う真剣な社長さんのような感じをする麗華。  
なのはたちも次に言われる言葉を緊張し、待ちわびている。

麗「ゆうがどうしてあれ程までにかわいいことかということ……」

は「そうそう……結斗くんってほんまにかわええわあ……ってちやうわ……」

バシッ

どこから取り出したかはやてのハリセンが麗華の脳天へ直撃しようとしたところ、見事な真剣白刃取りで受け止めたが……

ゲニャンッ



麗「つゝゝゝゝゝ」

ハリセンがしなって麗華のどたまに直撃。  
蹲った麗華であった。

麗「さて・・・気を取り直して・・・GW中どねくらいゆつとの距離を縮ませたのか報告し合いましょう？」

今度は真剣な表情で言う麗華。だがまだ頭が痛いのか擦っていてどうも締まらない気がするのはたち。

は「・・・・・・・・うゝゝゝんわたしはかまわへんやけど・・・」

フェ「ちよつと恥ずかしいよね／＼／＼？」

少しだけ頬を染めたフェイト。その途端に他全員が警戒しだす

な「くっ！フエイトちゃんもうそんなところまで！！（わたしもだ  
けど〜）」

ア「やるわね！！（これは・・・同じところかしら？）」

言っている事と思っていることがここまで正反対だと逆に感動すら  
覚えるところであった。

す「むむ・・・」

アリ「わたしも恥ずかしいけどいいよ」

純真ズは素直な解答をしていた。

麗「全員の賛成の意見をもらったので話しは昼休みに・・・」

色んな思考が飛び交う中、一人ニタリ顔をするものがいたがそれに  
気づくものはいなかった。

は「さて・・・みんなキリキリはいてもらおうかいな？」

弁当を囲み、少しだけ過ぎしやすくなった屋上にて、午前の時雄話し合いが再開された。

話し合い中――――

アリ「というわけでわたしは一緒に寝て、キスして終わり」

嬉しそうに言うアリシアになのはたちが呻きだす。

フェ「姉さんがそんな大胆だったなんて・・・」

アリ「ちつつち・・・・フェイト、まだまだ甘いよ。恋っていうのは、競争なの。印象が強ければ強いほど、相手に残るんだよ？」

アリシア以外「ぐぬぬ・・・」

当たり前のことを言うアリシアへ無性に武器を向けなくなった瞬間であった。

ア「それで？麗華は？」

最後になったのは昨日の人である麗華である。

麗「わたし？わたしはBすっ飛ばしてCまでいきたかつただけど（ジャキーン）・・・ちよつと四人とも落ち着きなさいよ・・・」

話している最中、なのは、フェイト、はやて、アリシアからはシルバフォーム中のデバイスを向けられ、アリサとすずかからは、射殺さんばかりの視線が当たる。

それをどこ吹くかの風のように受け流す麗華も麗華だが・・・

アリ「麗華ちゃん!!強姦は犯罪だよ!!」

麗「してないわよっ!!しそうになっただけ!!!!!(ジャキンッ)  
いい加減それやめて!!しかもなんか刺さってる!!刺さってるわ  
よっ!!!!」

声高々に注意するアリシアに若干慌てながらそれに反論をする麗華。  
他三人は、更にデバイスを近づける。

す「それで……」

な「どこまで……」

フェ「いった」

は「ア「んや!!」のよ!!」

詰め寄る五人に圧倒される麗華。さすがにこの五人の放つ殺気に似たプレッシャーが麗華へガンガン刺さり、早く開放して欲しいと思  
い出す麗華。

麗「Dキスして〜〜〜〜」

は「……………ま、まあ、百歩譲ってそこまでは許したるわ。  
わたしらもしてるからな……」

な・フェ・アリ・ア・す」「うん……」

麗「胸舐めた（よし殺そうツッ！……！）（いや〜〜〜〜許  
して〜〜〜〜）」

さっきと同じように、いや今回は目の前にデバイスが向けられ大変  
なことになっていた。  
一目散に逃げ出す麗華。

な「O H A N A S H I ナノ……」

魔王降臨——

フェ「ウン……殺口ウ」

金色夜叉出現――

は「オイタガ過ギルデ」

歩くロストロギア爆誕――

アリ「フッフ……レイカチャン、ワタシガ先ニヤロウトシタノ  
ニ……ウッフ……」

最強のパートナー推参――

ア「シャカイカラマツ殺ヲ……」

世界のお嬢様誕生――

す「レイカチャンノ血ハオイシイカナ？カナ？」

吸血鬼の末裔復活――





結「んゝゝゝ今日も平和だねゝゝゝ」

そんな時、彼女達の話題の中心事は、教室で暢気に空を眺めていたのであった。

P M 1 6 : 1 2

夕日の映える八人の影。それぞれが身を寄せ合うほどの近さで影は混じり合う。

麗「痛たたた・・・」

体をさすりながら歩く麗華。どうやら昼休みの件でなのはたちこつてりと絞られたようだった。

なぜここまで麗華がボロボロなのかという生身で戦ったからである。最初は鏡月をセットアップをしようとしたが、「自業自得ね反省しなさい」とパートナーに裏切られてしまった。仕方なしに鍛えた体一つでいったが相手は、魔導師四人と二人。

全く戦いにならなかった。まさに字の如く孤立無援であった。

そして親友達からのリンチに遭遇した麗華は、這うようにして教室に帰ってきた。

その時、結斗が心配をしていたが「大した事ない」というしか出来なかった。

なぜなら・・・

ジャキンッ

な「イッタラワカッテルヨネ？レイカチャン」

と背後から鋭いものを突きつけられてしまったからであった。

閑話休題――

フェ「自業自得だよ・・・」

ア「そうよ・・・あんなことするから」

す「次やったら・・・」

アリ「もっと酷い目に合わすよ？」（ニコッ）

一オクターブ低い声で言われ、  
またも背筋が寒くなるのを感じた瞬間であった。

結「ねえ、四人は何を言ってるの？」

後ろの五人の会話が気になりだす結斗であったが・・・

は「結斗くんは知らなくていいんやで〜」

な「うん、うん」

結「そ……そうなんだ……」

はやてとなのはのにこやかな笑顔に諭されてこれ以上聞くのを中断した。なぜかは分からないが、少しだけ背中を寒いものが伝ったからだった。

彼らが今日はなぜ分かれることなく一緒にいるのかというと、昨日のレモンパイが原因だった。

いつもの下校途中にお菓子話題になり、結斗が最近作ったお菓子は何かと尋ねられたのだ。律儀にそれに答え、当然甘いものが大好きな女の子としては、結斗の新作パイは食べるに越したことはない。いや食べなければならぬ……。

よって帰ってから結斗は、人数分のパイをまた焼かなければならなくなかった

そのため一行は、現在結斗に家に移動中である。

な「楽しみだなあ……結斗くんのレモンパイ」

は「ほんまや。わたし料理は出来てもお菓子とかは、あまり作ってへんからなわくわくしとるわ」

結「頑張って作るけど、あまり期待しないでよ〜?」

謙遜気味言う結斗にはやてとなのはは、どの口が言うかと思った。  
結斗の普段披露している料理はどれも美味しくなのは母桃子と良い勝負するほどののだ。そんな人に謙遜されると最早嫌味にしか聞こえない……。

は「何を言うか」

な「思えばなの。結斗の作るものが不味いことなんてありえないの・  
」

1988

結「一体その根拠はどこから……」

来るのかと言いかけたであろう言葉が途切れた。それとともにのはとはやての間を歩いてきた結斗の歩みが止まった。

は「?どしたんや、結斗くん?」

な「?」

急に脚を止めた結斗へ振り返り、疑問符を浮かべる二人。白銀邸ま  
ではもう少しなのにな……。

結「い……………や……………」

その時結斗に変化が現れた。

数秒前の笑顔を浮かべていた表情が消えうせ、その色は不安であっ  
た。

結「いや……………いや……………」

視線を前に固定したまま右足を下げる。それを口火に彼の瞳には、  
涙が溢れていた。

な「ゆ、結斗くんっ!!?!?!?どうしたのッ!!」

自然ごととは思えない程の動揺の仕方になのはが結斗へ近づき、手  
を取る

結「いやあああああああああああああああああああああああ  
あッッ」

が結斗の叫び声でビックリしたなのは思わず離してしまった。

ア「ちょっと！なんの騒ぎよッ！」

麗「どうしたのッ？ゆうー！」

後方で話していたアリサ、麗華、すずか、アリシアが声を上げた結斗に詰め寄る。

しかしそれでも結斗の表情に変化はなく、依然としてある一点を見つめて涙を流し続けている。それはまるで小さな子供のように・・・

1990

アリ「ゆう君っ！！一体どうしたのっ？」

マスターの豹変を収めてあげようとアリシアが結斗の前に移動し、目を見つめる。

アリ「（なに？この眼？・・・怯えてる？）」

結斗の眼に移されていたのは、恐怖。それを感じたアリシアは、すぐに結斗の冷たくなってしまった手を握る。

アリ「大丈夫……大丈夫だよ、ゆう君……」

結「あ………アリ……シア……」

冷え切った氷が解けるかのように結斗の瞳に感情が戻ってきた。

す「結斗くん……それでどうしたの？」

落ち着いてきたところで様子をみていたさすが結斗へ尋ねた。尋ねられた結斗は、なんとか声を出そうとする。とても辛そうだ。

そして結斗は、震える指をアリスアの後方、なのはたちの前方を指した。それを見つめる一同。

麗「あいつはッッ!!!!!!!!!!」

途端に麗華が怒りの表情でそれを睨みつけた。それも言葉に表すのが躊躇うほどの濃厚な憎しみであった。

やがて結斗たちの存在に気がついたのか、その女性は白銀邸の門から結斗たちの下へやってくる。

その間結斗は、アリスアに支えてもらいながら立ち上がった。しか



しその手はまた震え始めていた。  
なのはたちは何かなんだか訳が分からない状態で女性がやってくる  
のを見つめるしか出来ない。

そして女性は、結斗たちの前にやってきて静かに言った――

―――――燈夜・舞・

結斗と麗華が昔捨てた名前を呼んで……

Next to TALE 69!!!!!!

TALE 68 過去との再会（前編）（後書き）

シリアス！！

え〜〜最近になってやっと大学の宿題が終わり有頂天なBALDR  
SKYです。

アリ「こんばんわ〜〜ゆう君の作ったパスタが大好きなアリシア・  
テスタロッサ・ハラオウンです」

さて今回はどうでしたか？アリシアちゃん

アリ「う〜〜ん、なんとというか短い？」

すみません！今回は勘弁してください

アリ「あ〜〜いいんですけど・・・それにしても最後の終わり方  
は・・・」

大体の人は予想できるでしょうが・・・  
名前は分からないようにしました。

アリ「大丈夫かな？ゆう君、あんなに泣いてたし・・・」

それは次回明らかになりますので・・・お楽しみを・・・  
それでは時間が来ましたのでこの辺で・・・

アリ、バイバ、バイ

TALE 69 過去との再会（後編）（前書き）

というわけで即日投稿!!

来ました〜〜

これからインベント目白押しです。

ではごっげ〜

TABLE 69 過去との再会（後編）

前回までのあらすじ――

GWが終わり、その事についてのお話し合いをした結斗以外のいつものメンバー。多少の争いはあったがなんとか平穏無事に話し合っ  
つて、結斗との進み具合を確認しあった麗華たちであった。

その放課後、所用で白銀邸へ向かい、到着寸前一人の待ち人の女性が  
白銀邸の門の前に佇んでいた。

その人を見た瞬間人が変わったかのように取り乱す結斗。  
怒りと憎しみを浴びせる麗華。

その状況についていくことはおるか理解すらも出来ないのは、フ  
イト、はやて、アリシア、アリサ、すずか六人。

その待ち人の女性が昔の結斗と麗華の名を呼んだのであった。

？「燈夜……舞……」

女性の珠のような声なのはたちを含めた全員の耳に聞こえた。その内一人は不快そうに、もう一人は怯えた様子で聞いていた。

？「ねえ、燈夜、舞でしょ（その名で呼ぶなツツツ！！！！）え？」

二度が限度だった。それ以上聞くことが出来なかった。昔の自分の名前も、大好きな人の昔の名も……

麗華の叫びが茜色に染められた空と住宅街に消えていった。それに呆然とする女性。

麗「わたしとゆづの名前は、もうそれじゃないツツ！！！！麗華と結斗だ！！！」

まるで子供のような言い方で叫ぶ麗華に女性は、戸惑うばかり。

？「あはは……舞、冗談が上手くなったのね……」

麗「それで呼ぶなと……」

？「ねえ、その子燈夜よね？大きくなったわ……見違えちゃった……」

乾いた笑いを浮かべながら、未だ怯える結斗の頬に手を伸ばそうとする女性。それにビクツツとして眼をぎゅっと瞑る結斗。それに対し、

アリ「やめて……ゆう君怖がってる……」

結斗を背に護るようにして立ちはだかったアリシアが阻む。

？「？……何を言っているの？わたしはこの子の（いいかげんにしてツツ！！目的は何！！？）舞！あなた親に向かってなんて口の聞き方を！！」

な・フェ・は・アリ・ア・す「「「え？」「」」

麗華の怒りが付与された言葉が女性に触れ、怒り出してしまった。今麗華の言った事がなのは達の耳に入り、やっと脳で理解し始める。それを聞くこととしたが、それは麗華の激情に流された。

麗「あんたたちなんてもうわたしたちの親じゃない！！わたしたちのお父さんとお母さんは、白銀京一と白銀美緒だけよ！！あんた

ちとはもう何も無い!！」

?」・・・・・・」

一気にまくし立てられたように麗華が言う。

麗「それに今更何の用よ! ゆづを捨てたあんたが!」

?」そ、それは・・・・」

女性は麗華に物理的に圧迫されているかのように、言葉がでなくなつてしまった。

?」だ、だからもう一回暮らしましょ(もう遅いのよ!!)分かって  
いって言うてる? あんたたちが言った事がゆづをどれだけずつと傷  
つけているか! 何年もよ!!)・・・・」

キイイイイイイイイ

二の次を吐こうとしてもそれは出来ずに終わる女性。麗華の言った  
事は全て事実だったからだ。  
緊張状態が続く中、それは門が開く音で壊される。



美「もう麗華っては何を叫んでいるの？ご近所に迷惑よ？」

門から出てきたのは、結斗と麗華の母美緒であった。

麗華の高い叫び声に注意しに来てしまったようだ。

麗「お、お母さんッ！？でもこいつは！！」

美「少し黙ってなさい・・・」

いつもとは違う声色。それで麗華を黙らせた美緒は、女性と向き直った。

美「わたしの子に何か用ですか？」

普段とは全く違う美緒の雰囲気、麗華もたじろいた。

？「・・・あなたは・・・」

美「申し遅れました、わたしは結斗と麗華の母、美緒です。それで

あなたは・・・」

？「わたしは、黒堂真理。この子たちの本当の親です・・・」

本当という単語を強調して言った真理。それに対し、あまり興味がなさそうな表情で返す美緒。  
嫌そうに真理を睨みつける麗華。

美「・・・分かりました。ですが今日のところはお引き取りください。子供達が動揺していますので・・・」

真「分かったわ・・・明日改めて来るわ」

そっぴい捨てて背を向けた真理は、注射してあった赤のスポーツカーに乗り込んで走り去った。

五分後――――

白銀邸

リビングは静かなものだった。いきなり現れた結斗と麗華の元の母。この事は先ほどのやり取りでみな知っているが、詳しくは知らない。だから迂闊な事を話すことは出来ないのだった。

そこへ現るは、足取りが重いアリシアであった。

アリ「ゆう君、今眠ったよ・・・まだ怖がっていたけど・・・」

みんな「・・・」

安堵の息が洩れ、やっと空気を吸えるようになった。

ア「ねえ麗華、聞いてもいい？あの人あんたたちの前のお母さんでしょ？」

麗「・・・ええ。認めたくないけどそうよ。アリサは知っているのね、ゆうから？」

ア「そうよ。デートの時結斗から直接聞いたわ・・・」

フェ「麗華・・・その事聞いてもいいかな？」

麗「・・・分かった」

そういつていい始めるは結斗と麗華の誕生の話し。それを黙って聞くなのはたち。

麗「という訳よ・・・だからわたしとゆうは、もう舞でもないし、燈夜でもない。だから今更引き取りにとか、一緒に暮らすとか遅すぎるのよ・・・あいつらがそうするべきだったのは、五年前だったのよ・・・」

吐き捨てるように言った麗華にそれは違つと異を唱えるものはいなかった。

もし仮に、自分に大きな心の傷を残した親がまた一緒に暮らそうと言つて来て、いいですよと気軽に返事を返せる筈がないからだ。むしろ今の麗華のように、今更と恨む方が確率的には高かつたからだ。

美「でも麗華、あの人の気持も考えてあげなさい。確かに最初は、化け物つて罵つたかもしれない。でもそれが間違いつて気づいたか

ら今日来たのよ？それこそ恨まれても仕方ないように思ったと思うわ」

麗「でもお母さん！ゆうは、それ以上に傷ついたんだよ！！お母さんだって知ってるでしょうッ！？」

美「ええ、知ってるわ。でもだからこそあの子に結斗にどうするか決めさせないといけないんじゃないの？一番傷ついたゆうちゃんにこそこの事を決める権利がある。今みたいにわたしたちと暮らすか、あの人たちのところに戻って暮らすか・・・」

麗「・・・お母さんはそれでいいの？」

美「・・・愚問ね。わたしはゆうちゃんと麗あなた達二人の幸せを一番に考えるわ。あなた達の親としてね・・・」

麗「お母さん・・・」

美「でも・・・わたしは・・・残って欲しいわ・・・もう二人がいない生活なんてわたし考えられないし、考えたくない・・・はあ・・・駄目な母親ね」

麗「そ、そんなことないよ！お母さんがわたし達をどれくらい好き

でいてくれるかわたしとゆうは知ってるから……」

美「ありがとう……麗華……」

そういつて麗華を抱き締める美緒。二人には血縁関係は無い。にも関わらず、それ以上に強い関係で結ばれてる事が分かった。

す「とりあえず……わたしたちは帰ろっか？」

フェ「そうだね……」

な「うん……」

麗「ごめんねみんな、心配かけて……」

ア「いいのよ、わたしたち親友だし」

美「恋のライバルでもあるけど」ニタニタ

な・フェ・は・アリ・ア・す「くくく／／／／／／」

さっきの涙は何処へ行ったのか、美緒がニタニタと嫌らしく笑む。それに触発されて、麗華以外の初心な少女たちは、顔を染め上げてしまった。

美「あらあら・・・ゆうちゃんも隅に置けないわね・・・麗華だけじゃなくてこんなかわいい子達まで射止めちゃうなんて・・・わが子ながらに未恐ろしいわね・・・」

麗「それくらいゆうが魅力的ってことじゃない？」

美「あら麗華は、冷静ね・・・」

意外そうに眉を寄せる美緒にやれやてといった感じに答え始める。

麗「お母さんってば・・・ゆうが私以外の子を好きになる筈無いじゃない？」

美「・・・。。。。。。。そ、その自信は一体何処から・・・」

麗「私が決めた・・・」

美「・・・。。。。。。」

我が娘ながらにその度肝を抜く、その身勝手さと自信に呆れの二字を頭を抱える事で表現した美緒だった。

s i d e o u t

次の日――

はやて s i d e

おはよう、八神はやてや……。昨日は、結斗くんのことです  
しだけゴタついてしまった。にしても結斗くんのそんな過去があっ  
たなんて、今でも驚きや。わたしたちに優しくするのは、それがあ  
ったからやったんやな……。なんか……。悲しいわあ……。あの優  
しさの裏にそんなことがあってそれに気づいてあげられなかった自  
分が……



は「おはようございん」

クラス「おはよ〜〜」

教室に入って挨拶する。男女問わず、返してくれて嬉しいんやけどわたしが一番聞きたかった声は、無かった・

な「おはよ、はやてちゃん」

席に着くと前の席にいたなのはちゃんが挨拶してくれた。

は「おはよう、なのはちゃん。なのはちゃん、結斗くんは？」

な「今日はお休みみたいなの・・・」

フェ「無理ないよ・・・昨日あんなに取り乱してたし・・・」

わたしが話していると、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アリスちゃん、すずかちゃんが話しに入ってきた。

アリ「ゆう君・・・」

ア「あいつ、今日あの人と会うみたいだけど・・・」

す「心配だよね・・・」

ア「ええ・・・」

それつきりわたし達の中の会話は途絶えてしまった。いくら麗華ちゃんや美緒さんがついていても好きな男の子のあんな姿見せられたらいてもたってもいられんわ・・・

そしてごく自然にわたしたちは、今日座られるはずだった机に眼を向けた。

s i d e o u t

白銀邸――

いつもは賑やかで楽しい空間が広がるリビングが今は、静寂という文字が相応しかった。

綺麗な長机に座るのは右から焰美、美緒、結斗、麗華、漣。  
時刻は、午前10時。

昨日、錯乱の状態で眠りについた結斗は、今さっき眼を覚ました。そして今日真理と巽の二人と会う手筈になっている事を知り、待っている。

表情は、未だ優れていなくまともに喋ることも出来なさそうだ。しかし結斗は頑として席から離れる事はしなかった。

その気持を汲んでか、最初は反対していたほかの四人も今は何も言わなかった。

ポーン

来客を知らせる鐘の音が耳に入り、身構える五人。

漣「わたしが出ますね・・・」

そういつて席から立つ瀨。

賽は投げられた。後は話し合うだけだ。

結斗はかつてないほどの緊張に包まれていた。それは執務官試験の時よりもだった。

瀨「こちらです・・・」

瀨の丁寧な案内でやってきた二人の人物。一人は、昨日会い、もう一人は久しぶりに会う顔だった。

その時再び麗華が怒りの表情を見せ始めたが、結斗のことを想い、なんとか堪えた。

瀨「こちらにお座りください・・・」

結斗と麗華の対面に座る巽と真理。

それを確認した瀨は元の麗華の隣に戻った。

結「・・・・・・・・お久しぶりです・・・・・・・・巽さん、真理さん・・・」

巽・真理「っ・・・・・・・・」

結斗の小さな声がまず最初だった。

実の息子に名前では呼ばれたことにショックだったのか息を呑む二人。

結「真理さん昨日、取り乱してすみませんでした・・・」

真理「え、ええ・・・」

結「それで・・・この度は・・・どうして・・・」

他人行儀な敬語が続く。

ここまでの壁を作らせてしまった事を今更ながらに自覚してしまっ  
た巽と真理。

巽「ああ・・・その・・・済まなかった！・・・」

巽の言葉で二人が頭を下げる。

それを冷ややかな眼で見る白銀家。

結「どうゆう意味ですか？」

真理「わたしたちがあなたに言ったことは決して許されない事。あ

あなたに大きな傷を与えてしまった・・・」

結「・・・」

巽「だがわたしたちも考え直したのだ。お前はお前だ・・・と」

結「・・・」

真理「だからまた一緒に暮らしたいの・・・親子として・・・」

結「・・・」

二人の勢いのある言葉を続け、赤裸々に言葉を綴っていく。

麗「ふざけないでっつ！！！！！！」

麗華が立ち上がりもう我慢できないとばかりに、叫ぶ。  
その声に驚き喋っていた二人は、閉口する。

麗「あんたたちは、何も分かってないツツ！！言葉だけじゃ傷ついたゆうの心は、癒せない！それにまた一緒に暮らしたいですって？それこそあんたたちの自己満足じゃない！また暮らしたい、一緒にいたいってあんたたちの願望じゃない！！これっぽちもゆうのこと考えてないツツ！！」

巽・真理「……………」

麗華の言葉に反論はおろか口に出来る言葉もない。  
事実、その通りだった。

結「麗華……………」

麗「こんなのツ！グスツ……一緒にいたって……また……ゆうが、ヒグウ……苦しくなるだけじゃない！！……………もうゆうを傷つけないでよ……………」

泣きながら言葉を言おうとする麗華。それから本格的に泣き始めてしまったため瀕に支えられながら席を外した。

美「……………失礼。今結斗と麗華の母親として言わせて頂きます」

麗華に続いたのは、反対側に座って成り行きを見ていた美緒だった。

美「わたしは、結斗が望むならそうしてもいいと思っています。どれ程取繕っても実の親はあなたたちです」

美緒の意外な言葉、麗華とは正反対の言葉に頭を下げていた二人が頭を上げ始めた。

美「ですが・・・結斗が望むならです・・・独白ですがわたしは、夫を失いました。だから今はこの子たちしか居ません。だからわたしは結斗と麗華がいない生活なんて考えられません。考えたくもありません。わたしはこの二人のためなら命も惜しくもない・・・」

そういつて美緒も立ち、部屋を去った。恐らく麗華の様子を見に行っただろう。

残ったのは、結斗と焰美。

結斗は依然として表情は、変わらず。焰美は、厳しい顔を真理と巽に向けていた。

結「・・・・・・・・」

俯く結斗に焰美が席から立ち、その手を握った。



焰「ゆう、素直に言えばいいのじゃ……。我はそれに従う」

結「焰美……。うん……」

焰美の優しさに手を握り返す結斗。  
そして息を整えた結斗は答えを出す。

結「ごめんなさい……」

巽「……。そうか……」

予想していたのか、巽も真理もそこまで感情が動くことはなかった。

真理「理由を聞いてもいい？」

結「僕……。正直、あなたたちを恨んでいました。僕のことを何も知らずに拒絶したあなたたちを……」

巽・真理「……」

結「でも今はそんなことないです。だって麗華や母さん、焰美や瀨鏡月が一緒だし、僕のことを好きでいてくれる。魔法使いとしての僕を認めて、好きでいてくれる。僕はそれがとても嬉しいから……」

巽・真理「……………」

結「でもありがと……また一緒に暮らしたいって言ってくれて嬉しかったよ……巽さん、真理母さん……」

巽・真理「「燈夜ツ!!」」

焰「ぬおっ!!」

思わず抱きつく二人。

それに蹴落とされる形にされてしまった焰美。  
それを苦笑いする結斗。

焰「何するのじゃ!……………つとまあ今くらいは、いいかのう……」

親子の絆がまた紡がれたところを見た焰美が愚痴るように言ったの

だった。

真理「じゃあ、またね。結斗・・・」

巽「何かあったらいつでも帰ってきてなさい。私たちは待っているから・・・」

結「ああ、うん・・・分かった・・・今度寄るよ・・・」

挨拶もそこそこに巽と真理の二人は、昨日のスポーツカーで結斗の前を後にした。  
それを見届けた結斗は、邸に戻る。

麗「終わったの？」

入って早々目元を赤くした麗華が尋ねる。結局最後まで巽と真理の二人とは会わなかった。  
その理由を結斗は、分かっていた。あんな威勢よく言ったから出難

かったのだ。

恥ずかしがりな麗華をちょっと笑いながら、自分のために泣いてま  
でくれた女の子に感謝する結斗。  
お礼にと思い、

結「うん・・・ありがとう。麗華、すごい嬉しかった。僕の事あそ  
こまで思ってくれて・・・」

ギョッ

麗「ゆ、ゆう／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

結「ありがとう・・・」

慌てる麗華に穏やかに言う結斗。

基本的に押し押せな麗華は、こんなには滅法弱いのだった。

美「ゆうぢゃあああああああん」

結「わ、母さん。どしたの、そんなに泣いて？」

美「ほんどによがったよ~~~~」

どうやら美緒は、結斗が残った事で感謝感激のようだ。

結「漣、焰美もありがとね・・・」

漣「いえ・・・ゆう様が嬉しそうで何よりです」

焰「ふん、漣は何もしてないじゃろうが。我は、最後ゆうの決断を見たぞ〜羨ましいじゃろ〜」

漣「くう・・・焰美・・・」

悔しそうな顔をする漣。

「ほんと、僕は今の家族が大好きだ。騒がしいけどあったかい・・・」

結「今、僕は幸せだよ、ありがとみんな・・・」

N  
e  
x  
t  
  
t  
o  
  
T  
A  
L  
E  
7  
0  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

TALE 69 過去との再会（後編）（後書き）

というわけで結斗くんの話しも終わりました〜

なんかシリアスが続いてます〜

にしても11eyes編はいつになったら行けるんだろう・・・

とまあくだらない事考えていますが、どうぞ応援の程を  
よろしくです〜

では！

T A L E 7 0 あの姉妹がいきますッ！！（前書き）

最近寒くなってきました。

先日私も風邪ような、インフルみたいなものにかかってしまい  
大変でした。

みなさんもお気をつけて・・・



T A L E 7 0 あ の 姉 妹 が い き ま す ツ ！ ！

二年後 . . . .

規則正しく並ぶ白い柱の通路を一人の男性が歩いていく。その容姿は、十五、六歳も過ぎていないだろう。にも拘らず彼は、奥に進んでいく。

その彼を見た制服に身を包んだ者たちは、会釈をする。ある者は、羨望の眼差しで。またある者は、嫉妬の念を . . . 。それに気づきながらも毅然と男性は歩いていく。

落ち着きを持って . . .

男性は、そのまま一番奥の部屋へと姿を消した。

ウーーーーー

耳障りな音が鳴り響く。それは危険を知らせる音だ。その理由がまさに人やモノを飲み込もうとしていた

「ーーーーおいつ！誰か手の空いているもの、こつちを手伝ってくれ！

「ーーーーこつちも！救助者が多すぎるわッ！それに火も止めないと

その世界の警察組織、時空管理局の局員が切羽詰った状態で人命救助や消火活動へ身を投じていた。  
全員満身創痍の状態だ。

？「くそッ！数が足りねえ・・・」

それを指揮していた中年男性が吐き捨てる。

彼は、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。第108部隊長である。

現在、彼が隊長を勤めるこの部隊が広範囲に渡ってことに当たっている。

しかし彼の思いは、そこにはなかった。

ゲ「頼む・・・無事でいてくれ。ギンガ、スバル・・・」

娘の名前を呟くゲンヤ。今日、ゲンヤの娘たち、ギンガ・ナカジマ、スバル・ナカジマがゲンヤに面会しにきていたのだ。

しかし事故が発生し、何処にいるのか、無事であるのかすら不明な状態だった。

父親として娘の安否ほど気懸かりなものはない。まして母親がいなく、男手一つで育ててきたのだ。

彼の心配は、計り知れない。

男隊「隊長！このまま我々だけでは事態の收拾がつきません！！」

しかし娘の心配することすらも今の事態では不適なものだった。

108隊の男性隊員が叫ぶ。

ゲ「くっ・・・救援が今こちらに向かっている！それまでなんとかでも持ちこたえろ！（失礼します〜〜！！）」

ゲンヤが声を張り上げたその時モニターがいきなり現れた。

リイ「こちら教導隊。救援を受けたため、かけつけました」

ゲ「リインちゃんかッ！」

リイ「はいです〜」ナカジマ三佐」

リインの出現に驚き、これで事態が収束へ向かう事が予感したのだ  
った。

ゲ「救援の援助感謝する。今、救助と火災の消火をしている。そちらは救助をしてくれると助かる！」

リイ「了解しました！それではこちらの隊員で救助を優先します！」

ゲ「よろしく頼むッ！！」

ピッ

モニターが消え、安堵の息を漏らすゲンヤ。

男隊「どうでしたか、隊長？」

ゲ「ああ、どうやら何とかできそうだ。何せ、エースたちが救援に来てくれたからな。全体に通達。108部隊の力を見せる!!」

男隊「了解ッ!!」

火災ビル内――

?「お父さん、お姉ちゃん・・・」

何メートルの火の手が上がる中、少女の鳴き声がした。歩きたびに、彼女の肌が焼け付くような熱さ。熱せられた大気が彼女の喉を刺し、酷い鳴き声となっていた。

ドガアアアアアン

？「きゃっ！」

突如少女のすぐ隣で火が爆発し、30kgの身体が二メートル近く吹き飛ばされる。

下滑りし、少女の膝には血が滲んでいた。

？「痛いよ・・・熱いよ・・・」

泣きながら助けを求める。しかし帰ってくるのは、火が渡る音のみ・・・。

バキツガシヤアアアアアアアアアン

その時彼女を覆う黒い影。それは一直線に少女を押しつぶそうとする。少女の背後の像が倒れてきたのだ。

？「ッ！ッ・・・」

ぎゅっと眼を瞑るしかできない少女。

しかし少女に像が襲い掛かることはなかった。

な「はぁ・・・はぁ・・・間に合った・・・」

声が聞こえそれを見ると像は桃色の魔法で包まれていた。  
その空間に固定する事で像をそこで停止させたのだ。

な「よく頑張ったね・・・偉いよ・・・」

脚に小さな桃色の羽根を備えた高町なのはは、少女の下へ降り立つ。

な「安全な場所まで一直線だから！」

そっいつてなのはは、愛機を宙へと構える。

レイ>Upper confirming safe conditions  
：上方の安全確認<

な「うん・・レイジングハート、カートリッジロードッ！」

ガシユンガシユンッ

弾薬が排出されなのはを再び桃色の光が満たす。少女はそれに見惚れている。

な「デイバイン・・・・バスター！！！」

ドゴオオオオオオオオオオ





な「こちら教導隊01、救助者の女の子を発見」

オペ>了解しました、さすがエースオブエースですね！<

オペレーターの感激の音が少女の耳にも聞こえた。

な「名前きいてもいいかな？」

腕の中でなのは背中越しの満点の星空を見ていた少女に尋ねる。

？「スバル・・・スバル・ナカジマ・・・」

な「スバルちゃんか・・・いい名前だね・・・。少女スバルちゃんを保護。本部応答お願いします・・・」

オペ>本部了解<

な「こちらが終わり次第また救助を続行します」

オペ>お願いします！<

ピッ

通信が切れ、スバルと二人になるのは。スバルは、相当消耗しているらしく、口を開かない。その間なのは、脱出のことを考えていた。

な「(いくらなんでもあの落下物の壊れ方はおかしい・・・じゃあ一体・・・)」

ピッ

そこでまた通信が入る。  
あて先を見て、

な「?・・・結斗くんっ!?!」

驚くのは。そしてなのは中でさっきの合点がいった・

結>なのは・・・油断大敵だよ・・・<

な>結斗くん一体どこから攻撃したのっ!?!<

結>どこって・・・十キロ外から・・・スナイパーで・・・<

相変わらず結斗の規格外ツぷりは健在の様で、頬がピクピクとつり上がるのはだった。

な>・・・。。それで結斗くん今何処?<

結>ん?救助ちゅ、あ、終わったみたい。今から消火活動するよ<

声を弾ませながら結斗は、通信を遮断した。そんな師匠の様子に首

を傾げる弟子であった。

ピッ

通信を切り、青年白銀結斗は嬉しそうに微笑む。

その笑みは見るものを魅了し、彼の通り名の戦女神の名をほしいままにするほどであった。

しかしそれでも彼は、立派な男である。

背が伸び、さらに印象深くなったパツチリとした双眼。

BJ越しても分かる無駄のない身体の造り。

少しだけ大きくなった手。

三年前の面影を残しながらも、大きな成長を遂げていた。

アリ《ゆう君嬉しそうだね？》

結斗の内なかにいるユニゾンデバイス、アリシア・テストロッサ・ハラ  
オウンがマスターと同様微笑む。

結「なんだかんだ言って、あの子が召喚できるの少ないからね・・・」

どうやら彼は消火活動に大規模な魔法をかますようだ。

それを聞いていた待機でピアスの状態である、もう二人のパートナーが会話に参加する。

焰「あいつの召喚はちと面倒じゃしろう・・・三提督とかグラムから許可受けないかんからのう」

子供が言うつまんなさそうに言う焰美。しかし内容があれであった。

澁「仕方ないじゃないですか。あの方はゆう様の最も広範囲の魔法に属するんですから・・・。あっ！2時の方向にはやて様の反応です！」

そこで会話と共にサーチャーを起動していた澁が救援を行うはやての反応を知らせた。

2年経っても高性能なデバイスである。

結「了解！つと・・・いたいた、はやて~~~~！！」

現場の指示をしていた捜査官、幼馴染の八神はやてを呼ぶ。

ついでに無邪気に手も振っている。  
結斗の声に気づき、一瞬パツと笑顔を浮かべた。

は「結斗くん！！なんでここにっ！？」

結「任務だよ。三提督とグラム提督に頼まれてね・・・」

サラツと高官の名を挙げ、任務を言ってしまった結斗。しかしこれが彼のスタイル。

は「そうなんか・・・それで、結斗くんも人手として数えてもええんかいな？」

結「もちろん・・・というより僕がこの消火活動することになっているから、全員下がらせて？一刻も早く。巻き込んだじゃうから」

は「分かったわ。ってちょっと待ってな〜今救助者の確認するから・・・」

そっぴいなながら目まぐるしい速さで通信をし、モニターで確認、状況の情報を整理をし始めるはやて。  
その時、前方から金色の閃光が宙に現れた。

フェ「つと・・・到着。もう大丈夫だよ・・・」

結斗の三人目の幼馴染フェイトは、紫色の髪の毛の少女を腕から下ろす。医療隊員に任せ、宙に戻るうとした時、それを見つめていた結斗と視線が交差した。

すると途端に驚いた様子を浮かべ、フェイトは結斗の下へやってくる

フェ「結斗ッ？どうしてここに？」

会う度にそんなことを言われる事に若干の疲労を感じながら、はやとと同様に説明し始める。その間に、さっき通信していたなのはもこちらと合流した。

フェ「そっか・・・任務で来たんだ・・・」

な「フェイトちゃん聞いて、結斗くんさっき10キロ離れたところから落石物破壊したの・・・」

フェ「・・・はあ・・・」

結「ええっ？何で溜息？」



思わず溜息を漏らすフェイト。  
知らぬは本人ばかりなりというやつである。

は「つとみんな悪いなあ〜」。結斗くん、OKやで。ビル内に人はおらんかった。だから消火活動してなあ〜」

緊張感の欠片もない会話に割り込み事態の收拾を頼む幼馴染の姿を素直に視野に入れ、事を実行する。

結斗はなのはたちから僅かに離れ、高度を上げる。

その最中、下で幼馴染三人が「これから戦女神が超広範囲魔法するから退避して〜」と大袈裟に叫んでいた。

言うに事欠いて昔からの知り合いに人型兵器のようにいわれ凹む結斗。

だが仕事はしないとイケないため、切り替える。

高度を上げるのを止め静止し、自分の前に右手を広げると純白の魔導書が現れる。その瞬間書が徐にページが開き続け、あるページで止まりそこに書いてある文字が緋色の光りを纏う。

結「天地満ちるところ我は在り・・・祖は聖なる古の龍・・・龍魂召喚ッ！！」

結「クリスタル・フォルス！！」

ー　ー　クギヤアアアアアアアアアアア

天地を揺るがす程の雄叫びが空港に響き渡った。発信源は結斗の背後、およそ二十メートルは越すであろう巨大な美しい鳥であった。いや鳥というには、あまりにも違いすぎる。

クリスタルフォルスと名付けられた生き物は、奉納されていてもおかしくないほどの神々しさを備えていた。

龍であると言われても納得するほどの美しさと神聖さがクリスタルフォルスにはあった。

それが今結斗という主に召喚された。それが意味することは唯一つ。神とさえ呼称してもいいほどのものを結斗は、召喚したのだ。

は「綺麗や……」

フェ「うん……」

な「結斗くん」

ー　目を奪われるほどの美しさ。

それに注目する局員たち。その神々しさに跪く人さえいた。

結「いいかい？この辺一帯の火を消して」

結斗の言葉に静かに頷くフォルス。  
そして大きく息をすったフォルスは――

クリ「フオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

地殻を振動させる程の叫びを放ち、そこから絶対零度の氷結が吐き出される。

――お、おい……火が……凍っていくぞ……

――これが……戦女神の力……まさしく神の如くだわ……

一瞬で火の手赤一色だった風景が蒼……まるで青い海で満たされたかのような錯覚が起こされた。

燃え続けるだけであつた火が一瞬で冷え、氷にすらなつてしまつていた。火というものは、酸素の密度によって火力が変化するが大抵400度〜3000度である。それに爆発するほどならば、4000度を超える。

多様な火の手を一瞬にして氷結させる。

これだけでも離れ業という事が理解できよう。  
時間にして数秒。経った数秒で、第108部隊が苦戦していた消火活動を終わらせた。

結「ご苦労様・・・」

クリ「くきゅ～～～～」

結斗がクリスタルフォルスの顎の部分を撫でると嬉しそうに鳴くフォルス。

ちなみになのはたちはいまだ声を掛けづらい状態である。

結「また今度、呼ぶから。その時羽の手入れして上げるから」

クリ「キユ～～～～～～～～」

召喚時のように大きな鳴き声を上げてフォルスは、還っていったのであった。

結斗は・・・・・・・・

結「バイバ～～～イ」

なんか手を振っていた。

次の日――――

場所：未定

時刻：・・・・・・7：25

結「？・・・・ん？」

AM 7：25

結「おかしい・・・・僕の目には短い針が7、長い針が5をさして  
るように見える」

それに・・・と続ける我等が主人公。兼鈍感王。  
そいつは、隣で嬉しそうに眠る子達を見た。

な・フエ・は・アリ・焰・瀨「「むにや……………ZZZZZ」  
「」

お馴染み、ベッドCGの完成であった。それはもう見事に結斗の周りに集まっていた。

結「どうしてこんなことに……………そうだッ！昨日空港火災の後、  
はやての別荘でお泊りって話になって……………それで僕だけこの部屋で寝る予定だったんだけど……………」

現実には時に非常なものである。こうして現実逃避している間に、彼女らへの遅刻という悪魔が鎌をもって刈り取るうとしているのだ。

結「はっ！いけない、現実逃避してちゃ！！みんな起きて……………  
……………！！」

ミッド中心街にかわいらしい男子の叫ぶ声が朝日に木霊したのであった。

――第98管理外世界――地球  
――海鳴市

AM8:05

朝日が昇る坂を全速力で駆け上がる少年、少女たちがいた。彼らの走る道路には、零れ落ちたさくらの花びらがそこら中に散乱していて、踏んでしまいそうになる。いつもならそれをさけて悠々と散歩気分で行くが、今回はそうもいつてられないようだ。

は「ちょ、ちょっとまって～～なあ～～」

ピリでけつに走るのは、はやて……ではなく…

な「待って～～～～」

なのはさんであった。なのはの運動能力が低いためだ。いやむしろ無い。

どうやら移動式大規模固定砲台として動く事だけは許されたが、滑走は駄目なようだ。

結・フェ「二人とも早くッ!!」

先頭を弾丸のように走るご存知、女神様と閃光。

は「待つて・・・や。わたしの脚はまだ・・・(昨日走り回っていた人が何を言うのさ!!)(ちっ・・・じゃ、じゃあその子はどんなやッ!!)」

額に汗をかきながらビシツと指差すはやて。その先には・・・

アリ「むにゃ・・・」

結斗の背中で気持良さそうにアリシア(制服着用済み)が寝ていた。



結「仕方ないでしょっ！アリシア起きなかつたんだから」

フェ「姉さんの寝起きが悪いの、日に日に悪くなってるんだよ・・・」

結斗の隣で恨めしそうにアリシアを見つめるフェイト。

は「ちよつと結斗くん、アリシアちゃんだけにはあまさないか？」

結「そんなこと（むふふ・・・ゆう君・・・大好き）・・・／／／／／。・・・無いと言いたい・・・／／／／／」

はやてに抗議しようとしたらナイスなタイミングの寝言に言葉を詰まらせるしかなかった。

結「ってこんなこと言ってる場合じゃない！！あと予鈴まで十分だ！！！」

は「げっマジかいなッ！？あかん、わたし今月でもう二回遅刻してるんやで！！これ以上されたらちゅちゃんに何言われるか分かったもんやないッ！！」

そう叫んではやては、それまでの倍の速さでその名の如く疾風のよ

うに速く結斗たちを追い抜いて行ってしまった。

結「は、はやて・・・そんな元気があるなら最初からやろうよ・・・」

今は見えなくなってしまった現金な大阪弁の少女に呟く。  
そこでやっぴりでけつのはが追いついた。その顔は  
聖祥大七大美少女の影すらない。

「ーこれ見たらファンクラブの子たち泣くだろうな・・・  
心の中で呟く結斗とフェイトであった。

ちなみにそういったフェイトにもファンクラブが存在するが、未だ  
にフェイトは気づいてない。

その理由は、なんていっても非公式であるからだ。

結「仕方ないなあ・・・よいせつと！」

フェ「ああつ!!」

な「ふえっ?・・・// // //」

突然の事に一瞬何が起きたか分からず奇妙な返事をしたがその後す  
ぐに自分に起こっていることを理解したなのは。

結「よしっ・・・これなら！」

後ろにアリシア、そして前にはなのはを抱えた結斗は何でもなさそうに立ち上がり学校の方へ向かおうとする

フェ「ず、ずるい！！姉さんとそれになのはもー！！」

がここでまた時間のロス・・・。

結「????よくわかんないけど後でしてあげるから、今は我慢して！フェイト！」

そういつて全速力で道を走りぬく。人二人を抱えながらそのスピードは、車と同じほどである。

な「あうあう／＼／＼／＼」

アリ「むにゃむにゃ・・・」

フェ「ちよっと待ってよ~~~~」  
(なのはたちだけずるいよほんと

に！）」

あうあう言いまくるなのは、ぎゅっと背中から抱きつくアリシア。それを後ろから見るのは、イライラしてしょうがなかったフェイトであった。

千「メッ・・・ですよ！..!」

その後間に合つには間に合った結斗たちであったが、担任の千恵とちくちゃんに怒られてしまったのであった。

Next to TALE 71!!!



T A L E 7 0 あの姉妹がいきますッ!! (後書き)

とまあ今回で二年後ということでは

中学三年生です!!

何かこうか迷っています。

それで頑張つて11eyes編にいきます。

アンケートまだ募集中ですのでよろしくです。

T A L E 7 1 テスト勉強は程々に(前書き)

なんか書いてみました。

分かる人には分かるネタですね。

それではどうぞ~~~~です！

## TABLE 7 1 テスト勉強は程々に

~~~~~ 一時限目~~~~~

千「はあ~~~~い・・・この時間は、この前やった中間直前小テスト返しますよ~~~~」

身長140cmブローカー、一部のマニアックなユーザーの希望をこれでもかと答えている3-Bの担任、奥田千恵ことちゅちゃん。彼女の発言で3-Bの半分以上の生徒がざわつきだす。

その内容は、様々である

「ー今日帰ってくるなんて聞いてないぞ！」

「ーどうしよ、親がいるから隠せっこねえ・・・」

「ーわたしなんて今回のやつ悪かったらお小遣いカットよ!!」

とまあこのように不平を言うのは当然である。

しかしそれも既に後の祭りだ。なぜなら今彼らにできるのは、解答用紙を貰うという死刑決行を待つしかないのだ。

しかしそれに反応というより応答すら出来ない残念な子たちがいた。

な「あう〜」・・・／／／お・・・お姫・・・様だっ・・・こ／
／／／／」

アリ「すびーーzzz」

ショートするなのはと未だ夢の中のアリシアであった。今朝、結斗と来てずっとそのままである。

ア「ちよつと結斗、あなたなにしたのよ？」

そこで右に座るアリサが結斗に千恵に聞こえないよう耳打ちする。教室に入る前に二人を下ろしたため二人がこの状態な理由を知っているのは、結斗とフェイト、それと本人達だけなのだ。

結「???さあ・・・?」

ほんとうに思い当たる事がなさそうに首を傾げる結斗。では、と思い今度は、前に座るフェイトへ尋ねようとするが――

フェ「全く・・・姉さんもなのはもずるいよ、わたしだってお姫様抱っこしてもらいたいの・・・」

一人物々と机に向かって言うフェイトの言葉に秀才の脳が閃いた。

ア「結斗・・・あんだ、まさか今朝なのはとアリシア抱えて来た？」

結「え？何で知ってるの、アリサ？」

ア「・・・はあ〜（この馬鹿チンは・・・）」

もう呆れるしかできないアリサ。ほんとうにご愁傷様だ。

千「はあ〜い。みんなそんなことばかりいっているとコロンプスの卵ですよ〜。では、順に取りに来てね〜」

千恵のお説教、コロンプスの卵の言葉に一同静止した。

ちなみにコロンプスの卵とは、千恵が考えたちよつとオイタが過ぎる生徒を説きよ・・・もとい調きよ、ゲフンゲフン生徒指導するために作った罰である。

執行場合、数分間の記憶の欠如がみられる。

始めこれをされた生徒が全く覚えてないと証言ーその後受けたものも全員同じ症状がみられた。

全員がだ・・・。

それ以降千恵のコロンプスの卵の刑は、三年生の中では最も恐ろし

い刑として認識されるようになったのだった。

ピーーーーンポーーーーンパーーーーンポーーーーン

授業の終了チャイムが鳴る。しかしそんなもの今の3・Bには、関係ない。理由は――

クラス「・・・・orz」

との事。その中に盛り上がる姿もあった。

は「なのはちゃん・・・」

な「はやてちゃん!」

ダキッ

お互いの傷を舐めあつよつに抱き合つアホの子だった。

逆の意味で・・・である。

ア「あの様子からすると二人は・・・」

す「悲惨だったみたいだね・・・」

それを憐憫の表情で見る二人。見ていて悲しい光景だ。

な「結斗くんはどうなの～～～」

は「どうなんや～～～」

結「ええっ？何二人ともっ!？」

背後から現れた二人に驚いた際に、なのはが結斗のテストを奪い去った。

ア「わっ！バカッ!！」

無知な子供のように結斗へ近づき点を確認しようとするのはを止

めようとしたアリサだったが、それは間に合わなかった・

な「っくくく!!・・・生まれてきてごめんなさい・・・(泣)」

一秒前のテンションが愕然と下がり、気分まさに大暴落のなのは。

は「なのはちゃん大袈裟やなくく。っくくく!!・・・勉強疎かにしてごめんなさい(泣)」

なのはの二の舞に掛かるはやて。
地に手をつき、もう立ち直ることさえ出来なさそうだ。
それを見下し体勢をとる人がいた。

麗「・・・バカね・・・二人とも・・・ゆうがこの程度のテストで間違っはすがないじゃない?」

親友二人の愚考を憐れがる麗華である。

ア「わたしも激しく同意よ。あんたたち結斗がわたしや麗華よりも頭いい事知ってるくせにどうして見るのよ・・・」

結「?・・・そこまでいいものじゃないよ・・・だってもっと簡潔な答えとか後から思いついたりしたし・・・」

この少年はヒトマルマル点を取っていてもまだ上に行こうとしているのであった。

もう何を目指しているのか分からない状態である。

な「結斗くんッ！お願い！！わたしに勉強教えて！」

は「わたしもや！このままやとやばいんやッ!！」

土下座する勢いで縋り付く二人。
もう必死なのだった。

結「ぼ・・・僕は別にいいけど（その必要はないわ・・・）麗華？」

麗「ゆうさつき千恵から呼び出し受けてたでしょ？そっち行って、私がこの二人に教えるから」

結「そう？ありがとう」

フェ「わたしたちも手伝うよ、麗華」

アリ「うん」

す「そうだね・・・放課後にしようか？」

というわけでちょっとアホの子の面倒を見るためにプチ勉強会が本日開催されることが決定したのであった。

放課後――

待ちに待った放課後。教室内は地獄絵図であった。机の上には

な「ハラ・・・・・・・・ホレ・・・・ヒレ」

は「あれ結斗くんが二人おる~~~~」

頭から湯気を立ててるのはにもしない結斗の幻影を見始めるはやて。

麗「ア・フェ」「はやく勉強しなさいッ！（しないとっ！）」「」

その側には、鬼教官たちが佇んでいた。

結「い、一体何が・・・あったの？」

結斗くんの質問にお答えしよう――

回想――

麗「え〜とこれからおバカ二人の更正勉強会を始めます」

な・は「おバカじゃないの（で）！！」「」

麗「ええい、うるさい。小テストで半分以下を堂々と取る奴らをおバカと言って何が悪い！」

な「ううっ・・・それは・・・」

は「くっ・・・言い返せないで・・・」

麗「さてゆうがないから特別にわたし、アリサ、フェイトが教えるわよ。わたしは主に全般、アリサは文系、フェイトは理数系お願いできる？」

ア「分かったわ」

フェ「うん、いいよ」

な・は「「よろしくおねがいします〜〜!」!」!」

元気だけはいいい二人をどうしてやるうかと思っってしまった麗華とアリサ

アリ「麗華ちゃん〜ん、わたしとすずかちゃんは？」

麗「アリシアとすずかは、適当に見てて？そのアホの子たちきつとわたしたちが言ってる事翻訳しないと理解できないと思うから」

は「麗華ちゃんツ！？わたしらそこまで頭悪いわけやないよ！！」

少しでも抗議の姿勢を見せるアホの子の一人。

アリ・す「うん、分かった（いいよ）」

は「ええっ！？二人ともそんな素直に頷かんといて！！」

麗「はいはい・・・バカ言っていないでさっさと勉強する！！」

アリサ先生の場合――

ア「この時はこれよ・・・ってなのは違っツ！それはさっきの事

！今は全く違う事してるの」

な「えっ？だってこの場合はこの例文を基にすればいいんじゃないの？」

ア「だから違う！…って寝るな、はやてッ！…！」

ボカンッ

は「ほげっ！」

前途多難であった。

フェイト先生の場合……

シーーーーーン

は・な」「……………」

フェ「……………」

は「フェイトちゃん……ここなんやけど……」

分からない事をフェイトに尋ねるはやて。

フェ「あ、うん。それはここ……」

は「?????」

教科書を指差すフェイト。
首を傾げるはやて。

な「フェイトちゃん、これは?」

フェ「それは……ここ……」

な「????」

なのはも同様に。指差されたが訳が分からない
結果――

プシュー――――

フェ「ええっ!?二人とも、どうして!？」

二人の頭から湯気が発生。カップ麺が作れそうだ。
その間どうしてそうなったのかおろおろとし続けるフェイト先生で
した。

麗華先生の場合――

麗「貴様たちはクズだッ!!問題が解けるようになってようやくま

しになったクズだ！！そのクズたちのためにわたしたちの貴重な時間が奪われる事を肝に銘じろ！」

怒声が教室中に響く。

な・は「なの~~~~~」(泣)「びええ~~~~~ん」(泣)「

鬼教官に折檻の状態のような尋問を受け、泣くしかできない二人。気分は正に囚人だ。
逆らう事は許されないのだ・・・

麗「返事は一言！イエス、ママだッ！」

な・は「イエス、ママッ！！！」

座ってご丁寧に敬礼をし始める二人に満足な様子の麗華。

麗「うむ・・・では問い1」

チツチツチツチツチツチ

時計の音がやけに長く聞こえる光景である。

な「出来ました！」

自信があるのかニコニコと笑いながら麗華に答えを書いた紙を渡すが・・・

麗「こんのバカちゃんが～～！！！」

ボカアアアアアアアアアン

な「いた～～～～～～～～いの～～～～～～」

丸めた用紙でぶったたかれるのは。

どうやら違っていたようだ。五秒前の自分を罵ってやりたい気分だ。今度はその隣の・・・

は「ふっふっふ・・・アホなのはちゃんやな～～～わたしでも分かるで～～～こんな問題。はい麗華ちゃん」

自信満々に解答を見せる。ちなみになのはとはやてのやっている問

題は一緒である。

麗「……………お前もだ、アホ狸ッ!!」

ボカンッ

は「なんやてええええええええ!!いつっつとおおおお!!」

今度、何処から取り出したのか麗華が二人を殴ったのは、出席簿である。

床で転げまわる栗色の髪の聖祥大七大美少女の一人と茶髪の一人。

アリ「どこから取ってきたの?」

それを完璧無視なアリシアである。

結斗とパートナーとなって以来、ちよつとやそつとのことじゃ驚く事がなくなったのが理由だった。

さもあるう。人間としての最高スペックを持つ結斗がいるならもう世の中で驚くことはないのである。

麗「なんとなく?ほらやるわよ!!二人」

実を言うと某男でしかの S の姉を意識してこの武器もとい愛の鞭
という武器を装備したのである。

(作者は好きだからです。自分で執筆しようか迷っているくらい)

な・は「なの~~~~~」「いせ~~~~~」

二人の悲劇は続く~~~~~

回想終了~~~~~

す」というわけなの・・・」

すまなさそうな顔ですすかが千恵の用事を済ませて帰ってきた結斗
へ話した。

結「あはは・・・」

苦笑いするしか出来ない結斗。

は「あつ！結斗くん！！ヘルプ、ミー！もうあかん！この先生たちはわたしらを知恵熱で殺す気なんや！」

焦点があつたのか結斗に助けを求めるはやて。それに気づいたなのはも泣き出しそうな子犬の目で結斗を無言で見つめ始める。

結「あ~~~~はいはい・・・麗華、アリサ、フェイト。ご苦労様」

麗「ゆう、用事は終わったの？」

結「うん・・・ちよつと進路の事で聞かれただけ。さて今度は僕が二人を見るよ・・・。。ふむ・・・」

二人の進捗状況を答えから見ると。

結「二人はちよつと深く考えすぎだね・・・この手の問題は素直に

解答すればいいんだ。だからここを・・・」

ちよいちよいと紙に考え方を書く。するとさっきまでチンプンカンブンだった事が嘘のように分かる。

それがなのはとはやての嬉しそうな表情理解できる。それほどまでに結斗の説明は分かりやすかった。

な「なるほどなの～～」

は「じゃ、じゃあここはこうゆうことなん？」

結「・・・えっと～～うん、正解」

は「なんや簡単やん！」

ア「それをさっきからずっと教えてるじゃない!!」

結「三人とも天才肌だから理解できない事が理解できないだと思っよ」

「――いや!一番にそれは結斗くんだって!!」

先生三人は一齐にそう思ったのであった。
そこで――

な「麗華ちゃんたちは分かりにくいの」（ボソッ）

言うてはいけない事をなのはさんはい小言でもらしてしまった。

なのはの後ろに聳え立つ真っ黒な影――

麗「へえ〜い・い・度・胸・じゃ・な・い。な・の・は」

パンツパンツ

金属音の音が響く。それはそれはいい表情である

な「っ！・・・れ、麗華ちゃん・・・その出席簿はなんなの！！！」

麗華が握るのは、アルミ製でカバーされた出席簿であった。それを見た途端背中を冷や汗を伝うのは。

麗「お仕置き用よ？」

な「それお仕置きじゃないの！！絶対O・S・H・I・O・K・I・用なのっ！！！」

麗「問答無用！こんの固定大砲台がッ！」

な「いやなの~~~~~」

ドカドカッガシャン

けたたましくなのはと麗華は、教室外へ消えていった。残される他の面々。
彼女らの心は今一つである。

——麗華は魔王も恐れる冥王だ

と……。

は「……。（なのはちゃん・アホやな……。そんなもの
言わんでもええのに。そりゃあ口に出せば麗華ちゃんが怒るに決ま
ってるやん……」

結「はやて、口に出てるよ……」

は「……えっ?」

て〜てん、て〜テン、ずちやずちやずちやズチャチャチ
ヤ……

は「な、なんや……。この恐ろしいBGMは……。しかもどんどん
私に近寄ってくる感じ何やけど……。その通りよ……。ひ
いつ!」

奇妙なジョーの効果音と共になのは追跡から反転し、やってくる
——麗華。

そのホラー映画勝りの恐怖に一瞬で竦んでしまうはやて。
動こうとしても足は地に張り付いているように動かない。

さながら睨みつけたものを石にしてしまうメデューサのようだ。

は「麗華ちゃん・・・話し合おう。話し合いますよ・・・人間話しあわな何も良いわせんと思いますよ・・・」

もうなにを言っているのかはやて自身にもわからない。それほどまでに今の麗華は般若めいていてホラーめいていた。

麗「昔の人はいいました・・・」

はやての苦しい言い訳が麗華に遮られた。それに改めて話そうと出来ないはやて。まさに怪獣に睨まれた狸である。

は「な・・・何でしょうか・・・？？」

麗「戦争がなければ文化の発展はあり得なかったと・・・」

は「え・・・え~~~~と・・・つまりわ・・・」

「――言えない。次の事を言いたくない。自分がお仕置きされる
ことを」

麗「うん 成敗」

は「ひしゃげるのは嫌や~~~~~」

ここに麗華裁判長の裁判が開廷されたのであった。

判決――――被告人高町なのは、八神はやて両名――――

極刑。
なのでした。

N
e
x
t

t
o

T
A
L
E
7
2
!!
!

T A L E 7 1 テスト勉強は程々に（後書き）

やっちゃまった・・・。

色空模様に変化されすぎてしまった・・・

T A L E 7 1 ・ 5 登場人物紹介 part 2 (前書き)

今回はタイトル通り紹介です。

これから随時この話を更新するかもです。
では

T A L E 7 1 ・ 5 登場人物紹介 part 2

白銀結斗：male

中学三年生、13歳。

身長162センチ 体重48キロ 細身だが引き締まった身体

趣味：料理・鍛錬

旧姓名 黒堂燈夜

魔力ランクSS+

階級：一等空尉

言わずと知れたこの作品の主人公。元の親、黒堂の両親と和解をし、精神的に安定感を持てるようになった。より一掃大人びた印象をずるようになった。

しかし優しい性格は、依然として変わっておらず周りの人を自信の身も省みず、助けようとしてしまう悪いところも健在。

本人の努力と才能を持って様々な通り名をつけられ、名実共に管理局の切り札として認識されている。

通り名

双刀双銃カトラ：二つの武器を自在に扱い、それは一騎当千の強さを誇る

戦女神：戦場を舞いように敵を屠る

緋色の夜スカレットナイト：魔法色と彼の特徴的な長い宵闇色の髪を合わせたもの

使用デバイス NEXT世代焰美、瀨

NEXT世代とは、その字のとおり次の世代の事。焰美と瀨は、結斗の創醒の書の改変を受けているため、自己進化プログラムが内蔵されている。そのため魔力を増加する事もできる。無印の時は、供給をうけていた。

使用流派 白銀流

開祖・結斗の流派であり、様々な武器に対応している。現在この流派を扱っているのは、結斗、麗華、アリシア、焰美、瀨となのは、フェイト、はやてである。

なのはとフェイト、はやての三人は、近年で結斗を師事し、弟子となっている。どの武器を扱うかは、お楽しみに。

白銀流技

飛燕 白銀流の根底を指す技。飛燕の派生系が奥義へと繋がっている。強さは、込めた魔力密度によって異なる。

刀術

level1 身妖舞：剣の舞を連想させる技

level2 滅鋼斬：一撃重視の技

level3 弧武紅燐剣：剣圧に念動を加えた広範囲剣戟

level4 殲鋼双肢乱：複合高速剣の奥義

level5 枢孔紅燐剣：超広範囲全体高速剣の奥義

焰美と瀨の力を変換させて作られる技

飛天紅（蒼）龍翔破：刀に焰美と瀨の高密度な魔力を付与させ、発動。龍のように具象化して敵を喰らう

銃技

フロズン バスター
Frozen Buster：瀨の氷結の変換能力を付与させた集束砲撃。

福音の魔閃・Weiss Schwarz ヴァイス シュバルツ：音で相手を捕捉する砲撃
聖邪必滅の流星群・Sturm Creutz シュトゥルム クロイツ：夜空の流星群のように対象を全方位から攻撃

アステル
星：上空から対象を捕捉、その後幾百の閃光となり敵を穿つ

龍魂召喚

クリスタル・フォルス（Pholus）
全身を眩い光を満たす鳥類に属す神族。体長20メートルを越し、その姿は神話に出てくる神にも等しい。
知性があり、人の言葉を理解することが出来る。もともと創醒の書

に封印されており、それを解除し、マスターとなった結斗にとても懐いている。

ツインセットアップ

結斗の考えた焰美と瀨の同時にセットアップ方法。

魔力が跳ね上がり、SSS++ランクとなる。

二機同時の起動のため魔法の演算処理も高くなり、扱う魔法も幅広くなる。

無印、A・S時は未だ発展段階の魔力だったため代償として肉体を蝕んでいた。しかし現在は、制御を十分とし代償を負うことなく、使用が可能になった。

しかしこれは三提督とレジアス中将の承認を必要とする。

シルバーシステム

結斗の作り出した新形態システム。デバイスと、マスターを繋げ処理能力の向上を促した。

白銀麗華：female

中学三年生、13歳。

身長154センチ 体重？キロ 小柄で線の細い身体

趣味：結斗を抱き締める事

旧姓名 黒堂 舞

魔力ランクS

階級：囑託

この作品のオリジナルヒロインに位置する女の子。

性格は、独我不遜、結斗至上主義。

結斗のことが大好き。前の親黒堂の両親とは、前ほど険悪ではない。結斗以外のものに命令されるのを嫌がったため、囑託魔導師で継続中。しかし戦闘力は、素晴らしいものがありなのはたちと同程度それ以上の戦闘力を誇る。

一見猪突猛進考えるより行動が出るようにおもわれがちだが理性的で思考派である。

使用デバイス 鏡月

美緒と京二設計のデバイスだが現在は、結斗が増築し、カートリッジシステムとシルバーシステムが組み込まれている。

加え擬似リンカーコアが内蔵されていて、麗華くらいの魔力を保有している。これにより魔法の威力増強などが出来る。現在それに設計されているのは、焰美、澗、鏡月、レイジグハートエクセリオン、バルディッシュユアサルトのみである。

擬似リンカーコアの開発は、結斗にしか出来ない。

白銀流 抜刀術

一乃太刀 ひょうが 氷花
二乃太刀 すいせん 水仙
三乃太刀 しんげり 白百合
四乃太刀 ふゆ 冬青
五乃太刀 こいし 柊

二年の歳月で完成した麗華のみが使う事のできる五連撃刀戟。全て氷結の魔法が変換されており標的は、氷に包まれる。

エアリアル
A i r i a l レイザー r a y s e r : 収束砲撃

プリズム
p r i s m b a l l e t : 弾丸

T A L E 7 1 : 5 登場人物紹介 part 2 (後書き)

と
言
う
訳
で
す。
そ
れ
で
は
ま
た

T A L E 7 2 好評につき・・・（前書き）

というわけで今回はこんなのです。

こんなものってどんなの？って思われるかもしれませんが、読むと分かります。

では

TALE 72 好評につき・・・

第一管理世界ミッド

ティ、クロスファイアー、シューート！」

ズガガアアアアアアアン

合計6つのオレンジ色のスフィアが前方のターゲットを粉碎した。

結「そこまで！」

背後に見守っていた執務官に似た服を着た結斗が発した。彼の着る服は特注の服で一目でそこらの局員とは違っていると判別が出来るよう遜色されていた。黒色の地に銀色の線が肩から流れ、背中に双翼がイメージされていた。

妹の背から緊張の糸が徐々に薄れていくのを肌で感じ、声をかける結斗。

結「お疲れ様、ティア」

ティ「兄様・・・」

結「？・・・納得いかない？」

あまり嬉しそうではないティアナ。

理由は聞かずとも分かるが、敢えて聞くようにした。

ティ「うん・・・」

結「ティア、君はこの2年でもって成長したよ？ティーダさんが生きていたら、驚くほどだと思っよ？」

結斗の言葉の通り今のティアナに同年代の子供たちは足元にも及ばない。だがティアナはそれでは満足できないのだった。

ティ「でも・・・兄様の足元にも及ばないよ・・・」

結「あはは・・・そりゃあそうだよ？だって僕はティアのお師匠様なんだからそう簡単に抜かれたら恥ずかしいよ」

人懐っこく笑う結斗に触発されティアナも少しだけ顔を明るくする。

ティ「・・・でも・・・」

結「大丈夫。ティアが努力しているのは僕は知っているし、それが無駄であるはずがないんだから。自身を持って」

そういつてティアナの頭を撫でる結斗。ティアナは嬉しそうに目を細めている。

ティ「・・・はい！兄様！！」

ティアナは顔を上げ、輝く表情に満足した。

結「つと・・・今日はここまで・・・。それじゃあ僕は任務があるからまた後でね」

その場を後にしようとした時、急な声をかけられた。もちろんその相手は、ティアナしかない。

ティ「兄様っ！・・・今日はわたしの家に来るんですか？」

結「えつと・・・その予定だね。でも任務次第かな？先に寝ててもいいよ？」

ティ「嫌・・・待ってる・・・だから早く帰ってきてね？兄様」

結「う、うん・・・分かった。なるべく早く帰るよ」

ティ「はい（やった！今日兄様来るんだ！）」

内で絶賛するティアナ。

ティアナが結斗の弟子になって2年。彼女は顕著に成長した。結斗の射撃能力から自分で考え、力をつけた。目覚ましい成長であった。

そのかいあって、学校での成績も上がってきたし、同級生ではそう負けることはなかった。そのため基本ティアナは一人でいることが多い。2年前があれだったためなおさらだった。

そしてティアナはより一掃、結斗を師事し、力をつけていった。よってティアナが結斗に憧憬をもつようになるのは無理からぬことだった。またそれ以外の感情・・・恋愛の感情を・・・

結「じゃあ行つてきます、ティア」

ティ「行ってらっしゃい、兄様」

静かに結斗が緋色の光に包まれ瞬後、姿はなくなっていた。

やはり寂しさが残ってしまうティアナだったが、結斗が帰ってきた時のことを思い浮かべながら、結斗の帰りを待つたため帰路に着いたのであった。

時空管理局・地上本部
中将応接室

結「白銀結斗一等空尉入ります」

木造製の扉を押し、中へと進入する。待っていたのは、部屋の主レジアス・ゲイズ中将であった。

レ「来たか・・・」

椅子に深く座りなおすレジアスに気を引き締めた結斗。

結斗は、はつきりいってレジアスの事はあまりよく知らない。自分の上官に当たるのだが、どうも堅苦しいのがきているようだ。しかしレジアスの局に捧げる正義感と純粋に尊敬に値すると思っっている。始めそれは騎士道精神とすら思えたほどだ。

結「はい・・・任務と聞きましたが・・・」

レ「ああ、第108部隊に行ってもらおう」

結「108部隊ですか？」

108部隊のことを思い浮かべる結斗。

「――確か・・・空港火災と一緒に救援活動をした部隊だったよね。その後火災は、結斗やなのは達の手により鎮圧された。火事の原因は不明。負傷者は100人程度。死者は0人でありそれがせめてもの救いであつた。」

「――原因不明って・・・そんなことあるのかな？」

仮にも空港なのだ。そのような大きな場所での事件で原因不明というのは在り得ない。それに怪我をした者たちとってみればそれはあまりに酷い話だろう。

「まさか・・・」

「瞬脳裏に掠めるものがあつたがそれはないと否定をし、レジアスの話しに耳を傾ける」

レ「ああ。今回の任務は108部隊と共同任務だ。詳しくは、現地で聞け。だが・・・今回の任務はそれほど気負つものではない」

結「と、言いますと？」

レ「単なる保険だ。本来お前が行くほどではないがな。念のためだ」

レ「レジアスは結斗を高く評価している。それは彼の階級からもそれが分かる。」

結「・・・分かりました」

レ「先方には既に伝えてある。お前は、このまま現地に行け・・・
・ところでハラオウン二尉はどうした？」

結「ああ・・・通信はしました。後で合流します」

レ「分かった・・・（あの・・・）なんだ・・・？」

結「ゼストさんの部隊は・・・」

レ「未だ行方不明だ・・・」

結「そうですね・・・」

静かに退出するしか出来なかった。

第108部隊――

結「失礼、部隊長室はどこでしょうか？」

受「あ、あなたは・・・」

当然の来客に目を点にする受付の女の人。

5秒ほどそれが続き、我に返った受付は質問に答え、部屋の場所を教えた。

それを聞いた結斗とさつき合流したアリシアは、部隊長室へと急いだ。

コンコン

結「失礼します。白銀結斗一等空尉です」

ゲ「どうぞ~~~~」

中から野太い男の声が聞こえ、首を傾げる結斗とアリシア。

アリ「この声・・・」

疑問を浮かべるアリシアたちであったがいつまでも立ち往生していても仕方がないので、中へ入る。

ゲ「よ〜この間の空港の時は助かったぜ」

アリ「あなたがここの隊長さんですか？」

アリシアが尋ねるのも無理はない。それは彼に魔法の反応が無かったからであった。

それでも部隊の隊長なのだ。

疑問に思わないほうがおかしいというものである。

ゲ「おう・俺はゲンヤ・ナカジマ。つってもお前らのことだ。もう知ってたんだろ？」

嫌味ではなく本当にそう思っているようでゲンヤが笑う。

結「はい、周辺調査は既に」

ゲ「さすがだな。やっぱり噂に違わぬ優秀さだな」

結「いえ、それほどでも」

ゲ「さて世間話はこの辺で、本題に入るぞ」

ゲンヤが真剣な表情をし始め、それに倣い結斗とアリシアも引き締める。

ゲ「今回おまえらみたいなのを呼んだのは、こいつらの逮捕のためだ」

だされたのは、二つの写真。一人は頬に傷があり、吊り目の男性。もうひとつは、女性だった。

ゲ「カイジ・シュタインとセス・リミナー。どちらも殺人容疑で指名手配されている凶悪犯だ」

アリ「この人たちの魔力ランクどうなんですか？」

ゲ「ああ、カイジは、A A、セスはAランクだ」

アリ「高ランクですね」

ゲ「ああ、一般局員にはちときつい相手だ。だからー」

焰「我らが召集されたわけかのう」

ゲンヤの言葉に続けたのは結斗の右耳にあるピアス焰美であった。

結「そうだね。瀨二人のデータはわかる？」

瀨「ちょっと待ってください。ーー出ました。どうやら男性がクロス、女性がアウトレンジからの攻撃を主としているようですね」

結「そっか。じゃあ今回は僕が前でアリシアが後ろだね」

さらつと作戦を公言する結斗。アリシアもそれに賛成のようでも、二年間の期間は、アリシアに力を齎した。具体的に言つと、結斗と同じ動きが出来るようになった。それはアリシアの先生である焰美と瀨が、結斗の動きを徹底的に覚えているためだ。

よってアリシアもその動きが染み付いてしまったのであった。しかしそのおかげで結斗と同等の戦闘力を持っている。それでも結斗には、模擬戦で勝てないようだが。

ゲ「・・・」

啞然とするゲンヤ。

ゲ「そ、それでうちの部隊の奴ひとり、同行させようと思うが・・・」

結「構いませんよ。合同任務ということですし」

アリ「ゲンヤさん、誰ですか？その人って」

結「アリシアっ？」

アリシアの馴れ馴れしい態度に驚く結斗。

ゲ「はっはっは。いいぞそのまま。俺は堅苦しいのは嫌いなんだ。同行するのは（失礼します！）っといいいタイミングだな。・・・彼女だ」

入ってきたのは紫色の髪を伸ばした女の子であった。女の子といってもすっかりした自我を持ち、きっちりとした性格なのが風格から判断できる。

それよりも結斗は、女の子に見覚えがあった。

結「君は・・・確か・・・あの時フェイトが助けた・・・」

ギ「はい！ギンガ・ナカジマ研修生です！あの時はありがとうございました」

きつちりと敬礼をするギンガに少しだけ複雑な気持を抱く結斗。

いくら人員不足といっても目の前の女の子は、精々ティアナと同じか少し上と言ってもいいくらいの歳であったためだった。

「でも今はそんなこと言ってる時じゃないよね

思考を切り替え、考えを彼方に飛ばす結斗。改めてと結斗とアリシアも敬礼をする。

結「白銀結斗一等空尉です」

アリ「同じくアリシア・テストロッサ・ハラウン二等空尉です」

お互いに敬礼を済ませ、当初の目的任務の内容を聞き込む。その後、一時間後に108部隊を出発したのであった。

結「はい・・・終わり」

結斗の声がありシアとギンガの耳に入った。側にいるギンガは、既に動く事を忘れるほどに呆然としていた。

108部隊を出発後、すぐに容疑者二人に遭遇。

そしてギンガの瞬きするまもなく、容疑者二人が地に伏していた。

カ「ぐっ・・・お、お前・・・化け物か・・・」

リミ「うう・・・」

地に伏す二人が未だに戦意を失っていない目で結斗に睨んだ。

結「失礼だね・・・僕だってれっきとした人間だよ」

リミ「わ・・・わたしたちがこんなにあっさり・・・お前は何者なの・・・」

結「ううん・・・こうゆう場合って名乗るべきかな・・・ま、いつか。双刀^{カトラ}双銃って名乗れば分かる？」

カ「お前みたいながキが!？」

驚く二人だがやがて力尽きたのか気絶した。

アリ「ギンガちゃん？」

結斗の喋る姿を呆然と見ていたギンガの隣に立つアリシアが話しかけた。

ギ「は、はい！」

アリ「ごめんね・・・驚いちゃったかな？」

ギ「い・・・いえ・・・」

本心とは全く逆のことを言うギンガ。

地に伏している二人はAAとAランクだ。局員でもそついないくらいにランクが上だ。だがそれを物ともせず結斗は、一瞬の交叉で叩き潰した。

「・・・噂以上の戦闘力です・・・これ程までとは・・・」

結「さて任務は終わり。帰る〜」

ギンガの考えを他所に結斗は、早く帰りたそうに声を上げたのであった。

ティアナ side

ティアナです。兄様と別れ、今は夜の7時。わたしは今キッチンにいる。今日は兄様が来てくれるからわたしがご飯を作ろうと思ったからだ。

ティ「兄様・・・まだかな・・・」

一人になるとどうしてもそう考えてしまう。だってそれくらいに兄様は温かいから。ティード兄さんが死んでから二年がたちわたしは兄様の下で技術を磨いた。

兄様はわたしを本当の妹のように接してくれる。だからわたしは兄

様が大好き・・・／／／／

ティ「ってわたしって何一人で言ってるのッ!?!?.....兄様
ってどんな人が好きなんだろ?」

兄様はとても優しい。だからアリシア姉さんや焰美姉さん、澪姉さ
んからも好かれている。

もしかしたら他にも兄様を狙っている人がいるかも・・・。
でもそうゆう話し全然聞かないんだよね・・・

ティ「はあ・・・わたしもアタックしてみようかな?(何を?)そ
りや兄様に・・・ってキヤアアアアアアアアア」

声が聞こえて振り向くとそこには兄様がいた。

結「ティア・・・そんなに驚かないでよ・・・」

ティ「いきなり背後に立たれれば誰だって驚くよ!!もっっ」

結「あれ?ティア、怒ってる?」

ティ「ふんっ」

兄様なんて知らないッ！

side out

キッチンで一悶着後料理が出来上がり、席に着いた二人。だが・

ティ「・・・」

結「（か、会話がない・・・）」

あの後へそを曲げたティアナが一切口をきかないのだ。
といても真実は違うのだが・・・

ティ「（兄様にさっきの事聞かれてないよね？・・・）」

さっきのこととは結斗にアタックすることである。それが恥ず

かしくてティアナは話せないでいたのだ。

結「テイ、ティア・・・」

ティアの迫力に圧されてか、おずおずと話しかける結斗。

テイ「何ですか・・・」

結「(け、敬語に・・・)あのさ・・・悪かったよ。ごめんねさっきは驚かせて」

テイ「つゝゝん」

結斗の言葉にもつつけんな態度を取るティアナにどうすればいいのか困り始める。

局で優秀でも女の子の扱いだけは分からない結斗なのだ。

結「そ、そっだ！じゃあ一つだけ願い事叶えてあげるから(ほんとつ！！)(う、うん・・・)」

身を乗り出すようにして話していることを遮るティアナ。

ティ「じゃ、じゃあ今日はわたしと寝て」

結「だ、駄目だよ！（兄様、約束を破るの？）う・・・」

目に見えてうるたえ始める結斗。

ティアナは現在地球で言うと、小学六年だ。さすがにこの歳になると一緒には寝れないため、別々の部屋で寝ていたのだ。

ティ「兄様・・・」

結「あ~~~~分かったよ・・・」

ティ「やった」

机の下で握りこぶしをするティアナ。

その後結斗が麗華たちにされるように抱き枕にされたのは言うまでもない・・・

N
e
x
t

t
o

T
A
L
E
7
3
!
!
!
!

TALE 72 好評につき・・・（後書き）

・・・調子悪いですね。ぐちゃぐちゃです。

今回はティアナが概ねに好評だったので書いてみました。
自分的には出来たほう？

っとそんなことは何とかなる現実逃避・・・

突然ですが最近始めました冬のアニメ。

灼眼 final がまああれですね・・・

小説も見っていますが、最後が気になります。

今回はこの辺ででは！

TALE 3 晴れ時々血桜(前書き)

ぜ・ふ・ちよ・う!!..!

というところで不調すぎです。

それでもいい方はどうぞ見てやってください。

T A L E 7 3 晴れ時々血桜

ドオンツドオンツドオオンツ

遠くで火薬の破裂する音が響く。それは後春の後、初夏の前の青々とした空へと広がり人の心を躍らせる。

その空の下集まっているのは、総勢五百人の子供達だ。

これから始まる事に浮き出しあっている者、眠たそうに大きく口を開け、欠伸を搔く者そして――

は>ほなツいくで~~~~~第 回聖祥大付属中学校春季体育
大会開催や~~~~~ツツ!!!!!!<

人生で一番になるほどはちゃけまくる者もいた。

今日 月 日は、結斗や麗華たち聖祥大付属中学生の体育祭の日である。

現在校庭の運動場には、人が集まる。生徒一同は全員白の体操服を着ている。

は>第一種目は、男子100m競争や。準備する人は入場口へ来たつてやく

放送用のテントで解説役であるはやてが盛り上げる。

結「はやて、張り切ってるなあ・・・」

自分のクラスに戻りながら机の上に登りかねないテンションの幼馴染の光景に呟いた。それに答えるは、いつものメンバー。

な「にはやは・・・はやてちゃんこつゆうの好きだからね」

フェ「うん・・・イベント好きだから。トラブルメーカーだけど・・・」

結「まあ怪我してたり、最近忙しかったりしてそうゆうことあまりしてなかったのもあると思うけど」

ア「そんなことよりもあなたたちさっさと歩く!」

話すことに夢中になっていたのか結斗たちの前は結構な空間が出来ていた。

アリ「アリサちゃんも張り切ってるね」

ア「ふ、普通よ／＼／」

す「ふふ・・・アリサちゃんが生徒会長になって初めての体育祭だから成功させたいんだよアリシアちゃん」

ア「すずかつ！？／＼／／」

すずかの助言に慌てるアリサ生徒会長殿。

三年になって話題のトピックとなったのはこれであった。それはアリサが生徒会長に就任したことだった。副会長は、もちろんすずかである。生徒を引っ張っていくアリサにそれをサポートするすずかしい組み合わせである。

それ以前にアリサとコンビを組むのにすずか以上の逸材はいないと、結斗は心の中で吐露した。

結「つと・・・そういえば麗華はどこいったんだろ？」

いつもの輪に自分と同じくらいの存在感を持つ麗華を探すがいない。どうやら席を外しているらしい。

アリ「麗華ちゃんならなんか用事があるとかで抜け出したよ？体操服で」

それを聞いていたアリシアが丁寧に結斗に答えた。

アリシアも女子の体操服ブルマであり、みな注目を浴びていた。というより結斗を中心にしているものメンバーに高濃度の熱視線を行き交っていた。一部には、腰を引く男子の姿もある。それを見た結斗の感想――

――腰痛いのかな？

良くも悪くも白銀結斗という人間は、純粹なのだ。

結「た、体操服で？そんなに急な事なのかな？」

ア「さあ・・・分かんないけど、さっきはやてが競技の事話したらいきなり目を輝かせて消えちゃったわよ。どうせあんた絡みでしょ？」

結「？・・・どうゆう意味？」

ア「・・・はあ〜」

どうしてこんなのに惚れちゃったのかしらと思ってしまつアリスであつた。

な「わかんないつて・・・ん？アリスちゃん、生徒会長さんなのに競技知らないの？」

アリスの言葉に気づいたなのは、尋ねた。

す「この体育祭は、生徒会が主催つてことになっているけど実際には、実行委員会が計画してるの。だからわたしもアリスちゃんも詳細は知らないの・・・知ってるのは実行委員のはやてちゃんたちだけ」

フェ「そうなんだ・・・つてことはアリスたちも一生徒として今日楽しめるつてことだね」

ア「ま、そうゆつことね」

ピンポンパンポ~~~~~ン

「……ただいまから男子100m走を開始します。出場者は、集まってきたさい。つゝか早く集まり！競技出来んやないか……」

全員「……」

行く気が少し半減した瞬間であった。

はゝえゝゝみんなこころうさんや。これで午前のプログラムは全部終わりや。この後、ご飯いっぱい食べて午後からも頑張つてやゝゝゝ

実行委員はやての放送が終わると共に、生徒たちは蜘蛛の子のよう
に散りじりとなる。みな一様に教室や保護者の待つ観客席へ行く。
それに続くよう結斗たちも歩き始める。

アリ「フェイト……お母さんたち何処にいるか知ってる……？」

空腹に耐えながら妹であるフェイトに尋ねるアリシア。

フェ「えっと・・・さっきチラッとだけ姿が見えたからあの辺りだ
と思うんだけど」

そんな姉の可愛らしい姿に苦笑しながら観客席を指差す。もうどち
らが姉でどちらが妹なのかわからないじょうたいだ。
傍から見れば、全員が全員フェイトの方を姉と言っだろう。

な「お父さんたちも一緒にいるみたいだけど・・・つとあれかな？」

遠目からでは分かりにくいが近くに行くと目的の団体が観客席の最
前列で鎮座していた。
それも・・・

美「やったわ！ゆうちゃんの写真がこんなに！！」

掌で結斗の写真を広げる美緒。
どれを見ても美少年であった。

麗「ふっふっふん。お母さん甘いよ！！わたしなんてほらっ！！」

してやったりの顔をし、見せびらかすようにして写真を見せる麗華。その途端二人の表情が一気に染まった。

焰「こ、これは／＼／＼／＼／」

瀨「なな、なんてものを写しているんですか／＼／＼こ、こんな破廉恥な／＼／」

麗「ふうっん．．．じゃあ瀨には、焼き増ししてあげない（麗華さま、なんて素晴らしいものを収めているのですか！）か、変わり身早いわね、瀨．．．」

大騒ぎをしていた。主に白銀家の面々が．．

これからあの中に突入しなくてはいけないと思い、疲れが倍増した気がする結斗だった。

肩の高さが少しだけ下がってしまった結斗に続く、アリシア達。

結「母さん何を騒いでるの．．それと麗華．．いつの間にも先に行つてたの？」

美「ゆうちゃん ご要望どおりお弁当持ってきたわよ」

麗「いつって競技終わった直後よ。一刻も早くこれを見せびらかしたかったの」

結「ぶっ！」

そういつて眼前に出される一枚の写真。

結「ちょ、ちょっとなんなの！！これ！どうしてこんなにローアングルなのッ！？」

そうその写真は100m走での結斗の写真。頑張って走りぬく美少年の写真。しかしこれでもかというくらい地面すれすれからの撮影したものだっただ。

麗「どうしてってわたしが撮ったからよ？どう、上手く写ってるでしょ？」

どう？どう？写真を見せる麗華。確かに凄く写りがいい。本来動いているものを撮影するのは難しい。更に被写体が高速で動いているの

なら尚更だ。しかし麗華の写真は、手振れどころか写真の中央に綺麗に結斗の姿が写されており素晴らしい出来映えだった。しかしローアングル・・・

結「た、確かに上手に写ってるけど・・・」

アリ「これ一種の盗撮だよね・・・」

麗「ギクツ・・・さあ~~~~てお昼にしよう~~~~」

全員「」（逸らしたな・・・）「」

麗華のあからさまな話題転化にシンクロしたのであった。

それを機にお楽しみみの昼食タイムがそれぞれの家族で行われる。白銀家はもちろん、高町家、ハラオウン家、八神家、月村家、バニンクス家まで勢揃いだ。

その賑やかな様子を見ながら結斗は、自分が作ったお弁当を口にしたのであった。

は>おお〜〜速い！速いでッ！3年B組の白銀結斗くん！ごぼう抜きや〜〜〜<

はやての声援なのか実況なのか分かりにくい放送が響き渡る。今、最後のプログラム組對抗別リレーで接戦していた。最後のアンカーとして疾走する結斗は、前方を走る選手を次々に抜く。

それを見た女子は、歓喜。男子は、嫉妬の念を込めながら見ていた。そして――

バンッ

葉莢の音がし、リレーの終わりを告げた。結斗の身体には白いテープが巻きとられ1位ということを示していた。

は>ゴ〜〜〜〜〜ル。堂々の1位、おめでと〜〜〜3年B組のみんな〜〜〜<

結「ふう・・・」

一息を吐く結斗にクラスのみなが集まるのは自然な流れ。

ク1「やったぜ！結斗すげ〜な最後の！ごぼう抜きってどんな体力してんだお前！？」

ク2「結斗くんかつこよかつた〜」

のように黄色の歓声を挙げ、もみくちゃにする。

結「わぶつみ、みんな苦しいよ〜>はいは〜いそこまでにしたってや〜」

そんな時またはやての放送が入る。当然次に控えるのは、結果発表だ。

結斗の周りに集まっていたB組のクラスメイトたちも整列するように注意されるのだと思い始める。
が・・・

は>次のプログラムが入れんやんか〜？<

全校「はい？」

一斉に全校生徒が首を傾げる。プログラムはこれが最後のはずだ。今朝渡されたプログラム表にもそう書いてある。

は>さて・・・みんな疑問やろから説明するで～～。今回の体育祭の優勝は決まったも当然や。されに關しては変更はないで～～～< だったら何をするんだ・・・とそれを聞く結斗を含めた選手たちが思う。

麗「来たわね・・・これを待ってたのよ・・・」

アリ「麗華ちゃん？何か知ってるの？」

不適に笑む麗華に尋ねるアリシア。他のメンバーもだ。

麗「いいから待ってなさい・・・そうすれば後でとってもいいことが起こるから」

ア「いい事ね・・・?」

な「なんだろう・・・フェイトちゃん分かる?」

フェ「ううん・・・でも麗華のあの喜びよっからよっほどのことなんだろうけど・・・」

す「確かに・・・」

は「さてとりあえず各クラス代表者を一名決めてな?」と忘れるところやった!こっちから選手の推薦するで!3年B組、白銀結斗くん!<

結「は？・・・な、なんで僕？>拒否権はなしやで！<<ええつと・・・」

ク1「まあ結斗なら・・・適応力があるからいいんじゃない？」

ク2「そうだね・・・なんていってもB組の功労者だしね～～」

ということで結斗が万丈一致で代表になった。

他のクラスも渋々ながらも一人決めていく。

結斗は周りを見る。

選ばれたのは、スポーツが得意そうな男子、女子。

は>さて！決まったようやな～～じゃあルールを説明するで～～<

はやてが笑顔で意気揚々と話す。

結「（・・・またなのかな・・・？）」

直感で自分によくないことが降りかかるのではを思ってしまう結斗。デートの時然り、はやては嬉しいこと。特に結斗のことになるといつもあのように本当に嬉しそうな表情をするからだ。

は>やってもらう競技は、障害物リレーや！<

結「あれ？意外とまとも？」

は>そこッ！意外と普通と思ったたら大間違いやで~~~~わたしがそんなことで満足するわけないやん<

結「（満足して欲しい……）」

は>名づけて仮装障害物リレーや！！……このリレーには三つのチエックポイントがあるんや。

まず一つ目。進路上の机に紙が置かれとる。それを一人一枚ずつ取ってや。そこに番号が書かれとるからその番号の着替えルームに行つて中にある衣装に着替えてや。

次チエックポイント2や。ここでも一人一つのボックスを開けてもらうで。中にあるモノを装着して疾走や！

チエックポイント3。最後も机の上に紙がある。その書いてあることをマイクで話すだけや。

どや、簡単やろ？<

一気に説明をするはやてに何とか理解が出来た選手9名。

結「一見何でもなさそうだけど……はやてだからな~~~~」

「・

愚痴る結斗。

は>ちなみに一着はクラス全員学食一ヶ月無料券や〜〜)うおおお
おおおおおおおおお〜〜〜)す、すごいな〜〜よっじゃ!
みんなスタートについてや <

九人がスタートにつく。

は>行くで!ラストプログラムよ〜〜い、スターーーート!!--<

バンツ

結斗side

空葉莢の音で僕と8人は一斉に走り始めた。

めざすはゴールのみ。
みんな賞品が目的なのか物凄い速さで疾走していく。

結「って見惚れてる場合じゃない。僕も行かなきゃ！」

1位のスポーツ男子に遅れること、一つ目のチェックポイントに3番目に入った。

机の上には残り……1枚

結「え？1枚？なんで？だってまだ……ってそんな場合じゃない
！！」

僕は仕方なく机の上にある1枚だけの二つ折りの紙を取り開く。
そこには1番と書いてあった。
急いで1番の着替えの部屋に駆け込む。

結「こ……これは……」

度肝を抜かれてしまった

結斗 side out

アリシア side

ゆう君たちが第一のチェックポイントに入り、着替えし始めて5分。ゆう君と含めた九人の選手たちは、着替えルームから出てくる気配がない。
それも全く。

アリ「みんな出てこないね？」

フェ「うん……中でどうなってるのかな？」

疑問に思うわたしとフェイト。それは他のみんなも同じようであらう。挙句にざわつき始めてしまった。

はくえくくく選手の九人はよできてやくくくく

暇そうにはやてちゃんが選手に呼びかけますが

九人「……出れるなら出てるよ（わ）ッッ！！！！」

帰ってきたのは選手達のある意味悲痛な叫びでした。

「……出れないって事は、どれだけ恥ずかしい格好させられてるのッ！？」

は>ちなみにその格好以外で出れへんで。だってここにみんなの体操服あるからな。ま、そうしないと仮装障害物にならへんからな。<

アリ「……はやてちゃん……」

ア「抜け目ないわね……こつゆつ事に関しては……」

ちよつと本気ではやてちゃんとの関係を見直したくなりました。

は>ほめんといてなアリサちゃん<

ア「褒めてないわよ！」

は>そうかいな？ま、ええわ。えつとこのまま選手が恥ずかしがっ

ていたら埒があかんで、無理やりにも出てもらいます。それ、
ポチツとな <

はやてが妖しげな手元のボタンを押すと・・・

ギ~~~~~ガシャン

8つの筒。九人の選手の生命線とも言える聖なる隔壁が展開されて
しまったのだった。

キヤ~~~~~

ウオオオオオオオオオオオオ~~~~~

選手達の姿を見て、観客のテンションが一気に最高潮と化した。

巫女さん、婦人警官、メイドさん、小学生の時の制服、チャイナド
レス、バニーさん、お姫様ドレス、袴であった。ちなみに8人の内
二人が男子である。

その2人には、目を向けない観客である。誰も男子のコスプレなん
て見たくないのだ。残り6人の女子も恥ずかしいのか顔を真っ赤に
染めている。

は~~~~~みんな良さそうや~~~~~<

す」はやてちゃん・・・これのために頑張ってたんだ・・・はあ

思わず溜息を吐くすずか。他のなのはたちも同じ気持である。

は>さあて・・・お楽しみof結斗くんのは〜と <

嬉しそうに目を向けるが・・・

は>・・・な、なんで結斗くんだけ倒れてへんのヤツ!?!<

そう・・・結斗の着替えルームだけ未だに隔壁されていたのだ。

結「そんな事だろうと思って、内側から接着剤で止めたよ!」

とのことだ。はやてがスイッチを押す瞬間、咄嗟にそうしたのだ。素晴らしい危機察知能力である。

は>くっ!なら・・・連打や!!おりゃあああああああああああああああああああ!!!<

ポチッポチッポチッポチッポチッポチッポチッポチッポチッ

はやてがひたすら連打する。

ガタツガタツ

結「なにッ!？」

着替えルームがガタガタと揺れ・・・そして・・・

バタンッ

結「あ・・・」

結斗のゴスロリな服が白日の下に晒される。

全員「・・・・・・・・」

静寂と目が点になる結斗以外。
そして……

全員「ゴバツ

ギ?

do

オ+

」

混乱し、赤い花を咲かせたのであった。
全滅である。

麗「ぐ……うう……せ……せめて……い……
一枚だけでも……」

パシヤッ

残りの力を全て振り絞り、麗華はカメラのシャッターを押した。
そして液晶画面に、可愛らしく女座りし、パッドがあるのか少しだけ胸を開いた結斗の姿を目に焼き付けたのであった。

麗「わ、我が人生に一片の……悔い……なし……ガ
ハッ！」

そして最後の一人が意識を失ったのであった。
これが聖祥大付属中学の事件……血桜祭である。

後日談――

麗華が命賭けで撮った写真は、結斗の知らぬところで家宝とされ、
なのは、フェイト、はやて、アリシア、アリサ、すずかの間でのみ
焼き増しされた。

ちなみにこれが中学に出回れば、1枚5万は難しいと思われる。

N e x t t o T A L E 7 4 ! ! ! !

T A L E 7 3 晴れ時々血桜（後書き）

今回は突飛でした。

次回も突飛です。

あと報告です。次回でこの外伝を終わる予定です。

次は11eyes編です。

頑張つて書くので応援の程をよろしくです。

感想随時お待ちしております。

ではでは~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1246p/>

魔法少女リリカルなのは 蒼焔の結ぶ絆

2011年11月16日01時31分発行